

あひだ

女たちは

いま変わる

## 資料

- コペンハーゲン会議を振り返る
- 女性差別撤廃条約の批准へ向けて
- 国連婦人の十年後半期行動プログラム
- 会議で採択された決議案
- 民間会議のワークショップと展示資料

## 事実に基づいて真実を考える〈あごら〉

### 1号<女が働くこと> ㊞ 200

- 意見 女が働くこと 松谷みよ子ほか
- 資料 働く女は過保護か
- 面接調査 共働きを調査して (品切)

### 2号<女性と能力> ㊞ 200

- 調査 働く女性の地位向上をめぐって
- ティーチン 女性と能力
- 研究 女性なぜ管理職になれないか

### 3号<主婦の解放> ㊞ 200

- 調査 団地の主婦の解放意識
- ティーチン 主婦の解放をめぐって
- 解説 二分二乗法 伊東すみ子

### 4/5号<何かしたい主婦のために> ㊞ 300

- 記録 何かしたい主婦のためのセミナー
- インタビュー 壁を破った人々
- 資料 2つの差別裁判を考える

### 6/7号<運動をすすめよう> ㊞ 350

- 報告 解放への道—海外の婦人たち
- 資料 各国の母性保護
- ティーチン 婦人運動をすすめるために

### 8号<子殺しを考える> ㊞ 380

- 論文 既婚の母の子殺し考 武田京子
- 資料 世界各国の妊娠中絶立法例
- ティーチン 性の二重性をめぐって

### 9号<働く女と主婦の接点> ㊞ 430

- 論文 働く女と主婦の接点 神田道子ほか
- 調査 働く女と主婦の実状
- ティーチン 人口抑制と産む性 (品切)

### 10号<女と法> ㊞ 700

- 記録 名古屋放送女子若年定年制
- 資料 法律の中の女性
- ティーチン 産む性と法律 (品切)

### 11号<女と教育> ㊞ 750

- 論文 主婦が学ぶということ 伊藤雅子
- 調査 教科書の中の女性差別
- ティーチン <女と教育>を考える

### 12号<国際婦人年世界会議> ㊞ 750

- 記録 国際婦人年世界会議とトリビュン
- 感想 メキシコ・キューバ—私たちの旅
- 資料 世界行動計画、ILO活動計画ほか

### 13号<国際婦人年国内集会と行動計画> ㊞ 750

- 記録 国際婦人年国内集会
- 調査 ちまたから見た国際婦人年
- ティーチン 国際婦人年とメキシコ集会

### 14号<女の記録入選発表> ㊞ 750

- わたくしが見たアメリカ 水田珠枝
- 新女大学研究 エリザベス・マウア
- 隣りがこわい 佐多稲子

### 15号<職場の中の女性差別> ㊞ 750

- 調査 日本の著名企業100社にみる男女差別
- 概説 女子労働市場の現状 正木直子
- 論文 女性と半専門職 天野正子 (品切)

### 16号<女と結婚> ㊞ 750

- 文化人類学から見た日本の結婚・祖父江孝男
- 「しあわせな結婚」の実態 J・バーナード
- ティーチン「結婚の幻滅」●随想 私と結婚

### 17号<女と生涯学習> ㊞ 780

- 女性の生涯学習への一提言 高野フミ
- 女子成人教育の問題点 中山宣子・野々村恵子
- 調査 婦人学習グループ ●ルボ 女が学ぶ所

### 18号<いま女性解放は> ㊞ 1300

- ティーチン日本の女性運動をどう展開するか
- ルボ いま職場でたたかう39人の女たち
- 資料 女性差別に関する国連条約ほか

### 19号<女にとって子どもとは> ㊞ 800

- 論文 日本近代の国家と母性 中島 邦ほか
- 討論 日本の女性運動をどう展開するか(統)
- 資料 優性保護法改訂をめぐる経過と論義

### 20号<女性解放と男女雇用平等法> ㊞ 1300

- 論文 女性史におけるウーマンリブ 水田珠枝
- 論文 女性解放論の模索と反省 田中寿美子
- 資料 労基法研究会報告 雇用平等法案ほか

### 21号<子と母の関係を問う> ㊞ 1100

- 論文 親離れ子離れ考 伊藤雅子ほか
- 手記 私にとっての母
- 調査 著名企業144社にみる男女差別

### 22号<男女平等と母性保障> ㊞ 1200

- 報告 いま女の働く場は
- 論文「保護派」と「平等派」の接点を求めて
- 資料 女性差別撤廃条約/各国の保護規定



## 女たちは いま変わる

### コペンハーゲン会議と 女性差別撤廃条約

燃えるメキシカン・ピンクの国際婦人年マークに包まれて、「南」のメキシコで開かれた史上初の世界婦人会議は、南北問題の解決、すなわち国際的な富の公平な配分と、被抑圧国の解消なしには女の平等はあり得ないことを強調するとともに、性別役割分業が、「女が〈女〉につくられる」根源であることを明らかにしました。

あれから五年。世界人口の半分を占める女性が、今も男の十分の一の収入、百分の一の資産しか得ていない状況の中で、「北」の中でも最先進国、デンマークで開かれた「国連婦人の十年中間年世界婦人会議」は、南北問題こそ婦人問題であることを共通認識として再確認しながら、女を「劣った性」とする社会通念の打破を、より具体的に論じ、後半五年の「行動プログラム」をつくりました。

差別撤廃を国際的に約束づける「女性に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」の署名式は、会議の席上、はなばなしく行なわれましたが、署名国は十一月四日現在で七九か国、国連加盟国の半数を超えました。人類の「南」であった女たちに、大きな光がさしかけています。

「国連婦人の十年は女性の神風」と、日本の某長官は嘆きました。が、世界がとうとうと流れを変えようとするいま、日本の女も、力強い一歩を踏みだしたいものです。

# コペンハーゲン会議を振り返る

メキシコ会議からコペンハーゲン会議へ.....	4
後半期世界行動プログラムを採択Ⅱ公式会議.....	11
◆国連婦人の十年一九八〇年世界会議に出席して 柴田知子.....	21
心ひらいて語り合ったNGOフォーラムⅡ民間会議.....	24
●バネリストのスピーチから ベティ・フリーテンほか.....	34
●外国人主催のワークショップから.....	46
女性の性に対する抑圧と搾取／教科書の中の性差別／働く婦人の保育システム／ インドにおける女性の現状／平和と教育／女性と出版業／女性学／平和と軍縮	64
●日本人主催のワークショップから.....	64
アジアの女たちの会／伊藤恭子／HKW／家庭科の男女共修を考える会ほか／ 京都市地域婦人会連絡協議会／あこら	100
●コペンハーゲン会議を取材して.....	100
増田れい子 東浦めい 佐藤洋子 深尾凱子 斉藤由美 有馬真喜子 池谷まゆみ 中村輝子 坂元良江 堀越むつ子	116
●フォーラムに参加して.....	116
山下智恵子 古野佐喜子 小島サカエ 山口のり子 高橋ますみ 佐々木元子 大脇雅子 合田京子 沖本礼子 青木みち子 青山三枝 高橋みな子	140
●コペンで見たこと感じたこと.....	140
大石まゆみ 奥田幸 梶谷典子 斎藤千代 清水澄子 ヤンソン由実子	

# 女性差別撤廃条約の批准に向けて

● あこらの旅

162

署名の意味と運動の方向を考える

166

女性差別撤廃条約のおもな内容

176

女性差別撤廃条約批准の見通しを聞く

178

明治大学・宮崎繁樹 労働省・高橋久子 法務省・田中康彦  
文部省・三村満男 厚生省・小田泰宏 外務省・田中利彦

婦人団体の評価と取り組み

208

女性記者の評価と取り組み

216

〔紹介〕スウェーデンの雇用平等法と行政監督機関 ヤンソン由実子

218

〔グループ紹介〕国連婦人の十年・奈良県婦人のつどい

220

あこら読書室

222

あこらのあこら

222

新聞切り抜き帳

232

資料

1 「国連婦人の十年」後半期世界行動プログラム

304

2 「国連婦人の十年世界会議」において採択された諸決議

266

3 国連婦人の十年一九八〇年世界会議における高橋首席代表演説

316

4 NGOフォーラムのワークショップ

320

5 NGOフォーラムの展示資料

330

# コペンハーゲン会議を振り返る

## メキシコ会議からコペンハーゲン会議へ

「女性の世界の人口の二分の一、公的労働力の二分の一、総労働時間の三分の二を占めている。すなわち実質的には男性の二倍の時間働き、得る報酬は男性の十分の一、保持する財産は百分の一にすぎない」

会議に先立って発表された国連の報告は、世界の女性の現状を、このように明確に分析している。

「メキシコ会議は偉大な成果をあげたにもかかわらず、その後の女性の状況は、よくなるどころか後退している面すらある」

これをどのように打開していくか。国連婦人の十年一九八〇年世界会議は、女性差別撤廃へ向けて、史上二回目の世界婦人会議として開かれた。会場はデンマークの首都、コペンハーゲン。七月十四日、うすら寒い北欧の空の下で、会議は始まった。

### 世界婦人会議と女性差別撤廃条約は車の両輪

「国際婦人年」の提唱は、一九七二年の「国際婦人の地位委員会」に始まる。

あらゆる差別を廃し、人権を尊重することをモットーとする国連は、一九四五年



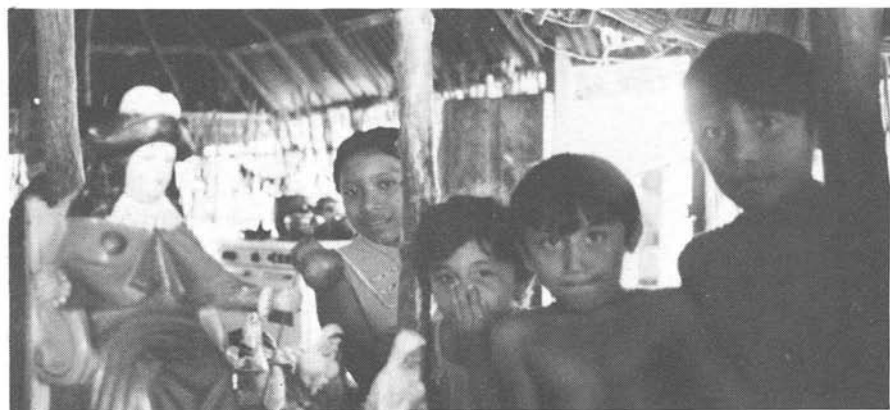
世界の人々が集い、討論

の国連憲章に、基本的人権、人格の尊厳および価値とともに「男女同権」を明確にうたっているが、経済社会理事会の補助機関として人権委員会を設置するに及び、その下部小委員会として「婦人の地位委員会」を設けた。一九四六年五月、同委員会は独立した機能委員会となり、女性差別とその撤廃を討議してきた。一九六七年、同委員会の決議を経て第二国連総会で採択された「女性に対する差別撤廃に関する国際連合宣言」は、女性差別が基本的人権に反するものであることを基本に、十一条にわたり女性差別撤廃の具体的方法を示した。

婦人の地位委員会は、この宣言に基づき、各国に対し、毎年、差別撤廃の実施状況の調査を要求して、宣言の効果を検討してきたが、法制上の男女平等はかなり達成されたものの、実行上には多くの差別が残存しているという共通認識を抱いた。

『女性差別撤廃宣言』は女性差別の根源に迫る画期的な宣言であったが、あくまでも、「宣言」で、締約国は道義的責任を負うにすぎない。より国際的拘束力を持つ「条約」をつくること、女性差別についての国際的大キャンペーンを展開することが、委員会の次の目標となった。

「条約」へ向けての検討は、一九七四年に開始され、また国際的大キャンペーンとしては「国際婦人年」が提唱、決議された。一九七二年、第二七国連総会は一九七五年を「国際婦人年」とし、「世界婦人会議」を開くことを全員一致で可決、「男女平等の促進」「開発努力への女性の全面的な参加の確保」「国際平和への婦人の貢献」に関する行動を、国連加盟各国と国際社会で、一九七五年を期して強化することが決議された。一九七五年を国際婦人年としたのは、婦人の地位委員会設立後、三〇年目にあたる年であるとともに、「第二次国連開発の十年」の期央にあたるためであった。開催地は、最初コロンビアが立候補し、国連総会で同国に決定したが、七四年辞退、代わってメキシコが開催国となった。開会の準備は、国連「婦人の地位委員会」の差別撤廃への熱意と、ラテンアメリカの盟主、エチエペリア大統領の、この機会に「南」の現実認識を、という意欲に支えられてすすめられた。



平等よりは飢えの解消を…と言う人々も

## 南北問題に光をあてたメキシコ会議

開催地メキシコ・シテイの町なみは、鮮やかなメキシカン・ピンクの国際婦人年マークを飾り立てて参加者たちを迎えた。大小さまざまな家々。とりどりの色と模様で塗りたてられた壁の中で、ピンクのマークはショッキングに映えた。世界きつてのマッチズモ（男性関白）の国。路上に物乞いと売春婦が電信柱の数ほどもたたずむ国。伝え聞く第三世界の現実の真つただ中で婦人問題が語られる意味を、参加者たちは深く心に刻みこんだにちがいない。

ラテン・アメリカを先頭に、アフリカ、アジアの第三世界の国々は、この舞台をバックに、「南北問題」を最も鋭く提起した。「私たちの国では、飢えた母親の腕の中で、日々赤ん坊が死んでいつている。乳房にすがっても、出てくる乳はない。これを解決しないで何の平等があるのだろう。」——悲痛な叫びを受けとめながらも、ゆたかな国々は答えた。「物質的にどんなにゆたかな国でも、女はおとしめられ、低い地位にいる。平等こそ必要」。アメリカ合衆国はじめ工業先進諸国は平等を強調した。一方、「発展があり、平等があっても、ひとたび戦争が始まれば、女性の地位どころではなくなる。平和こそ必要」と、社会主義諸国は、専ら平和に重点を置いた。「平等・発展・平和」のスローガンは、こうしてはからずも、世界の三つの勢力を象徴しつつ、三者三様に展開された。

会期は六月十九日―七月二日の二週間。土日はさみ、実質討議は十日間。一三三か国の代表と、WHO、ユニセフなど七つの国連機関と八つの政府機関、PLOなど八つの解放団体、NGOはじめ九八の国際的民間団体代表三千人を外務省に集めた国連会議と並行して、国籍や資格を問わない民間婦人会議「トリビュン」も、期間を全く同じくして、同じメキシコ市内の別な会場（医療センター）で開かれた。参加者の数も同じ三千人。が、その顔ぶれは国連会議とはかなりちがっていた。会場にあふれるほどの多さに感じられたのはまずアメリカの若い女性たち。国境から



メキシコのトリビュン(大会議場)

メキシコ市までは東京と大阪ほどの近さ。車を駆って乗り込んだ人も多かった。それに比べれば地元有利のラテンアメリカの女性の数は、少なく見えた。何日かを会議にさくことができるほど、ゆたかな国々ではない。リブ人口もまだまだ少ない。彼女たちは、ひとたび口を開けば熱弁をふるった。「米帝国主義反対！ 彼らは、我々の物質を奪い、労働力を搾取して繁栄している。開発が問われているが、我々はまず搾取を問いたい」「我々の政府のファシズムを訴えたい。多くの女性政治家が獄中で泣いている。暴行は無数。脛に棒を突き刺されたものも……」参加いのちをかけた発言も相ついだ。

### 国際経済の不公平を是正し、

#### 性別役割分担打破を

一三三か国の多様な立場と多様な意見を入れて、女性差別撤廃の具体的指針となる『世界行動計画』二百六項の原案には修正案が続出した。審議は遅々として進まず、会期終了を目前にしてもなお八百を超す修正案の審議が未了であり、結局、審議なしに委員会で採択され、本会議では、全員拍手のうちに通過した。これを、ある人は「ごった煮」と酷評したが、「掘れどもつきぬ宝の山」と評価した人も少なくなかった。その多様性に、男性関係者は目をむいたが、「戦争の惨害から将来の世代を救い、基本的人権としての男女及び大小諸国の同権を目指す国連憲章を基本に」「世界人口の七〇％を占める途上国が三〇％の収入しか得ていない不均衡を是正し、新国際経済秩序を確立すること」を冒頭に掲げつつ、「男女平等の達成とは、両性がその才能と能力を、自己の充足と社会全体のために発展させうる平等な権利・機会・責任をもつべきことを意味する。……そのためには男女の伝統的な役割を変える必要があることを認識しなければならない。……家庭と育児について男女の共同責任が受け入れられるためには、主に教育を通じ、社会通念を変えるための、あらゆる努力が払われるべきである」と、性別役割分担の社会通念打破に敢然とい



メキシコのトリビュン(通路)

どんだ条文は、世界の女性の状況と意識変革に大きな影響を与えるものとなった。

一方、「世界人口の半数を構成する女性の問題は、社会全体の問題である」に始まって、「女性は、植民地主義・新植民地主義・シオニズム・人種差別・アパルトヘイトのもとで行なわれているあらゆる形態の抑圧に対する闘争の自然な同盟者となり、その際、今日の世界の経済的社会的変革のための巨大な革命的潜在力を形成していることを認識し」「低開発状態は、女性に対し搾取という二重の負担を課すこと、この撤廃のためには現存する国際経済の不均衡な制度が重大な障害となっていることを強調し」た『メキシコ宣言』は、第三世界の原案と要望に基づく、途上国色の強いものだった。米国、イスラエルなど三か国の反対、十八か国の棄権で、全会一致には至らなかったが、圧倒的多数の熱狂のうちに通過したこの歴史的宣言は、「新国際経済秩序の確立」を序章の二番目に掲げた『世界行動計画』とともに、世界の女性たちに、新しい時代を告げる鐘の音を高々と鳴り響かせた。一九七四年「新国際経済秩序の確立」が国連で決議されて以来、南（被搾取国）に風向きを変えはじめていた世界の流れの中で、人類の「南」であった女たちにも、大きな光がさしかけたのだ。

とはいえ、世界の女たちの前に立ちはだかる差別と不平等の壁はあまりに厚い。『世界行動計画』を盾に、各国政府は、また国際的諸機関は、どのように「行動」し、どんな効果をあげたか、二年ごとのモニタリングを、『世界行動計画』は締約国に義務づけた。一九七八年を第一回として、それは続けられることになった。

同時に、『国際的大キャンペーン』の継続実施の必要が論じられた。これを特に熱烈に提唱したのは、イランのアシエラフ王女（パーレビ国王の双生妹）であり、八〇年に中間会議を開くべきことを提案、その開催地を進んで引き受ける旨申し出た。これに基づき一九七五年秋の第三〇国連総会は、七六―八五年の十年間を、「国連婦人の十年」として、引き続き、女性差別撤廃の大キャンペーンを行なうこと、



この人々に真の平等が訪れるのはいつの日か…。

十年の期央にあたる一九八〇年を「国連婦人の十年中間年」として、五年間の評価点検を行なうこと、開催地をイランとすることを採択した。

### 「南」から「北」に移った国際舞台

差別撤廃へ向けての、断固とした行動の中で、中間年世界会議の準備も着々すめられていたが、七九年、イラン革命の勃発により、開催地は急遽デンマークに変更され、舞台は南から北に移った（立候補はコスタリカとデンマークの二か国だったが、コスタリカはメキシコと同じ南米のため、デンマークに決定した）。

国連会議の準備は、「婦人の地位委員会」および三回にわたる準備会議と各地域会議ですすめられたが、並行して、NGOによる民間会議の準備も数次にわたり重ねられ、メキシコで「トリビューン」と称された民間会議は「フォーラム」の名のもとに開かれることになった。会期は、両会議とも七月十四日―三十日の予定だったが、「フォーラム」は十四日―二十四日に、一週間短縮されることが三月に決定した。

新しい開催国、デンマークは、世界でも女性解放と社会福祉の最先進国として知られるところ。婦人参政権は、一九一五年、全世界に先がけて実施しており、「生産労働も家事労働も男女同一に」を目指し、「週三〇時間労働、男親にも育児休暇を」を運動中という恵まれた国。「自由・平等・博愛・信頼」が国のモットーで、基本的人権が男女とも確立している。労働者の最低時給は三五クローネ（約一四七〇円）と定められ、単純労働でも平均五〇クローネ（二一〇〇円）、平等を言う前に、生きるための最低保障が問題となるメキシコとは、すべてに対照的である。

位置は北欧。欧州各地と鉄道でつながり、飛行機ならモスクワに二時間、北アフリカに二時間、アフリカからの参加にも便利である。舞台が南から北へ移った影響とともに、参加者の構成の変化や開催国の状況と慣習による影響も予測された。

会議準備中の最大の朗報は、国際婦人年の前年にあたる一九七四年以来検討を重



コペンハーゲンの公式会議場、ベラ・センター

ねてきた「女性に対するあらゆる形態の差別撤廃に関する条約」が、婦人の地位委員会の決議を経て、七九年十二月、第三四国連総会で採択されたことである。十五項の本文と六部三十条の本文から成るこの条約は、七項目の本文、十一條の本文による「女權」に対する差別撤廃に関する国際連合宣言」を内容的に充実させたばかりでなく、「宣言」を「条約」に高めたことにより、国際的拘束力を持たせたものである。しかも条約案検討中に「世界婦人会議」を経て、新国際経済秩序の確立、性別役割分業の打破など、「世界婦人会議」の成果である「世界行動計画」の要項が十分に盛りこまれたこの条約は、世界の女性を支える基本法としての画期的な価値を持つ。

「婦人の地位委員会」は、条約の署名および批准促進のために、この条約の署名式を世界婦人会議会期中に行なうことを提案、世界の女性たちは、署名・批准へ向けて、それぞれの政府への働きかけを開始した。こうして、「中間年世界婦人会議」は、単なる折り返し点での見直し以上の大きな意味をもって開かれることになった。テーマには、平等、発展、平和に加えて、雇用、健康、教育がサブテーマとされた。

## コペンハーゲン会議 写真集発行 について

「メキシコ会議に比べてコペンハーゲン会議は意味がなかった」とか、「政治的論争に終始した」とか、さまざまうわさ話が飛びかっています。会議の真実を伝えたいと、この号を特集しましたが、写真集を発行して、視覚的に訴えるものもつくりたいと企画中です。

へあごろのメンバーは、たくさんさんの写真を撮影して帰りましたが、さらに広い範囲の方々のご協力を仰ぎ、よりよいものをつくりたいと願っています。ご協力くださる方、また購入ご希望の方は、下記にご連絡ください。〒160 東京都新宿区新宿1の9の6 あごろ内「写真集係」



署名を終えた高橋大使



# 国連婦人の十年一九八〇年世界会議

## 前半期の行動を評価・点検

## 後半期世界行動プログラムを採択

空港から車で二〇分、コペンハーゲン

市街とのほぼ中間、薬草の草むらの中に  
ポツンと立つ「ベラ・セクター」は、巨  
大な温室を思わせるガラス張りの建築。

北欧随一の規模と施設で知られる会議場  
である。折々は潮の香もたどよう玄関前  
に組まれたやぐらの中ほどに、婦人年マ  
ークが、北欧の湖にも似たすきとおった  
ブルーで輝いている。二〇本ほどのポー  
ルにはためく各国の旗。会場周辺には二、  
三〇人の警官たち、政府代表、国連で認  
められた国際機関の代表、マスコミ関係  
者など、入場カードを持つ者以外は入れ  
ない厳戒ぶり。

それぞれの国や機関の責任を負って、  
会議場内の人々の表情にも緊張のいろが

見える。二〇〇〇人収容の大会議場では、

政府代表の演説に続いて決議案の最終的  
な採否がはかられる。三つの中会議室で  
は案文の細かい検討。その間を縫って、  
情況発表や、話題の人・話題の出来事の  
記者会見も行なわれる。会場は階段式の  
視聴覚室。記者会見がないときは、映画  
やスライドが上映される。

機関銃のようなテレックスの音がひび  
くのはプレスセンター。数十台のキビー  
向かう男女の記者たち。日本の女性記者  
の奮闘も目立つ。

ここは、まぎれもない「国連」の会議  
場。妥協は許されない国際政治の場だ。  
世界の女の次の五年を、そして未来を定  
める会議は、七月十四日、午後三時から

始まった。

### ● 女たちの友情のもとに暖かい開会

議場正面に掲げられた二つの大きなバ  
ネル。左はおなじみの国際婦人年マーク、  
右は世界をオリーフで囲むデザイン。国  
連のマークである。共にすきとおるブル  
ー。「世界婦人会議」とか、「国連婦人の  
十年」などの文字や垂れ幕は、いっさい  
ない。

満場を埋めた人を前に、ワルトハイム  
国連総長がマルグレーテ二世女王を先導  
して壇上の人となる。開催地デンマーク  
は、王室も父母平等血統主義。世界に数  
少ない女王国の一つ。

スピーチは、国連総長から始まった。

「世界の『恐怖』を減らし、『希望』をふやそう。それには女性の勇気と知性を動員して……」と、国連婦人の十年の意義にふれる。続いて、女王とデンマーク首相のあいさつ。議長選出に入る。恒例に

より議長は開催国から。金髪の美しいウスタゴ文化相が選ばれる。ほっそりした四六歳。注目の副議長団には、アフリカ六人、アジア五人、ラテンアメリカ、東欧系各四人、西欧三人、新たに独立したジンバブエから一人と、第三世界色の濃いわくがきまったが、アジアの五人に對し、日本、フィリピン、パキスタン、イラク、シリア、中国、モンゴルの七か国が立候補、調整がつかないまま式を迎えるなど、早くも波瀾含み。ウスタゴーさんと組んだ会議の進行役、ルシル・メイヤー事務局長の手腕に期待する声がささやかれる。ジャマイカ出身、どっしりと大きい黒人女性。大きな目、大きな声の持ち主。

開幕の緊張感を破ったのは、高々とした赤ん坊の声だった。国連事務局につとめるヴェネズエラの女性が乳児とともに出席していたのだ。泣きやまぬ子を抱い

## 女性の勇気と知性で

### 生活の本質を変えよう

ワルトハイム国連事務総長

世界はいま、恐怖と希望が混在しているが、心配と恐れを減らし、建設的な希望をふやしていくことが人類の責務であり、今回の会議の目的である。

女性の勇気と知性と想像力の豊かさは今や世界的に認識されるに至った。このエネルギーと力を動員し、国家やイデオロギーの違いを超えて、女性も男性も、生活の質の改善、――飢えと病氣、憎しみと偏見、対立と不正からの解放――という、人類共通の目的達成に努めよう。

国連婦人の十年の目標は、平等・発展・平和の達成だが、この三つは互いにからみあっており、特に発展と平和なしには男女の平等はあり得ない。

昨年の国連総会は、女性に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約を採択したが、これは、あらゆる婦人問題解決の規範となるとともに、各国レベルで

の立法や法制改革を刺激することになる。

## 新国際経済秩序が基礎

リーセ・ウスタゴ議長

この会議で話し合われ、決められることは、世界のすべての人々に受容されるものでなければならぬ。そのために、女性の平等・発展・平和という共通目的のために集まった我々は、身を挺して努力しなければならない。

婦人問題については、途上国と先進国との間に基本的な違いはないが、新国際経済秩序に立って、国際間の経済的不均衡を是正することが基礎となろう。

## 平和が最重要

ヨーゲンセン デンマーク首相

平等・発展・平和の三課題の中でも、平和は最も緊急かつ重要である。平和を求めるため、西と東、北と南は、互いに話し合い、ゆずり合わなければならない。

て退場する母子に暖かい目が注がれる。「婦人会議」であった。

開会のファンファーレの代わりに、「兵器より食べ物」と北欧女性五〇万人の署名を集めた「平和大行進」がクリスチヤンボー城から繰り出し、代表八名から平和嘆願書が総長に手渡されたのも、世界婦人会議ならではの出来事だった。一行の代表八名。中でも一人で二五〇〇名分を集めた八二歳のフレデリク夫人が紹介されると、拍手は一段と高くなった。総長は白髪の夫人の手をとって降壇を助けた。心あたたまるシーンだった。

### ●代表演説には濃い政治色

五つの副議長席をめぐる紛糾は、開会式後、夜八時半から討議され、午前中に降りたモンゴルに続き、結局、日本が降り、十五日朝から、委員会と政府代表演説が並行して開かれた。

女の問題を論じるはずの演説も、国際政治の場となると、自ら「政治的配慮」が働く。

まず順番。予定の順番が裏折衝で変えられ、トップはメキシコでもおなじみの

マルコス大統領夫人。着飾った民族衣裳で、お得意の「女は人類の母」論。東洋の婦徳主義者である。

二番手、サグト大統領夫人の登壇を合図に「パレスチナはわが領土」の声を残してアラブ諸国と社会主義諸国が一斉退場。記者団も後を追う。議事は二五分間中断。話題のPLO、ライラ・ハリドを追って、記者団は抗議声明に聞き入る。しらけた会場で、サグト夫人は悠容迫らず、「私が口を開くと、あの犬どもが吠えた」——リヤ王の一節から演説を再開する。そして、一同が帰場するざわめきの中で、三番手、高橋展子代表の演説。

予想されていたとおり、「婦人」会議は、国際政治Ⅱ男性社会の闘争をそのまま反映して開始された。

退場は、イスラエル代表、民主カンボジア代表の登壇でも繰り返される。演説の中で、キューバが中国の「勢力拡張主義」を糾弾すると、中国はソ連のアフガニスタン侵攻を攻撃するなど、婦人問題そこのけの感もあるが、他国の支配や侵略を防ぎ、平和あってこそ平等も発展もあり得るという主張は説得性がある。

### ●多彩な各国代表

マルコス、サグト、テレシコワと、「メキシコの花」がまたも揃った中で、前回同様、「閣僚級女性」も続々姿を見せる。モニク・ベルティエ・ムン・婦人問題相、カリーン・アンダーション・スウェーデン男女平等相、サラ・ウェデントン米大統領婦人問題特別顧問など、「差別撤廃部門」の長官が目立つ。中でも注目を集めたのはハイジャックのヒロイン、ライラ・ハリドPLO代表。十八名の代表団を繰り出したPLOは、彼女をスターに、あらゆる機会に記者会見に余念がない。国連の会議は、通常、国連加盟国だけで構成されるが、婦人問題は国連または国連加盟国だけに限った問題ではないという観点から、メキシコ会議同様、非加盟国や、PLOのような「解放団体」にまで参加が要請されている。

スター揃いの中で、三七人の代表、十四人の顧問団のアメリカは、その半数以上が民間人だ。アメリカは、国内行動計画にしても民間会議を積み重ねて作った。代表が全員官僚などということは、

ゆるすわけがない。

わが日本の代表は、残念ながら全員官僚である。ぜひとも民間代表を、と、四八団体が強く押した大羽綾子さんは、「顧問」に回った。実質的な発言権がないから、これは大羽さん自身の選択と聞く。代表・代表代理はメキシコの七人より四人ふえて十一人。陣容は

首席代表 高橋展子（デンマーク大使）  
代表 縫田暉子（国立婦人教育会館館長）

関 栄次（総理府審議官兼外務省国連局事務官）

赤松良子（国連公使）

柴田知子（総理府婦人問題担当室長）

代表代理 高橋 淳（農水省生活改善課長）

佐藤ギン子（労働省婦人労働課長）

久米邦貞（デンマーク大使官参事官）

田中キミ子（総理府専門官）  
大泉博子（厚生省大臣官房総務課課長補佐）

富川明憲（外務省国際連合局企画調整課首席事務官）

顧問

大羽綾子（民間婦人団体推薦）  
土井たか子（衆議院議員・社）  
小林政子（共）

石本 茂（参議院議員・自）  
柏原ヤス（公）

柏谷照美（社）  
沓脱タケ子（共）

渡部通子（公）

これをメキシコと比べると――  
首席代表 藤田たき（婦人少年問題審議会会長）

代表 森山真弓（労働省婦人少年局長）

大鷹 正（国連日本政府代表部公使）

代表代理 東浦めい（婦人少年問題審議会委員）

矢口光子（農林省農蚕園芸局生活改善課長）

志熊敦子（文部省社会教育局婦人教育課長）

長尾立子（厚生省児童家庭局長）

母子福祉課長）  
顧問 金子みつ（衆議院議員・社）  
栗山ひで（自）

高橋千寿（自）  
田中美智子（共・革新共同）

柏原ヤス（参議院議員・公）  
佐々木静子（社）

山東昭子（自）  
志村愛子（自）

中沢伊登子（民）  
中村登美（自）

今回は、男性は一名から四名にふえ、一段と官僚色が濃い。

メキシコではスリランカのパンダラナイケ首相が姿を見せたが、今回は、一国の最高責任者はいない。サッチャー英首相は、出席どころか署名も拒否、女性の敵と騒がれている。中南米唯一の女性大統領の国、ボリビアは会期中にクーデターが発生、職を辞した。

しかし、代表団に占める女性の比率は女四に對し男一と大幅にふえた。代表団が「全員女性」という国は四〇か国、「男は一名のみは二か国。首席代表は女八二

対男一七、代表は三八六対一〇六。

参加国の数もふえた。メキシコ一三三か国、今回一四五か国。ふえた多くは、新しく独立したアフリカの国々である。女の代表がふえたとはいえ、実質的には本国の男性にあやつられていることがみえみえの先進諸国に対し、彼女たちは責任も権限も持ち、自主的に判断しているのが印象的だった。

一方、参加できなかった人々もいる。

たとえばお隣の台湾。国として国連に認められていないばかりか、きびしい出国制限があり、日本旅行さえ容易ではない。あえて参加しなかった国もある。世界経済のカギをにぎるサウジアラビアの不参加は、イラン、イラク両国のはなばなしいPR合戦と対比して、特に目立った。

### ●成功した署名式

会議のハイライトは、何といっても十七日の署名式だった。「女性に対するあらゆる形態の差別撤廃に関する条約」の批准へ向けて、「婦人の地位委員会」が署名式を会議に組み込んだのは、心にくい演出と言わなければならない。当初十五か国と予

定されていた署名式参加国は五二か国にふくれ上がった。日本は、ぎりぎりの十五日に署名を閣議決定したが、式がなければ、そこまで「政治的判断」が働いたかどうかわからない。

午後七時、本会議上に設けられた壇上で、アルゼンチンから、ABC順に署名が始まる。日付とサインを書き込んで、壇上のシビラ夫人らと握手。国連婦人の地位向上部長の久保田真苗さんも壇上の人。初代の婦人問題企画担当室長である。

各国代表が、ほとんど二名ずつ登壇して署名する中で、高橋代表は一人で署名。留保条件を書きこむため、長い時間を使った中国代表、六人でそろって登壇して、「E.R.A.はまだ成立しないが、これをテコに実現させる」と、ユーモアたっぷりスピーチしたアメリカ代表など、お国ぶりもさまざまだ。三月六日に、世界にさがけて署名したキューバは、批准書を持参する。これで批准国は五か国に。発効へ、一步一步近づいていく。

署名式は、二九日午後五時からも行なわれ、コンゴ、カンビア、インドネシア、セネガル、ベトナムが署名、その他

会期中に署名した二か国を加え、会期終了までの署名国は合計七二か国に達した。

### ●二一八から二八七にふくれ上がった行動プログラム

会議の基本テーマは、メキシコ以来の「平等・発展・平和」だが、今回は特にサブテーマとして、「雇用・健康・教育」が加えられた。後半五年の重点目標として、特に考慮しようというもの。

その具体的行動のための「行動プログラム」は、三回の準備会議で検討が重ねられ、原案があらかじめ各国代表に届けられた。

その内容は、

〔進歩への反省〕 七五年以来五年、ほとんどの政府が女性を社会開発に組み入れる努力をしてきたが、世界的視野で見ると、差別は改善どころかむしろ悪化している。特に途上国の農村や都市の女性の情況、中でも経済・雇用面での情況は悪化している。女性の文盲はふえ、女子の進学も途上国では減少傾向がみられる。教育の恩恵を受けた中・上流の女子でも、雇用面では不平等だ。

〔今後の戦略(各国レベル)〕 ①国の開発計画と政策を立案する場合、男女格差、都市と農村の格差是正に努めること。

②開発計画や政策に女性が参加できるような政府機関の設立。③差別的法律の解消と、女性の法的権利保障のための委員会設立。④すべての女性に参政権を保障。同時に、あらゆる公共機関における男女平等の地位を確保する。⑤植民地・アパルトヘイト・国家解放のために闘っている人々およびパレスチナ女性に協力し、連帯する。⑥広告を含むマスコミで、女性のイメージや役割が正しく表現されているか否かを監視する。特に女性が受動的で男性より劣った存在であるかのような描写をしないよう、製作者側も努力すること。⑦性・年齢に関するすべてのデータの収集。特に農村女性の権利の未確立を立証する調査を行なう。⑧政府とNGOの相互協力、など。

#### 〔サブテーマ〕

①雇用Ⅱ移民女性への平等待遇の保障。無給で働いている女性の労働も評価するよう、*“労働者”*を再定義する。

②健康Ⅱ特に途上国の農村や都市のスラ

ムで生活する女性への配慮。安全で実行しやすい家族計画。出産助産者や、民間療法者への新しい情報や知識の提供。

③教育Ⅱ文盲・進学率・教育レベルの、青少年女間格差解消。性別役割分業はか社会・経済・成人男女の社会通念に影響を与え、それらを変えさせる教育の実施。性差別や女性に対する固定観念を解消させる教材づくり。科学・数学等、理科系への女性の学習参加、など、合計二一八項目。

ほかに特別議題として、パレスチナ問題と、南ア、ナミビアのアパルトヘイト問題および難民問題が加えられた。

討議は当初、第一委員会(国内レベルの問題)と第二委員会(国際レベルの問題)で進められることになっており、日本は、第一が縫田、第二が赤松の両代表の担当になっていたが、突然、序章―第二章は全体委員会で討論されることに変更され、第一柴田、第二縫田、全体赤松に変わった。

委員会は、政府代表演説と並行して、十五日朝から進められた。会議に先立って、十か国から十七か所の修正案が出さ

れていた。中国は、「他国の軍事介入反対」「覇権主義反対」を入れようとしていたが、西側諸国は「植民地主義、新植民地主義反対」を削除しようとしていた。

第二委員会は、主として国連の事業の評価点検であったため、条文にパレスチナ問題を盛り込むかどうかでもめた程度で、比較的順調に進んだが、第一委員会では、国内レベルの細かい問題が続出した。各国代表が最も強調したのは、女性が国の発展に非常に寄与しているのに公平な分け前を受けていない。その原因はあらゆる部門、あらゆるレベルでの政策決定の場に女性が参加していないことにある。そのためには機会の均等が条件となるが、それには教育や訓練が大事であり、また女性は劣っているという社会通念を打破するためにマスメディアも重要であるということであり、これは各国の共通認識だった。メキシコ会議同様、途上国は、富の配分の公正を訴え、まず国が豊かにならなければ平等は達成されないと主張したが、欧米諸国や日本は平等に、より重点を置いた。

討議中に、新しい修正案が次から次に

提案され、全項目を委員会で検討するの  
が困難になったため、第一委員会には途  
中から起草委員会が設けられ、地域ごと  
に二か国が起草委員となった。日本もア  
ジア地域の委員として内容を検討した。  
特に紛糾したのは、インドの修正案、  
「パレスチナ女性に対する国連の援助は  
PLOを通じて行なう」というもの。グ

ループ七七(第三世界の諸国。以前は七七  
か国、現在一九九か国)が社会主義諸国  
をバックに押し切ろうとすると、イスラ  
エルは、「会議はPLOにハイジャックさ  
れた」と絶叫。アメリカは「国連の援助  
資金の拠出をやめることも……」とおど  
かし、結局、PLOを「通じて」を、「協  
議、協力して」に改めて可決。

### 婦人の健康と福祉に対する総合的アプローチ

#### 特に農村婦人に対する

国連婦人の十年中間世界会議は、  
1、すべての政府に対し、婦人の健康  
と福祉の達成のためのすべての行動計  
画を再検討し、改善し、かつ調整する  
必要性を認識するよう要請する。

2、政府が婦人の個別的な必要にこた  
えるために、教育訓練へのよりよい機  
会、安全な飲料水の供給、公衆保健サ  
ービスおよび営業計画を含む必要な具  
体的な措置を確定し、実施することを  
真剣に考慮するよう勧告する。

3、政府が、栄養、環境衛生、母子保

健ならびに、男女が、子どもの数、出  
産の時期・間隔を決定する権利を行使  
するための規定を含む家族計画のため  
の政策および措置からなる、家族の健  
康・福祉の総合計画を開発するよう勧  
告する。これらの総合計画は、適当な  
場合には国内行動計画に組み入れられ  
るべきである。

4、国連機関、政府および非政府機関  
に対し、かかる総合計画を推進するた  
めの調整のとれた努力を継続し、かつ  
評価するよう要請する。

また、アメリカが「人種と性の二重差  
別撤廃」案を出し、先進国・途上国を問  
わず性と人種の二重差別があるが、それ  
を克服しよう、と提案すると、キューバ、  
シリア、エジプトはたちまち修正要求。  
「経済・軍事・核で問題のある国を非難  
する項目を入れよう」と反論。結局、ア  
メリカは原案を引っため、アンゴラ案と  
なつて可決。

そのほか世界各地の難民問題、南ア  
フリカのアパルトヘイトに対する制裁の  
是非、西サハラの領有権をめぐるモロッ  
コとチュニジアの対立、カンボジアの代表  
権問題など、あらゆる国際政治の問題が  
持ち込まれ、激論がたたかわされる中で、  
メキシコでは一つの修正案も決議案も出  
さなかった日本も、行動プログラムに対  
する修正案と独自の決議案を提案した。

修正案は、出産保護に関するもの。出  
産休暇を「母体が回復するまで」と限定、  
保育は両親と社会の共同責任とする案を共  
同提案。一九日、第一委員会でも可決された。

第二委員会には決議案として「女性の  
健康と福祉に対する総合的アプローチ  
特に農村婦人に対する」を、オーストラリア、

西独、ジャマイカ、ヨルダン、レソト、パキスタン、フィリピン、タイ、トーゴ、アメリカなど一七か国を共同提案国として提出、二八日夕、全会一致で採択された。

途上国の農村女性の健康と福祉への配慮とそのための施策が総合的に行なわれることを決議したもので、これを提案したことは、途上国援助の責任を負うことを意味する。

なお、日本が共同提案国となることに同意したのは、下記の決議案だが、いずれも可決された。

西独Ⅱ身体障害者の福祉に関する決議案

米国Ⅱ女性亡命者と女性難民に関する決議案

#### 議案

米国Ⅱ高齢女性に対する福祉対策の決議案  
フィジーⅡ太平洋地域の女性の健康と幸福

### ●前半五年の評価と後半の重点項目

前半五年の評価の結論は、国内的には七五年以来の五年間に各国とも多くの法改正が行なわれ、専門機関も設けられたことが評価されたが、実状との間には大きな開きがまだあること、世界的不況の中で最も大きなしわ寄せを受けているのは女性であり、失業・賃金格差の拡大、生活困窮等は、女性の側により強く押し

寄せていること、文盲率は世界的には改善されたが、人口増加により絶対数は多少増え、その多くは女性であること、初等教育を中断する者の大部分も女性であること、高等教育に進む女性は依然として少なく、教科書にもカリキュラムにも多くの差別が残存し、男女差別をいつそう増幅していることなどが報告され、今後一段と努力が必要であり、特に農村と都市の貧困層に重点を置くことが強調された。

国際レベルでは、国連や各専門機関の努力は一応評価され、特に女性差別撤廃条約の採択を得たことは高く評価された。また、「国連婦人の十年基金」は六〇か国が提出、一一〇〇万ドルを超え、途上国の女性の生活改善に活用されており、女性研修センターは、来年一月からドミニカでオープンすることなどが報告された。しかし、国連と各専門機関の連絡が不十分で活動に重複が多く、人手や財政面でのむだがあるため、今後調整して合理的な活動を行なう必要があること、また国連の施策が末端、特に農村や都市の低辺層に十分に行き届いていないことが指

摘された。

後半期五年の行動計画として、特に重点目標にあげられたのは次のとおりである。

#### 〔国内レベル〕

雇用Ⅱ賃金の改善および職業訓練（機械的訓練ではなく、個性に応じた訓練を受けられる機会を与える）および不況対策（女子の失業率拡大防止対策）。

健康Ⅱ特に基礎的な保健計画の充実（清潔な飲料水や基本的な栄養の確保など）、多産による母体損傷の防止（男女合意のうえで家族計画を行なうなど）。

教育Ⅱ文盲のばく減、科学教育・技術教育の重視、女性に対する偏見を植えつける教材や教科書の廃止。

育児と職業の両立Ⅱ男女で育児の責任を頭ち合い、施設を拡充する。

#### 〔国際レベル〕

◆女性差別撤廃条約の署名・批准の推進  
◆すべての国際条約に女性の立場を考慮し、反映させる。

◆技術協力にあたっては、途上国の考え方と立場を十分考慮する。

◆開発に際しては、起り得る問題点を検討し、マイナスにならないよう十分

配慮する。

◆国際間の情報を密にし、経験を交流。

◆国連や専門機関に女性職員をふやす。

◆難民問題の解決（一家離散の悲劇を生み、技術のない女性は売春婦になるなど悲惨な状況を防止、改善する）。

以上、全般に、世界の「南」の部分に対する配慮が濃く、途上国および農村と都市の貧困層の重視が強調された。また、あらゆる面への女性の参加が力説され、施策の受益者から脱皮して、計画と実施に参加することが今後の課題とされた。

### ●波乱の中に午前二時半閉幕

第一・第二委員会は、二九日まで、以上の検討を終えたが、最後までもめたのは全体委員会だった。第五項に「シオニズム（ユダヤ民族主義者によるパレスチナ建国運動）を入れるか入れないかで結論が出ないまま、ついに最終日の本会議に持ち込まれた。

「シオニズム」を人種差別と認めるか認めないかの長い論争に決着がつくと、次は採択の方法をめぐる論争。「政争をや

めて女の問題の本質を語ろう」という西側諸国の悲痛な叫びの中で、いよいよ行動プログラムの採択へ。西側二三国の棄権、アメリカ、カナダ、イスラエル、オーストラリア四か国の否決でコンセンサスは得られないながら、圧倒的多数でついに行動プログラムは採択された。午

前零時だった。

「女の問題が政治的イデオロギーの争いに巻き込まれた。棄権または反対はしたが、シオニズム問題を除けば、行動プログラムの本旨そのものには全面賛成」と、追加発言する国々の声は、南の勢いに負け、コンセンサスを得られなかった無念さとも響いた。

午前一時を回り、自国の記者会見などに立ち上がる代表たち。めつさり空席が目立つ中で、残りの議案の採択が進められる。二度、三度、国の名が呼ばれて、「アブセント」の声がむなしく響くことも多くなった。波乱はもはやなく、次々に採択されていく。

午前二時半、ウスタゴーさん、メイヤーさん、シピラ夫人のあいさつで、会議は終わった。「コンセンサスが得られな

かったのは悲しい」と言い残して、力なく壇上を去るウスタゴーさん。壇上に残るメイヤーさんには、黒い人々がかけ上がつては抱きつく。世界の流れが、北から南へ、はつきりと変わったことを思わせる幕切れだった。

長い会議は終わった。次の五年へ、世界の女たちは動き出した。

その中で、日本は――。

傍聴席でみるかぎり、「代表」は、まぎれもなく「政府代表」で、「女性の意思代表」ではなかった。一貫した哲学も、意欲も感じられなかった。日本が行動プログラムを採択したとき、場内には、エーッという声があふれ、テレビに大映しにされた議長団席の人々の顔にも驚きのいろが明らかだった。決議のほとんどすべてに、西欧諸国と同調を続けていた日本の、唯一の反逆(?)だった。

赤松代表は、すぐ弁明した。「もしもシオニズムが別だてになっていたら、日本はちがう態度をとっていたらう」と。それは、西にも東にも、北にも南にも、

いい子でありたい日本の、苦しい立場を見事に表わしているようにみえた。南北問題を理解し、それを女の問題の一環としてとらえ、南の主張に票を投じたのではない。アラブの石油を失えばたちまち経済的危機が来る。その「政治的判断」に立つものであることは、誰の目にも明らかだった。

本号の巻末に付した諸決議の採択状況の資料は、この日本の姿勢を、何よりも明らかに物語っている。日本は、次の、どれにも棄権しているのだ。(カッコ内は提案国)

● アパルトヘイト排除 (アフリカ諸国)

● 南アフリカに対する制裁に関する国際会議の開催 (アフガニスタンほか) ● アンゴラ人民の抑圧反対 (ニジェール) ● 人種差別反対 (アンゴラほか) ● 「平和と安全の強化、侵略・戦争反対」(東独、キユーバほか) ● 平和社会のための女性の役割 (ポーランドほか) ● ボリビアの女性解放 (コロンビアほか) ● サハラ的女性への援助 (アルジェリアほか) その他、途上国援助を声高うたつた高橋演説、途上国の福祉を決議した日本提案の決議案と、大きな矛盾が感じられる。途上国に必要なのは、お金ではない。彼らの立場に、ほんとうに共感する心であらう。

フェミニズムを人権運動として正しく位置づけるとき、南北問題は、フェミニストたちの共通の問題になるはずである。そしてそれは、平等と平和の基盤としても認識されるはずである。

しかし、いみじくも「代表」の責を負った人々を、ここで責める気はない。彼女たちが、女の真の代表になり得なかった背景こそ、私たちの問題なのだ。八五年のナイロビ会議に、日本は、どんな代表を、どんな決議を送り得るか、それは、これからの私たちの運動にかかっている。

## ＜あひう＞

### 可能性教室へ

ぶいぞ

「すべての人は可能性を持つ」を合言葉に、へあごらんでは可能性教室を開いています。ナイロビ会議参加を目指し、英語教室の学習も熱が入っています。たのしい学習に、どうぞご参加を。

● 英語教室・入門 (毎週月曜夜6時15分―7時30分) 上級 (水曜朝10時30分―12時)。

両クラスとも講師は外人フェミニスト、月謝は各3千円 (非会員は5千円)。入会随時。

● 再就職準備教室 再就職の心がまえと、技術指導。編集入門 (毎週水曜夜6時―8時、81年1月21日開講、全10回、受講料10回分3千円 (非会員8千円)、指導齋藤千代) プログラマー入門 (毎週土曜朝10時―12時、81年1月24日開講、全15回、1期分1万円 (非会員3万円)、教材費および実習費は別途実費。指導小川淑子) その他。

# 国連婦人の十年 一九八〇年 世界会議に出席して

内閣総理大臣官房参事官

柴田 知子

七月十四日から三十日まで、デンマークのコペンハーゲンにおいて開催された世界会議には、一四五か国の政府代表と国連専門機関、NGOなどオブザーバーを含めて約一、三〇〇名が参加し、後半期行動プログラムや四八の決議の採択、「婦人に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」について、わが国をはじめ国連加盟国の約半数の国の署名など多くの成果があった。この世界会議においては、今日の国際政治の重要問題であるパレスチナ問題、南部アフリカ問題、難民問題の解決なくしては、平和も開発もありえないし、平和と開発を抜きにして婦人の地位の向上や男女の平等は達成できない。婦人問題も国際政治の重要課題と密接不可分であることが確認された。このような状況を、会議が婦人問題からはずれて政治的偏向をきたしたと批判する向きもあったようであるが、私は、国連の会議で

ある以上、婦人問題も国際政治を背景に問題になるのが当然と考えるし、世界の多数を占めている開発途上国の婦人問題の解決のためには、先進諸国はこのような背景を十分に理解し、開発途上国を支援してゆかなければならないことを痛感した。また、この会議全体についていえば、世界行動計画の進捗状況について国連婦人の十年前半期の見直しと評価の上に立っての後半期行動プログラムの審議に多くの時間をかけて積極的に取り組み、各国から出される修正案に次ぐ修正案を一つ一つ審議してコンセンサスでまとめてゆくという作業を行なって、約七〇項目の追加がなされ、二八七項目に及ぶ行動プログラムとして採択されたのは大きな成果であった。この審議の過程で、婦人のあらゆる分野、あらゆる段階への参加と貢献の重要性と、そのための教育訓練の必要性、婦人の家事育児の負担の軽減、男女の家事

育児の共同責任などがどの国にとつても受け入れられる共通の認識として強調され、行動プログラムに盛り込まれていったということからも、婦人の地位の向上、男女平等達成のために採るべき行動の多くは、世界共通の課題であることが再認識された。婦人問題の根は世界共通の感を深くした次第である。

わが国は、世界会議には積極的姿勢で臨み、高橋主席代表の演説では、わが国の過去一〇〇年の近代化の過程で、女性は大きな役割を果たしたが、発展の成果を公平に配分されなかった経験をふまえて、開発の企画実施の全過程への女性の参加とその利益の正当な享受の重要性、さらに、開発途上国の開発への婦人の参加に一層支援する決意であること、婦人差別撤廃条約に署名し、後半期の重点課題として批准のための諸条件整備に努めることを表明した。さらに、開発途上国の婦人問題解決のために、「婦人の健康と福祉に対する統合的アプローチ」についての決議案を一四か国共同提案のもとに提案し、採択されている。

以下、会議の概要について述べることにする。

会議は、本会議のほか、第一委員会（国内レベル）、第二委員会（国際レベル）、全体委員会（行動プログラム案序章、第一章、第二章）に分担して討議が行なわれた。

事前に三回にわたる準備会議と婦人の地位委員会による検討の結果用意された後半期プログラム案は、事前に出されていた

修正案のほか、各委員会において数多くの修正案が出され、二一八の項目ごとに修正の内容を調整しつつコンセンサスで決めていくという作業であったが、第一委員会では、各地域二か国（アジアは日本とインドネシア）から成る起草委員会を設けて審議を進めた。最終案が本会議にかけられたが、第五項など若干の部分は、案が一つにしばられないままかけられ、特に第五項は七七グループ提案の案に挿入されているシオニズムをめぐる意見が対立し、ロールコール投票により採択された。最後に、後半期行動プログラム案全体もアメリカの要求でロールコール投票が行なわれ、賛成九四（日本を含む）、反対四（アメリカ、カナダ、オーストラリア、イスラエル）、棄権二二（西側諸国等）で採択された。

後半期行動計画は、前半期の見直しの結果をふまえ、婦人の地位の向上、差別撤廃のための具体的実行性のある戦略、諸措置を提唱し、サブテーマである、雇用・健康・教育を中心に特に配慮すべき優先分野を指摘しつつ、国内的、国際的、地域的レベルにおいて、各国政府、国連諸機関などが採るべき行動について勧告を行なっている。

このほか、四八本の決議案が採択されたが、その中に、アフリカ諸国中心に提案された一九八五年に世界会議開催を勧告する決議も含まれ、ケニアがナイロビでの開催の意志表明をしている。

今回の世界会議では、国際政治の上で大きな問題となっている南部アフリカ婦人、パレスチナ婦人、婦人難民に大きな関心が払われ、後半期行動プログラムの中にもこれらの婦人への各種援助を行なうべきことを盛り込んでいる。

平等・発展・平和のテーマに関しては、平和なくしては発展も平等もありえないことが強調され、最近の世界経済不況は、女性に一層の負担がかかり、富める国と貧しい国の格差が拡大しており、解決のためには新国際経済秩序が基本条件で国際的支援が必要であるとの主張が多く、また、農村と都市の貧困層の婦人にも特に注意が払われた。平等達成のためには、婦人の政策決定参加が重要で、そのためには、女性の教育訓練が不可欠であること、男女の役割分担や家事・育児の女性の負担の見直しの重要性も強調された。

雇用・健康・教育については、まず健康が前提で、開発途上

国の女性にとって、清浄安全な水の確保、衛生施設の改善や文盲の追放が不可欠である。雇用については、多くの国で賃金の男女格差が依然として大きく、女性の就業分野の拡大が必要であることが指摘された。

また、世界会議での署名式における署名を含め、婦人差別撤廃条約には九月十五日現在で七八か国が署名、うち七か国（キューバ、スウェーデン、東独、ガイアナ、ポルトガル、ポーランド、ドミニカ）が批准している。

このような世界会議の結果をふまえて、わが国においては、すでに婦人問題企画推進本部において、後半期の重点課題として条約批准のための国内法制等諸条件の整備に努める旨申し合わせており、後半期に取り組むべき重点課題を定めるべく検討を進めているところである。

# 女性人材論

天野正子・神田道子・金森トシエ 有斐閣選書  
藤原房子・斎藤千代著 一〇〇〇円

●職業的能力の開花 女性の職業的能力に焦点をおき、女性と職業との関係を多角的に捉え直し、女性能力観・職業女性観を提唱する。

深谷昌志著  
女性教師論 有斐閣新書 五三〇円

津留 宏著  
教員養成論 有斐閣新書 四八〇円

野田愛子編  
離婚を考える 有斐閣新書 六五〇円

ジュリスト総合特集  
現代の女性 一一〇〇円

東京／神田／神保町2

有斐閣



# 世界民間婦人会議ⅡNGOフォーラム

——出会い、ふれあい、心ひらいて語り合つて

国際的なネットワークづくりも——

## ●多彩な女の問題を網羅

デンマークは、一つの半島と四百の島から成る。港湾都市コペンハーゲンも、市の中心部は、シェラン島の東部に位置するが、その南東に小さなアマール島がある。NGOフォーラムの主会場は、このアマール島にあった。島といっても、いくつかの橋で中心市街に通じており、堀割は、川のように見える。勝ちどき橋のような大きなはね橋、ランゲブロー橋の開閉に遭遇し、高いマストの船が通りすぎるのを見るとき、初めて島だと気がつく。汽笛の聞こえる距離にある「ユニバシテイ・センター」は、コペンハーゲン大学の各学部を中心に、関連校が立ち並ぶ。ひっそりと静かな一郭。主会場は大学の

文学部、日本人のいう通称アマガー・センターだった。

バス通りに面する簡素な三階建ては、中学校といったたゞずまい。紅がら格子を思わせる赤い窓わくのデザインが、「学校」というイメージを救っている。

校門には何の標識もない。校舎の玄関のとびらに、赤地に白くひまわりをかたどったポスターが二枚。花芯は地球を表わす国連のシンボル。花軸の十字が、おなじみのメスの記号をあらわしている。

その上に黄色い横断幕。赤い字でNGO MID DECADE FORUM。Oの字はどれも+マーク。

ドアを入ると受付。数人の係員が忙しく立ち働く。急に召集されたボランティアたちで、会議の事情は、たずねてもほ

んど答えが返ってこない。

参加者はまずここで登録をして、ネームカードを受けとる。参加資格は①学識経験者②政策立案者③婦人団体活動家に限ると、総理府経由のNGO通達はきびしかったが、用紙に、住所・氏名・国籍・所属団体・年齢を書き込むだけ。申し込みの際の、職業と関心のあるテーマに代わって、二〇代から五〇代以上までの該当欄にマルをつければOK。渡されるカードの色は青と黄の二種類、青が団体の代表格の人、という説明だが、振り分けはどうやら無雑作のようだ。

さて、奥へ進むと、小さな教室が五、六〇。小は十四、五人から、大は八〇人ぐらいまで。たった一つ、三〇〇人規模の視聴覚室だけが例外である。中では思い思



通路もすべて展示場

いのワークショップが開かれているが、五、六人で、ほぼそと話し合っているものから、いすを入れ足してお満員の部会まで、人数はまちまち、話し合われている内容もととりだ。 「女性と労働」 「法律からみた女性の状況」 「変化する家庭の役割」 など、みるからにまじめなものから、「自分自身の情報を広めるには」 「親のための性教育プログラム」 「力強いフェミニストの新世界」 「国際レズビアン運動」 はては「売春婦たちは国際的に組織する」 など、勇ましいものまで幅広い。 迷路のような通路の両側には、さまざまなポスター、写真、民芸品、パンフ類

が所狭しと並べられている。 あるときはホメイニの、ある日はカストロの、大きな写真が飾られていたと思うと、二、三日で姿を消す。 「特産なつめ菓子たべようだい」 で、豪華なポスターや、工業美術品・観光案内に至るパンフ類も一切無料。 「イラクいいとこ一度はおいで」と、国威発揚に余念のない国がある一方では、何やらさえないポスターを、高い値段で懸命に売っている途上国も多い。

「保育所見学に行きませんか」 「週末に城と湖めぐりご案内」 「郊外の農村で一夜を」 など、参加者招待の掲示コーナー、 「民宿探してみよう」 「ニューデリーのAさんに連絡したし」 など、メモをピンナップする情報交換板もある。

昼食代二千円近い高値の（それでも学生なみ大サービス！）食堂もあれば、銀行・郵便局・救急室も一応そろっている。 最初はなかった保育室も、参加者パワーの圧力で、おそまきながら設けられた。

大学の文化祭といった感じの会場を右往左往するのは、とりどりの服装の女たちだ。 圧倒的に多いのはGパンにTシャツか、スカートにブラウス。 ノーブラ・

ノーストッキング・ノー化粧の人々。 そっけない服装のわりに、目を見合わせたときの微笑のやさしいこと。 欧米のリブたちだ。

三つ編みの髪を頭上高く巻き上げたアフリカ・パワーも目立つ。 たても横も、巨木のように大きく、威風堂々と歩く。

三々五々、固まって歩くのはアジアの女たち。 若く見えても、年を聞くとほとんど五〇以上。 何々会長といった肩書きの持ち主が多い。 その中で化粧が目立つのは日本の女性。 ほとんどは一日観光組。 数少ない民芸品売場の前に群がっているのは、まず日本人か、アジアの会長さんたち。

カメラを掲げて忙しげに走り回っている女たちもいる。 胸のカードはプレス。 各国の腕ききの記者たちだ。 「おもしろい！ なんておもしろいんでしょ!! ベラ・センターとは比べものにならない」 生き生きと目を輝かせている。

豪華な服装、宝石をキラリと輝やかせてゆったり歩くのは代表団。 時にはワークショップにはいり込んで、七つくりと話を聞く。 が、日本の代表や記者の姿は

ほとんど見えない。

## ●あつさりと開会

開会式の会場は王立図書館員養成校。文学部から歩いて十分ほどの距離。無表情な建物群の一隅に、例のひまわりのポスターがドアに一枚、会場であることをわずかに示している。

カードがあろうとなかろうと、出入り自由の大学に比べると、ここは比較的チエックがきびしい日もある。いす席六百フオーラムきつての大会場がここだ。

わずかに勾配を持つ室内は、階段教室というほどの高低はない。正面にみどり



平等・発展・平和を目指して開会

の大きな幕。国際婦人年マークと、WOMANの文字がただ一つ。ひまわりのポスターが壁に二、三枚。いなかの小学校の講堂と大差ない雰囲気だが、ちがうのはイヤホンで同時通訳が聞けること。英・仏・西の公用語が流れる。が、イヤホンの数も、電波が伝わる範囲も、限られて

いる。  
七月十四日朝九時。十時の開会を前に百人近い人々がドアの前にひしめく。半数は日本人。「六百人の会場に三千人が押しかける」の情報をいち早くキャッチした人々。が、一旦会場に入った人々も、ドアの外に出された。不安をささやく各国語が入り乱れる。

「お静かに！」

突然、大声が鳴り響く。先ほど会場に入った人々を、鳥でも追うように追い出した、見上げるほどの大女。

「幸運にも……あなた方は、入れます。落ち着いて、しばらく待つて……。まず報道陣から入場を」

ようやく入場を許される。立錐の余地なく埋めた人々の、四分の一近くは日本人。閉め出され、ドアを叩く人が多い中

で、いち早く場所取りに成功したのは、狭い島国、日常訓練のたまものだろう。

教壇ほどの高さもない低い壇上に、やつと役者が並ぶ。金髪のウスタゴーさん、黒い大きなメイヤーさん……。中央は、例の大女。

「このフオーラムの召集を依頼されたことを光栄に思います」——NGOフオーラム企画委員会召集者、エリザベス・バーマーさんだった。ここには、委員長

もいなければ議長もない。しいてつけた肩書きは「召集者」。さすが民間会議だ。

あいさつのトップは、本会議の議長、ウスタゴーさん。「メキシコ会議が開かれるまでは、女の問題は十分理解されていなかったが、やっと政府レベルの理解もすすんできた。また、メキシコでトリビュンが開かれたことも大きな意味があった。オープンな公式会議が可能になったのだ。政府間会議と効果的に結びつけ、どちらも大切にしたい」と温かいあいさつ。

続くメイヤーさんは、力強い太い声。「やつとお目にかかれましたね。世界でも最も民主的な北欧の一国で会議が開けて

うれしい。この会議では、平等・発展・平和を確立しよう」

「すばらしいスピーチ、ありがとう」と感謝して、バーマーさんは、会議の裏方、地元デンマークの二つの婦人組織の代表者を紹介する。DKN（デンマーク婦人会議）は、伝統的な四〇団体の連合体、日本でいえば四八団体というところ、KULU（女性と発展の会）は、七十六年生まれ、やや保守的なDKNに対し、第三世界の問題と取り組むリプ的な団体。短いあいさつの中に、それぞれの特色がのぞく。

続くあいさつは、国際婦人連盟、国際婦人会議など、四つの国際的機関の代表者たち。比較的型どおりの話のあとで、「私たちは浜る政府を突き上げ、ついに女性差別撤廃条約に署名させた」という、国際有職婦人連盟代表、安藤はつえさんのあいさつには大きな拍手が湧く。「女の力を集めれば、強い力になることを知りました」——さらに大きな拍手。加えてアバルトヘイト排撃にふれると、割れんばかりの拍手。会場は、やっと活気に満ちて来た。

## スピーチから

ちがう意見を交わし合ってこそ

エリザベス・バーマー

我々はそれぞれちがう人間だが、それぞれの意見とその背景をたずね合う得がたいチャンスがフォーラムだ。世界的な危機の時代にNGOは無力化しているがこの好機を利用して、女性の進歩のための共通の活動を見出そう。

二つの会議の交流と対話を

リーセ・ウスタゴ

メキシコ会議によって「女の突破口」

ができ、女の抑圧状況が明らかになった。トリビューンは「女の非公式会議」を生んだという点でも大きな意味がある。公式会議の並行機関として、くだけた自由な討論が可能になると同時に、「オープンな公式会議」も可能になった。

国連会議とフォーラムと、どちらがより実質的な会議になるか、マスコミは話題にしているが、私はそのような区別が可能だとは思わないし、また区別してはならないと思う。二つの会議はそれぞれの議題があるが、両者の対話は必要だと

思う。フォーラムで語られたことを公式会議に反映したい。

女たちは、力を持った

ルシル・メイヤー

世界の中で不当にいやしめられていた女たちは、メキシコ会議を機会に目覚め、世界行動計画を基に、それぞれの政府に迫る標的をつくり、装備した。こうして蓄積された力を基に、平等・発展・平和を、必ず確立しよう。

日本の女性もパワーを持った

国際有職婦人クラブ 安藤はつえ

日本は封建的な国だったが、女の地位は向上しつつある。女の団体が力を合わせて打ち破ってきたからだ。たとえば、ほんの二週間前まで、日本政府は女性差別撤廃条約の署名を渋っていたが、日本の女性は一斉に立ち上がり、ついに署名を決定させた。またデンマーク大使は日本初の女性大使だが、これも婦人団体の統一要求の成果だ。日本の女性たちは、女性が協力すれば強い力を持つことを知った。

戦争やリンチのなまなましい経験を持つ国際民婦連のバルトアさん（チリ）の心あふれるスペイン語のスピーチにも多くの拍手が集まる。

次第に盛り上がったところで、黒ひょうのように、しなやかに美しい黒人歌手が壇の脇に立つ。今はニューヨークに住むというその人は、ふるさとの大地から噴き出すような声で、語り、歌う。——暗闇で、マミー、マミーと泣く女の子。やがて、次第に空は明ける。二〇億の女たちよ、母よ、娘よ、姉妹よ、手をとりう。明日に向かって立ち上がろう……。

絶唱を謝して、パーマーさんは結びのことばを語りかける。

「会場の外には、入りきれなかった人々があふれています。もう一度開会式を聞くことも検討中ですが、二重出席はしないように。幸運にも入れた人々は、この様子を入れなかった人たちに話してください」

細かい注意や質疑応答が続いて、式はあっさりと終わった。

国際婦人年マークを高々と掲げたセントロ・メディコ（医療センター）、夕方の

開会式を待つて階段に並んでいたとりりの民族衣裳の人々。三千人が一堂にあふれ、ああ、世界の女がいま一つに……と感動したメキシコ・トリビュンに比べれば、Gパンで働く人々にも似た簡素なオーブニングだった。

### ●白熱の中にも成熟した議論

初日は二〇、その後臨時の受付で、毎日三〇を超えるほどふくれ上がったワークシoppが、あらゆる混乱と無秩序、それゆえの活気にあふれているのに比べ、平等・発展・平和・教育・雇用・健康など、婦人の十年のメインテーマとサブテーマに沿って、図書館学校で開かれたパネル討論は、世界一流の講師陣をパネリストに揃えたもの。ベティ・フリーダンなど、著名人の名も見える。三か国語の同時通訳つき。場内に三つのマイク。一人三分ずつ、場内発言も許される。トリビュンの大会議場の催しに似た感じである。

時には退屈な、時には感動的な、パネリストのスピーチが終わると、活発な場内発言が相次ぐ。が、スピーチとは無関

係の、「とにかく一言言って帰らなければ」式の発言が少なくないのは、「母親大会と同じ」と誰かが評したトリビュンを思い出させる。フォーラムには政治がないというのが定評だが、ここにも政治は火花を散らす。

たとえば初日の「発展」のパネル討論、場内発言のトップ、ギニアの女性が「病める者こそ問題」と突き上げれば、続くニューヨークの女性は、「性別役割分業が問題。GNPの計算の中に家事労働など、女の無償の労働を入れる問題をもっと論じてほしい」。次のボリビアの女性は、支援を訴えて泣きだす。四番手のカナダの女性は「ウガンダにお金を送ったが、目的的には届かなかった。政府を介さずに直接必要な人に届く方法を」と、それぞれ自分の視点だけに立った発言。「カナダの方のいいアイディア、ありがとう。ほかによいアイディアを」と司会が感謝すると、いきり立ったブラック・パワーたちは、マイクにかみつかんばかりの勢いでまくし立てる。

「発展、発展というが、工業国の都合のいいように開発しようとしているだけで

はないか」「教育を受け、仕事につくことだけが発展か」「工業国の進出で泣かされているのは、いつも途上国」「発展とは、過去の戦争・虐殺・侵略の結果得られたものではないか」——地の底からのような、強い太い声が相次ぐ。

「パレスチナから来ました」と、開口一番、割れるような拍手を集めた浅黒い女性性は、「開発は女性の進歩につながらない。発展こそ非発展」と叫んで、拍手は一段と大きくなる。調子にのって、「中東からイスラエルと米国は出て行け。米帝国主義反対!」と声をさらに張り上げると、ワッと拍手。場内の前の方に座っていた白人たちは一斉に振り向き、「政治的発言を許すな」「出て行け」と、すごい目つき。司会者はマイクの電源を切る。いつのまにか、入口のドア近く立って、「アウト!アウト!」と叫ぶ二、三人の白人女性。が、支援の拍手は、二拍子で津波のようにあふれる。電源が切られた瞬間、「米帝国主義の陰謀!」の声が湧き、中南米勢が壇上に駆け上がったメキシコの二の舞になるかと、かたずをのむが、マイクを切られてなお大声をあげていた

PLOさんは、思いがけなくあっさりと退場。再び発言が続く。「新国際経済秩序」は、すでに国連でも確認された。女の平等も発展も平和も、よい政治があったこそ。政治ぬきには語れないが、言うべきことを言えば深追いしない。成熟した女同士で語り合おうというムードがあらわれていたのは、会議の舞台が、世界の最先進国だったからであろうか。

#### ●心ひらいて語り合うワークショップ

一日二百、と誤り伝えられたほど、多種多様なワークショップは、パネル討論に比べれば、一般にずっとくだけたものの。小さな教室で、互いに胸を開いて語



肌の色のちがいを超えて

り合うティーチン方式が多い。会場発言も、パネル討論の会場ほど、自分勝手ではない。聞こう、知り合おう、わかり合おう、そして連帯しよう、というムード。事前に十分な準備を重ね、各国に案内を出し、五日とか十日とか、連続討議を重ねるものもあれば、ロビーで話す代わりに開いたといった感じの手軽なもの、開いてはみたものの人が集まらず解散したものゝと、さまざま。迷路のような会場をやっと探し当てたらテーマが変更されていたり、時には解散していた、というのもザラ。充実した会はずは連続討議で、途中から入っても、前の経過がわからない場合もある。

単発組には、映画・スライド・ビデオなどの上映が人気を集めている。日本のHKWのように、通路で上映したところもあるが、暗い教室で、寝そべって見る気楽さは、より、うけている。

#### ●あらゆる機会に、出会い、ふれあって

第三の会場は、警察大学。案内書の写真では、四階建ての堂々たる校舎だが、使われたのはその一隅。コペンハーゲン

大学に隣接した、破れかけた鉄条網の間から入って行く、ややうらぶれた印象のところ。ここは、教室というよりも会議室ふう。二十人程度の小会議室が十あまり。特に「会議室」を望んだ人々と、主会場からはみ出した人々が集う。一階には、にわかつくりの保育所も。

三つの会場は、どれも九時―五時、月―金の週五日オープン。時間外の情報交換には、町なかのコミュニティ・センターが用意されている。ほかに、美術館・図書館・博物館にもフォーラム関連展示がある。

古代ローマの「ひろば」の原意を持つ「フォーラム(フォルム)」は、古代ギリシャの「アゴラ」の系列をひくもの。

本来、自由な情報と物資の交換の場、討論の場、裁きの場。のちに裁判所、公開討論会等の意味になったが、原意に従えば出会いのひろばだ。メキシコのトリビュンで、三千人の大会議場でのパネル討論よりも、小さなワークショップが人気を呼び、次第にその数がふえた経験から、今回は、無秩序・無原則をモットーに、できるだけ多くの小会場を用意し

たと聞く。それにしては、出国前の、ものしいNGO通達、すべての催し物は企画委員会の承認を必要とする、と、提出したテーマ名まで勝手に変えられた管理体制が不思議だが、現地でのワークショップ開催受付は、三枚のリポート提出を約束されるだけの簡単なもの。雨後のたけのこのようにふえたのも道理だった。

「ひろば」は会場内だけではない。玄関前の空き地では、芝居あり、ハンストあり、鼓笛隊が歌い踊るなど、あらゆるアビールが行なわれる。どこかの女性が抑圧されていると聞くと、支援のデモがスタートして、ベラ・センターに押しかける。クーデターが発生したボリビア支援には、ワークショップを閉めて駆け付けた人も多かった。すべての差別と抑圧に敏感なやさしさと、それに抵抗する強さを合わせもつフェミニストたちの本領が発揮された日々でもあった。

### ● にぎやかに「女の祭り」

条件整備の進んだデンマーク女性たちは、フォーラムに熱意がないと伝えられ

たし、一部のリブ・グループが締め出されたとも聞く。ボリビア支援デモの赤旗を支えていた中年のビール工場労働者は、吐き捨てるように言った。「フォーラム? 私には関係ないわ。参加すれば給料をカットされるもの。庶民が来られるわけがないでしょう」。デモなら、組合からカット分の給料相当額が保障されるけどとつけ加えて、冷たい目で会場を見た。

メキシコでは、リブ系の人々の「婦人会議反対!デモ」が公式会議場を取り巻いたし、日本でも「国際婦人年アハハの会」など、婦人年敵視派もいた。が、コペンでは反対デモは繰り出されなかった。「人は人、おのれはおのれ」のお国がらにもよるものだろうが、たとえお祭りであれ、女の祭りが開かれる意味の大きさは、共通認識になっていたのだろう。

この機会に自分たちの「女の祭り」を、と意気込んだ、レッド・ストッキングなど急進リブ・グループは、まず十五日に、温かい「ウエルカム・パーティー」を開いた。といって、大きな会場でシャンパンをぬくというわけではない。市の盛り場の一郭を「フェスティバル・エリア」と

して、十の協賛レストランが特別定食を奉仕価格で提供、市中のひろばでは、歌い、踊り、スピーチしようというもの。ひろばは人垣に埋められ、レストランは、フォールラムの入場カードをつけた女たちでどこも満員。互いにたちまち意気投合して、白夜の町をさらに「はしご飲食」する。幸いにも、夜は十一時すぎても、ほの明るい。

土曜、十九日の午後はいよいよ「女のフェスティバル」。うすぐもりの市庁舎前に、ばらばらと人が集まる。婦人年マークをくちばしにくわえた白い鳩のヘアバンドをつけた「ウイメン・フォー・ピース」の人たちが目立つ。五〇万人の平和署名の中心になった人々だ。拡声器が、またもボリビア支援を訴えるが、あとはひっそりと静か。乱立する旗もない。と、するすると横断幕がひろげられる。百メートルに近い長さには、花あり、鳥あり、カラフルなイラストがいっぱい。平等、平和を叫んでも、こぶしを振りあげる感じはない。歌声が次第に大きくなって、二、三百人から七、八百人にふくれ上がったデモは静かに出発する。子連れもち



演じる人も見る人もリラックスして

らほら。シユプレヒコールは、「私たちはあきらめない！」。勇ましい労働歌ではない、美しい平和の歌、女の歌が、路上の人々を巻き込みながら、約四〇分で大きな森林公園に着く。

一面のみどりの中には、赤い特設舞台を囲んで、大小のテントが並ぶ。テントといっても、駐留軍のかまぼこ形宿舎を思い出す大きなもの。「主婦にも資金を」「四〇代の女のグループ」など、思い思いの表示のテントは、それぞれのグループのPRの場でもある。中に入るとパネル展示がある。入会申し込みの説明に係員が近づいてくる。

舞台では再びボリビア支援のアピール。続いて、歌、踊り、バンド演奏が始まる。

全員リブ・メンバーだが、演奏も歌も踊りも、くろうとはだしのもの。人々は芝生に寝そべり、サンドイッチや果物をかじりながら、のんびりと見ている。連日の寒さ続きの中で、うす曇りの空は、珍しく晴れてくる。抱き合い、キスし合う人々。女と女、男と男の組み合わせにも、誰も目をそばだてない。

ジュージュとハンバークを焼くけむりもただよう。コーヒーを用意したテントもある。広い会場を、思い思いのブランドを掲げて歩く人々。へあこらの人も、「ノー・モア・ヒロシマ」の即席タオルを広げて歩く。「平和運動ならこちらへ」「平和の署名を」など、目ざとく見つけた人々が近づく。

歌声をBGMに集う人々の上に、珍しく薄日が射す。寒さ続きの中では暖かい午後となるが、伝えられるノーブラ・ノー上衣デモは、この冷気では始まりそうにない（かわいそうな、期待していた日本の男たち！）。

新しく入って来る人、帰る人。自由な流れの中で、一群のレズビアンが舞台に駆け上がる。しっかりと抱き合って、深

い深いキス。だが、ショックを受けたのは外国人だけのようだ。

空は再び曇って雨となるが、歌も、踊りも、芝居も続く。やがてぼつぼつと、テントが片づけられてゆく。

## ●ひろがる国際的連帯

第二週に入って、ワーク・ショップはますます多彩になり、熱気を帯びてくる。ユネスコ・国際婦人民主連盟・国際ゾントクラブなど、大手が主催者に揃っていた最初のプログラムに比べて、追加プログラムには個人名も多い。「女性と核戦力（サバイバルを目指す女性組織）」、「移民女性組織化（移民問題研究グループ）」、「女性の社会参加——国連は何をしたか（国際市民連合）」、「女性政治犯（ウルグアイ委員会）」など、名の知れていない団体や、ローカルな組織が目立つ。

通路で行きかう人々も、顔見知り同士の会話が多くなった。いくつかのワークショップで、同じ顔に何度も出会ったり、発言に惹かれてより深く話し合ったり、受付のベンチもロビーのスツールも、個人的な話し合いで、いつも満員。トイレ

の前でさえも、出会いの時間を惜しみ合う。

通路のパンフレット類も、だいぶ入れ替わった。無料のりっぱなパンフが多くなり、一円でも原価回収を、と売り歩く「アジアの女たちの会」や「あごら」のパンフは、なかなか売れない。八百円の値をつけた四八団体の「ジャパニーズ・ウイメン」は、手に取った人も、「ええ、高い」と、あわてて手をひっこめる。膨大な資料の、どれもがほしい。欲を出して買い揃えれば、乏しい財布はたちまち空になる。



出会えば、たちまち打ちとけて……

閉会式が近づいて、日本人の顔がまたふえ始めた。相変わらず会場を駆けぬけて行く人々。多くは自治体ツアーの人々なの、が惜しまれる。

その一方、重ねられた会議の間に、それぞれの部門で国際的ネットワークをつくろうという動きが強くなった。平和、核エネルギー反対、女性学、売買春、出版、女性科学者、女性心理学者……。私たちはどうであれ、女は平和を守るために団結しよう、NATO諸国と社会主義諸国の女が共に平和署名を、の呼びかけにも、多くの署名がたちまち集まる。不況と戦争の足音の中で、「もはや男たちには政治をまかせておけない」の声も強くなっている。ある男性記者は、真顔で言った。「女性の価値観が貴重な時代が来たように思います。ヨーロッパはもう行きづまっている。新しい思想が求められており、フェミニズムは、その大きな柱になるのではないだろうか……」

## ●集まり、散った八千人

図書館学校で一時半から五時、とプログラムに記されていた閉会式は、朝、九



歌って踊って閉会

時から変更され、変更に気づいたわずかな人々だけが、メイヤーさんの閉会宣言を聞いた。

代わって二時半、食堂に小さな舞台が設けられた。別れを惜しむ各国語のスピーチに続いて、アフリカ、スコットランドなど、各国の歌や踊り。日本の数人も「しあわせなら手を叩こう」を歌う。肩を組み、唱和する人々、最後の平和デモに立ち上がる人々、一瞬を惜しんでワークシヨップを続ける人々。歌と踊りの果てに、ブラウスもブラジャーも投げ捨てて解放感に浸った人も……。

どこからともなく集まった八千人は、

どこへともなく散って行つた。会議の日刊紙「フォーラム80」は、登録者数を次のように記している。デンマーク〇三三三七、それ以外のヨーロッパ〇二〇九七、北米〇九九二、アジア太平洋地域〇八三六、南米〇三三七、アフリカ〇二四五、中東〇一四七、カリブ諸国〇四一、総数〇八〇六二。

アジア太平洋地域八三六人中の二五〇人は日本人と伝えられる。ことばの壁を乗り越え、日常活動に立つて、ほんとうの「参加」をしたのは、そのうち何人だろう。数と実質が一致するのはいつの日だろう。

「公式会議と民間会議を結びつけよう」と奔走していたウスタゴ議長らの願望もむなしかつた。が、「正式」活動委員会を自称する人々は、検閲も修正も加えない。決議文をメイヤーさんに提出した。核エネルギー!・戦争反対、農村婦人、第三世界の地位向上等々の要望にまじって、「家事労働にも報酬を」「女性の性的搾取状態の調査を」「レスビアニズムに市民権を」「公用語を、たとえばエスペ란antoのような国際語に変えよ」「第三世界よりさら

に苦しい第四世界の女に光を」「売春婦の世界的組織の確立を」など、数々の「決議」と「修正」が盛りられている。個人もあればグループもある提案者たちが、いつ、どのようにして文案を練つたのかは定かではないし、「決議」や「修正」が世界行動プログラムに反映したとも思えないが、歴史は常に無名の人間がつくり変えていくものだろう。

「八五年には、フォーラムが主体になるでしょう。国益を優先した公式会議は、女の地位向上に無縁だなどとは言いつてもいいけど、大多数の、あたりまえの女たちとは遠い距離にある。まずフォーラムで決議され、それが公式会議の決定になるように努力しなくては」と語った、デンマークの活動家のことばには、共感する人が多いだろう。しかし、決議案も修正案も目標としない、無原則の集いだったからこそ、フォーラムは活気にあふれていたのではないだろうか。それぞれの国の女たちの力が増し、「国益」が「女益」をたいせつにする日が訪れるとき、公式会議も真の「女の会議」に、そして「人間の会議」に、なるのではあるまいか。



誌上録音

# パネリストのスピーチから

フォーラムでは、二〇回にわたり、平等・発展・平和など、主要テーマにそったパネル討論が行なわれた。パネリストは、それぞれの国の代表的な活動家や知識人であり、深い感動を誘う内容のものも少なくなかった。そのいくつかを要約紹介する。

## 平等

### 政治における平等

ニュージーランド 国会議員  
マリリン・ウォーニング

私は一九七五年以来国会議員で、現在三七歳だが、力の社会、政治の社会では、「何をやったか」が問題ではなく、「何を言ったか」が、勝利のマーチにつながることを、自分の体験から感じている。「個人は政治的存在である」とは、婦人運動のきまり文句であり、世界中の女性議員たちは、後輩に道を開こうとしている。それはなぜだろうか。

政治システムの中に立つ一人の女とし

て私はいつも思う。女は、貧しいということの上に女であるということ、有色人種であるという上に女であるということ、また独身だということの上に女であるということ、常に二重の差別、男性の三倍の弾圧を受ける。

私が国会議員だというと、男でも容易なことではないのに家庭生活はうまくいくかとか、ひまな時にはどこへ行くかとか、莫大な仕事をどうやってこなすのかとか、差別的な質問を受ける。

また、私は独身だということ、社会の信用を得るのがいっそう難しい。たとえばお金を借りようと銀行に行けば、それがよくわかる。独身女性が信用を得るためには、どんなことにも平均的男性以上の実力を示さなければならないし、あらゆることに専門家でなければならない。

しかし、国境を越え、意見の相違を越えてつくられる女の団結は、いわば武装しない軍隊である。力はなくても、静かな抵抗は、暴力よりも強い。

政治の世界でも困難は多い。女性が女性のために力いっぱい働くと、それだけで敵視された。私は「改革者」と呼ばれ、自分の国の急進派の人たちには支持されていないが、自分がやらなければ誰もやる人がないので、やるほかにと思っている。

男性優位のヒエラルキーの中で、「改革者」にできることは、法案を可決させることであり、対決することであり、干渉することであり、組織をくつがえすことができる。これらによって、社会を変革することができる。エリートと呼ばれる人たちも社会の質を変えていくことができる。女性が生きのびるためには、政治の中

にすべての女性が入ることは必ずしも必要ではない。政治の世界の外にいても、力強い協力者になることができる。政治とは、私たちの日常生活のすべてである。朝起きてから、何時のバスに乗るということまで、すべて政治である。どこにいても、生きている一瞬一瞬がすべて政治の対象だということを認識すること、男性優位の法案決定の対象だということを認識し、目覚めることが重要である。道は長いかもしれないが、新しいものを私たちのためにつくるために、私たちはまずそこから、現存するシステムを変革すべきである。私たちは、女性であるがために受ける抑圧をはねのけ、武器なき軍隊」として団結して進もう。

## 経済における平等

チエコスロバキア 女性民主同盟  
代表、女性連盟会長、スロバキア・  
アカデミーオブ・サイエンス会長  
ヨランダ・ヤンチョビチヨバ

社会主義国家であるチエコは、経済生活のあらゆる面の女性の平等は法律で制定されており、平等の権利も法によって

守られている。しかし、女性の地位は本当は昔とあまり変わっていない。女性の権利は一日で変えられるものではない。本質的な平等は、複雑で矛盾の多いものである。だからまず考え方や習慣を変えねばならない。

女性の社会的平等は、たとえば雇用・訓練・社会状況のような、さまざまな女性の社会問題を解決することによって進められなければならない。社会問題の中でも特定の疑問がおこるのは、女性は同時に妻であり母親であり、育児をしなければならぬことである。まだこの分野は研究中であるが、女性の家庭外での問題も含めて、調和のとれた女性の地位の発展が追求されるべきである。

これらの問題は主に三つの時期によって解決されようとした。

第一期は、一九五〇年代で、多くの女性が毎日の家庭での仕事から変わって経済活動に進出した時期である。この時期には雇用労働者の半数は女性が占めた。このように、あらゆる経済面で活動できる技術が開発されたことに大変感謝している。

第二期は一九六〇年代で、女性の職業訓練および職業資格のレベルが向上した時期である。非常に大切な時期だったと思うが、これで女性の経済活動の中に新しい経済機構をつくり上げた。女性の経済的自立は、経済生活および家庭生活における平等を獲得する上で非常に大切なことだと思う。

第三期は一九七〇年に始まった。女性特有の問題を解決する時期で、女性の労働条件や家庭環境を調和のとれたものにする効果的な方法を探すことに重点が置かれた。この時期に問題は三つあった。

一つは、女性の政治への参加および管理職への進出である。社会主義の国では、女性が平等に扱われていない企業や団体は一つとしてなく、管理職もいるがもっとたくさんの女性が管理職に進出するのが望ましい。

二つ目は、女性が発展するために、よりよい環境をつくることであり、そのために保育園を増やし、家事をいかに少なくするかである。

三つ目は、社会の発展過程における女性とその職業を科学的・心理的に探求す

ることである。

女性の平等および発展は、世界が平和であるかどうかにかかっている。平和は人類存続の基本条件である。いま、多額のお金が軍備に使われているが、軍縮のためにもっと有効な法案を作り、平和のために運動しなければならぬ。いま軍備に向けられているお金は、途上国の貧困のほうにもっと向けられるべきである（拍手）。平和が長く続けば生活環境も向上する。軍備のためにではなく、もっと他の大切なこと、目標のために使用されるべきである。私たちは、この理由で、女性の国際的な、民主的な機構を支援してきた。女性には平和のために多くの貢献をしてきた。私たちは、児童および女性の権利や、民族独立を支持し、植民地主義・人種差別・帝国主義に反対し、人間の権利を守って世界の平和のために協力するべきである。

## 宗教における平等

アメリカ 作家。著書「なぜ、男の神でなければならぬのか」ほか  
ソニア・ジョンソン

合衆国には、女性を差別する法律は、連邦政府で八〇〇以上もあり、また、州政府には、少なくとも一万五千もあるとされており、二、四〇〇万人が貧困のうち生活しており、うち二、〇〇〇万人は女性と子どもである。この原因の一つは、男が一ドル収入を得るときに、女性は、五七セントしかもらえないということである。

宗教の中でも女性には差別を受けている。私は非常に熱心な信者だったが、ある時、私の所属する教会のリーダーの一人が、平等の権利を主張する修正案（E R A）に全く反対する発言をしたことに驚いた。考えてみれば、神そのもののイメージも男であり、男が支配し、自分の都合のよいように女に押しつけている宗教であると思う。女は、世界中の宗教から裏切られている。そして男はいまだに、本当に女には魂があるかどうかなどと論争している。

女性には、女性がそれぞれの国で、その国の方向を決定するような力を持つときのみ、平和を獲得することができると思う。だから私たちが自分の国に影響を

及ぼすだけ強くなるにはどうしたらよいか考えるべきである。

女性も、男性の神と全く平等の女性の神を地上につくることによって、女性のために必要な力や女性に有利な社会をつくることができる。女性がのけものにされたように、男性をのけものにしたくないので、「天にまします我らの父よ」に「我らの母よ」も平等の位置に加えるべきだと思う。完全に平等な男女の神の存在は、地上にも完全な平等を反映するだろう。私は新しい世界の宗教がつくられつつあるのを知っているが、これは強い力になり得る政治的な運動でもあり、宗教を信するにしろ、信じないにしろ、どんな女性でも、これに参加すべきだと考えている。

## 階級社会における問題

エジプト 医師、弁護士、作家。  
「女性と性」ほか中近東の女性に関する著書多数

ナワル・エル・サダウイ

私はエジプトのデルタの非常に貧しい村に生まれ、小さい頃から家長制度がす

べてを支配する社会に疑問を持っていた。そこでは、村の四分の三の土地を一人の村長が所有し、その他の人々はすべて貧しく、食物もベッドもなかった。

兄弟の中でも女は不平等な取扱いを受けて育てられ、両親に理由をきくと、すべてそれは神（アラール）の意志と説明され、貧しい者より富める者、女より男の味方をする神を愛さねばならないと教えられ、非常に悩んだ。

私は幸運にも教育を授けられ、おばあさんに、「お前は嫁に行くのだ」と学校から連れ戻されそうになったが、必死に抵抗して医者資格を取ることができた。

しかし、医者として働くうちに、患者が一番必要としているのは食物であり、あらゆる病気の原因は十分に食べられないことであることがわかり全く自信を失ってしまった。そこで、大多数が生きるために最も基本的な要求しているものは何かを追求するために小説を書き始め、

女性の基本問題を科学的に追求、一九七三年、「女性と性」を出版した。以来、医者よりは文筆業に専念している。

エジプトにおける国連活動にも参加し

ているが、そこでもあらゆる会議に出席することを妨げられ、国連でさえも女性を差別することがわかった。

女性が戦おうとすると、非常に高価な代償を払わなければならない。私は、結婚し子どももあるが、夫に「書くことか私かどちらかを選べ」と迫られ、私は書くことのほうを選んで離婚し、子どもと離れたらに暮らしている。夫や子どもを失ったり、職を失ったり、名声を失ったりという代償を支払わねばならない。

私の国では、性と宗教と階級（四階級制度）が、書いてはいけない、触れてはいけない、三つのタブーとされているが、婦人問題はこれらを除いて語ることとはできず、結局、罪を犯しているということとで名声も人望も失うのである。

女性性は、男性優位社会に目覚め、女性差別に目覚め、社会とは男性そのものだということを念頭に置いて対決していかなければならない。

女性の問題は、医学的・経済的・社会的のどれにも密接に関係していて、どれも切り離すことはできない。政治・経済・歴史における性差別をなくすために、す

べての問題を関連づけて理解し、お互いに助け合うことが、私たち国際的な女性運動推進者を結びつけるものであると思う。

## 発 展

### 精神革命が必要

ギニア社会事業大臣  
ジャンヌ・マルタン・シセ

ギニアは、植民地的独裁政治からの解放を目指し、長い間たたかい続けてきた。一九六八年八月二日に独立して以来、男女同権、雇用における機会均等、基礎教育の充実、文化革命に力を尽しているが、長い植民地政策のおかげで、女性の九二%はまだ文盲であり、義務教育の普及・浸透が最も大きな課題になっている。特に農村地区には、女性の向上センターや職業訓練校を設けて運動を進めている。

しかし、文盲教育と同時に必要なのは、女性の精神的革命である。アフリカの女性性は、昔からの習慣で、家事をし、育児に専念し、男性に従属し、服従している

が、これを当然のことと思って疑おうともしない精神状態をまず改めなければならぬ。女は男の性的所有物ではないといつたことさえも一般には受け入れられていない。私たちにとつて必要なのは、まずこうした女性の心理とたたかうことである。

世界の先進国で平和と平等が推進されても、私たち途上国の女性を取り残されたのでは何にもならない（拍手）。私たちにとつて最も大切なのは、途上国の子どもたちを飢えさせないことである（拍手）。

女が職業に就き、女の大臣や医者や教師が生まれることだけが最終目的ではない（拍手）。そういう女性たちが、率先して、すべての女性が発展のために参加できるように、自分たちの能力を十分に発揮しつつ、それを社会的に利用し、一般の人々を啓蒙することが必要である。一部の女だけの「発展」ではなく、すべての女性が「発展」する日を心から期待したい。

## 「発展」を定義しなそう

バルバドス WON 理事

ベギー・アンドロブス

先進国と途上国とにかかわらず、私の見るところでは、女性はその共通の問題をかかえているように思う。

五年前のメキシコ大会の時には、私たちの課題はきわめて明確だった。すなわち、進歩・発展の過程に、女性もその担い手として参加し、自分たちの立場を有利にすることだった。しかし、この五年間に、さまざまな活動や思索が行なわれた結果、女の問題は、いっそう複雑になった感がある。平等を獲得することは女にとつてほんとうに可能なのだろうかとか、現在の男社会に女を組み込んでいくのは、ほんとうに有利なゴールなのだろうかといった疑問を持ち始めた人もいる（拍手）。発展ということばは、そのままでのみにされているのだろうか。ここで考え直す必要がある（拍手）。女は何をほんとうに望んでいるのか、また女にとって、真の意味の発展とは何なのか、私

の個人的見解を述べると、次のとおりである。

まず第一に、男社会、家父長制社会をつくり変えること。社会の抜本的変革が必要である（拍手）。ある特定の階級や特定の性、特定の政治的考え方が独裁するのではなく、対等の立場で運営できる社会システムにすることだ（拍手）。

第二は、女が、自分がいま生きているこの社会をつくるために、あらゆる事態、あらゆる重要事項の決定権を持つことである（拍手）。

第三は、女が利用される発展であつてはならないということだ。女の自治に基づき、女自身の評価や尊厳を伴うものでなければならぬ（拍手）。

先ほど会場発言にあつたように、私たちは新しい真実の社会を望んでいる。私たち自身の生命を尊重し、発展の概念をつくるのに、女性自身の経験を役立てなければならぬ。女にとつて有利な社会、女がほんとうに人間だと感じることができる社会がつくられる日まで推進しなければならぬ。

## 農村それ自体の発展が必要

インド 女性問題研究センター

グイナ・マズムダー

ここに来て訴えることのできない女たち、特に第三世界の農村の女にとって、「発展」とは何かについて述べたいと思う。

これらの女性はいくまで、いろいろなレベルで注目を集め、発展のためのさまざまな方法が決議され、多少は実行されてきた。しかし彼女たちがほんとうに望んでいるのは何だろう。栄養学についての知識や教育を受けること、よりよい育児の方法を教えることももちろん必要ではあるが、それ以前に必要なのは、耕す土地や住む家の保障であり、どうやって子どもたちを安全に生き延びさせるかということである（拍手）。

農村女性の問題というと、工場誘致とか都市化が対策として考えられやすいが、農村の女たちが望むのは、農村から離れてほかの方法で生計を立てることではなく、農村で、希望を持って働くことなのだ（拍手）。

発展ということばは安易に使われがちだが、第三世界の農村で働く女性が望む発展とは何かを再検討すべきだ。国連の政策に期待したい。

## 男性との「共修」で成功

イスラエル 地域開発訓練センター  
理事

ミナ・ベン・ズーヴィ

私は、一九六一年、イスラエルのハイファに設立されたアンコマ訓練センター（MTCJ）の理事として二〇年間働いているので、そこでの試みについて述べたいと思う。MTCJは、女性を地域発展のために訓練する機関であり、各国、特に農村地域での女性を開発に参加させるために訓練することを目的にしている。

このため、初めは農業を教えていたが、やがて、それぞれの州で教育を受けた、選ばれた女性をセンターで訓練し、それぞれの州に戻って指導者として働けるよう訓練することに重点が置かれるようになった。農業政策に関する教育プログラムを通して、自国のために役立ち奉仕する人材を養成しようというもので、プロ

グラムは、農村地域開発・幼児の早期教育・収入を得る活動、の三つの分野にまがっている。

訓練を続けるうちに、男性も訓練グループに入れたほうが、男性の理解を深め、女性の仕事がいやすくなるのではないかとということになり、十年前から少数ながら男性も入所させたところ、男女の自然な相互関係ができ、男性は女性が決して劣った性ではないことを発見し、女性も自信をもって積極的に活動できるようになり、たいへん成功した（拍手）。

訓練コースの最後に行なう現場学習は特に意義のあるもので、十か国の研修生が三週間にわたり農村の人々と生活を共にし、発展についての自分の能力にさらに自信を深める。今まで一九か国五〇〇人以上の研修生が参加した。

国際婦人年以來、国連によって始められた世界的な活動は、女性も、経済的・社会的発展に寄与する能力を持っていることに、多くの女性が気づいた点で大きな役割を果たし、また国際セミナールは、男女が、家庭、経済生活、地域活動、生産の場で、対等に協力できることを実証

した。最近五年間のMTCJの活動で、発展に基本的に必要なものを明らかにし、農村女性に的をしぼるべきではないか、またこうした活動に男性も参加させるべきではないかと思うようになったことを最後に付言する。

## 雇 用

### 女性の雇用問題と展望

スイス

アントワネット・ベギユイン

一般的に女性は十分に雇用されていないし、働きすぎの傾向がある。なぜなら、男の人より教育や訓練を受ける機会が少なく、能力の点で限られていて、働きたいが十分に働けない状態である。また、女性は家庭における責任と仕事上の責任との両方の負担がかかり、腕をみがいたり、新しい技術を習得する時間も作れないし、良い条件の仕事に変わるチャンスも作りにくい。この二つは相互に関連し合って状態を悪くしているが、先進国より、発展途上国のほうがはるかに悪い状

態にある。工業国の女性は家事も電化製品で早くすませることができ、途上国ではいまだに、根本的な生活改善がなされておらず、したがって、より重い負担がかかっている。

これらの原因は、経済的・社会的発展に対する女性の貢献が認められていないためであると思われる。表面に表われる収入のある労働は認められても、女性が社会生活一般に貢献している、収入の入らない家庭内労働は、全く無視されている。アメリカでは、国の収入の四〇%は、この無視された労働によるとされているが、この数字は、他のどの国よりも高いものである。

女性の貢献が認められないということは、女性の貢献をもっと有効にするためのもの、つまり、女性の能力を向上させるための教育や訓練の必要性を認めてもらえないということである。女性が向上するためのプログラムや政策が、過去十年間に縮小されつつあるということは、女性にとって重大なことである。

農業においては、近代化や商業化や機械化が進み、人手が少なくなってもすむよう

になった。都会に移住する男について多くの女の人にも移住する傾向にあるが、なかなか十分に給料を払ってくれる職は少ない。

農業以外の分野では、先進国のいくつかの企業がより安い労働を得るために、発展途上国に工場を移転させる傾向が出てきている。女性の労賃は、先進国より途上国のほうが男性よりずっと低く、それだけに利益を上げられるわけである。工業国では、二、三年前から、深刻な不景気の影響を受け始めており、女性はこの点でも男性より、強く影響を受けており、仕事を探すのが難しくなっている。歴史を逆もどりする傾向にあり、女性が経済活動に従事することは、年々困難になってきている。

私たちがこれから先、心にとめておかねばならないことの一つにマイクロ・エレクトロニクスによる技術開発がある。これにより女性の大部分が働いていた事務の仕事が大幅に改革され、工場もオートメーション化が進み、微電子工学の進歩は女性にとって悪いことばかりのようである。特に女性の雇用にどんな影響を

もたらずか考えなければならない。

第二点は、國際的労働分離の変化である。これは労働者の移住や企業の他の國への移転のことで、前述のとおりである。

私たちは、將來の女性の雇用に対し、何をすべきか、また、將來の雇用傾向をどうやって知ることができるか考える必要がある。政府や他の団体を動かし女性の活動や雇用における新しい開発についてもっと認識してもらうのにはどうしたらよいのか。

第一に、女性の雇用問題を、社会的な問題、つまり福祉政策の問題として考えるべきであると思う。新しい國際開發戰略を考える団体で、私は、男の人たちが女性の雇用を經濟戰略の一部として考えているのを聞いたことがある。

第二は、女性の働く条件を向上させるための政策を支援し、情報を交換することによって、すべての女性が有利に働けるようにすることである。

第三に、女性にとって、何が本当に必要なのかを、他の人の言うとおりに思うのではなく、女性自身が、真剣に考え、認識を深めるのに何ができるか考えるべきである。

きである。

さらに、第四として、政策決定に参加し、發展の主流を自分の手で自分に有利に変えることが必要であると思う。

## ソ連における女性の雇用

### ソ連

#### ルドミラ・バラクオスカヤ

女性が仕事をする権利を履行することは、彼女たちの基本的な平等をつくり出すものである。女性が國家的な經濟活動に、積極的に参加することにより、人間としての重要性を認識し、女性發展のために貢献することであり、社会的にも家族の中でも、新しい地位を勝ち取るものである。ソ連では、女性の労働力は全体的な組織や社會主義經濟に組み込まれているが、そうすることにより個人の働く権利が明らかにされるだけでなく、社会的・經濟的・法律的に保障される。

ソ連では、女性は男性と全く平等の教育や職業訓練の機会が与えられ、採用も昇進も平等に行なわれ、特別労働生産法によって保護されている。

以前から、女性を職業や社会的・政治

的活動に参加させることは、重要な問題であり、州の政策にどのように反映させるか考えられていた。男女共に一日八時間労働が採用され、同一労働同一賃金が保障された。母性も女性の大切な社会的機能であると認められた社會主義政權下においては、女性が積極的に社会的な生産活動に参加することなく、社會主義を樹立することは難しい。女性が社会的に活動することは社會的・政治的・文化的發展の複雑な要素が、からみ合うことであり、ソ連では、個人の私有財産を認め、人間による人材の開発が進められ、社會主義的生産方法の確立などによって、實際的な女性の平等を大々的に実施することができた。

革命以前の女性の文盲は、八五%にのばったが、その後短期間で文盲は一掃され、職業訓練が行なわれ、社會的生産活動や、社會のあらゆる發展段階に女性が全面的に参加するようになった。女性が全面的に参加するには、國家の經濟の確立と、女性自身の生産への興味が必要であるが、女性の生産への興味は、單に經濟面ばかりでなく、社會全般に利益をも

たらずものであることが、社会心理学の研究で明らかである。

現在、十六歳から五四歳までの女性の九〇%以上が、働いているか勉強中であり、平等に働く権利や、平等の教育を受ける機会を与える法律により、女性が目ざましい活躍をしている。その分野は、高度の技術習得を要求する、重工業や、農業・化学者にも及び、専門的な高度熟練の必要な職業人口の五九%は女性であり、さらに増え続けている。

平等な教育が実行されることにより、社会的な平等の地盤が保障されることになった。ただ残念なことに子どもを持つ母親が、習得した職業技術を十分に活用しておらず、八歳以下の子どもを持つ母親に特別保護法を設けて、働きやすいようにした。また、女性特有の心理や生理や特色を十分に考慮して、社会構造の中で活動してもらうことが必要であり、五年前の国際婦人年以來、研究が続けられている。

## 産業の移転と雇用

### アメリカ

#### ヘレン・サファ

産業の再配置あるいは、産業の移転は、今に始まったことではなく、昔から安い労働力を追って、主に工業国から発展途上国に産業が移された。これは主として繊維産業や電気産業に見られる。

昔は、たとえば、イギリスで始まった織物産業は、家内工業として農家の子女をまず使い、それがあまり安くなるると、移民したアメリカの家庭の子女の仕事に変わったように、どこまでも安い賃金を探して移転し、最後には、「夜逃げ工場」などと呼ばれた。

今日では、発展途上の比較的小さい国、たとえばアジアではホンコン・シンガポール・韓国・台湾など、アメリカではメキシコ国境付近の労働力過剰地域に移りつつあり、人間を輸入する（移民）代わりに仕事を輸出する方法をとっている。

これらの労働力過剰国の特色は、低い賃金と時間給採用に加え、政府が協力的なことで、機械の輸入や製品の輸出も自

由に無料でできる。逆に、これらの国は、産業が移ってきたことにより、雇用を拡大することができ、特に女性の仕事を増やすことができ、また交易が発達に行なわれる。しかし、この新しい形の産業輸出が女性にもたらす影響については、系統的な研究は何も行なわれていない。

この形は、資本主義の発展の特殊な段階で行なわれたもので、アメリカでは十六世紀の織物業が労働者の要求による高賃金、厚生施設などの面で金がかかりすぎ、他の安い労働力を探したことに始まるが、交通や通信の発達によって、さらに押し進められた。産業の移転により、アメリカでは、特に弱小派のスペイン系の女性が仕事を失うという深刻な事態になった。一年で一万二千人が職を失い、一九六〇年から七〇年で四〇%の仕事が減っている。

産業の移転の三つの問題点は、

第一に、女性に与える影響である。長時間労働、低賃金で単純作業をする非常にみじめな状態になっており、不平を言うものなら即座にクビにされるが、一人がクビにされても十人がその仕事を待

っている状況である。

第二は、家庭の仕組みに与える影響である。女が職を得ても、男には仕事がなく、家計を支えるのが女のほうであることが少数民族の場合には多い。

第三は、移転された国の雇用を促進する一方、労働者もその支配下でコントロールされ、政府も協力して、労働組合が弱小化していることである。

## 農村女性と雇用

### エジプト

#### ナワル・エル・サダウィ

私はいつも自分が生まれた村のいとこと自分を比べてみるが、お互いに貧しく、同じ親族だった。彼女は、兄弟は学校へ行かせてもらえたが、女子は行かせてもらえず、一、二年の教育を受けただけで、十五歳のときに小作人と結婚した。家族を養うだけの小さな土地があり、彼女は朝早くから畑で働き、家に帰れば家族の世話をする生活をしていた。

私は幸運にも、父が学校に行かせてくれたので医者として弁護士として生活しているが、何という違いだろう。

あるとき、彼女に、働く権利について話したら、彼女は私に必要なのは、働く権利ではなく、休む権利だと言ったことがある。農村に住む大多数の女性が何を望み必要としているか知る必要があると思うが、エジプトでは、統計で女性の八〇・九%しか働いていないというが、農業に携わっている女性も含めれば、四五%が働いていることになる。雇用や労働を我々がどう理解するかが問題である。いわゆる第三世界の大部分の女性は、働きすぎていて、しかも賃金は支払われていない。しかも朝から晩まで夫や子どもに尽していて、決してよい状態とは言えない。

彼女たちは、平等に働く権利同様に、平等の賃金をもらうことを望んでいる。仕事・資源・力が平等に分配されない社会では、彼女たちは単なる道具であり、奴隷にすぎない。たくさんの若い女の子は、村では土地もなく、経済手段を見つけることができずに都会に働きに行き、女中になる。私たちは階級や社会を分析し、働くことが何を意味するのか知るべきである。たとえば、下層階級では、働

くことは恥であり、上層階級では名声を意味する。

最後に、エジプトは、一九六〇年代には社会主義的政策の下で、男女平等の就職の機会が与えられ、平等の賃金がもらえ、資源や富が平等に分配されていたが、一九七〇年に再び資本主義政策にもどり、女は安い労働力となってしまった。たくさん外国商品が、貧しくて手の届かない人たちに向けて宣伝され、非常な欲求不満を生み出していることをつけ加える。

## アフリカ女性の雇用

### セネガル

#### マリー・アンジェリク・サヴァニ

アフリカ大陸は、主に、天然資源と低賃金労働力そして消費者の大陸として、国際経済の一端を担っている。アフリカの七〇・九〇%の女性は農村地帯に住み、働いているが、これは労働人口としては数えられていない。なぜ農村で働く女性が数のうちに入らないか糾明することは大切だが、アフリカの国々に資本が入ってきたことは、広い意味でさまざまな影響があった。

## 家 族

### アメリカ

#### ベティ・フリーダン

アフリカ、特にセネガルには、一九五〇年代から工業化が導入されはじめ、一九六〇年代の独立した日から工業化はさらに促進された。穀物、乳製品（ビーナッツオイル、コーヒ、ココア）の分野で、特に主要な役割を果たしている。

工業化は、家庭内の若い世代と年寄りの世代の間に、また男と女の間に、新しい労働力の分離（分業）を生み出した。

一九五〇年代から六〇年代にかけて、アフリカの東海岸の国々にも工業会社が登場、これも家庭内の分業を生み出した。労働における女性の役割は、雇用の部類に入らない、と言われるのは、女性の力が統率され、組織されていないからである。女性は、本来、家事に従事し、家庭で子どもを産み育てる役割があるからという考えから、訓練も受けられず、家庭的な教育しか与えられていない。新しい組織、新しい経済が必要である。

私は、現代の婦人運動の最先端と思われるものについて話したい。驚かれるかもしれないが、女性解放運動の次のフロンティアは「家族」だと私は思っている。これは家庭に帰れということではない。新しい観点から家族を扱わない限り、平等を実現できないと考える。

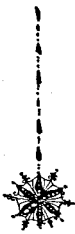
五年前、メキシコ会議のころは、女性解放運動は家族と対立しているように思えた。私自身は、それは決して対立しているとは考えていなかった。主婦であり、家族の召し使いであり、子育ての役割になう「女」の定義を破って社会参加の機会均等、特に雇用と教育の平等を要求する必要がある、それに対する大きな怒りがあると考えていたし、女性はそうした怒りを、自分自身のからだや、子どもたちや夫にぶつけているが、それをオープンにする必要があると、私は提唱してきた。そうした怒りは、オープンに吐き出

されるようになったが、女の特徴は、依然として家族の中に定義され、それは平等ではなく、程度の低い役割だった。女性解放運動家たちの中には、これに対し、「うぶ湯と一緒に赤ん坊を捨てる」傾向を持った者もあった。家庭をぶつつぶせ、結婚をぶつつぶせ、子育てをやめよ、と。

しかし、平等の法概念や、機会均等の要求が、子育てという女性の役割の対立概念だった時代は過ぎ、女性は何よりも人間だということが共通認識となった。

欧米では、男性も女性も、それぞれ異なった発展段階にあるが、少なくともアメリカ合衆国では、現代の婦人運動は、過去十年の最も偉大な社会変革運動として認められるだろうし、ある意味では、現代の偉大な革命に数えられるだろう。私たちは、やっとそれが何を真に意味するかがわかり始めて来たところだ。そして女も男も、大多数が平等の概念を掲げるに至っている。

平等は以前は四〇歳以下の若い女性の看板だったが、この二年間のインフレで働きに出る女性がふえ、ERAの要求は四、五〇代の女性にも及ぶようになった。



しかし私たちはまだ平等を得ていない。合衆国は後進国になりつつあり、平等な権利は要らないという反動的な声もあり政治家たちは（残念なことに、そのほとんどが男性だが）E R A獲得に十分尽力していない。

次の段階では、平等と同時に、女性も喜びと責任をもって子どもを持つことを選択できるようにすることに焦点をあてるべきだが、このためには、仕事と家族を男女平等の視点から立て直すことが必要である。

わが国の二大政党の一つである共和党は、E R Aを支持しないことを決定したが、家庭に反するというのがその理由である。彼らは依然として、家族を一つの単位と考えている。そこではママが主婦で、パパは稼ぎ手、そして二人の子どもが想定されているが、私はこれを「認可されたよい家庭」と呼んでいる。実際には合衆国の家庭のわずか七％がこれに合致するだけで、九三％は全く新しい家族の形態をとっている。一五％の家庭では子どもを望まない。また子どものいる家庭でも、大部分の母親は、主婦であると

同時に稼ぎ手になっている。

片親の家族も急増した。老若にかかわらず同棲家族もふえた。不幸にも一人で暮らし、愛や親密さを求めている者もいる。その大部分は未亡人か離婚者で、五〇歳以上の者が多い。男性は女性よりも平均一〇歳若く死亡している。

米国家政学会は、家族を、「二人またはそれ以上の人が資産を共有し、決定の責任を共にわかし、価値や目標を同じくし、互いに心身をゆだねるもの」と定義しているが、こうした家族には、血のつながりや結婚などと無関係なものもある。

女性の平等に基づいた新しい家族が要求されている今日、一つの新しい問題が起きている。選択の余地がないために子どもを産む時期をのがしている女性たちの存在である。インフレにより、一家庭に二収入源が要求されているのに、わが国では両親の、または母親あるいは父親に対する有給の育児休暇について十分な政策がない。女性の再就職の保障もない。女性が専門職について責任のある地位に昇進する場合、その生活パターンは男性と同じものになる。医学を学ぶ女性が、

二四時間の病院実習を必要とするときでも、男性の観点からだけ考えられてきた。

男も親としての責任を分担してこそ、平等は可能となる。男が育児を分担するとき、託児所の必要性を、男も共に掲げることになるだろう。家族という問題を新しい視点で考えない限り、平等を掲げて、女性とは相変わらず二倍の仕事をし、男は足台に足をのせて、テレビを見ていることになるだろう。女性を経済的単位として見る限り、情況は変わらない。平等を得るためには、法律上の平等だけではなくではない。性差別に反対する教育や育児をわかしあう教育が必要である。家族の存続と将来のために、平等のための運動を続ける必要があると私は考えている。わが国の女性は、家族を考慮しなかったために、参政権を得たのち後退した。多くの経済的理由から女性は働かなければならないが、家族もまた大切である。前進のためには、男性も仲間に加えないければならない。平等・発展・平和に関する問題は、これまで女性の手で進められて来たが、次の段階では、男性とのパートナーシップが必要である。



# リポート 外国人主催のワークシヨップから

フォーラムのワークシヨップは、コペンハーゲン大学、アマー・センターを中心に、多くの教室で連日開催された。内容やレベルはまちまちだったが、周到な準備を重ねた、興味深いものも少なくなかった。そのいくつかを紹介する。

## 女性の性に対する抑圧と搾取

主催 キヤサリン・パリ

大石 まゆみ

コペンハーゲンでの民間会議では、さまざまな分科会がもたれた。出席したい分科会と、しなければならぬ分科会が同時だったり、その他の理由で、実際に出席できたのは五―六種類だった。その中で最も深い印象を受けたのが、社会学者であり、フェミニストであるキヤサリン・パリ（アメリカ人）の主催した「女性の国際的人身売買」というテーマの分

科会だった。それは私にとって、この分科会に出会えただけでコペンハーゲンにまで来た意味は十分ある、と思わせるものだった。

民間会議の会場となったコペンハーゲン大学の構内は迷路（？）になっており、目的の分科会にたどり着くまで必要以上に時間がかかり、運よくたどり着いても、部屋や分科会そのものが変更ということもしばしばだった。そんなわけで、私が着いたころはすでに満員の人が集まっており、会も始まっていた。何とか席をみつけて座り、彼女の話に耳をかたむけた。真剣さと熱意、自分の専門だという慣れきったところがない新鮮な態度、そして彼女の聰明さに私は数分間で打たれてしまった。彼女の取り組んでいる「女性の性に対する抑圧と搾取」というテーマは、こ

れまで公の場で正面切つてとり上げられることのなかった問題ではないだろうか。不愉快なことだと眉をひそめたり、イヤなことだとため息をつくだけで終わった、あるいは原因や責任は女性の側にこそある、というようなすりかえが行なわれてきた。それに対し彼女は、人々はいとも簡単に「売春婦に転落した」と表現するが、見ていて、何となく自然に転落してしまつた、などということがあるだろうか？ 密輸される女性が、果たして自ら密輸業者のもとに行つて密輸してくれと頼むだろうか？ と問いかけていた。私たちは、誰が誰に対して何をするのかをはっきり捉えなければならぬと思う。パリのある区域には、一晩に一人の女性が八〇―一二〇人の男を相手にしなければならぬ売春宿がある、という話は、

私に「従軍慰安婦」の話を思い出させた。

このような女性の悪用は、何も過去のことではなく、現在の私たちの世界に起こっている例の一つにすぎない、ということとを彼女の話は提示していた。話が一段落したところで、トルコから来ていた女性が、この問題を考える時には、性的な拷問を受けている女性政治犯にもぜひ目を向けてほしいと訴えていた。また、スウェーデンの女性からは、スウェーデンでは売る側の女ではなく、買う側の男を罰する法律をつくらうとしている、との報告もあり、会場から拍手を受けていた。

この意見に対しては、また別の分科会で、「買う側を罰することは脅迫行為をはびこらせることになる」という反論も出た。

私はこのようなやりとりを聞いていて、法的な論議に陥ってしまうのは危険ではないかと思った。なぜなら、男の側に女の性は「搾取」できるものというイデオロギーが強力にある限り、どんな規則も結局は無力だと思ふからだ。

性的搾取とは何もハーレムに売られる女たちや、売春を強制される女たち、女性政治犯、というような人々に限られた

ことではない。もっと私たちの身近にあるもの、組織された買春観光にはじまり、ポルノ・強姦・トルコ風呂、あらゆる種類の週刊誌・スポーツ新聞等にもみられる

劇画、マスコミ・広告業界の、女性の体を売り物にした印刷物の中にも根をはっているものだとみるべきではないか。

日常的にはこれらに縁がなく暮らしている人でも、時と状況が変われば、女である限りその対象からはずされることはないのではないか。私たち女がこの「搾取される性」から自らを解放するには、まず男の性イデオロギーを変えていくことであり、「売買されるものとしての性」を女たちが拒否していくことだと思ふ。それには女性解放運動の課題として、雇用・教育・健康などのテーマと同じく、性的搾取の問題にも意識的に取り組まなければならないと思ふ。キヤシーの言うように、それはフェミニズムの核心に触れることであり、それ自体にスポットを当てるべきだと思ふ。従来よく言われてきたように、女性に雇用の機会がふえれば自動的に売春はなくなる

とみるのは、社会主義革命により女性問題

は自動的に解決されるとみるのと同じく、甘いと思ふ。

この十年来、フェミニズムの高まりとともに女性の側からの性のあり方（セクシュアリティ：Sexuality）についての議論も盛んになり、これまでの男の側からの女に対する一方的な性の決めつけについては徐々に神話がくずれてきていると思ふ。しかしこの性的搾取については、人間の最恥部に触れる問題として、隠されてきた。また、搾取を搾取としてみられない社会通念に慣らされてしまっている。それだけにこの困難な問題に精力的に取り組んでいる彼女の姿に感動させられたと同時に、その分科会を埋めた多くの女性たちからも、この問題に寄せる関心の深さと真剣さが伝わってきて心強さを感じた。

今回のフォーラムをきっかけに、売春も含めたあらゆる性的搾取に取り組むための国際的ネットワーク作りが行なわれたことは、ひとつの始まりであり、より多くの女たちがこの問題に目を向けてほしいと切に願う。

「女性解放とは、女が自らの性に危険を感じ

じずに夜道を一人で歩けるようになることだ」と言ったキャッシーの言葉が、今もあざやかに私の耳に残っている。

## 教科書の中の性差別

主催 大学婦人協会(アメリカ)

山口のり子

アメリカの大学婦人協会が主催の、この分科会のテーマにひかれて教室をのぞいてみた。幾人かの男性を含めて参加者は四、五〇名。ふたりの女性がスライドを見せながら説明していった。彼女たちが、何か国かの絵本や教科書を調査してみたら、ステレオタイプの男女が出てきたとのこと。つまり女の子は常に怖がりで控えめで柔順、という具合に描かれており、インドの本には女の姿さえ出てこないという。幼児や小学生がこういう本を見て育つと大きな影響がある、と前置きし、アメリカでの例を紹介した。女の子

は常に臆病として描いている例として、『マークは妹をおどかさうとして蛇を見せると、妹は母に助けを求めて叫んだ。母も同じように叫んで逃げ回った』とか、動物を描くとき、大きくて強いものは♂で、小さくて弱いものは♀と呼んでいるし、また家事は必ず女の仕事として固定化して描かれていたという具合だ。まさに男中心の描き方だ、と説明した。

以前「行動する会」の教科書の中の差別を考える集会に参加し、日本の教科書のひどさを知っていたが、彼女たちによって紹介されたアメリカの例は、まさに日本のものと変わらず、これがウーマン・リブのアメリカの実態か、と驚いてしまった。しかしそれに対する彼女たちのカリフォルニア州での活発な運動や、大きな成果について話を聞き、ホッとするとら感心するやらだった。

全米で最大の人口をもつカリフォルニア州は、他州が毎年四種類の教科書を選ぶところを二五種類も選んでいるとのこと。そのため女たちが運動を繰りひろげ、政治家たちに圧力をかけ、教科書を選ぶ際の基準となる法律を一九七四年に作

せたということだ。そしてその法律や、それによって選ばれた教科書を、他州も無視できなくなり、全般的に差別が少なくなってきたという。教育制度や、教科書認定の仕組みがちがうとはいえ、さすが行動する女性の国、アメリカだ。その法律は教科書を選ぶ際の七つの基準を定めたもので、①固定化を排除したもの。②男女の登場場面や挿絵の比率が平等であること。③問題提起やその解決が男女平等に扱われていること。④体力や勇気や力、また成功や失敗を描写するとき、男女のバランスのとれた扱いをすること。⑤男女の役割が平等に描かれていること。⑥女性の自伝ものせてあること。⑦性差別的な言葉が出てこないこと。というものである。

この法律ができた結果改良された例として、一九六六年のある教科書には、男性の職業が二六種類書かれてあるのに対し、女性の職業は教師や看護婦、司書だけだったのが、一九七六年には、男性が三六種類に対し、女性が二六種類に増え、しかも伝統的に女の職業ではないとされていたもの、たとえば宇宙飛行士とか、

市長などが登場してきたとのことだ。また一九七七年版のものには、母親と父親が一緒に買物や家事をしている様子が描かれていた。また一九七三年版では、登場するのがほとんど男の子だったのが、一九七七年版になると、男女のバランスがとれてきたとのことだった。

ふたりの主催者は結論として、教科書も男中心が少しづつ変わりつつあると評価していたが、カリフォルニア州の七つの基準の中でも特に、⑤の役割を平等に描くという点、つまり男性が家事育児に参加している描き方が足りなくて不満足であり、運動をさらに進めていかななくてはならないと結んだ。

その後質疑に入ったが、他国の人々もこの問題を抱えているはずであり、彼女たちの運動の仕方についてなどいろいろな質問が時間いっぱいまで続けられた。

私も二歳の息子に、母親がエプロンをかけてかがいがいしく働いている横で、父親がパイプをくわえて座っているような絵が描いてある本だけは、せめて買ひ与えないようにしているが、そんな自衛は知れたものかもしれない。家の中の役

割構造を変えていくとともに、教科書の監視にも目を広げていきたいと思う。

## 働く婦人の保育システム

主催 ユニセフ

谷 合 規 子

ユニセフの主催した「働く婦人の保育システム」に首をつつこんだのは、政府会議のほうは女の問題そっちのけと報道されていたので、そのむこうをはってずばり女の問題を討論しなかったからだ。

こじんまりした教室に机を四角に並べて、二、三十人の女が顔を向けあい、すでに話は始まっていた。

「育児の責任は親にもあると思いますが、両親が仕事をすることだって不可欠。どうしても施設作りを考えなければ」

「あなたの意見に反対する人はいないでしょうが、実際に文化や伝統の異なるそれぞれの国での実情はどうなっているのです

よう」と司会者らしい人。

「同じ国だって、農村地帯と都市ではかなり違いますから」

肌の色も黒・白・黄色とバラエティに富み、国籍も様々なようだが、発言のさしいちいち国名を名乗るほど形式ばっていないので、どこの国の人かわからない。黒人だからアフリカかと思えばU・S・Aと胸に書いてあったり、日本人そっくりのハワイ女性もいたりして、姿形だけで国名を判断するのはむずかしい。

「男もファイフティ・ファイフティで子育てをし、いつでも立ち場が替えられるのが理想ですが、実際はむずかしいですね。責任はいつも女のほうにあつて、抗議すると、『昔から女がやる』と決まってるんだ」なんて言うのよ」と黒人女性。

「何年前までは、あなたたちと同じでしたよ」と別の人。スウェーデン人だとのこと。

バン格拉デシユの女は、

「学校は科学ばかりが重要と思って、育児についての教育をしないのは問題。男の育児についてですが、父親は、子どもがさわぐとなぐったりするので、子どもに

とつては母親に育てられたほうが幸せみたい」と発言。

「私の国では、保育施設作りと同時に、両親に育児のための教育もしますよ」

「ところで、子どもって一体どれだけ公共施設で育てられるものでしょうか」

「子どもを育てる責任がどこにあるかという問題とも関係ありますね」

「コミュニケーションでしょ」

「それは問題だと思います」

井戸端会議風のこの討論は、一つの方角に煮つまつたわけではないが、

「それにしても、世界中の女がこうして育児のことを一緒に話し合えるなんて奇跡的！」とアフリカ女性の感激もあり、

定刻にピタリと終わった。

会場には、乳母車に赤ちゃんを乗せた若い母親。六、七歳の少女連れの母親もいた。赤ちゃんがちよつと声をたてるとみんな暖かい視線を向ける。他の会場では少しの騒音でも顔をしかめてシーシーと制止する光景を見たので、対照的で印象に残っている。途中で泣き出した赤ちゃんを、母親とは肌の色の違う女が慣れた手つきで抱きあげてドアの外へ連れ出

した。しばらくして眠った赤ちゃんを抱いて彼女は戻ってきたが、この間、母親のほうは熱心に討論に耳を傾けていた。むずかしい理屈ぬきに、女の連帯がここにはあった。

討論を終えて、乳母車を押して部屋を出ていく彼女に声をかけた。胸の名札はスウェーデン・産後五か月で、まもなく出産休暇が終わるというのに、子どもをみてくれるところがない。仕事をやめなければならぬかもしれないのでこのテーマは私のためにあつたようなもの、と彼女は話す。

わが全身にしみこんでいるスウェーデン神話を総動員すればするほど彼女の話は理解しがたい。英語のヒアリングを間違えたのではと何回もしつこく尋ねた。そしてスウェーデンでも決して保育所が需要を満たしているわけではないことがわかってきた。

会議のあと訪れたスウェーデンの現地で、彼女の証言が正しかったことが判明するのだが、ストックホルムの人々はみなバカンスで施設見学といつても無人の建物しかない、と日本を発つ前に聞かされ

ていたのに、保育園はバカンス洩れの子どもたちが元気に遊んでいたし、何人もの子どもが希望しても入園できない実態も聞かされた。

性別役割分業ならぬ国別役割分業のごとくスウェーデンといえば福祉の充実した面しか強調されない日本の情報には問題がある。

ところで女の会議に託児室がないのは、手落ちなのか、あるいは女・子どもとセツトされてきた歴史への抵抗からなのか。その後会議場の廊下に「なぜ、託児所を作らないの」という抗議のポスターを見かけ、さらに数日後、民間会議の受付に「託児所あります。〇〇号室、保育者募集」のポスターを見かけた。

まったく偶然だが、会議場から帰るとき、路線バスで、三歳ぐらいの男の子を連れた父親と隣り合わせた。

「会議の託児所で保父役を引き受けてね。朝から一日大変たいへん。息子の世話だっていつもしているわけじゃないのに、今日はよその子も一緒にめんどろ見たんですから。女房？ 彼女は会議のほうに参加しますよ。ばくはちようどバケイ

ジョンだったから」と鼻の頭に汗がふき出し、頭からゆげが立つほど上気した顔で早口でしゃべってきた。いかにもやっただという満足感（筆者の願望も混じった主観的観察だが）がからだ中にあふれていて、民間会議の舞台裏をかいまみた感じがした。

それにしても、女の解放の鍵を握る「保育」問題を討論するワークショップは、老人問題に比べればずっと少なかったし、託児所についての配慮が最初からなされていなかった事実をどう解釈すべきか、約束の枚数も過ぎてしまったので別の機会に考えてみたい。

## インドにおける女性の現状

主催 マリア・M・

マスカレニアス

河上友子

無数にあるワークショップの一つ、インドのマリア・ミニョン・マスカレニア

ス博士——とても人なつこく、皆にマリア、マリアと呼ばれていた人が一人で開いたワークショップ「インドにおける女性の現状」に、誘われるまま、なにげなく出席して、大きな衝撃を受けました。鏡にうつった自分の姿を見せられた思いでした。

インドの妻たちが自分の役割を忠実に果たすことによつて、自分の命を縮め、娘たちを見殺しにしているという事実。現実の数字に現われているのです。インドでは現在でも平均寿命が男性より女性の方が三歳も低いそうです（男性五五歳、女性五二歳）。

宗教や伝統的な家庭のあり方が女性にそうさせているのは事実ですが、實際手を下しているのは女性自身なのです。例えば、子どもが病気になる（栄養状態が悪いのでよく病気になる）、男の子ならなんとか病院につれていったり、治療するが、女の子なら放っておかれる。その結果、女の子は十代前半までに、ほとんどが死亡するという。男の子のいない母親は一人前とは認められないから男の子だけは大事にするのだそうです。

私のまわりの専業主婦をみまわしても、「妻の鑑」のような人が多い。家庭第一で、男の子を生活不能者に仕立て上げ、女の子の才能の芽をつみとってしまつても、本人は一生懸命母親としての役目を果たしているつもりです。また、妻として自分さえがまんすればと、夫を買春観光に送り出せば、韓国やインドネシアなどの東南アジアの女たちはどうなるのだろうか。そして「妻として、家庭円満のために、黙認しているのです」と言ったら、東南アジアの人たちは納得するだろうか。現に、〈あごろ〉のワークショップの時にも「日本の母親はどんな男の子の育て方をしているのですか」とつめよられ、かえす言葉もなかった。

文盲の女性（八〇%以上）の役割意識がインドの人たちの寿命を決定しているのは明らかです。同じことが、日本の男性中心の社会構造と私たちの妻の役割意識との関係にも言えるのではないでしょうか。

男を教育するのは個人を教育することにとどまるが、女を教育するのは家族を教育すること。だから女の意識を変える

ことが社会を変えていくことになるので  
すとマリアは言っていました。

フォーラムで気になったこと。それは  
託児を考慮していなかったことです。あ  
とから、参加者の強い要求によって設け  
られたようですが、人間生活の活動の中  
で、衣食住と同じように不可欠のことが  
育児であると思います。基本的な生活面  
も社会参加もトータルな人間としてやっ  
ていこうというのが女性解放の方向だと  
思うのですが、それを話し合う集まりに  
宿舍と食堂だけでは、子育て最中で預け  
る先もない人たちは参加するなというこ  
とではないかという気がしました。

### ●平和のための教育

### ●平和のための文化交流は いかにあるべきか

主催 ユニセフ

船橋 邦子

この二つの分科会のタイトルは、使わ

れている英語の単語こそ違え、共に「平  
和のための教育」が内容だった。しかし  
おもしろいことにこの二つは「平和」と  
いう概念の定義の仕方から異なり、した  
がって「平和のための教育」のあり方に  
ついての方法論も、異なるものであった。  
「平和のための教育」

コペンハーゲン到着の翌日七月二日  
出席したこれは、米国のクエーカー教徒  
であり、現在ワルシャワ大学のアメリカ  
研究センター（一九八一年までの予定）  
に勤務している女性を中心として、黒板  
には大きく次の様に記されていた。

「私は、私の子どもの生まれたその日か  
ら戦争と飢え、人権に反するすべてのもの  
と闘う責任をとることを自らに誓った」戦  
争にはなく平和のために命をかけよう」  
優しそうな顔つきの四十半ばに見える  
彼女が自ら黒板に書いたであろうその言  
葉に私は感動した。

平和を伝える手段を具体的に何に求め  
るかという提案をし、彼女自身ポスター  
作り、スライド作製、宣伝用バッチの作  
製及び領布等をしているといい、そのポ  
スターは分科会の部屋にもはられていた。

彼女は今後の新しい平和の力となるも  
ととして、子どもの平和意識の重要性を  
説いたあと、「平和と自由のための女性の  
国際リーダー」の中の平和教育委員会の  
作成したスライドを参加者に見せた。

このスライドは久しく見る機会のなか  
ったあの広島の被爆児を中心とした日本  
語の文字入りのものであった。これらの  
スライドを、アメリカの子どもたちに平  
和を伝える手段としてみせている。私は  
少し当惑した。世界中で唯一の被爆国で  
ある日本で、今この様な教材が子どもた  
ちの前に平和を伝える手段としてどの程  
度用いられているであろうか。

被爆国日本という認識は彼女たちの頭  
には経済大国日本というイメージ以上に  
大きなものとして位置づけられている様  
であった。

小学校の先生という西独の若い女性は  
自国で女性だけの平和運動―彼らのそれ  
は反原子力核兵器廃絶に集約されている  
様だが―を進め、最近、ヨーロッパのオラ  
ンダ、デンマーク、ノルウェー、スウェ  
ーデン等の国々の女性のグループと連帯  
した運動をとネットワークを作ったと報

告。私は日本からの参加者として、日本の現状を次の様に報告した。

「日本では日常的、表面的には戦争を知らない子どもたち（私もその一人）が成長し、平和ムードがただよっている一方、防衛力増強——ついに核武装論まで登場している。学校の教育は反戦よりむしろ愛国心を育てる教育に変わりつつあり、特に社会の教科書はこの三十年間に大きく変化した」

愛国心という英語を私が発言したとき、司会者の女性には明らかにげんそうな顔をした。

もう一度同じ発言をするが、どうもピントとこないらしい。仕方なくファシズムに陥る危険性のあるナショナリズムという、わかった様なわからない様な説明でやっと納得してくれた。

そういわれてみればこういう「愛国心」なる概念は日本以外はヨーロッパやアメリカの人間には通じないだろうとは後に推測できた。日本のファシズムの成立、それを支える日本人の精神構造は全くの日本固有のものからくることを考えても明らかである。

### 「平和のための文化交流」

七月二二日の「平和のための文化交流はいかにあるべきか」は三十人ほどの出席者でユニセフの委員の人が中心となり、討論がすすめられた。この分科会では、「平和」は「調和のとれた行動」と定義される。

まず第一に平和教育のあり方を子どもたちの発達段階に分類し、その成長段階による理解の範囲を検討。次に子ども同士の世界での平和状況をどの様に創り出せるのか、またどの程度個人の責任として子どもの中の心に入りこめるのか、個として人格をもった子ども達の心の領域に入りこめるか、否か、などを討論。

戦争の悲惨さを知らせ、それを否定する、その反対概念としての平和しかあまり頭になく、平和教育といえは、まず戦争を起こさないことという消極的な考え方しかしたことのない私にとって、この積極的な平和の創造という論争は抽象的すぎる討論、歴史観、経済分析の欠如といういくつかの疑問を残しながらも非常に興味深いものであった。

（婦人民主新聞に掲載）

### 女性と出版業

主催 キヴィンデ・ツヴァイク

斎藤 千代

フォーラムに際して「女性出版社会議」を開きたいという手紙を受け取ったのは三月のこと。申し込むと、折り返し心あたたまる手紙が送られてきた。主催はデンマークのフェミニスト出版社キヴィンデ・ツヴァイク（「女性出版」社）。スケジュールは七月二二日—二五日の五日間、宿所がなければ民宿の用意もあるという。同業者の家で一夜ぐらいいは語り明かしたい気持ちもあったので、出席通知とともに一夜の宿を依頼した。

二度目に送られてきたのは二通の手紙だった。一通は五日間の会議のスケジュールなどの知らせ。もう一通は民宿の主から、どちらもしスターフッドにあふれたもの。出発前にさらに送られて来た三

度目の手紙は、出席者リスト、討論のレジュメなどが記され、末尾に手書きで、「夏といつてもかなり寒いので、着る物にご注意を」と書き添えられたことばは、書き手のやさしさを偲ばせた。

会場は未定とあり、メキシコでそうだったように、ホテルの一室か何かで、フォーラムと並行して会議が開かれるものと想像しながら、二日朝、早目にキウインデ・ツヴァイク社を訪れた。

中央駅から徒歩五分たらずのバス道路に面した同社は、ちょうどBOCくらいの大きさ。さまざまな伝言や情報に壁にピンナップされているところなども感じが似ている。

さて、会場はこちら、と案内されたのは警察学校の三階で、「出版社会議」と名乗っているものの、フォーラムのワークショップの一つとして組み込まれていることを当日になって知った次第だった。

「女性と出版」については、渥美育子さんが参加された、もっと大規模な会議もあったとあとで聞いたが、こちらは小規模のフェミニスト出版社同士が本音で語り合おうという趣旨で、ドアには「出版

業者に限る」と貼り紙されて会議は非公開。前もって出席者リストなどが送られて来た意味がだんだんわかってきた。

まず自己紹介。どんな規模でどんなものを出しており、いま何が問題かなど、

地元デンマークから四社、アメリカから二社、その他、フランス、西独、イギリス、オーストリー、イタリー、インドなど各国からの参加があり、BOCと同じような女だけの小さな出版社が、どこも経済的に苦勞しながらも、女の自主的な情報伝達のために悪戦苦闘していることが口々に語られた。基本的には何らかのグループ活動を背景に、出版部門を受け持っているところが多く、「あーら」と

「BOC」の関係に似ている。しかし細かい部分では、同じデンマークの中でも各社各様で、たとえば主催のキウインデ・ツヴァイクは、七八年創立で歴史が浅いせいもあるが、まだ職業としては未確立、八名の専従は全員無給、他の職業（学校講師）などで生活、余暇を出版活動にあてているのに対し、フンセ・トウリュック「めんどり出版」は七三年に主婦グループから出発、主婦の視点でまとめた女性

の役割についての最初の本は四千部を三週間で売る好調、といった具合。左翼系出版社の援助で七四年に出発したミュンヘンの「女性出版」は、最初の本に成功、借金をすぐ返したものの、社員の月給は月五、六万というところ。また、どこからも援助を受けず、千部程度を細々と出しているスペインの「女性サロン社」は、今後ともつぶれない程度にやるといった中で、レスビアン系の出版物などを出して大当たりしているマサチューセッツの「ペルセフォン出版」の成功話には、みんなが身を乗り出して聞き入ったが、初版二万部のアメリカ、四千部のデンマークなど、大多数の発行が可能な国の背景は、結局、リブ人口の層の厚さということのように思われた。

なぜ女性の出版社でなければならぬのか、なぜフェミニズムの本を出すのか、レスビアニズムをどうとらえるかといった熱っぽい議論のあとで、具体的に最も関心を集めたのは、どうすれば経費を安定させていけるかという話だった。著作権料や取次店の手数料は不当ではないかと、各国の実情が語られたが、日本のよ

うに二大取次店が独占的に支配している国はどこにもなく、その取扱料金の高さも群を抜いていて、皆が驚きあきれていた。私は、フェミニスト出版社同士ではせめて著作権料を安くし、相互に便宜をはかりたいと提案したが、これはすぐ受け入れられた。

出版物は発行部数がふえれば単価が安くなり、売れ行きもふえるという循環をとるため、国際的な刊行物にして部数をふやそうという提唱があり、欧米諸国の人々はすぐに同意したが、途中でハツとしたように、「では少数語の国はどうなるの」と、インド人と私の顔を見る。独・伊・仏・西など、ことばは違っているが、基本的に転換・ほん訳しやすいヨーロッパのことばと、日本語のちがいを、会議中ずつと痛感していたが、またも思い知って、ニューデリーから来たマシユバルさんと顔を見合わせた。

国際出版の名案は、しかし「その本がほんとうによい本かどうか、誰がどのよう

という話がまとまり、決議文にそれぞれが署名して公式会議に提出した。

決議文には、途中から参加したフランスの「ケスチオン・フェミニスト」誌の執筆同人からの、フランスの著名女性誌『デ・ファム』告発も盛り込まれ、この内幕話は、ベラ・センターの記者会見に集まった欧米の記者たちを驚かせたが、日本人の記者は、残念ながら、この席には一人も顔が見られなかった。

なお、会議最終日は、フォーラム閉会后だったため、ウイメンズ・ハウスを会場とした。

五日間連続の会議、しかも似たような事情のフェミニスト出版社同士とあって、終わりごろには、お互いに百年の知巳のように打ちとけ、最終日の夜の打ち上げパーティーには、それぞれ固く抱き合って、再会を約した。

国際的ネットワークづくりは、その後着々実行に移り、各国からの情報が続々寄せられている。十一月には、サンジェゴで、世界会議の報告書をつくる会議が行なわれる予定である。

## 女 性 学

主催 女性学インタナショナル

藤 枝 渥 子

コペンハーゲンのNGOフォーラムでは、その一環として女性学インタナショナル Women's Studies International も開かれ、運営委員の一員として私も出席した。この会合は世界各地、各国にいる女性学従事者の、事実上はじめての国際的出会いの場、個人的・組織的な結びつきをつくる場となり、数多くのテーマのもとで、連日、情報・経験・意見の交流が熱心に行なわれた。

米国で口火を切った女性学は、その後世界の各地域、各国で急速に発展しており、そうした背景があればこそ、今回の女性学インタナショナルも開かれたわけなのだが、またそうした状況のゆえに、女性学とはなにか、その目標はなにか、といったようなことがあらためて問い直

される事態も生じている。

女性学とはなにかをごく簡略に言えば、社会的・文化的に課せられている跋行的な性別役割分担の克服を課題としてもつ、女性による（男性を排除するものではないが、基本的な担い手は女性）女性のための教育と研究をさし、それは平等を求める女性運動の一翼を担う教育運動であるといつてよいだろう。五月にパリでユネスコ主催のもとに開かれた「女性に関連する教育と研究」専門家会議——これが、事実上、コペンの女性学インタナショナルの予備会議の性格をもった——は、女性学の目標について、つぎの九項目をあげている。少し長いが、紹介しておくたい。

一、科学的、学問的アプローチを用いて、社会における女性について基本的問題を提起する。

二、女性と社会変革に関連する研究テーマへの関心と支持を促す。

三、女性の地位の社会的・政治的および文化的背景と、それらが女性の地位に与える影響を調べる。

四、女性の歴史、諸条件、変化するニ

ズの研究の不断の評価を行なう。

五、社会における女性の歴史的また現代の役割について理解を促す。

六、人類の成果に女性が貢献してきたことが、新たに、また全面的に認められるよう促す。

七、女性学講座として、であれ、あるいは女性の観点到に正当な場を与えるような形の講座であれ、女性と性別（gender）の諸問題が、差別を含まずに、カリキュラムの一環として学習されるよう保証する。

八、女性がその権利を行使できるような条件を整備することにより、それらの権利を拡大、強化する。

九、人種・性・年齢・言語・宗教の別など、あらゆる個人の平等を保障し、かくして社会の変革に資する。

\* \* \*

さて、女性学インタナショナルは、公開講座的な形のセミナー四つと、最終的には十三、四にのぼった、より小規模のラウンドテーブルの二本建て構成で進められた。私はセミナーの一つでパネリストとなり、二つのラウンドテーブルで発

題者となった。

女性学の研究と教育といつても、ヨーロッパ、アフリカ、アジアなど、歴史的経験の相違からくる地域ごとの相違、また同一地域内でも国ごとの相違は大きい。北米でも米国とカナダは違っているし、西欧でも修士号を出す大学課程もある英国と、バルセロナ大学を中心によやく動きのはじまったスペインとでは大きく違っている……といったぐあいである。

連日、さまざまなテーマのもとで討議や意見交流を重ねた女性学インタナショナルの全般にわたって具体的にどういう話し合いが行なわれたかを書くことは不可能である。そこで、ここでは今回のラウンドテーブルのテーマのひとつ「女性にかんする、女性のための研究センター」を中心に報告することにした。

研究・資料センターが女性学の教育や研究を促進するうえで重要な役割をもつことはあらためていうまでもない。女性学センターがもつとも発展しているのは、米国であり、大学その他の設置母体をもつものもあれば、独立して存在するものもある。フェミニズムの運動の幅が広く

層も厚いことがそうした条件をもたらした最大の要因ではあるけれども、フォード、ロックフェラーなどの財団等から得られる助成金などが他の国ぐにとくらべてケタはずれに大きいことも米国における女性学発展の一因になっていることも見逃すことはできない。

ラウンドテーブルでは、座長になった米ウエルズリー女子大学のマツキンツシュさんが、まず同大学の研究センター設立の経過を報告した。それによると、学長がフェミニストで、いち早く研究センター設立の必要を感じ、教授会に提案した。ところが男女半々からなる教授会はその提案を反対多数で否決してしまった。そこで学長は独自の権限を行使して、連邦・州政府、その他各種財団等に働きかけ、資金を導入して学内に設立してしまつたという。現在、いくつかのプロジエクトが進行中だが、フェミニストの立場を前面に押しだすと、助成金等、学外資金が得られにくくなる、より保守的な外部の資金援助機関とどう折り合いをつけるかが常に課題であると語っていた。この点に関連して、主として米国人研究者

たちから、第三世界諸国の産児調節、家族計画等を扱う場合は助成金が出やすいが、米国の「国策」にそわないテーマの研究はなおざりにされる傾向があるという指摘があつた。

英国からは女性研究資料センター(W R R C)成立の経過が報告された。ひとりの女性小説家と、それに協力した一部の社会学者の個人的熱意と献身と努力によつてはじまつたW R R Cは、まさに無から有をうみだし、現在では公益法人資格をとり、会費と助成金に支えられて、さまざまなサービスの業務を行なっている。ここには女性学関係の論文等がすべて集められてカードに整理され、会員の鞭撻をはかつている。

このほか、政府からもどこからも援助を期待できないアルゼンチンで、主として社会科学関係の研究者が集まつて私設のセンターをつくつた例、フェミニスト間の激しいイデオロギー対立のため学内にセンターをつくる計画がふぶれてしまつた西ベルリン自由大学の例など数多くの実例や問題点が報告された。

また、個人レベルでは大学等の専任教

員への門戸が狭いため、生活の安定が保障されにくいことが研究の発展を妨げている実例なども語り合われ、西ドイツ、デンマークなどでは、失業給付やその他社会福祉の給付で生活をたてながら研究をつづけている女性たちの例なども報告された。

アフリカなど第三世界からの出席者は数は少なかつたが、彼女たちの発言はいつもひじょうに印象に残るものだった。このラウンドテーブルでも、ジンバブエの女性の発言はひととき強烈だった。その要旨はつぎのようなことになるだろう。

アフリカの女性が、自分の良心に恥じない研究を行なうためには、少なくとも二重の「抑圧」をかなぐりすてなければならぬ。ひとつは植民地主義的世界観であり、いまひとつは男性支配の中で形成されてきた、客観性に価値をおく学問研究方法に含みこまれていく抑圧的仮定やアプローチである。自分たちが志向するのはアフリカの女性を研究の「対象」としてきた従来の欧米人による欧米人のための研究ではなく、自国民による自国民のための研究であり、研究センタ

である。女性に「かんする」あるいは「ついで」の研究と、女性の「ための」女性と「ともに作業する」研究とは区別されねばならない。

こうした発言を契機に、知識の客観性、主観性をめぐる討論がにぎやかに行なわれ、学問研究それ自体がしばしば抑圧の道具となっている現代に、女性学を通じて、これを解放の道具に変えていくことが今後の課題であるという発言が多く、参加者の共感を呼んだのだった。

## 平和と軍縮

主催 WILPF  
(婦人国際平和自由連盟)

高木 静子

私はWILPFの招請を受け、七月十六、十七両日、それぞれ二時間ずつパネリストとして、「核兵器のない平和な世界を」を訴えました。

招請状がWILPF事務局長から届いたのは五月下旬。私が事務局長をしてい

る大阪市原爆被爆者の会婦人部のカンパと励まして出発を決意、「ヒバクシャ野中さんの像」スライドや爆心地五〇〇メートルで被爆、三五年目に亡くなった三浦一江さんの遺書「ヒロシマ五〇〇メートルの祈り」の英訳本を手に、七月一日朝、コペンハーゲンに着きました。婦人年マークのついた案内窓口があつて、世界会議の開催地らしいとの思いがしました。ひとまず荷物を運び、午後、スイスの活動家ジャネットさんにまずお会いすることになりました。

車で、コペンハーゲン大学、アマガー・センターへ。およそ、大学のイメージとは違い、窓枠や、しきりの壁を赤い色でふち取った建物。正面入口から入ると、各国・各団体の受付が、てんでに並んでいます。「フォーラム・80」の案内をみつめて、私の行くところは?と探しました。NGOフォーラムのテーマごとのパネルと講演のプログラムを見ましたが、一八ある中で「日本」はありません。少しがっかりです。NGOの二四日までの会期中にあるワークショップのテーマはたくさん並んでいます。四〇〇ばかりもあ

ります。WILPFの持つワークショップの一日・一七日のところを見ました。提出されたテーマがどうも変わっている様子です。

この日の午後の「平和とマスメディア」がWILPFのテーマです。ここにジャネットさんがいるはずと、見当をつけて教室を探しました。中で討論の真っ最中、かまわず入り込み、一人一人の顔を確かめますと、ジャネットさんが見つかりました。「おう、タカギサン!」声を出して出て来たジャネットさんと、二年半ぶりの再会で抱き合いました。急には日本語が出て来ないようです。ジャネットさんにお会いして、彼女がスイスから送ったテーマが準備委員会で変えられていたことがわかりました。

第一日のテーマは“The Effects of Atomic Bombings on Women and Families”と提出されていたものが、“Nuclear power and effects on women and children”に、第二日のテーマは“Women Hibakusha Organizing Disarmament and Peace”であったのですが、“Peace education and women in the struggle”

「inst violence」となっていました。原爆の被爆者の存在、ましてヒバクシャという「世界語」は知らなかったのだでしょう。核兵器より、原発事故に関心があるのかも……。これには逆にフアイトがわいてきました。原子力を核兵器におし、テーマを元に戻してがんばることにしました。

第一日（七月十六日）は、映画「一九四五年、広島・長崎」英語版を上映の後、私の被爆体験を語り、婦人の集いの運動を紹介しました。八〇名の参加者が、涙をうかべて聞いてくれました。ヨーロッパ各国の代表、アメリカ・カナダの婦人、アジアでは、フィリピン代表が目立ちました。

### 【質疑応答】

「相談事業というのはどんなことをしているのですか」

いまだに原爆症といわれる病気で苦しんでいる人たちはたくさんいます。その人たちのために病院を紹介したり、生活のしかたについてアドバイスしたりするなど、大阪の相談室だけで、年間約七万件以上の相談を扱っています。相談員と

しては六人が相談室につめています。たとえば、さきに紹介した油絵に描かれた野中フミ子さんは、顔にも手足にもひどいケロイドがありますが、みなさんのために奉仕しています。彼女はそのケロイドのために、雪深い新潟で、日やといの仕事しかすることができませんでした。読んだり書いたりすることも困難でした。

けれども、相談室でがんばるようになってから読み書きも十分できるようになり、大きく成長しました。被爆者としてがんばって運動に参加することは、一人の婦人をりっぱに成長させるのだということが、証明されたのです。

いまでは、一人ひとりの婦人がりっぱに発言できるようになっています。日本に來られたイギリス平和評議会のシェーラ・オークスさんも、「日本の婦人がこんなにはっきりと一人ひとりの体験を発言できるとは思わなかった。日本の婦人運動のすばらしさを感じる」といわれました。

絵かきさんは絵をかくて、音楽家の人は「原爆許すまじ」をはじめ作曲や演奏などで、私たちに協力してくださっています。

ます。

「かかてある折り鶴の旗のことを聞かせてください」

私たちは被爆者をなぐさめ、はげますためによく折り鶴を使います。私たちの平和運動にたいして、一九七〇年、アリス・ハーズ平和記念賞をいただいたのを機に、それを資金にして折り鶴の旗を作りました。その後は私たちの行くところどこにでもこの旗がなびくようになりました。

「各国から戦争反対の意見がいろいろのべられたあとで……」

一般兵器による戦争も、たいそう悲惨な結果になりますが、核戦争では、あの広島の非常に小さい原爆ですら、生きのこった被爆者は三五年たった今も放射能障害で病院を出たり入ったりしているのです。

今日では、その広島型原爆の一三〇万発分の核兵器が貯蔵されています。ひとたび核戦争のボタンがおされたら、その時は生き残ったとしても、放射能によって、時間がたてば全部が死んでしまうということ、およそ「修復」が不可能だと

いうことを私たちがよく自覚して、運動していかなければならないと思っています。(大きい拍手)

【第二日(七月十七日)】は、広島・長崎―原子爆弾の記録―スライドの中から、原子雲の写真はじめ、当時の被害状況写真一〇枚、NHK作成の被爆者自身の描いた絵一〇枚、被爆婦人の集いの活動のカラースライド二〇枚を映写、一枚ずついいねいに、五〇分かけて説明しました。娘が機械を動かしてくれました。そのあと一時間、質問に答え、討論しました。さすが各国の代表です。ベトナムやガイアナの婦人の平和に対する意見、自国の平和運動紹介も堂々としておりました。

#### 【質疑応答】

「スライド説明のなかの『エノラ・ゲイ』について、よくわからなかったのですが？ 機長に責任がないのではありませんか？」

広島に原爆を落とした飛行機には、「エノラ・ゲイ」という名前がつけられていました。その名前は、機長ポール・チベッツのお母さんの名前だったのです。広島島の罪もない人びとを一度に一五万人も

殺した飛行機に母親の名前をつけたことにたいして、私たちは母として深い悲しみを感じますし、こういうことは二度とふたたびおきてはならないと、いつも思っています。

もちろん、機長個人やそのお母さんに原爆投下の責任があるというわけではありません。彼は、自分の爆撃機に積んでいるのが通常爆弾ではなく、原爆だということとは知らされていましたが、原爆がどんな効果をもたらすかについて詳しいことは知らされていませんでした。原爆をつくったのは科学者でし、それを投下するよう命令したのはアメリカ政府ですから、責任はそこにあります。しかし、原爆投下機に母親の名前をつけるということ、を、女としてたいへん残念に思うのです。

「原爆投下は戦争終結のために必要ではなかったのですか？」

一九四五年には、日本が戦争に負けるということはすでに明確になっていましたし、ポツダム宣言も発せられていました。それなのに、アメリカは、広島、長崎に原爆を落としたのです。また、八月

九日のソ連の対日戦参戦の前に急拠広島へ原爆を投下したのは、アメリカのソ連との「冷戦」の最初の大作戦の一つとしてだったのです。

原爆は、ナチスによって追われたユダヤ系の科学者たちが中心になって、ルーズベルト大統領に進言し、ドイツが原爆を製造するかもしれないという可能性に對抗して、製造計画がはじまりました。しかし、ドイツは降服するまで、原爆を完成させられませんでした。ところがドイツの降服よりも早く、ルーズベルトとチャーチルの第二次ケベック会談(一九四四年九月)では日本への原爆使用が決定されていたのです。

ここで思うのは、放射線研究の先覚者であり、ノーベル賞をうけたキュリー夫人が、私の研究は平和のため、医学のために利用するのはいいけれども、決して兵器をつくるのに利用してはならない、と言っていたことです。

「原発について、被爆者は、どう考えられますか？」

核兵器の開発をすすめる、核兵器を製造しながら、その残りがすで原発をつくり、

平和利用と称するのは間違いです。核兵器を廃絶してから、平和利用をすすめるべきです。その際、もちろん、安全性の確立を求めなければなりません。

「アメリカが原爆投下後も悪いことをしたというのは？」

私たちのあびた原子爆弾の被害のことについてはアメリカが、占領政策のなかでブレスコードを指示し、一九四五年の九月一九日から、原爆のいっさいの被害にかんする報道を禁止し、外国にも知らせないようにしました。日本の政府もそれに従ったのです。外国の一般市民が、原爆のおそろしさをよく知らないのは、こういうところにも原因があるのだと思います。

それとも関連しますが、原爆がおとされてから約一か月後の九月九日から一三日に国際赤十字のお医者さんだったジュノー博士が一五トンの医薬品をもって広島入りしました。それは有効でしたが、その後、世界中によびかけて、ヒロシマナガサキに医療品をおくろうというジュノーさんの努力にもかかわらず、アメリカ占領軍と日本政府が協力してその努力

をもおさえてしまい、被爆者はたいへん苦しい思いをし、おとさなくてもよい命まで失うという結果になったのです。

また、いまにいたるも日本政府は、被爆者援護法を制定していません。

「アメリカは、何か一つでも被爆者のためによいことをしなかったのでしょうか」(アメリカ代表が涙を浮かべて)ケロイドのひどい人を「原爆乙女」という名前前でアメリカにつれていき、外科治療をこころみたということはありません。アメリカ政府ではなく、良心的な民間人たちが原爆被爆者のためにつくしてくださいました。たとえばノーマン・カズンズ氏の養女になった人も一人います(アメリカ代表、ほっとした表情でほえむ)。

「核兵器をなくすためにどうすべきだと考えられますか」

去年八月、弁護士さんが集まり、京都で「市民法廷・人間をかせせ」がひらかれました。被爆者が証人として法廷にたつて証言するのです。私たちは、平和に生きる権利を主張しました。「日本国憲法」の前文でも「平和のうちに生存する権利

を有することを確認する」とうたっています。国連第三三回総会では、ポーランドの提案した「生まれながらの平和に生きる権利」が大きくうたわれたことを、みなさんはご存じだろうと思います。私たちは、本当に生きる権利を主張しようと思うのなら、最初に原爆を投下し、あれだけひどい目にあわせたアメリカが、非戦闘員の大量殺りくという国際法違反の兵器を作ったことをまず犯罪としてはつきりさせなければいけないのではないのでしょうか。日本でだけ法廷をひらくのではなく、国際法廷をひらいて、核兵器は国際法違反であるということを明確にすべきだと思います。

核兵器が国際法違反の兵器だということとがまだあまりよくわかっていないのではないのでしょうか。これを世界の大きな世論にしなければならぬと思います。国際法違反の兵器というのは、第二次大戦のときは、毒ガスとダムダム弾でした。核兵器はこれらにくらべると、とてつもなく大きい被害をもたらします。それなのに、その時の条約に核兵器がはいっていなかったからといって、核兵器を国際

法違反といわないということ自体がどうかしているのです。

十時開会、十二時に終わりましたが、立ち去ろうとしない婦人たちが、なおも話しかけて来てくれました。アメリカ婦人が、「充実した本当によい会でした。ありがとう」と言って、名残り惜しそうに部屋を出てゆきました。

オーストリアの婦人が、会場に展示してあったパネル写真を、「国に帰って、運動に役立てたいので、ぜひゆずってください」と、熱心に言われましたので、さしあげました。三〇〇クローネをカンパしてくださいました。(このお金は、また新しいパネル準備のために、一万三〇〇〇円にして、日本原水協にお渡ししました)残っていた婦人たちで記念撮影をして、名残りを惜しみながら別れました。

#### 〔感想とメッセージ〕

核爆発を自ら体験した人の話に深い感銘を受けました。

ノーモア・ヒロシマ・ナガサキのために、あなた方の経験を語りつづけてください。  
(フランス)

非常によい分科会でした。しかし、問題の重要性と出席者に与えた感動から判断して、「平和」パネルでもっと大きくとりあげれば、非常によかったのと思われまふ。パネル演説の選定をするフォーラムの組織者が日本国民の経験に大きな注意を払っていなかったということは不運なことです。

平和への連帯を！

(ガイアナ)

映画にショックを受けました。テレビに戦争ものが出ると、私は見ません。しかし、原爆生き残りの婦人のお話は、私に強い印象を与えました。被爆者と、私たち世界中の者が、原爆と原爆のない世界を目指してがんばりましょう。それが子どもたちのための世界です。皆さんの勇気ある行動を継続されますように！

両頬にキスを！

(オランダ)

ヒバクシャのお話は、いつも感動的です。私はいつも怒りとともに、無力感を覚えます。核兵器反対にたたかうあらゆる団体と活動家は、ヒバクシャの苦痛だ

けではなく、その政治面での活動―その成功・失敗・要求―を強調することが有益だと思えます。

また、反核の国際会議を核保有国のどこか―アメリカ、ドイツ、フランス―で開くべき時だと思えます。

平和を！

(アメリカ)

「ヒロシマ・ナガサキ」は、起こってはならぬことでした。私たちのたたかいは、いくら強めても十分すぎることはありません。

(デンマーク)

すばらしいプログラムでした。平和教育家にとって非常に有効でした。私は、コロラド州立大学で、過去三年間、ヒロシマの子どもに関する本を使っています。私の町では、三年前から「ヒロシマ・デー」の行事が―四の教会やその他の団体の支持で行なわれています。

皆さんの勇気に感謝します。WILPFは、核戦争阻止のために全力をつくします。

(アメリカ)

今日、再び映画をみました。

一九七八年、ジャネット・ブルインさんから「広島・長崎原爆の記録―写真集」を見せられて、涙で何度も胸がつかえながら読んだことがあります。（西ドイツ）

おそろしくて、言葉で言いあらわせません。

私の知る限りでは、これまで原爆について書いていた人は、ロバート・ユングと、ベグナーソン（スウェーデン）、いずれもりっぱなジャーナリストです。

被爆者が、ヒロシマ・ナガサキを世界中の人々に語るために、生きつづけられますように！  
（デンマーク）

非常に勉強になりました。この映画と、被爆者たちがもともとと宣伝活動をするべきだと思います。原爆の原因と結果を、そして軍拡競争の実態を、世界の人々の目の前にさらけ出すために！

核兵器の危険を今後も暴露しつつづけてください。  
（ガイアナ）

このお話を、人々の心に止めておくことが、絶対に必要です。

心から、支援の挨拶をおくりします。毎年、私たちのヒロシマ・デーには平和のデモと教育的な催しを行なっています。

（カナダ）

核兵器、原子力についてよく知っているのに、核軍拡を阻止し得ぬとは……。

我々は破滅の牢獄の囚人であろうか？否、と私は言いたい。（スウェーデン）

映画および高木さんは、NGOフォーラム冒頭のフォーラム・パネルに参加すべきでした。世界中の婦人の大部分は、軍縮と平和をねがい、アメリカの核爆弾（狂気の外交政策）に反対だと信じます。平和と連帯を！

（カナダ）

人類は前進しなければなりません！

私たちは戦争を阻止しなければなりません。アメリカを明確な言葉で断罪すべきです。軍拡、特に核軍拡を阻止するために、實際行動が必要です。

あなたがたの闘いに連帯します。

（ザンビア）

非常に有益、そして、感動的！

将来、積極的、建設的な解決がなされることを期待します。

人に語り難いことを勇気を出して話してくださったことに打たれました。あなたがたの気持ちに少しでも知ることができて感謝します。  
（アメリカ）

戦争の恐怖を知らないすべての人にとってこのお話は、非常に意味があります。戦争が一つの過誤から大きな過誤へと、かに発展していくかを示すものとして、第二次大戦の日米戦は、日本の真珠湾攻撃から始められたのだという事実が触れられるべきだと、アメリカ人として思っています。

人類文化の破滅を防ぐあらゆる努力に對してすべての人々と協力して支持をおくりします。  
（アメリカ）

すばらしいお話、そして印象的な映画でした。討論も非常によかったのですが、もっと時間があればと思いました。

（デンマーク）



# リポート 日本人主催のフークシンヨウツプ

メキシコのトリビューンでは、日本人主催の分科会は、へあごろんの「日本の女性——その過去と現在」一つだけだったが、コペンハーゲンのフォーラムでは六つの分科会を主催した。それぞれの、精いっぱい努力のあとを報告する。

## 買春観光・国籍法分科会

主催 アジアの女たちの会

「アジアの女たちの会」では英文機関紙1—3号（1号—会の成立、アジアの闘う人々、2号—日本の韓国・台湾・東南アジアへの経済侵略、日本の国籍法、3号—韓国・台湾・東南アジアからみた買春観光）を携えて会議に臨んだ。

十日間の民間会議日程中に、私たちはこれまでに取り組んできた買春観光について二回、国籍法について三回の分科会をもつことができた。買春観光について

は、今や日本男性のみに特有なことではなく（といつて彼らが免罪されるわけではなく）は決してないが、ヨーロッパ社会にもみられる現象となり、多方面から深い関心を寄せられた。分科会では、アメリカ人で社会学者のキャサリン・バリー（彼女はまた独自に「女性における国際的人身売買」というテーマの分科会をもった）もまじえて、買春を含めた女性の性的搾取全体を視点においた話し合いが行なわれた。日本男性の買春観光については、結果的には団体という形をとっても個人々人が参加するドイツなどの場合と比べて、同僚同士、友達同士で共に団体を組み、自分の体験を声高に話し合うという奇行が目玉された。また、どのようにツアーが組まれるのかという点にも関心が集まった。私たちは分科会をもつ以外にも、

デンマーク、オランダ、オーストラリア、ノルウェーなどの報道関係者からインタビュを何度となく受けたが、その中でも買春観光は、単に日本男性のモラルの問題ではなく、それを許容している日本女性、そして両者のかかわりの問題であるということ、また、富める国が経済力の勢いにのつて、他のアジアの国々、とりわけ女性たちを侵略することであり、そして日本人の根強いアジア蔑視に起因することでもある、という点を訴えた。

分科会の参加者には、開催地デンマークのフェミニストたち、アメリカ政府の代表で国連の婦人の地位委員会への代表、イギリスの反奴隷協会の代表（男性）、デンマークの麻薬犯罪取締り担当の教育省の高官（男性）、セイロンの売春婦更生施設の責任者、アメリカの売春婦権利擁護

組織、コヨーテの代表、フランスの高名なフェミニスト、スウェーデンの元売春婦で現在はその権利擁護に立ち上がった人などがいたほか、私たちとは異なった目的で参加したと思われるタイの内務省で働くという男性の参加もあった。それぞれの立場の差はありながら、共通の目的——女性が性を通して搾取される状況をなくしていくこと——によって強い連帯感がみなぎっていた。共通の認識として、女性が経済力を身につけ男性と対等の社会的地位をもたなければ、この問題は決して解決されないという点が確認された。当面の問題である売春婦の人間としての権利擁護、長期的には売買春そのものが存在しない社会を創るため、国際連帯を約束してそれぞれの国へ参加者は帰っていった。このような協力の中から国連の本会議での「売春、人身売買、強姦などを通しての女性の搾取をやめさせる」という決議を通す努力が生まれたことは特筆に値すると思う。この際、民間人とアメリカ、フランス、ドミニカ、キューバなどの代表が協力したことは感銘深かった。

準備していた英文機関誌に対しては「これはすばらしい仕事だ。こういうものこそ私たちは必要としている」といった最大級の賛辞を送ってくれた白人女性もいた。特に三号はコペンハーゲンに間に合うよう時間的に余裕のないところを徹夜を重ねて作成したもので、売れ行きのよさは会員たちの苦勞と、そして、コペンまで運ぶのを助けてくれた他の女性たちの努力に十分報いるものだった。またこの英文機関誌に対しては、全く別の反応もあったことを記しておきたい。会議もあと一日という二十三日の午前中、会議場の人通りの中心でパンフ売りをしていた際、身元不明(?)の東洋人の男女五—七人がグループで近づいてきて、並べてある機関誌を無理やり持ち去ろうとしたり、また同時に私たちの抗議にもかかわらず無理やり顔写真を撮っていくという一件があった。会議期間中を通して何人かの日本女性が光州事件の英文写真集を国際会議に集まった人々に手渡すということをしたが、これとも合わせて私たちの行動が隣国の政府を刺激したのには確かだったようだ。

国籍法では、三回の分科会を通して約百人の参加者を得た。日本の女性差別的(女性に自分の子どもへ国籍を伝える権利を認めない)国籍法について解説すると、デンマークの人道立場から移民労働者の権利擁護の運動をしてきた人がデンマークの進んだ例を話してくれた。デンマークでは、デンマーク女性を母とする子どもはすべてデンマーク国籍を得る。イタリア人の夫を持ち国際機関に働くアメリカ人女性が、イタリア男性と結婚することによりイタリア政府からはイタリア国籍とみなされる例、そして外国人男性と結婚すると同時にイタリア国籍を失ってしまうイタリア女性の例を話した。この場合子どもに国籍を伝えることはもちろんできない。両者とも離婚などの場合、イタリアから子どもを連れ出すこと(前者)そしてイタリアに子どもを連れ帰ること(後者)が困難となる。日本と同じ父系中心主義をとるイタリアにおいてもフェミニストたちは男女平等の観点から国際結婚における国籍取得について男女平等を求める運動をしており、日本政府と同じく差別撤廃条約に署名したイ

タリヤ政府は、国内法改正を余儀なくされるということだった。モーリシャスの国会議員の女性も夫（フランス人）の居住権を取得するのに困難に直面していた。これは日本人男性と結婚した外国人女性の居住または日本国籍取得は容易だが、その逆に日本人女性と結婚した外国人男性の居住および日本国籍取得が困難な日本の状況と共通した問題である。日本では沖縄にみられる無国籍児の問題は、タイなど米軍基地があるところにはやはり存在する。その他、難民・移民が増大しつつある世界の現状の中で、国籍法を基本的な人権・女性の人権・児童の国籍取得権の観点から見直し、より平等な、弱い者の立場に立つ普遍的な法に改正していくという方向を確認して今後の情報交換を約束しあった。

（奥田 幸）  
大石 まゆみ

## ドイツに女性をふやかせ

主催 伊藤 恭子

コペンハーゲン大学のアマ・センターでは、連日、世界各国の女性たちによるワークショップが、熱気をもって開催されている。私も、多くの国の女性たちと語らい、日本の状況を少しでも改善できる方向へと進めていく一つの手だてが見いだせるならとの強い願いから、フォーラム開会の七月十四日から閉会の七月二十四日まで毎日、会場へと通いつめた。私の最も強い関心は、世界各国のマスコミで活躍する女性たちの動きであった。というのも、日本では、あまりにも女性がマスコミ界で仕事をしていくチャンスに恵まれないということに、常に腹だたしさをおぼえていたからであった。マスコミで働く日本の男性たちは、それらの職場は、「男の島」であると言い、聖域と

して死守したい男性の意地のようなものすら感ずるのであるが……。

果たして、諸外国のマスコミ界はどうなのであろうか。フォーラム会場をいきかうプレスメンバーの多くは女性であった。生き生きとした彼女たちの仕事ぶりにひどく感動しながらも、多くのことを語りあった。しかし、彼女たちは、日本の女性の状況についての知識はあまりなく、ただ「先進工業国—日本」とのイメージが強いだけである。情報入手のチャンスがあまりないという。

そこで、私は、思いきって、ワークショップ「マスコミに女性をふやすには」をひとりで開催することを思いついた。若干準備しておいた英文の資料を配布しながら、日本のマスコミの状況、そして、あまりにも女性の少ない新聞社、放送局のこと。多くの女性たちが、それら、マスコミでの仕事を望んでも、そのチャンスはない。したがって、世界行動計画にもある、女性の地位向上へ向けての報道、女性の立場にたつての放送は歯がゆいほどに遅々として進まない状況を訴え、ではどうしたら、それら従来の「男の仕事、

女は家庭」という固定観念をうち破り、世の中全体の意識変革が行なえる状況づくりができるのかについても、多くの女性たちと語りあった。

ワークショップに参加してくれた、デンマーク、オーストラリア、スウェーデン、オランダ、フランス、アメリカ、ジンバブエなど多くの女性ジャーナリストたち。彼女たちは、やはり多くの困難な状況もあったという。また、政治・経済は男性の仕事という考え方をする人々も多い中、コツコツと仕事をしてきたという。しかし、日本のように、報道は、男の島”などという考え方をする男性は、どこの国にもいないという。仕事をしたい人はほとんどすればよい。女性であっても、仕事をもつことは当然のことという諸外国では、日本人の意識が異様に映ったようである。個人を尊重するそれらの国では、男だから、女だから”という考えはあまりないという。はるか、デンマークから離れたアジアの島国、日本。あまりに理解しがたいという顔の彼女たちではあるが、私たち日本女性と同じ悩みがないわけでもない。

なぜなら、各分野で活躍している女性には、男性の半分にもみたないという現実をかかえている。当然、平等”ということであるなら、半々でなければならぬとする彼女たちであるのだから。

しかし、現実には三〇%から四〇%というデンマーク、スウェーデンは、賃金についても全く平等でないと嘆く彼女たちではあるが九〇%という数字。何とわが日本は五四・二%という数字が、男性賃金一〇〇%に対する最新データ。不況、経済の冷えこみが、こんな数字となり、女性が経済の調整弁として使われていることの証左。マスコミに働く女性の割合は、一〇%を割るところがほとんどであり、職種としては〇%のところもあるという状況であるのだから、比較にならないとさえいえるくらい。

日本におけるこうした差別された状況は、彼ら諸外国の人々には理解しがたい部分もあるようだ。しかし、日本女性は、とかく消極的で、男性の指示に従うことを旨とするという情報もっているようで、私の分科会参加者もその例外ではなかった。だから、その置かれている立場

は不満足であり、何とか改善していきたいとするこの訴えに対し、若干驚きの表情をもつ人もあったことは事実であった。だから、こうして改善していこうとする目をもち始めた日本女性に対して、好意的に支援と連帯の意志を表明してくれた参加者たちでもあったのだ。これからほとんどん改善へ向けて努力するよう励ましの言葉があふれていた。

ところで、今回の会議を取材せんとする日本の報道者たちの八〇%は女性だった。これは五年前のメキシコ会議とは比較にならない力の入れようであった。各社、競いあつての取材合戦は、それなりに、刺激を与えあつていたし、会議の模様の報道も、政府会議のほうは、量的にメキシコ会議の場合よりは、比較にならないほど多かった。これは新聞の場合に言えることで、放送関係、特に記者のいないテレビ局の場合は、やや弱さがあつたことを、取材している日本人記者からも、聞かされていたことは、残念だった。つまり、日本が最終的に、婦人差別撤廃条約”に署名することになったのも、一つには、女性記者のスクープによるとい

われているし、そして、民間女性たちの運動を盛り上げる結果になった。そして、ガードの固かった政府に署名を決意させるにいたったのである。幸い私も七月十七日の署名式には傍聴のチャンスを手にし、日本の代表団、記者団が手に汗して、高橋大使の署名する姿に見入っていたし、私もその一人であつたわけですが……。

残念なことに、政府関連中心の報道に終始して、民間会議は取材しても意味のないこととする女性記者がいたことは、日本の特徴的なことである。他の国々の記者たちはフォーラムをすいぶん取材していたようだし、その意味を十分理解していたようだから。これも日本における特殊な状況から生まれる価値判断によるものと思われる。もつともつと女性の立場を主張できるマスメディアが必要なのではないか、そんなこともつくづく思うのであつた。既存のマスメディアへの活動に参加できないのなら、何か、それら、別の手だても考えていく必要があるかもしれないのだから。オランダ女性たちの言葉が耳に残る。それは、私たちの放送局をもっている」という言葉だ。

日本では電波法の問題など免許取得は大変なことだし、放送時間帯の枠をとることだって困難なことであらう。けれども、何らかの形で、徐々に、そんな努力もすることが可能なように、これも一つの提案になるかもしれないと思ひながら、カストラップ空港をとびたつたのである。

(伊藤 恭子)

## ビデオによる交流と ドキュメンタリー制作

主催 H K Wビデオワークショップ

コペンハーゲンでの仕事は二つで、まず、ビデオを見せるほうはNGOフォーラムでの、国際女性ビデオ・コミュニケーション・フォーラム（七月十六日―十八日）の主催と、国際女性アート・フェスティバルでの「ジャパン・デイ——ビデオによる日本女性紹介と話し合い——」（七月二十三日）主催。いずれも72インチの大型ビデオ・プロジェクターを使い

ました。

ビデオを作るほうは、「女性の見たデンマーク世界会議」、「私にとつての」婦人の10年」（各25分）の二本のドキュメンタリー制作。

### ビデオ上映と話し合い

さて、ビデオ・コミュニケーション・フォーラムでは、「ビデオによる女性史づくりから、国際女性ビデオ・コミュニケーション・ネットワークへ」というテーマで、ビデオ上映とシンポジウムを行いました。

「婦人政治家市川房枝」（明日を求めて——婦人先駆者たち——シリーズ）や「産婦人科医黒島淳子」（今日も続いて——各界の女性たち）など、ご高齢の先駆者の年輪を刻まれた表情から、さわやかに厳しい職業生活を生きぬく女性を伝えるビデオを上映。

このビデオ・コミュニケーションが日本からの一方通行になるのをさけるため、五か国の女性メディア人からなる国際委員会の協力を得て、アメリカ、インドネシアなど、先進国、途上国からのビデオ

も上映しました。

一般参加者に加えて、メディアと国連専門職員が熱心に発言し、女性のための情報という内容と、ビデオというメディア自身の将来性について話し合いました。さらに、この討論は、後述のユネスコ・アジア婦人放送者セミナーで続けることになりました。

「ジャパン・デイ」のほうは、国際交流基金の派遣で、日本女性紹介と、日本に対する理解を深めるため、グリプトテック美術館の国宝彫刻にかこまれた回廊で、ビデオ上映、話し合い、インタビューを撮影しました。(二つのビデオ上映についての反響は、新聞雑誌で報道済みなので省略します。)

### ビデオ制作

「女性の見たデンマーク会議」は、婦人年事務総長ルシル・メイヤーさん、世界会議議長リセ・オスタゴーさんなど、会議やNGOフォーラムを内外で支える女性たちの感想を折りこみながら、会議、フォーラム、女性祭などのハイライトを伝えるもので、日本と海外の婦人問題に関

心のある層を対象に制作しました。

出演していただいたのは、それぞれ有能で美人の「女前」の女性たちです。なかでも、世界会議議長でもありデンマーク文化相兼婦人問題担当相のオスタゴーさんが、主催国の期待と財政的負担にもかかわらず、会議は政治的対立で難行しているが、それでもなお、理想を求めて、少しずつ前進したい、と語られた誠実で素直な態度には、深い共感を抱きました。自画自讃で恐縮ですが、こういうお人柄を伝えられるのが、映像メディアの強味でしょう。

「私にとつての『婦人の10年』」は、コペンハーゲンに世界各地から集まった女性に、「中間年にあたって、この五か年、なにをしてこられたか、次の五年はなにをなさいますか」という単純で難しいインタビューを構成したものです。

「婦人の10年」をビデオの観客も含めて、一人一人の女性に考えて頂きたいため、画面では、「出身国名」と「職業」をテロップで出すだけで、スウェーデン男女平等相のカリーン・アンダーションさん、米国の政治家ベラ・アブザックさん

など有名女性も、主婦や学生と平等に肩書と名前なしで登場してもらいました。

「武器を手に戦ってきた。次の五年も戦うだけ」(ナミビア独立運動リーダー、アンゴラ在住)「国連内での地位向上。国連に、他人にお説教する前に、自らの姿勢を正させよう」(国連職員、ニュージーランド)など、それぞれ一騎当千の世界の女性エリートたちのほか、地元デンマークの女性もインタビューしました。

「子育ての延長として、平和を守る運動に参加しました。さて、次にどうしたらよいのか、まだわかりませんが、母として平和を守る役割をずっと果たしてゆきたいと思います」フォルケ公園で世界の人々が憩う姿を背景にもの静かに話されたコペンハーゲンの主婦。黒いワンピースの地味な姿なのに、カメラが捕えた美しい金髪が風に散って王冠のように輝いていたのが印象的でした。

なお、このビデオは、十一月に開かれるユネスコ・アジア放送機関の婦人放送者セミナーで公開されるほか、アメリカ、東南アジアなど、世界各地で上映されます。国内でも教育団体、婦人団体に貸出

したいします。直接左記へお問い合わせください。

〒166 東京都杉並区松ノ木3の27の10

HKWビデオ ワークショップ

(〇三)三二一七六七四

(渡辺晴子)

## 日本の女たちの活動

共催

家庭科の男女共修をすすめる会／国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会／私たちの雇用平等法をつくる会／あごら／上智大学婦人問題研究会／小田原女性問題研究会／婦人民主クラブ

七月二〇日コペンハーゲンに到着した「女性解放・ヨーロッパの旅」一行二四名の中にはさまざまなグループの人が入っていた。家庭科の男女共修をすすめる会、国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会、あごら、小田原女性問題研究会、婦人、私たちの平等法をつくる会の面々である。各グループのメンバー

たちは、それぞれの会の紹介やら、アンケート用紙やら、ビラなどを用意して行っただが、どのような形でそうしたものを使ったらよいかについてははっきりしたイメージがあつたわけではない。実際にフォラーラムの様子をみてからというのが大方の人の考えであつたと思う。

七月二一日からコペンでの会議は第二週に入り、私たちはフォラーラムの開かれているユニバシティセンターへ向かった。毎日五〇近くの分科会が開かれており、「フォラーラム80」という新聞から参加したい分科会をさがす。二、三の分科会に参加してみても大体の様子がわかってから、受付に申し出て分科会申込み用紙をもらう。宣伝をしたり、分科会の内容の打ち合わせも必要と考えて、七月二三日(休)の十時から四時までを申し込む。スライド用のプロジェクトも必要というところにもをつけておいたら、事務局の人が「機械があまっていたら持つて行く」と返事くれた。

二一日の夜は宣伝用のビラ作り、二二日の夜は各グループの人と発表時間の打ち合わせやら、その順序、司会等をさめる。

司会は私がすることになり、発表順および内容は次のとおり。一、家庭科はなぜ女だけ(家庭科の男女共修をすすめる会)二、教科書の中の性別役割分業(行動を起こす女たちの会)三、大学の中の女性差別(上智大学女性グループ)四、雇用の中の差別(鉄道の七人と共に仕事差別、賃金差別と闘う会)五、メディアの中の差別(あごら・行動を起こす女たちの会・婦人)六、主婦および離婚(行動を起こす女たちの会)七、平和のための家庭教育(小田原女性問題研究会)

開会の十時までに日本から持つて来た資料やアンケートを並べたり、折鶴をアンケート協力者には贈ろうということで並べたりしておく。始まったばかりの時は二〇名ぐらいの参加者であつたが、その後徐々にふえ、発表の途中で入ってくる人がそうぞうしいと「静かにして」という注意がとぶ。

最初の発表は共修をすすめる会の梶谷さんで、まず黒板に書いた学校教育の仕組みと家庭科の内容、文部省を中心とした教育行政の説明から開始。会場の人はとても真剣である。共修をすすめる会で

は、中学の技術・家庭、高校の家庭一般を男女一緒に同じ内容で学ぶことを目的としていること、これまでの日本では性差別的な教育によって女子は経済的・精神的に自立しにくく、男子は生活的に自立しにくく育てられてきたこと、その結果男が一人暮らしを余儀なくされるとノイローゼにかかったり、栄養失調になったりする例が少なくないこと、女子だけが家庭科を学ぶという制度は家庭の責任は女が負うべきものという役割分業意識を強化し、職場でも女の労働者は一人前に扱われないことにも相通する。日本の女の平均賃金は男性の半分を僅かに越えているにすぎない。こうした不平等をなく

するために共修は必要である。また生産偏重による環境破壊、資源の枯渇は世界的な問題だが、日本のように土地が狭く資源が乏しく人口の多い国では特に生活を大切に人間が育たなくては困ること、私たちが望む家庭科の内容、どんな人々が運動をすすめているか、これまでの運動とその成果、何が共修の実現を阻んでいるかについて述べ、婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃条約が一日も早

く批准されることが私たちの運動を前進させることになるだろうという言葉で結んだ。

会場からまず西ドイツの女性から質問が出され、家庭科では一体どんな内容をやっているのか、私は今二三歳で家庭のあり方についても知りたいが、そういうことについてもやっているのか、実際に日本の女性たちは男性と一緒に働いているのに、教科書の記述はそれとずいぶんちがうようではないのか。

もう一つは女子は家庭のあり方について学ぶようだが、一体男子は、家庭とは何か、家庭の中で役割は何かということとをどの教科で学ぶのかというものであった。それに対しては社会科や倫理等で少し学ぶ機会はあるが、全般的にいつてなかなか十分な知識をもてないと言えた。

続いて私が教科書の中の性差別についての話に入る前に行動を起こす女たちの会の「作る人、食べる人」のセミナーシャルについての抗議を知っているかどうか聞いてみたが、誰も知らないようだった。

続いて行動を起こす女たちの会の英文パンフ「アクション、ナウ、ジャパン」の中

の会の紹介をし、私たちの会が五百人の怒れる女たちによって一九七五年に組織されたという会場の人はドツと共感の声をあげてくれた。我々の主な目的は男女の平等を実現し、男性の文化に対して新しい女性の文化を打ち立てることである。日本の女たちの社会的地位は低く、同様に経済的にも、政治的にも低い立場におかれている。行動することが私たちの会の特徴であり、国会に行ったり、NHKに行ったり、法廷に行ったりして私たちの差別をなくすよう行動している。電話をかけたなり、手紙や電報をうったり、署名集めをしながら性差別とたたかっている。我々の活動は分科会にわかれて行ない、いわゆる代表者はおいてなく、誰でもがその時々行動代表者になれること、毎月一回、定例会を開いているが、緊急に集まる必要のある時はいつでも、どこでも集まる。私たちの定例会は公開性であり、誰でもが参加できる。もしみなさんが日本に来られる場合はどうか私たちの所にもお寄り下さいと述べ、続いて教科書の中の性差別はスライドで紹介した。樋口マリ子さんが最初のコマの一

年生社会科の「今日は給料日です」を紹介すると会場はドツと笑いつつまた。お父さんが月給袋を出し、お母さんが頭をさげながら、お茶を入れている姿である。続いて小学校一年生の「お母さんの仕事」これはお母さんが朝ごはんを作り、ゴミを出し、洗たくをし、アイロンをかけているものである。このようにして小さい時から性別役割分業を学んでしまうと説明。中学の社会科と教科書では外で働いているのはみな男性であって、女性も働いている場面がのっていないこと。続いて中学の英語の教科書の中で、女の子がケーキを作っている場面などが実に多いこと、そして英文ではこういう文を繰返しやるうちに、そういう意識を作っていくてしまうこと。そして英語の教科書に出てくる女の人の職業といったら、教師と司書しかないこと、そして男の子だけがスポーツをやっていること。続いて家庭科の教科書のさし絵や、私たちの抗議によって少し変わってきた教科書なども紹介し、教科書会社の人をよんで話し合いをしていることなどを説明した。アメリカの女性学のグループは連日、教

科書の中の差別について発表していたが、もし私たちのこの説明の時来ていてくれたら、もっと盛り上がりたであらう。続いて樋口マリ子さんから大学の中の性差別についての話。授業中に教授や助教が女性差別の発表をすること、例えば女子の大学卒業生は仕事につくのはむずかしいとか、自分のゼミには女子学生の参加を望まないとか、女性の幸福は結婚だと言ったりする。そういう中で男子の学生もとても差別的になる。また事実、日本では大学を卒業した女子学生の就職はとても制限がされている。四年制よりもむしろ短大生のほうが就職がしやすくなっている。また、女性が結婚した場合、会社はその人が退社することを望む場合もある。また、女子学生が一人で下宿生活をしている場合も就職に不利で、求人条件としては女子は親元から通うことになっている。またいくつかの女子大では、学生はよき妻、よき母になるよう教育されることもある。

続いて会場にみえていた名古屋の短大の先生が女子は四年制大学よりも短大へ進学する率が多いこと、四年制の場合でも、教育、家政、文学という学部集中すること、短大生のほうが就職がしやすい現状などを数字を使って説明してくれたので、会場の外国人たちは大体の様子がつかめたのではないかと思う。

その後の質問の中で「日本の女の人たちは家庭の中で力が強く、夫はかせいだ賃金をすべて渡すそう。これが一般的状況ですか」というのが出された。こちらは「たしかに夫はサラリーをすべて妻に渡す場合が多く、そのため妻が家庭の主導権を握っているといわれるが、しかしそのお金はそんなに多くはなく、妻はそのやりくりで大変なのです。夫の暴力についてはそれほど多くありませんが、あります」と答えた。それと労働組合は女性の差別に対して闘わないのか。そうした差別に対して闘うのも労働組合の重要な役割の一つであると思うがという質問が出され、こちらは「労働組合はどちらかというと女性を差別する会社の考え方と妥協してしまう場合が残念ながら多い」と伝えた。また労働における保護の問題について、労基法研究会の報告の件を述べたら、アメリカの人が「アメリカ

では、女性に対する保護に反対しているのです」こちらは「日本とアメリカでは労働条件でちがいがあると思います。たしかに保護が不必要なところと必要ないところがあるように思います」と答えた。さらに会場の人から日本の主婦たちとはとても快適な生活をしているようだ、ある講座を担当したことがあるが、その大半は主婦であったとか、日本の家庭生活では妻と夫がとても別々な生活をしている。夫は仕事が終わってからも職場のつきあいなどでおそくなり、妻は友人や子供たちと別な生活をもっているように思うとか、日本にいたことのある人からの発言であったが私の知人の男性は女の人を三人も囲っていた。どうしてそんなことをするのかと問いただと、女はおろかだからそれでよいのだという答えが返ってきた。このような男の人はいっぱいいるのか。また、ニューヨークでビデオワークの仕事をしていても能力のある女性がいた。しかし二四か二五歳になった時、日本の母親から帰って来て結婚せよといわれ、仕事をやめて帰って行った。そんな年になっても母親のそいう言葉

に動かされるなんて信じがたい、など。

以上が午前中の様子であるが最初の意見交換はとても活発で、日本の古い習慣がまだまだ日本の女たちを縛っている現状が浮き彫りにされたようだ。

午後は鉄連の佐々木元子さんが「私が働いているのは大手町で、そこでは多くの女の人たちが働いていますが、その人たちは私と同じように差別を受けています。私の職場では賃金でも初任給から一万二千円の差があり長く働けば働くほどその差が開いてきます」と話を切り出し、裁判闘争や、鉄連の七人と共に闘う会の活動をスライドも使って説明をした。発表は佐々木さんがまず日本語で言い、そのあと樋口さんが英訳するという形式であった。発表の最後に彼女たちが企業に送った女性の昇進についてのアンケートを発表した。一九七四年には、女性に昇進の機会があると回答した会社は七五％、ないとした会社は二五％であるのに、国際婦人年以降の一九七七年では、あるという会社が四七・七％、ないという会社が五二％と下がってきている。さらに社内研修についての質問では、男女同じ

ものをする一九・四％、女性にはお茶の出し方など男とはちがった研修をうけさせる三二・七％、女性には全く受けさせない三四・七％。さらにその理由についても報告(省略)。

佐々木さんに対しての質問は「佐々木さんのような場合は一般的でしょうか」、「公務員の場合はどうでしょうか」、「年金についてはどうでしょうか」、「責任あるポジションについている日本の女の人を知っている。休暇が二〇日あるのに二日しかとらなかった。それも彼女のお母さんが病気になるまで時だけだった。」「男の人の場合も同じですか」に対して佐々木さんが、今回コペンハーゲンに来る時、二週間も休むようなら会社をやめたほうがいいと言われた話を紹介した。一般的に男の人たちは二〇日の休暇のうち、平均一、二日しかとらず、週休二日にするかわりに、毎日の労働時間を一時間のばすことを簡単に労組は認めてしまったことなどを紹介し専門職についている女性の率は。例えば大学教授とか裁判官などの」「アメリカとか外国で女性がトレニングを受けたあと女性はどんな待遇を

うけるか」、「休暇を一日か二日しかとらないことに対して労働組合は何をしているのだろうか」、「働いている女性労働者はどのくらいですか」、「女性たちの解放運動への参加率は」、「男が牛耳っている新聞の中でフェミニストの記事はのりましか」

次はメディアについて婦民の谷合さんから発表が行なわれた。まず婦民の説明をし、行動を起こす女たちが行なった、NHKの英会話テキストの抗議や、リングガフォーンの差別テキストのこと、「作る人食べる人」のこと、サンデー毎日の「女教師はやっぱりだめだ」に対する抗議について紹介。

続いてあごらの谷内さんからあごらの活動についての報告、七月一日にすであごらは分科会を持ったので、谷内さんはあごらの中の出版の部分について発表、一九七二年から、一年に二回「あごら」を出版し、女性のおかれている立場についてのさまざまな記事をかき、次第に多くの読者を獲得してきたこと、とりわけ主婦の読者が多いこと、および最近の「あごら」で扱った内容や、毎月の「あ

ごらミニ」についての紹介を行なった。

次いで行動を起こす女たちの会の兼松さんから、主婦、離婚についての報告。日本の女の中には夫の暴力からのがれて離婚したいと思うがなかなかうまくいかない例が多い。そういうわけで東京都に、「離婚の母の家」を作るよう要求し、一九七八年にオープンした。また離婚分科会では離婚の相談にのったり、「離婚はこわくない」という本も出版した。また主婦分科会では、「主婦の失業者宣言」のピラをメーデーの日にまいたり、主婦

の伝統的な考え方を変えるために団地まわりをして、ミーティングを持ったりしてきた。それに対する質問は「こういうかけ込み寺は東京だけですか」、「離婚率と離婚した女性はどうですか」、「離婚した女性は親もとに戻るのでしょうか」、「離婚に関する規定、例えば夫は子供の養育料をどのくらい払うのかという規定は」等の質問が出されたが、最後にアメリカの男の人から「アメリカでは州によって法律はちがうが、今まではどちらかが悪いというふうになっていたが、今は責任は両方に、そして妻のほうが収入が多け

れば夫に慰謝料を払う場合もあるし、子ども男のほうで育てる場合もある。」という話も聞いた。

最後に小田原女性問題研究会の勝又さんから「私は富士山のふもとにある小田原から来ました」と紹介があり、その地域の小さな声として聞いてくださいと次のように述べた。

「このような会が私的にも星の数ほどもたれ、私たちのグループがさらに大きくなっていくこと、世界平和を維持するために考えを寄せ合い、次代の人にも与えていこう、過去のことを勉強し、新しい世界づくりのために勉強をすること、私たちは自らの文化遺産を誇るとともに、世界の人々と深い友情の絆をもちたい。日本是世界唯一の被爆国であり、核兵器の廃絶を要求する。女性宣言」

会は午後四時に閉会した。

なお、会場で、「家庭科の男女共修を考える会」が、各国の家庭科教育についてのアンケートを行なったが、内容は次頁のとおり。回答者はデンマーク七、アメリカ四、オーストラリア二、英、西独、伊、蘭、ベルギー及び不明各一の一計二一。

一 あなたの国では学校教育に家庭科がありますか。

ある (デンマーク、オーストラリア、

英、米、独)

ない (ベルギー、オランダ)

無回答 (伊)

1) 以前は中学が男女別で、女子は家庭、男子は技術のみやっていたが、今は男女共に自由にとれる。が、家庭科は相変わらず女子が多い。それ以外に男女共に同じカリキュラムでやる普通高校がある。

二 (A) 義務教育ではどんな状態ですか。

a 男女同じ内容を全員が学ぶ (米、

オーストリア)

b 男女同じ内容を選択で学ぶ (デンマーク)

c 男女別の内容を全員が学ぶ (なし)

d 男女別の内容を選択で学ぶ (なし)

e 女だけ全員が学ぶ (英)

f 女だけ選択で学ぶ (なし)

g その他 (なし)

1) アメリカ人の回答でも b と答えた人もいる。

2) デンマークの回答は b が一番多いが、c もあり各校によって事情がちがうようだ。

※独、伊は無回答。

(B) 中等教育ではどんな状態ですか。

a (米)

b (デンマーク、オーストラリア)

g (英)

1) アメリカ人でも b と答えた人あり、シアトルの公立中学では家庭科を選択した生徒にその内容はまかされており、男女が必ずしも同じものをやるとは限らない。またカリフォルニア州では男女共に選択できる内容がいくつかあり、時には男の子のための料理特別教室があるし、男女一緒にやるものに消費者教育や家庭内教育がある。だが、たいていの州では女子のみがやっているとの回答もあった。

2) デンマークでも a と答えた人あり。高校には家庭科はない。家庭科を勉強したいなら特別学校がある。

3) 法律上では男女共に同じ内容のものを用意することとなっているが、すべてがやっているのではないので、法律上は違反している。

※独・伊は無回答。

三 あなたの国で家庭科教育について改善すべき点がありましたら書いて下さい。中学・高校では必修にすべき (米)

四 学校で家事技術について学ぶ必要があるでしょうか。

ある (デンマーク七、<sup>2)</sup> 米二、オース

トラリア二、英、独)

ない (デンマーク一)

わからない (米一、ベルギー)

無回答 (伊)

1) 特に男子は家でやっていないから学ぶ必要がある——デンマーク

2) いくつかのものは学校で出来ると思う。例えば、ホームマネジメント、家庭内教育、栄養など——アメリカ

五 (A) 義務教育ではどのようにすべきだと思いますか。

a 男女とも全員が学ぶべきだ (デンマーク七、米三、オーストラリア一、

独)

b 男女とも選択で学ぶべきだ (なし)

c 女は全員学ぶべきだ (なし)

d 女は選択で学ぶべきだ (なし)

e その他 (具体的に) (なし)

f 必要がない

(オーストラリア一、英)

g わからない (米一)

無回答 (伊、ベルギー)

(B) 中学校ではどのようにすべきでしようか。

a (デンマーク四、米一、オーストラリア一、英、蘭)

b (米二、デンマーク二)

f (デンマーク一、米二)

無回答 (伊、ベルギー)

六 学校で家庭生活についての理論や、家庭のあり方について学ぶ必要があるでしょうか。

ある (デンマーク六、米三、オーストラリア二、英、伊、独、蘭)

ない (デンマーク一)

七 (A) 義務教育では。

a (デンマーク四、米四、オーストラリア一、英、伊、独)

b (米一)

f (オーストラリア一、蘭)

(B) 中学教育では。

a (デンマーク四、米二、オーストラリア二、英、伊、蘭)

b (米二、デンマーク一、独)

八 あなたの国では一般に男性が家庭の仕事を十分していますか。

a 十分やっている (なし)

b やや不十分 (デンマーク三、アメリカ一、英、伊、蘭)

c 全く不十分 (デンマーク六、米三、オーストラリア二、ベルギー、独)

d わからない

実例をかんたんにご紹介下さい。

〔デンマーク〕●ある男性は何もせず、ある男性は少しだけする。十分する人はほとんどいない。●女性の家庭内の仕事は減っている。新しい機械が入ってきたから。●皿洗い、家の掃除、子供の世話、買物などする。

〔米〕●若い人の一部が子どもが生まれたとき、変わる。女性たちは外の仕事に戻るためには夫たちをつきあけて、毎日の家庭責任を共有しあうようにしなければならぬ。私は個人的には次のようにしている。土曜日、家族全員で午前中、部屋の掃除、午後はショッピング、夜は楽しむ。私はいつも食事を作るとは限らない。勉強や仕事にでかける四〇代主婦、ソーシャル・ワークのパート・タイマー。●主夫に對する考えが以前よりも偏見がなくなってきた。

〔オーストラリア〕仕事を持っている女の夫たちは、母親がいつも家で待っていた年輩の人よりも家事を共有している。

〔英〕多くの家庭が変わってきている。男も買物に行くし、パンも作る。しかし、女の仕事をやっているのをみられるのを恐れている。

〔ベルギー〕少しづつ変わりつつある。

〔蘭〕男たちは買物や皿洗いを手伝い、時には料理もする。ほとんどの男性は子どもの世話をしない。ただ若い人のみが掃除を手伝う。

〔独〕彼らは「手伝う」。

九 あなたの国では一般に男の子が家庭の仕事について、家庭の中で十分学んでいますか。

a 十分学んでいる (米一)

b やや不十分 (デンマーク三、ベルギー一、蘭、伊)

c 全く不十分 (デンマーク五、米三、オーストラリア二、英、独)

実例をかんたんにご紹介下さい。

〔オランダ〕その責任は家庭にある。学校では訓練されない。

〔オーストラリア〕オーストラリアの男たちの中には家事をするのは男らしくないという感情が一般的である。オーストラリアの男たちは強い男らしいイメージに大いに関心がある。それゆえ、家事や料理の手伝いをするのを拒否し

ている人が多い。

〔デンマーク〕今日では男の子たちも服を作ったり、料理するが、女の子の方がまだそれをする時間が多い。

十 伝統的な男女の役割を変えていくための最も良い方法は何でしょうか。

〔デンマーク〕●女性を教育する(二)。

●平等教育。●父母が共に働くことを子どもに見せること。●女性に働く権利、教育を受ける権利を与える。女性が働くときは公的機関が子どもを保育(米)●教育制度を変える。●学校教育ももちろん大切だが両親の平等教育のほうがもっと大事。●教育をし、証明してみせる。それがうまくいけば皆ますます前進するだろう。男性は他人から批判されるのを好まないようだ。●女性が第一線で働くこと。家庭の中での態度を変えること。法律を変えること。

〔オーストラリア〕家庭内の仕事を共有することの大切さ、男女共に仕事の機会を対等にもつことを学校で教える。

〔ベルギー〕女性は伝統的な性別役割を変え、戦わなければならない。男性からは何ものも期待しないこと。

〔蘭〕生活様式を変える。伝統的な男女の役割について話す。教育が重要。

十一 子どもたちに、家庭生活についての知識や技術を身につけさせるための最も良い方法は。

〔デンマーク〕●学校と家庭の教育。●男女および両親への教育。●話すこと。

〔米〕●学校と家庭の教育。●両親から学ぶ。●ボーイスカウトで自立の訓練を(オーストラリア)家庭経費の重要性を教えるべきだ。そうすれば子どもたちは食物の値段や物価の上昇もわかる。料理や掃除がしっかりできれば、親もとを離れてのキャンプにも役立つ。

〔伊〕家庭の仕事をすべてやらせる。〔ベルギー〕できるだけ早くから家事をやらせること。

十二 婦人問題で一番関心があるのは。

〔デンマーク〕●平等。●教育。●家事を重んじること。●平和。●女性を雇わない状態がぶえている中で、女性が再び台所や赤ん坊の世話に戻らないよう、女性の力を強めること。●貧しい国では男たちは女たちよりも先に食べ、女の食物は最悪だ。富める国では男たちは女たちに隠していることが問題。

〔米〕●家庭内の責任をすべての家族員で分担する。●職場での平等、家庭や社会での女性に対する抑圧が減ること。

●男性は男女双方から尊敬されている女性も同様に両性から尊敬されるようにすることが大切。

〔オーストラリア〕●機会均等と、中絶や家族計画の問題。●平等の機会が欠けていること。●中東・アフリカ・アジア諸国での自由がないこと。

〔英〕小生の評価……女性たちは自らに對してあまりにも低いイメージを抱いており、新しい道に挑戦していない。

〔伊〕女だけが、なぜ家の外と内で働かなければならないのか。

〔蘭〕雇用問題。

〔独〕役割の変化により、精神構造がどう変わるか。

The questionnaire about housework in your country

The Group of Promoting Co-education  
for Housework (1978)  
家庭内共同教育促進グループ

( Please circle the alphabet to fit for your country )

1. How your country have "housework" in school education?  
( a. yes, b. no. )

2. If yes, please answer the next questions.

a. In elementary school

- a. All boys and all girls are studying the same program.
- b. Boys and girls choosing housework are studying the same program.
- c. All boys and all girls are studying the different program each other.
- d. Boys and girls who choose housework are studying the different program each other.
- e. All girls alone are studying housework.
- f. Only girls choosing housework are studying housework.
- g. I don't know.
- h. Other cases ( Please write concretely )

b. In Junior High School

- a. All boys and all girls are studying the same program.
- b. Boys and girls choosing housework are studying the same program.
- c. All boys and all girls are studying the different program each other.
- d. Boys and girls who choose housework are studying the different program each other.
- e. All girls alone are studying housework.
- f. Only girls choosing housework are studying housework.
- g. I don't know.
- h. Other cases ( Please write concretely )

リン・ブルームほか著

# 自分を 変える本

B 6判 348 ページ  
1300 円

相手に対して攻撃的・支配的になるのではなく、自分を抑え、閉じこめるのではなく、自分をしっかりと主張し、そのことで人とへさわやかな関係をつくりたいと思っている人は少なくないと思う。この本はアメリカの女の心理学者たちの実験教室で行なわれた実例をもとに、どのようにしたら自分を確立でき、へ主張的」な人間に自分を変えていけるかを示したものだ。へ自分を獲得する本」として、一人でも多くの人に読んでもらいたいと思っている。

(伊藤雅子)

●自己主張する方法の研究はアメリカの女性運動の経験から生まれた知恵でもある。それは自身を受け入れ、同様に他人も受け入れる態度だ。(読売ほか各紙)  
●自主グループで、婦人学級で、テキストに使うところがふえています。へ自己変革の実用書」としてご活用ください。

東京都新宿区新宿1の9の6 BOC出版部

## 眞の平等を訴えて

主催 京都市地域婦人会  
連絡協議会

指定都市がコペンハーゲンの婦人会議に参加しようと、話が出たのは昨年（五四年）秋の理事会でのこと、ことし三月はじめの理事会でいよいよ決行と決定した。

コペンハーゲンの本会議場ベラセンタ―への入場がむずかしいことは、かねてから聞いていたので、同時に開かれるという、フォーラム会場への入場をめざした。そしてこの入場要望は三月決定の時点で、国連事務局宛発送しておいた。また別に国連の婦人の地位向上委員会の久保田真苗先生にもお手紙してお願いしておいた。

条件として、英、仏、西、三か国語のうちどれかの会話が堪能なこと、というのには閉口、出席予定の指定都市役員の

なかにはない。そこで土田女史（商工会議所国際部土田晨子氏）に通訳をお願いすることにしたのである。

さていろいろな条件整備は進めたつもりでも、異国のことはどうも判然としない。五月一四日ついに総理府の婦人対策室まで出向いて様子を聞いたが、まだ国の代表も決定していないという。まして先方の様子は皆目わからない、という返事だった。しかし一行はコペンハーゲンのほかに、老人ホーム、病院、障害児施設と三か所の視察を予定した。大へん欲ばった渡欧である。

七月二日出発、二日コペンハーゲン到着と同時に、フォーラム会場へ出向き、再度申し込みをして、二四日午前十時からの会場が決定。このように書くの大へんスムーズに万事運んだようにとれるが、なかなか生やさしいものではない。先方の事務局の言うには、宣伝、人集め、皆自分たちでやること、こちらは会場を貸すだけ、とのこと、はじめに考えていった様相と全然ちがう。言葉の通じない異国でのことだから、大きな不安はあるが引つ込むわけにはいかない。

さて二三日夜は、京都勢全員で英文ボスターの作成、おそらく生まれてはじめての経験であろう。

「いらっしやい。

そしてきてください。

私たち日本の女性は、

世界に訴えます。

眞の平等を！

桜の花びらを周囲に描き添えての、素晴らしいボスターである。

二四日朝勇躍して、国立アマヤ大学のフォーラム会場へ。先ずボスター張り、受付準備、会場入口前での折鶴実演プレゼント等、獅子奮迅の活躍ぶり。

「フリーズ、カム ツウ ジャパニズレクチャー」にわかづくりの英語、顔を真っ赤に上気させて、熱情をこめての誘導に、「中年パワーの情熱に負けました」と賛同して会場に入ってくださいる方、十時きっかりの時点で、聴衆三人だったのに続々とふえる異国の人たち、最終は八二名。会場立錫の余地なしの盛況であった。京都勢の一致団結と協力には驚いたとは、他都市の役員さんの言葉。

京都の婦人問題への取り組みを話す私

は、いつもの見なれた日本婦人の顔とちがつて、青い目の人たちのひとみをかがやかせての質間に少々あがり気味、時間の過ぎるのも忘れてしまふ。土田女史の流暢な通訳に質問者が納得する様子があつて涙のにじむ思いだつた。

「最後にさくらさくらを歌いましょう」という伝令に、我にかえつて時計をみると十一時三〇分、感激のコーラスが終つて、一同ホツと肩の荷をおろした感、思わず感激の涙が誰の目からも——。一同肩を抱きあつて、フォーラムの大成功を喜び合つた。

あの薄紫の平等という表紙をつけ、さらに紅白のリリヤンの糸をつけた資料は、三百部用意して渡欧したが全部売り切れ、「資料だけでもほしい」と持ち帰られた方もたくさんおられた。国際婦人年の基調テーマ「平等」が世界のすみずみまで大きなこだまとなることを念じて、その広がりを目をすまして聞こう。

### 〔代表団座談会〕

笑顔で必死の誘導

森脇 受付から、私たちのフォーラムの

部屋までは相当の距離がありましたので、他の部屋へとられないようにという配慮から、滝川さんや菅生さんが中継地点におられ、バトンタッチしたお二人がここやかに会場に送りこむという連携プレーが功を奏して、会場に満員のお客様を迎えることができました。

菅生 受付から会場へ案内するとき、黙つていって逃げられそうで（笑い）今思うとわけの分からないことを一生懸命しゃべつたようです。

瀬古 私は何とも思わず持つて行った浴衣が間に合いました。浴衣を着て受付におりましたら「ジャパニーズ・ユカタ？」と聞かれ、外国語の中に突然日本語が出てきてボカーとしてしまいました。（笑い）

会場に行くとき首だけしかのぞくことができないくらいの満員で、もう、感激で足が震えました。自分たちがお客さんで行つたのではなく、自分たちが主催して来たのですから。

佐々木 私たちの会場を一度は通り過ぎた方も、また戻つて来てくださいました。暖かい雰囲気の魅力だったのだと思います。

世古 西洋人の多い中で日本人は目立ちました。しかし、人を呼びこんだのは生まれて初めてです（笑い）。

加藤 本当にあの時の団結の姿は筆舌に尽しがたいものでした。「さくら さくら」を歌つての感激の最後など、今思い出しても身内が震う思いです。

大西 私たちは今までの研究集会でも、「裏方」ということはあまりしていません。あのように裏方に徹して働いたのは初めてでした。翌日は足がつっぱたくらいでしたが、終わった後の大きな満足感を味わつたのも初めてでした。

### 〔質疑応答〕

問 （アメリカ人主婦）日本の家庭の方針について、中でも共働き主婦は子供や家庭をどうしているか。

答 家を閉めて、子供は保育園に預けて働きに出る。そして帰るときに保育園へ子供を迎えに行き、連れて帰る。母親が夜おそくまで働く場合は夜間保育園に預けられる。また子供が学齢に達している時は学童保育園があり、学校の授業が終わってから夕方母親が迎えにくるまで勉

強したり、遊んだりしていることができない。

問 学齢前の子供の保育園数と充実度について。

答 日本中で平均すればおおむね足りているが、私たちの京都では不足していて約二五%が入れない。

問 (スウェーデン大学生) 優生保護法の再検討の意味を教えてほしい。また、性に関する法律と優生保護法についても知りたい。

答 日本では若者たちの間で性に関するトラブルが増えているので、性教育の再検討をという意味で、人口の増減とは関係はない。

また、日本では正しい意味での優生保護法が徹底していない結果、若者の間に性の混乱を生じ、多くの中絶に関する障害が起こってきている。そこで非合法の中絶をなくすことが大きな要素となっている。

問 (アメリカ人教師) 私は成人教育を専門としているが日本の老人大学とは特に老人のためにだけあるのか。また婦人大学も婦人のためだけにあるのか。

答 老人大学は特に老人のためだけに作られた大学であるが、婦人大学とは一般大学が婦人のために特別の講座を設け、成人教育として婦人の一般教養をたかめようとするもので正規の大学のように学位をもらうというのではない。

問 (デンマーク主婦) 男性に育児休暇をとらせよというのはどういう意味か。

答 日本では女性が家にいて子供を育て、夫は外で働くという風習がある。この觀念がある限り、女性には社会参加することはできない。だから私たちは今までの風習を是正するために活動している。育児の責任は夫婦で等分にもつべきだと思っている。

問 (デンマーク主婦) 日本の女性が夫から逃げ出して助けてもらえる施設があると聞くが。

答 最近、東京にいわゆるかけ込み寺形式のセンターが出来たがマスコミはそれを嘲笑した。それに対して我々は腹を立てたわけだが、今までは日本では多くの婦人がいじめられていたがこれからはそんな人がなくなるように頑張らねばと思う。東京の新聞にはこれからは男性用か

け込み寺を作るべきだと書いてある(笑い)。

問 (西独大学生) 京都の婦人団体のように社会的に活躍している団体がほかにあるか。またお互いに協力しているか。

答 ここにいる団体(札幌、横浜、北九州、福岡、京都)以外、五つぐらいある。これからは指定都市が中心となって全国的な運動に及ぼしていこうという計画である。

問 (同人) 女性勤労者は生理休暇をとっているか。

またパンフレットの宣言文の趣旨を日本中にどのようにして周知徹底を図るか。

答 日本では生理休暇はとっていない。パンフレットをできるだけ多くの婦人にくばり、一人づつ説得し小さな成果からだんだん大きな成果をあげていく覚悟でいる。

問 (スウェーデン主婦) 日本の女性国会議員数と協力状態。党派別数など。

答 国会議員総数七六二名中女性議員は衆院九名、参院十一名、非改選六名総計二六名。しかし残念ながら互いに違う党に属しているので協力することがない。

そのうえ女性議員の数は減りつつある。党派別数は今くわしくはわからないが共産党が一番多い。

問 (日本人TVプロデューサーHKW) ここまで立派な指導クラスの婦人方を引っぱってこられた苦心談を聞かせてほしい。

答 国際婦人年の翌年が私たち婦人団体の三〇周年にあたり、お手元の宣言文を発表した。そして婦人の幸せを獲得するのは婦人の力であるとの前提のもとに、婦人問題について徹底的に勉強をつづけてきた。婦人問題とは男女の差別であることに視点を向けて、日常身辺から取上げその解決にむけ努力している。この問題はくりかえし、長い年月をかけなければ解決出来ないことはわかっているが、あえて大勇猛心をもってこれにあたる覚悟である。

問 (西独社会人) 独身女性の差別問題をくわしく説明してほしい。

答 今までの親の教育のしかたが悪かった。女の子は、まずお嫁さんになることを前提として育ててきたから能力のある女性が社会に進出すべきことを教えてい

なかった。だからまず母親の革命が必要である。

問 (ベトナム大学生) 主婦の婦人運動に対する夫の反応はどうか。

答 このような婦人運動はかしこい奥さんのすることだから納得協力する夫は多い。〔京都婦人〕九、十月号より

## 高度工業化社会の 日本女性——その明暗

主催 あ ころ  
共催 名古屋市調査団

### 開催まで

今回のフォーラム参加の大きな目的の一つは、独自の分科会を開いて、日本の草の根の女の立場から、世界の草の根の女たち、——中でも第三世界の人々と語り合うことだった。高度工業化社会のひずみを痛感する日本の女として、国際的な場で語りたいことは山積していた。テーマは、「高度工業化社会の中の日本女

性——その明暗」と決め、三月にNGO本部に申し込んだ。ニューヨークの本部は、ニューヨークの本部を訪れた人の話では、日本からの正式申し込みは「あーら」とHKWだけ。参加を歓迎されていると聞いて喜んでいたが、出国間際になつて突然一通の封書が送られて来た。「準備委員会で検討した結果、否決。もっと国際的テーマにすれば採用の可能性がある」とある。驚いてニューヨークに電話したが、事務局はすでにコペンに移動したという。教えられたコペンの番号にかけたが、電話は七月十四日までは通じないとの返事。やむなく、急拠、「アジアの女性の苦境を訴える」「男女平等と母性保障」の二つの仮テーマ名を記し、郵送した。

開会式前日、現地事務局に確認に赴いたが採否不明。プログラムも明朝でなければできないという。開会式の朝、ようやく手にしたプログラムで、七月十五日の午前十時と午後一時半の二回にわたりAGORAの名で登録されていることを知った。テーマは、「雇用平等の権利と女子保護」に変えられていた。しかし、

討論の結果、予定どおり高度工業化社会のひずみを中心に①日本の女性の低賃金を国際与論に訴え、平和や買春観光など、国際的連帯の必要な問題にしほりこむ②内容に保障と平等の問題を盛りこむ、という方針でのぞむことにした。

もう一つの問題は、名古屋市調査団のジョイントだった。一六名の団員には、一人二〇万円ずつ市から助成金が出ている。名古屋市の成果の報告も加えてほしいという要望を考慮しなければならぬ。どのような展開にするかで、最も苦慮した。

調査団は十七日にはコペンを立つ。したがって開催日は十五または十六日と希望を出しておいたが、プログラムを見た翌朝の開催には、さすがに困惑した。まず、どのようにして人を呼び込むかという問題がある。メキシコで私たちは幸運にも突然分科会を開くことができたが、私たちが話し合いたいと望んだ第三世界の人々の参加はなかった。ともかくまずパネル討論に参加して様子を見ることにした。開会式に続く「発展」のパネル討論は、非常に熱気に満ちたもので、参加者の八割は第三世界側。ここにこそ、

私たちの分科会に迎えたい人がいると、即席のカードをつくって手渡した。「発展は果たして女性の地位向上につながるだろうか。日本の女たちが、あなたと話したいと願っている。明朝十時、××教室へ……」。手書きポスターも貼り出した。各紙の報道で、私たちのテーマが「高度工業化社会の中の日本女性」「雇用における平等と権利」「女性と発展」「高度工業化社会の迷路」など、さまざまに伝えられているのは、以上の経過を反映したものである。「明暗」が「迷路」と誤って記載されているのは、日本の報道陣の忙しさの証拠であろう。

\*

ところでかんじんの内容の準備はまだだった。三人のスピーカーは決まっていたが、東京と名古屋に分かれ住むため、電話で簡単に打ち合わせただけでコペンについてから内容をつめる予定だった。へあごろ側からの参加者一同は、出発ぎりぎりまでパンフの製作に追われ、当日の事務分担を申し合わせていただけ。前日の夕方、ようやく全員が顔を合わせ、スピーチの概要を前もって日本語で説明、

質疑応答は全員が理解できるよう通訳つきで行なうこと、回答は、法律・大脇雅子、労働・山村ふさ、買春・高橋喜久江など、それぞれの専門家が主にあたること、司会は大石まゆみ・河野則子、副司会は青山三枝・山下智恵子と決めた。三人のスピーカーが互いの原稿を交換しあったのは夜十時、修正を終えたときは十二時を回っていた。

#### 女性差別・平和・買春観光で連帯を

はたして人が入るか心配した翌朝の会場は、八〇席に二〇のいすを追加してもたりないほどの入りとなった。特に第三世界の人々が多く、定刻十分すぎ開会。

大石さんのあいさつのあと、基調スピーチで会を始めた。

斎藤 日本は経済大国といわれているが、私たちのような普通の女がこの会議に参加するのは容易ではない。しかし、皆さん方にぜひ話し合いたく参加した。戦後の憲法で男女平等が保障され、戦前に比べれば目を見張る進歩があるにもかかわらず、日本の女性の地位はまだ非常に低く、私たちを取り巻く環境には多くの問

題がある。これを国際的な視点で話し合いたいたためだ。また、私たちの近隣のアジア諸国の女性たちも非常な苦境にあるが、会議参加はおろか、出国が難しい国さえある。これらの問題をアピールし、共に考えたいというのが主な目的である。

日本の女の状況については概要をパンフにまとめて来たので、要点だけを紹介する。女子雇用労働者の平均賃金は男の五六・二%、つまり、男が一時間で得られる報酬を得るためには女は二時間近く働かなければならない(ホーツという声)。また女は就職段階から差別され、正規の職員にはなりにくく、雇用労働者の約二〇%はパートタイマーとして無権利に近い状態で働いており、時間あたりの報酬は男の四二%と、さらに低くなっている。さらにその下にはパートにさえ就けない家内労働者があり、これは男の二三%の賃金。男が一時間で得る報酬を稼ぐためには四時間二一分も働かなければならない(ウーンという声)。そして、不況になると真先に職を失うのは、女、特にパートタイマーと家内労働者だ。しかも、このような低賃金は、就労期間中だけでは

なく、退職後も女を苦しめ続ける。すなわち年金は男の半分以下にすぎない。パートタイマーや家内労働者に至っては、勤労所得を基礎とする年金さえつかない(オーツの声)。

日本は失業率の低いことで知られるが、これは最も大きな潜在失業者、すなわち専業主婦や家内労働者を計上していないためであって、この莫大な産業予備軍は女性の低賃金の温床となっている。

このようなひどい状況がつくられていく最大の原因は、性別役割分業が厳存していることにある。子を持つ母が働き続けるのには多くの障害があり、保育所や学童保育も完備していない。したがって女子の平均勤続年齢は短く、これが低賃金に対する企業側の絶好の口実になっている。私たちは、こうした苦境に対してたたかい続けてきたが、たたかいは非常に苦しい。残念なことに意思決定部門にいる女性はずか〇・三%にすぎず、日本の社会を動かしているのは男たちなのだ(一斉にうなずく)。

昨今、日本商品の世界市場進出が各国の問題になり、各国は高い関税を課して

日本製品の障壁にしようとしているが、日本製品が経済的競争力を持っているのは、女性の低賃金が基本になっているからだ(そうだったの、の声)。会場の皆さんに訴えたい。日本製品に高い関税を課す代わりに、日本の政府に、「日本の女の低賃金を改めない限りは日本製品を買わない」とアピールしてほしい(それはいい、ぜひ支持したい、などの声、声)。

もう一つ、非常に深刻な問題がある。

このような工業化により、環境が著しく破壊され、生命や生活がおびやかされていることである。日本は物質文明は進み、電化製品の普及率は世界屈指だが、工業化は、自然を破壊しただけでなく、日本人の精神も破壊した。山々は削られ、河川には工業廃棄物が満ち、汚染された魚を食べたために命を落としたり長い病床にいつている人もいる。工場のベルトコンベアは高速になり、合理化による人べらしで女子工場労働者の労働は以前よりも苛酷なものになった。定位置を離れることができないため、トイレにも行けず、縛尿症という新しい型の膀胱炎さえ発生、職業病として問題になっている。(オーツ

という声)。第三世界の方々に心から訴えたい。工業先進国としての日本に学ぼうという動きがあるが、日本の近代化は何をもたらしただかを、よく見つめてほしい。物質的な「発展」は、女性の地位向上には役立たなかつた。私たちの歴史を、大きな警告として受けとめてほしい(大きくうなずく)。

工業化と女性の低賃金によって、最も大きな利益を得たのは、大企業である。彼らはいま、次のステップ、すなわち第三世界への企業進出を目指している。日本の女性は、母性を保障されていないために長期の就労ができず、そのことが不平等を拡大している。このため、私たちは、母性保障と平等の両方が共に必要だと考えて、母性保障の拡充と、男女雇用平等法のためにたたかっているが、もしも採用時点での差別に対する罰則を伴わない不完全な形の平等法で同一賃金だけが保障されると、企業は躊躇なく東南アジアなどに工場を移すだろう。そして今の日本と同じように低賃金の女子労働者を使おうとするだろう。こういう事態が起きないよう、私たちは必死の努力をす

るが、皆さん方も、ぜひ共闘してほしい(やります、の声、声)。

さらにもう一つ、ここで私たちが真剣に考えたいのは、世界的な工業化の傾向が何をもたらすかということである。結論を言えば、戦争の危険を感じる。カンボジアで、アフガニスタンで、中近東で、いま戦争が起きているが、その陰には米ソや西欧の兵器商人が暗躍していることは知られている(欧米系の人々、複雑な表情)。製造した兵器は売りさばかなければもどがとれない。宇宙にさえも無数の軍事衛星が打ち上げられていることを、世界で唯一一つ核爆弾を経験した国の人間として、深く憂慮せずにはいられない。

科学は、本来、人間の生活を向上させるためのものだはずである。その科学が、人間の生活をその根底からおびやかしていることを、高度工業化社会に住む女として、心から嘆かずにはいられない。私は、世界の女が手をつなげば、女性の生活がたちどころに向上し、平和を守れると考えるほど樂觀的ではないが、少なくとも、私たちの目指すフェミニズムとは、人権尊重のたたかいである。それは

戦争を阻止する力となることを信じたい。平和のために私たちは、いまこそ手を結ぼう(そうだ、そうだの声)。

私たちの祖母の時代には十里四方のことを知っていれば生活が成り立ったが、いま地球は狭くなり、世界のどの地点で起きた出来事でも私たちの生活に直接間接に影響している。あなた方の成果は、即、私たちの成果となり、あなた方の失敗は私たちにも影響する。日本の女性運動は、欧米の運動から大きな刺激を受けた。私たちは欧米の情報に敏感だが、欧米諸国の人々は、日本やアジアの事情を十分ご存じないように見える。

その一例として、東南アジアの買春観光の問題がある。日本で売春防止法が制定されて以来、日本の男たちは、韓国・台湾・フィリピン・タイなどに、観光買春に出かけている。安くてサービスがよいというのが男たちのせりふだが、なぜ安いのかといえば、一般に女子労働者が低賃金だからだ。こうして観光買春はふえ続けている。残念なことに、東南アジアの女性のサービスのよさはいち早く西欧諸国にも伝えられ、西欧からの観光買春も

ふえている。かつて日本のゲイシャが世界の男たちを喜ばせたことを思い、深く心痛まずにはいられない。売春婦を責めてはならない。問題は、貧困と女性差別をなくすことである。

私たちは、この問題に関し、身近にいる日本の男の一人一人に激しく抗議することから運動を始めている。日本の女は長い間、男を甘やかし続けてきたが、それは他国の女を苦しめる結果になることにやっと気がついたのだ。こうした運動は、国際的連帯の下に行なえばより効果的になる。私たちは国内での運動をすめるとともに、国際的運動も展開したいと考えている。(やりましょう、の声)。

日本には根強い女性差別があり、その中でたたかいは困難だが、小さな雨だれもいつか岩に穴をうがつことを信じ、草の根の運動を続けたいと願っている。皆さんのほとんどは、テレビ・ラジオ・時計・カメラなど、日本製品をごらんになったことがあると思うが、それを作っている日本の女の生活についてはあまりお考えにならなかったと思う。どうかこれを機会に、日本の製品を見るたびに、

日本の女たちと、その困難なたたかいを思っしてほしい。私たちの勝利は、世界の、特にアジアの女たちの生活にもいい影響を与えることを考え、できるかぎりの努力を続けたいと思う(拍手)。

### 長い歳月をかけて勝訴

大石 たたかいは困難だが、たたかいはる勝利も少しずつかちとれるようになった。その具体例を弁護士の大脇雅子さんが報告する。

大脇 一九六〇年代の高度経済成長期に日本の女子労働者数は増大し、新しい職業分野が開けるとともに女たちは生涯かけて働き続けたいと思い始めた。しかし日本の使用者はこれを好まず、結婚や出産を機会に退職させ、子育て後にパートとして採用しようとしている。しかし女たちは必ずしもこうした条件や制度に甘んじているわけではない。不当な性差別撤廃のためのたたかいを続けている。

日本の裁判所は、性差別に関して、最近三つの注目すべき判決を下したが、これは日本の女性の地位を示すとともに女たちを勇気づけるものである。

第一例は、一九七九年三月、中本ミヨ対日産自動車株式会社間で、定年年齢男六〇歳対女五五歳という労働協約の効力が争われたものである。会社は、女は単純労働に適し、男のように長く働き続ける必要はないと主張、さらに男女は生理能力に差があるので、同じ待遇はできないと主張したが、裁判所は、「女も男と同じように処遇すべきであり、平等の原理は定年制においても基礎的な法理だ」と宣言した(拍手)が、勝利のとき、彼女はすでに六〇歳に達していたため、職場に復帰できなかった。中本ミヨはこの訴訟に十年の歳月を費やしていたのである(ホーッとという声)。

第二例は、立中修子対東洋鋼板株式会社との事件である。一九六九年三月に彼女は出産したが、産後休暇が終わる三日前に、会社は彼女を研究所の購買部から独身寮の事務へ配置した。子を持つ女は半人前というのが理由だった。日本の労働基準法は一歳未満の乳児を育てる母に、一日二回各三〇分の育児時間の請求権を認めているが、会社は、「それゆえに女

性は効率が悪いから、業務運営上、配転した」と主張した。裁判所は驚くべきことにこれを受け入れ（オーツの声）、彼女は敗れた。ILO—〇三号母性保護条約は、育児時間は労働対価として取り扱うよう規定しているのにもかかわらず……。

しかも彼女は再び訴訟を起こし、労組の援助も得て、和解により現職に復帰した。この訴訟の間、彼女は規則的にピラを配り続け、いろいろな集会に出かけた。彼女の仲間たちは、子どもを育てながら働き続ける彼女を支援し、勝利を手にしたのである。裁判に十年をかけて働く権利を取り戻した竹中さんは、若い女たちに言った。「働く権利は貴重です。簡単に働くのをやめないように！」彼女はたたかいの間にさらに二人の子を産んだ（グッド！の声）。

第三例は、山本和子対鈴鹿市の事件である。日本の中部にあるこの小都市の市長は保守的で、彼女の能力を有効に使うことなどは考えもしなかった。民間企業では差別は著しいが公共企業体は男女同一待遇が建前で、法律にもそう書いてある——と彼女は長い間考え続けていた。

四八歳まで彼女は待った。が、同期に入ったすべての男性が昇格し、彼女一人が取り残されたとき、理由は「女だから」としか考えられなかった。どう考えても彼女には自分の仕事が男に劣るとは思われなかった。彼女は市長や上司に理由をたずねたが明確な答えはなかった。職場の女性同僚は要望書に署名して提出した効果がなかった。労組に援助を頼み、労働基準監督署や人権擁護局にも相談に行ったが効果はなかった。

ついに彼女は、昇格差別による賃金差と、差別を受けた慰謝料の支払いを求めて訴訟を起こした。最初は数十名しか支援者がなかったが、七年七か月後の一九八〇年三月、勝訴し、裁判所は百万円の慰謝料の支払いを市に命じた（拍手）。これは男女差別による慰謝料の支払いが認められた我が国初のケースとなった。この事件は、現在、市が控訴し係属中だが、今では二四〇団体と三〇〇名の人々が支援しており、彼女はこれを一〇〇〇名に広げようとキャンペーン中である。ある新聞はこう書いた。「彼女の努力と意思はたぐい稀れなものだ。もし市が彼女の

努力や情熱を活用していたら、地域住民のために、いかに有益だったか。実に惜しい人と争ったものだ」（オーツという声）。

日本の女性たちはさまざまな性差別とたたかい続けているが、雇用上の差別は深くかつ強力で、解消は難しい。そのための三つの活動について話そう。

第一は、採用時点から差別があり、四年制大卒の就職が困難なため、就職をあきらめて結婚すること。これに對し私たちは雇用の機会均等を法律によってもたらそうと、雇用平等法の立法運動を展開している。

第二は、教育における差別の是正である。日本では男は技術、女は家庭という課目のふりわけが中学校課程で行なわれ、家庭科で、女の役割は家事育児にあると教えられている。

第三は、労組運動の中に女性解放運動を正しく位置づけることである。女たちが雑用的な単純定形作業に固定されるのを打破するためには、どうしてもこれが必要である。そして労働時間短縮を勝ちとり、いま主婦が担っている公害運動や

地域活動にも参加していかなければならぬ。

私は、女性解放運動は、労働・生活・文化の質を変え、新しい人間関係を創造し、社会を変革する運動だと確信している。あらゆる形態の女性差別撤廃条約やILO一〇三号条約等の批准運動を通して、私たちはさらに世界の女たちと連帯して運動をすすめたい（拍手）。

### 草の根グループと行政が連帯して

大石 では最後に、一主婦としての運動から出発し、地方自治体に働きかけた高橋ますみさんを紹介する。

高橋 私は、日本の中部にある、日本第三の都市、名古屋から派遣されて来た。私がここに来るに至った過程を話したい。

メキシコで採択された「世界行動計画」の序章には、「家庭および社会の中で両性に伝統的に割当てられてきた機能および役割の再検討と、男女の伝統的役割を変える必要性の認識」が強調されており、この新しい発想は日本の女性を勇気づけた。日本の女性たちは、それまでは、職場で働いている女性でさえも、家事・育

児・老人の介護は女性の役割と思ひ込み、日常的に最終的な責任を背負い込んでいた。家事や育児は男性と平等に分担すべきだという指摘は、私たちを精神的負担からどんなに解放したかわからない。結婚後も働き続けたいと願う女性たちは、十五年前には、個人的に子守りを探すか、共同保育所をつくるための仲間づくりや資金集めから始めなければならなかったのだ（人々うなずく）。

家事・育児の責任を負う日本の女性に對し、職場の男女差別も激しかった。これは私自身の体験だが、私が大学卒業後すぐ就職したテレビ会社では、結婚を理由に退職勧告を受けたし（エエツという声で、定年は男性五五歳に對し、女性は三〇歳だった（「いま三〇歳と聞こえたが、言いまちがいでないのか、ほんとに三〇歳か」の質問が入る。「まちがいない三〇歳」と答えると、驚きのどよめき）。一〇年に及ぶ法廷闘争で、私たちはようやく女も男と同じく五五歳まで働き続けられる権利を獲得したが、この会社では、その後、女性の正社員採用を中止し、一年契約の嘱託かパートタイマーの雇用に

切り換えた。一つの問題が解決すると、もっと困難な難しい問題が起こるというのが日本の現状であり、女性差別の根はきわめて深くかつ広い。

名古屋市の場合、一九七六年の調査では一二・七％に定年差別があり、賃金は男の五六・二％である。子育て後就労を希望する女性がふえているが、採用には年齢制限があり、終身雇用制をとる日本の企業で、中年すぎの女の就労はいっそうきびしい。労組も活動家のほとんどが男性のため、婦人問題の取り組みが遅れている。

しかし、国際婦人年以後、日本では草の根グループの活動が盛んになってきた。私たち草の根グループは協力して、私たちの望む市長をついに選出した（拍手）。このため、名古屋市の場合は、行政と草の根グループが対等に協力関係を持ちながら、一つ一つの問題に具体的に取り組んでいる。一九七七年には名古屋市婦人問題担当室が設立され、市政のあらゆる面を婦人問題の視点でチェックするようになり、そのための三つの柱が設けられた。

第一は、学識経験者一五人から成る「婦

人問題懇話会」で、大学教授・女性弁護士・女流作家・女性ジャーナリストなどがメンバーである。委員たちは二年間を費やして、市内の婦人たちの生活を、生涯教育・労働・母性保障・老後・国際交流など、さまざまな面から調査研究し、その問題点を「女性から市民・自治体への提言」として市議会と行政に提案した。この提言の一つが実現して、私たち一六人は市からの助成金を得てここに來ることができた（大きな拍手）。

『提言』は、このほか、女性の政策決定への参加促進や、労働苦情相談所、婦人問題情報資料センターの設置などを提案している。

第二は、「名古屋市女性のつどい」の開催である。講演や高校における男女平等教育の実践報告を聞いたり、労働と女性に関するパネル討論などを実施している。昨冬は、国内在籍の諸外国の女性を招いて国際交流のつどいも持った。

第三は、市行政の職員で組織される婦人問題推進協議会」の活動がある。市長や行政の指導者が婦人問題を研究し、市政に反映する努力を行なっている。市職

員の採用は、従来は男女別だったが成績順に採用されるようになった。従来女性に閉ざされていた機械・電気・土木等の専門分野にも門戸が開かれた。職員研修に婦人問題が取り入れられ、市政の審議会への女性の参加は、一〇%から二〇%に引き上げられることになった。

このように、草の根グループとの対等な協力により名古屋市は数々の成果をあげたが、これは日本の自治体では非常に珍しい例である。しかし、日本の差別は根深く、女性たちの多くは、長い習慣から女性が差別されていることさえ感じないでいる。これらの女性たちや男性たちを、敵対関係でなく、どうやって私たちが仲間に引き込み、意識変革し、諸権利を獲得してゆくかが、今後の私たちの大きな課題である（拍手）。

\*

身を乗り出して大きくうなづく人たちのスピーチにも力強い大きな拍手が、連帯のあかしのうように湧きおこり、続く質疑応答には、何本もの手が一斉に上がった。

### 【質疑応答】

問（バキスタン）日本の売春婦の実態と、その社会復帰について聞きたい。

（高橋喜久江）二四年前、売春防止法が施行され、表向きは売春婦はいない。しかしもぐりの売春婦は絶えない。社会

復帰の施設は、売春防止法により各都道府県に設置されている。売春婦の中には更生した人もいるし、嬌風会の中には「未婚の母の家」も設けられている。売春の状況についての英文パンフも持参したので必要な人は買ってほしい。

問（インドネシア）買春観光の話がスピーチの中にあつたが、韓国や台湾だけでなく、私たちの国もいまいい日本男たちの遊び場になって困っている。しかも、ツーリスト向けの女が存在が、堂々とCMでうたわれている。これは、どんどん排除しなければと思っている。

現地の日本人を観察するのに、どうも根本的なあやまりは、日本の主婦の家庭教育にあるようだ。女の子と男の子を区別し、何事も男の子を最優先しているじやないか（共感の拍手起こる）。

日本商品進出に対するシニカルな表現には深い感銘を受けた。ホンダやカメラを見ると、日本の女たちの涙と汗を思い出し、日本の女に協力したい(拍手)。(斎藤)買春観光の問題は、さつきも言ったように、私たちのまことに心痛むところである。国内でできるだけ努力するが、これは国際的協力なしには絶滅は難しい。ぜひ共闘したい(拍手)。主婦の意識は全くご指摘のとおりで、これには私たちもいつも頭を痛めている。主婦が変わらないかぎり日本の女の情況はよくならないと私たちは言い続け、意識変革のための雑誌や本を作ったり、講座を設けている。日本では長い間、男に仕えるのが女の最高の美德とされてきたため、容易には改まらないが努力を続けるつもりだ。夫や男の子を甘やかすことがどんなに他国の女を傷つけるか、私たちもやつと気がつくようになった。かつて東南アジアのある女性に、「日本の男は夜の町では気前よく金を使うのに、工場労働者はなぜ低賃金に抑えるのか」と言われ、返すことがなかった。日本の男の日常生活が外国でも示されるのであり、これは

私たちの国内での運動が不十分なためだ。あなたの国の方が、もしそういう扱いを受けたときには、「この金は工場労働者に支払われるべきものだ」と言って投げ返してほしい。日本の男は外人には弱いので、外国の女性に言われると肝に銘じる。

また、日本の女性差別については、日本商品を手にしたとき、「これは女性の低賃金に支えられているのではないか」と言ってもらうだけでも効果がある。

(大石)買春観光についてつけ加える。私たちは反対運動を続けており、たとえば買春旅行業者のブラックリストを作り、その業者はбойコットしている。買春観光には三つの問題点がある。第一に女性差別、第二に他国の差別、第三に強者、たとえば工業国の、途上国差別だ。国際的な運動を展開しよう(間髪を入れず)「女性連合を作ろう!」の声。共感の笑い声ドツと。

(高橋喜久江)百年前、日本の女は「からゆきさん」として他国に流れていた。現在経済力だけではできたが心は貧しくなり、日本の男がアジアの女たちを性的搾

取している。それについてのスライドを作ってキャンペーンしているので見てほしい。

問 (アメリカ)日本の女性は労働組合から、教育その他具体的な恩恵を受けていないのか。

(山村)日本の労組は戦後やつと形成され、今も企業別組合の域を出ていない。しかし連合体をつくり政府と交渉し、特に賃金面では効果をあげている。また出産休暇や育児休暇をたたかいてきた。「有給か」の声。「無給だ」と答えるとき笑い声。組合の活動は、生活と権利・平和を守る運動が主で、企業内の職業教育はほとんどない。買春観光は一部の組合が取り上げただけだ。

(斎藤)労組が賃金や母性保護で頑張っているのは事実だが、組合の幹部はほとんど男で(エエツの声)、女の問題の取り組みが弱いところに大きな問題がある。大体、女子労働者の三分の一しか組織化されていないのがそもそも問題だ。私たちは大労組対象の調査を何度か行なったが、女子労働者への攻勢は労働者全体の問題であるにもかかわらず、男の組合幹

部が女の問題に実に鈍感なのに驚いている。

(アメリカ) 女性リーダーがふえることが緊急だと思う。日本から女性リーダーが組合にふえたという手紙が来る日 waiting (拍手)。

(大脇) 労組が力にならない理由の一つは企業別組合だということだ。ある市の交通局が女だけを退職させようとしたとき、組合はそれに同意した(ホーツの声)。私たち女のグループが組合を説得して中止させたが(拍手)、組合の中の男たちの考えを変えることが重要だ。男の再教育講座を設けることを主張している(グツド! の声)。

問 (デンマーク) 女性だけの労組はあるか。

(大脇) 零細企業やパートの組合でわずかながらあるだけだ。

問 (トルコ) 女性が工場で働ける最低年齢は。

(河野) 義務教育を終えた一五歳から。しかし九五%の女性は高校に進学する。全女性の三分の一が大学に行く。

問 (トルコ) 結婚は何歳から許されるか。(河野) 家族法では一六歳からだだが、通

例二〇歳すぎてから結婚する。

問 (白人) 日本の売春の原因は?

(高橋喜久江) 以前は貧困だったが、最近は性非行だ(ノーという声、外人席とへあーら)の双方から起こる)。

(イギリス) 今の答えは承服しかねる。売春の理由は複雑なはずだ。

(司会) その問題は、あとでコーヒーでも飲みながら論じたい。

(イギリス) 午後、アメリカ人と売春の分科会を持つのでそこで話し合いたい。

問 (アメリカ) 名古屋市の話を聞いて非常に感銘を受けた。どうして名古屋市がそんなに成功したのか。

(高橋ますみ) まず市長を選ぶとき、婦人問題に関心のある革新候補を婦人団体が支援して選挙に勝ち、草の根グループと行政が一緒になって地位向上に積極的に取り組んだためだ。私たちの選んだ女性市議もここにいたので紹介する。

(本谷市議) よい市長を選び、それを支持してきたことが大きいと思う(拍手)。名古屋には一六の区があるが、市の助成で各区から一名ずつ代表がここに来た一六名立ち上がる。ビューティフル! グッ

ド! の声が場内に満ち、ひととき大きな拍手。すばらしい! と一同大喜び)。

問 (アメリカ) 女性運動の成功に反対する勢力はないのか。

(斎藤) 明らかな反対グループはないが、男たちは内心では快く思っていない。が、国際婦人年以降は表立った反対はできなくなった。また四八の大きな婦人団体が連帯し、女性差別撤廃条約の署名もやつとOKされたが、批准まではまだ大変で、今後の私たちの運動にかかっている。

(河上) あからさまな反対はないが、「トータル・ウイメン」が爆発的に売れるような風土がある。

問 (カナダ) 日本政府は母子福祉や未婚の母の家制度を考えているか。

(河野) 母子福祉法があり、母子福祉年金を支給。母子寮など住宅のめんどろを見ています。生活保護も受けられる。ただし額は最低。未婚の母は約三万五千といわれるが、特別の公的施設はない。

問 (スウェーデン) 夫死亡後の妻の年金は。

(合田) 夫が生前二〇年以上掛金を払い込んでいると、夫の受けられるはずの年

金の半額を受給できる。最低保証は年間四八万円。これを七〇％に上げるよう運動中。妻が死んだ場合は夫は一〇〇％受給できる（ホーツの声）。母子年金は、一八歳になると打ち切られる。企業からの遺族年金が出ている場合は三分の一にカットされる。

問（アメリカ）同一労働同一賃金は法律で保障されているか。

（大脇）同一賃金を保障する簡単な条文はあるが、同一待遇の保障はない。男女雇用平等法を運動中。

問（ナイジェリア）公務員と一般企業の社員は待遇の差があるのか。

（斎藤）公務員は身分が保障されており、差別も少ない。母性保障等も平均的な企業よりは恵まれているが女性の採用は少ない。

問（ナイジェリア）勤務時間中の災害は保障されるか。

（大脇）労働災害保障保険法で保障されている。

問（アメリカ）妊娠による解雇はあるか。（河野）規約にうたっているところはないが、そういう慣行があった。それを防

ぐ法律はまだないが、慣行は最近次第に改善されつつある。

問（アメリカ）科学技術部門に就職可能か。

（斎藤）不可能ではないが極めて稀れ。就職しても補助業務に回されることが多く、文科系以上に深刻な問題になっている。

問（アメリカ）理科系に進学できるか。

（斎藤）もちろん可能だが、進学率は低い。（ドイツ）女性弁護士士の比率は。

（大脇）全弁護士士の三〇％。

問（オランダ）フィリップス社が日本に工場を移し、失業問題が深刻になっているが……。

（斎藤）世界的に、労賃の安いところに工場移転が行なわれ問題になっている。いまや、一国の低賃金はその国だけの問題ではなくなった。日本の女子労働者の低賃金問題の解決に、ぜひ力を貸してほしい。

その他、母性保障の内容、男も育児休暇がとれるか、不平等の提訴機関の有無、女性はどこまで昇進できるか等、質問が続出した。午前と午後の二回集会を開いたが、第三世界の人が過半数を占めて非

常に活気にあふれた午前比べ、午後にはほとんど白人で、人数も五〇人程度に半減、細かい専門的な質問が多く、午後の参加者の大部分はプログラムを見て訪れた人々で、プログラムどおりの、いかめしいテーマと専門的な内容を期待していたのではないかと推測される。

最後に、山口のり子さんと河上友子さんが別記アピールを読みあげたあと、高橋喜久江さん持参の観光売春の実情のスライドを希望者に見せて閉会した。

なお、会場で配布したアンケートの結果は次のとおり。シスターフッドにあふれた内容だった。回答は、参加者数に比べ、第三世界の人々のものが少ないが、母国語以外のことを書くハンデイがあったのかもしれない。会場では、「日本の企業進出に立腹していたが、日本の女性も大変な状況にいること、今後連帯できることがよくわかってうれしかった」という声が、第三世界の人々から特に多く寄せられた。これを機会に、今後、英文のニューズレターを出し、連帯を深めたいと願っている。

### 「あいら」の分科会のアンケート

- 一、私たちの分科会についてのご感想
- 二、あなたは、お国で、女性差別に反対する活動に参加していますか？
- 三、あなたは、日本および日本の女性について、どんなことを知りたいとお思いですか？

### 【インドネシア】

R. SYDANNY

- 一、このワークショップは大変おもしろい。あなた方の協力も大変よい。
- 二、インドネシア女性評議会委員、女性差別撤廃運動に参加することが、女性組織における我々の計画で、まさに問題になっている。
- 三、雇用平等法について。女性に対する政策がないことについて。退職後、政府は老後の援助をするかということについて。

M. YUSUF

- 一、このワークショップは大変重要で、日本における女性の地位が悪い状態について我々の目を開いた。
- 二、教育の観点から参加している。
- 三、日本女性の抱負。問題を解決しよう

とする方法。

H. RRANI

- 一、よかった。
- 三、いろいろ知りたい。

### 【タイ】

R. C. SANTAPULRA

- 一、政治への進出を喜ぶ。それによって女性運動のすべての役割が成功に向かうだろう。
- 二、メキシコでの世界会議以来五年間、ウーマンリブのために闘っている女性弁護士組合の前議長。NOWT議長。
- 三、労働法について、そして、それがどのようにに実施されているか知りたい。

全国労働発展審議会の代議員。

### 【パキスタン】

T. AHOIAD

- 一、よくまとまっていた。
- 二、ジャーナリストとして、社会における女性の問題を書いている。
- 三、売春。指導的女性の。

### 【ホンコン】

H. HAMADOUCH

- 一、非常におもしろかった。日本の女性について、その主張、人生について多くのことを学んだ。もっと知りたい。
- 二、いいえ。しかし、婦人科医をしており、女性の権利侵害に対する民間女性

グループのメンバーである。

- 三、日本女性の男性との、また、家族との関係。因襲的な生活から現代の生活にどのようにして発展したのかについて。

### 【ナイジェリア】

H. CHUKWUMA

- 一、OK、よくまとまっていた。しかしなぜパンフレットを売ったのか。
- 二、ナイジェリアでは、女性団体の全国会議は、労働、教育、家族、相続における女性の地位の問題に取り組んでいる。
- 三、日本の女性は自立しているか。産業や科学技術に従事しているか。そして、それはどんなレベルでか。外国語を勉強しているかどうか。

N. BARENDREGT

- 一、おもしろかった。
- 二、はい。
- 三、社会の、男女の役割を変えていこうとする考えが進んでいるか。労働者の力や参加意識は進んでいるか。

### 【イタリア】

C. HEMSTED

- 一、パンフレットが大変よい。労働条件に関する写真や資料が豊富だ。通訳に關しては少し問題がある。
- 二、ローマの国連食糧農業機関(FAD)で、職員組合(専門職の連合)および

FADの職員からなる女性グループに参加している。

三、芸術、工芸において（画家、陶芸家）、日本の女性には活動的か。価格・取り上げられ方において平等な扱いを受けているか。

### 【フランス】

#### C. MARZE

一、フランスのグルノーブルであなた方の組織を知った。売春に関して、男性を数年間投獄するという裁判があった。

二、売春擁護に反対する“LeRd”と呼ばれるカリタス組織。

### 【西ドイツ】

#### L. SEIDEL

一、よかった。

二、国際大学婦人協会のメンバー。メンバーのうち何人かはフェミニスト。

三、完全に西洋化されているか否か。日本の家庭における伝統の役割。職業教育以外の女子教育。

### 【東ドイツ】

#### H. SCHERNAIL

一、あなた方のワークショップに出てよかった。あなた方の問題は私たち自身の問題と似ていることがわかり、非常に興味深かった。

三、働く女性が時間外労働をするときは、

子どもはどこにあずけるのか。幼稚園はあるか。婦人のための組合の状況は。●世界平和に関する考えを交換するために住所を知りたい。

### 【オランダ】

#### A. L. vos van THYR

一、はい。

三、すべて。

#### T. van HEENIK

二、大学で女性学を勉強している。いろいろな講演をしたり、女性グループの研究をしている。

三、フェミニスト運動は、どのように組織されているか。労働条件について。

### 【ベルギー】

#### H. TAK

二、はい。

三、反差別。法律制定。

匿名

一、西側工業国では、外の仕事を精神的救いおよび自由とみなし、家庭内での仕事に完全に圧迫を与えている。あなたの国では、家で働くことを本当に社会的に有用な仕事として、認めるように主張するグループがあるか。また、あなたは、家庭内で働いている親や、この仕事に対する一時手当についての法律を要求しているか。

匿名

一、工業国は、人間関係に注意を払わなければならない。したがって、育児は国民生産高の計算に入れられなければならない。

三、子どもを持つている女性に対して、

政府および施設の支援があるか（家で幼い子どもを教育する権利）。日本では、主婦に関する運動が何があるか。主婦について、および主婦の権利について。

#### L. de PAUW-DEVEEN

一、終わりがけに入ったので、批評できない。

二、別の組織、例えばM・Pに属している。

三、政治における女性。日本で役職に就いている女性。（一九七二年に私が日本にいたとき、役職にある男性は、私がベルギーで役職に就いていることを理解することも、受け入れることもできなかった。）

### 【デンマーク】

#### N. RASMUSSEN

一、日本の平等問題について聞くことができてとてもうれしかった。

、売春の問題は、私の最も注目していることの一つなので、特に関心をもってスピーチを聞いた。

二、デンマーク地位平等会議およびフェニスト運動。

三、日本における強姦と売春について知りたい。その現象はどのように見られ、どのように扱われているか。

E. BUCH-HANSEN

一、とても遅く来たので！

二、はい！

三、特に婦人団体について。

L. HAUBROE

一、最後の部分しか見られなかった。

二、私は婦人団体の会員ではあるが、活動はしていない。(ジャーナリストスクールの勉強のために婦人グループに入っている)。私たちは、社会的に、また自分の仕事を通して、互いに助け合っている。

三、職業、労働条件、婦人団体の状況。

F. SEVERT

一、すばらしかった。

二、結婚前のセックス。

L. VALBJERG

二、デンマーク地位平等会議。

K. STORGARD

二、いいえ。

三、女性に関することはなんでも知りたい。職業、学校、健康のこと。

〔フィンランド〕

J. JUUSELA

一、全部は出席できなかったが、おもしろかった。よい機会だったと思う。

二、フィンランドには、そのような問題はない。

三、昨年(一九七九年)日本を訪れた。

伝統および古い慣習は、どのように日本の女性の生き方に影響を及ぼしているか。

〔スウェーデン〕

M-B. FREDLUND

一、非常に有益で、興味深かった。

二、「女性センター」で、他の女性組織とともに、ボルノグラフィや売春など女性を性的な目的として使うことに反対して闘っている。

また、このセンターには、暴行を受けた女性から情報を受ける電話がある。三、女性の差別的な地位、その他あらゆる問題について。

L. J. WILLE

一、討論が終わったところに出席した。

二、「グループ8」という、スウェーデンの少シラジカルなグループに所属。

三、たくさんのこと。

日本は、非常に家長制度の国で、すべてが家族を基にして築き上げられて

いるように思われる。

P. CARLSSON

一、私は討論のなかばごろに来たが、大変おもしろかった。

二、いいえ。

三、①十五歳で働き始めるとして、もし何かが起こったときの保障は？

②離婚後は、誰が子どもの世話をするのか？

③妊娠中絶が、法律で認められているか？

④政治に参加している女性がたくさんいるか？

⑤男性と女性が助け合って、育児や家事をしているか？

⑥夫が妻が死んだら、国が会社から年金が出るか？

B. ONSELL

一、大変よかった。私は、日本の女性がそんなに差別されているとは知らなかった。講演の要約を手に入れ、会期中に討論することができますか？一九八〇年七月十五日は、あたたかで友好的な、興味深い日だった。

二、スウェーデンの女性の歴史についての著書がある。

三、宗教は女性の地位にどのような影響を与えているか？ 社会的に、経済的

に、セックスの面で、また観念的な面でも。

#### ロー・マツモト

- 一、皆さん助け合っって一体となって行動されている様子に、好感がもてました。日本人の暖かい性質を久しぶりに見て嬉しく思いました。この暖かさ、個としての自覚を発達させることが矛盾しないものだといいますが。
- 二、まだ。

今年の秋から始めるつもりです、日本。セクシズムに関して勉強しています。

売春婦が多くもらい、女工が薄給である理由——需要と供給の関係が主要を決定してのではないのでしょうか？売春婦より、客との間に入ってもうけている人の存在が許せないと思います。

#### 【ノルウェー】

##### A. YLESSELBERRY

- 一、非常におもしろく、有益だった。
- 二、ノルウェーの主婦の組織に属し、組織を通じて運動中。
- 三、発展途上国に対する計画をたくさんもっているか。国レベルで、どのくらい援助するのか。

#### 【イギリス】

##### J. PACINO

- 一、大変有益だった。女性に対する福祉給付について、もっと情報がほしい。
- 二、イギリスの売春組織。
- 三、売春。

##### R. BRADDOCK

- 一、おめでとう！とっても有益で、よく準備されていた。レポートのコピーがもつとあったほうがよかった。どのくらい用意したらよいか判断するのは難しいとは思いますが、十分でなかったと思う。
- 二、教育と雇用の分野。
- 三、すべてのこと。特に日本の教育における性差別と、教育制度一般に興味がある。また、この講演では扱われなかった女性の雇用に関することには、どんなことにも興味がある。

##### Research & Resources Centre

- 一、大変おもしろかった。そこからどういう結果が生じたかというような女性の生き方の背景をもう少し知りたかった。討論は、例えば結婚年齢、未婚の母などは少し混乱していたが。
- 二、女性解放運動に十年間かかわっている。
- 三、英文の資料を、どんなものでも送っ

てほしい。婦人問題調査資料センターは女性運動のための図書館で、女性に関するあらゆる資料を集めている。

##### T. OZNUMAZ

- 一、おもしろかった。
- 二、いいえ。

三、今日の日本の社会における女性の地位はどうであるか。

女性は、どんな商売でもしているのか。例えば、輸出入会社あるいは商店を持てるのか。

#### 【カナダ】

##### M. BROWN

- 一、すばらしかった。他の国の実情を知るのに大変役に立った。
- 二、法律をカナダ女性にとってより平等なものに変えていくように、カナダ政府に働きかける。全国女性法律協会、の全国運営委員会メンバー。
- 三、家族法はどうなっているか——例えば結婚がこわれたとき、財産分与を受けるか。日本では中絶法はどうなっているか。同等の仕事に対する同等の報酬についてはどうか。

##### P. COOPU

- 一、日本の女性が直面している問題に最も興味を持っている。

カナダ政府が、日本政府に対して、

カナダの輸出品を作っている労働者に高い労賃を払うことを促すように働きかけるロビイストとして働くつもりである。

二、女性に対する雇用の機会均等、同一価値の仕事に対する同一賃金、マスメディアにおける女性の性役割の固定化差別に直面している女性のための法的保護基金等の働きかけをしている。

三、すべてのこと。特に、多くの働く女性の数、女性労働者の年齢、給料、保育施設、女性および老人のための年金恩給に関する統計上の数字を知りたい。女性のうちの、主婦および失業者の割合。

情報を送ってほしい。こちらからも送る。

#### E. P. ELLIS

一、おもしろかった。日本女性特有の魅力をもつて、よく準備されていた。

二、アルバータ州の行政に携わっている。

三、我々は例年、日本政府から派遣される北海道の女性の来訪を受けている。多分あなた方は彼女たちとコンタクトをとって情報交換ができただろう。

#### 【アメリカ】

#### J. R. SIMONSON

一、スピーチも討論も大変おもしろかつた。

いろいろな観点があることを知り、また、パネルでの専門的な意見も聞けてよかった。

惜しいことに通訳が不十分だったが、途中から代わった人はすばらしかった。

二、アメリカの教育局で、全国女性教育計画審議会のディレクターをしている。三、あらゆるレベルでの、女性の教育に関するいろいろな情況——教育関係者の雇用、登録、コースのタイプ、職業教育など。

#### L. T. WASHINGTON

一、豊富な知識をもつた皆さんの女性に会えて、とても嬉しい。この分科会は、高貴な精神と、たくさん情報のもとに行なわれたように思う。

二、私たちは「女性の権利委員会」をもち、特に性差別に反対して闘っている。三、スピーチをした人たちのような日本人すべてに関心がある。

#### J. KEBER

一、すごく感激し、興奮した。

二、政党（野党で、大統領候補者を立てている）の女性幹部会に属している。

私たちは、女の拠点をもち、また、女性にとって非伝統的な職業（電気工・配管工など）のための訓練計画もある。

三、①日本の女性の労働組合活動。

②非伝統的職業における日本の女性。

#### M. WILSON

一、大変興味深い分科会だった。今まで日本の情況を知らなかったが、日本で何が起っているか、たくさん知ることができた。

二、仕事上で、女性に対する性差別的な悩みがある。

三、あなた方が考えていることすべて。労働運動も含めて、女性の行動に興味をもっている。

#### R. PEREA

一、非常に有益な、興味深い会だったが、日本の女性たちと、もつとたくさん話したかった。

二、合衆国で最大の組織、NOWに入っている。

三、仕事や社会的なおきて、平等条約のための組織等に関して、女性の進歩につながるような情報を得つづきたい。

#### L. M. GARRETT

一、大変よかった。日本の働く女性の気の毒な情況を知ることができて、よかった。

二、メソジスト教会の仕事を通じて活動。

#### S. HARDER

一、女性に対する差別が、工業発展の一部をなしているということがよくわか

った。ありがとう。

- 二、全国婦人行動計画実行のために活動している多くの団体や個人を含むグループの議長団の一員（パンフを添付）。
- 三、日本の女性の間には、平等問題に関して、どんなネットワークがあるのか、また、合衆国における私たちの組織のようなものとしては、日本にはどんな組織があって、どのような活動ができるのか知りたい。

#### J. TRICE

- 一、いろいろな事情がよくわかった。
- 二、はい、いくつか——。私たちは、この十月、ロスアンゼルスで、コペンハーゲンの報告会をすることになっている。私たちは「へあごらん」と連絡をとり、情報も送りたいと思っている。

#### H. DICKER

- 一、すばらしい。よく準備されていた。
- M.B. ARNELL**
- 一、とても有益だったし、礼儀正しく、りっぱな会だった。

- 二、はい。
- 三、①労働組合とはどのように関係しているか。

#### ②国際的な組織があるか。

#### D. AFTAB

- 一、日本のいろいろな問題に興味をもち、

信じられないようなパーセンテージにおどろいた。この事情はよく理解できないけれど、とてもよかったと思う。あなたの方が平等な地位を得られますように！

- 二、私は学校で男女別学に反対している。そして、日本の女性の働く権利が平等になるまで、日本製品をボイコットしようと思っている。

- 三、日本の女性は政治に参加しているのか。

もしペンバルになってくださる方があれば、お互いに日本やアメリカのことをもっとよくわかるようになると思う。フォーラムのような集いが日本であるなら、出席したいのだが……。

#### P. AFTAB-CARPIO

- 一、質疑応答のときの通訳がきちんかった。同時通訳だとよかったと思う。
- 二、ニューヨーク市人権委員会の書記として、雇用差別訴訟にかかわっている。また、女性の職場／勉学復帰を容易にするための両親をサポートする情報研修会を設けている。

- 三、働く女性のための保育施設。

また、日中、ベビーシッターを雇っている労働者に対する税金上の措置。

#### K. H. O'CONNOR

- 一、とてもおもしろかった。
- 二、はい。

- 三、石油問題などから見た国際的な経済発展に関する情報交換に興味をもつ日本の女性組織を知りたい。

#### M. R. METRY

- 一、非常にたくさんさんのよい質問があった。二、教科書その他教育における性差別をとり上げている。UNA/USAおよびWILIPのメンバー。

#### P. OKURA-LUBERG

- 一、とてもよかったが、①あごら②労働市場における女性についての主なデータ③関連する法律に関して、会議の公用語で書いたピラを配ったら、もっとよかったと思う。

- 二、ネットワークを通じて。特に、ワシントン女性エコノミストという専門職のグループ、そのほか平和運動などの女性グループで活動している。

- 三、平等な権利を獲得するまでの過程。

#### G. LOWE

- 一、この分科会は、私にとってはむずかしかった。
- 二、はい。

#### K. KYLE

- 三、日本の政治的動向についての情報。

# プロフェッショナルな仕事なら

## BOC ^



〒160 東京都新宿区新宿1-9-6  
TEL 東京(03)354-3941(代表)

- 印刷物の企画から印刷製本まで
- スライド・映画の製作
- 各国語ほん訳・通訳
- 講演・座談会等の速記・リライト
- 印刷物デザイン、コピー、撮影
- 取材記事作成
- その他各種専門職

# 世界の女性 幻影と現実

●新刊!! 女性の地位の文化的、政治的、経済的考察  
U・パドニス、I・マラニ著 鳥居千代香訳

四六判三八〇頁 価二、五〇〇円

アメリカ・ソ連・中国・日本・インド・エジプト・フィリピンなどの世界の国々の過去から現在に至るまでの歴史を振り返り、文化的、政治的、経済的な女性の地位の発展について知ることができ、他の国々の女性の地位と比較研究することによって、日本の女性の地位を客観的に把握することができ、「日本の女性の地位は開発途上国なみだ」と言われるが、日本の女性問題を考えるにあたって、どういふところが日本では遅れているのか、どういふ面を改革していかなければならないかを考えさせられる。女性問題について問われるのは、今や歴史の流れとなつていく。女性が自分たちの置かれている状況・立場・役割を改めて考え直し、自覚をし、今何をしなければならないかを考えてほしい。また男性も、有利な立場にしがみついたり、あぐらをかいだりしないで、もっと広く大きな心を持って女性問題を考え、女性の地位の向上、男女の差別のない真の両性の社会の実現に向かつて、共に努力してほしい。そして、日本はもちろんのことであるが、世界の女性の地位が更に向上し、男女平等が達成されることを願って本書を世に送る。

マッコヒイ編 性 差—その起源と役割 価一八〇〇円

M・ヘッグ著 スウェーデン女性解放の手引 価二二〇〇円

佐藤忠男他著 性役割意識を問う(月刊「家庭科教育」昭和五十五年七月増刊) 価九〇〇円

辻村輝雄編著 戦後信州女性史 価二八〇〇円

ランデイス著 結婚の理論(結婚を成功させるために) 価四五〇〇円

スチュアート著 離婚・別居の家庭と子供 価三二〇〇円

ピンセント著 未婚の母(その心理学的考察) 価三二〇〇円



# アンケートコペンハーゲン会議を取材して

コペンハーゲン会議は、「女と情報」の問題を考える意味でも、大きな問題を投げかけた。日本からは、メキシコ会議を上回る報道陣が送り込まれ、その多くは女性。昼夜をわかたぬ活躍ぶりが目立った。行動プログラムには、「マスメディアに女性を」の項目も特に盛り込まれているが、この会議の取材活動について、今後の問題点を、主要新聞社、放送局の女性取材者にアンケートしてみた。

毎日新聞社編集委員 増田れい子

## A、国連本会議について

- 1 全体の印象。よかったこと、よくなかったこと。
- 2 日本の代表について。
- 3 次回に望むこと。

## B、NGOフォーラムについて

- 1 全体の印象は。
- 2 日本からの参加者は。
- 3 次回に望むこと。

## C、日本のジャーナリストの取材活動

- 1 あなたご自身が、いちばん重点を置いたことは。
  - 2 日本のジャーナリストたちの活動は。
  - 3 発表された情報について。たとえば、送った原稿が手直しされたり、発表されなかったなど、問題はありませんか。
  - 4 マスコミに女性をふやすために望むこと。企業に対して、受け手に対して、社会に対して。
- D、その他のご意見
- (到着順に掲載)

## A、国連本会議について

- 1 子連れの人、車椅子の人、全盲の人が代表団にいたことが印象的でした。つまり問題の只中に現にいる人が代表団員であることのすばらしさです。だが、本会議の内容は、いまだし。つまり討論が出来ていないことが大問題です。これではPR会議です。
- 2 会議についてゆくのが精いっぱいという感じ。
- 3 討論集会の面を徹底させる。

## B、NGOフォーラムについて

- 1 活気があった。雑多であった。インティメイトであった。
- 2 懸命だった。
- 3 もっと会期を長く。討論集を出してほしい。

## C、日本のジャーナリストの取材活動

- 1 会議の意義。その積極的側面。
- 2 張り切り過ぎ。フォーラムに手がまわりかねた人が多い。
- 3 記者の活動全面支持だった。しかし、婦人問題を理解し

ようという動きはまだまだ。イベントだから大きく報道というところでしょう。

4 世界の婦人の状況・情報をもっと豊富に紙面に盛りこみたい。

#### D、その他

解放は自分の手で、女が、自分が、立ち上がらなければならな  
いと思いました。

#### NHK解説委員会 東浦めい

#### A、国連本会議について

1 メキシコと同様、世界各国からの女性が一堂に会したこ  
と。予想を超える多数の国々が、婦人差別撤廃条約に署名  
したことはよかった。ただし「国連婦人の十年後期行動プ  
ログラム」が、コンセンサスで採択できなかったことは、  
たいへん残念だった。

2 メキシコに比べ、政府が会議の重要性を認識しており、  
代表団の陣容も充実していたと思う。

3 世界全体が、今よりも平和、平等であることをもつとも  
期待する。

#### B、NGOフォーラムについて

1 地元デンマークとアメリカ女性のかげの努力が印象的だ  
った。価値観も違い、敵対しあう国々の女性たちが、各自  
が自己の主張を行なう場を持っていたことはすばらしいこ  
とだった。

2 自らのグループ独自の目的をもち、資料を用意して集会

を積極的に主催したこと。

3 民間会議全体の運営や資金調達についても、もっと積極  
的に援助協力すべきだと思う。

#### C、日本のジャーナストの取材活動

1 放送視聴者の男女に、正しく「世界会議」を理解しても  
らうこと。

2 派手なセレモニーやハブニング、特定のスター（男性に  
興味ある）などでなければ、ニュースになりにくいため、  
皆苦労したと思う。男性記者のなかには、ときにメール・  
ショービニストぶりが目につく人もあったが、メキシコの  
ときに比べれば、記者の扱いも格段に向上したと思う。国  
際問題の取材には経験のほとんどない婦人記者たちだが、  
それぞれ良い記事をかき、番組をつくっていたと自讃する。  
3 メキシコよりはるかに改善された。やゆ的な記事がほと  
んど無かったのは嬉しい。

ただ、あるTV局の番組のなかで、国内の出演者が、か  
なり男女差別的発言を行ない、せっかくのデンマーク取材  
を台なしにしていたと聞いて残念だった。

4 読者に対しては、迎合的な記事を峻別する目を養ってほ  
しい。

企業は社会的責任の一部として、女性をもっと採用すべ  
きだ。

社会は個々人の集団である。各自が自分の責任として、  
自己と周辺の人々の意識改革に努力すべきこと。さらに自  
分よりめぐまれない人に対する思いやりをもつこと。ひと

りてに社会が平等になるわけではない。

#### D、その他

いろいろあるが、デンマークという土地をあるいて、障害者、子ども、老人、他国人、への配慮が行なわれ、住みよい社会はまた、婦人にとっても平等な社会であるとの感を深くした。日本国内に、いま、福祉見直し論が有力になりつつあるが、見直すべき福祉の実態など現実が存在してはいない。女性が平等を志向するなから、はじめてその福祉社会も、また第三世界への共感も生まれるにちがいないと思う。

#### 朝日新聞社会学芸部 佐藤 洋子

#### A、国連本会議について

1 第三世界の女性たちの力強さ、底力のようなもの。自分たちのかかえている問題が困難であればあるほど、あらゆる機会に、強くその実情を伝えようとする力強さを感じた。

2 少し上品すぎて、ひ弱な感じ。それに日本の官僚の伝統が、表面をとりつくろいすぎているように思った。「何か具体的なことを、というとすぐお金のことをいうのは、品がない成り上がり国の感じ」という声もきいた。

3 八五年は、ぜひアフリカのどこかの国でやってほしいと思う。会議出席のアフリカのエリートと一般女性の落差も知りたいし、メキシコ、コペンに続いてアフリカという地理的バランスもある。

#### B、NGOフォーラムについて

1 一種の熱気を感じた。騒ぎを大きくしてアピールしよう

とする人、我れ関せずとひとつのテーマを息長く続けた人、しかし、いずれにしても、政府にはない自由な発想の中で実質的な国際的連携を探る姿勢が、女性問題全体の一步前進を感じさせた。

2 世界の女性と互角にわたりあえる語学力と見識を持つ女性、語学の力は乏しくとも、この問題を訴えねばという情熱を感じさせる人、日本の女性も力をつけてきたと思う。ツアーで一過性の人々も、次の機会には、たくさんの方所を見るよりも一か所に落ち着くことのプラスにも目を向けてくれるのではないかと思う。

3 コペンでの、テーマ十日間ぶつ通し、そして国際的ネットワーク作りのようなワークショップがもう少しふえるといいと思う。それと、コペンで果たせなかったNGOフォーラムと本会議との交流がもう少し具体的に考えられないかなお、託児施設はぜひ必要。

#### C、日本のジャーナリストの取材活動

1 官民問わず、会議に出席した人々個人の生活や日常性、そして、その背後に横たわる各国の女性一般の状況を知りたいと思った。

2 朝刊と夕刊があるための過重労働は、子どもを足元で遊ばせながらタイプを打つ他国の女性記者のように優雅にはいかないう労働だった。それにもまして、ヨーロッパ各地から応援にかけつけた記者は全部男性、女性特派員がいかにいないかという事実。

3 テレビ、他紙などは、ほとんど見る機会なし。自分の社

に限っていえば、扱いは、控え目であったようだが、丁寧に掲載を配慮してくれた。帰国後「女性会議に少し紙面を提供しすぎました」と社会部は冗談をいっていたが、少なくとも扱いについての不満はなかった。社会面、解説面、家庭面とも。

4 あらゆる部署に女性記者の目配りが必要。特に私自身が感じるのは、ひとつのセクションに一人いれば事たれりではなく、四十代の私に、三十代、二十代の女性の組み合わせが可能となったとき、幅も厚みも出てくると思う。

#### 読売新聞社婦人部 深尾 凱子

### A、国連本会議について

1 各国の首席代表の選ばれ方が、はからずもその国の婦人問題に対する考え方、意識を反映しているのがとても興味深かった。

2 日本の代表団の中には何人かの男性が含まれていたが、この会議を通して、あたかも眼からウロコが落ちたように、婦人問題こそ世界的に次の時代の最大な社会問題であることに気づき、日本が早くそのことに気がつかないと、大変なことになる、と真剣に考え始めた方がいます。これは日本にとって大いに喜ばしいことです。

3 国際政治と女性の問題は、切っても切れない関係にあるので、当然一九八五年会議も政治問題との深いからみの中で開かれるのだろうが、世界の女性たちの努力で、もう少し分類を上手にして、この会議を取材する男性ジャーナリ

ストたちに「政治的論議だけに終始した」という記事を書かせないようにしたい。

### B、NGOフォーラムについて

1 メキシコ会議の「トリビューン」に比べれば、分科会の数も多く、前進したのではなからうか。

2 やはりメキシコ会議の「トリビューン」における日本女性の活動に比べれば、はるかによく事前準備がなされていた。外国の女性に比べると、自己主張力はまだまだだが、ずいぶんがんばった。今後国際社会においては、日本男性より、日本女性の活躍ぶりのほうが活発になるのではないだろうか。

3 きちんと枠を作らず、あらゆる問題を抱えこんで、何とかさばいて生きてゆく——これが女の生活の象徴だから、民間女性会議も前回二つの会議と同じく、種々雑多でガヤガヤしたものでいいのではないか。

### C、日本のジャーナリストの取材活動

1 男性読者に読んでもらええる記事を書くことと、ヨーロッパの支局から応援に来た男性記者に、世界の婦人問題をはつきり理解して記事を送ってもらうよう努力した。その努力の甲斐あって、男女記者のパートナーシップを発揮した記事が送れた、と自負している。

2 国際会議の際、いつも思うことだが、時差がある上に、日本の新聞は朝夕刊両方を発刊しているため、他国の記者に比べて、倍の量を働かざるを得ない。会議場、ベラ・セインター記者室の国際電話およびテレックス・オフィスの終

業時間はなんと午後九時！とてもこれでは原稿を送り終わらない。あわてて中央郵便局に飛んでいたり、ホテルから真夜中から朝にかけて電話をかけたり、と時間を忘れて奮戦せざるを得なかった。日本の記者は働きすぎだ。

3 私の属している新聞に限って言えば、キャッチャー側に女性の部長が座っていたため、私の送った原稿をがっちり受けとめ、最大限効果的に紙面に生かしてくれた。

4 新聞の読者の半分（あるいはそれ以上）は女性。それなのに作る側がほとんど男性という現状は、考えれば考えるほどおかしい。婦人・家庭面だけでなく、政治面・社会面・経済面・外報面・科学面——あらゆる新聞の分野に女性が座を占めるのが当然と思う。また、読者も「マスコミは……」と十把一からげに論じるのでなく、記事の後ろ側にいる書き手の意識を読みとって、共感できるものには拍手を送り、違和感を覚えるものは批判する、などピンピン反応することによって、読者とは、男と女、そしてありとあらゆる人間がいるのだ、という事実を製作者に気づかせてほしい。

#### サンケイ新聞社家庭文化本部婦人面 斉藤由美

#### A、国連本会議について

1 当初から予想されていたことではあったが、極めて政治色の濃い会議になったこと。女性が集まった会議とはいえ、それぞれに国を代表してきている以上、テーマは女性の問題であっても、決して政治と切り離せないという点が浮き彫りにされて印象深かった。

しかし、女性が望む社会のあり方などについての掘り下げた議論がなされなかったのは残念だ。

よかったことは、申すまでもなく、「差別撤廃条約」の署名式。セレモニーという形式が会議にくみ込まれたことは、各国に署名を促す大きな要素になっていたとハタで感じられたから。

2 日本の代表団の女性の中に、外交問題のエキスパートがいなかったのが極めて残念だった。政治的に問題が紛糾する都度、代表の一人、外務省の男性審議官が音頭を取っていた姿が忘れられない。婦人問題や労働問題などの限られた分野のエキスパートだけでなく、これからは外交面や国際政治の分野にも、女性進出の機会が与えられなければならないとつくづく思い知らされた。

3 婦人問題が政治の問題と切り離しては語れないのが事実としても、日程のほとんどを、歩みよりのない政治の対立の場としない方法は考えられないものか。たとえば、再度、行動計画の採択がなされるならば、その原案づくりの準備委員会の段階で、もつとつめておける問題もあるように思える。せっかく集う世界各国の女性のエネルギーを、女性の住みよい未来づくりに向けて使いたいものだ。

#### B、NGOフォーラムについて

1 雑然とはられたポスターや展示物、また雑然としたワークショップの会場……、その雑然さが極めて印象に残る。国の名前の書かれた札の前にその国の代表が座った国連本会議に比べると、その雑然とした会場では全く地球上に

国境はないという感じだった。

2 いく種類もの英文パンフレットの準備などをして積極的に参加したグループのある反面、ツアーの途中に、「一日見物」的な参加者もあつたのは残念だ。

3 各国から集まった女性が、その体験を出し合い、ふれ合う場から、さらに会議としてのアピールを出せるところまでもっていかれると思う。会議が会議で終わるのでなく、その後の世界の女性の流れにつなげていく意味で。

### C、日本のジャーナリストの取材活動

1 世界各国の女性たちが、現在それぞれにどんな問題をかかえているのかを読者に伝えること。それを通して、日本の女性が置かれている状況を、もう一度、みつめ直すひとつのキッカケとなることを願って……。

2 ひとつ残念だったことは、記者会見などの場で、日本のジャーナリストの発言がほとんどいいいほどなかったこと。言葉の障害か（私も含めて）、あるいは国際舞台での取材経験のチャンスがこれまでに少なく、訓練されていないせいかな……。

3 五年前のメキシコ会議のときは、初めての女性の会議ということもあり、「冷やかし半分」も含めて話題にされたが、今回は二度目ではあるし、あまり報道にも力が入れられないのでは……といった事前の一部の予想に反し、かなりひんぱんにニュースになっていたように思う。サンケイの場合も、メキシコ当時よりは、むしろ分量的にスペースをさく結果となっており、真に女性のためを考えての扱いかどうか

かはともかく、新聞が女性に関する問題に目を向けざるをえない時代になっていることが感じられた。

4 とくに企業に対して——現状では女性ジャーナリストの数はあまりにも少なすぎるので、その層を広げるため、まず数をふやしてほしい。そしてさらに、女性は家庭・文化・芸能担当などとワクの中にとじこめず、政治・経済・社会……あらゆる分野に仕事の間を与えてほしい。たまたま女性の会議だから、女性記者を特派員にするのであって、同じ国際会議でもそれ以外のテーマでは、まず女性が派遣されることのない現状では、女性記者の訓練の場も、活躍の場も限られている。

読者には——女性に関する話題が紙面に登場する機会がふえてはきているが、肝心の内容に女性べつ視的なところがあるときには、その疑問や苦情等を、できるだけ生の声として編集サイドに伝えてほしい。数少ない内部の女性記者の声は、「しかし、多くの一般の主婦はそうは思っていないよ」と言われてしまうことも少なくないから。

社会に対しては——社会全体として、もっといろんな分野に女性の進出が広がれば、女性記者の数がふえることにも、その職域が広がることにもつながるのだから、ぜひ少しでもその方向に向かうことを願っている。

フジテレビ報道部 有馬真喜子

### A、国連本会議について

1 メキシコ会議に比べて、発展途上国が力をつけてきたこ

とがもつとも印象に残った。新経済秩序を中心に据えながら、新しい世界の秩序を声高に要求している。そこには、新しい価値観が生まれることを予想させるものがある。

それと平行して、先進国が、途上国グループに寛容になり、彼女らの主張に耳を傾けようとしていることも印象に残った。

よかったことの第一は、差別撤廃条約への署名・批准国が多数にのぼったこと。署名式は感動的で、涙がにじむような感動を覚えた。第二は、条約および行動計画で、男女の役割分担否定の考えがはつきりうちだされたこと。ことに、メキシコのときには萌芽にすぎなかった家庭および育児の責任について、男女および社会になうものであることが明確にされたことは大きな前進だと思う。

会議があまりに政治的で、婦人問題がかすんでしまったとの意見があるが、私はそれが世界の現状で、私たちはその事実を正しく認識すべきだと思う。だから、そのことをよくなかったことに数えたくない。婦人問題は政治問題であり、政治的アプローチなくしては婦人問題の前進はあり得ないと思う。住む国がない、水がない、貧しい、と訴える人々の言葉に十分耳を傾け、そうした現状の改善に手を貸すことが大切だと思う。

ただ、メキシコと同様、行動計画がほとんど審議されなかったのは残念だった。

2 日本代表について評価したいのは、決議案を出すといった一歩すすんだ姿勢があったこと、そして条約にサインし

たこと。メキシコに比べて前進である。

ただ、やはりおとなしすぎると感じる。記者会見を開いて日本女性の地位を説明し、何ができたかだけでなく、何ができないのか、何がネックになっているのかを、オーブンに世界のジャーナリズムに語りかけるといった態度がほしかったと思う。GNP大国なのに女性の地位が極端に低い日本だけに、世界のジャーナリストは「どうしてなのか」と興味をもっている。

また、代表団の構成についても一考を要するように感じる。今回の大会で、アメリカはさまざまな婦人団体の代表から成る代表団をつくっていたが、そうした選び方も参考になると思う。外交のベテランと広く婦人の声を代表する人々との組み合わせなども考えられるだろう。

3 日本で開くことができればいいと思う。さまざまな場で活躍する世界の女性が日本に集うことができれば、女性に対する日本の社会通念を変えるうえで大きな力になると思うからである。どうか立候補してほしい。

会議のスタイルについては、たぶん、メキシコ、コペンハーゲンと変わらないのではないだろうか。国連の会議なのだからそれでいいと思う。

## B、NGOフォーラムについて

1 メキシコに比べて、一つ一つのテーマについて論議が深まっていたと思う。ことに、一つのテーマに一週間もかけて論じあうような方式はよかったと思う。そこから、今後の活動についての具体的な実りも生まれたと聞いている。せ

っかく世界の女性が集まるのだから、関心のあるテーマについて徹底的に意見をかわしあうのがいちばんいい。今後とも、この方式をつづけるといえると思う。ただし、私についていえば、十分取材できなかったのが残念だった。

2 日本女性は、メキシコのときに比べると驚くほど積極的になり、インターナショナルになっていた。メキシコではワークショッパは「へあごら」しかもてなかったが、今度はいくつかできたし、国際パネル・ディスカッションにもパネリストとして参加していた。

ただし、一、二、問題もあると感じる。その一つは、前回同様、ほんの一、二日の滞在でコペンを去る女性が少なくなかったことである。これは、派遣した団体の取り組み方にも問題があろうし、旅行会社のスケジュールにのせられてしまうという問題もあろう。もう少し、女性の主体性のある参加にしてほしかったと思う。

第二は、ワークショッパのテーマの設定の仕方である。いいテーマを取り上げているのに国際的なひろがりがある、他国のジャーナリストの間であまり話題になつていなかった。そのへんへの配慮がほしいと思う。

3 コペンハーゲン会議について、テーマがあまりにもりだくさんで、統一がなかったという批判があるが、私は民間会議はそれでいいのではないかと思う。関心のあるワークショッパに自由に参加できるよう、テーマはバラエティーゆたかなほうがいいと感じる。

そうすると、本会議に民間会議の意見を決議として反映

させられないという問題が残るが、多数が合意できる一、二の問題なら、運営の方法によっては決議案として提出できる方法もあるのではないかと思う。そのためには、予備会議のようなものを開くことも考えられるのではないだろうか。

### C、日本のジャーナリストの取材活動

1 開会式、サイン式など、一つ一つのできごとを、できるだけ数多く「ニュース」として伝えること。婦人会議が開かれていることが、何度も何度も人目に触れるようにしたかった。それによって、視聴者が「何をやっているのだろう？」と興味をもってくれたらいいと思っていた。

2 それは、私たちではなく、テレビや新聞をこらんなった方がご判断くださることだと思う。

ただ、内側からいえば、メキシコにくらべて取材の婦人記者の数も多く、報道の量も多かったと思う。

3 私についていえば、送ったものすべて放送された。編集は、機材をもつていき、スタッフも多かったのほとんど現地で行なった。したがって予期しない編集というようなこともない。衛星中継も数度にわたって行なったので、速く伝えることもできたと思う。つけ加えておくと、帰国後、わが局をはじめ全系列局から選ぶ、七月の月間最優秀賞をもらった。

こうしたことができたのも、一つには、私が日頃から自分の番組をもっているから、もう一つには、わが局にはメキシコ会議取材の経験があったので（このときも四人のチーム

だった)コペンハーゲン会議に取り組む下地ができていたから、ということができるかと思う。

4 企業に対しては、とにかく女性に受験資格を与えること。そうすれば、少数数でも採用される人が出てくると思う。

また、婦人・家庭欄のみならず幅広い分野に女性を配置することを望みたいが、これは深夜業、休日出勤などとのからみがあるので、企業と女性ジャーナリストとの間で、十分な話し合いが必要となろう。

採用された女性に対しては、とにかくつづけることを心からお願いたい。また大学で学部を専攻するとき、文科系に片寄らず政治・経済・法律・科学などの分野にすすみ、それらの専門知識をもって入社し活躍することが今後大いに必要ではないかと思う。英文科出身者の反省をこめて申しあげたい。

一般の方は、ジャーナリストに対して「あの人はべつ」とか「あれはエリート」といった見方をしないでいただけるとありがたいと思う。ジャーナリストも他のいろいろな職業の人と同じように、それぞれの問題をかかえながら、つまづいたりころんだりしながら仕事をにつづけている。経験を頼りに手さぐりしながらなんとか歩みをつづけている。といつて「女性」ジャーナリストであるからということ、とくに点数を甘くしていただくことはないと思う。不十分な取材や報道や解説については手厳しく批判していただけたらと思う。

D、その他

差別撤廃条約は、私たち女性にとって、長いつらい歴史を経てようやく手に入れた珠だと思う。何としても大切に守り育てていかなければならないと思う。

しかし、これの実現のために国内法を改正する段になると、女性同士の利害の衝突、見解の相違も同時に明らかになってくると思う。そこを何としても乗り越えていかなければならないと思う。意見の相違を認めあいつつ手を結ぶという真の意味での「シスターフッド」が、これからこそもっとも必要とされるような気がする。

ラジオ関東 池谷まゆみ

#### A、国連本会議について

1 各国代表団の女性たちの年齢を越えた美しさを、多数の国が署名したこと。

国のたてまえでしかものが言えないこと。

2 ひかえめで、静やかで……。

3 八五年には、各国とももっと悩みを具体的にさらけ出して、解決のためのノウ・ハウをさぐりあいたい。

#### B、NGOフォーラムについて

1 何とまあ、雑然として、混然としていたことよ。しかしそのすばらしさもまた格別。特に印象に残ったのは、肌黒い女性たちの胸を張った力強さ。

2 それぞれの団体、あるいは府県市の代表団といわれる人は少し年齢が高すぎはしなかったか。今、問題を抱えている人の参加がこれら代表団の中にあつて欲しかった(し

かし彼女らは多くの場合「参加」ではなく「見に来た」に過ぎなかったようだが。参加した日本女性たちは大変よく日本の問題を訴えていたようだ。

3 八五年に民間会議が開かれるであろうことを一つのためやすくして、国内での問題解決を一気に前進させたい。署名式が行なわれたということのために、各国とも署名決定を早めたと言われたが、会議に報告すべき材料作りのために、あらゆる層の女性の力を一つにして差別をとり除く運動をすすめられないか……。八五年の民間会議を一つのバネにしたい。

もう一つ、意思伝達の手段「言葉」をもっと身につけておきたい（私自身に対しても言い聞かせております）。

### C、日本のジャーナリストの取材活動

1 私は本業（ラジオ・ディレクター）のためではなく、横浜市民として調査を委嘱され参加したため、市民としての視点を常に心掛けておりました。このため、おたずねの趣旨に少しはずれるかも知れませんが、世界の女たちの本音は何？を重点といたしました。

2 こんなにすばらしい女性ジャーナリストたちがいたのかとあらためて感心。それぞれ皆さん個性的に取材していられた。この人たちが揃って作る新聞があったら、女性たちが喜んで読みたがるものが出来るのになあ！などと夢想いたしました。

3 国連の本会議と、NGOフォーラムと、二つの会議を一人で取材するのは無理ですね。帰国後見た限りでは、NG

Oフォーラムについての記事が少なかつたように思えます。特にあの雑多な中にある凄さのようなものは伝えられていなかった。また、私どものラジオについては、ニュースとして受けてくれるのが男性陣のため、何を伝えるべきなのか戸惑ったようでした。

4 新聞でも、TVでも、ラジオでも、よかったと思うこと、こんなことは許せないと感じたこと、何でも反響を葉書にでも書いて送ってほしい。特に女性にかかわる問題は、男の人にとってはピンとこないものが多い。ゆえに、受け手からの反響は案外力を持つ。ぜひ手紙を！

### D、その他

総理府等が婦人問題解決のために既成の婦人団体に頼る考え方を少しだけ変えてもらったほうがいいのじゃないかしら。新しいグループは現在を生き延びている女性たちの要望をしつかりつかまえているように思えました。もちろん、長い歲月実績を重ねてきたグループの力は十分評価いたしておりますが……。

共同通信社文化部 中村輝子

遅れて申しわけありません。アンケートの個々の項目について答えるのが難しく、趣旨は「メディアと女性」にあると理解しますので、同じテーマで書いた私の考えを再録していただきたいと思います。このほうが私の意見を表現できたと思いますので。（新聞協会報より転載）

国連婦人会議の本会議が開かれているベラ・センターで、ぱったりとアメリカの友人に会った。「ああ、やっぱり来てたのね」。両方が異口同音に叫ぶのと抱き合うのは同時だった。

私は数年前、ハーバード大学のニーマン・フェロー（一九七四—七五）として、アメリカの記者たちと約一年間、一緒に過ごす機会を持ったのだが、彼女は、ABC放送のワシントン支局から来ていた。案の定、彼女の今の勤め先は変わっていて、ボストンの公共放送（PBS）から、三人のクルーと共に取材に派遣されていたのだった。

だれか知った顔が、と内心期待はしていたが、やはり、遠い世界の友人と会えたというのは、これが、女性の会議だったからだろう。軍縮会議や鯨の会議だったら、こうした出会いはないとどおりえない。この時ばかりは、ふだん、男性記者たちの中の一部の少数派として存在している日本の女性記者たちが、当然のように派遣されたからである。

### 社会変革の推進者

会議開催の前に開かれたジャーナリストたちのエンカウンターの時、そして、会期中のブリーフィングの時、圧倒的多数を占める女性記者たちと共にいながら、「女性もこんなに活躍している」などといった思いよりは、「これも男性社会を象徴する現象だ」と思ったことが忘れられない。女性問題の報道は女性の目で——確かに、それは、男性たちが興味本位に、また何も事情を知らぬこと（男性記者が女性問題に暗くても許される。女性記者が一般社会情勢にうといと笑われるだろう）から書く偏見をふせぐ意味で有効だ。そして、まだしばらくは、女性記者

たちは、「女性を代表して、女性たちのために」働いているという気負いをもって活躍することだろう。しかし、女性問題をカバーするようになって日の浅い私には、印象に残るさまざまな女性たちを知り得た経験を貴重に思う一方で、報道の分業体制が一種の「棲（す）み分け」として固定化しては困る、という気持ちも強いのである。

さて、「マスメディアと女性」の関係は、メキシコで採択された世界行動計画にも、今回の、後半期世界行動計画にも、その重要性が強調されている。

行動計画の認識は、マスメディアが、社会変革の推進者として、大きな潜在力を持つているというところにある。これは現実には、その潜在力が発揮されていず、女性に対する偏見や古い固定観念が除去されず、社会における女性の新しい役割を推進するに至っていないから指摘されることでもあるのだ。それにしても、「社会変革の推進者」といわれて、メディアの人間たちは面映くはないだろうか。ここでの社会変革は、性による抑圧と差別のない社会の実現をさしているが、そのような問題として、女たちの運動を、またメディアの中の女たちを考えている人たちはどれほどいるだろうか（それは女性も含めていえることで、女性だからといって共通認識があるとはいえない）。性による差別のない社会を求める態度があれば、必然的に他の人間関係にも差別のない人間らしさを作ろうと思うのだが、新聞記者たちは、日本の中での差別問題、海外で取材したり、出会う人種問題とどのようにかわっているのかと余計なことまで気になってしまふ。

## メディアの役割二つ

そして、メディアの役割とそれへの期待は二点に集約できる。

第一は、メディアがとり上げる女性のイメージやその役割が、社会の意識を高めるようなものとして意味づけられるべきだとする、男女の役割が実際に変化しつつある面の報道と、さらにそれを一歩進めて評価する作業を求めているわけだ。そのためにも、独立した機関が、メディアの政策や企画、情報をモニターし、奨励、監視をすべきだと示唆する。

第二は、メディアの管理運営者、制作者が、女性の状況や要求を十分に把握し、まじめな関心をもって伝えられるように、教育・訓練が必要だとしている。つまり、作り手側の意識の変革を積極的に行なうことを求めているといえるだろう。それは男女を問わぬ問題とされていることはいうまでもない。そして、多くの女性たちが、編集者・コラムニスト・記者・プロデューサーなどとして、メディアの管理・企画部門に登用されるべきであるという。

行動計画は両者とも実に細部にわたって、女性のための施策を示唆しているが、マスメディアの一章は、やはりその「推進者」としての役割を担わされたものと見るべきだろう。ということは、この二つの行動計画の内容を詳細に検討し、理解しなければならぬ最初の義務をメディアの責任者たちは負っていると思うのだ。しかし、メディアは、たとえ会議一般を「よく報道した」としても、自分に向けられた批判を、「自分自身のもの」として受けとめる力が非常に弱いのが常である。しかも、外圧とか時の勢いによって態度を変えていくことが多い。

女性問題にも、「時代の趨勢」という言葉をよく耳にするが、このわかったような、わからないような実態のない言葉を軸にして、男性社会にどんな根源的な変化が期待できるだろうか。

### 電話の先は男性社会

では、コペンハーゲンの会議は日本のメディアにとって何だったのだろう。「そこで女性の会議があるから」女性たちに報道してもらおう。そういう側面はかなりあったように思う。そして女性記者たちは、西側諸国と第三世界の対立から、民間会議の小さなディスカッションの輪の中まで、本会議場とユニバーシティセンターを行ったり来たりしながら、議論に耳を傾けて来た。国連の会議の常として、国際政治が必然的に性格をあらわにしてくる経験も貴重だった。それぞれの記者が、それぞれの異なる体験と考えをもって取材に当たったという意味で、鯨の会議の取材とは違う「財産」を持って帰ったと思う。

だが、原稿を送りながら、テレックスや電話口の向こうに広がる男性たちばかりの職場を思い浮かべるとき、取材して来た内容も男性たちにとっては抽象的なコトバでしかないのかと、むなししい気持ちになったのも事実だ。会議が終わって、外務省のある男性担当官が、「いろいろなことはあったが」女性の問題を自分の省の中で考え直すいい経験だった」と率直に語ってくれた時、新聞内部にはどんな変化の兆候があらわれるのだろうかと考えたものである。しかし、急いで付け加えれば、女性の地位の向上ばかりが、女性の問題ではない。そこに焦点がかったよれば、男性社会の中で、ただ一人のトークン(名目的な存在)を作ればコト足れり、となり、女性は女性で、男性職場の中で、

少数者であることの誇らかさを身につけるばかりになる。女性が、自分の能力が、生き方を「男らしさ」のほうになぞらせることなく、自然に伸ばしていける環境をメディアの世界に作ることは無理なことではない。そうすれば、女性報道は女性の目で、というような役割分業はなくなり、報道が男女共同の作業になるのではないかと思う。

アメリカの友人は、帰る時、たまたま持参していた、共通の知人である女性記者が書いた本を贈ってくれた。題名は「ターニング・ポイント」。最近、永遠に変わらぬ存在といわれた女性がターニング・ポイントについてよく語るようになり、男性は語らなくなった——そんなことを思いながらページをくついている。

#### テレビマンユニオン 坂元良江

#### A、国連本会議について

1 第三世界の女性たちのエネルギーに圧倒されっぱなしでした。すでにひずみの出始めている先進国が、第三世界の女性たちのたたかいに学ばなければならない時である。経済先進国が決して女性問題先進国ではないということを先進国の女性には認識するべきだと思いました。

2 代表団の全員が政府関係者だったことにおどろきました。3 回目の代表団には女性解放運動の現場などいわゆる民間から選ばれた代表を入れるべきでしょう。

#### B、NGOフォーラムについて

1 あれだけの人数（登録数約八千）の女性たちが自費やゲ

ループのお金で参加したことに感動しました。しかし地理的に遠いことや政治状況などのためでしょうがアジア各国の女性が少なかったことは残念でした。その意味でも日本女性の果たさなければならぬ役割は大きいと思います。

2 言葉の問題や、外国人と接する機会が比較的に少ない日本の特殊性から、参加者全部が世界中の女性たちと自由に交流出来たとは言いえないと思います。

しかし日本の女性グループ主催のワークショップはどれも大勢の参加者を集めていましたし、英文パンフレットなどもかなり行き届いたようで、「経済大国」日本の女たちがどんな厳しい状態にあるのか、どんな問題を抱えているのかは、かなりわかってもらえたでしょう。

遠くからお金をかけて行っただからつい欲ばりたくなるのは人情でしょうが、ヨーロッパ各国をまわるよりは、コペンハーゲンに十日なり二週間なり滞在することのほうがむしろ得るものが多いかもしれないと思うのですが、一部のグループの方たちがほんの二、三日でコペンハーゲンを去って行ったのは残念でした。

3 フォーラムに対して望むというのは少しおかしいと思います。フォーラムは基本的には参加した女性たちが作っていくものだとして理解しています。

日本の女として考えなくてはならないことは、日本の状況を訴える段階から一歩進んで、世界中の女性たちと、どの部分でいかに連帯していくか、という参加の仕方をするのだと思います。

## C、ジャーナリストの取材活動

### 1 私自身が一番重点をおいたことは、テレビの視聴者に、

世界中から集まった女性たちがいかに真剣に女性解放のために闘っているかということ伝えることでした。ただし番組の性格上、セレモニーもコペンハーゲンの表情も取材することが必要とされていましたが、番組のフォーマットとして（レギュラー番組で毎週決まったフォーマットに従っている）現地のジャーナリストにレポートしてもらったため、デンマーク人ジャーナリストの目を通して伝えるというはがゆさがありました。

### 2 読者や視聴者の方々が判断なさることだと思います。

3 私が取材を担当した番組「女たちのコペンハーゲン」(TBS)がニュース番組ではなく、ゴールデンタイムのドキュメンタリー番組だったということ、テレビというメディアの特性から、取材したものの何分の一かしか放送されないことは最初からわかっていました。実際には、取材したものの五分の一以下しか放送には出ていません。それだけに誰が編集するかということが重要だったわけで、私自身が東京へ帰って編集できない状況にありながら（ニューヨークに駐在のため）企画を提案したという私の側の問題がありました。森本哲郎氏がキャスターの番組であることは承知の上でしたが、ゲストスピーカーを橋田寿賀子氏に決めることについては全く知らされていませんでした。テレビはグループ作業ででき上がるもので、一人のスタッフの持つ権限が限られているのです。特に、遠くにはなれ

ていて決定の場にいらなかったことを残念に思っています。東京で受けてくれる側に女性スタッフがいれば、こうはならなかったでしょう。

番組については、多くの女性たちから厳しいご批判をいただきました。私個人としましては、世界中の女性たちの真剣な叫びを「この方たちのご主人やお子さんはどうしていらっしやるんでしょね、私そればかり気になりました」などという橋田氏の低次元のコメントで語ったことを本当に申しわけなかったと思っています。

しかし一方では、それでは何も放送しなければよかったのだとはいえないと思っています。橋田寿賀子という人気作家の実体をあますところなくあばいたのもテレビならではのすし、日曜のゴールデンタイムにコペンハーゲンの女性会議をとりあげたことも、一般の視聴者に、世界ではこんなことも起こっているのだということを目で見てもらったくらいの役割を果たしたと思っています。オール・オアナッシングの考え方をとってはいは、手も足も出ません。テレビの内側にいる私としては、四敗しても一勝くらいはするというつもりで今までもやってきましたし、これからもやっていくしかないと思っています。

### 4 マスコミの現場の女性はいくつかの少数派です。というより

孤立しているといってもいいでしょう。企業内での発言権は限られています。放送局にいたころ、制作プロダクションに参加して、もう一五年以上女性の採用を主張し続けてきました。しかし現状は変わらないばかりか悪化してさえ

いるようです。

視聴者の女性たちの強い声のみが、企業を動かす力となるでしょう。

### テレビ朝日 堀越むつ子

## B、NGOフォーラムについて

1 大学祭のように混沌とし、かつオープンなムード。女性の抱えている問題といっても国により千差万別。特に印象的だったことは（私が数少ない女性たちにインタビュした中で得たものですが）、第三世界の女性たちのもつパワーというかバイタリテイ。

2 メキシコの反省が十分生かされたようですね。あごらの皆さんをはじめ、渡辺晴子さん、日本女性の積極的な活動が目立ちました。ただツーリストとして訪れる各県代表の方々には啞然としました。記念撮影のために会場を訪れただけ。自治体からなにがしかのお金も出ているでしょうに、考えさせられました。

3 運営面では託児室の問題があります。私がインタビュした中でもそういう声がありました。それから言葉の問題。同時通訳の設備が整っていなかったために、時間も労力もロスがあり、せっかくの場なのにも多くないと感じました。それから政治的なテーマがあまりにも多くなると、本来この会議のもつ役割である、同じテーマにつき自由に交流を図ることが困難になってくるのが気になりました。当然避けては通れないことではあるけれど、それより先に

まだまだなすべきことがあるのではないかと思います。

## C、日本のジャーナリストの取材活動について

1 短期滞在のためにかに要領よく取材するかに重点をおきました。テーマは二つ、NGOフォーラムに集まる女性たちの主張したいこと、女性の地位が高いといわれるデンマークの共働き家庭の一日。この家庭をさがすことから始めましたのでギリギリの取材でした。

2 女性記者たちは大変精力的でした。時差のため昼夜を問わずの仕事ぶり、きめ細かく、忍耐強く取材なさっていました。私どもは出遅れ組で何かとわからない点が多く、右往左往していましたが、皆様ご親切に情報を提供してくださいました。とても協力的でした。国内の取材では考えられないことです。

3 私どもの局の悪口になってしまいうで気がひけますが、NHK、フジと比べると、大分差がつかまりました。ニュースの編成が男性志向、編成権は男たちが握っているわけで、入りこむスキを見つけるのが大変という状況です。幸いにも「6時のサテライト」という枠があったので、ニュースとしてとりあげられた程度でした。取材陣を出すかどうかをめぐっても、たかが女の会議に……、という意見も多々あり、一時はNOということだったのですが、私ども数少ない女性たちと、一部理解ある男性たちの熱意でGOサインが出たのです。我が局では満足できる放送ができませんでした。新聞の報道で感じたのは、会議の全体像がつかみにくいということです。個々の記事に關してはそれぞれ興

# 合評会一連絡先は下記へ

4 味深く説きましたが、じゃ、一体どんな会議だったのかということになる、どうもつかめないうった印象です。  
女性ジャーナリスト自身が、より意欲的、意識的に存在価値を認識させる必要を、まず感じます。企業に対しては

何をかいわんやです。スタートラインだけでも、男女同列線上に並ばせてほしい、そしてもっと女の声に耳を傾けてほしいと日々願っているのですが……。

## □あごら旭川

・旭川市神楽岡一条五丁目3 田代慶子  
・0166 65 6237 〒078-11

## □あごら札幌

・札幌市中央区南25西2ニユ―藻岩503 高橋芳恵  
・011 563 6917 〒064

## □あごら浦和

・浦和市南浦和2-19-8 国井マツ江  
・0488 87 3680 〒336

## □あごら柏

・柏市豊四季台3-1-68-212 古賀節子  
・0471 45 6724 〒277

## □あごら北東京

・豊島区東池袋1-45-11 メゾン金子202  
・03 985 3308 〒170 婦人協同法律事務所 内村由美子

## □あごら武蔵野

・小平市小川町1-763-86 丹羽雅代  
・0423 43 6749 〒187

## □あごら京王

・調布市仙川町3-12-32 福井浅子  
・03 308 7871 〒182

## □あごら神奈川

・川崎市多摩区東生田2-2-12 森山方 沼田千恵子  
・044 933 9079 〒214

## □あごら東海

・愛知県愛知郡東郷町和合ヶ丘1-12-9 伊藤汎美  
・05613 9 2386 〒470-01

## □あごら京都

・京都市左京区北白川久保田町36-4 塚崎美和子  
・075 791 4623 〒606

## □あごら大阪

・吹田市出口町30-20-703 北垣由民子  
・06 387 0916 〒564

## □あごら九州

・福岡市西区笹丘2-4-6 小島豊子  
・092 521 7624 〒810

感想文

# フォーラムに参加して

## 女たちの青い鳥

山下智恵子

目をあげると、白い天井があった。壁も白い。掌で触れたいと思う。だが途中でやめる。夢の中なのかもしれない、と思ったからだ。

どこかで、海鳥の啼き声がする。身動きしてみる。かきなれた湿った空気が触れるかわりに、さらさらとした風のようなものが、白い毛布カバーといっしょに、顔をかすめる。

そうだ。ここはデンマークだった。コペンハーゲン。三百年も前の倉庫を改造したというホテル・アドミラルの一室だった。同室のFさんはめざめているだろうか。

細長い部屋。頭をめぐらすと、縦長の窓がある。カーテンごしに、岸壁と鈍い色に沈んだ海が見える。オスロ行きの客船が発着する港だ。かもめが翼を斜めにかたむけて飛ぶ。羽裏にかくすように、ちぢめた肢が見える。

七月十四日。民間フォーラムの開会式がある日。ケシの実ののった丸パンやライ麦パンを皿にとり、コー

ヒーをカップに満たして朝食をはじめていると、Sさんが食堂にあらわれた。ゆっくりと朝食をとっている私たちを見て、一刻も早く司書養成学校へ行かなければ、会場に入れないかもしれない、と言った。初耳であった。

開会式の会場に入れなかったら、はるばる日本から飛んできた甲斐がない。ぜひ出席したい。そんな思いだけが私を追いやって、タクシーに乗ってしまった。

タクシーが、どうも方向ちがいの道を走っているような気がする。まったくひと気のない、見当ちがいの学校の前で停まった時、もうこれで開会式に参加するのはあきらめなければ、と思った。地図を見せ、ここへ行きたいのだと指でさし、念を押すと、タクシーは再び走りだした。運転手は、三六クロネと数字の出た走行メーターをカチャリと停めて、スピードをあげた。その誠実なやりかたが、焦った私の心を、いくぶん冷静にさせた。

会場には、立て看板もなかった。入口の扉に、ひまわりの花と女性を表わす丸に十字の記号を組み合わせ、花芯の部分に国連のシンボルをデザインしたポスターが貼ってある。まだ人はそれほど多くない。まにあつたのだ。

入口で携帯用のイヤホーンをもらって席につく。英語、仏語、スペイン語の翻訳が流れてくるもので、どれも私に

はたいして役立たぬ。

婦人年のシンボルマークである鳥を青で染めぬいた大きな壁かけが、正面にかかっている。グリーンの地に、赤でWOMENと描かれているのが、鮮やかだ。そのすぐ前が演壇。日本だったら、国旗と、松や菊をあしらった生花が飾られ、「国連婦人の十年世界会議」と大書したパネルが天井からさがっていて、ひととき高い演壇がしつらえられるのではない。この簡素な式場は、本音で語りあおうと集まってきた世界のあたりまえの女たちに、ふさわしい。

テレビカメラをかついだ男が、遠慮がちに場所を捜している。河野貴代美さんが東京新聞の特派員として、いきいきと取材している。

開会。挨拶につづいて四か国の婦人団体代表のスピーチ。英語が、頭の中にひとつづきの意味をもつては入ってこない。ナイジェリアの代表が、赤紫に金の縞のターバン姿で、発展途上国の問題、人種差別、貧困などを、全体の会議で話しあってほしいと訴えている。英語の単語を追っているうちに、いつのまにか最近、自殺未遂をした実母のこと、病気の兄のことを考えている。拍手で我にかえる。私にとつての婦人問題は、母のことだ。(もうバカなことはいないと約束してね、という私に、うつろな目で「生きていてもしかたがない」と答えた母)そして病気の夫を助けるために、精神状態の不安定な姑を置いてパートに出かける嫂の毎日の生活のことだ。

演壇で語りつがれる高邁な女性解放の理念と、私がコペ

ンハーゲンまでひきずってきた身近な女たちの問題とは、どこでどうつながるのか。母の首首に赤くもりあがっていた傷口が、なまなましく目に浮かぶ。それをほらいのけながら、英語のスピーチを追う。

アフリカのスリナム出身のアメリカ人が、歌っている。細い三つ編みを幾つもたらし髪をゆすり、両手をひろげて。深みのある声が私の胸をたたく。姉妹よ、手を取りあって進もう。姉妹たちよ……。

アフリカの女たちの苦しみ。母の孤独。嫂の疲労困憊の毎日。そして私自身の創作活動と家族との葛藤。つながるのが？ つながるはず。つながる。では、どうしてゆけばいい？ どうしたら母は幸せになるの。嫂は。私は。アフリカの、アジアの、ヨーロッパの女たちは。

問いかける内心の声と、訴えかける黒い肌の女の声が、二重奏になって頭の芯にひびく。熱いかたまりがこみあげてきて、のをふさぐ。母さん、失意の中で死なないで。鳴咽をねじふせねじふせ、私は正面の青い鳥の模様をみつめる。世界会議は、はじまったばかりだ、と意味もなく、自分にいう。

## 出発までが婦人問題

古野 佐喜子

私がコペンハーゲン行きを決めたのは出発の二か月前。

タイムリミットぎりぎりだった。勤め先の決算期がやっと終わり、新聞にも丹念に目を通せるようになったころ、朝日の家庭欄で、へあごら」がデンマーク世界婦人会議へ参加を決めていることを知った。

正月ごろから家の中で「デンマークへ行きたい！」とわめき続けていたくせに、名古屋市調査団派遣にばかり気をとられ、大府という片田舎に住んでいるために、フォーラム参加の道が閉じられているのだと早合点し、「田舎で婦人問題論じてても、しよせん大の遠ばえ」と口惜しくあきらめていた。ぎりぎりの申し出に参加の労をとって下さった高橋ますみさんが「情報不足だったのね」と言われたけれど、まさにそのとおり。自分の置かれている状況とささやかな仕事に自信がもてず、自分を高め意識改革するだけの婦人問題であつた象徴である。

女性解放と聞くといやな顔をするわが夫も、婦人問題とかフェミニストと言葉を変えれば何のことやらわからぬままに結構話にのつてきて、からかい半分に「弁護士や議員さんばかりがデンマークへ行けて、始終婦人問題と騒いでいるお前が行けない運動ではおかしい」と私をけしかけたりしていた。しかし本当に自分の妻が参加を決めてきた時は、女性解放の波がいよいよ我が家の戸口まで押し寄せてきた、と、仰天したようである。

とにかく行く決めてからが大騒動であつた。子どものこと、仕事、親類……私の婦人問題の真髓が一度に噴き出してきて、その上に日ごろ断わりきれなくてしぶしぶ引き

受けているいろいろな役（PTA・子供会・小グループ等）の始末。十五日間、計画的に家にいなくなる段取りの複雑さにふらふらになった。

一番エネルギーを消耗したのは、やっぱり子どものこと。日ごろころよく子どものめんどうをみてくださってた人からノーと言われ、ショックで胸が押しつぶされそう。あまり親しくもない近所の人にお願ひに行く時のドキドキは今でも思い出す。「何だかよくわからないけれど子どもさんは引き受けたわ。どうぞがんばってきてね」と言われた時は、思わずうれしくてオイオイ泣き出してしまった。

「あごら」誌のメキシコ会議の号を、何度も何度も読み返し、各国の婦人関係の資料をひっぱり出してきてラインを引きつつ読み、頭がさえてしまった毎夜のこと。準備会の時、数行ずつ英語でスピーチをと言われ辞退した我がふがいのなさは、これ以上荷を背負わないで出発したかったからだ。

七月十四日、やっとコペンハーゲンのフォーラム開会式に入場し、各国語のいり交じるざわめきの中で感無量だった。と同時に、きのうまでの自分は個人的婦人問題の解決に消耗してただけであり、果たしてここに座っている資格があるだろうかとも感じた。アフリカのルガンダの女性と初めに知り合い、贈り物を交換し、握手し、抱き合い、インドの人と意気投合し、ケニアの母子と話し合い、イランの人ともイスラエルの人とも友達になって本当にうれしかったけれど、自分の未熟さばかりを問う参加でもあつ

た。

「へあごろ」のワークショップの時、ポスターを貼り、録音テープ係を引き受け、隣りの部屋からいすを運んできたりして、手伝ったから、いないよりはましだったかしら。各国の女性、皆堂々としていて自信と使命感にあふれ、昼休みでさえ強引に「バンも用意してあるから」と誘われ入ったワークショップも楽しかった。テーマも決まっていなくて話もあちこちへ飛び、その合い間にお盆に乗せられ、手渡して回ってきたクラッカーやパンやサラムソーセージ。へんな日本のおばさんもとび込んで来て、司会者の席を写真撮影のためにとうとう移動させたのもNGOならではのことだろう。そこでは弁護士の大脇雅子さんが「私たちはそういう困難な状況を変えるために連帯し、それぞれの分野で運動していこう」と訴えて拍手かっさいのしめくりだった。

第三日目、佐藤和子さんに同行してインドのマリアさん（医師）の家族計画のワークショップへ出た日は、私の一番実り多い日。文盲率八〇％以上、平均寿命は男五五歳、女五二歳、おばあさんが子育ての実権を握っていて保健や栄養指導もなかなかほかどらない。女が家の外へ出ていくことは悪いことだと考えられていてこちらから出掛けていくんだという話。「男の子を三人以上産まない」と一人前じゃないのよ」との言葉に、各国の女性から「インドばかりじゃないよ、私の国でも男の子が生まれると喜ばれるよ」が続出。最後のほうで、ケニアから母子（母・娘・息子）の三

人）で参加した人が「だけど私は女に生まれたことを誇りに思うわ」と発言して、隣の席だったので思わず握手、握手。

頭と胸におみやげをいっぱい詰めて帰りの飛行機に乗ったところから、「デンマークから帰った自分」を考えだした。若い女性が、とかく結婚までの夢しか見てないのと同じように、行くまでの夢しか見ていなかった私は、明日から一体何をしていくべきなのか？ 私個人の婦人問題でなく、みんなの婦人問題へ広げていくために、自分に何ができるだろう。おみやげ以上の何かがからだ中に満ちてくる思いだった。

## フォーラムと「へあごろ」

小島サカエ

いよいよ「へあごろ」主催のフォーラムの七月十五日。ホテルの朝食もそこそこに、「へあごろ」作製のパンフレットや原爆の本など持って、会場のコペンハーゲン、ユニバーシティセンターへ急ぐ。開会式の時もそうだったが、会場には、世界各国の民族衣裳の女たちが続々と集まってくる。

瞳がキラキラ輝き、ほほえみかける表情に、私も思わずニッコリ。「世界民間婦人会議へ来たんだなあ」の実感が湧いてくる。会場はいい意味での大学の文化祭のような雰囲気。活気があふれている。褐色の肌、白色の肌。大柄な堂々

としてさっそうとした彼女たちの間を縫うようにして、へあごら」のフォーラムの部屋へ行く。へあごら」の人たちとボスターを貼る。いすを並べ、パンフレットを入口に置く。フツと福岡でやった「女たちの映画祭」のことを思い出した。やがて、次々部屋をたしかめながら、開発途上国の人、先進国の人たちが入ってくる。中には入口で「フランス語か」「英語ですよ」と言う、「オー」と残念がついていた人たちがもいた。隣の部屋からも運んでたくさん用意したいすはほとんどつまってしまい、聴衆でいっぱいになった。緊張した気分になってきた。時計は十時を回った。開会の挨拶後、いよいよへあごら」の斎藤千代さんのスピーチが始まった。ついに日本のへあごら」のフォーラムが、いま、開かれたのだ。

斎藤さんは、静かにほほえみをたたえながらも、居並ぶ世界の女たちへハッキリと訴えかけていく。インドの大学教授やアメリカの法律家、アフリカの活動家など（これは後でわかったことだが）が、大きなからだをのり出してジツと耳を傾け、話に大きくうなずき、時には腕をひろげ、驚きのジェスチャーも交じえ、熱心に聞きとらうとする姿勢にあふれていた。

頬に紅みがさしてきた斎藤さんの顔と、多くの遠い日本の女たちの姿とがオーバーラップされ、小柄な彼女がだんだん大きく見えてくる。熱のこもった透き通ったスピーチの声が海のかなたから聞こえてくる潮騒のように、遙か遠い日本の、生きる女たちの祈りの合唱にも似て聴こえてきた。

ここまで困難を乗り越え、自主的にフォーラムを主催し、日本の現状を訴え、世界の人たちに理解と協力を求めるひたむきな必死の努力を思い、そして遠い日本の生きる女たちの、報われることの少ない労苦の姿に思いを馳せ、胸がいっぱいになった。

思わず涙があふれ、ハラハラと頬を伝わった。清冽な感動が全身をよぎった。

### 白みゆくコペンハーゲン

スピーチが続くうち私は、ホテルのことを思い出していた。日本を離れてコペンハーゲンでの海外第一夜のことを。部屋割りに従って、斎藤千代さんと私は同室になった。

夕食後、機上一泊の疲れを癒やす間もなく、部屋に次々と人が入って来た。小脇にノートをかかえ、緊張した雰囲気である。「コペンハーゲン第一夜、まア乾杯！」かと思いきや、狭い部屋は、わがベッドも机代りに事務室へ一転。私は横にも縦にもなれず、部屋をソツと出て、倉庫を改造したこのホテルの薄気味悪い廊下を深夜近く徘徊した。

ふと目をさますと、暗いうちからソツと斎藤さんが起き出して、原稿にペンを走らせボソボソ英語を言っている。気がついて恐縮する彼女へ平静を装って私も起き出す。ホテルの窓から、しらみゆく白夜のコペンハーゲンの空と、そばを流れる海に浮かぶヨットをぼんやり眺めながら、片手に時計をもつて斎藤さんのスピーチのタイムを計っていた。だんだん熱のこもる彼女の声。シルエツトがハッキリしてきた。朝の冷気の中、烈々たる気迫があたりになだよつて

きた。

私は「ハッ」とした。その時の光景が今も鮮やかに目に浮かぶ。その時、私は「世界民間婦人会議」をやつと、とらえた」と思ったのだった。

われにかえると拍手が鳴り響いていた。

大脇雅子さんの弁護士として法廷でたたえた堂々たる話しふりと洗練された美しさは見事だった。外国人はしきりにメモをとる。

最後に高橋ますみさん。草の根グループ「あごら東海」の地道な積み重ねを続け、自治体への積極的な関与を果たす実力派で苦勞人でもある彼女のスピーチに、「あごら」とドッキング旅行の名古屋市の人たちの一きわ大きな応援が起こった。

それぞれ大きな拍手の後、質疑応答に入った。プレスセンターから駆けつけた河野貴代美さんの助っ人通訳ぶりは、「さすが」だった。彼女の国際的な女性解放運動家としての生き生きとした話題の展開ぶりに、討論は一段と盛り上がり、ドツと湧いた。

### 通じる道

スピーチといい、応答といい、いま日本が、われわれが抱かえている現状を、こうして世界に訴えていくことは、それが国際的反響を呼び、国際世論となつて、やがて日本へも還り、国も女性差別の数々など、ほかかぶりをきめこんでいくわけにもいかなくなり、「条約」へと、動かす力になつていくと思う。小さな「ひろば」へ参加しつづけ、地

道でも輪を広げていくことは、いつか「世界のフォーラム」に通じる道だとの確信をもった。

またフォーラム会場での情報交換をキツカケに、世界の女たちとそれらが今後も行なわれるようになれば、「討論」のように婦人政策を動かす原動力になると思う。「あごら」の運動が、女の情報を重点にしていることは、今後大事だと痛感した。

開発途上国の人たちを知るにつけても、草の根運動は、女や男のよりよく生きるためのヒューマンなものであることを、切実に思った。

当初、私は生まれてはじめての海外旅行ができれば……との気持ちで、研修を受ける余裕もないまま、「九州」からは一人だけの、あわただしい旅立ちだった。

僥幸にも会議へ参加のチャンスに恵まれたことは、一つの大きな私自身への宿題も課せられたような気持ちが生きていることも事実である。旅を終えたものの前には問題が山積しているようである。

### のびやかな女たちに感激

山口のり子

#### 出会いと触れ合いの場「フォーラム」

フォーラムに参加してまずびっくりしたのが、その自由な雰囲気だった。会場の出入りがとにかく簡単に自由。受

付で氏名と住所と所属を書き、ネームプレートもらい、それを胸に付けるだけだ。ロビーを行き来する各国の女性の服装も実にさまざまでない。ペラセンターの各国政府代表のすばらしい民族衣装やりっぱな服装に比べると、普段着の好き勝手な格好というところだ。ノーブラの人も多かったし、ほとんどの人が化粧をしていないのに驚いた。日本女性のように厚化粧をしている人などついぞ見かけなかった。また子連れも多かったし、リュックをかついだ旅行者風の人も見かけた。ロビーや分科会はそのさまざまな女たちの熱気とエネルギーに満ちていた。そして食堂で隣り合った人と話し込んだり、通りすがりに教室を尋ねた人と、そのまま立ち話に夢中になったりして、会場は思いがけない出会いと触れ合いにあふれていた。いろいろな国の女たちと経験や情報を交換し合い、触れ合うことを一番に求めていた私にとって、それは想像以上のすばらしい収穫だった。アジアの諸国からの女性が少なかったのは残念だったが、この出会いと触れ合いが、フォーラムの最もすばらしい点だったと思う。

### コペンで会った女たち

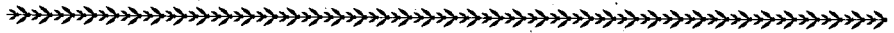
コペン滞在期間中に、幾人ものすてきな女たちに出会うことができた。まず私と同じ家に泊まっていたオランダから来た二人の女性。一人は大学の講師で、一人は働きながら夜学で経済学を学んでいるそう。二人とも口を揃えて結婚も同様も否定した。一緒に暮すかどうかでも女のほうに家事の負担がかかってしまうから、好きな時に行き来で

きるボーイフレンドが一番いいと言っていた。そのしゃべり方に気負いはなく、さわやかな自信に満ちていた。またコロンビアから来た、五人の子どもをもつ中学の教師で、とてもチャーミングな女性も忘れられない一人だ。コロンビアでの女性差別の実態、特に政府により奨励されているビルが、女たちにもたらすさまざまな障害の話や、売春の実態などを熱っぽく話してくれた。「男が女を買うことは、男が自らを売春することに等しい」と言った言葉が印象的だった。その他まだ多くのすばらしい女たちと巡り合ったが、彼女たちの話や幾つか参加した分科会から、世界のあらゆる国の女たちは、程度の差はあっても、皆同じ問題や悩みを抱えているということを実感した。

世界の女たちは、お互いに手をつなぐなければならないとつくづく思った。さまざまな国の女たちが、さまざまな行動をして闘っていることをつぶさに見て、私もまた力がわいてくる思いがした。

### デンマークの女性解放

まだ多くの問題があるとはいえ、デンマークの進んだ女性解放の様子は、私に強烈な印象を残した。期間中ずっとコペンハーゲンの一家庭に宿泊し、デンマーク人の生活に直接触れることができたのはとても幸運だった。私を泊めてくれたマヤという若い女性は、三十坪ほどの庭付きの5LDKという、私たちには実にうらやましい広さの家に、男性と同棲していた。彼らは結婚というものにこだわらず、子どももつくらず、ふたりだけの生活をとても大事にし、ま



た楽しんでるようだった。五時頃には二人とも仕事から帰り、揃って夕食の支度をするという。彼が「二人とも働いているのだから、家事を平等にやるのは当然のことだ」とこともなげに言った。そして彼らのように結婚しないで共同生活という形をとる若者が非常に増えているとのことだ。四〇歳以下の男性の間では、男も家事育児を担うのは当然という考え方が、デンマークでは一般的になりつつあると彼らは強調した。日本では考えられないほど、デンマークでは女性解放が進んでいる様子に目を見張らされた。

また、もう一人デンマークの若い女性で私に女性解放を印象づけた人がある。ティーナという二三歳の女性で、学童保育所見学の企画に参加したところ、出迎えてくれたのが彼女だった。その学童保育所は町立の施設で七歳から十四歳までの子ども六〇人ほどを九人の男女の教育指導員がみているとのことだった。デンマークではこの保育所にも学童保育所にも、必ず男性の職員がいるそう。家庭に母と父がいるように、施設にも男女の保育者や指導員がいるのが自然、という考え方が根づいているのだ。施設は朝早くから開き、親の出勤時間によつては、子どもたちはここから学校へ通うこともできると聞いた。デンマークの子どもたちは、こういう施設でのびのびと毎日を送っているのかと思うと、塾通いをしたり、ひとりテレビを見ながら親の帰りを待つ日本の子どもたちがかわいそうになった。また施設も明るく開放的で温かみがあるりっぱなものだった。このように子どもや働く母親の側に立った施設や、

さまざまな施策が、女性の労働権を守り、女性の社会進出のバックボーンになっているにちがいない。

見学後思いがけず、彼女が自宅へ夕食にさそってくれた。郊外の彼女の家は、なんと子どもを含めた十四名の男女が共同生活をしている。「コミュニティ」だった。皆でお金を出し合つて十四室もある大きな家を買ひ、ひとり一室ずつをもち、食事や掃除当番を一週間交替でやり、とてもうまくいっているとのこと。ゆてたポテトと野菜とパンだけの質素な夕食はにぎやかで楽しい食卓だった。彼女は、同様のボーイフレンドだと言つて若い男性を紹介した。

デンマークでは本当に結婚の形態が変化し、こういう同棲や共同生活が多くの人々に好まれ、そしてそれがりっぱに市民権を得ているよう。またそういう形の生活が、男女の間に自由で自立した結び付きをもたらしている様子を見て、女性が結婚や家庭というものから解放されることが、真の女性解放に不可欠の一要素なのだろうかと思つた。

このように会議に参加した人々だけでなく、ふとしたことで知り合つた一般のデンマークの女性や男性の間でも、意識の上でもまたその生活の中でも、自然な形で女性解放がみごとに実現されつつある様子を見て、日本の情況を思い、気の遠くなるような差を感じた。我々にとつてその道はまだ遠いよう。しかし少しずつでも、とにかく前進しなければならぬ。この十三日間の貴重な経験をふまえ、世界の女性や世界平和への視点をもちつつ、家庭での夫や子どもとの関係の変革と、地域の女たちと連帯して活動す

ることに基盤をおいて前進しようと、日本へ向かう飛行機の中で、気持ち新たにした。

十三日間の旅の間、二歳の息子は、〈あごろ武蔵野〉の仲間のお宅に三泊、夫の実家に四泊、夫の上司のお宅に二泊、そしてあとは夫とともに過ごした。また〈あごろ武蔵野〉の仲間はカンパをしてくれた。多くの人々のサポートがあつてはじめて、私のコペンハーゲン行きは実現した。私を支えてくれた全部の人々に、そして夫と息子に心から感謝したい。

## 世界婦人会議への道程

——一地方都市の市民として——

高橋 ますみ

「市長さんは、さきほど、『婦人の生涯を通じての社会参加の促進』とおっしゃいました。これは、行政にたずさわる方々が安易に使われる、聞こえのよいことばです。でもそれには膨大な予算と市民および行政側の意識改革が必要です。そのお覚悟はあつてのことでしょうか。今から三年余り前、名古屋市の八〇年代（昭和五五年―六五年）基本構想の骨子に対する公聴会の席上。参考人として呼ばれた二〇人ほどの市民が、新幹線公害、学校移転問題、日照権のことなど、一人三分の制限つきで、市政への注文を述べました。最後に順番の回ってきた私の、婦人問題にまとを

しばつての発言は、この種の席では、なじみの少ないテーマなのか、出席者のほとんどは、あつけにとられているといった表情でした。ただ市長が身を乗り出すようにして興味を示された反応に、私は奮勇をふるってことばを続けることができました。

「婦人の生涯を通じての社会参加」には、託児や託老など社会的な保障が不可欠であること。現に私がこの公聴会に出席するにあたって、姑の介護のために近郊から義姉が駆けつけてくれたこと。でもそれは、「市長さんご呼びだから」との大義名分があつたからこそで、もし他の社会参加例えば、学習会とか市民活動など現金収入をとまわらない外出に、親戚の誰かが、老人介護や育児の肩がわりをしてくれることは決してないことなどを、私は限られた三分間夢中でしゃべりました。「子どもを大きくし、姑をりっぱに看取り、女のつとめを果たしてから、自分のしたいことをしても遅くない」と周囲からは無言有言の圧力がかかり、自らをもなだめすかして、そのあげく、わずかな自由を手にしたときは、白髪の老婆。そんな女のライフサイクルを打ち破る絶好のチャンスが、「国際婦人年の十年」です。「世界行動計画」を受けての「国内行動計画」は私たちの武器の一つだと受けとめていました。「国内行動計画」はお役所ことばのオンパレードで具体的なプログラムなし、と婦人評論家や婦人団体からきびしい批判を受けてはいましたが、せめてこれでも縦横に駆使して、各地方自治行政の中で実現していく担い手が、私たち草の根グループや女性市民の

課題だと私は信じていました。少なくとも、革新市政では、今後十年の市の基本構想の重要な柱の一つとして取り入れられてしかるべきだと期待していたのです。ところが、毎月配布される『広報なごや』に掲載された基本構想素案には、「婦人青少年」ということばでくくられた作文的な活字があるだけで、「世界行動計画」の形跡は見当たりませんでした。

広報に挿入してあったアンケート用紙に私はカッカしながら、世界行動計画の要旨を書きつらねました。

アンケート提出者の中から公聴会出席の要請を受けた私は、限られた時間に、日常生活の中での女性差別へのたぎる怒りを、冷静に述べる自信がありませんでした。事前に婦人問題の視点からの要望をまとめ、コピーを数通用意して出かけました。昔流に言えば、直訴というのでしょうか、市長、助役、各局長など、その日初対面の方々に、「お時間のあるときに是非読んで下さい」と、手渡ししました。

その二が月の中には、各婦人団体などからの要求が実って、名古屋市婦人問題担当室が設けられ、市の婦人行政への取り組みは、時代を先取りして、この三年間に急速に進みました。その間にも「主婦のボランティア活動と、経済的な自立とのかかわり」をめぐる、中山恵子担当室長と激論したことも、市婦人会館の託児をめぐる、教育委員会へ「あごら」のメンバーと陳情に行ったこともあり、はげしい衝突も、行政当局と草の根グループとの間に基本的な信頼関係があったからこそ私は信じています。

公聴会での発言がきっかけで、私は名古屋市婦人問題懇話会委員に加えられました。委員の構成は、学識経験者とのことで、専門職を持たない私には、当初、場違いな違和感がありましたが、ここで他の委員からも、行政側からも多くのことを学びました。

二年間の任期中、「女性から市民・自治体への提言」の執筆に参加しましたが、その一つとして、名古屋市はコペンハーゲンの世界婦人会議へ調査団を派遣することになったのです。

調査団員は、広報で公募され、市内六〇名の各層の女性が小論文をそえて応募しました。どの論文も婦人問題への並々ならぬ熱意にあふれ、結局、各区ごとに抽選で決定することになりました。日ごろはくじ運悪くあきらめていた私も緑区から選出され、調査団の一員に加わることができました。海外派遣ともなれば従来は、大きな団体の長、しかもたいはいは二年輩で占められてしまうものですが、今回は、大学生から六七歳までの、名古屋の女性市民の縮図のような構成になり、婦人活動の広がりのためにもよかつたと思っています。

名古屋市調査団は、「あごら」の企画した「世界婦人会議と北欧の社会福祉施設を訪ねる旅」とドッキングし、「あごら」主催のワークショップ（分科会）で「名古屋市の女性の現状と課題」についてスピーチする機会も得ました。これは「あごら」のメキシコでの実績、「あごら」本誌の情報と伝達に対する誠実さ、キーセン観光業者とは手を組まな

い清潔なきびしきなど、日ごろの活動姿勢で、市民や行政担当者の信頼が得られた結果だと思ひます。

世界會議に主体的にかかわるか、受け身になるかで、各個人の参加への満足度は異なつてきます。へあごろの一員でもあり、名古屋市調査団員でもある私は、旅の始まりから終わりまで、人間關係の調整にかなり氣をもんだのも事實です。でもこれは、ほとんどが私の取り越し苦労でした。

一行には、民主団体のリーダーや、市會議員、労組役員、教師、今回はじめて社会参加された主婦など、さまざまの人がいました。組織や立場、イデオロギーのワクを越えて、私たち女は、同じテーブルにつき、同じ目的に向かつて連帯できるとの確証が得られた旅であつたと、いま、私は自信を持つて言えると思ひます。「差別撤廃条約」の批准、婦人行政の向上などに向けて、旅で育つた連帯と広がり、輪を大切にしながらかわつていきたいと願つています。

## 女たちに会つた旅

佐々木元子

Kさん。コペンハーゲンの「貴族の館（駆け込み寺）」でお会いしてからもう二か月が過ぎましたが、いかがお過ごしですか？

「貴族の館」では、縞模様のＴシャツにジーンズ姿の背の高い女が私たちを迎えてくれ、仕事を終えて今来たばかり

と言ひながらいろんなことを話してくれましたね。

たくさんの女たちがお金を出し合つてこの城を買つたこと、活動はボランティアの女たちがローテーションを組んで行なつてゐるけれど、資金は政府からも出させていること、とても多くの女や子どもたちが夫の暴力から逃がれて来ていること、みんなが職業を得るためにここで技術を学び、そのための施設も持つてゐること、医師・弁護士・教師など専門的な仕事に従事する女たちがカウンセリングや就職あっせんのためのネットワークを作つて協力していることなどなど。どれをとつても私たちには羨望の的でした。そして「衝動的に週末に逃げて来る女や、一文無しで出て来る女は必ず夫のところへ戻つてしまふ。本当に自分で生きることを始めようとするまでに二、三回同じことを繰り返し、けれど決心した時には、お金を盗んでも出て来て、その時の女はもう大丈夫。私たちが手を貸すと、みるみる自立して、ここから出て行く」と話す彼女は、私たちが慣れている優しそうな身振りや笑顔は見せなかつたけれどおそらくは長年、真剣に生きようとする女たちとかかわつてきた人のみが示せる本当の優しさの質を見せてくれたように思ひます。

今私は、Kさんがあの時、「この一〇年、私がやりたくてたまらなかつたこと、やろうとしてできなかった夢がこころではやれてゐる！これなんだ。これだったんだ」と言つて、とても嬉しそふだったのと同時にとても悲しそふでもあつたことを思ひ出しています。

デンマークはさすがに世界で一、二を競うほど女の制度的・法的な解放が進み、社会的地位が高いと言われるだけあって、国の政策も法律も、一般的な慣習や社会通念とよばれるものも、日本とはかなりの違いがあるというのが実感でした。日本の女たちがこれから闘い取ろうとしている

「男女雇用平等法」や「差別撤廃条約」の多くの部分がすでに実施されているので、今さら何を騒いでいるのかと言う人々にもたくさん会って、日本の後進性をつくづく思い知らされました。けれども私が何よりも違うなあと感じたのは、貴族の館、でもそうであつたように、女たちの態度、ひとりひとりの女の強さと優しさについてです。それはデンマークの女たちだけでなく、コペンに集まった多くの女たちと私を含めた日本の女たちの違いだつたと思っています。たとえば私はアメリカや西ドイツ、スウェーデンからやって来た女たちと知り合いになつたのですが、彼女たちは皆一人で参加していて「反核・反原発のワークショップを開き、世界的なネットワークを作ろう」と呼びかけたアメリカ人タニアのまわりに集まった女たちです。誰もが他を代表するとか誰のためとかを言いませんでした。自分自身の意見を述べ、交換し、自らが新しいかわりを作り出す主体として参加していました。

産業社会が人々を競争や不信任ばかりの人間関係の中に置き、強迫観念にも似た自立心を持たなければ生きられなくしています。その中で女たちもまた、テクノロジ―と個人主義の伝統から自立を強制され、すさまじいまでの孤独

感を抱いてひとり立っています。彼女たちが強く優しく見えたのは、この孤独と真正面から向き合い、文明の危機としてひき受けていく覚悟を持っていたからだろうと思うのです。

それとは対照的に、日本の女としての私は、いまだに共同体の一員として生きるという伝統をひきずっていて、自分自身を見失つたり、心を閉じてしまつたり、素直な自己に向き合うことさえ大変な努力をしなければならぬという有様です。どこかで個が輝き出すことを恐れているような気さえします。また、人々と信頼し合い、共に暮らし、人々や自然に直接手を触れたり責任を分け持たつたりしたいと願っているのに、それを拒む産業社会をくつがえすためのトータルな闘いの方法を見つけることができずに、やつと差別撤廃に力を傾むけているのが実態です。徹底的に女としての個を貫いてその果てに初めて人と交わることができ、人が本当に生きられるのはトータルな解放が実現される関係の中であると肌感じて帰って来たのですが、Kさんたちが七〇年代初頭に始めた日本のリブ運動も、そのところから出発したのでしたね。一〇年たつても日本の女たちはまだこんなところと悲しく思われたのでしょうか？でも旅を終えたKさんは、また情熱をたぎらせていらつしゃることでしょう。

私は私に出会う旅に出かけようと思っています。その旅先でまたお会い出来ればいいですね。お体、大切になさってください。

## 雇用の平等を求めて

大脇 雅子

一年がかりの深夜業や休日労働をして、婦人労働に関する本をやつと書き終えた。そして私は、私たちが雇用の男女差別について論じ、その撤廃のための道すじを探っている運動は、世界の婦人労働運動の、いったいどのあたりに位置しているのだろうか？ そんな疑問をおさえかねて、〈あごら〉の会員として、コペンハーゲンの世界婦人会議に参加することにした。

〈あごら〉が持った「高度工業社会における女性」というフォーラムで、スピーチをする時間を与えられたことは、私にとって本当に貴重な経験であつたと感謝している。私は、私たちがたつたかつてきた男女差別裁判の事例を通して、日本の女たちのありさまと、日本の女たちの心意気を、世界の人たちに伝えたいと思つた。長い、重い、法廷闘争について会場から受けた熱い共感と連帯のまなざしを私は忘れることができない。

そのなかで発せられたさまざまな質問や意見のなかで、働く女たちの問題については、「日本では、労働組合はいつたい何をしているのか」「男女差別を取り締まる法律はないのか」という質問ほど、日本の現状を告発したものはなかった。たしかに、そこに違いない。

私はできるだけ、雇用とか労働組合と名のつくフォーラムに顔を出した。そこでは、いずれの国も、不況や失業の多いなかで、低賃金労働者としての女性の地位は、基本的に共通していた。むしろ雇用に関するかぎり、この数年間、女の地位は悪くなつてきてさえないと、くりかえし語りあわれていた。

女性の地位において先進的である北欧三国の状況は、たしかに私たちを羨望させるに足る国策や制度を持っていた。しかし、スウェーデンの女性法律家の人たちとの小さな夕食会で、スウェーデンにおける現在の男女差別は、労働市場がいまなお男向け女向けに分断されていること、八歳以下の子どもを持つ両親が一日六時間に労働時間を短縮できる法律も、結局は女性のほうにその取得が偏っており、交替制勤務では、その権利行使の結果、女性はパートタイム労働をするようになってしまふことなどにみられることを知つた。スウェーデンの男女平等問題担当大臣の演説によれば、そのためにも家庭科の男女共修を積極的に進進しなければならぬという。

先進諸国の問題としては、不況や失業という大きな経済の動向のなかで、それが女たちの雇用に与える効果を、科学的に見きわめなければならぬと思つた。例えば、スイスのアントワネット・ベギュインさんは、「女性の雇用問題と展望」と題するスピーチのなかで、エレクトロニクスなど微電子工学の分野における技術開発は、やがてはいま女性の大部分が担っている事務やタイプの仕事を縮少するこ

ことになるだろうと述べ、アメリカのヘレン・サファさんは、発展途上国へ安い労働力を求めて進出していくアメリカの企業がまきおこしている問題は、アメリカにおける失業——とくに弱少派のスペイン系の女たちに与えている深刻な影響——や掘りくずされていく労働条件、労働組合の弱体化であると報告した。多国籍企業は、日本の労働者、とりわけ女たちにどんな影響を与えつつあるのかという問題も考えなければならぬ。

社会主義圏からの報告も、かなり率直に、婦人問題は、体制の枠をこえた社会慣習を変えないかぎり解決はない、というものであった。

エジプトのナワル・エル・サドウイさんの報告も、衝撃的で、彼女は、医師でありながら、薬よりも食物を求める人たちの現状をみて、小説家に転じ、小説をとるか夫をとるか迫られて、子どもを残して離婚をした。彼女は、女性の働く権利について従妹に話をしたら、「私にとって必要なのは、休む権利よ」と言われて絶句する……。エジプトでは、貧困のために、まず教育を受けることのできるのは男たちで、教育を受けることのできない女たちは、いつまでも下積みの労働で寿命すら縮めている。インドでの一四歳以下の児童労働者のうち女の子の数は男の子の数の二倍だという。セネガルなどアフリカでは、農作業をする女たちは、労働人口にすら数えられていない。

ひるがえって日本における問題を考えるとき、女たちを家事、育児、老人介護にとじこめようとする教育。若い女

たちに対して、そしていま働き続けている女たちが生涯保障されるべき質の高い職業訓練。女性問題を真正面からなかなか取りあげてくれない労働組合の問題など、私たちは真剣にとりあげなければならぬ。

ベティ・フリーダンの「家族」のフォーラムにおける演説は「平等」の反対物としての「家族」をキャンペーンされたときの影響やそのこわさを教えてくれていた。共働き家庭」の問題を、私たちは、もう一度キチッと整理して、女性解放運動の足並みを乱さないために、理論武装しなければならぬ。

コペンハーゲンの会場で聞く話は、女性解放のための道の遠さ、問題の困難さを私たちに教えはしたけれど、草の根活動家たちの底抜けの笑顔は、未来の明るさを象徴していた。そして私がそこで得た宝は、地をほうような活動から生まれた、絶えることのない女たちの忍耐力を見たことであつたと思う。

## 私の中の世界婦人会議

合 田 京 子

「婦人問題では世界は一つ」——これはクラブ通信という名古屋婦人団体連絡協議会から発行された機関紙の座談会のタイトルである。私はこれを目にしたとき、小さい驚きの声を発した。座談会の出席者である彼女たちと二週間近

い旅を共にしたのであるが、私は今回ほど世界の婦人問題はバラバラであると痛感したことはなかったからである。

外国の客を受け入れる日本の会議施設とはほど遠い、殺風景な会場、まるで、それをインテリアするかのような婦人たちの群れ、そして行動。

ここに集まつてきた女たちは、さまざまのものを背負い、もがき、何らかの光をみつけるために、どんなに多くの金と時間を費やして、また大切なもので失つてやつてきたことであろうか。開会式でアメリカ在住のアフリカ女性が、二十億の女性たちよ、私たちは明日に向かって共に立ち上がろう！母よ娘よ手をとって、姉よ妹よ共に手をとろう！と両腕を広げ歌ったとき、彼女の中に私がいるのを見た。夫の死にも、父や母の死にさへ涙を流すことを拒み続けた私は、異国の、しかも見知らぬ女性の低い嗚咽に似た美しいピロードの声に泣いた。

婦人問題といっても各種各様で、第三世界と呼ばれるアフリカやインド、アジアの女性にとっては、生きること、食べることに、祖国を守ることと自体が解放であり、日本を含め先進諸国と呼ばれる女性たちの婦人問題とは、種のところから異なっているのであり、同じ花を咲かすことを望むなら、それらの女性たちに私たちは何をすべきであるか、できることは何か、を自問する必要があるのではないだろうか。

それと同じことが日本でも語られるべきである。労基法や母性保護法などは異国の法と同じだという女性たちのこ

とを、恵まれた女性たちはどうとらえているのだろうか。法律の外で生きている女たちのことを考えるとき、私はどんなにりっぱな女性解放思想史も、運動家の理論もあてにならないのである。何も言わずに黙々と働いている女たち、この女たちに光を当てたいと思う。

夫の半年以上にわたる闘病生活のとき、そこに働く看護婦や調理場の女たちのことに思いをはせ、死後、一人身の軽さから故郷である京都へ帰るために利用するホテルのレストランや知人たちと談笑するために使うスナックで働く女たちのことを考えてしまうのである。「何時まで働くの？」と小声で尋ねる私の耳に、「二時までです」と彼女らは笑顔で答えてくれる。二時に閉店したとしても就寝は三時をまわるであろう。子どもたちは、夫たちは、いるのだろうか。子どもがいたなら明日の朝は何時に起きるのだろうか。定期検診は受けているのだろうか、さまざまの思いが頭の中を駆けめぐる。私は何のために婦人問題をやっているのだろうか。

父が生前、テレビで女性評論家のへりくつに「ヤキトリ屋のオカミのほうがあれより上だなあ」とボソリともらした一言が私の胸を刺したことがあった。ヤキトリを焼きながら、女手一つで四人の子どもを大学まで出したというのだ。そして子どもが二人しかいない私の苦勞は彼女の半分だと説いた。机上の空論ほど愚かなものはない、文句があるなら何でもやってみろ、それから文句を言え、これが父の持論であった。この父は財があるにもかかわらず、私に一銭の

送金もしてくれなかったし、私も頼んだことはなかった。そのおかげで、夫や父の死後も私の生活は何一つ変化をおこさなかったのである。

世界婦人会議に参加する際、考えぬいたあげく私は会社に辞表を提出した。上司は青ざめ、帰国してからも仕事を続けることを勧めてくれたが、僅かの年休をすでに使い果たした私はまわりに甘えることも自分の性格に相反するし、囑託という会社の処遇にも、いつかは独立するという目的があればこそあまんじていたからである。そんな私に、世界婦人会議に出席したことは多くのことを教えるとともに開眼をもさせてくれた。

日本の女性運動は地についていない、言葉を変えれば基礎工事をやらないまま家を建てたようなもろさを持つている。例えば市川房枝氏という偉大な活動家がありながら、彼女の高得票を、同じ思いを持つ女性たちにわちあい進出させることによってさらに発展できないものかと願うのは私のたわごとであろうか。

社会を変え、男性を変えようとするならば、女性自身からまず変わらねばならない。婦人差別撤廃条約がいかに署名されようとも、母性保護法つきの男女平等法が立案されようが、それにかかわりなく生きねばならない日本における第三世界の女性ともいうべき、陰の女性たち、それらに蓋をしたまま、もつと、もつと、と手を広げて差別を生み続ける。そのためには女性すべてを洗いなおし、法の外の女たちに目を向け、手をさしのべるべきである。

これからの婦人運動は底辺を広げること、基礎工事を心をこめてやること、そして、一人一人の女性が自覚を持たない限り、男性の支持はもちろん、同性の支持をも持たない、ごく一部の人にしか受入れられないのが、まだまだ日本の現状のようである。今回の世界会議は国によって根本から問題が異なっていたと同じく、日本においてもそれと同じことが言えるような気がした。

## 私の旅

沖本 礼子

### 平和への希求

コペンハーゲンに着いた七月二十一日の夜、朝日の下村さん、共同通信の中村さん、ヤンソンさんから、これまでの政府会議の概要を聞く。新聞ですでに報道されているように、初日から政治色の濃い不穏な空気の会議もようである。

一方、民間のフォーラムのほうは、会場が三か所に分かれていてわかりにくく、しかも、アマガーセンター内は、迷路のような通路と多くの扉で、目的のワークショップを探すのだけで大変な時間がかかるという。ともかく、自分の足で歩き、自分の目で確かめるのみ。

フォーラム参加の登録をし、数日後には、センター内で迷わず目的のワークショップにたどり着くことができるよ

うになつても、いざ討論となると、大人の中に幼稚園児が迷い込んだようなもので「もつと詳しく聞きたい」「日本の状況も伝えたい」ともどかしさがつのるばかりである。

しかし、あくまでも人々は優しく、微笑をかわしながらすれ違い、つたない英語に聞き入ってくれる。そんな人々に容認されるうれしさと、各国から同じ目的で集まつてきたという一種独特の雰囲気包まれ、安堵感を覚えたのは私だけであらうか。

参加したワークショップの一つ「平和の全貌のための教育」では、二〇名ほどの参加者が自己紹介ならびに平和に対する考えを述べていく。アメリカ、西ドイツ、スウェーデン……。そして、スライドは各国の反戦ポスターを次々に映し出していく。そのスライドを見終わつた後、何か言ひしれぬ物足りなさを感じる。反戦ポスターでは言い尽くせない平和への希求があるはずなのだがと、言ひしれぬ物足りなさを分析していると、むかいの席の西ドイツの女性も同様に感じたのであらうか、主催者に質問を始める。その話す姿勢に、彼女の平和に対する真剣さが伝わってくる。私自身は、ヒロシマ・ナガサキ、軍縮、経済侵略戦争……と頭の中でぶつかりあい、疲労していく。主催者である国連勤めの女性は、そんな私たちを抱きしめ、平和と友好を誓い合いながら別れを惜しんだ。

積極的に平和を守っていくこと、平和を獲得していくことを考えながら、このようにして人々が出会えば平和は創り得ると、今、コペンで出会つた優しい女性たちをなつか

しんでいる。

#### デンマークの子どもたち

会場の案内係の紹介で、コペンの保育園を見学。アマガ―センター内の食堂で出会つた子どもたちは、目も髪も膚の色もまちまちであつたが、みなデンマーク人であるという。子どもたちと手をつなぎバスに乗つて保育園へ向かう。ヴァーサ、四歳。髪、瞳、共に黒、膚はやや浅黒い。混血なのか、養子なのかわからないが、そのいたずらつ子の表情は、くつたなく明るい。

デンマークでは、市立の保育園が地域ごとに建てられ、零歳児から十四歳児まで一貫して保育される。学童保育も広々とした同じ建物内にあるので、引越しをしないかぎり同じ保育園で兄弟とも育つことができる。ヴァーサの明るさは、保母さんが第二の母親となり、子どもたちを育てていくからであらうか。

そんなデンマークでも十四歳以上の非行が増加しているのが悩みであるという。

一方、老人に対しては、きめの細かい対策がなされているようである。老人ホームは、医療、リハビリ施設が完備され、地域の人々にも開放されている。人々の趣味と実益を兼ねた手芸、栽培の設備もあり、看護人と一対一で語らうようすは、なごやかそのもの。満ち足りた笑顔が印象的であつた。

コペンハーゲンからストックホルムへストロイエ通りの賑わいを離れると、清潔で明るく静か

な街並みが続き、いたるところに公園があるコペンハーゲン。通りに面した半地下の部屋をもつ家々もしゃれている。コペンハーゲンが公園の町とすれば、ストックホルムは水の都ともいふべきか。緑の木々に囲まれた通りを少し歩くと、すぐに運河につきあたる。ヨットが幾艘もくり出され、すばらしい眺めが続く。

ストックホルムでは、ラジオ局を訪問する。組合の執行部三人（男性一人、女性二人）に会う。まず驚いたことは、スウェーデンの女性の給与は男性のほぼ九〇パーセントであるという。日本では五〇パーセントであるという、今度は向こうが驚く番となる。

スウェーデンでは、雇用のための募集に、エンジニア希望と書いても、性別を指定してはいけないうり決めとなっている。またその組合は、婦人部組織はなく、男女共に、女性の地位の向上と賃金格差是正のために闘っている。そして男女平等法については、国民レベルでも国会でも議論がなされ、今年の七月から施行された法律の中には「雇用人員の四〇パーセント以上女性を採用すると、補助金を出す」という内容が盛り込まれているが、しかし、女性の採用をより増加させたいという、女性、組合側の願いに反して、採用を増さなくても罰則はないので、法律としては弱いものになっているという。

執行部の女性は、「私はベシミストであるが」と前置きしながら、「本当に少しづつではあるが男女差はなくなってきたというし、スウェーデンの状況は他国よりも恵まれている

かもしれないが、まだまだ真の平等には遠い」と苦しそうな表情で語った。ここにも、女性の未来、人間の未来を思っている女性がいる。——世界の人々が同じように憂え、問題を解決していこうと行動するならば、何十年、何百年もの年月はかかるだろうが、歴史は築きあげられるのではないだろうか、コペンを離れたこの地で、またしても、熱い思いがこみあげた。

#### 旧市街での若者たち

夜十二時すぎ。レンガ造りの家と石畳の狭い道に小さなガス燈がとる。中世の街を思い起こさせるガムラスタン（旧市街）を歩く。ジャズの聞こえる酒場、カフェもそろそろ店じまい時。グラスを傾ける人々の楽しげな顔と対照的に、石畳にたたずむ、うつろな瞳の若者たちに出会う。何を話すでもなく、何を見るでもなく、ぼんやりとすわりこんだ若者たち。一人がギターをつまびくが、誰も歌うものはいない。バカンスにも行けず、カフェに入るお金もないのか。カフェに入ること―社会に参加することを―拒絶しているのか。福祉の進んだ豊かな国と、旧市街の若者たちのイメージがだぶり、不協和音を奏でる。

#### フランスの女性政治団体 ショワジュール

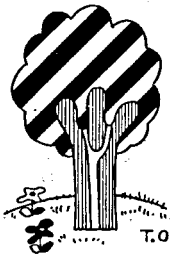
「あこがれのパリ」という気持ちはもとよりないが、それにしても期待に反して居心地の悪いパリ。その原因は、黄色人種に対する蔑視。それでも気をとり直して、女性の政治団体「ショワジュール」を訪問する。五年間の試行期間を経て、一九八〇年一月に成立するまでの中絶法解禁の運

動の一端を担った組織シヨワジールの事務所は、パリの町角のビル的一角で、〈へあごら〉の事務所とはほぼ同じくらしい広さの二部屋であった。

部屋に入り、まず目につくのは選挙ポスター。国会議員に立候補し、全員落選したという。しかし、月刊紙は八千部も発行され、中絶解禁に至るまでには、フランスの全女性が一致して運動が盛りあがったという。中絶法が成立したため、女性に安心感が生まれ、女性解放へむけての運動は現在停滞きみであるが、今後、女性差別撤廃条約をいかに生活の中に浸透させていくかが問題であり、将来の目標として、ECで、共通の女性問題を話し合い、解決していきたいということである。

シヨワジールの代表者、弁護士ジゼルが語るフランスの女性の状況もまた、そう明るいものではないが、世界の人々との連帯へと、未来の希望は広がっていく。

デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フランスと二週間の旅を終え、闘う女性、憂う女性、微笑む女性、怒る女性——どれも、一人一人の女性の中に息づいている姿であると確信した。それら世界の人々とともに、未来へと歩んでいきたいと、旅を思い返しながらかけている。



## 北欧を旅して考えたこと

青木みち子

コペンハーゲンで開かれたフォーラムおよび北欧の旅で一番感じたのは、やはり言葉の壁が厚いということでした。英語で話す訓練ができていないのです。いろいろな国の人に参加しているのですが、なまりや文法上の違いなど全然気にしないで堂々と話しているのを見て感心し、私も五年後には、英語で意見が言えるように努力しなければと、つくづく思いました。それと第三世界の人々のエネルギーと圧倒的な活躍ぶりに驚かされました。日本の中にいるとあまり現実的にはせまって来ないのですが、現実には世界の各地で戦争が起きている、そして飢えて死んでいく人々が大勢いるということが改めて胸にせまってくるのでした。私は今の平和がいつまでも続くように錯覚しているけれど、平和は守るもの。世界中の女性たちが、平和を守るために一生懸命話し合い考えているのを目のあたりに見、私たち日本人は常に「広島」「長崎」を背負っていることを膚で感じて来ました。私たちは、過去の戦争体験、現在世界各地で起きている戦争についてもっと知る必要があると思います。そして、平和の大切さを子供たちに伝えてゆくべきではないでしょうか。日本製品は世界中にあふれ、大勢の人々が海外へ出てゆくのに、日本の社会のことはほとんど知

られていないので、どんなことでも知りたいと思っ  
て人々の熱心さにびっくりさせられました。世界のことに関  
心を持つと同時に、日本の現状について、女性の問題につ  
いて、積極的に知らせる努力をするべきではないでしょ  
うか。

北欧のフェミニストたちと話し合えたことは、私にと  
つてすばらしい体験でした。男女平等福祉の面では最も進ん  
でいるスウェーデンでも、法律上は平等でも、実際に職場  
や家庭、社会でもまだ性差別が残っていることを知り、日  
本の現状を考えると、本当に平等になるのは、いつのこと  
かと暗い気持ちになりました。

スウェーデンで一般家庭を訪問した時のことが、一番興  
味深く印象に残っています。私も子育て中で、同世代とし  
て子どもの育て方、考え方にずいぶん共感する点が多くあ  
りました。子どもであっても一個人の人格として認めて育て  
ており、子どもは社会が育てるという認識がしっかりでき  
ているようでした。性について、ごまかしたりあいまいに  
教えたりせず、ありのままの男女の姿を、家庭でも学校で  
もきちんと教えているので、無知で妊娠するようなことは  
ないという話を聞き、きちんとした知識さえあれば、日本  
でも中絶などしなくてもすむ場合がかなりあるのではない  
かと思いました。テレビに関しても、性についての禁止は  
特になが、暴力に関しては、厳しく禁止しているという  
話が出て、私も日本のテレビの子ども番組の暴力シーンが  
多すぎると思っていたので、全く同感でした。一時間の予

定が、二時間半ほどにもなってしまうましたが、その間、  
私たちの質問に夫も妻も、それぞれが、自分自身の考えを  
熱心に語ってくれた態度が、とてもさわやかで忘れられま  
せん。

今度の旅で、私は今までの家庭に対する考えを大きく変  
えさせられました。今まで、家庭（封建的な「家」という  
意味ではなく）が社会の基盤であり、家庭を充実させるこ  
とが大事だと思い、努力してきましたが、北欧諸国を見て  
歩き、社会を支えているのは個人であると気づいたのです。  
本当に、ある時はつと気がついたのです。私にとっては、  
大変なショックでした。家庭に対する見方が変わったので  
すから。言葉としては、「人間は生まれながらにして平等で  
あり、個人として尊重される」べきであると観念的に思っ  
ていたのですが、個人という意味があいまいで、はつきり  
つかめていなかったもので、家庭という単位で各々を見てい  
たと思います。そうではなくて一人一人の個人、もっと基  
本的なところで、個人として平等であるということに気づ  
きました。個人と個人の結びつきから家庭が成り立ってい  
るという考え方は私の思考の壁を突き破る大きな衝撃でし  
た。スウェーデンでは、一年生に家族について教えるとき、  
祖母と子も家族、祖父と子も家族。父と子も家族、母と子  
も家族、父と母と子も家族、etc というふうに、いろい  
ろな形の家族を教えると聞いて、とても感心しました。私  
は両親と子という形がノーマルな家庭と思っていたが、  
どんな形でも個人と個人の結びつき、それが家族であり、

社会の基礎は個人であるというところに思い至ったのです。

ことではないかと思ひます。

## 名古屋市調査団の一員として

青山三枝

大人も子どもも老人も障害者も個人であり、個人として平等であるという考え方が、私たち一人一人の意識の中にも社会にも定着することが、平等な社会を作るために必要だと思ひます。それから、どこへ行つても若い人たちの働く姿をよく見ました。労働者がバカンスで休んでいる間、学生たちが働いているのです。女性が結婚し、子どもを産んでも働き続けるのが当然、という答へが、いつも返ってきます。学生も自分で働いて学校へ行きます。働くことをとても自然に考えているようでした。日本のようにあくせく働くというふうではなく、生活の一部として働いているという感じで、仕事に対する考え方にもだいふ差があるという印象を受けました。私も専業主婦として過ごしています

私たちが名古屋市調査団とへあごろの一行が、デンマークに着いたのは、世界会議の前日、七月十三日のお昼ごろ。夏というのに、気温は九度で肌寒い。二、三百年の歴史をもつレンガ造りの古い建物、石だたみの道、緑と彫刻の多い広場が目につくコペンハーゲンの街を私たちは歩いてゐる。いよいよ明日から世界会議がはじまる。

が、仕事を持つことは、人間のあたりまえの姿ではないかと思ひました。日本の社会では、子どもを持つて働くということはまだとても厳しい現状です。北欧に比べて百年ぐらひは遅れているのではないかというのが実感です。専業主婦である私は、やはり、現状に甘えているとつくづく思ひました。一人でも多くの女性が、仕事を持ち、連帯して、

会場に着いたら、肌の色も民族衣装も言葉もとりのりの婦人たちであふれていた。各々の国の歴史と女性の共通の重荷を背負つた婦人たち。大きなからだと情熱的な眼が印象的な黒人女性の参加が目立つ。政府代表を除けば、ほとんどが自主参加である。十五日間にのべ一万人以上の婦人が集まつたという。七五年のメキシコ会議から五年、世界行動計画の進行状況は遅々としているが、「婦人問題」に対する世界の世論の高まりを感じた。

職場での差別と闘つて、社会を変えてゆく努力をしなれば、日本の社会はなかなか変わらないのではないでしょう

「婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃条約」の署名式が行なわれ、最終日には、後半期行動計画が採択された。

せんが、一緒に旅をした女たちのがんばっている姿を見ていて痛感しました。私たち一人一人が意識を変えなければ、社会も変わらない。難しいことですが、これが一番大事な

日本政府は、「差別撤廃条約」の署名にも「後半期行動計画」の採択にも、国内の婦人団体などの運動や世界世論に

おされたとはいえ、「賛成」のサインを送った。雇用平等法・労働基準法・女子教育・国籍法など、問題は山積しているが、日本政府が大すじのところで「賛成」した成果を、今後の運動の「テコ」にして、「条約」の批准を実現させなければと思う。

私たち名古屋市調査団は、NGOフォーラムに参加した七月十四日は、図書館学校で開会式が行なわれた。会場になった講堂は、定員六〇〇人程度で、満席になると入口がとぎされ、おそらく千人をこえる人が入れなかったのではないかと思った。

デンマークの文化相（女性）は、歓迎のあいさつで、NGOの役割を高く評価していた。私は、メキシコ会議のトリビュンの果たした役割が、実際、今度参加してみても、よくわかった。トリビュンより、いっそう組織化されてきているともいわれるNGOフォーラムが、今度の世界会議に、計り知れないほどの役割を果たしているのではないだろうか。パネル討論会と大小さまざまなワークショップが、四〇〇近くのテーマで開かれたという。

警戒厳重な政府会議とは対照的に、フォーラムは、参加も討論も自由なふんいきで行なわれた。どの会場も、人種・思想・信条・文化・習慣などのちがいをこえて、「女性」という共通の広場で話があった。発展途上国と先進資本主義国との間には、さまざまな矛盾があれども、男女差別撤廃、婦人の地位向上」の前進を阻むものは、同質のものであるという思いを深めた。

発展途上国の婦人の発言は、特に迫力があつた。開会式で歌ったスリナムの婦人の声が耳に残っている。「新国際経済秩序の確立」「アメリカ帝国主義や多国籍企業とたたかう」などの言葉が、つきつきとびだした。深刻な失業、食糧不足、文盲などの問題をかかえ、国の政治・経済・社会の変革なくして、男女平等の前進はないと訴えていた。先進資本主義国の婦人の発言の中にも、不況・失業・低賃金・物価高など共通した背景が、雇用の平等を阻んでいた。婦人の能力を開発する教育の機会均等、職業訓練の平等、家事育児の分担などが、くりかえし討論された。各国の運動が具体性をもつてきているためか、手ごたえを感じた。基本的な人権や男女平等が日本より進んでいる北欧諸国の現実を見て、いっそう裏づけられた。

名古屋市調査団はフォーラムには三日間の参加で、コペンハーゲンに心を残して、次の日程に向かった。

そのあと、「核兵器と婦人・子どもへの影響」のワークショップで、被爆者高木静子さんの感動的な報告があつたという。今日の核軍拡競争の本質を告発した平和の分科会であつたと聞き、参加できなかつたのが残念に思う。政府会議の第一目に、八二歳の婦人をはじめ八人の婦人が、「軍縮、核兵器廃絶」をかけた五〇万署名を、ワルトハイム事務総長に手渡す一幕があつたと聞いた。さすが、婦人の世界会議であると感激した。男性も女性も、人間の尊厳を認め合い、豊かに生きる最低の条件として平和が何より必要であることを忘れてはならない。

人口の二分の一を占める女性の「差別撤廃」、人権の主張は、民主主義の主張であり、社会をよりよくするエネルギーであると思った。五年後を期して、私たちは、日本で行動することであると思った。

## 言葉・いとは

高橋みな子

五年前のメキシコ会議は、私には全くの「別世界」であった。当時マスコミで報じられた会議の様子は、ほとんど印象に残っていない。ところが、思いがけず参加の機会を得たコペンの会議は、私の心の奥深くに感銘を刻みつけ、その後の活動の原動力になっている。名古屋市がフォーラム参加と北欧の婦人の現状・福祉施設視察を目的とする婦人調査団を市民から公募するという小さな新聞記事を、もし見落としていたならば、今の私はなかったであろう。

すでにさまざまな形で世界会議の報告がなされ、また本誌でもさまざまな角度から論じられていると思うので、英語教師の私は、フォーラムについて言葉という視点から感想を述べたい。

開会式の会場へ入ったとき、まず目に留まったのが、会場を埋めた女性たちの色鮮やかな民族衣装。それにもまして興味深かったのは、耳に入ってきたさまざまな言葉によるおしゃべりの声である。開会を待つ間、私はじっと聞き

入っていた。

しかし会議の公用語は英語・フランス語・スペイン語であり、中でも英語が断然優勢であった。参加者が毎日手にした新聞FORUMも英語版のみである。それに対し何か抗議でもあったのか、二日目の新聞には Sorry about our language という見出しの記事が載った。新聞が仏・西語を使用していないことを詫び、その理由は専ら印刷能力に限界があるためと断わっている。(会期後半の新聞には、紙面のごく一部に仏・西語による記事があった。参加者の多くは、母語でない言葉を使用することになるわけで、それだけに各国のなまり、また個人のくせも加わって、同じ英語でもずいぶん変化に富んでいた。

例えば、開会式の後、スリナム出身でアメリカに住む黒人女性が、やがて訪れる夜明けを迎えるために、姉妹よ、手をつなぐと歌いながら呼びかけた、張りつめた調子の胸に迫ってくる英語。討論会「平等」のパネリスト、ニュージーランドの若い女性国會議員が、女性であるがために受ける抑圧をはねのけ、「武器なき軍隊」として団結して進もうと話したときの、古典劇の名セリフを聞くような格調高い英語。質問者に与えられた二分の制限時間を超え、腹の底からはとばしるような口調で語り続ける南アの黒人女性の英語。泥沼化している内紛のため、家庭の幸福が破壊されている実状を、涙ながらに訴えた北アイルランドの若い女性の英語。これらは私の耳にありありと残っている。そこには政府のPR的報告とは違う、生きた言葉があった。

ここで付記したいのは、開会式の安藤はつえさんのスピーチも、へあへらと名古屋市調査団共催の分科会での発言も、十分に理解され、説得力ある英語であったことである。日本人は日本的英語でよいと思う。重要なことは話す内容である。

安藤さんはスピーチの中で一箇所だけ単語の発音をトチって、二度三度言い直し、「日本人には英語は難しい」とアドリブを入れて会場に好意的な笑いを誘った。その単語が、フォーラムの合言葉とも言える *Solidarity* (連帯) であったことは、私には大変象徴的なことに思われた。実は難しいのは発音ではなく、その中味——連帯そのものと言えるだろう。

また「変わりゆく家族の役割」の分科会ではこんなことがあった。ブラジルの若い女性が「自分の国を語るには、どうしても自分の言葉を使いたい」と言って、ポルトガル語で話し始めた。数十名で満員の部屋は、通訳を求める声と、発言者に公用語の使用を求める声が入り乱れ、騒然となった。その騒ぎにひるまず、語り続けられるポルトガル語を聞きながら、母語をかけがえのないものとする心情への共感と、発言内容の理解不可能なことへの諦めとを同時に味わっていた。

世界に約三千種あると言われる言語の中で、たまたま国際語として優位に立つ英語を母語とする者は、友情と連帯を求め合う場であればなおのこと、意識して、理解されやすい英語を話すべきだ。ところが実際はこの逆で、私のみ

が感じることでなく、何人もの口から、ため息混じりに出たことであるが、アメリカの発言者の英語は最も聞き取りにくい。アメリカ英語の特徴として早口が指摘されるが、ここでも例外ではない。自国の正義と文化がどこにも通ずると信じ込むアメリカの普遍主義的傾向は、国際会議における英語使用においても見られ、英語を母語としない者の困難さには気づこうとしない。

それだけに、言葉に関するちよつとした心遣いは、当然のことではあろうが嬉しく感じられた。一つは、討論会「平等」の司会者が、パネリストの紹介後、肩を軽く抱くようにして、「Go slow」と小声で言うのを耳にしたときである。このすぐ前の発言者はアメリカ女性であった。

もう一つは、会場を移動するとき、タクシーに相乗りしたオーストリア女性の一言である。このとき彼女は二人連れて、連れの人とはドイツ語で、私とは英語で話した。彼女は私に、「友人はドイツ語しかわかりません。あなたがいるのに、私たちはドイツ語を使いますが、許して下さいね」と断わったのである。ドイツ語がわからない私は、二人の会話の外に置かれていることを気にしていなかっただけに、その詫びの言葉にむしろ一瞬驚かされた。そして、日本人が、とりわけ集団行動の際、居合わせた外国人を無視することがどんなに多いかを改めて思い起こした。

言葉だけの問題ではない。意識・行動などの面においても、真の国際性を身につけるためには、相互に学ぶべきことが多いことを痛感するのである。

# コペンで見たこと 感じたこと

大石まゆみ（あごら、アジアの女たちの会）

奥田 幸（アジアの女たちの会）

梶谷 典子（家庭科の男女共修をすすめる会）

斎藤 千代（あごら、婦人問題懇話会）

清水 澄子（日本婦人会議）

ヤンソン由美子（国際婦人年をきっかけとして行動する女たちの会）

編集部 今回の世界婦人会議については新聞もずいぶん大きな紙面をさいたようですが、一般の人は、「アラブとイスラエルの対立があつたそうですね」ぐらいの受けとめ方しかしていない方が多いようです。そこできょうは、皆さんの皮膚感覚で感じたことを中心に、問題点を話していただきたいと思います。

まず奥田さんから、本会議のことを。

## ●感動的だった前夜祭

奥田 私はフォーラムが開かれた十日間はほとんどフォーラムに行つてたんです。だから本会議は開会式・署名式と、フォーラムが終わつてからの四日間だけぐらいいです。本会議に関しては、いちばんおもしろかつたのは、会議が始まる前のジャーナリスト・エンカウンター。これは開会式前日と前々日の土、日にあつて、土曜は半日しか出られなかつたけど、どちらもすごくおもしろかつた。会議のハイライトをジャーナリストに事前にプリーフィングしたわけだけど、難民問題とか教育問題とか、それぞれの権威が解

説したんです。たとえば南北問題は、南アフリカのANC（アフリカン・ナショナル・コンGRESS）という現在は地下組織になっているメンバーだった黒人女性で、職業は牧師みたいなことをやってるチャバクさんという人が講演したんですが、会場がすごくわいた。黒人の女で、南アに生まれて育って、生活したというのはどういう意味か、と、自分のパスポートを示しながら具体的に話したんだけど、まず名前の欄があつて、その下にシテイズン・シップという欄があるんですが、そこが空白になっている。なぜかというと、黒人は市民じゃない。市民権がない。だから外国へ出るときは準市民みたいな形でパスポートをもらうけど、市民の欄は空白だ、この意味を考えてくれて、まず訴えて、それからその下の欄の説明に入つたんです。生地、現在地があつて、次に職歴の欄がある。1、2、3、4、5……と細かく記載してあつて、それぞれに雇い主がサインしている。ここにちゃんとサインがないと特定の都市に居住権がない。パンツースタンのような黒人の州に反される。それを決めるの

は白人の権利で、認められた職業人だけが町に住める。ところが労働者は圧倒的に男の人が多いから、ヨハネスブルグとかケープタウンのような大きな市に住んでるのは男ばかり。恋愛の自由とか結婚の自由といった基本的人権がまず侵されている。結婚しても、夫にだけ居住権があつて妻にない場合は、妻は砂漠の真ん中にある「自治区」に住むほかなく、経済的にも大変だし、夫に会うのにも許可がいる。もちろん政治的権利はない。自分は「黒人」で「女性」で「独身」で、この三つのハンディを負っているが、それがどういうことかわかりますか。会場はもうシーンとして、あちこちからすすり泣きの声が聞こえてきて……。ほんとにもうすごい迫力でした。来るのだった命がけで来てるし、旅程も宿所も明かさないう。南アに帰れば刑務所行き。自分の命はどうでもいいけど、次の世代に託して生きていくと。あれは、女性問題はすなわち人権問題であり南北問題だということとを、何よりも雄弁に物語つたと思いますね。

それから、ポルトガルの前首相で、現

在はポルトガルのユネスコ大使であるピントスイルゴさんの話も、やはり非常に迫力があつた。女性の政治的参加ということとをたいへん強調して、女性の権利云云といつても、結局は公的ないろいろな決定機関で意思決定に参加する人をふやさなければならぬと言つたあとで、教育の重要性にふれたのがすごく印象的だったんです。世界の女性を教育する場合、文盲の人を教育することも一つの方法だけれど、大学や大学院に行つても、物事が見えない人もいる。それは象徴的な文盲だと。そういう意味で女性の文盲率は非常に高いんじゃないかって。

また、ILOの婦人部の、パテルさんという人の話も印象的でした。女が「動くことができない」意味について語つたんですが、象徴的にも現実的にも動けないという話をした。たとえばイスラム世界のある地方では女は家の外に一歩も出られない。ベールをしても出られない。肉体的に動くことができないと言つたあとで、象徴的な意味で動けない場合もあるという例をあげたんです。お金があればどこかに旅行ができるという国でも、

自分の権利を守り、地位を向上させていく力はない。そういう意味で、世界の女性には、先進国であれ途上国であれ、程度の差はあるが動けない状態だ。それを變えていかなくては、と、非常にきつぱり言ったんです。

**編集部** 三つともすごくいい話ですね。

**奥田** テレビマン・ユニオンの坂元さんもすごく感動して、南アフリカのチャバクさんのあとをすぐ追いかけてインタビュしてました。これはTVにも出たけど、私は彼女の話を聞いて、ああ、私もうこれで帰ってもいいと思った。自分たちのたまたまいなんて、すごく甘っちょろいものだと思った。命がけでやってる人たちがいるんだなあ……。

**ヤンソン** 私はエンカウンターには間に合わなかったけど、NGOの一会場で聴衆全部をひきつけて一席ぶっているチャバクさんを見ました。声が地の底からわいてくるような深い太い声で、話の仕方にもまさに舞台の上の名優の演技を見ているように迫力がありました。もちろん、話の内容が人間の極限状況の説明ということだから、聴く方も耳をふさぐことが

できないほど緊迫したものであるわけですけど。あとでインタビュをしたときにわかったのですが、彼女は訴える力に身をつけるために、アメリカに演劇を勉強しに行ったのだそうです。天性の才能かと思ったら、努力のたまものということを知り、感激しました。ひるがえって、私は自分も含め、日本の女たちの「思いを訴える力」の足りなさを反省せざるを得ませんでした。

**斎藤** また聞きでも感動しますね。私もそんな話を聞きたかった。フォーラムの開会式でも、あんな形式的な話じゃなくて、一つでもそんな話を聞きたかった。**編集部** 土、日の朝から晩までそんな話が続いたわけですか？ 話した人は壇上で話したんですか？

**奥田** そう。パネルディスカッションで、一人一時間ぐらいつつ延々と話すわけ。世界のジャーナリスト、五、六百人を前にしてね。

**斎藤** メキシコのときもジャーナリスト・エンカウンターがよかったって話ですね。「MS」のグロリア・スタイナムの話にひどく感動した人の話も聞きました。

**奥田** メキシコのときの議長のシビラさんが、今度も話しましたが、格調高かったですね。七五年には、みんな女の会議なんてバカにして、「フン、あんなのやらせときゃいい」って感じだったけど、やってみたら結構成果があったので男たちも驚いた。あれをやったのはやはりムグではなかった。今度ここに来てみて、五年前と格段の差があるのを感じる。代表の中の女性の比率もふえてるし、女性ジャーナリストもふえてる。運営も女性の力でやってるって。

#### ●政府の動きに監視が必要

**清水** そういう世界の女性の迫力の中では、日本の高橋展子さんの演説は影がうすかったわねえ。官僚の作文だもの。「男女平等」をどう推進してきたのか、またこれからどうするのか、あいまいな言葉で美化して。しかも日本の高度成長を達成できたのは、教育による「国造り」と「人造り」だと、だからこの方法で発展途上国の開発に貢献したいと——。これでは、途上国が主張している「新国際経

済秩序の確立」、つまり、途上国の資源や労働力を先進工業国が一方的に収奪し、富める国と貧しい国をつくり出す経済制度を改めることが平等の大前提だといっていることを無視したのも同然ね。日本

はまるで途上国を犠牲にすることなく、教育で自前で経済を発展させたのだといっているのですよ。驚くべき感覚ですね。そして、しめくりに、この会議が「対話と協調」の精神で討論されるようにと――。

ヤンソン 演壇に登った高橋さん、まず声が小さくて、ほとんど聞きとれなかった。発表している内容を信じているのか、信じていないのか、演説に何の熱意も感じさせなかった。自分も女の一人で、ここで女の問題を解決しにきたのだという連帯は全く感じられず、まさに男によって牛耳られている政府の代理、という感じで、しゃちほこばっていたという感じね。

奥田 聞いてて情けなかった。あまりにもそらぞらしいっていうか。日本はもう問題はほとんど解決して非常にいい具合だから、今度は途上国の方々をお助けし

ましようなんて。問題が解決してるなんてウソでしょう。しかも今度はお助けしましょうなんて、ほんとに偽善的っていうか……。

全然事情を知らない人は、ヘエ、日本の女性ってそんなにすばらしい地位を得ているのか、よかったねって言うけど、アフリカの人なんか、フンって感じで。「アアに、あれ。助けてくれるんですって。いい気なものね」と、いやみを言われましたよ。現状をきちんと認識して、そこから出発するっていうんじゃないよ。私たちは上にいるから助けてあげましょうっていう発想でしょう。

ヤンソン 私の隣りに座っていた南アの人が、「日本企業が南ア政府と商取引しないと決めてくれたら、それが何よりの援助だ」って言っていた。アジアの国々でも、そう思っている民衆がどれほどいるか知らない。とにかく、同じ政府がここではこう言い、よそでは正反対のことをしていても、誰も非難しないということではだめですよ。もうどんどん政府を非難していかないと、日本の民衆は政府を支持していると思われてしまう。

清水 外務省が大苦心して、三番目といういい順番をとったそうですね、目立ちすぎず、目立つようにと。

奥田 順番じゃないのよねえ。問題は、政府の代表が、そういうそらぞらしいことを国際会議場で平気で言えるってことね。それからもう一つ、今度の会議の準備段階で、日本の代表が非常にヘンな動きをしているのね。国籍法に関して、国内では父系血統主義を改めようとしているわけなのに、その逆の動きをしていたわけ。一生懸命手をあげて、ここを削ってくれて。

梶谷 それはどうしてわかったんですか。奥田 土井たか子さんが国会議員だから外務省に嚴重に言っただけの記録を取り寄せたの。最初は日本語訳をくれたので、英文を要求して読んでみたら、日本の代表が反対したってハッキリ書いてあった。いくら私たちが運動しても、国連の決定機関でつぶそうとした。法務省は、国籍法を変える必要はない、変えなくてもいいって見解で、代表を送ってそれを言わせてるわけ。

ヤンソン 高橋展子さんを日本で初の女

性大使と、鳴り物入りで騒ぎ立て、デン

マークに送りこみ、そこで開かれた国連婦人会議の日本代表としたのは、政府が仕組んだ目隠しだともっと早く気がつくべきだったという気がしているの。つまり、こういうことなのよ。政府は女性大使を送りこむことにより婦人登用を実行しているというフリができるわけだし、また、その女性大使が日本政府の所見を読み上げれば、男たちの作った内容不在の作文でも一応婦人会議で各国婦人に聞いてもらえると読んだのじゃないか。同じく政府のカイライでも、女が出てくることによつて暗黙のうちに日本政府がいかによくやつていような効果を持たせる。実際に女性大使なんて今までなかったことだし、場所もデンマークだなんて政府の意図は見えないんだけど、今までちつともこの点が指摘されなかったわね。

斎藤 一人二人の女が出て、「お飾りの女」として利用される危険性があるってことね。

ただね、代表になった人の立場というの、とてもつらいものだったろうと思

うのよ。とにかく根本のところは男性官

僚に抑えられているのですもの。あんな作文を読まなければならないのなら、代表をおりるという選択もあるでしょうけど、もつと困った人——たとえば男性が出るよりは、この役をあえて引き受けようという考え方もあると思う。「だから女の高官なんか出てもしようがない」というふうに短絡させると危険だと思うの。意思決定機関にもつと女の人が大勢れば女の意思を反映していけると思うし、女性差別撤廃条約の署名とにかくこぎつけたのは、各省庁の女性官僚がかげでものすごく努力したつてことがあるわけでしょう。また、たとえば国会議員に私たちの代表の女性がいれば職権でそういう国際議事録なども手に入れることができるんですものね。

奥田 そう。発言権持ったり参加していかなくちゃね。同時に私たちの代表が何をしているかということもモニターしてい

なくちゃ。でないと、民間には何の情報も入ってこない。  
梶谷 反対つて声もあげないでソツポ向くことは、おまかせするつてことになり

ますものね。

斎藤 ところが運動家の中には、ああいうところには絶対入るなつていう意見が伝統的にあるんじゃない？

梶谷 そうですね。

斎藤 私はデンマークの運動家の人たちとかなり接触を持ったんだけど、彼女たちも、ベラ・センターの入場カード持っているつていうと、フンつて感じなのね。日本のプレスの人たちがウイメンズ・ハウスのインタビューをしようとしても、プレスのカードを見ただけでガードを固めて追い返したという話だし……。ところが、本会議場に行つてみたら、そういう人たちがちゃんと来てるの。「アラアラ」つて言つたら、「政府代表の動きを監視しなくちゃ」つて言つてた。おもしろいことに、本会議場のカードはふだんはしまつてて、日本の人のように意気揚揚と胸につけたりはしてない。出版人会議の人たちと、本会議場の記者会見に行つたときも、入口でジープンのポケットからワーツと出すわけ。

清水 日本のミニコミの人たちも、もつとどんだん中に入るべきだったわね。

梶谷 見られるものは見、取れるものは取ってやろうという精神で入ったほうがいい。

斎藤 本会議場に行ってからわかったのだけど、各国ともミニコミの人が大勢来てた。カードがとれなくて、人のを借りて入ったっていう人もいた。会議場で隣りの席に座ったフィリピンの人なんか、「フィリピンの新聞にはきれいごとしか出てない。真実が知りたくて来た」と言っていて、「私は名前が二つある」ってニタリと笑うの。つまりつけてるカードは他人名義のもの。

奥田 国連に直接申し込めば、ミニコミの人でも簡単にとれたんですよ。

清水 ところが、外務省経由でとった大手のマスコミの人たちだけを、大使館は特別待遇したのね。第一、マスコミ関係が団体を編成して行くということ自体おかしいけれど、日本への報道に、外務省がスポークスマンになって、政府よりの記事が多かったわね。なかには、疑問をもつ記者たちもいたけれど。PLO 駐日代表部は、日本のマスコミがパレスチナ問題や女性の人権問題をとりあげないで、

ライラ・ハレドさんだけを商業ジャーナリズム的に追いかけていると批判していましたね。

梶谷 会議場での発言ですが、五年間の成果に関する日本のナショナル・リポートはひどかったですね。目をこすりたくなるような内容で……。要するに積極的なウソは書いてないけど、私たちから見ればほんとうのことを書いてない。たとえば教育のことというと、国立婦人教育会館ができましたとかばかりで、現在の問題点なんてふれてない。その内容も国民には示してない。

斎藤 例の四八団体の四月会議の準備段階で私が発言したでしょう。デンマーク会議に政府はどういう内容の報告を持っていくのか事前に明らかにしてほしいって。メキシコのときは全く知らされなかったけれど、あれは大問題だから、必ず四八団体の決議に入れてほしいって。だけど、誰一人サポーターしてくれなかった。政府には市川さんが個人的に申し入れればよいと。

奥田 何ですか。その四八団体というのは。

梶谷 全国組織の婦人団体とか労働組合の婦人部とかが集まって中間年の大会をやろうというところで実行委員会をつくっているんです。もちろん女性解放に無関心というわけじゃないけど、具体的にそういう運動をやってない団体も入っているんです。

斎藤 しかし構成員の数からいえば圧倒的に多いし、実質的な力も持つてる。それで「へあごろ」は二月から加盟したんです。女たちの新しいグループと既成の団体の接着剤になることを目指して。で、新入りではあるけど、思いきって発言したのだけと……。

梶谷 あのととき斎藤さんがおっしゃったことの意味を大部分の人が理解できなかったんだと思います。理解しながら、この際、政府と対立しないようにしようという配慮の人もあったんだと思う。政府を励ます形でいきたいと。

清水 私もあそこに出席していたけれど、斎藤さんのおっしゃったことは当然と思いつつも、あの集まりの「限界」を意識しすぎて、失敗したと思うわ。あの後、私たちも外務省に「日本の報告内容」を

ほしいと要求したけどもらえず、参議院の外務委員である田中寿美子さんが要求しても外部には出せないと断られたそうよ。それで田中さんは、本来そういう報告書は、婦人団体に知らせるべきもので、日本のように秘密にして、民間を軽視しているのはけしからんと再度抗議したら、一部だけ、それも秘密文書ですからと、やつともってきたといういきさつがあったのよ。

奥田 そうすると、リポートの問題点を批判していく必要がありますね。

清水 たとえ、事前にあのリポートを手に入れたところで、日本のような官僚主導型の国では、手直しは無理ですね。

斎藤 それが予測されたので「あごろ」のパンフには私たちが考える実情を書いたわけ。

清水 私たちもNGOフォーラムで、日本政府はどんなに女性差別をなくすことに不熱心であるか、その実情を正しく知らせる役割があると思って準備してきました。

梶谷 国の本音と建て前が一致してないことは、いろんな形で言っていく必要がある

ありますね。さつき国籍法の話が出たけど、条約の教育の問題のところの審議には高橋展子さんが出たんだけど、条文の中に「あるセイム・カリキュラ」という表現をやめるように文部省から指示があり、やむなくその旨発言した。ところがその発言に諸外国の代表はびつくり。ここはセイムでなくちやいけないうので、逆に他の条文のイコールをセイムに変えることになったという、実は逆作用があったんです。

奥田 高橋さんはまだいいですよ、とにかくその事実を皆に知らせた。さつきの国籍法の人は口をぬぐって誰にも知らせなかった。聞くところでは、彼女の前にその役を仰せつかった人は、そういうことを言わなければならないのならイヤだと言って代表を辞退したということです。

#### ●外務省が支援するマスコミ集団

斎藤 国民の側からの監視の問題だけだとたとえば高橋演説がそんなにひどいものだったとしたら、そのとき会場にいた日本の人たちは、なぜ抗議をしなかったん

ですか。

奥田 日本のジャーナリストの体質みたいなものがあるんですね。演説が終わったらワツと取り囲んで格好のいいインタビュー記事のをせる。取り囲むのは日本人ばかりで、各国の記者は一人もいないの（笑い）。日本の記者でも意識がある人はそつば向いてインタビューしない。とにかく悪口は絶対に書けないという雰囲気がある。

梶谷 各省詰めの記者というのは各省からありがたく情報をいただいて書くだけで、私たちの各省への要求なんかについてほとんど書いてくれない。

ヤンソン 私なんか六月に入ってから、ニューヨークの国連本部に自分で手紙書いて記者カードを申し込んだんだけど、まさか外務省を通して申し込んだ記者と直接申し込みの記者ではこれほど扱いが違うとは思わなかった。国連のほうの扱いは全く平等ですよ。ブリーフィングも集会のお知らせも。日本政府の扱いが違うの。大新聞というおすみ付きとフリーのジャーナリストじゃ大きな違い。外務省を通した記者たちは記者会見にも、大

使の性差別撤廃法署名後のレセプションも招待されるのだけど、これは全く門外漢オミット。日本の組織力というか、リンク付けの偏見の強さというか、いやはや閉口という感じでした。

奥田 それはもう記者団が飛行機に乗って飛び立ったときからそうです。外務省後援旅行みたいなもの（笑い）。外務省が全部アレンジして、ホテルも全員同じだなんて信じられないですよ。外国の人が聞いたら。

ヤンソン 要するに首相とか天皇が海外訪問をするとき、随行記者団というのがあるでしょ。あれですよ。

斎藤 あえて別のホテルに泊った方もほんの少数ならいらしたけど。

清水 大使館のごちそう攻勢もすごかったもの。

奥田 そう。昼食会だ夕食会だつて。二、三人ずつレストランなどにご招待してね。会場までは毎日おさしまわしのバスで送り迎え。それに日の丸がついてる（笑い）。

清水 とにかく高橋大使は、マスコミだけは特別あつかひしたけれど、NGOフ

ォーラムに参加している婦人団体や、グループの人たちから、活動の状況や様子を聞こうともしなかったわね。

だから、政府は初めから民間フォーラムは無視していたのよ。そしたらマスコミの人たちまで民間フォーラムを軽視しちゃつて。普断はマスコミ界の女性差別に腹をたてているから、ああいうところへ行くと官僚寄りになるのにはガツカリしたわ。

ヤンソン 組織に組み込まれていない女たちこそが、こういうことを批判し、指摘していかないとね。

梶谷 官僚寄りにならないで、あの世界で生きてくつていうのはかなり大変なんじゃないですか。

斎藤 日本に帰ってから、私もそれがだんだん見えて来たわ。向こうにいたときは、正直言つて、ちよつと不満があつた。社の名譽を負つてあんな過当競争じゃ、男社会と変わらないと思つたし、ほかの国の記者の人たちはフォーラムに大勢来てるのに、「おもしろいですよ」と言つても、なかなか姿を現わして下さらないし……。ところが本会議に行つてわかっ

ただけど、あれだけの規模の会議ですものね。とても一人や二人では両方の会議をフォローできないなと思つたの。日本に帰つて記事を読むと、「彼女たち、よくもがんばつたなあ」とつくづく思うのね。考えてみれば朝刊も夕刊も出してる新聞なんて外国にはないから、日本の記者は外国の人の二倍働いてるわけですよ。フォーラムに来る余力がないのもむりがない。もつと大勢の女性記者が来るのが根本だし、それには女の人が社内で大勢いて、日常的に女の問題にもつと紙面をさいてるんじゃないとダメだとつくづく思つたの。新聞記事を受けとるデスクは男だし、送られたテレビのフィルムを編集するのも男でしょう。生きる根のようなところは、全部男が抑えているのだもの。それに、後続部隊が大勢あれば思いきつて食いがれるし、飛ばされたら、飛ばされたことをまた問題にしていけるけど、わずか一％ではね。さつき言つた政府代表と、全く同じ立場に立たされているのだと思います。帰つて来て、ある新聞社の婦人部に行つたとき、そこに行くまでえんえんどブネズミ色の男ば

かり。ほんとに異様な感じがして思わずため息をついたの。そしたら、先に立って歩いていた女性記者が「これ（が日本の実情）ですからね」って。

梶谷 そんなに少数でも、女の記者がいることがずいぶん女のためになっていると思います。今度の条約の署名ができたのも、署名しないかもしれないということとを女の記者が大きくとり上げたおかげだとも言えるんじゃないでしょうか。多ければもつと力になると思うけど。……ほんとに今は少ないですね。

奥田 だから、西独では女が国会の周りを取り巻いて国籍法を変えたなんて話は、日本では全く記事にならない。

大石 ただ女がふえればいいってことじやなく、女の問題に関心があり、女の運動をサポートする人をふやさなくちゃね。斎藤 もちろんそうだけど、どんな女でも、男の人よりは感覚的に女の問題がわかるってところがあるでしょう。ところが女そのものの締め出し。ことしの就職戦線は男は久しぶりに売り手市場というのに、女子の四年制大卒の求人はさっぱり……。マスコミどころか、ふつうの企業

にさえ入れない。九万人に五千人の口。清水 もつと私たちが言っていかななくてはね。

奥田 番組の中の差別に抗議したら担当の人が飛ばされたこともあるっていうじゃない。やっぱり言うっていけば効果がある。

清水 しつこくやれば効果はある。まだまだしつこさがたりないですね。

斎藤 イギリスの新聞に堂々と書かれますね、日本ではウーマン・リブが無力だから、日本の女の給料は男の半分だった。

清水 それは、労働組合の弱さと関係しているわね。とくに女性ば労働組合に主体的に参加して、賃金や労働条件の差別と闘うことが少なすぎるのよ。それから日本の女の運動には、差別されることに對して同和の人たちのような迫力がないわねえ。あの人たちはちよつとでも差別的な発言を聞いたら、どこまでも食い下がるでしょ。見習わなくっちゃ。大石 なぜ日本の女の運動は弱いんだろ うって、帰って来てからずっと考えてるの。

ヤンソン 私もそれを強く感じた。同じしいたげられた女なのに、アフリカの女たちが持つ原始的なまでの生命力を私たちは持っていない。それを持っている女の人とはとても少ないんですね。運動しているのになにか底辺にあきらめがあるというか全力投球していない。それと、内側からわいてくるような喜び、一緒に運動しているという共感を伝えあうのが下手なのね。シスターフッド（姉妹愛）で結びついているという喜びがないと、ちよつとさびしい、心細い。私はそう思うんだけど。

斎藤 あの人たちは、女と共に男も抑圧されていた。それに対して共にたたかってきた。その中で、ほんとうに感動をわかちあつたと思う。日本は、高橋演説の表現とは逆で、明治維新にしても、ひと握りの男たちのもの。基本的に個人の確立がなかったでしょう。だから個人が弱いんだと思う。世の中の流れにさからえない。運動するということは、流れにさからつたりはみだしたりすることだけど、それをやると落伍者になってしまふ。梶谷 でも落伍してもいい、と居直る率

は女のほうが高い。だから女は困る、女は勝手を言うと言われる。

清水 ほんとうの意味で勝手を言っているのは、どちらの側なのよ、ねえ。

### ●日本に帰ってカルチャーショック

大石 私、今度コペンに行つて、行つたときはあんまり違和感はなかったのね。国際会議なんて初体験だけどすんなり入つていった。それほど興奮もしなかったし、とまどうこともなかった。ところが帰ってきたら、すごいカルチャー・ショックで。だから考えてみると、向こうに行つて身についたものがかなりあったんだと思うのね。私たちが見たもの、得たものを広めていこうと思うと、日本の中には接点が見えにくい。まだ方法が見つからないでいるんです。

斎藤 私も、向こうではカルチャー・ショックは感じなかった。逆に、なんと話を通じるんだらうと、もううれしくてうれしくて、毎晩二時三時まで語り明かして、帰つて来るときは恋人と別れるような気がしたくらい(笑い)。ところが日

本に帰つたら、たちまちカルチャー・ショックよ。

奥田 どういう意味? それ、もう少しくわしく聞かせて。

斎藤 日本の運動が貧しいなつてこと。

どこが何をした、あそこが何をしたいなつたうわさが多すぎる。こんなふうに貧しいのは、つまり差別されてるから。抑圧されてる者は他人を抑圧するのね。

デンマークでは、どのグループが何をやったかなんてことは全く意に介さない。たとえば『男ならやつてみな』の映画を作つたところをインタビュしたいと思つて地元の活動家たちに聞いてみると、

「そんなの作つたんですか」「まあどこかが作つたんでしようけど」つて、顔を見合せている。どこのグループが何をしよう、と、「誰がやつた」ということには関心がないんです。いいものはいつてことでサポートするけど。だから三か月で十三億五千万ものお金を女たちだけで集めて、貴族の館を女のセンターのためにボンと買ひとるなんてこともできる。それは三十のグループが連合してやつただけで、直接かかわらなかつた人たち

も、みんな自分のこととして誇り、意気大いにあがつてゐるんですね。デンマークの人口は五百万だから日本の二十分の一、コペンの人口は東京の十分の一だけ、お金は何百倍も集まつて、つまらないうわさは決してひろがらない。

なぜかなつて考えてみると、彼女たちの最終目標がとても明確なんだと思う。その最終目標に向けて自分は何をするのだということがはっきりしている。個の確立を基盤に全体の目標がきちんとしており、それに確固として近づこうとしてゐるから、誰も他人のことなど何も言わな

いんだと思う。

奥田 それはありますね。私はアメリカに長いこと住んで日本に帰つて来て、それを一番感じた。アメリカでは、私のいた特殊な大学という世界のせいかもしれないけれど、周りがみんなフェミニスト。女ならフェミニストにきまつてゐる。男だつてほとんどフェミニストでしょう。だから足をひっぱりあうなんてことはあり得ない。みんな正直にボンボン意見をぶつけあつて、何かがいいと決まればどんどんやうていく。

大石 ほんとにそうなのいいですね。

帰って来て、報告会の感想を聞くと、もうウンザリっていう感じ。誰かが何かを話したとしたら、ああ、あの人はそう感じたのだから、そのとおり聞けばいいのに、「どうしてああいう発想になるんだろ」という議論になる。そのへんから足を洗わなくっちゃね。

斎藤 自分と違う感想を受け入れていけないというのは、ほんとうの意味での自己確立がないからじゃないかな。

奥田 人と向かい合って、はっきりと正直に言い、よりよい方向に皆で進むという態度がないってことは、自分自身を確認しないということだと思う。自分の問題は何か、現状はどうで、どこをどうやったら変えられるのかを、自分に對して問いつめてない。

梶谷 ここまでは違うけど、ここはいい、だからこのへんは一緒にやりましょうということができないのね。少しでも違うとなったら拒絶になる。

清水 すごく精神が貧しいのね。婦人運動の面でも、よく既存の団体や運動に対して感覚的な反発を前面に出し、なんで

もナンセンスと言っておれば進歩の同義語になるという傾向や、また逆に既存の団体は「リブ」運動を無視するということがありますが、お互いに大変なんだから努力している点やすんでいるところを吸収しあって、婦人運動全体がもっと成長できるとよいですね。

#### ●会議参加が引き金になって

大石 私自身に関して言えば、十年前の全共闘運動、そのとき受けた運動のきゆうくつき、という印象がすごく尾を引いてると思うのね。一言いうのにすごく気をつかうとか、こうあるべきだ、という発想が強すぎて……。やっとそれを脱出したと思うんだけど、まだそのへんの余波が自分の中にあるんだということが、今度行つてやつとわかった。

奥田 あなたは帰ってからずいぶん変わったみたいね。

大石 個人的な経験をどれだけ共有できるか考えていると思うし、もう決して日和れないなあって感じ。自分の欠点もはつきり見えていけるようになったし。

奥田 もっと具体的に言つてよ。

大石 日本人って、「やつて、やらない」ってところがあるでしょう。

奥田 どうして「やつて、やらない」の？  
大石 女としてはまアまアの線をいつてるっていう形で自己満足してしまう発想がまだ根強いね。仕事をもち、出産もし、夫婦関係もあり、活動もちよつとやつてゐるって。「女としては」という枠内で捉えているところがあつたのね。これこそ差別なのだけど、自分がこれだけしいからこれだけのことやるっていうふうな発想する習慣がなかつたてことに気がついたの。私たちの少し前の世代の人は、子どもを持ちながら職業を続けるってことと自体が、最低の一つの目標だつたと思うけど、それだけでストップしてはいけないし、したくはないな、と思つた。日本の女全体がもっと高いところに目標をおいて努力していけるといいなと思う。

奥田 じゃ、もう「やつて、やらない」じゃないじゃない。一步乗り超えたんだわ。

大石 自分をどつかにさらすことによって、責任も引き受けなきゃなんないし、

義務も引き受けなきゃなんない。そういうことをヒーヒー言いながらも何とか反応していかなくちゃと……。

ヤンソン 個人のレベルで満足している限り、女全体の向上にはつながらないのよね。仕事も家庭もうまくいった女の人にはスパーレディーということで、例外にされてしまう。女はどちらかしかなないのが本来である。仕事をするのならある程度家庭を犠牲にしてもしょうがない、こんな考えをいつまでも社会の主流にさせておくわけにはいかない。自分の場合をさらけ出しながら他の女の人と手を組んでいくことをやらないと……。ちょっと苦しいけどね。

編集部 大石さんの場合は、会議に参加したことが一つのきっかけになったわけですね。ほかの方はどうでしたか。

斎藤 私はメキシコでは、目からウロコが落ちるような衝撃を受けて、ある意味では自分の考え方や生活を根底から変えるきっかけになったと思うの。今度は、そういう激しい衝撃はなかったけど、世界のフェミニストたちのやさしさが、あたたかいお湯のように心に満ちあふれて、

ほんとに後ろから背中を支えられてるような気持ちになった。日本に帰ったら、できるかぎりのことをしよう。で、一つ始めたことは、今までマスコミが大きいで、TVになんて絶対出なかったんだけど、機会が与えられたら断わらないことにしたの。できるかぎり私たちの側の意見も言っていこう。でないと、特定の声だけが大きくなっていくんじゃないかと、一種の危機感を感じるようになったので……。人前に出るのはきらいだし、へただけど、自分の心が伝えられる人間になりたいと、いま心から思ってます。

梶谷 私はフォーラムより、北欧とパリを駆け歩いて衝撃を受けました。日本と外国の違いは、思っていたよりずっと大きいんじゃないかって。ちょっと見ただけで断定しちゃいけないはずだけど、でもすごく感じちゃったんですね。外国のなかでも特別に進んだ部分を見たということなのかもしれないけど。男女平等という点だけを見ると、本当の平等が実現できるところなんかないわけ、程度の違いだからあそこを目標にが

んばろうって言うてもいいみたいなんだけど、もっと基本のところで人間観みたいなものがすごく違うんじゃないかって気がしちゃったんです。（そう、その、の声）だから平等も進めやすいんじゃないかって。その基本のところを、どうやってら変えていけるのか、日本では何をしたらいいのか考えこんじゃってるところなんです。それから、ちょっとずれるかもしれないけど、豊かさということについても考えました。GNPの大きさは必ずしも豊かさを意味しないって、前から頭では思ってたけど、それを実感しました。聞いてみると、誰も生活に余裕はないらしいけど、でも豊かだなあって思えるんですね。土地が広いこととか、これまで長い間かって蓄積されたものの差もあるけれど、それはカリじゃなくて、生産と生活に対する態度の違いも大きいんだと思います。日本では、豊かさにながらないところでやたらに生産に励んで、一方ではぜいたくなんだけど、実はすごく貧しいんじゃないかって思うんです。

斎藤 それは、私も一番感じたことね。

この問題は「十年」ぐらいじゃ、とても片づかない。

清水 私は、先進工業国の女性たちは、発展途上国の女性たちとどのように連帯し運動ができるのかというのを聞いてきたのですが、あるフォーラムで、ナムビヤの女性が、日本人は南アフリカで白人政權から「名譽白人」の称号をもらっているが、日本で屈辱的だと抗議運動が起きた話は聞いていない、不思議だ、といわれて、いたかった。

日本ではアラブやアフリカの女性の生活にはほとんど目をむけることなく、ひたすら自分のことだけになりやすい。そうすると、国内で途上国の立場にある、部落や沖縄の女性、在日朝鮮女性や韓国女性、パートや農村女性との連帯も切りずていくことになるのではないかと。だから一番底辺の女性たちとつねにかかわりながら、自分をも解放の対象にした運動をしていこうと……。

### ●何を見、何をするかが問題

梶谷 ところで、さっきの、なぜ連帯で

きないかという話の続きですけど、運動してる人としてない人の落差みたいなもの、これは何なんでしょうね。

奥田 話してみると、すごくわかる部分がいっぱいあると思うけど。

梶谷 それはいっぱいありますよね。家庭科の共修問題なんか、かなりいろんな人に共感してもらえるし……。

奥田 専業主婦で、こういうくらしが自分のしあわせと思っている人でも、話してみると自分に足がないみたいな不安を感じている。そういう部分とつながるとね、何か非常にパツとわかりあえる。

梶谷 しかしそういう不安を忘れようとする気持ちも強いわけでしょ。そしていろんなことに責任を持ちたがらない。それは女だけじゃありませんけどね。

大石 私もコペンから友人にハガキを出したんだけど、全然返事がないの。今は離れてそれぞれ暮らしているけれど、昔は一緒にやってた人たちなの。そういう人たちが何か縁遠い人になっちゃったのかなあ、どういうふうに見られてるのかなあ、と思う。

斎藤 向こうに行くなんてこと、特別な

ことでも何でもないし、私たちが話し合ったことは、それこそ、ただの女にとつての日常的な問題なのに。

梶谷 ただ、職場の中の中年のいじましい人っていうのは、自費でヨーロッパに行つたというだけでもすごく気にするし、女性解放なんていうともろろんすごく抵抗を感じるわけ。

清水 日本にいても、あれだけ広い立場の人たちと語りあったり、交流することは難しいのだから、もつと大勢が参加して、自分の肌で世界の女たちの動きや考え方にふれることね。

斎藤 どんどん海外に行けばいいんです。見るだけでもちがうから。人間って、何か外圧がないと変われないうところであるでしょう。

梶谷 さっき言った二つのこと、外国に行つて来た女の人に聞くと大体同意見なんです。日本はおかしい、ひどいってみんな言うんですね。だけど、男の人はどうもそうじゃないみたい。やっぱり女がどんだんいろんなところに行つてみないとじゃあせんね。

大石 でも若い人たちは、かなり行くこ

とは行つてゐるのね。ふつうの観光には。

清水 行き方よね。どういふ旅行なのか。自治体から送りこまれた人もずいぶん来ていたよだけれど、目的意識がはつきりしていないとまずいわね。

沖繩の人たちの座談会を新聞でみたけれど、パレスチナの問題や政治問題がもちこまれていて残念、などと発言しているのね。沖繩の女性本土より政治的に差別されているから、一番ピンとくると思つたけど……。

結局、どんなところへ行つても、吸収する力は、自分が日常的にどれだけ、女性差別と取り組み、問題意識をもっているかなのよ。

斎藤 問題意識さえあれば、ことばがわからなくても必ず何かつかめると思う。通路の展示を見るだけでもいいし、話している人の表情を見るだけでも……。

自治体でも名古屋市のようになかなり真剣に取り組んだところもあるんじゃない。大石 ただ旅行の仕方は女性解放の名にふさわしい主体的なものであつてほしい。

斎藤 女の問題に明確に取り組んでいる

へあごろの人は意識の差があつたし、向こうは向こうで不満があつたでしょう。率直に言えば、私たちの分科会も、私ただけですれば、もつと違ったものになつたと思うけど、あれはあれで一つの試みだつたと思うの。

名古屋市は非常に喜んで、へあごろ東海の人たちは大変活動しやすくなつたということだし、市の来年度婦人関係予算もボンと三百万上積みされるとか……。

メキシコのときの私たちの経験や日常の学習が結果的には生きたわけだけど、出発前にはある筋から名古屋市に圧力がかつたそうよ。

奥田 へえ。どんなふうに。

斎藤 民間団体などと、なぜ組むのかつて、男の声で電話があつて、傑作なのは中山恵子室長さんの回答。「女が女と連帯して何が悪いんですか」つて例の大声で一喝なさつたら、一遍で沈黙しちゃつたの(一同爆笑)。だから、「自治体ツアーは公費濫用」という意見も聞くけど、仮にそういうところがあつたとしても公費が女の国際会議に割かれたという先例をつくつた意味だけでも、評価したいと

思います。あとは、公費で行った人が何を学び、これから何をしていくか、ね。逆に東京都あたりは、公費が全然出ないので、婦人計画課の方が自費で参加してらした。ただ、見ていると、身ぜにを切つても、という方たちは、一日を四十時間にも使うような意気込みで走り回つた。清水 自治体によつては、行く人の審査に問題があつたんじゃないの。明らかに選挙目当てのツアーもあつたし、ハガキが何かで申し込んで、押しの強い人が行つたという話も聞くし。

梶谷 ことばの問題もあるでしょう。

斎藤 最低中学生くらいは英語を読み書き話すという条件は必要だと思ふけど、語学ができる人だけが国際会議に出るといふ従来のやり方は、このへんで変えたほうがいいんじゃないかと思うの。思ひのない人が、ベラベラしゃべつても、ほんとのコミュニケーションにはならない。

奥田 そう、そう。

大石 どの国の人も、それぞれなまりのある英語をしゃべつていたしね。

斎藤 聞きにくいことばは一生懸命聞きとろうと努力してたでしょう。日本人が

発言すると「シート」と言う。聞きとりにくいからこそ聞こうとしてくれる。

奥田 日本式英語を定着させるくらい、がんばってもいい。

大石 こちらがわからないでいると、相手のほうが必死で言い方を考えてくれるしね。人材は自分たちの中から作らなきゃね。

ヤンソン でもそれにしても日本の語学教育というのはどうして実際に使えないものなのか。中学・高校と少なくとも六年は英語を一週間に何時間も勉強してきているのに、アルファベットが生きて話すことにはならない。考えてみればずいぶんムダな教育よね。もつと使える英語を教えないと、これからも外国との接点にきた人たちが苦勞するようになる。日本の女が他国の女たちと連帯していくためにも英語は必要ですよ。

斎藤 それはみんな身にしてみて感じたことだと思う。私ね、英語だけじゃなくて、日本の教育って、何か根本的な欠陥があるんじゃないかという気がしたの。なぜ教育を受けても英語がへたなのかという問題なども、本質的に考えてみるという

んじゃない。

それは別として、問題はことばだけではないってこともあるのね。

八五年は日本で開催といううわさが初めのころ流れてたでしょう。それを聞いて、日本ではできっこない。それだけ英語を話せる人がいないからって言ってた人がいるけど、仮に日本でするとすれば日本語の同時通訳がつくから、それは問題ない。むしろ問題は、日本のフェミニズムと世界のそれとの格差がありすぎる。ことだと私は思うの。それと、日本でやれば、どうしても政府主導になる。そして格好だけはうまくいく。そこが問題じゃないかと……。

一同 そう、そう。世界の人たち、あきれるでしょうね。日本の実情見えて。

梶谷 一種のショック療法としてはいいですね。だから日本の女のエゴイズムで言えば、八五年は日本でやったほうがいい。そうすればどうしたって女の問題への関心が高まるということもあるし、政府もある程度女の問題について前向きにならざるを得なくなるでしょう。でも外国の人のことを考えると、こんな遠い国

へ来てもらって、せっかくの会議が形式的でつまらないものだったとしたら申しわけないですものね。政府主導だからっていうけど、民間の女に、協力し合って自由で実質的な会議を運営していく力があるかという点、とてもだめだって気がするんです。私たちはどうしても政府を攻撃したくなるけど、結局国民につり合った政府があるんだろうって、このごろよく思うんですよ。だから批判を遠慮しようというわけじゃありませんけどね。

清水 私も最初は日本で開催したらと思っていたけれど、日本では官僚がすべてとりしきってしまうからおもしろくないと思うの。それよりケニアでやれば、その周辺の女性も参加しやすいし、先進工業国の女性も、もつと第三世界の事態にふれるほうがよいと思うわ。

編集部 結局、あれはケニアになったのですね。

斎藤 立候補したのがケニアだけ。日本は立たないの、今度の国連総会で、そのとおり決まるだろうということですが、メキシコのときも初めはコロンビアの予定が急に変わったし、今回も、予定はイ

ランだった。めまぐるしい国際情勢だから八五年になって突然変わるということも考えられると思います。でもアフリカあたりでやるのは、すごくいいことだと思ふ。南北問題の本来本元だし。

ヤンソン 私はコペンハーゲンで婦人会議が開かれたことは、ある意味において失敗だったと思うのです。西洋の先進工業国で福祉国家ですから、もう社会が整理された国でしょう。お金がある国であることは確かです。女の問題のみならず飢えと病気と失業と戦争の問題をかかえている国々から、女が、デンマークのような国に来ることこそ大変なことなのです。旅行費・宿泊費・外食費はバカ高かったでしょう。こんな経済的な理由が一つ。もう一つは工業先進国の女たちは開発国に行かなければならないと思うんです。先進国の企業がいかに途上国を食い荒らしているかを目のあたりに見る。飢えた人々、非衛生的な生活環境に身を置いてみて、そこから婦人問題を考えることによって、頭で考え出した理論にもう一つ力を加えることができると思うのです。この意味で次の八五年の婦人会議は

ぜひアフリカか、日本以外のアジア、南アメリカのどこかで開かせたいと思ふ。

斎藤 あなたがそうおっしゃる気持はとてもよくわかるけど、コペンで開いたことは必ずしも失敗だったとは言いきれないと思ふの。これは私がメキシコに行ったからかもしれないけど、第一回はメキシコでほんとによかった。今度はそれと対照的な「北」の国で、両方を見た人には南北問題の意味がすごくよくわかったと思ふ。旅費が高かったというけど、今度は安くて快適な民宿もたくさんあったし、私たちは旅費宿泊費こみで二十八万円です。場所も、北アフリカからなら飛行機で二時間だから、アフリカの若い人がたくさん来てたでしょ。メキシコには、みるからに特権階級の人しか来てなかったけど。ただ、世界のどこでやるにしても、現状では特定の国の特定の女しか来られないという問題は、考えていかなないといけないと思ひますね。

それにしても、世界の経済秩序はそれこそ格差があるから、いろんな地域を回るといい。アフリカでやることは、富の不平等の問題だけでなく、アパルトヘイ

トの現実も示せるし、とにかく現実には「見る」ことぐらい訴える力を持つものはないと思ふの。「女はまだ牛馬のように売られている」という発言もフォーラムで聞いたけど、あの、黒い巨木のようなアフリカの女たちが、腹の底からの強い声で、しかも現地ですえたら、どんな頑迷な人でも耳を傾けずにはいられないでしょうね。

奥田 女性解放運動は政治運動でもあるから、命をかけてやってくる。あれを見て日本の運動は甘っちょろいなと思つた。

斎藤 例のボリビアの女の人なんかも、ほんとにもつとすごい迫力がありましたね。ただ、私、あの人の真ん前に走って行って写真とりながら、あ、これは日本の東北あたりの農村のおっかさんの顔だと思つたの。じつと忍耐し、風雪に鍛えぬかれた人たち。朝は誰よりも早く起き、夜は夜なべしてきた人たち。あの人たちがほんとうに立ち上がったら、これは強い。三里塚のおっかあのように。だけど、あの人たちは、なぜ怒らないんでしょうね。ヤンソン チャバクさんにインタビューしたとき、日本の女には何で怒りがない

のか、なぜ痛みを引き金にして攻撃に移らないのか、って言われて、なぜ私たちは話がうまくできないのか、説得力がないのか、思いが心に一〇〇%あっても、ほかの人には二〇%も伝えられないのか、これを何とかしなければならぬと痛感しましたね。

大石 日本の今までの女は強い。強いけど、それは苦痛を我慢するときに強いからね。専業主婦なんかでもそう。どうしてもあんなふうに、力を、耐えるほうに使っちゃうんだらう。

梶谷 抵抗するほうが大変だっていう考え方があるんでしょうね。

清水 そうかなあ。ほんととはそうじゃないんだけど。「解放」を自分の生涯の課題にすえている人は、個人的にも、集団の生活の中でも、たえず自己に厳しいし、自分の生き方につよい信念をもっているから、わりあい樂觀的になりやすいのよ。だから他人に対しても人間愛というか、いたわりややさしさを内に秘めているけれどね。

斎藤 フランス人に聞かれたんです。日本では農村の女の人のほうが解放されて

るそうねって。で、「解放」という点では恐らく都会の女のほうがずっと自由度があると思うけど、ポテンシャル・エナジーという意味では農村の女のほうがずっと持つてると思う。抑圧度が激しければ激しいほど、それは大きなバネになると思ふし、彼女たちこそほんとうの労働者できたえぬかれてるから」って答えたんだけど、問題は、抑圧が持続しすぎると抑圧と感じなくなるということ。

梶谷 今は農村も結構豊かなんじゃないですか。

奥田 豊かという意味では庭も広いし家も広い。玄関など特に豪華だけど、裏に回るとつるべ井戸があつて、女が水汲み自動車は二台か三台必ず持つてゐるのに。清水 うーん。物質的には豊かな部分もあるけれど、山村ではそうでもないわよ。それより「働きすぎ」や、女が勉強したり活動する環境が絶対的に乏しいのね。

つまり、社会のことや政治の本当のことをみられない「文盲」にされているのではないかしら。日本の中の第三世界なのよ。だから私たちが、農村の女性にもっと目を向け、彼女たちの労働が正当に評価さ

れるようなキャンペーンもしなければね（一同、そう、そう）。

奥田 全人類の生産活動の三分の二は女で、収入は十分の一、財産は百分の一、という国連の報告どおりでしょう。女の労働が全く評価されてない。これはマルキシズムでも見落としてるけど。

大石 そこをやっぱり女の側から言つていかなくては。

斎藤 そして、言つていく女たちを周りで徹底的に支えることね。

●月に一度でも「主婦が外出する日」を

大石 でも、どこまで女の意識を変えていけるかしら……。『うちはつれあいがおはんつくるのよ』つて言うのと、「あら、いいわね」つて言われるけど、彼女たちはお茶一杯入れてほしいと決して言わない。自分がいなくなつたら家族が困るというのを自慢にしているんだから。

梶谷 日本の男女のあり方、夫婦のあり方が、どちらも大変貧しいところから来てる。男と女が一緒に暮らすということをつきつめて考えてない。お互いが人間

だということさえ忘れていた。

奥田 だから男は平気で観光買春になんか行ける。それは男だけが貧しいってことじゃなくて、女も貧しいってことよ。

梶谷 夫と妻の役割があつて、人間が不在なんですわ。

斎藤 メキシコの旅をしてる間じゅう、明治維新って何だったのだろうと、ずーっと考えてたのね。今度もまたそのことを考えずにはいられなかったの。あれは政治変革ではあつたけど、市民革命ではなかった。だから人間の復権ということなしに富国強兵に突っ走った。人権は抹殺されたままでね。そこが今日の日本の清水で、運動はどんなふうに展開するの。

奥田 へあごろゝなんか、本を出して経験を伝えてるっていうのはすばらしいと思う。

斎藤 もちろんまだ不十分なわけだけど、私は「へあごろ」は、これから情報活動に徹したらどうだろうと思うようになったの。そういう活動を専門的にやるグループが一つぐらいあつてもいいと。とにかく

く女の側に情報がなさすぎるのね。いろんなことを目隠しされすぎてる。

奥田 女同士が分断されすぎてから、お互いの姿が見えてくるだけでもいい。

大石 子どもを出産したばかりで思うように外出できなかったころ、ちようどいろいろな女性雑誌が出だした時で、あれこれ読んで大いに励まされた記憶がある。なぜかという、著名な人のことはかりでなくごく普通の女の人たちの現実の姿を知って、ああ皆がんばっているんだなつて思つたのね。これまでいかに女がバラバラにされていたか痛感したわ。

斎藤 へあごろゝは読者集団にすぎないという非難もあるけれど、今の日本ではたとえば雑誌「あごろ」を読み続けることだつて一つの運動だと思ふ。いつの日か、それは力になっていくと思ふ。

奥田 潜在的なものがいつか必ず顕在するようになるわね。私たちの「アジアの女たちの会」でも「女大学」講座をやつてるんだけど、毎回五、六十人は来る。毎月第三水曜日に、マスコミに出てないような情報を流してるんだけど、九月十七日の国籍法改正要求集会での土井たか

子さんの話なんて、すごくよかったですよ。迫力もあるし、ユーモアもある。

斎藤 コペンに行った人たちも、各地で報告会開くといいですね。各グループで連帯して、キャラバン組んでもいい。

奥田 斎藤さんが大阪で話すときは私たちの大阪グループの人にも呼びかけるとか、そういうふうに関連したらいい。

大石 女の人は、夜、家をあけにくいって言うけど、一か月のうちのたとえば八の日は必ず出かけるとか、決然と実行するキャンペーンをしたらどうかしら。

斎藤 それはいいアイディアね。でないと、いつまでたつても、主婦と働く女の接点ができないもの。

大石 もちろん、主婦にとつては大変なたたかいになると思うけど、夫に「いいかしら？」なんてお伺いを立てるんじゃないで、「私は絶対行きます」って出かけちゃうといい（笑い）。そして、行つたらすぐよかつたつて、みんなに話していく（笑い）。

●、いのち、を守る学習を

斎藤 日本みたいに女の人が学習好きな国はないと思うのよ。婦人学級だ、サークルだ、講演会だって、お勉強は実に熱心なのだけど、ポルトガルの前首相が言ったとおり、内実は「文盲」なのよ。

奥田 十八種類の免状とった人もいますよ。私の知ってる人で（笑声）。

斎藤 その免状が命を守るとりでなってるかという、そうじゃない。たとえば実に悲しく腹立たしいのは、例の富士見産婦人科事件。なんでむざむざ子宮や卵巣を取られたんでしょう。何百人も。あれを考えると、自分の身が切り刻まれるような気がするのね。同時代人として、また女の運動にかかわる一人として、そういうことを許した社会にいたのだというところがたまらないのよ。

考えてみたら、多分、相手が男なら、医者もそんなことはしなかったろうと思うし、おめおめと切られることも少なかつたらうと思う。そういうことができたのは、ほかで同じようなことをたくさん許しているからだと思うわ。「男」が「白衣」を着て「電子機器」を使い、お前の卵巣はくさってるから命が危い、と「お

どす」と、ほんとにそう信じてしまうってことは、ほかにも無数に例があるからでしょう。たとえば女の給料は男の五四・九％。——コペンで、五六・二％だと言ってきたばかりなのに、先日の労働省発表では、一年間でさらに一・三％下がってしまったわけだけど、こんなことを許している国は、どこにもないでしょう。

五五％ということは、十一万の給料の人は二十万もらはずだということですよ。残りの九万円は富士見病院同様、政治家に献金されてるのかもしれない。日本の女の高校進学率は九五・〇％、大学進学率は短大を含めると三〇％を超える、というと、みんなヘエッてびっくりしてたけど、「文盲」が養成されてるんじゃないかしら。

奥田 男の言うことなら何でも聞くっていう体制があるから、医者でもない男が「切れ」って言う、と、「ハイ」って切れちゃう。ジャーナリスト・エンカウンターで話したサグウェイっていうエジプトの女医も同じようなことを言ってた。割礼って、クリトリスを切る手術が向こうにはあるでしょう。男の記者たちがポルノ

グラフィックな興味で、そんなことはかり質問したわけ。そしたら、彼女、「どうしてそんなことばかり聞くんだ」って怒ったのね。「これは象徴的な例で、ミューティレーションの例はほかに実際にたくさんある。女の人は現実に、肉体的にも精神的にも、ナイフで、どこもかしこもメタメタに切り取られてる」って。これはアメリカにも似たような話があるのよ。二十世紀になって、医師が大量生産されて、助産婦の仕事が男にとって代わられるようになった。そしたら過当競争になって、中産階級の女が得意先としてねらわれたわけ。医学用語で子宮のことをヒステレクトミーって言うんだけど、

「この女はヒステレクトミーだ」ってパツと診断して子宮を切り取るわけ。何百人、何千人という人が取られたわけ。

斎藤 それが、一九八〇年の日本で行なわれたということの意味、これはすごく大きい。この問題は、ほんとに氷山の一角だと思うのよ。「庶民の世界は不幸によつて明らかに」——ということがあるけど、残念だけど、女の实体も、不幸な条件があつて、はじめて明らかに

のね。

奥田 アメリカの話と同じ動機、つまり医者が過当競争になって、生き残るために女の体を切り刻んだわけでしょう。

斎藤 「メスを二十四集めろ」なんて指令したらしいから。女の「性」が、商業主義の対象にされたってことよ。電子機器なんか入れた結果、金に困ってやったことのようにだけど。

奥田 家のローンと同じことよね。

大石 私、あの記事を読んで、ほんとにくやしかった。言うがままにむぎむぎとされたくやしき。

斎藤 女がいかにか「文盲」にされているかということ。しかも自分が「文盲」であることに気がついてないということ。これは私自身も、いかに「文盲」か、年とともに気がつくことが多いから、あえて言うのだけど、あれを聞いたとき、自分は何をしていたのだろうと。こういうことを許した社会に加担している責任を感じたの。

梶谷 「女」という性がわずらわしいというところもあるんじゃないかしら。そういうふうを意識している場合も、無

意識のうちにそう感じている場合もあると思うけど。だから取ることにそれほど抵抗を感じない。むしろ、背負っていた荷が軽くなったような気分になる人だってあるかもしれない……。

斎藤 ええっ！

奥田 それはいい観点だね。女性という性がなくなることがうれしいっていう。日本の女性は、やはり性をほんとに楽しんでないんじゃないの。

梶谷 男性みたいに、取られると自己の尊厳が失なわれるというものじゃない。ヤンソン 女が性はわずらわしいものと思ひ込むに至った理由は何かって考えると、哀れでやりきれないな。怒りを感じる。

大石 だから思うんだけど、言うべきときに言わなくて、「被害者です」みたいな顔をするのをやめなくてはね。

清水 そういふけれど、医者と患者の立場では、絶対に患者は無力よ。とくに日本の医療制度は、大間を金もうけの対象にするシステムになっているのだから。少々注意してみても、みんなあんな目にあわないという保障はないのよ、その制

度の問題をきちんとつかんで突き出さなければ私たちの運動は信頼されないと思うわ。その上にもう一つ、医療の女性差別があるのよ。政府だって「妊娠・出産は個人の問題」と言って「母性の社会的保障」をサポートしているでしょ。だから健康保険からも排除して、医者の自由診療にゆだねているものだから悪徳医療がはびこり、「母性」を金づるにする。私たちは「産む性」に対する差別から起きた事件として調査し、糾弾していくつもり……。

被害者の痛みを共有しなきゃ……。

斎藤 大石さんは、被害者の痛みを共有してるからこそ、「言うべきときに言わなくては」と言っただと思うの。ほんとうに痛みを共有するってことは、二度とこんな被害者を出さないようにすることでしょう。私たちは、いろんな被害者を出しすぎてた。女は男の給料の半分だなんてことだって、もっと怒り心頭に発していいことなんです。被害者でいる限りは加害者になる。日本政府が放射能廃棄物を南太平洋に「ぬけぬけ」と捨てようとしたなんてことは、言ってみれば

私たちが加担してたから起こった。日本の国内で人権を抑圧することが当然になっているから、平気で海外の人を抑圧するんです。企業進出、観光買春、男たちがやつてることに女が本質的に加担してるということをほんとに真剣に考えないと……。

きょうは政府批判がずいぶん出たけど、その政府を選び、支えてるのも私たちでしょう。「言うべきときに言わなくては」という大石さんのことばの意味は、すごく大事だと思うんですよ。

#### ● 確立された国際的な女の連帯

奥田 なんかねガティブな話になってきたけど、ポジティブな面としては十何年か日本を明けて帰ってみると、女同士の横の連絡というのはいふんでできてきたような気がする。

斎藤 そう。おずおずと物を言ってた人たちが、だんだんうしろに下がらなくなつたし、女の運動も公認されるようになってきたでしょう。私たちの旅にしても、メキシコのときは、大部分の人が、いざ

出発というところになって家族の反対で行けなかったけど、今度は締め切った後でも追加希望が続々あって、すそ野は確実に広がったという気がする。

大石 今までの女の友情は、趣味が合うとかお茶のむつていうレベルだったけど、もっとほんとうの意味の友情も深まってきたと思うし。

奥田 孤独感にさいなまれてた人が、あそこに行けば仲間がいるという。そういうものがだんだん見えるようになってきた。

斎藤 そして、そういう仲間の存在が国際的にも確認され、国際的ネットワークが確立されたのが、今度の民間会議の一番の成果だったんじゃないかしら。

奥田 これは大きいですよ。

梶谷 私は本会議場は外から眺めただけで、直接見聞きしてはいないんですけど、成果は強調したいと思うんです。政治的な問題での対立が大きく報道されてましたが、それを裏からみれば、女の問題では対立しなかったということですね。行動プログラムに対して反対や棄権が出たのは残念だけど、男女平等をすすめるこ

とや男女の役割を変えていくことについて反対した国があるわけじゃない。女の問題についての議論の内容も少しずつ進んできているんじゃないでしょうか。それをもっと進めるべきだし、進められると思いますね。対立だとか、男にあやつられたとか、そういう部分にばかり目を向けて、全体の成果を忘れてはいけないうると思うんです。

斎藤 そのことは、棄権や反対に回った各国の代表も、繰り返し力説してましたね。何であれ、女の問題で世界の人たちが集まるということはすばらしい。

フェミニズムの基本は人権の尊重のわけだけど、どこかの国の女の人権が侵されそうになれば、世界じゅうのフェミニストが立ち上がるだろうということを、私は今度、心から実感できたように思うんです。そういう支援に支えられて、おかしいことはおかしいと言いつけていきたい。特に最近、憲法改訂とか、不穏な空気が強くなってきたけど、戦争ほど人権を侵害するものはないと思うし、どんなことがあっても阻止したいと思います。大石 戦争についてはヨーロッパの人た

ちがほんとうに心配してたけど、とうとう中東に火の手があがって。

斎藤 フォーラムでのイラクの宣伝ぶりには、何かピンとくるいやなものがありましたものね。「国威発揚型でいい」なんてほめてた人もいるけど、フェミニズムとは全く違うような感じがした。

奥田 軍楽隊出したりね。

斎藤 なにか戦前の日本を思い出したの。少年少女まで動員して、不安な感じがした。それにつけても、ああいう無邪気な人たちが、今、戦火にあっていると、たまらない気がする。

清水 いま、私たちは「十二月八日」を

目標にして、女たちが戦争への道に反対するデモをやるうかと話し合っています。が、これからはフェミニズムの運動と反戦平和の運動を結びつけていかないとね。そして反戦平和の運動でも、個人が誰でも参加できるようなユニークな運動を考えていく必要がありますね。

斎藤 運動を結びつけるんじゃない、フェミニズムの運動は平和運動そのものなんです。逆に、平和の問題を、ほんとうの人権問題としてとらえている人は、当然、フェミニズムに共感できるはずだ

と思う。そのへんをもっとはつきり打ち

出して、ほんとにユニークな運動を展開したいですね。

編集部 戦争や公害を阻止していくのはフェミニストたちの中心課題でしょうし、戦争でもうけるのは誰かということを考えていくのもフェミニズムでしょうね。

国内的にも国際的にも、フェミニストの活動が一層必要な時代だと思います。世界会議や女性差別撤廃条約を、「外圧」として有効利用しながら、活動しましょう。では、皆さん、お元気でよい活動を。

15

## 特集 仕事とくらし

A5判★980円

生きていけばきつと 二井絹子

女の仕事は雑用か 町野美知

医療の内部から 山野香魚子

非婚の母たちが生きる時 檀石真弓

八百屋、それから 今長充子

女二人の製版屋 宮崎暁美

めし屋のたたかい もりもり

養生日記 河原純子

座談会 仕事でなんや 上田育子+

岡元信恵+奥村宏子+小堀恵美子+

金暉+人見ジュン子+深江誠子

〔連載〕

裁かれる女(9)「働き続ける権利」から

「平等に人間らしく働く権利」へ 中島通子

「女文化」(4) 幻想交換のフォークロア 河野信子

シリーズ性(1) 性の復活 橋本幸子

●ドラの向こうに  
鬼はいない ハンドブック

丸山友岐子●今日を生きたい女の性と生②  
自立のノウハウを展開し、貧乏人の連帯と助け合い精神を説く女の実践篇。★1200円

社会評論社

東京都文京区本郷2-5-10



# あぐらの旅

## ♥メキシコの旅に教訓を得て

一九七五年のメキシコ会議「トリビューン」に「あぐら」のメンバーが参加し、大きな衝撃を受けたことは、その後の「あぐら」の運動に、さまざまな影響を与えた。好奇心半分で参加した人々も、女の問題に真剣に取り組むようになった。私たちは八〇年の会議には、よりよい参加を、と、「あぐら可能性教室」に「英語コース」を設け、日常会話の練習にも励んできた。

テヘランと予想していた会議はコペンハーゲンに変更になり、総理府からは、民間会議の出席者に関しても厳しい資格制限が通達されたが、私たちは「民間グループの構成員」として、その資格を満たすものと考え、「あぐらミニ」で、参加希望をつのつた。コースはA（会議全期間参加）B・C（会議に数日参加して北欧の女性解放と社会福祉も視察）の三

コースとした。BとCは、ほとんど同じ内容だが、Bは出発が七月十二日、Cは十九日。教職に就いていたり、子どもの夏休みを待って出発する人たちが後発となった。

旅の企画は、まず旅行社の選定と費用の交渉から始まった。メキシコ旅行で、買春観光旅行業者を回避したところ、良心的業者がほとんどなく、買春観光には関係ないもののあまり好ましくない業者でさんざん苦労をした失敗にこり、「ミニ」による募集の際に、買春観光に関係のない旅行業者も公募、会員の推せんによる四社から見積りを取り、価格を交渉、最終的には、女性添乗員を常勤者として持つA社に決定した。

寝袋をかつぎ、リュックを背負って、できるだけ安く、できるだけ自主的に、と企画したAコースは、総費用約二八万円、旅の初心者と比較的多く含んだBコースは、添乗員・通訳・バス代込みで四

九万六千円、Cコースは「あぐら」だけでは人数が少なく、交通公社の旅にジョイントしたため、約六〇万円となった。

参加者数は、A六名、B十二名、C三名。

## ♥名古屋市婦人問題担当室とジョイント

一方、この間に、名古屋市調査団とのジョイント・ツアーの話が起きた。名古屋婦人問題担当室の中山恵子室長は、「あぐら」創刊号以来の愛読者でもあり、「あぐら東海」の運動にも深い理解を示し、草の根グループとの協力のもとに名古屋の婦人行政をすすめておられるが、担当室の人員はわずか三名、旅の実務にまで手が回らない。メキシコの経験を持つ「あぐら」が、業者の選定・旅の企画・各国大使館への交渉、NGOへの申し込み、ワークショップの立案と実施一切を担当することにし、名古屋市側は、通訳の選定と交渉を担当された。

「あぐら東海」以外にも各地の行政とか

なり、いい関係を保ちながら運動をすすめている拠点はあるが、このような形で「官民協力(?)」は「あごろ」にとつて初めてのことだった。ただし、運営は「あごろ」の中の一グループ、「あごろ旅の会」の自主活動とすることにし、「あごろ」からは、英文パンフの製作費の一部を支出するだけで、他の経済的援助は行なわないことが運営会議で取り決められた。しかし参加者個人には、拠点代表のかたちで、拠点で集められたカンパを受けた人もいれば、るす中の子どもの保育などの助け合いを受けた人もおり、仲間たちの多くの精神的援助に支えられて準備が進められた。

### ● 学習会を重ねて

準備段階で最も重点を置いたのは、事前の学習だった。これもメキシコの経験にかんがみ、「世界行動計画」その他の諸資料を原文で読むこと、日本国内の女の子の問題の資料に十分あたっておくことなどを約束し、十数回の準備会を重ねた。持参する英文パンフは、「旅の会」のメンバーたちで原案を練り、分担して翻

訳した。掲載するデータや写真も、みんなで集めた。参加者は三〇代前半の比較的若い層が多かったが、それだけに幼児をかかえている人も少なくなく、夜の学習会参加、出発直前までのパンフづくりなど、それぞれの苦勞は大変だったと思う。が、脱落者はいなかった。メキシコのときは、最終段階で、「どうしても夫の理解が得られなくて」と、涙をのんでの脱落者が相次いだことを考えると、この五年間に、女の運動に対する一般的理解が進んだこと、そして「あごろ」自体の運動にも進歩があったことを感じさせられた。

### ● 独自のワークショップを主催

旅の最大の目的は、私たち自身のワークショップを持ち、日本の女の場合とアジアの問題を、活動家の視点で訴え、国際的連帯をはかること、できるかぎり多くのフェミニストたちと語り合い、友情をはかることだったが、ワークショップは名古屋市側の参加希望もあり、その要求をどのように織り込みつつ、「あごろ」としての所期の目的を果たすかで、最も

苦心した。ワークショップの内容は八二ページのとおりである。「あごろ」の会員の立場に立てば、「中途半端」という不満を持つ方もあるかもしれないが、各自治体ツアーが、ほとんど観光旅行に終わった中で、名古屋市調査団が充実した参加をし、抜群の報告書を出し得た陰の力となったことを、喜びとしたい。名古屋市調査団は、帰国後、市内全区で精力的に報告会を重ね、名古屋市の婦人対策には一段と熱が入ったと聞く。

\*

各コースは、それぞれ予期以上の収穫をあげたが、中でもAコースの六名のメンバーが、全期間民間会議に参加し、三名は公式会議の状況もかいまみたことは幸いだった。次回の世界会議には、民間の活動家の、より充実した参加が必要なることを改めて痛感した。

Aコースは民宿を基本とし、地元活動家たちとの連帯も深まった。各国からの連絡がその後相次いでいるが、私たちも英文機関紙を発行してこれに応えたいと、準備をすすめている。

## へあごらへのアピール

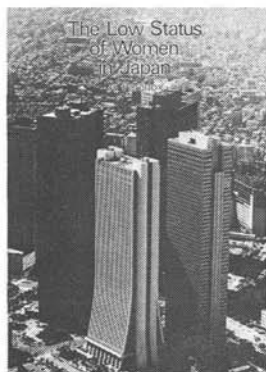
会議参加者に対する「へあごら」から  
のアピールは英文パンフに掲載すると  
ともに、ワークショップの席上で行な  
った。

概要は、

- 1、世界で唯一、核爆弾を受けた国の  
人間として、核兵器反対と軍縮を強  
く訴える。歴史をかえりみると、戦  
争の度ごとに兵器は兇悪化している。  
もし第三次大戦が起これば、広島・  
長崎を上回る惨事が起きることは必  
至である。こうしたおろかしい戦争  
は、男たちによってすすめられてき  
た。私たちは、婦人運動はヒューマ  
ニズムの運動であると理解しており、  
フェミニストは反戦主義者だと考え  
る。世界のフェミニストは団結して、  
あらゆる形態の戦争に反対しよう。
- 2、日本の経済進出は世界をおびやか  
しているが、日本商品が安価なのは、

女子の低賃金に負うところが多い。  
各国は高い関税を課して日本商品を  
締め出そうとしているが、それより  
も、日本政府に対し、女子労働者の  
賃金を引き上げるよう要請してほしい。

3、第三世界と呼ばれる国々は、いま、



さまざまな発展途上段階にある。日  
本は、百年前、欧米を範として工業  
化に踏み出したが、多くの公害と自  
然破壊をもたらした。人間にとって  
真の幸福とは何なのかを、私たちは  
いま、きびしく問い直している。途

上国の方々は、工業化に際しては、  
日本を反面教師として十分考慮して  
ほしい。

- 4、日本の男性のエコノミック・アニ  
マル、セックス・アニマルぶりにつ  
いての不評を深く恥じている。日本  
の女性には、長い間、耐えることを美  
徳としてきたが、その結果、男たち  
を甘やかしたために、彼らの恥知ら  
ずの行為を生んだ。日本の男性は、  
女性に低賃金しか支払わないので、  
経済進出した先の女性にも低賃金を  
払っている。日本の女を不当にいや  
しめ続けているので、買春観光など  
の恥ずべき行為も平気で行なう。私  
たちはこれに対して国内でたたかい  
続けるが、さらに国際的連帯を持っ  
て、より強力な運動を展開したい。
- 5、世界の女性よ、連帯して、あらゆ  
る形態の女性差別とたたかおう。

私たち女の性に対する不安や恐れは、  
一体どこから生まれてくるものなのか？

# 母と娘の関係

母の中のわたし、わたしのの中の母

ナンシーライデー 著  
俵朋子・河野貴代美 訳

定価 上/980円  
下/680円



あなたが、性に対してどうしてもリラックスできないのは、  
心に潜む内なる母親のせいなのだ。

「女らしくなさい」この囁きを、何度聞いたことだろう。

女が、女自身の手でトータルな人間性を取り戻すために  
新しい母と娘の関係を提言する、問題の書！

講談社

転職を迎えた女たちの選択

# 働いて

●好評最新刊！

# 生きる

大脇雅子 著 四六判/1200円

労基法研究会の「女子保護規定は撤廃すべし」と  
の提言は、女の働く権利を根底からくつがえすも  
のとして強い衝撃を与えた。いまこそ女たちは小  
異をすてて一致すべきだとする筆者の視点は、説  
得力があり、立場の違いをのりこえて、女たちが  
進むべき道筋を示唆してくれる。

## あしたの女たちへ

●女の生きがい 働きがい論／樋口恵子／980円

## 女たちの民法問答

●女の生と性・60事例／鍛冶千鶴子編著／980円

東京都千代田区富士見1-7-5 学陽書房 電03-261-1111/振東7-84240

# 女性差別撤廃条約の批准に向けて



## 署名の意味と運動の方向を考える

一九七九年十二月十八日、第三四国連総会で採択された「女性に対するあらゆる形態の差別撤廃に関する条約（以下、「女性差別撤廃条約」と略す）は、一九六七年、第二二国連総会で満場一致採択された「女性に対する差別撤廃に関する国際連合宣言」を、より強い国際的拘束力を持つ「条約」に変えようとの、長い努力が実を結んだものである。（本号五ページ参照）国連「婦人の地位委員会」は、女性差別撤廃のための戦術を、差別撤廃条約の採択と、差別撤廃のための行動計画づくりの二点に置いていたが、後者は、一九七五年の第一回世界婦人会議「メキシコ会議」で採択され、その後は前者に重点が置かれていた。七九年末、ついに採択されたことは、八〇年の、「国連婦人の十年中間年会議」への、何よりの贈りものとなった。

コペンハーゲンにおける中間年会議の席上で、差別撤廃条約の署名式を行なうというアイデアは、「婦人の

地位委員会」から出されたものだが、まことに名案であり、当初、十五か国と伝えられていた署名式参加国は、五二か国にふくれ上がった。世界会議のハイライトともいべき署名式に不参加では、国内の女性パワーからの突き上げは必至、という事情は、各国共通であつたろう。署名をあれほどいやがった日本政府が、署名式直前の七月十五日、ついに閣議で正式決定したのも、同様の「政治的判断」が働いたためと推測される。

八〇年三月六日のキューバの署名を皮切りに、世界会議前十三か国であつた署名国は、会期中の二回の署名式（第二回は七月二九日、五か国参加）と署名式以外の署名を加え、会期終了までに七二か国に達し、会議後さらに七か国を加え、十一月四日現在、七九か国となった。世界会議参加一四五か国の過半数に及んだわけである。批准も、キューバ、東独、スウェーデン等、九か国を数えるに至った。「世界婦人憲法」ともいわれるこの条約の

発効へ向けて、世界の女性の前途には、大きな光明がさしかけた感がある。ここで差別撤廃条約成立の過程から、まず振り返ってみよう。

### ●条約の目的と提案の経過

国際連合(国連)は、一九四五年一〇月二四日、不幸な戦争を二度と起こさないことを目的に、戦勝連合国間で成立したが、その目的を国連憲章は次のように規定している。

一、国際平和と安全を維持すること。

一、国家間の友好関係を深めること。

一、国際協力を通じ、国家間の、経済・社会・文化および人道的問題を解決し、人種・性・言語または宗教による差別なく、すべての者のために、人権と基本的自由を尊重するよう助長し、奨励する。

憲章の前文は、さらに、

「将来の世代を戦争の惨害から救い、基本的人権と人間の尊厳および価値と、男女および大小各国の同権に関する信念をあらためて確認し」ている。

平和を目的とする国連の憲章に、男女平等が盛り込まれていることに奇異の感を抱く人がいるかもしれないが、侵略や軍事独裁政権と人権無視との間には密接な関係があることを、ナチス・ドイツや日本の例から痛切に学びとった結果が、この字句となったものである。ファシズムの抬頭の陰には、人権意識の希薄、人権抑圧があるこ

とを鋭く感じとって、人間の尊重こそ平和への道、と強く打ち出した意味は、まことに大きいといわなければならない。「婦人の地位委員会」が国連の中にいち早くつくられたのも、このためであり、長い抑圧の末に、痛覚をもちや痛覚と感じなくなった女性たちの人権意識を掘り起こすことから、呼びかけは始められた。

多くの国際条約・規約・文書は、女性差別撤廃を繰り返し言及してきた。その主なものとして、

1、国際連合憲章(一九四五) (注)基本的人権と人間の尊厳および価値と、男女の同権を確認。

2、世界人権宣言(一九四八) (注)すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ尊厳および権利について平等である。すべての人は、性による差別その他、いかなる差別もなく、この宣言に掲げられたすべての権利および自由を享有でき、と言明。

3、国際人権規約(一九六六) (注)締約国は、すべての経済的・社会的・文化的・市民的・政治的権利の享有に、男女は同等の権利を確保する、と規定。

4、男女同権推進のために国連およびその専門機関の主張のもとに締結された国際条約 (注)人身売買および他人の売春からの搾取の禁止に関する条約(一九四九)、婦人の政治的権利に関する条約(一九五二)、母性保護条約(一九五二)、奴隷制度・奴隷取引ならびに奴隷制度に類似する制度および慣行の禁止に関する補足条約(一九五六)、既婚婦人の国籍に関する条約(一九五七)、教育上の差別待遇禁止

に關する条約（一九六〇）、婚姻の同意、婚姻最低年齢および婚姻の登録に關する条約（一九六二）、あらゆる形態の人身種差別撤廃に關する条約（一九六五）

5、男女同權推進のために国連およびその専門機關によつて採択された諸決議、宣言および勧告（注）同一価値労働についての男女労働者に対する同一報酬に關する勧告（一九五一）、母性保護に關する勧告（一九五二）、雇用および職業についての差別待遇に關する勧告（一九五八）、家庭責任をもつ婦人の雇用に關する勧告（一九六五）、婚姻の同意、最低年齢および登録に關する勧告（一九六五）、\*女性に對する差別撤廃宣言（一九六七）、\*女性の進歩のための統一的國際行動計画（一九七〇）、\*女性の平等および進歩と平和への女性の貢獻に關するメキシコ宣言（一九七五）\*世界行動計画（一九七五）

があり、\*印は特に大きな影響を与えたが、「これらの種々の文書が存在にもかかわらず、女性に對する広範な差別が、依然としてあることを憂慮し」、「『女性に對する差別撤廃宣言』に掲げられている諸原則を実施すること、そして、その目的のために、事実上または法律上の差別撤廃に必要な方法を採択することを決意し、次のとおり協定した」と、条約の前文は、その経過を明らかにしている。

### ●審議過程

条約案の審議は、一九七四年以来、国連「婦人の地位

委員会」ですすめられ、七十六年十二月、同委員会で採択、經濟社会理事會を経て、七十七年秋から、国連總會第三委員會に付託された。婦人の地位委員會も、經濟社会理事會も、限られた国からしか代表が出ていないため、總會で最終的に逐条審議されたわけである。条文の検討はワーキング・グループに分かれて行なわれたが、保護と平等をめぐる米ソの対立や、制裁処罰（サンクション）をめぐる論争などが争点となり、制裁については、女性差別に對して「制裁を伴う立法その他の措置」を講じるといふ原案は、日本などの修正案により、「適當と認められる時は」制裁を伴う立法その他の措置をとる」と、ゆるやかな表現に変えられた。制裁を伴うためには、「女性差別とは何か」が明らかにされることが先決であるという法理論が考慮されたためである。このほか、一字一句の検討の中で、審議は遅々として進まなかつたが、「女性差別は人間の尊嚴尊重に反すること」であり、「すべての女性に、そのポテンシャルティ（潜在的可能性）を十分開花させて、国家と人類に貢獻できるチャンスを与えるべきだ」という趣旨は、全員が賛成し、一九七九年十二月一八日、第三四國連總會で、反対ゼロ、（注）棄権一一、賛成一三〇で採択された。日本も賛成の一票を投じた。

（注）棄権はバングラデシュ、ブラジル、コモロ、ジブチ、ハイチ、マリ、モーリタニア、メキシコ、モロッコ、サウジアラビア、セネガル

## ●条約の思想

この成立過程が示すように、「女性差別撤廃条約」は、国連憲章・世界人権宣言・国際人権規約に盛り込まれた「人権尊重」を基本に、「女性に対する差別撤廃宣言」を母体になっているが、その条文を検討すると、一九七五年、国際婦人年世界婦人会議で採択された「メキシコ宣言」と「世界行動計画」が、大きな影響を与えていることが認められる。

「女性差別撤廃条約」の前文は、通常の条約の前文に比べて長すぎ、多様かつ散漫であることを指摘する向きもあるが、「世界行動計画」に盛り込まれた多様性と同じく、北と南、西と東、諸国それぞれに掲げてやまぬ要求を配慮しつつ、女性差別に関するあらゆる要素を盛り込んだものであり、前文だけでも女性史および現代史の資料となるほどの意味を持つ。同時にそこに「メキシコ宣言」および「世界行動計画」の、深い影響を見ることができ

る。特に注目されるのは、基調としての「平等・発展・平和」の強調、そして、メキシコ会議で最も熱心に討議され、「行動計画」と「宣言」に盛り込まれた「性別役割分業の打破」と「国際経済秩序の確立」が、はっきり打ち出されていることだろう。前文は、まず、

「経済的な貧困の中では、女性は、食糧・健康・教育・職業訓練および雇用機会並びにその他の必要に對する機

会を最小限にしか有しないことを憂慮し、平等と正義に基づく国際経済秩序の確立が男女平等の推進に多大の貢献をすることを確信し」

と、女の地位を男なみに引き上げればよいのではなく、「国際社会の富の不均衡を是正して人類の平等をはかるべきこと」を真つ先に述べている。

第二は、「平和」の強調である。

「アパルトヘイト並びにあらゆる形態の人種主義・人種差別・植民地主義・新植民地主義・侵略・外国の占領及び支配並びに内政干渉の根絶は、男女同権を享受するために必要欠くべからざるものであることを強調し、

国際平和及び安全の強化、国際間の緊張の緩和、社会的及び経済的制度的いかなを問わず、あらゆる国の相互協力、全面的かつ完全な軍備縮小、特に、嚴重かつ効果的な国際管理の下における核軍備の縮小、諸国家間の正義、平等及び互恵の原則の確認、外国支配・植民地支配及び外国の占領下における民族の自決及び独立の権利の実現並びに国の主権及び領土保全の尊重が、社会の進歩及び発展を促進すること、ひいては男女間の完全な平等の達成に貢献することを確認し、

国の十分かつ完全な発展、世界の福祉及び平和の追求のためには、すべての分野において、女性が男性と同等の条件で最大限に参加することを必要としていることを確信し」

と、前文は多くの行数をさいて、平和が平等の基盤であ

ること、そのためには女性がすべての分野に男性と同じ条件で参加すべきことを強調している。

第三は、「性別役割分業を支える社会通念の打破」である。

「従来、十分に認められていなかった家族の福祉や社会の発展に対する女性の偉大な貢献、母性の社会的重要性並びに家庭及び子の養育における両親の役割に留意し、また、出産という女性の役割は決して差別の根拠にされてはならず、子どもの養育には男女双方が、また社会全体が責任を分担すべきだということを認識し、

社会及び家庭における男女の伝統的役割を変えていくことは、男女間の完全な平等の達成に必要であることを認識し……」

と前文に打ち出したうえ、第五条で、

「両性のうちのどちらかが劣等または優等だという観念や、男女の固定化した役割に基づく偏見及び慣習上その他のあらゆる慣行の撤廃を実現するために、男女の社会的及び文化的な行動様式を修正することを約束している。さらに第十条でも、

「締結国は、男女平等の基盤の下で、教育分野において、女性が男性と同等の権利を持つことを保証するために、女性差別撤廃のためのあらゆる適切な措置を講じる」と、教育上での配慮を細かくうたっている。

国際条約で、社会通念の打破にふれるものはきわめて珍しいが、「女性差別撤廃条約」は、「女は子産み・子

育て、男は仕事」という社会通念を前提としたうえでの女性の地位向上は、改良にはなり得ても問題の本質的解決にはならないことを明確に指摘したものであり、まさに画期的なものといわなければならない。

第四は、母性を高く評価し、その十分な保護を強調していることである。前文に母性の社会的重要性を訴え、出産を差別の根拠にしてはならないと明確に述べているのは前項引用のとおりだが、さらに第四条で、

「母性保護を目的とする特別措置を講ずることは差別とはみなされない」

と重ねて明言、さらに第五条では、

「社会的機能としての母性の正しい理解」を認識させることを強調している。

母性保障と平等は決して矛盾する概念ではなく、母性を保障してこそ平等への道が開けると位置づけているのは、特記すべきことであろう。

また、第十一条2では、

「結婚もしくは出産による女性差別を防止し、女性に実際的な勤労の権利を保障するため」妊娠・出産・結婚を理由とする解雇を禁止し、これをおかした場合は処罰を加えること、妊娠・出産のための有給休暇、社会保障の制度化、保育所の拡充等をきめ細かく定め、さらに第十二条2でも、

「妊娠及び産前産後の期間中、十分な栄養と、必要に応じた無料の医療サービスを女性のために確保する」

と、母性を「社会的機能」として尊重することを強調している。

ここには、むしろILOの一連の動きからの影響が感じられる。一九七五年六月、メキシコ会議と時を同じくして開かれた第六〇回ILO総会は、「婦人労働者の機会および待遇の均等に関する宣言」と、そのための行動計画を採択したが、それには、「母性保護のための権利」に、特に一章が費やされている。さらに一九八〇年六月の第六六回総会は、「家庭責任をもつ男性及び女性労働者の機会均等及び平等待遇に関する条約」案を検討し、「男女とも育児時間を」とともに「母性保障は平等の基礎であり、母性が差別の理由にされてはならない」ことを原案に盛り込んでいるが、これら一群の「母性尊重」の世界的趨勢の反映が感じられる。

同じような世界的趨勢として、「母性」を、比較的狭義に解釈し、「育児」は男女の共同の責任とし、女子労働者の労働条件をよくすることによって「女子に対する特別保護」を漸時廃止し、男子労働者の時間短縮その他の労働条件の改善を含めた「人間保護(男も女も人間らしく保護する)」をはかろうとする動きは、ILOでももしばしば議題となっているが、これを反映して、第四条では「事実上の平等を促進させる目的で暫定的な特別措置をとることは差別とはみなされないが」と断ったうえではあるが、

「その結果、不平等の基準を維持することになってはな

らず、機会と待遇の平等が達成された時には、このような特別措置を停止しなければならない」と結んでいる。これは、わが国の情況としては、「事実上の平等を促進させる目的で暫定的な特別措置をとることは差別とはみなされない」を、重視すべきだろう。

第五は、子どもの権利の尊重である。第五条は、「児童の利益は、あらゆる場合に最初に考慮すべきである」と、「子の権利」に最優先権を置いている。また、第九条2でも、

「子どもの国籍に関して、女性と同等の権利をもつ」

と、国籍の取得にも子どもへの配慮を優先し、男女が同等の発言権を持つことを定めている。従来尊重されていたのは「親権」であり、それはとりもなおさず「男親の権利」であった。子どもの人格を何よりも重視したこの条文は、個の確立、人権の確立が子に始まることを明らかにしており、全文に満ちあふれる「人権尊重」の思想は、ここにも表われている。画期的条文といわなければならないまい。

### ● 批准の影響

しかしながら、この画期的条約に対し、日本政府は、国連総会では「採択」、すなわち「国」として条文を確認したことを表明したのにもかかわらず、「署名」、すなわち確認の意思表示には激しい抵抗を示した。純粋な法理

論だけでいえば、採択と署名の間には必然的な関係はないとされるが、少なくとも国民感情に立てば奇異に感じられるこの行動の原因は、文部・法務等の各省が消極的であつたためと伝えられる。国際法は国内法に優先するため、国際条約で定められた基準に満たない国内法は改めなければならないが、日本は、憲法で男女平等を明確に打ち出しているものの、具体的な諸法律には不備が多く、その整備に多くの問題点があることが指摘されている。しかも、この条約の実施状況点検のために、国連に「女性に対する差別撤廃委員会」が設けられる（第十七条）うえ、締約国は、実施のために自国がとつた立法上・司法上・行政上その他の措置とその成果を、締約後一年以内、その後は四年ごと、もしくは委員会の要請のある都度、国連に報告しなければならない（第十八条）など、多くの責任を負わねばならないことが、躊躇の原因と推測されている。特に影響が大きいのは、労働・文部・法務・厚生各省だが、中でも、女性差別撤廃に、最も大きな影響を持つのは、労働と教育である。具体的には、

#### 〔労働関係〕

第十一条で、「雇用における同等の権利を保証するため、女性差別撤廃のあらゆる適切な措置を講ずること」を締約国に義務づけ、「労働権、及び、あらゆる職業に機会均等に就労できる権利、職業選択の自由、昇進・昇給、身分保障、技術訓練、高度な職業訓練、再訓練につ

いての同等の権利、同一労働、同一賃金、社会保障」特に退職・失業・疾病・虚弱・老齢その他労働不能の場合の権利、有給休暇の権利、出産機能がそこなわれない労働条件の保証、結婚・出産を理由とする解雇の禁止、妊娠・出産時の有給休暇または社会保障、妊娠中の危険有害業務からの特別な保護、保育所の拡大・充実」を明確に規定しているが、これに対する日本の国内法はまことに不十分なものである。労働基準法第四条で賃金についての男女差別を禁止しているものの、採用・昇進・昇格・昇給・定年の差別、結婚・妊娠・出産による退職制や退職勧告に対しては、直接的な法的規制はない。労基法第三条に「性による差別」の禁止を加えたとしても、採用時点から年金に至るあらゆる差別の禁止を明文化した「男女雇用平等法」の類の法制がなければ、現実には個別の裁判でたかう以外、方法がない。労基法三条に「性による差別」禁止を加え、新たに雇用平等法のような性差別禁止法を制定することが必要である。諸外国ではすでに、アメリカⅡ公民権法第七編、イギリスⅡ性差別禁止法、スウェーデンⅡ男女平等法、西独Ⅱ経営組織法など、雇用差別を禁じる法律がつくられている。

また、第十一条2は、「女性が、妊娠・出産時の保護によつて決して差別されてはならないこと」を明記し、結婚・妊娠・出産を理由とする解雇に対しては、雇用者を処罰するとまで定めている。母性保障の強化、保育所の整備・拡大が義務づけられるなど、影響は広く深い。

### 〔教育関係〕

第十条で、「男女平等の教育のためのあらゆる適切な措置を講ずること」を定め、特にC項で「男女役割固定化教育の排除、同一の教科書・教科・教授方法」を明確に義務づけている。巷間では、家庭科の男女共修問題だけがクローズアップされているが、教科書にみられる性別役割分業固定化の記述やイラストの改正に至るまで、教育全般にわたる洗い直しが必要となる。厳密に言えば、教師の差別的発言や差別的取り扱い（たとえばクラスの名簿は男子が必ず先、など）さえ問題となろう。

### 〔法務関係〕

第九条1で、「締約国は、国籍の取得・変更・保留の権利は、男女平等に許与し、特に、外国人との婚姻、及び婚姻中の夫の国籍の変更が、自動的に妻の国籍を変更したり、あるいは夫の国籍を強制的に取得させないことを保証する」と定めているが、これは、「日本人の女が産んだ子でも、子は父の国籍を取得する」父系優先血統主義の現行国籍法の変更を迫るものである。すでにフランス（一九七二）、西独（一九七四）、スイス、デンマーク（一九七八）、スウェーデン（一九七九）などでは、次々に父母平等血統主義に改められているが、日本は、重国籍（二つ以上の国籍をもつ可能性があること）を理由に躊躇している。

主な要素は上述のとおりだが、問題はこれだけだろうか。たとえば、二重国籍で最も問題になるのは、日本に

最も数多く居住する特定外国人の問題であろう。多数の「新日本国民」が出現することは、国家予算の問題だけでなく、派生するさまざまな影響があると、政府は憂慮しているのではないだろうか。

また、労働関係の法規を改め、結婚・妊娠・出産等による解雇に罰則を課し、母性保障を重視すれば、女性の低賃金労働によって支えられてきた日本の高度経済成長の構図は、その足もとから崩れることとなる。

さらに大きな要素は、この条約が、文字どおり「女性に対するあらゆる形態の差別撤廃条約」であることであろう。「あらゆる形態」とは、就職から退職までのあらゆる職業上の差別、生活保護・年金に至るあらゆる社会保障、教育、経済生活、社会通念まで、生活全般に及ぶ。中でも社会通念の打破は、久しい男性王国を、根底から揺さぶることとなる。世界行動計画、後半期行動プログラムと相まって、女性革命のまたない援軍が用意されるわけであり、それは、女性の生活を変えるだけでなく、男性の生活全般にも影響する一種の文化大革命になることが考えられる。

### ●今後の見通し

三月の参議院婦人問題集中審議で、田中寿美子議員らが政府を追及したのを皮切りに、各紙女性記者による大キャンペーン展開、四八団体はじめ各婦人団体や女性解放グループの一斉抗議、婦人問題企画推進会議の、満場

一致による要望書提出、女性官僚の熱烈な努力等々、女性の総力に押され、六月二七日、婦人問題企画推進本部は、批准へ向けて国内法の手直しなど条件整備を行なうことを申し合わせ、六月三〇日、政府もついに署名の内定を発表、七月一五日、閣議正式決定、すべりこみで七日の署名式にのぞむことができた。とはいえ、政府はいわば「外圧」を顧慮し、「政治的判断」から署名したにすぎず、批准までの道は、まだ長くけわしいものと推測される。

ところで、採択・署名・調印・批准・発効の間には、どんな関係があるのだろうか。法的には、

〔採択〕とは、案文を確定したという国の態度の表明であり、国際的に法的責任を受け入れたものではない。

〔署名〕は、案文に自ら氏名を記入すること。

〔調印〕は、印を押すこと（現在はほとんど行なわれていない）。

〔批准または加入〕とは、国会の承認を経て天皇の稟承を得、批准書または加入書を国連事務総長に提出、国際的に法的責任を受け入れること。

〔発効〕は、一定数以上の国が批准または加入し、条約が国際法としての力を持つこと、である。

国際法上では、「署名・調印したからといって、必ず批准しなければならないことを国際的に約束したものである」と（八〇年八月四日、四八団体学習会席上での、外務省条約局・国際協定課長（当時）浅井基文氏の説明）し、

「わが国の法体制になじまない場合は、締結に至らない」（同上）という見通しのもとに署名されたことを、記憶しておかなければなるまい。

今後の見通しとして、最も早く行なわれるのは、恐らく「発効」だろう。「女性差別撤廃条約」の場合は、批准または加入二〇か国に達し、二〇か国目が批准・加入した後、三〇日目に発効することになっているが、批准国はすでに九か国に及んでおり、八一年度中には発効するのではないかとの見通しもさやかれている。

世界各国が、署名から批准へ、進んで動き出している中で、日本も、法務省がまず、国籍法改正の検討を始めたことを表明した。労働省は、雇用平等法の制定にむしる積極的だが、保護と平等をめぐる国内論争の中で、平等法反対の声も依然として強く、見通しは平坦とはいえない。年金・保育所・生活保護等とかかわる厚生省、家庭科共修はじめ教育全般の見直しを迫られている文部省など、各省は具体的にどのように受け止め、現在どこまで対策を練っているか、私たちは、各省担当官にインタビューした。詳細は一七〇ページ以下を、ごらんいただきたい。

民間婦人団体や女性記者が、どのように受け止め、対応しようとしているかのアンケート結果は、二〇一—二〇九ページに示した。回答にみるかぎり、どの団体も批准を熱望しているが、最も心配されるのは、昨年の「国際人権規約」の批准のような例が繰り返されることだろう。「国際人権規約」は、A規約で「性による差別禁止」

と「男女の平等権」を保障した上で、第六、七条で「雇用の機会均等」と、「労働条件の平等」を、また第十条で「働く母親に対する有給または社会保障給付を伴う出産休暇」を規定しており、これは当然、国内法の改正を必要とするものだが、政府は、国会に批准の承認を求めるに当たり、「人権の尊重は日本国憲法を支える基本理念の一つであり、同規約の趣旨はおおむね国内的に確保されており、規約の締結は、わが国の人権尊重の姿勢を改めて内外に宣明する観点から意義深いものと考えます」と述べて、国内法の改正には全く触れなかった。与野党伯仲の昨年でさえ、「要するに国際的に格好をつければよい」という論理がまかり通ったことを考えると、与党が圧倒的多数を占めた現国会での審議の前途には暗雲を感じる。この情況下で批准を急ぐよりは国内法改正の運動を、という戦術論、まず批准して、それを

バネに国内法の改正を、という戦略論がたたかわされているが、どちらにしても国会を動かさないかぎり、前途に光はない。あらゆる意思決定部門に、特に国会に、「女の立場に立つ代表」を送りこむことが、最終的には必要であろう。女の賃金は男の半分に過ぎないが、いま、女の有権者数は男をわずかながら上回っている。長いたたかいの後に、戦後ようやく獲得した私たちの権利を武器に、私たちの利益を代表する議員を選び、私たちの望む政府をつくるために何をすべきか、いまこそ、衆知と力を集めるべきだろう。法律ができて無効だとの意見もあるが、現行憲法が、どんなに女の生活を変えたかを想起し、同時に、自主的な運動のないところには、法律は決して機能しないことを、肝に銘じて、今後の運動の方向を考えたい。〔女性差別撤廃条約〕全文は、「あこら」22号に掲載）

## 助言者、講師を ご紹介します

「国連婦人の十年」「コペンハーゲン会議」「後半期行動プログラム」  
「女性差別撤廃条約」などについて、婦人学級や自主サークルでの学習がすすめられています。〈あこら〉では、これらの問題を専門的に勉強している会員を、講師や助言者にご紹介します。遠隔地のご要望にもおこたえます。お問い合わせは、〒160東京都新宿区新宿1の9の6〈あこら〉事務局(03-35413941)へ

# 女性差別撤廃条約のおもな内容

## 前文

(条約の意義と経過) 女性

差別は人権の侵害であり、社会の発展を阻害するものである。また富の偏在や人種差別、植民地主義、侵略、内政干渉のもとでは男女平等は達成されない。国の発展、世界の福祉と平和のためには、すべての分野に女性が男性と同等に最大限に参加することが必要である。一方、母性は今まで十分に評価されていなかったが、その意義を十分に認め、出産は決して女性差別の理由にされてはならない。子の養育は両親と社会で責任を分担すべきである。性別役割分業の打破によって平等は実現する。女性差別に対しては、国連憲章、世界人権宣言・国際人権規約はじめ多くの国際文書がすでに出されているが、まだ広範な差別が存在するのでこの条約をつくり、女性に対する差別撤廃宣言の諸原則実施のために必要な方法を

以下のように協定した。

## 女性差別とは

あらゆる分野での女性の人権および基本的自由の認識・享受・行使を妨げるすべての差別・排除・制限を意味する(第一条)。

## 慣行・慣習

女性差別禁止の立法措置を講じる(制裁を含む)。公的機関による女性の権利の法的保護、個人・組織・企業による女性差別の撤廃、女性を差別している現行法・規則・慣行・慣習の修正と廃止を措置する(第二条)。

あらゆる分野での女性の発展と向上を保証する措置を講じる(立法を含む)(第三条)。

## 平等促進のための暫定措置は差別と認めないが、平等実現後は解消する。

母性保護のための特別措置は差別ではない(第四条)。

## 社会通念

男性優位の観念、性別役割分業に基づく偏見・習慣を打破する。

子どもの利益を最優先し、社会的機能として母性を位置づけ、子どもの養育は男女共通の責任とする(第五条)。

## 人身売買・買春

撲滅のために立法を含むあらゆる措置を講ずる(第六条)。

## 公的進出

参政権および被参政権の

確立、国および地方段階でのあらゆる意思決定機関・職業への参加、国の公的活動に関係する非政府機関や団体への参加面での差別撤廃(第七条)。

国際的な代表に女性を。国際組織活動参加の機会を保証(第八条)。

## 国籍

国籍の取得・変更に女性も同等の権利を持つ。無国籍者を出さないこと。子の国籍については父母平等血統主義をとる(第九条)。

## 教育

すべての教育分野であらゆる差別を撤廃する。進路指導・勉学の機会・修了証書の取得は、学校教育・職業教育を問わず保証される。同一の

教育過程、同一の試験、同水準の教職員の配置。性別役割分業観念を排除するよう、共学をすすめる、教科書・カリキュラム・教授方法を変革する。奨学金も平等に。生涯教育の機会均等、文盲教育および中退者・若年離学者の教育の促進。体育への平等な参加。家族計画教育の実施（第十条）。

**雇用** 労働権の確保、雇用の機会均等、職業選択の自由、昇進・職業訓練・雇用保障の平等、同一労働同一賃金、同一価値の労働に対する平等な評価、退職・失業・疾病・虚弱・老齢で労働不能の場合の権利と有給休暇の保障、安全と出産機能を守る労働条件。妊娠・出産・結婚を理由とする解雇の禁止（処罰）。妊娠・出産時の社会保障とその制度化。妊娠中の女性の危険有害業務からの保護。保育所の拡大充実（十一条）。

**医療** 家族計画を含む医療・保健サービス。妊娠・産前・産後の医療サービスの確保（十二条）。

ローン・レジャー

銀行ローン・月

賦等の権利、家族手当を受ける権利、スポーツ・レクリエーションに参加する権利の保証（十三条）。

**農村女性** 農村女性、特に無報酬女性の役割を評価し、農村開発の担い手としての平等の権利を保証する。開発計画の立案・実施。家族計画の情報と医療、文盲教育を含むあらゆる教育・訓練を受ける権利、協同組合・地域活動への参加、農業金融や農地改革計画における平等な待遇。衛生的で便利な生活条件の確立（十四条）。

**法** 法的平等、法的能力・財産管理能力・契約権を保証し、その制限を図るいかなる文書も無効とする。住居・住所の選択の自由権（十五条）。

**婚姻** 婚姻の成立、配偶者の選択、婚姻中及び離婚に際しての同一の権利。子に対する同一の権利。子の数・出産間隔の決定権、親権者となる権利。姓および職業の選択権、財産に対する同等の権利。婚姻の最任年齢と登録の立法化（十六条）。

委員会

実施状況検討のために締約

国代表から構成される「女性差別撤廃委員会」を設ける。委員数は発効時一八名、批准国が三五か国を超えれば二三名、任期は四年。締約国は四年ごとに報告書を委員会に提出、委員会はこれを「婦人の地位委員会」に送付する（十七・二十二条）。

**国内法との関係** 条約でうたわれている権利を実現するための措置を講じる。条約を上回る条件の国内法には影響しない（二十三・四条）。

**署名・批准・発効・改正** どの国でも署名・批准・加入できる。改正は事務総長あて文書で要請、国連総会で検討する。発効は、二十番目の批准書または加入書寄託後三十日目。加入時の留保は各国に通報される。解釈および運用につき二か国以上の国で異議がある場合は調停し、同意できない場合は国際司法裁判所に委託する（二十五・三十条）。



## インタビューー 女性差別撤廃条約批准の見通しは

国内的ならびに国際的世論に押されて女性差別撤廃条約に署名した日本政府は、はたして批准するつもりがあるのだろうか。そして本当に男女平等をすすめようと考えているのだろうか。

この条約に関係が深いと言われる各省の担当官と、国際法学者宮崎繁樹さんにインタビューして、その見通しを調べてみた。

(ききて・まとも・三沢ゆう子)



明治大学教授  
宮崎繁樹さん

はじめに登場していただくのは、国際法、特に人権問題が専門の宮崎さん。  
たいへん積極的に、インタビューにに応じてくださった。  
(九月一六日)

### 条約とは

国際条約などと言いますと、私たちの生活とは縁遠いような感じがしますが、そもそも「条約」とはどういうものなんでしょうか。

宮崎 条約とは国家間の約束で、国際社

会のきまりを定めたものです。私どもは日本という国の中で生きていますが、同時に地球の上で人類の一員として生きています。国内では法律でものごとが決められますが、生活が国の範囲を超えて広がる場合には国家を超えたきまりが必要になります。そのきまりの一種として条

約があるわけです。条約が発効すれば、国内の法律もそれに従って決めなければなりません。

「採択」「署名」「批准」ということばの意味を簡単にご説明いただけますか。  
宮崎 条約の内容をまず「採択」によって決め、それを確認するのが「署名」です。正式に条約の仲間に入る約束が「批准」です。一定数の国々が批准すると条約は発効します。

### 日本の姿勢は

日本は採択に賛成しながら署名しないのではないかと言われましたが、採択・署名・批准の関係はどうなんでしょうか。

宮崎 純法律的に言えば、採択に賛成しても、署名しなければならぬという義務はありません。署名したからといって、批准しなければならぬという義務もありません。しかし、道義的に言いますと、採択に賛成することは条約の内容に異存がないということですし、署名は将来批准することを前提にするものですから、署名しながらいつまでも批准しなければ「どうして批准しないのか」と外から圧力がかかることになります。

—— 署名をしぶるということは、批准したくない意思のあらわれでしょうか。  
宮崎 そう考えていいと思います。今度どうか署名したのは国内および国際的世論の結果であって、批准についても同様に世論の力が期待されます。

—— 署名のときに留保<sup>2)</sup>しなかったと  
いって喜んだ人もあるのですが……。

宮崎 署名のとき留保しなくても、批准のときに留保することもあります。

—— 喜ぶのは早いわけですか。

宮崎 そうですね。

—— 日本は条約の批准については慎重だと言われますが……。

宮崎 かつては条約の内容が百パーセント実行できなければ批准しないと言われていましたが、国際人權規約のころからある程度実行の見通しがつけば批准に踏み切るようになってきています。

—— そうやって早く批准するほうがいいんでしょうか。

宮崎 見通しができた段階で批准することは好ましいと言えるでしょう。

#### 条約の基本精神は

—— この条約は常識からはずれている  
と言う人もあるようですが……。

宮崎 私はそうは思いません。国際的な考え方から言えば、自然な方向を示していると思います。日本の社会通念からい  
えば、進み過ぎているという印象をもつ人もあるかと思いますが。

—— 法的に不備だと聞いたこともあり  
ますが……。

宮崎 国際人權規約についてもそういう  
批判をする人がありましたが、法律は常識を条文化したものですから、形式よりも内容を考えるべきです。

—— 形式には不備なところがあるんで

すか。

宮崎 もう少し明確な表現にしたほうがいいところもありますし、前文が冗長だということもあるかと思いますが、法律も条約も人間のためのものですから、内容が真理に合致しているかどうかが大  
事なわけです。

—— 今まで法律では考えられなかった  
ような部分を含んでいることが批判の対  
象になっているのではないかと思います  
が……。

宮崎 そうですね。社会通念にまで踏み  
こんでいますから。これは今までにな  
ったことで、批判する人もありますが、  
私は進んだものだと思います。

—— そこまでやらなければ差別はな  
く  
せませんか。

宮崎 とにかく差別をなくすという結果  
が義務づけられているのですから、一つ  
一つのことはよりもその基本精神をたい  
せつに考えるべきです。

—— そのために「すべての適当な措置」  
をとるよにということがくり返し言わ  
れていますね。

宮崎 そうですね。法律だけでなく、必

要なあらゆる方法をとるべきであり、どのような方法をとるべきかは各国で実情に基づいて判断しなければいけないわけです。外国の例も参考にはなりますが、日本として積極的に条約の内容を生かす努力が必要です。

日本政府はこれまで人権に関する条約に対しては消極的で、条約によって要求されるものの最少限を実現しようとしてきました。今度の条約ではそうであつてはならない、条約の精神を最大限に生かさなければいけないと思います。

それから私が読んでみて重要だと思ふのは、今度の条約は女性が今の男性と同じ地位になりさえすればいいと言っているのではなくて、女性の人權が守られ、人間らしい生活ができるようにする努力を言っているという点です。特に開発途上国では、男性の状態もよくしていく、男女ともに望ましい状態にする努力が必要ですが、先進国でも、男女ともに人間らしい生活を実現する努力を続ける必要があると思います。

——何が差別かということをはっきりさせなければいけないわけですが、日本

ではどうも行政の中だけで考えようとしているように思いますが……。

宮崎 当然国民の意見が反映されるべきでしょうね。

——国民の意見が反映されるために、私たちはどうしたらいいでしょうか。

宮崎 まず条約の内容をみんながよく知ることです。条約の実施、監視のための組織を恒常的につくっていくことも必要だと思ひます。それから、女性の中にも差別的な意識をもっている方がありますが、それでは政府への要求も弱くなってしまうからです。運動の裾野を広げなければいけませんね。批准促進の運動が意識を変える力にもなると思いますが。

### 批准の障害になるものは

——批准しようとした場合、国内法上どんなことが問題になりますか。

宮崎 条約には、子どもの国籍について、男女に同等の権利を与えるべきだと書かれています。日本の父系血統主義はこれに反するわけです。教育の分野では、家庭科が女子だけ必修になっていることがあります。労働問題についても、現在、

男女差別撤廃の努力も行なわれていますが、賃金以外の差別——女子若年定年制や結婚退職制など——が禁止されていないということがあります。

——その三点はかなり話題になりましたが、ほかには……。

宮崎 日本の憲法には男女平等の規定がありますし、今度の条約に書かれているほとんどの点について国内法で実現されていると言えます。

——父母両系主義にすると二重国籍ができると言つて反対する人がありますね。二重国籍は、世界中が同じ国籍法を持たない限り防げないと思いますが……。

宮崎 そうです。二重国籍がふえるからという反対は意味がありません。それよりも無国籍ということが起こらないようにすべきです。

——文部省は家庭科の女子だけの必修が条約に反しないと言っているようですが……。

宮崎 条文の教育の部分だけでなく、全体をみると、男女の役割についての社会的な意識を変えていくべきだと言っていますね。家庭科の女子のみ必修は男女の

役割についての古い意識のあらわれですから、当然直していかなければならないわけです。

—— 批准の見込みについてどうごらんになりますか。

宮崎 国内世論のたかまりと関係しますが、このまま放って置きますと、やはり十年かかるでしょう。一、二年では批准しそもありませんね。国籍法については、法務省も研究員を外国に派遣するなど積極的に検討を始めていますから、割合に早く解決できると思います。

—— あとの二点は時間がかかりそうですか。

宮崎 社会通念がどう変わっていくかによりますね。たとえば、育児は女の天職だという考え方はまだかなり根深いと思います。

—— 社会通念の遅れは、直接には批准できない理由にはなりませんね。

宮崎 ええ。ですが批准への圧力を弱めることになります。家庭科の問題についても、文部省の役人の発想を変えることが必要ですが、社会全体の意識がたかまれば、文部省だけががんばれるものでは

ないと思います。

—— 家庭科については、国籍法の問題よりも世論はたかまっていると思いますけれど……。

宮崎 それはそうですね。

—— 労働のほうの見通しはいかがでしょう。

宮崎 七五年以来少しずつは改善の努力がなされていますが、どこまでいくかが問題だと思っています。

—— 保育所をもうふやさないという逆の方針も出てきていますが……。

宮崎 保育所のことは条約にも書かれていて、重要なことなんですけれどね。

### 批准の見通しは

—— そうすると、見通しはやっぱ暗いでしょうか。

宮崎 日本政府は外からの圧力で重い腰を上げることがあります。国連加盟国一五三のうち、批准する国が五〇を超えるということになれば、日本も批准せざるを得なくなると思います。国際人権規約のときは、日本は六〇番目ぐらいに批准しています。

—— 批准しない間でも、男女平等をすめなくていいということはありませんね。

宮崎 もちろんです。一九六七年に差別撤廃宣言ができていますし、一九七五年にはメキシコ宣言や世界行動計画ができていますから、法的な義務はなくても、国内法や慣習などを世界的な流れに合わせるかなければなりません。

—— でも、やっぱり条約の批准はしたほうがいいわけですね。

宮崎 もちろん、批准して、義務をはつきりさせるべきです。

1) 女性差別撤廃条約は、二〇か国が批准すると効力を生ずることになっている（第二七条1）。

2) 留保の手続きをすれば、条約の内容の一部については従わないでもよい。高橋代表は留保条項については何も書かずに署名を行なっている。日本は条約を完全を守る意思があるのだと言って喜んだ人もあった。

3) 法制上は日本は男女平等になっているという人は多い。比較の上ではそうかもしれない。しかし、こまかく見ていくとまだまだ問題はありそう。各省のところを見て

いただきたい。ここに挙げられた三点についても、詳しいことは労働、法務、文部各省のところを、保育所に関しては厚生省のところを見ていただきたい。

◇ 何よりも基本精神が大事。とにかく差



## 労働省 婦人少年局長 高橋 久子さん

各省の第一陣は労働省。婦人少年局長は長いこと婦人問題を担当する唯一の行政機関だった。今は総理府に婦人問題担当室もできているが、実際の行政の中心はやはりここ。高橋さんは婦人問題行政の中心人物と言っている。雇用問題はまた、条約の批准に関する三大問題のひとつ。その意味でも、労働省の姿勢は重要だ。  
(九月三日)

### 署名に至るまで

「差別撤廃条約」の署名までには、皆さまのご苦勞も多かったと思いますが、その辺のお話から……

高橋 長い間かかってできた条約ですから、私たち女性も条約のひとつひとつの字句をどうだこうだというよりも、性差別を撤廃するという全体の考え方を受け

別をなくすことが必要なのだ。しろうとだからといっても、ものを言うのに少しも遠慮する必要はないのだと思いがら、宮崎さんのお宅を辞した。

とめて、日本の中で改善の努力をする必要だと思えますね。

署名するかしないか、だいぶ問題になっていたようですが……

高橋 新聞に「署名しないことが決まった」と書かれたときは、まだ態度が決まっていなかったんです。どう解釈したらいいかわからないところもあるし、署名にともなつて各省はどういうことをすれ

ばいいのか話合っている段階でした。署名しては困ると言ったところはないし、だめだということにはなっていないから、喜んですけどね。

——あの時期に決まっていなかったとすれば、ずいぶん遅いように思いますが。

高橋 あれからすぐに決まる可能性もあったわけですけどね。

——国連総会で採択された直後の報告会で、外務省国連局長は「来年の国会に出したい」とおっしゃいましたが、その後何か情勢の変化があつて、政府の姿勢が消極的になったのでしょうか。

高橋 外務省の姿勢が変わったかどうかよくわかりませんが……、法律的につめていくと解釈がはっきりしない点があるので、そのまま署名に踏み切ることには各省の中で不安があつたと思います。

けれども、この条約の目的はわれわれのめざすものと一致するのだからということで、企画推進本部では批准に向けて努力をしようと思ひ確認をして、署名を決めたわけです。解釈が決まれば、国内法が条約にふれるとわかつたら、それを改正することも含めてですね。

—— 労働省の中にも不安はあったんですか。

高橋 不安ということばで言っているのかどうかわかりませんが……、今までの例で言うと、「人権規約」の場合でも解釈を明らかにしてから署名をしていますので、それと同じやり方でいいという考え方もありました。

—— 署名することが決まったときは、労働省内でも完全に意思統一ができたわけですね。

高橋 ええ、完全にできました。企画推進本部で批准に向けて努力しようという申し合わせをしたとき、労働省の次官は真っ先に賛成しました。<sup>1)</sup>

### 批准へ向けて研究態勢

—— いつごろまでに批准するのですか。

高橋 後半期の重点課題になっていますから……、解釈が決まれば……。<sup>2)</sup>

—— 解釈を決めるために、具体的にどういうことをなさるのですか。

高橋 条約の解釈の最終的権限は外務省にあります。その条約の審議過程とか同種の条約などを参考にして、関係各省と

話し合いながら決めます。だから労働省も研究をしていかなければいけないんです。

—— 研究の態勢はできているんですか。

高橋 各省が月に一度ぐらい連絡会を持つということになっています。事務レベルの会議で、メンバーはまだきまっています。<sup>3)</sup> 労働省の中ではまず婦人労働課で研究をしてもらっています、その結果を労働省全体で検討しなければならぬわけです。これだけ広い条約ですから、かなり抜本的に問題を洗わなければいけないと思います。

—— 月に一回の会合で解釈をまとめていくのでは、かなり時間がかかると思いますが……。

高橋 早く批准するに越したことはないのですが、ピッチを上げてほしいと思うんですけれど……。各省が集まるのは月一回でも、それぞれの省ではびっしり作業はやるわけですから……。

—— 解釈が決まって法改正や新立法が必要だということになったとしたら、新しい法律ができてからでないと批准はできないんですか。

高橋 見通しがつけばいいんじゃないかと思うんですけど……。ただ、日本政府は批准ということをシビアに考えていますから……。

### 労働省は雇用の平等が中心

—— 批准のための努力として、労働省では具体的にどんなことをお考えになりますか。

高橋 男女の平等を雇用の場で確保することが必要だと思うんです。そのための有効な手段を考えていかなければなりません。条約が法律で規定することを求めているとすれば、平等法をつくることも含めて努力していきます。<sup>4)</sup>

—— 平等法が条約によって求められているかどうかということもまだはつきりしないんですか。

高橋 解釈としてはね。条約の批准と関係ないとしても、私は平等法は必要だと思います。平等法をつくるためのコンセンサスを得る努力は、一番たいへんなことだけれど、一番やらなければいけないことではないでしょうか。

—— どういうところでコンセンサスが

得られていないとお考えですか。

高橋 平等の趣味がはつきりしないという事です。男性と女性とは質的に違うものですから、それを同じにしようとするには、どういふかたちをとつたらいのか……。根拠のないところに線を引けば、それ自体差別になりますから。女性でも個人によつて非常に違う状態に置かれていきますから、ある女性には邪魔なことが別の女性には必要だということがあるわけですね。行政としては、女性の能力を埋もれさせないようにすることも大事だし、一番考えなければいけないことは、自分たちは犠牲になつたんだと思う人がないようにすることですね。その点について、法律でどこまで規制できるのかということがとてもむずかしいんです。だけれど、みんなよく話し合い、知恵を出し合つていけば、合意点が見いだせるのではないのでしょうか。私はそう期待してやっています。

——『あこら』22号ではその問題を取り上げました。<sup>5)</sup>

高橋 拝見しました。いい企画だと思います。平等という問題を、単なる観念で

なく、自分の働いている現場から考えるということが必要なんで、そういう企画がどんどんふえていくといいと思いますね。

—— 条約の批准に向けての努力として、平等法をつくるということ以外に何かお考えですか。

高橋 男性と女性との違った取り扱いについて、平等のために現段階では必要なのか、改めるべきなのか、その辺のところをすめていかなければならないと思います。<sup>6)</sup>

—— 労基法三条の問題もありますね。

高橋 条約が法律で規定することを求めているかどうかは今の段階でははっきりしないんですが、それが必要だということになれば努力をしなければならないでしょう。それから、母性保護<sup>7)</sup>をきちんと確保していくことが必要ですね。母性保護は平等と別問題だとは思いません。

平等法の検討の中に、母性保護のことも全部含まれるべきで、一体のものじゃないでしょうか。

—— 平等法の条文の中に母性保護のことも入るんですか。

高橋 ひとつの法律の中に入れるんじゃないくて、別の法律になるかもしれないけれどね。

—— 日本では母性についての経済的保障が遅れていると言われますが、その問題はどうかでしょうか。

高橋 使用者に有給を義務づけると、女性の雇用機会をせばめることになりますね。条約では経済的保障が確保されるべきだということを言っていますが、必ずしも有給ということではないので、社会による保障、たとえば保険によつて支払われるということでもいいわけです。<sup>8)</sup>それだと労働省の問題ではなくなりますが、厚生省も企画推進本部のメンバーですから、検討する義務を負っているわけです。

#### 専門家会議を中心に

##### 平等を検討

—— 平等法については、条約の解釈にかかわりなくおすすめるのだと思いますが、今どんな段階ですか。

高橋 男女平等問題専門家会議をきのうも開きましたが、平等の具体的な姿につ

いてご検討をいただいています。労使それぞれからヒアリングをやりまして、今度实地視察もします。本当に女の人たちの働いている現場を見て、経営者からも労働者からも意見を聞きます。そういうことを積み重ねた上で、平等の具体的な姿を明らかにしようということなんです。今の段階では、そういう地道な努力をしないといけないと思います。

—— 専門家会議は毎月定期的に開かれているわけではないと聞いていますが、どんな状態ですか。

高橋 大体毎月一回開かれています。休んだのは八月だけでしょう。

—— 現地視察は、どんなところをご覧になりますか。

高橋 大体東京周辺で、スーパーマーケット、ホテル、衣料の卸し、製薬、電機、運輸会社などです。<sup>9)</sup>

#### 条約批准には

##### 意識変革が先決

—— 条約批准への努力に際して、民間ですべきこと、できることが何かあるでしょうか。

高橋 民間の動きについて具体的にどう

こう言うべきではないと思いますが……、意識を変えることです。法律をつくることも大事ですが、法律だけでは現状は変わりません。<sup>10)</sup> 職場での差別も、固定的な役割分担意識と関係しています。大卒男子の採用は今年は改善されたのに、女子のほうはだめなんです。なぜ女子を採用しないかという、早くやめるからなんです。なぜ早くやめるかというと、結婚してからは夫の仕事を阻害しない程度に仕事をすべきだという役割分担の考え方からですね。パートタイマーなどの縁辺労働力になっている女性が多いのも、家庭責任のためにフルタイムで働きたくないという人が多いからです。<sup>11)</sup> そうしたことの反映で、男女の賃金だつて大きく開きができます。だから、職場の平等をやろうとすれば、役割分担意識を根本から変えていかなければならないんです。ところが、女の人の中でもなかなか意見が一致しないし、まして男性はね。<sup>12)</sup> そういうみんなの意識を変えるための啓発——意識革命と言ったら大げさかしら——価値観を変えていかなければ

いけません。

—— そのためには、お役所の活動にも期待したいところですが……。

高橋 私どももいろいろな機会にやっていきたいと思っています。資料をついたり、会議をしたり、話しに行ったりします。私たちがつくったリーフレットなどが行きわたらない層に働きかけるために、少しオーバーワークになると思っても、新聞などにも一生懸命原稿を書いています。ほかに何かいい方法があれば、ほんとうに教えていただきたいんですけれど。

—— 情報活動をやっている草の根グループの援助も考えていただけるといいんですが。<sup>13)</sup> 草の根グループの援助については、行動プログラムにもありますね。資金とか人的援助だけでなく、資料として利用してくださるとか、広く紹介してくださるとか、サポートしていただけると大変助かりますが。

高橋 いろいろなかたちでご協力できればと思っています。私自身も「あごろ」は創刊号以来の読者です。

—— 条約の中には保育施設の拡充も入

っていますが、日本では保育所も老人ホームももうふやさないで、利用者の負担をふやそうとしていますね。これはことばでそう言わなくても「家庭に帰れ」ということで、役割分担の強化になります。<sup>14)</sup>

直接労働省の問題ではありませんが、雇用上の平等と密接な関係がありますから、労働省としてもはっきりした主張をしていただきたいと思っています。

高橋 労働省としては、どんなに抵抗があっても、雇用の平等については声を大にして主張していきます。<sup>15)</sup>

—— 男性や経営者に対する啓蒙も必要だと思いますが……。

高橋 そのへんもやっているんですけれどもね。イギリスの募集広告のチェックリストを経営者に見せて、男女を指定して募集してはいけないのだという、経営者は「これは大変だ」というんですね。<sup>16)</sup> だけれど、そこで出てくるのがやっぱり保護の問題なんです。

—— 一般企業では、保護のことは直接問題にならない部門が多いんじゃないでしょうか。保護を持ち出すのは口実のような感じがしますが……。

高橋 一日二時間を超える残業を一切やらないという企業はないでしょう。

#### 男女とも

#### 労働時間短縮の方向で

—— 男性の条件を何とかしようという発想は、経営者にはないわけですね。

高橋 全体の条件を上げることは、何とかやっていきたいと思っています。

—— その見通しはいかがですか。

高橋 努力次第だと思います。労働省は労働時間短縮という方向で行政指導をやっています。現在のところは、審議会の建議が「行政指導で」ということなので、

—— 法律の改正によって男性の条件を改善する見通しは立たないでしょうか。

高橋 今のところ見通しはあるともないともいえませんが、それができるような条件づくりをしていかなければいけないということははっきりしていますね。審議会から法律を改正すべきだという答申が出てくれば、労働省はそれを受けてやることになります。

—— 答申は事務局のリードのしかたひとつで……。

高橋 皆さんそんなことをおっしゃるけれど、それは審議会を軽視した言い方です。<sup>17)</sup> 事務局がやれる幅は小さいものです。少なくとも、労働省の労・使・公益三者構成の審議会は「かくれみの」なんかじゃありません。ある程度リードすることがあるとすれば、情報を提供することぐらいです。

—— 情報提供がずいぶん重要な場合もありますから、よろしくお願いします。

1) 婦人問題企画推進本部は内閣総理大臣を本部長として、各省次官で構成される。したがってメンバーの中に女はいない。事務局である総理府婦人問題担当室はほとんど女だが、このときの申し合わせは、次のようなごく簡単なもの。

「第34回国連総会において採択された「婦人に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」については、国内行動計画後半期における重点課題として、批准のため、国内法制度諸条件の整理に努めるものとする」

2) 「いつ」などという具体的な話になると、お役人の口からはなかなかはっきりしたことは出てこない。

3) メンバーは九月なかばに決まった。

4) 条約では、「雇用の分野における婦人に対する差別を撤廃するためのすべての適当な措置をとる」(第十一一条1)こと、雇用機会(b)・職業選択・昇進・訓練(c)・報酬(d)、その他あらゆる条件について男女同一の権利を確保すべきことが決められている。

「こういう法律をつくらなければいけない」と書いてあるわけではなく、差別をなくすための日本での「適当な措置」は何かということを考えていかなければならないのだ。日本では、雇用の分野で性差別がはっきり禁止されているのは賃金(労働基準法第四条)だけ。労基法第三条では、国籍、信条、社会的身分を理由とする労働条件についての差別を禁止しているが、ここには、「性」ということは入っていない。したがって、労基法第三条に「性別」ということばを入れるとともに、新しく「男女雇用平等法」をつくって、雇用におけるあらゆる性差別を禁止すべきだという声が強

5) 「あごら」22号の特集テーマは「男女平等と母性保障」。労働現場からの声を多く取り上げ、意見の違う人びとの接点を求めようとした。

6) 高橋さんは今でも、婦人労働課長時代に発表された労働基準法研究会報告と同じ考え方のように思われる。

7) ここでいう「母性保護」は、直接妊娠出産にかかわるせまい意味の「母性保護」だ。

8) 条約第十一一条は雇用についての規定だが、十一一条の2は母性に関することを決めている。母性休暇を理由とする解雇、婚姻しているか否かに基づく差別的解雇を禁止し(a)、給料または社会的給付を伴う母性休暇の導入(b)を求めている。このことについては厚生省のところでも触れる。

9) 一番問題が多いといわれる繊維や食品の現場は対象になっていない。ゼンセン同盟所属の多田委員にがんばってもらわなければ。

10) この言い方は正論だが、お役所の責任逃れに使われることもある。

11) 経営側がそうした意識を積極的に利用していることも見逃せない。

12) 「まして男性はね」ということばには実感がこもる。婦人少年局は例外として、役所も男の世界。その中で平等のための施策をすすめる苦勞はたいへんなものだろう。

13) 草の根グループについて、条約では触れていないが、行動プログラムには「援助す

べきだ」ということが書かれている。

14) 自由民主党が発表した「家庭基盤の充実に関する対策要綱」では、年取った親や子どもをみるのは各家庭の責任だという考え方がはつきり示されているし、同じ考え方は新経済社会七か年計画等の、国の施策にもあらわれている。そのうえで多くの自治体は、財政難を理由に、施設をふやさない方針を打ち出してきた。こうした方向は、条約の言う「すべての人間の奪い得ない権利としての労働の権利」(第十一一条1(a))を否定することにつながる。

15) ここで、「老人ホームや保育所をふやせ」と言います」というのはつきりした答は得られなかった。

保育所の問題は厚生省のところで触れる。

16) 先進諸国で募集・採用の男女差別が禁止されていることは、日本ではあまり知られていない。広く知らせる努力がもっと必要だ。

17) ここで高橋さんの声は一だんと大きくなった。「審議会はかくれみのだ」と言う人がそれだけ多いのだろう。

労働省の審議会や委員会は、労働者代表、使用者代表、公益代表の三者で構成されることが多く、役所にとって都合のよいメン

バーだけ揃っているとは言えない。他の省とは多少違うことは認めてよいのかもしれない。

◇

労働基準法を改正するのかどうか、いつどんな平等法をつくるのかという具体的な点になると、はっきりした答は得ら

れなかった。

平等についての合意点を見いだす努力、母性を守るための努力、意識を変革するための努力、全体的に労働条件を改正するための努力については、高橋さんは力をこめて語った。このことがことばだけに終わらないように期待している。

#### 法務省民事第五課長

#### 田中康彦さん

お役所二番手は法務省。日本の法制のなかで一番はつきり条約にふれると言われるのが国籍法だが、国籍法はこの民事第五課の担当だ。

田中さんは、このことについてはもう十分考えているという様子で、積極的に語ってくださいました。

(九月二〇日)



#### 子の国籍については改正が必要

——日本が条約に署名するかしないかということがだいぶ話題になりましたが、法務省としては署名しないほうがいいというお考えだったのでしょうか。

田中 そうですね。まだ条約の内容についての検討が十分できていませんでしたから、解釈がきまってから署名すべきだ

という意見でした。これまでわが国では条約の署名をするに際しては、解釈を

つめてからにしていきましたので、違った扱いをして、あとあと問題が起こってこないかと心配しています。

——最終的には署名に賛成なさったわけですね。

田中 反対はしませんでした。外務省と総理府がたいへん積極的でしたので。

——外務省と総理府はどうして積極的だったのでしょうか。

田中 それは外務省や総理府に聞いていただきたいと思いますが……。各国が署名するのに日本だけが残ってしまっただけという配慮でしょうか。「婦人の十年」との関連もあったでしょう。

——採択してから半年以上あっても、検討は間に合わなかったのでしょうか。

田中 時間は足りませんでした。

——そうしますと、これから先は検討にどのくらいかかるのでしょうか。

田中 二、三年ではむりでしょう。署名に賛成するとき、検討に四、五年かけてよければという条件をつけました。

——どういうところが問題なんですか。

田中 わが国の法律が条約に抵触するのかどうか、条文を見ただけではわからないのです。外務省にきいてもはっきりしない。審議中に急に表現が変わったりしましたから。

——どんなふうに変ったのですか。

田中 たとえば、第九条の2ですが、「子の国籍の承継について」ということが「子の国籍に関して」と変わったわけです。

「關して」ということばは法律的にはよくわからない……。

——それはより幅広く考えようということではないんですか。

田中 生地主義<sup>1)</sup>の国では承継ということとは起こらないので、表現を変えたようです。

——条約は、とにかく男女差別をなくすということを要求しているのではないかと思います。法務省としても、差別はなくすべきだとお考えでしょう？

田中 もちろん差別はなくすべきですが、子の国籍の問題を男女差別の問題として考えるべきかどうか、問題のあるところですよ。

——子どもに自分と同じ国籍を与えないと思うとき、女が男と同じ権利を持っていないのですから、当然男女差別ではありませんか。

田中 親が子どもに国籍を承継させる権利があるのかどうか、そういう権利があるとするれば、生地主義というものは許されないでしょう。子の国籍は子どもの福祉のためというのを第一に考えて<sup>2)</sup>決めるべきで、親の権利の側から考えるべ

きではないと思います。

——法的な権利とは言えないのかもしれませんが、実質的には権利ではないでしょうか。そう考えられるから、最近男女平等になるような改正をした国があるのではありませんか。

田中 男女平等だけを目的とした改正かどうかわかりませんね。国民をふやしたいというようなほかの国策的要素が強いのではないのでしょうか。各国の改正の理由を研究しなければと思っています。父系血統主義をとりながら、それを差別だ意識していない国もありますし。日本でこれまで父系血統主義をとっていたのも、男女同権とは別の次元のことで、二重国籍を防ぐ方法だったわけですよ。多くの国が父系血統主義をとっていました<sup>3)</sup>から、それと同じにしたほうがよかったのです。母系血統主義をとる国が多ければ、わが国もそうしていたかもしれません。

——今までも二重国籍はあったのでは

ありませんか。

田中 ありましたが、なるべく二重国籍の発生を防ぐようにしてきました。生地主義の国で生まれた子どもについての留

保の制度<sup>4)</sup>も、留保の手続きをとらなければ日本国籍を失うというかたちで、二重国籍を少なくしようとしたものです。

最近外国では未成年者の重国籍はかまわないという考え方が強まってきていますので、わが国でも検討しなければいけないと思っています。しかし成年になって国籍をひとつにするにはどうしたらいいか問題ですね。国によっては、兵役義務との関係などから国籍離脱をなかなか認めないこともあります。そうすると重国籍の解消はしにくい。日本国内にいないが外国の兵役義務が課せられる例が今までとはけた違いに多くなつて、外交上新しい問題が出てくるかもしれません。法改正をすると、計算上、年間一万人程度の重国籍者が出てくる可能性があります。わが国内のわが国と他国との重国籍者が十万人のけたになるといふことは今まで考えられなかった事態で、国内法制上の検討も必要になるでしょう。日本人であっても、他国籍を持つ人は違った扱いをすべきかどうか、資格の制限が必要になるのかどうか等についてです。

——他国籍を持つことをそんなに問題

にしなければいけないのでしょうか。

田中 日本は単一民族であるという意識が国民の中に強いですから、それへの配慮は無視できないでしょう。それに、近隣に紛争のある国が残っていますから、重国籍によって混乱にまきこまれる心配があります。

—— 重国籍より無国籍のほうが問題ではありませんか。

田中 法をどう改正しても、無国籍は起こり得ます。生地主義の国の人が日本で子どもを産めば、その子は無国籍になりますが、それを日本で救済する必要があります。しかし今までに生じている無国籍<sup>5)</sup>の人については救済の努力はしなければならないと思っています。差別撤廃条約とは別に、このことは問題です。

—— 法務省として法改正の検討はしていらっしやるわけですね。

田中 検討はしていますが、法務省だけで考えられることはありません。子の国籍をどうするかによって何十年か先の国民の範囲が決まるのですから、高い政治的次元で総合的にみななければなりません。

ん。重国籍の場合についても、教育の問題はどうなるのか、資格制限はしなければならぬか、ということもありますし、各省で検討しなければなりません。戸籍法、民法、法例<sup>6)</sup>の改正もしなければならぬかどうかの検討が必要でし、各省の法律のなかでもいろいろ問題が起こるのではないかと思います。

—— 改正の方向はある程度出ているのでしょうか。

田中 父母両系の血統主義をとることにするかどうかを検討することになると思います。

#### 帰化条件については

##### 慎重に検討

—— 日本人と結婚する外国人の国籍<sup>7)</sup>についてはどうお考えでしょうか。

田中 その点についても、改正の検討はしています。しかしやはり慎重<sup>8)</sup>でないとけません。犯罪者が日本国民になることなどがなく、早まって帰化させることがないようにしなければなりません。入国してから三年という現在の五条の線はいじれないかもしれませんね。フラン

スは一年で国籍がとれるようにして、その代わり帰化の取り消しということもやっています。このやり方は身分が不安定になるので問題です。結局、男女平等にしろというなら、日本人の妻になる外国人に対して制限を強めることになるでしょうね。そうすると、外交官、商社マンの妻に影響がでてきます。

—— 国籍法が改正されても、入国管理のほうに差別があると、国籍についても実質的な差別が出てくる<sup>9)</sup>、と思います。その点はいかがでしょうか。

田中 入管の問題はこちらの担当ではないのですが、入管局は婦人差別撤廃条約の関係では何も言っていないから、問題になっていないのでしょうか。

—— 法務省の中で、ほかに問題になっている点はありませんか。

田中 新聞に出ていないところを見ると、特にないのでしょう。

#### 国民の意見を

##### どうやってきくか

—— 夫婦の氏<sup>10)</sup>の問題はいかがですか。今の規定は形式的には平等だけれど、実

際には妻が夫の氏を名のらなければならぬ場合が多いので改正をすべきだ、夫婦別氏を認めるべきだという意見があることはご存じだと思いますが……。

田中 こちらの担当ではありませんが……。

民法は国民感情によって決まるものですから、別氏を望む人が多くなれば、変えることの検討もされと思います。国民感情がそこまでいつているかどうかが問題ですね。外国とは情況が違いますから。

しかし氏の問題も、夫婦の氏の問題を含めて、国籍法との関連で検討しなければならぬと思います。民法と国籍法の整合性を考えなければなりませんから。

—— 法務省の中では話し合ひはしていらつしやらないのですか。

田中 条約に関連しての話し合ひは、いづれ省内でも行なわれるでしょうが、今まではやっていません。今後も外務省を中心として話し合ひをすることになるでしょう。

—— 各省の話し合ひはすすんでいるのですか。

田中 今週一回あります。

法務省を代表して出席なさる方は

決まっているのですか。

田中 国籍法が一番問題なので、民事五課で担当することになっています。民法が問題になるときは、民事局の参事官室の担当になるでしょう。

—— 条約に抵触するかどうかということとは純法律的にお考えになるのですか。条約の精神はとにかく差別をなくせということだと思ひますが、何が差別かということ幅広くお考えにはならないのですか。

田中 いろいろな分野での差別がありますが、すべてが条約違反そのものというわけではないでしょう。批准のときにもすべてが問題になるわけではないし、条約で規定されている委員会<sup>1)</sup>によつても問題にはされないでしょう。条約自体の守備範囲にしばつて考えざるを得ないと思ひます。

—— 何が差別かということについて、国民の意見はお聞きにならないのですか。

田中 全体的なことについては総理府に聞いていただきたいと思ひますが、国籍法の改正については、国民の意見を聞かなければいけないと思ひています。各界

の人のいろいろな意見を聞きたいと思ひます。どういふかたちで聞くか、手続きが問題ですが……。

—— 手続きはまだ決めていらつしやらないのですか。

田中 具体的には決まっています。法制審議会では検討することになると思ひますが、それをどういふかたちでするかさらに別の機関が必要か、まだ決まりません。この課だけでなく、省全体の問題になります。

—— そうすると、条約はいつごろ批准できるでしょう。

田中 条約をいつ批准できるかは、他の省庁の關係がありますから、当省ではわかりませんが、国籍法の改正には四、五年かかると思ひています。

1) 親の国籍にかかわらず、国内で生まれた子どもに国籍を与えるのが生地主義。これに対して生まれた土地にかかわらず、親と同じ国籍を与えるのが血統主義。「承継」は繼承と同じ意味。血統主義には、父系、母系、父母両系の三種類があり得る。

生まれた子が日本国籍を得るための条件は、「出生のとき父が日本国民」「出生前に死亡した父が死亡時に日本国民」「父が知れ

ない場合、または無国籍の場合には母が日本国民」のとき（国籍法第二条）で、はっきりした父系血統主義だ。しかし日本で生まれた父母の知れない子や父母が無国籍の子には日本国籍を与えるので、生地主義の要素もないわけではない。

条約では「婦人に対し、子の国籍に関し男子と同等の権利を与える（第九条一）」としており、日本の国籍法は明らかにこれに反する。

2) 「子の国籍は子ども自身のためのもの」という考え方はもっともだ。しかしこの場合「男女平等の問題として考えたくない」という意図が先行しているようだ。実際にはある程度親の意思によつて（自分の国籍をどうするか、どこで産むかによつて）子の国籍を決めることができる。親に権利があると考えるほうが普通だろう。条約でも「権利」ということばをはっきり使っている。

3) 多くの国がなぜ父系血統主義をとっていたか？ 重国籍を防ぐために歩調を合わせていたのか？ そうではない。男中心社会だからではないか！

4) この条項（国籍法第九条）はむしろ二重国籍が認められている証拠だと考える人が多い。また「外国の国籍を有する日本国民は、日本国籍を離脱することができる（第十条）」という表現も、離脱しないこと、つ

まり二つの国籍を持つことを認めたものだと考えるのが普通のことだ。

5) 日本の女が生地主義の国の人と結婚して日本で子どもを産めば、その子は無国籍になる。生地主義の国でも多少は血統主義の要素を含んだ法律を持っているのが普通で、父の国籍がとれる場合もあるが、実際にアメリカ人を父とし、日本人を母とする無国籍児は少なくない。特に沖縄では大きな問題になっている。田中さんはこのことは問題だと認めるのだが、男女平等とは結びつけて考えたくないらしい。

6) 法例とは、法規の適用範囲の原則を定めたもの。明治時代に制定されたものがまだ生きているのだ。「婚姻の効力は夫の本国法による（第十四条）」など、問題とすべき部分がある。

7) 日本人の夫となった外国人が日本国籍をとるためには、引き続き三年以上日本に住んでいることが必要（国籍法第五条）。これに対し、日本人の妻となった外国人は日本にいないくてもすぐに日本国民になれる（第六条一）これは外国人の女を優遇しているようにもみえるが、夫である日本の男を優遇しているのだとみる人が多い。

条約では、国籍の取得、変更、保持についての男女平等（第九条一）を言っているのに、日本の国籍法は明らかにこれに反する。

ほかにも差別が……

このインタビューの中に、条約に触れそうながすがすべて出てきているわけではない。まだ次のような問題がある。

◎条約第十三条（金融上の信用についての権利に関連して）

○お金を借りようとするとき、女だからという理由で貸してくれなかったり、男と違う条件をつけられることがある。法律によつて差別されているわけではないが、差別を禁止する法律もない。

◎条約第十六条（婚姻及び家族関係にかかわる差別的撤廃）に関連して

○結婚できる年齢が男十八歳女十六歳になっている（民法第七百三十一条）。

○女だけ、離婚後六か月しないと再婚できない（民法第七百三十三条）。

差別的な法律は多くないとしても、法律によつて禁止すべき差別はまだ多いからでもあるのではないだろうか。法律によらず、別の方法でなくしていくべき差別はもっと多いに違いない。読者の皆さんもぜひ考えていただきたい。

◀シリーズ・いまを生きる▶

●新刊(10月31日刊) 定価950円

〈4〉  
**女・再就職**

主婦の再就職 ● 桜井陽子 / 主婦の能力と企業が求める能力 ● 藤原房子 / 職安の窓口から ● 森良子 / 再就職・私の場合 / 仕事を探すときの本・あれこれ / ただいま・求職活動中 / 座談会……どうすれば成功するか再就職 / インタヴュー……いまが働くこと ● 中島通子 他



===== 既刊好評発売中 / 各 850円(〒 250円) =====

〈1〉  
**女・31歳**

■ 31歳を考える……女の31歳 ● 秋山さと子 / インタヴュー ● 田辺聖子 ■ 31歳の女たちはいま……桜井陽子・寺崎あきこ ■ 31歳の人たちへ ■ 自分の世界を築く……対談 ● 岸田秀 × 津島佑子 他

〈2〉  
**女・うたう・かたる**

歌と語りの文明 ● 小島信一 / 女がかたること ● 牧瀬菊枝 / いま女たちはうたいたいだす ● 吉岡しげ美 / 座談会……女たちは語る / からだ・ことば・通じあい……対談 ● 竹内敏晴 × 津島佑子 他

〈3〉  
**女・あらわれた性**

■ 「結婚愛」より ■ マリー・ストープスと「結婚愛」 ● 三宅義子 / 女性の生理 ● 丸本百合子 ■ インタヴュー ● 河野多恵子 / 対の可能性 ● 柴田道子 ■ 性・結婚・家族……西江雅之 × 津島佑子 他

東京都文京区本郷2-16-9  
電話 03-815-6549  
振替 / 東京1-086349

**ユック舎** (発売 / 批評社)  
☎03-813-6344

8)「慎重」ということは、「役所語」としてはしばしば「やる気がない」ということを意味するから気をつけない。

田中さんの発言全体のニュアンスとして、帰化条件については、子の国籍の問題についてよりも、改正に消極的のように思われた。

9) 日本人と結婚しても、何年か日本に住まないで日本国籍がとれないようにするのなら、入国・滞在の条件が男女同じでないと、国籍取得の権利にも男女で違いが出てくる。

出入国管理令には夫とか妻ということではなく、法の上では差別はないが運用上差別されている。日本人の妻となった外国人

は、ほとんど無条件に入国滞在が認められている。日本人の夫となった外国人は、一般の外国人と同じ扱いを受け、特別の理由がないと長期滞在が認められない。

条約では、居住、住所の自由についての男女平等(第十五条4)もうたっている。今の入管行政はこれに違反しないだろうか。

10) 条約は、姓の選択の権利の平等にも触れている(第十六条1g)。日本の現状はこれに違反しているという人もある。

11) 条約によって実際にどれだけの進歩がみられるか検討するため、婦人に対する差別の撤廃に関する委員会」が設けられ(条約

第十七条)、各国は委員会に対してどれだけの進歩があったか報告しなければならぬ(第十八条)ことになっている。

◇

国籍法改正の準備はある程度積極的にすすめられているようだ。「いつ」「どういうふう」に改正するか明確な回答はなかったが、「役所語」としてはかなりのつきり言っているほうで、「四、五年で父母両系血統主義に」という線が出ている。

しかし、子の国籍の問題ばかり重要視して、法務省関係ではほかに問題がないように思っているわけではないのではなからうか。

文部省学術国際局ユネスコ国際部  
企画連絡課課長補佐

三村満夫さん



各省のインタビュのうち一番苦労したのが文部省だった。条約関係の文部省の窓口である企画連絡課とは、一番遅れてやっと約束ができたが、話し合うなかでまたひとつもめがあった。この条約については、企画連絡課よりも初等中等教育局職業教育課に聞いてほしい、こちらでは責任を持った回答はできないという話になってしまった。

外務省を中心とした条約についての話し合いにいま出席しているのは職業教育課。条約に関連して文部省で一番問題になっているのは家庭科のことで、家庭科を担当するのは職業教育課だからだ。

そこで職業教育課にもインタビュの申し

入れをしたが、忙しいからという理由で、何度交渉してもだめだった。

きけば、ほかの団体に對しても、ほとんど面会に応じないのだという。担当者としての考え方を国民に知らせたいという姿勢はないらしい。

そういうわけで、ここでは十月から企画連絡課の課長補佐になられた三村満夫さんのインタビュのまとめを、やっと承認を得てご紹介する。インタビュの時間は他の省と比べて長いほうだったが、ご紹介できる部分はこれだけになってしまった。

(十月八日)

やはり家庭科が問題

文部省は条約には署名しないほうが

いいというお考えだったのでしょか。

三村 最終的に署名に踏み切るということ  
とで、各省庁とも意思統一しました。

—— 批准に向けて努力するという申し  
合わせ<sup>1)</sup>をなさったわけですね。教育関  
係の制度の中で条約に触れるものがあれ  
ば、文部省としては改正をなさるわけ  
ですね。

三村 もし触れるものがあるとすればで  
すね。

—— 条約に触れるかどうか検討してい  
らっしゃるのはどんな問題ですか。

三村 カリキュラムに関して、条約の中  
で「同一の教育課程」ということが言わ  
れているので、それがどういう意味なの  
か、高等学校などの実際のカリキュラム  
と照らし合わせながら検討してみたいと  
いうことです。

—— どういう方法で研究なさるのですか。  
三村 たとえば女子の家庭科について、  
世界各国の取り扱いや対応ぶりも参考にな  
るでしょう。<sup>3)</sup>

—— 署名することが決まってから、N  
HKのニュースで「家庭科の女子必修は  
当分のまま」ということを言っていま  
した。日本教育新聞には「家庭科の女子

のみ必修は条約には抵触しない、文部省  
としては対応の必要はない」という職業  
教育課長の談話が載りました。でも「対  
応しない」という方針をお決めになった  
わけではないんですね。

三村 今のところ、条約に反するもので  
はないという解釈は持っています。しか  
し研究する必要があると思います。

—— どうして家庭科の女子のみ必修が  
「同一の教育課程」ということばに反しな  
いという解釈が出てくるんでしょうか。  
常識ではたいへんわかりにくいと思いま  
すが。

三村 「同一の教育課程」ということばを  
どういうふうに解するかということにな  
りますね。高校段階の教育そのものが、  
能力・適性・進路など、生徒の実態に応  
じて多様なかたちをとっています。家庭  
科教育についても、そのような教育的配  
慮が行なわれているのではないでしょ  
うか。そういう配慮を一律に排除するこ  
とを条約が求めているのかどうか疑問だ  
と思います。<sup>4)</sup>

—— 条約案の審議をしている段階で、  
日本が修正案を出しましたね。<sup>5)</sup>「同一の

教育課程」ということばがあると、家庭  
科の女子必修が条約に触れるとお考えに  
なったからではありませんか。

三村 教育に関して、別の似たような条  
約がありまして、それと同じ表現でいい  
のではないかということで、修正提案を  
したのだと思います。

—— その提案が否決<sup>6)</sup>されて、やはり  
「同一」でなければいけないことになりま  
したね。その意味をどうお考えですか。

三村 そのことについてはあまりこまか  
い審議は行なわれなかったと思いますが。

#### 男女の役割をどう考えるか？

—— 男女差別をなくすことについては、  
文部省としても賛成なさいますね。

三村 差別をなくそうという精神には全  
く賛成です。<sup>7)</sup>

—— 条約では、男女の役割を変えるべ  
きだ<sup>8)</sup>と言っていますが、家庭科の女子  
のみ必修や男女別学習が、男女の役割を  
固定化することになるとはお考えになり  
ませんか。

三村 固定化ということではないでしょう。  
男と女があるということは厳然たる事実

で、そのことにもつく一定の教育的配慮まで排除する趣旨を条約は持っているでしようか。

—— 学校でやる家庭科の中で、女だけがやらなければならない内容が考えられるでしようか。男女差をつけるのは、伝統的な役割を教えこむための配慮だということになるのではありませんか。それに、総理府の調査結果<sup>9)</sup>をみても、女だけが家庭科をやるべきだという意見は少数ですね。ほかのいろいろな調査でも同じような結果が出ています。

三村 今の取り扱いを永遠に守るべきだと主張しているわけではありません。ただ条約の解釈としては、今の取り扱いが条約に抵触するとは言えないのではないかと考えているわけです。<sup>10)</sup>

—— 今の制度を改正して批准するの制度を今のままにして置いて批准するのか、最終的に誰がどうやって決めるんでしょうか。

三村 批准は内閣が行いますが、それには国会の承認が必要です。

—— 文部省としての考え方を決めた上で国会にお出しになるのだと思いますが、

条約に触れるか触れないか、どういふうにして判断<sup>11)</sup>が決まるのか、しろうとはたいへんわかりにくいんですが……。

三村 しろうとでなくても、日本の意思決定過程はむずかしいですね。最終的には関係者みんなで、こういうことではないかという線をまとめるのだと思います。いろいろと時間がかかるんじゃないでしようか。

—— どのくらい時間がかかりそうですか。  
三村 婦人問題企画推進本部の申し合わせで、国内行動計画後半期における重点課題として、批准のため国内法制等諸条件の整備に努めるものとされています。<sup>12)</sup>

1) 申し合わせの内容は、労働省の記事中(注1)に紹介したので見ていただきたい。

2) 条約では「同一の教育課程」についての機会を確保すべきだとしている(第十条b)。これに対し、日本では、いまやつと実施に入ろうとしている新しい教育課程でも、高等学校では「家庭一般」四単位が女子のみ必修、中学の「技術・家庭」では男女別に学習領域が指定され、女子は家庭的領域を、男子は技術的領域をたくさん学ばなければならないことになっている。

この点が条約違反になるということは新聞などでも大きく取り上げられた。署名に際しても、文部省はかなり抵抗したと言われている。

3) 世界各国でも、実態としては女子だけが家庭科を学んでいる学校も少なくないが、日本のように国の制度によって女だけに強制されているところはないはずだ。家庭科のほかにも、高校の体育の必修単位が男女で差があることも問題になろう。

4) 日本教育新聞の記事(七月二十八日)によれば、職業教育課長は「条約は男女の特性に応じた教育まで排除するものではないだろう」と言っている。

5) 日本は「同一または同等の基準の教育課程」という表現にするよう提案した。そのとき日本代表が述べた提案理由は三村さんの言うとおりだが、はじめ文部省が示した理由は「特性に応じた教育が必要だ」ということだったと伝えられている。

6) 日本の提案に対して支持は全くなく、日本の提案をきっかけとして、「同等」ということばでは不十分だという意見が出て、別のところにあった「同等」ということばが「同一」に改められるという逆の結果を生んだ。

7) 「精神」には賛成だが、「実行」には消極的だというニュアンスが感じられないだろうか。

8) 条約では、「教育のすべての段階及びあらゆる形態における男女の役割についての定型化された概念の撤廃」(第十条(c))を言っている。

前文や他の部分でも男女の役割を変えるために必要な措置をとるべきだということがくり返し述べられている。これは条約の基本精神のひとつなのだ。

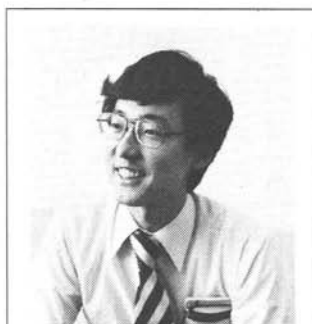
9) 昭和五十四年十月の「婦人に関する意識調査」(総理府)によれば、高校の家庭科は女子だけ必修にすべきだという意見は二四・三%、男女必修が三〇・一%、男女選択が三〇%、男女とも不要が二・五%。

10) 家庭科だけでなく、職業指導・就学前教育・専門教育(第十条(a))、男女共学・教科書・教授法(第十条(b))など、問題は少なくない。これらは直接批准の妨げにはならないが、文部省として積極的に改善の努力が必要だ。しかし、これまでのところ、努力している様子は見えない。

11) 国民の意見をどのようにして聞くのかということを知りたかったのだが、質問を重ねても回答はでてこなかった。

12) 結局、文部省としてどれだけの責任を持つて具体的な努力をすめるか、という話にはならない。この問題について極めて消極的だというほかない。

ほかの省のインタビューからも、文部省



厚生省大臣官房国際課

小田 泰宏さん

厚生省は、生活・社会保障・健康など、女に係の深い問題を扱っているが、条約の署名にあたって特に話題にはならなかった。しかし本当に問題はないのだろうか……。

厚生省での条約についての窓口は国際課。若々しい小田事務官に話をうかがった(九月二十六日)

### 厚生省の基本姿勢

条約に署名するかしないか問題になった時点で、厚生省はどういうご意見だったのでしょうか。

小田 厚生省は署名することに基本的に反対ではないという立場をとりました。婦人に対する差別を撤廃するという理念自体は世界的な趨勢でもありますし、国内的にも当然なことですから。

ほかの省も、結局は署名に賛成し

が何とかして現状を守ろうとしていることがうかがわれた。なぜそれほどまでにがんばるのか、教育という未来に向けての仕事をする文部省がこれでもいいのか、読者の皆さんはどう考えだろうか。

たわけですね。これから批准に向けて努力なさるということですね。

小田 はい。各省庁で意思統一しまして、署名をする、署名後批准に向けて条約と抵触するような国内諸制度の整備に努めていくという合意がなされたわけです。

条約に関連して、厚生省としてはどんなことが問題になるとお考えでしょうか。

小田 一つは、国内制度上、男性と女性と取り扱いを変えているものがあれば、

その扱いが合理的かどうか検討していかなければならないということ、もう一つは、母性保護規定の保護の水準<sup>1)</sup>が諸外国に比べて著しく低い場合、検討していく必要があること、そういう二つの面で問題になろうかと思ひます。

### 生活保護と年金

—— 男女の取り扱いが違っていて、条約に抵触しそうなこととしてどんなことがありますか。

小田 現在までの検討の結果としまして、厚生省の所管制度の中には基本的にはございせん。厚生省では社会保障を担当しておりまして、たとえば、いろいろな給付を行なっていますが、その給付額が必ずしも男女同じでないという場合はあります。しかし、それぞれについては、いずれも制度の本来の性格からくる合理的な理由があります。条約に抵触するかどうか、まだ検討中ではありますが、たとえば法務省の国籍法や文部省の家庭教育の問題のように、はっきりしたかたちで抵触するものではないと考えております。

—— 金額が男女同じでない場合と言いますと……。

小田 生活保護の給付額<sup>2)</sup>が若干男女で違います。このことは昔から指摘されておりますが、科学的な理由はあるわけですから、必要栄養量の計算にもとづいています。ですから、いまの段階では改正するかどうかという検討もすんでいません。

—— 賃金差からくる年金額の男女格差<sup>3)</sup>についてはどうお考えですか。

小田 その点は検討しておりません。それはやはり賃金の問題ですから。これから、年金担当局のほうからそういうことも上がってくるかもしれません……。年金に関しては、厚生年金の支給開始年齢<sup>4)</sup>の男女差の問題もあります。

—— その点についても、改正すべきかどうかは、まだ検討されていないんですか。

小田 問題の指摘をしている段階で、どうすべきかというところまでいっていません。支給開始年齢については、一般に六五歳まで引き上げるべきだという、制度の根本的改正にかかわる意見もあります。

す。これは、単に条約を批准するのに<sup>5)</sup>どうこうするというのではなくて、年金制度の体系全体の問題として検討されております。

### 母性保障と保育所

—— 母性保護の水準が諸外国に比べて低い場合と言いますと……。

小田 例えば国民健康保険の出産手当金という制度がありまして、仮りにこの制度が母性保護条項に該当するとすれば、これは法律上は任意給付、つまり運営主体である市町村は出しても出さなくてもいいという制度になつていまして、実態として、市町村ではほとんど給付していません。

—— 実際にはほとんど出していないんですか。

小田 そうです。出産した場合、その間の所得の喪失を保障する制度がこの出産手当金なんです。国民健康保険の加入者は給与所得者ではありませんから、休んで給料がいくら減ったかというようにはつきりした計算ができません。そういう技術的な制約もありますし、現在市町

村の財政が一般にたいへん苦しくなっているという理由もあって、給付が行なわれていないわけだ。

—— 改正することを検討していらっしやるわけですか。

小田 任意給付でなく強制給付にするためには、国民健康保険法を改正しなければなりません。しかしこれは法律改正を考へる前に、必要性の有無その他技術的制約、財政的制約の観点からみて、慎重に検討する必要がある<sup>6)</sup>と考へられているわけです。

ほかにも、給付水準が低いのではないかと一部の方々から要望のあるものがあります。たとえば児童手当の水準や、分娩費が健康保険で現物支給になつていないことなどです。また、育児休業法では休業期間中給与を支払わなくてよいという規定になつていて、第十一条2項(b)の社会的給付を伴う母性休暇という条項に関連してきます。これは厚生省だけでなく、自治省、文部省にもかかわりのある法律で、それら関係省庁の態度もまだはつきりしていないようです。

—— 保育所を増設しなければならぬ

のではないかとという問題もありますね。

小田 そうですね。条約の第十一条2項の(c)というところでは、保育施設網の設置が女性の労働の権利の確保という観点からなされるべきだという考へ方が打ち出されています<sup>9)</sup>が、日本の児童福祉法によりますと、保育所は保育に欠ける児童を対象として設置すべきものとされています。ただし、この点については実態が先行しておりまして、保育所を整備することによつて結果的に、働く女性の権利の確保に役立っていると考へることができます。

—— 各自治体では保育所はもうこれからはふやさないということが言われているようですが、厚生省としてはふやすべきだという基本的立場をおとりになるわけですね。<sup>10)</sup>

小田 保育所のことは条約の読み方にも関係するわけで、保育所ができていれば条約の要件を満たすという解釈もできるのではないかと考へています。この点は将来批准に向けて政府部内で十分検討されることになると思います。

## 検討の方法

—— 今どういうかたちで検討がすすめられているのですか。

小田 普通ですと、政府部内で「このことばの意味はあまだ、こうだ」という議論をして、それから関連のある国内制度について検討します。今回はことばの意味の検討がまだ始まったばかりです。ですから国内制度の検討と平行してその作業が行なわれることになると思われま

す。ことばの意味については、従来ですと外国のそれまでの運用例を調べたり、ILO条約ですとILOの事務局に照会したりしています。あるいは審議録を参考に、どんな議論がなされたかというところからことばの意味を確定していくといったような作業が行なわれます。ところがこの条約はできたばかりで批准国も少ないし、まだ発効していませんから運用の実態というものがないわけですね。したがって、そういった経験的事実から内容を確定していくことは困難です。条約でどのことばを使うかは、各国の妥協の産物で、条約のなかでもことばの統

一がみられない場合がありますし、特にこの条約のようにトピックスになるものについてはそういう傾向が激しいわけで、そういう点からも条約の意味内容を確定する作業は困難になってきているわけです。それで作業が遅れているんだらうと思います。

—— 国内制度の検討はどんなふうにするんでいますか。

小田 厚生省では、国際課がとりまとめ役になって、各局に所管の法律の条文と条約の条文をもう一度よく読んでもらって、問題を洗い出すようにしています。

それで多少国内制度上、給付水準が低いとか、不合理ではないが男女差がついていっているものがあったても、条約のことばの解釈によってある程度限定的な理解ができるという場合は、その低さや差は容認されることになりますから、厚生省の関係では困難な問題は少ないという結果になるかもしれません。

—— そうしますと、制度を改正しなくても批准できるという見通しを持っていらっしゃるわけですか。

小田 そういう方向でのぞみたい<sup>11)</sup>と思

っています。条文の意味の確定如何によります。

### 国民の声はどう反映される？

—— この程度の水準でいいのか、この差が十分合理的と言えるかどうか、広く国民の意見を聞くということはお考えになりませんか。

小田 ご要望があれば承っております。

—— このことについては国民の意見を聞かなくてはいけない、というふうにはお考えにならないわけですね。

小田 国会の場に法案を提出することなどによっても意見を聞くことができることになりま

す。

—— この条約の場合、ひとつひとつの条文の解釈ということもありますが、基本精神としては、とにかくあらゆる差別をなくすように、そのために各国で最も適当な方法をとるようにということが要求されているのではないのでしょうか。何が差別かということについて、法律や行政の専門の方だけがお考えになるのでは不十分ではないかと思いますが、その点はいかがでしょうか。

小田 ちよつとお答えしにくいのですが……。審議会にはかるといふようなことでしようか。

—— それもありますが<sup>12)</sup>……。陳情や要望は常にお聞きになるということですね。

小田 もちろんオープンな姿勢は持っております。

—— 今お話しになったいくつかの問題点について、これまでも意見は出ていると思いますが……。たとえば、生活保護の男女差をなくせという意見はそれほど強くないとお考えですか。

小田 総理府の婦人問題担当室に対してはそういったご要望が多い<sup>13)</sup>ようですけれども。

—— 婦人問題についての要望は婦人問題担当室に出されることが多いと思いますが、そちらと連絡は常に取り合っているわけですね。

小田 はい。あと婦人団体の出版物や、一般の新聞の報道などにも注意して、情報を得るようにしております。

## 母性を社会的なものと考えるか

—— 一般に、出産など母性に関することがらが、日本では私的なものとして扱われ過ぎると言われていますが、厚生省としてはそれを変えていこうという基本姿勢はお持ちなんでしょうか。

小田 それは未定ですね。非常に大きな問題ですので、そう簡単に答えは出ないと思います。

—— 一つ一つの制度を技術的にいじるだけではなくて、基本的な考え方をはっきりさせることが女の問題については特に重要だと思いますが、そういう検討をすすめるという計画はないのでしょうか。

小田 総理府を中心に、そのような問題は政府部内でも検討されておりますが、役所の場合、基本的な考え方は個々の制度を通じてあらわれるということになるかと思っています。技術上の困難などに制約されますから、徐々に変えていくしかないと思います。急に方針を変えるのはなかなかむずかしいんじゃないでしょうか。

—— 急にでなくても、時間をかけて根本から考えようという姿勢をどの程度お

持ちなんでしょうか。

小田 どの程度などと具体的にはお答えできませんが、「常に我々は努力をしております」と申しあげておきたいと思っています。

—— 国民から要望がもつとあれば、さらに具体的に努力していただけたらと思つてよろしいでしょうか。

小田 それはもう。ほかのあらゆる要望の場合と同じですけれど……。

1) 条約では、社会保障についての同一の権利（第十一条1(e)、給料または社会的給付を伴う母性休暇（第十一条2(b)）を決めている。

2) 生活保護の給付額は十五歳以上になると男女差ができる。一番差の大きい二〇、四〇歳の場合、東京で一人暮らしをしている人なら、男は四万八千七〇円、女は四万四〇四〇円、その差は四四三〇円。

3) 昭和五十四年度の厚生年金受給額の平均は、年九万九千二百四十四円、受給者の六五％が八〇万以上一四〇万未満だが、女はほとんど六〇万以上八〇万未満に集中している。この差は賃金差と被保険者期間の差によつてできる。

4) 老齢年金の受給開始年齢は六〇歳、女は五五歳（厚生年金保険法第四十二条）。

5) こうした表現から、条約がどの程度重要視されているか、読み取っていただきたい。

6) この表現からも、条約がどの程度重視されているかがわかる。前にも述べたように、「慎重」ということは「役所語」で、「やる気がない」という意味であることが多い。

7) 母性給付に関しては、これまで関係するILO条約も批准していない。国際的に極めて低い水準にあるのだ。

8) 育児休業法に有給の規定がないことは、制定のときから大きな問題になっている。

9) 条約は次のように言っている。「特に保育施設網の設置及び発展の促進を通じて、親が家庭の義務と労働の責任及び公的生活への参加とを両立させることを可能とするための必要な補助的社会的便益の提供を奨励すること」（第十一条2(c)）

これに対して、児童福祉法では、保護者の労働や病気のため児童の保育に欠けるところがあるとき、児童を保育所に入所させるよう規定している（児童福祉法第二十四条）。

10) ここで小田さんは苦笑した。

11) ここに厚生省の姿勢がよく表われている。

12) 国民の声が行政に反映されないもどかしさはお役人には通じにくいようだ。しかし、たなく質問は方向転換。

13) 婦人問題担当室ができたことはよかった。



外務省国際連合企画調査課

### 田中利彦さん

最後に、条約の批准という仕事の中心になる外務省。どれだけ積極的に準備をすすめているだろうか。  
(十月四日)

### 批准はできるか

—— 条約に関して、外務省としてはどのように取り組んでいらっしゃるのでしょうか。

田中 できるだけ早い機会に批准するという方向で準備をすすめています。これは外務省だけで決める問題ではなくて、すべてほかの省庁の主管されている事項

だが「婦人問題は担当室におまかせ」ということになり過ぎてはいないだろうか。

14) つまり、婦人問題を特に優先はしないということだ。

◇

小田さんのお話しぶりは積極的で誠実な印象だったが、日本の役人の立場をはつきり示すものでもあった。

で、しかもいろいろな省庁にまたがることなので、関係各省といっしょにやっています。三月から本格的な作業が始まりました。

—— 去年の暮れに開かれた国連総会の報告会で、国連局長は「来年の国会に出したい」というようなことをおっしゃいましたが、そんなに早くは進んでいますね。

田中 そういう希望はあっても、無理なことはできませんから。条約の正本ができてからまだ六か月しかたっていないから。

—— 素人が考えると、時間はずいぶんあるように思いますが……。

田中 日本は極めてまじめに条約を締結する国です。ですから、署名、批准が多少遅れてもやむを得ないのじゃないかと思えます。この間の世界婦人会議で署名したのも、若干早いと思われる状態だったんですが、条約の内容からいって、当然近い将来批准するという決意のもとに署名に踏み切ったということです。

—— 批准は必ずするわけですね。

田中 署名するということは将来必ず批准するということですし、署名して十年も二十年も置いておくことはないわけです。ただし、一年か二年でできるかというと、国の基盤にかかわるような問題が含まれますから、そう簡単にはいきません。

—— いつごろできそうですか。

田中 それははっきりはわかりませんが、一九八五年を目標として作業をすすめて

います。外務省としては是が非でも五年以内にという希望を持っておりますが、外務省だけがそういう希望を持っていたとしてもいいんで、関係各省庁と十分協力していく必要があるわけです。

—— 各省庁としてはどうなんでしょう。

田中 早い機会に批准に漕ぎつけるといふことについては、関係各省庁もご了解いただいていると思います。

—— 条約の基本精神には賛成だということですね。

田中 男女平等ということとは日本国憲法に書いてあることですからね。ただ、何が望ましい男女平等かということはいへん哲学的な問題で、抽象論でさえ意見が分かりますし、各論に入るとなおさら議論が分かります。これについて国民的なコンセンサスがどこにあるのか見きわめるのが極めてむずかしい作業ですね。<sup>1)</sup> そういう哲学的な側面から男女平等とは何かということを考える作業と、条約では何を望ましい男女平等としているのかを探究する作業と、二つの作業があるわけですね。各論にわたるこまかい作業も必要になってきますが。

### 批准にあたって問題になる点

—— 批准するために特に問題になるのはどんなことですか。

田中 それはもう、いっぱいありますね。

—— 主なことは何でしょう。障害というか、批准を困難にすることとか……。

田中 批准する上で困難ということはないですね。

—— この点は国民的なコンセンサスが得られにくいだろうということは……。

田中 それはまだわかりません。いま研究中です。

—— 検討していらいっしやる問題は……。

田中 問題点は非常に多いですね。条約の趣旨を踏まえて国内制度をどういふふうにしていったらいいか決める上で、解決しなければならぬ付随的な問題がいろいろあるわけです。雇用機会の男女平等ということにつきましても、どうやって実現したらいいかは極めてむずかしい問題です。法律一本つくればいいのかというのと、必ずしもそうではないですね。日本のこれまでの伝統的な法体系からみて、そういう法律ができるのかということ

とについて難しい問題がありますし、日本の雇用慣行全般にかなり影響が及ぶということを考えなければなりません。国籍法にしましても、これは誰が日本人なのかということを決めるもので、本来憲法で決めるべきことを法律にまかせているのですから、たいへん大きな問題です。仮に父母両系主義にした場合、二重国籍の問題が出てきて、そこからまた極めて大きな社会的政治的な問題が起ってくるわけです。その問題を解決しなければなりません。<sup>2)</sup>

—— 新聞に出ていたもう一つの問題は文部省のことですね。

田中 カリキュラムの問題はそんな大きな問題ですかね。<sup>3)</sup> 家庭科を男女ともに必修にするのか、男女ともに選択にするのか、それとも今のままでもいいのか、三つに一つを選ぶだけのことですね。もちろん今検討中ですが。

—— ほかに検討していらいっしやることは……。

田中 雇用における母性保護はどういうかたちが望ましいか、どうやって実現していくか、既存の制度はこれでいいのか。

国籍法の中の帰化条件の平等化はどんなかたちで実現していくのか、いろいろな方法がありますが、それぞれのメリットとデメリットをここまかに検討していく必要があります。社会保障関係では厚生年金の受給開始、出産給付の問題、あと数えあげたらきりがありませんが……。農水省については、農村婦人の保護についてなにかやるべきことがあるか。それから自治省、総理府人事局あたりでは公務員の労働の問題——これは労働省とほぼ同じ問題ですが、こういうふうに、すべての省庁に問題がまたがっているわけです。

### 作業はどうすすんでいるか

——一つ一つの問題の解決方法については、各省で検討なさるんでしょうか。

田中 もちろん各省と外務省と総理府も入って、全体として検討しています。

——定期的に会合を開いていらっしゃるわけですか。

田中 もちろん会議も開いていますし、やるべき調査もやって、外務省としては最大限の努力をしています。<sup>4)</sup>

——各省とも積極的にやっていたらいいですか。

田中 積極的とか消極的とかいうことより、やるべきことをやっていた方がいいわけです。署名したんだから当然批准するんだし、男女平等は憲法にも書いてあって当たり前のことなんですから。各省とも、まじめにやっていますよ。で、われわれは今、男女平等を実現するための施策としてどういう方法があり得るか、その方法をとったときどういう付随的な問題が出てくるか、その問題を解決するにはどうしたらいいかということを検討しているわけです。もう一方でこの条約の求める望ましい男女平等とは何なのか、抽象的な話ではなく、いろいろなこまかい場合についても検討していきます。作業はかなり早いテンポで進んでいます。

——条約のことばの解釈は外務省のほうでなさるわけですね。

田中 もちろん条約の解釈は外務省がやることになっています。署名の段階で、もう大まかなことはわかっているわけで、こまかな問題についても今作業をすすめています、あと一年も二年もかかるわ

けではありません。解釈といっても、「こういう制度を設けなければならない」という結論が出ることはあり得ません。<sup>5)</sup>

「条約はこういうことを言っている」という、抽象的なガイドラインのようなものが出てきて、具体的な国内制度がそのガイドラインに合致するかどうかを考えることになります。それが条約を解釈することになります。国によって法体系も違いますし、社会体制・経済体制・政治体制もいろいろですし、一つのことばについても国によって解釈が異なり得ます。ですから、「条約にこう書いてあるから、日本は絶対にこうしなくちゃならない」ということにはならないんです。

——解釈のための作業はどうすすめられるんでしょうか。担当の方が机に向かってお考えになるということですか。

田中 まず文言解釈ですが、既存の国際条約、審議経緯、各国の解釈なども参考にします。

——「ことばの法律の意味<sup>6)</sup>」ということをおっしゃる方がありますが一般的な意味と法律の意味はそんなに違うんでしょうか。

田中 それは「合理的解釈」と言い替えてもいいと思います。たとえば、平等、同一と書いてあれば機械的に百パーセント同じなのかというところではない、合理的な解釈が必要だということになります。文部省の家庭科の話にしても「同一の教育課程」と書いてあれば、絶対的に百パーセント同じなのか、体育でも、男子も女子も同じことをやるのか、ということについて、当然合理的な解釈が必要になってきます。

### 国民の意向はどう反映されるか

—— それでは合理的かどうかということとは誰がどうやって決めるんでしょうか。  
田中 裁判でよく弱者救済のために公序良俗ということは使われますが、公序良俗とは何かということを決めるんです。それと同じことです。

—— 今ある制度が合理的かどうかという裁判を起こした場合は全く同じでしょう。でも新しい制度をつくるという場合は別の手続きが必要なのではありませんか。国民の意見を積極的に聞く機会を設けるというようなことはお考えにならない

いんでしょうか。

田中 婦人問題企画推進会議等の議論を参考にしていきます。困難なことについては、どうやって実現するか、という研究がなければなりません。「いいことだからすぐやりなさい」というお気持ちもわかるんですが、やるについていろいろな問題が出てくるとき、それを解決しなければやれませんか。そうやって時間をかけますと「お役所仕事」と言われたりしますが、そう簡単にはすまないのだということとはご理解いただきたいと思

—— 条約の審議経過をみれば、条約中の表現がどういう要求から出てきたのかということもわかるのではありませんか。

田中 この条約の審議をしたのは国連総会の第三委員会ですが、その下にワーキング・グループを設けまして、そこで一応の結論を得た上で第三委員会に出していますので、委員会の記録は極めて簡単です。ワーキング・グループは記録をつくっております。レポートはありますけれどね。これは国連の広報センターで

ごらんになれますよ。)

—— 一般の国民がこの条約の問題について考えるためにくわしいことを知りたいと思うときはどうしたらいいんでしょうか。

田中 お問い合わせにはもちろんお答えいたします。広報資料などは、はっきりしない段階でわれわれが書いて誤解を生むと困るわけです。

—— はっきりする前に、国民の中でちゃんとした議論がすめられないといけないと思いますが。

田中 問題を理解していただいて、広く議論していただきたい。理性的な議論をやっていただきたいと思います。

—— 国民が問題を理解できるように、わかりやすいかたちで情報を出していただきたいと思います。

1) このことは本当だ。しかし逃げ口上にも使えることはだ。

2) 男女平等の問題がどの程度優先的に考えられているか読み取っていただきたい。

3) 家庭科の問題は田中さんの口からは積極的には出てこなかった。大きな問題でな

いと考えられるからか、それとも文部省が問題にしてほしくないかとがんばっているからだろうか。

4) 会議や調査について、一番中心になっている外務省からもう少しくわしくききたかったが、このことになると田中さんの口は重かった。

5) この点については、田中さんの発言のニュアンスは各省よりも宮崎さんに近かった。

6) 八月に行なわれた婦人団体の学習会で、前の外務省条約局国際協定課長はしきりと「法律の意味」ということばをくり返した。しろうとの常識では条約は解釈できないかのように。そのとき特に問題になったのが「同一」と同等」ということば。常識で考えれば、審議の段階で「同等」ということばを使うこととはつきり否定して「同一」ということばをとったのなら、全く同じであることが求められていることになるが、前国際協定課長によれば「ことばの法律の意味を検討してみなければ何とも言えない」のだそうだ。

7) 法律ではつきり禁止されていないことを裁判所が「悪い」と決める場合「公序良俗に反する」(民法第九十条違反)からいけないうことが多。女性差別について

の裁判ではこのことばは特によく使われている。公序良俗とは何か、法律にこまかく書かれているわけではなく、裁判所の判断による。

8) さっそく国連広報センターに行つて「同一」の教育課程か、「同等」かということが問題になったときの記録を見ようとしたが、ワーキング・グループの報告のその部分は貸出中。「みなさんこのところをごらんになります」と係の人は言っていた。第三委員会の記録のほうは、修正提案の内容と、どう決定したかだけを書いた極く簡単なものだった。(国連広報センターは青山一丁目の新青山ビルにある)

◇ 外務省としては批准に向けての作業はそれなりにすすめている。しかし田中さんは、条約の批准が必要だということよりも、国内の法制の改正がむずかしいということを強調したいようだった。

## インタビュを終えて

日本政府は、条約を批准しようとしている。しかし、男女平等を本気で実現させようとはしていない。このまますすめ

ば、国籍法以外は何も改正しないままで「日本は法制上男女平等になっている」と言つて批准して、それでおしまいということになりそうだ。

「男女平等には賛成」「男女平等はあたり前」ということばは役人の口から簡単に出てくるが、「すべての分野への婦人の参加」「男女の役割の変更」という、条約の基本精神となることばは男の役人からは聞かれなかった。

日本政府にとつて、男女平等は大きな問題ではない。国内政策のなかで優先すべき問題ではない。平等をすすめることより、そのためにいくらかお金や手間がかかり、考え方を変えなければならなくなるこのほうが大問題なのだ。

「何が平等か、国民的コンセンサスがなかなか得られない」というのはうそではないだろう。が、実際は日本政府自身が、条約のいう平等に向けて国民の意見がまとまっていこう努力しようなどとは思っていないのだ。日本の社会を大きく変えたくないし、日本の男としては男女平等ということ自体考えたくないのだ。しかし、署名は行なわれた。法的義務

はないといつても、道義的には批准する義務がある。そして批准するからには、条約の基本精神に従つて、男女平等をすすめるためのあらゆる努力をしなければ

ならない。法制上平等にするだけでなく、慣行や意識まで変えていかなければならないのだ。

かたちだけの批准に終わらせてはなら

ない。批准をてこに、男女平等をすすめるなければならない。そのために、女たちは大きく力を合わせていかなければならない。

女が真剣に生きようとすると、その行く手には「女であること」が障害となつて立ちかはだかりがちです。女とか男とかの性にとらわれず、のびやかに生き生きと生きるために、私たちは問題を出し合い、考え合つていきます。

「あこら」はギリシャ語の「ひろば」の意味。

古代ギリシャでは、女と奴隷はアゴラで自由に語り合うことを許されませんでした。が、年齢にも性にも学歴にも関係なく集える「さくのないひろば」を目指しています。

## 女の問題を 共に考える ひろば

「あこら」

「あこら」には規則はありませんが、運動の原則としては、次のようなことを掲げています。

1、自分も他人もかけがえない存在として尊重し、人権を侵害するあらゆる差別・戦争・公害に反対する。

2、イデオロギーを先行させず、現実根ざし、地域に密着した運動を行なう。

3、個人の意識変革を中心に、着実で持続的な運動をする。

4、ゆるやかな連帯。ゆるやかな方向性。

5、「人はすべて可能性を持つ」を信条に、女性

の可能性の開花に力をつくし、それを社会的活動と結びつける。

6、フェミニズム運動の中で、特に情報部門を専門的に受け持つ。

7、どの政党・どの企業・どの団体とも関係なく、自主独立を続ける。

8、会費・基金および事業収益を資金とする。

9、会員は、自分の状況と、さき得る時間や力に応じて運動する。絵を描く人は絵を、歌を歌う人は歌を……。病床からでも参加できる運動が基本。

10、どの部門にも「長」は置かない。運営の最終責任は運営会議とする。

現在、「あこら」(年二回刊)および「あこらミニ」(月刊)を発行するほか、読書室・可能性教室・創造力の銀行などを運営しています。

産業社会への窓口としては「BOC」を設け、創造力の銀行に預託された能力の売り込みや女性のための出版活動などを行なっています。地域活動は、北海道から九州まで十三の拠点が軸です。



# アンケートー婦人団体の評価と取り組み

国際婦人年以來、女性差別撤廃へ向けて共闘体制を整えてきた各婦人団体は、条約の批准に積極的に取り組む姿勢を見せている。この条約をどう評価し、どのような運動を展開しようとしているか「国連婦人の十年中間年日本大会」加盟四十八団体の実行委員と「女の集い」実行委員に個人的見解をたずねた。

## 女性差別撤廃条約についてのアンケート

「あいら」編集部

- 一、この条約の、どんな点を最も重要視なさいますか
- 二、条約の早期批准に賛成 反対
- 三、その理由は
- 四、批准促進のためには、どのような行動が必要でしょうか
- 五、あなたのご所属団体は、どのように取り組んでいらっしゃいますか
- イ、学習中    ロ、運動方針を討論中    ハ、運動方針を下記のとおり決定
- 六、その他のご意見

(到着順に掲載)

## 消費科学連合会 原 早苗

② 男性も含め、一般への理解を深める。

日本母親大会連絡会 山家 和子

- 一、行動計画も、この条約も、婦人に対するあらゆる形態の差別を撤廃するための基本理念になるものです。特に「条約」は、世界的レベルで女性がこの問題に取り組んでいることを示し、また行動計画より国内法へ実効をもたらすと思います。個別的には「子供の養育は男女と社会全体の責任」とする点、第十一条の雇用に関する男女平等、第九条の国籍に関する差別撤廃に関心をもっています。
- 二、賛成。
- 三、一に同じ。
- 四、①法律改正や、また「女ゆえに差別された」という実感に基づく具体的な事例を積み上げること。
- 五、イ
- 一、第一〇条の(b)、同一の教育課程、同一の試験、同水準の資格を持つ教職員、および同等の学校設備、施設に対する
- 二、賛成。
- 三、国籍法・家庭科共修・労働問題等、日本政府が問題としている点を促進するため。
- 四、各団体ごとの運動は団体の特徴を生かし、婦人団体全体としては統一一点で政府に要求し、マスコミに働きかける。
- 五、イ

家庭科の男女共修をすすめる会

中嶋里美

平等な機会。

第一〇条の(c)、教育のあらゆるレベルとあらゆる形態においてみられる男女の役割に関する固定観念の排除。

二、賛成。

三、共修実現のための有力な根拠になるので。

四、①条約の内容について多くの人に知ってもらうための活動。

②国会議員への働きかけ。

③文部省・総理府・外務省等への要請。

五、ハ

今年度の運動方針として

①婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃条約を早急に批准するよう各方面へ働きかける。

②文部省・総理府等に、必要に応じて働きかける。

③各地方自治体に、必要に応じて働きかける。

六、共修実現のために、日教組や各県家庭科指導主事に、条約との関連で意見を聞く予定。

## 日本婦人会議 山下正子

一、人権の確立。差別は不正であり、人間の尊厳をおかす罪悪とする思想を基調として、そのための措置をあげている点を重視します。

二、賛成。

三、日本人は概して人権意識が弱く、今なお部落差別・民族差別・女性差別が根強い。反差別のたたかいのよりどころ、特に女性解放運動の前進のために、

四、条約のなかみをよく知ること。現実と比べて条約のもつ意味を理解すること。世論づくりのための集会、署名運動、政府への要請、特に文部省・労働省・法務省に対して国内法の改正を迫ること等。

五、ハ

四項にあげた諸点について決定し、実践を指示しています。学習はかなりの県ですめられています。

六、批准促進に向けて、労基法の内容改善をはじめとする国内法の改正、男女雇用平等法（社会党案）の制度をあらわすてすすめたいと考えています。

## 日本労働組合総評議会 主婦の会

田中純代

一、①十一条の一、雇用の分野における婦人に対する差別を撤廃。

②一〇条の教育の分野において男子と同等の権利。

③五条の男女の定型化された役割に基づく偏見、慣習、慣行の撤廃。

二、賛成。

三、男女の差別は多い現状ですので、人間らしく生きるためにはあらゆる差別の撤廃を必要とする。

四、①自分が生活している場から身近な問題をとりあげてひとつひとつ解決できるように積みあげていく。

②政府に対しても要求を出していく。

五、イ

六、活動方針に具体的に条約批准と書いてはいないが、婦人の権利と平等を守ることとする。

## 日本女医会 柳瀬路子

一、機会の平等。

二、賛成。

三、①先進国と思うなら当然のことです。

②婦人の能力は同等と思うから。

四、婦人団体総力を挙げて、マスコミにその気を起こさせること。

五、会の定款に、政治にはかわらないこと、という取り決めがありますので、運動はしておりません。

六、医師の世界は、教育も研修も卒業後の行き方も平等であります。勤務医においては昇進などのとき、機会に平等でないようです。政策の決定機関に女性を入れなければなりません。

婦人民主クラブ 近藤悠子・水沢耶奈

一、歴史的に差別されてきた婦人のあらゆる差別状況にたいし、「世界」的視点で撤廃を打ちだしたこと。特に、第四条・五条に重要でまた困難な問題が含まれていると思います。また、日本の女の現状では、第十一条が重要だと思います。

二、必ずしも早期批准されればいいとは言えません。

三、雇用・教育・国籍法など、国内法の改正や制定の必要のある条項があり、それを留保つきでいそいで批准すると、

あとでごまかされるおそれがあります。

四、国内法に抵触する三点について法改正をすることを条件として、私たちの主體的論理をもって迫ること。そのために、日本独自の事態に立った運動の基盤を定めること。すべての婦人団体と労組の一致が望ましい。要は力関係であります。

五、イおよびロ。十一条三項、四条一、二項など、法として政府の勝手な解釈のされやすい点があり、これも力関係です。で、させないようにしなければ。

六、現在、「労基研報告」をめぐる保護と平等の問題が私たちに大きな問題を投げかけていますが、それに関連して、条約の第四条と十一条に関し、日本の実態に即してどう解釈し把握するか、そこを私たちがハッキリさせなければならぬと考えています（深夜業など）。また母性保障の内容が労基法に照らしても一般的であるので、母性保障の中味を確立し、それを社会的通念にしてゆくことの大切さなどを話し合っています。

## 「女・エロス」編集委員会

一、女性差別を国レベルでも（日本でも）組上にあげざるをえない契機に迫っているでいった点。

二、賛成。

三、女たちは自らの生きる権利を認識し、個人的にも社会的にも解放される道を女たちの連帯によって探り出すだろうことを期待している。

四、今回政府の署名は、中間年（デンマーク会議）を意識した政治的ポーズであるように、批准も五年後というのが一番可能性があると思われる。そのためには、女の差別状況をたゆまず大きな声にしていくことが大前提。あらゆる場で（集会・新聞・雑誌・市民教養講座・国会等々）批准問題をとりあげていくよう働きかけ、意図的に私たちも動いていかななくてはとうい望めなと思う。また生活の場で、女はどんな自立していく方法を模索し実行していかななくてはならないと思う。

五、ロ

六、性差別撤廃条約の意味と毎日のくら

しが関連していることを女たちが知らなくてはと思う。そのためのくらしと密着したわかりやすいアピールは絶えず必要。

### (財)日本女子社会教育会 磯部富美子

#### 一、第一部、第二条の諸項目。

#### 二、賛成。

三、男女平等の原則は憲法が保障した事項であり、その具体化は当然の権利である。

四、具体的に生活を見直し、問題点を発見して、充分な実態等の調査から、よく吟味して向上のための意見を明らかにしていく世論をつくる。

#### 五、イ

毎月婦人問題研究会を開き、婦人問題の見方・考え方・改善の視点を明らかにしている。

### 新日本婦人の会 井上美代

一、政治的活動、国籍、教育、雇用、社会保障、結婚と家庭生活、農村婦人の問題などあらゆる分野の婦人差別をなくしていくことが具体的に書かれている。

ることを重視しています。

#### 二、賛成。

三、日本の婦人の現状と国内法が、差別撤廃条約の各条項の内容とあまりにもかけはなれています。婦人年の後半期の広範な婦人の活動を力に、早期批准させていくことが日本における婦人の差別撤廃にとって重要だと考えるからです。

四、①地域・職場・家庭など私たちの身近なところで差別を見直し、その一つ一つをなくさせていく行動を、自覚的・積極的にすすめていくこと。

②「差別撤廃条約」を速やかに国会に提出し、承認を得て早期批准するよう要請行動をする。同時に国内法の改善(改正)を行なうよう各省に要請、請願する。

#### 五、ハ

①「三つの平等実現」(社会的平等、雇用・職場での平等、家庭での平等)を掲げ、運動しています。例えば、「職場見直し調査」など実態調査、「婦人の差別一〇番」をすえて、差別改善運動をしています。その他、全国に残っ

ている「尻助金」(町内・村内の共同作業に女が出るとお金を払われる)の調査を全国的に行ない、これらの調査結果に基づいて、差別撤廃の運動をさらに強めていきたい。

②九月・十月に行なっている「戦争反対、くらしと子どもを守る新婦人秋の行動」の中で、政府・文部・法務・労働や各地方自治体に差別撤廃条約にかかわる要求を請願しています。

### キリスト教協議会 カーター愛子

一、女子労働者の職場状況。

国籍法について。

#### 二、賛成。

三、女子の人権を高めるため。

四、みんなにもっとよく知ってもらふこととです。

#### 五、イ

「女子労働者の職場と生活」と題して学習会をします。どうしてキリスト者として女子の社会保障及び労基法について取り組むのか、基本的姿勢についても学びたいと計画しました。

## 退職婦人教職員全国連絡協議会

奥山えみ子

一、九条・一〇条・十一條にかかわつて国内法や制度に問題があること。とりわけ、一〇条の「教育」問題。

条約として、あらゆる形態の差別を網羅して撤廃しようとしている点を大きく評価したい。

二、賛成。

三、批准促進に合わせ、国内法の改正と、実質的差別撤廃が促進されることを願うから。

四、①あらゆる場所で学習や世論作りをする。

②署名活動。

③決議文や、文書による要請行動など。

五、ハ

①署名活動（実施は未だ）。

②集会等を聞く度に、決議や要請文を政府へ提出、要請行動を行なう（特に文部省・総理府）。

③地域の母と女教師の会等で取り組む。

## 日本婦人団体連合会 立松隆子

一、長い間いたげられてきた女性に、あますところなく人間としての尊厳・人権を回復させるための願いと実効をこめて、初めから終わりまで貫徹していることに、深く感動しており、とくに前文を重視しています。

二、賛成。

四、イ「条約」に照らし、身辺からの現状把握学習をすみずみまで徹底。

ロ 関連国内法改正を要求しつつも、骨又きにならぬよう監視。

ハ 識者、団体による独自行動に合せて、諸階層、各界のあつち層の共同行動をおこす必要。

ニ マスメディアなども含めて、社会通念の転換をはかる。

五、イ、ロ

六、私は、この条約の「前文」を徹底して学習し、討議し、そのための行動も必要と考えています。

全日本労働総同盟青年婦人対策部

高島順子

一、労働の分野。

二、賛成。  
五、イ、ロ

婦人問題懇話会 菅谷直子

一、婦人の労働権とその保障。

二、賛成。

三、差別撤廃の法的根拠をつくるため。

四、①世論の喚起。

②婦人団体の統一した行動。

五、イ

全国友の会 市岡愛

一、まだ学習が不十分なのでお答えにならないと思いますが、四部十五条を注目します。婦人が平等の地位を与えられ進出したとき、他の不平等を解消する力となると思います。

二、賛成。

三、政府の姿勢が後ろ向きなので、早くないと、どうなるか分からぬ。

四、大勢の支持のあることを政府に分からせるようにするために、あらゆる所で促進の行動をする。

五、イ

## 考える主婦の投稿誌「わいふ」 林 慶子

一、社会及び家庭における男子の伝統的役割及び婦人の役割の変更が男女間の完全な平等の達成に必要であることの認識。

二、賛成。

三、この条約と逆行する日本政府の婦人政策、そして諸々の国内法を整備していくことは簡単ではないが、条約に署名しないよりは少しは早期に整備できるのではないか。

四、条約完全実施要求のため、従来より更にあらゆる分野での女たちによる運動の展開が必要。

五、ハ

一九六三年以来、主婦の日常のくらしの中で総ての角度から見直すことにより、主婦自身の意識の変革を図り、主婦と共に考える雑誌の刊行をしている。

六、一九八一年度よりA5判一四四ページの増ページを發行。今までよりさらに多くの主婦の連帯と自立に具体的に役立つ雑誌にする。特に、専業主婦で

あることに疑問を抱かない女に働きかけたい。次代のために……。

## 日本婦人科学者の会 猿橋勝子

一、職業上の差別撤廃。

二、賛成。

四、国会議員と各政党にはたらしめかける。

五、イ

## 草の実会 島田信子

一、男女の役割分業固定化の否定。

二、賛成。

三、前提として国内法が改正され、それを楯に性差別撤廃の具体化を促進できる。

四、①政府・関係省庁・国会議員への要請行動。

②報道機関への、行動のPR。

五、イ

六、法的位置づけと同時に、社会通念(男女それぞれにもつ)の根深い差別意識の「変革」こそが最も重要。そのためには、社会教育・マスコミ文化を通して、絶えず主張しつづけること。中間年だけの(ひとときのはなやぎ)アク

ションに終わらないよう心したい。

## 私たちの男女雇用平等法をつくる会

一、あらゆる分野の性差別の禁止を条約批准国に義務づけるといふのは、実に画期的である。特に労働における性差別の禁止(十一條)は、私たちの会の目的でもあり、運動上重視している。

二、その他……完全批准に重点をおく。

三、早期批准されることが望ましいが、条約の内容を空文化し、形式的なザル法でごまかされてしまう恐れがある。特に労働分野ではその危険が大きい。したがって、時期よりもむしろ、内容の完全実施を目指したい。

四、条約の内容はあらゆる分野にわたっているもので、いろいろな課題をかかえている多くの女たちが共同で、条約完全実施の運動にとり組んでいくことが必要だ。

五、私たちの団体としては、雇用上の性差別を告発し、「私たちの男女雇用平等法を実現する」運動を進め、条約の完全批准の条件をつくっていききたい。

## 鉄道の七人と共に性による仕事

### 差別・賃金差別と闘う会 佐々木元子

一、法律や制度にあらわれた性差別だけでなく、慣習や社会通念として日々の暮らしに浸透しているあらゆる差別をなくすための努力が義務づけられているのは画期的。また、職場の性差別と闘う私たちにとって、第十一条は特に重要。

二、賛成。ただし条件つき。

三、できるだけ早期の批准は望みますが、時期の問題より、むしろ内容にこだわりたい。条約の精神を完全に生かす形での国内法の見直し・制定が、真に実現された形での、全面的な完全批准を！

四、私たちの一人一人が「生活の場」を見つめなおし、あらゆる場で、解放を目ざすつながりをつくっていくことが大切。そして、ことあらば力をあわせ、立ち上がることができたら……。

五、ハ、職場での差別をなくす闘いをさらに進める。「私たちの男女雇用平等法」をつくるための活動を行なう。

## 中立労働組合連絡会議 山口潤之助

一、政府の予定を変更させ、署名させた点。

二、賛成。

三、批准によって一定の拘束力を生じ得るためだが、政府に対し余程の影響力を行使できる体制をつくらなければならぬと考える。

四、数多い婦人団体や、いろいろな考えをもつ労働婦人が、それぞれに自己を主張するのみでは、影響力たり得ない。現在の状況に慣れられ無関心を余儀なくされている婦人への啓蒙、差別・被差別を許容する体質のいささかでもの改善、婦人自身が自信をもって対等にわたりあえるように自らを磨き、啓発していく努力をする、といったことかととり組むことが、近道であるように考える。

五、ハ、今日、婦人労働者が増大している中で、賃金・労働条件など雇用における男女平等の実現、母性保護の充実、さらには保育施設の充実や育児休業の制度化などの周辺整備は、緊急を要す

る課題となっている。

したがって「国連婦人の十年」の間年にあたる今年度は、男女雇用差別の禁止と、女子労働の保護を強化する労働基準の引き上げをめざした運動を重点にとりくんでいく。

労働基準の向上をはかるため、本年度は労働時間・休日、ならびに女子労働に関する「労働基準法」の改正にむけて全力を尽くすこととする。

労働時間・休日については、すでに労働四団体で合意した改正要求が中央労働基準審議会で取り上げられており、今後は審議会での審議を促進し、法改正の早期実現をめざして努力する。

一方、女子労働については、昨年度「労働基準法等対策会議」の中に設置した「女子労働プロジェクト」において労働基準法改正要求の具体的な内容を討議してきたが、今年度は中立労連としての要求案をまとめていくとともに、労働時間と同様に労働四団体の共同要求案ができるよう努力していく。また、労働基準法研究会（労働大臣の私的諮問機関）による「労働協約、

就業規則、賃金関係」に関する研究会報告も発表されているが、これらの課題についても「労働基準法等対策会議」で取り上げられるよう体制の強化をはかっている。

#### 働く婦人の会 武田節子

一、第十一条「雇用の分野における婦人に対する差別を撤廃するためのすべての適当な措置をとる」。

二、賛成。

三、平和こそすべてに最優先することであり、そのためには、婦人があらゆる分野において男性と同等の参加が必要であり、基本的人権としての男女平等の権利の確立が急務であると思う。

四、私どもの立場では、まず、生活現場における差別的現状をすべての人が認識し、共に共闘する土壌づくりと、政府への申し入れ等を行なってゆきたいと思う。

五、イ、ロ。五か年間を目ざし、批准促進の運動として、請願および男女雇用平等法案の成立の申し入れ等を急ぎたいと思う。

#### 日本民主婦人の会 新井田佳子

一、①条約の内容には、南北問題が反映されている。

②勤労婦人の問題に偏りすぎであり、家庭婦人からの視点に欠けている。

しかしながら、男女平等婦人の地位向上の一大エポックとして評価される。

二、賛成。

三、世界的規模で推進されるべきものであり、日本としても他国に先駆けて取り組まねばならない。

四、労働法・国籍法との関係を整合してゆくことがまず必要。

五、ロ

#### 日本労働組合総評議会婦人局

山野和子

五、ハ。八〇年度活動方針の最重要項目にしています。詳細は活動方針案をご参照ください。

#### あこら 斎藤千代

一、女性差別は人権の侵害であると明確に位置づけ、あらゆる差別に対し

て、その撤廃を国際的に約束したこと。国際的な富の不平等の解消を基本に打ち出したこと。

性別役割分業を前提に、男女の能力に差があるとする社会通念の打破を目指したこと。

子どもの利益を最優先し、育児は男女の共同責任と明記したこと。

違反者に「処罰」を伴う規定を設けたこと。

全文にあふれるヒューマニズムの精神を、何よりも評価します。

二、簡単には言えません。

三、一日も早い「完全批准」を望みますが、現状では、国内法の整備を伴わない形式的な「批准」の危険があります。

四、①すべての女性が、この条約の意味を十分に知り、自発的に運動すること。

内発的な運動が伴わなければ、条約が発効しても、完全に機能することは難しいと思います。大多数の女性が差別に気づかないほど、差別に慣らされきっている状況を変えるための、あらゆる情報活動・学習活動からまず始めなければならないでしょう。

## ② 批准や国内法の整備は、それに賛成する国会議員が過半数を占めなければ不可能です。成人女性のすべてが持っている投票権の行使に際し、それを十分考えることが必要だと思います。

五、拠点によってちがいますが、大体、イまたはロの段階です。全体の運営会



# アンケート2 女性記者の評価と取り組み

コペンハーゲン会議を取材した女性記者に、今後のキャンペーンの方向と、展望をアンケートした。

## アンケート

「婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃に関する条約」について

- 1 あなたが最も強調なさりたいこと
- 2 署名はしても批准は簡単にできないと言われていますが、批准のために日本の女たちがすべきこと
- 3 あなたご自身は、どんなキャンペーンをなさいますか。

議では、積極的な情報活動を基本方針にし、この号も、そのために特集しました。この問題の学習会を開き、婦人学級などでわかりやすく説明できる講師を養成することも、運動方針の一つにしています。

六、世の中が変化するときには、一つの潮時があると思いますが、この条約の批准問題は、まさに「天の利」ではないでしょうか。個人と団体を問わず、条約の「完全批准」へ向けて、今こそ共闘したいと思います。

毎日新聞社編集員 増田れい子

- 1 この条約は女にとって憲法に等しいという価値をみんなに知らせたい。
- 2 条約と合致しない女の実態実情を、どんな紙面にのせるため、新聞と読者、婦人団体、運動家、研究者と、力を合わせる。
- 3 考え中。

NHK解説委員室 東浦めい

- 1 性別による役割分担の思想が否定されていることは、言うはやすく行なうは難し。女性にとっても、万年野党で

はありえないという点で重い責任を負わねばならぬということの意味する。

- 2 政府を批准に向けさせたように、婦人グループが中心となってたえず政府の施策を監視し、あるときは婦人行政を背後から支えつつ推進させること。
- 3 放送の仕事を通じて法改正の動きなどを報告する。また民間有志の婦人解放へ向けてのあゆみなども紹介しつつ、批准への動きを推しすすめたい。

読売新聞社婦人部 深尾凱子

- 1 今や女性差別は罪悪だ、とうたった国際条約が存在することを一人でも多

くの人に知ってもらいたい。

- 2 なぜ批准できないのか、条約の内容と抵触する国内法について女性たちが研究し、その内容が世界の潮流に比べていかに時代遅れであり、理不尽であるかを、男性たちに、社会に、訴えるため、さまざまな活動を繰り広げていく以外にないだろう。

- 3 このような活動を紙面に紹介することによって、女性たちのエネルギーを、体制に、社会に、伝えていきたい。そして、婦人差別の撤廃を望んでいるのは「一部のリブたち」ではなく、今やこの思いは大きな潮流となつて世界中をとうとうと流れ始めているのだということキャンペーンしていきたい。

#### サンケイ新聞社家庭文化本部婦人面

斉藤由美

- 1 この条約は、決して男性を敵にまわしたり、男性の権利を奪つて女性を優位にしようといった趣旨ではなく、男女両方にとってよりよい社会をめざすものであるということを主張したい。

(男性の中には、条約名などだけをみて、趣旨を「錯覚」している人が多いように

見受けられるので)。

- 2 批准に向けて、諸法律の検討などのつめが本気で行なわれているのか——女の目が光っていることを折りにふれ政府にアピールすること。

- 3 具体的には考慮中。

#### フジテレビ報道部 有馬真喜子

- 1 とにかく批准にこぎつけること。

- 2 批准のための国内法の改正について、問題点は明らかになっているのだから、その問題点を正すよう声をあげていくことだと思う。この改正はきちんと行なわれるべきで、批准を急ぐあまりに行改正が半端になつてはならないと思う。

- 3 まず、差別撤廃条約とはどんなものかを折にふれて取上げ解説している。

八、九月に、番組では四回取上げた。個人的にも書いたりしゃべったりしている。今後は、問題点が出てくるたびに、改正の方向を打ち出すことだと思っている。

#### ラジオ関東 池谷まゆみ

- 1 雇用の場における平等は一日も早く

ほしいですね。特に、新しく世の中に出て来る女性たちの門戸の狭さは許せません。等しく受験の機会を作るべきです。

- 2 とにかく、運動を展開すること、常に声に出してそれを問題にし続けることだと思います。でも形式だけ満たされて実質的には何も変わらない——といったことにならないよう女の側も見直すべき点は点検しておくべきでないかしら。
- 3 仕事の中では私の目の中に常に入っています。市民活動としては、横浜で一昨年から仲間と共に差別をなくすための連続シンポジウムを開催いたしております。

#### テレビマンユニオン 坂元良江

- 1 必要なものですが、この条約ができてもすぐに私たちの状況が変わるものではないと思います。いかに活用していくかは女性たちの手にかかっています。

- 2 ひとえに女性の運動次第と思います。
- 3 私自身一人の女としてできるだけのことをしようと思っています。

# 紹介 | スウェーデン雇用平等法と行政監督機関

ヤンソン・由実子

スウェーデンは一九八〇年七月一日から、「勤労生活における男女平等法」（通称雇用平等法）を実施した。七月三日、スウェーデン労働省はその内容を内外に向けて発表。七月にコペンハーゲンで開かれた「国連婦人の十年中間年一九八〇年婦人会議」でも、スウェーデン政府はこの平等法の説明と、平等法実施にあたり、設けられた二つの行政機関、男女平等問題オムブズマン（行政観察委員。政府・国家機関・国家公務員などに対する一般市民の苦情を処理する立法府任命の委員）と平等問題専門委員会の説明に力を注いだ。

以下、スウェーデン労働省が発表した平等法の説明文を訳す。日本の雇用平等法を作成するために一つの参考になれば幸いである。

× × × × ×

一九八〇年七月一日から実施された平等法は、労働、労働条件、雇用における自己充足の機会の三点に関し男女が平等に持つ権利をさらに助成促進させることを目的とする。この法律は、公務員から民間企業従業員まで、あらゆる種類の雇用形態に適用される。またここで規定された規則は求職者にも適用される。

この平等法のねらいは雇用者である。男女平等問題オムブズマン（以下平等オムブズマンと呼ぶ）は雇用者に平等法を順守させる権限を持つ。

平等法は二つの部分から成り立つ。一つは性差別を禁止する条項であり、もう一つは平等を促進させるための実際的手段と方策を述べたものである。さらにこの法は平等オムブズマンおよび平等専門委員会の役割、それら機関の行なう制裁の規約や関係手続きをも規定している。

性差別禁止とは、雇用者が被雇用者または求職者を、性別を理由に差別することを意味する。この禁止の対象となるのは求人から雇用完了時までである。つまり、性差別は求人段階から始まり、昇進および昇進のための講習教育、さらに雇用条件、仕事の分担、解雇、転勤等にわたって、雇用期間中における男女従業員の性別をもとにした差別を禁止するものである。

例外が認められるのは、すでにどちらかの性が特に少ない職場において、その不均等を是正するために、その少数の性の側の人間を、たとえ多数の性の側の求職者よりも優れていなくても採用するという場合である。また、理想主義の促進あるいは

他の特別の理由がある場合にも例外が認められることもある。

差別禁止は強制命令である。この禁止に従わない雇用者は損害賠償をしなければならない。性差別を理由とする訴訟は労働裁判所で扱われる。

男女平等を推し進めるための実際的手段として、雇用者は、自分の事業所で働く男女従業員が平等となるように、計画的にその目的に向かって行動しなければならない義務を持つ。職場環境も組織も、男女のどちらもがそこで働くことができるものでなければならない。雇用者は求人をする際に男女両方から応募者をつのること。雇用者はトレーニングや他の手段を用いて、多岐の分野に働く従業員がさまざまな種類の仕事で、できるだけ（少なくとも一方の性が四〇％を占める程度まで）男性従業員と女性従業員の数が均等となるように努めなければならない。求人の際、雇用者は、少ないほうの性の応募者が増えるように特別の努力をしなければならない。

平等を促進させる実際的手段の一つに、労使の団体協約で平等に関する合意をむすぶことがある。この種の合意を従業員と結ばない雇用者で平等のための実際的手段を講じない者は、義務履行を無視したかどで科料支払命令を受ける。科料支払いの命令は平等専門委員会から出される。平等合意協約でうたわれた内容を守らない雇用者には、協約不履行の制裁が科される。

平等オムブズマンの主な任務は、この法律を守らしめることである。平等オムブズマンは何よりもまず、雇用者が自らこの法律で定められた規則に従うように、相談、情報活動、交渉などの方法で雇用者を説得するのがその役目である。オムブズマ

ンは、これらの勧告が何の効果もあげなかったということがはつきりしたとき、はじめて他の手段を講ずることができる。オムブズマンは性差別訴訟を被雇用者または求職者の代わりに労働裁判所に起訴することができる。原告が労働組合の組合員である場合は、原告の代行人は労働組合である。原告はいうまでもなく自分で起訴してもいい。また、平等促進の実際的措施を平等専門委員会が講じる際に、オムブズマンは、その雇用者に課すべき科料について、委員会に対し建議することができる。

オムブズマンのもう一つの重要な役目は、社会に対し情報を与えること、および平等促進のため、その他の適切な手段を講じることである。このように、オムブズマンは世論を動かすことができるほどの大きな影響力を持つ。したがってオムブズマンは、労働組合、さまざまな組織や団体、公共機関、その他の平等にかかわり合いを持つ機関と常時緊密な接触を持たなければならない。

政府は、地方裁判官インガリット・ツォネル女史を平等オムブズマンに任命した。オムブズマン代理は事務弁護士レナ・スウェネウス女史である。

平等専門委員会は政府が今回設置した小委員会で、その仕事は平等促進をする上での実際的措施をとる際、オムブズマンによって建議された科料を雇用者に科することである。平等専門委員会は経験豊かな法廷弁護士一人、労働市場の事情に通じており男女平等問題に詳しい専門家が数人、さらに主な労使組合の代表者たちにより構成されている。同委員会の議長はスウェン・ヒューゴ・リーマン（教育省長官）である。

## 国連婦人の十年・奈良県 婦人のつどい

### メキシコ宣言に感動して

私たちのつどいが活動を始めたのは一九七八年七月一日。国際婦人年から遅れること約三年。

世界中の婦人たちが平和・平等・発展を目ざして立ち上がり、国内でも各地域で運動が始まっていました。四か月の準備期間中に、県内の婦人団体や個人の方に連絡をとり、またマスコミを通じて広報もしてもらって設立総会を迎えました。

会の趣旨は、メキシコ宣言・世界行動計画にうたわれている精神を、奈良県婦人に広げていこう、それを通して奈良県婦人の地位の向上をはかろう、ということです。そのために、奈良県の婦人たちの実情を知ること、奈良県の婦人の要求を実現していくこと、メキシコ宣言・世界行動計画の学習をすること、時々の婦人政策の学習をすることなどを確認しました。

会員は団体・個人の二種類で、

会費は個人が年間千円、団体はその規模に応じて自主的に出していると思いますが、いつも赤字気味で、カンパもいただきます。会員数は団体会員もあつて確定しにくいのですが、ニュースは毎回千部ほど印刷します。

### 婦人にかかわる問題に 幅ひろく取り組む

会の事務をしているのは、代表一名と事務局数名（交替しているため人数は確定していない）です。会の組織としては、全体にルーズで、月一回のニュース（ざら紙一面ないしは両面）と、月一回の例会（第一土曜日、午後二時から四時）と、年一回の会費徴収でつながっています。

この会の特徴のひとつは、国連婦人の十年を活動の期間とすることです。（もちろん、その時になつたら、もっと続けましょうということになるかもしれません）

が……。そして、会で行なう活動は、婦人にかかわる問題に広く取り組みますが、その位置づけは国際婦人年の精神を基本においています。

### 楽しく、きびしい討論

現在までにしてきた活動を整理してみます。

- (1) 毎月一回の例会では、原則として、メキシコ宣言・世界行動計画の読み合わせと、討論をします。初めのうちは、国際的文書のわかりにくさ（訳のせいか、こちらの能力のせいか）に苦勞し、国際問題の用語の意味を調べたりしていました。話し合いは、諸外国の婦人の実情から、私たち自身の問題まで、あちらこちらと飛びますが、一人で読めば手のつけられない文書がわかっていくのは楽しいことです。そこにうたわれている精神の高さに、「目からうろこが落ちたよ

うな気持ちです」という声もできました。現在、メキシコ宣言は読み終わり、世界行動計画はほぼ半分までできています。「婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃条約」も読み終わりました。

(注) 私たちの活動が国内運動(と言うべきか、県内運動と言うべきか)であるにもかかわらず、国内行動計画を基礎にすえていないのは、国内行動計画が世界行動計画にくらべて、内容的に後退したものであると考えているからです。

(2) 定例の例会(注)に出席できない会員のために、特別例会を今までに三回もちました。「奈良県婦人の生活と仕事を語るつどい」「子どもの幸せと婦人の生きがいを考えるつどい」「いろいろな世代の婦人の生きがいを考えるつどい」です。毎回、会員の中から数名の方のテーマにそつた話をきき、その後話し合ひをしています。

(注) 毎回、この討論が楽しく、きびしく、

私たちの生き方を考える指針を与えてくれます。

(3) 定例の例会では学習のほかにも時々の婦人政策や婦人問題を話し合い、それに基づいて要請や抗議をしています。奈良県に対しては「奈良県行動計画作成の要請」、労働省へは「労働基準法改悪反対の決議」、外務省と総理府へは「婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃条約の早期批准の要請」、関西経済団体連合会の日向方斎会長へは「徴兵制発言への抗議」などです。

(4) 奈良県婦人の実態を知るために、既存の統計資料の分析と同時に、「国連婦人の十年によせて奈良県婦人の実態アンケート」を行ないました。会員の手を通じて二〇〇通配布し、八五三人から回答がありました。調査対象の選定で苦労したのは専業主婦の少なさです。身の周りを見回してみると、専業主婦と見えている人が、ほとんど内職をし

ているか、パートに出ているのです。調査の内容は、性別役割分担についての考え、家庭運営の実情、なぜ働いていないのか、なぜ働いているのか、今後の見通し、生きがい、男女平等の実現の方策などについて聞きました。また、働いている婦人には、以上に加えて、労働条件、健康状態、母性保護の状態、家事的やり方なども聞きました。結果はまとめて印刷し、例会で、少しずつ読みとり話し合ひをしました。

(5) 毎月一回ニュースを発行しています。内容は例会報告が中心です。

以上のような活動は、当初の趣旨からいえばまだまだ不十分で、今後の五年間も、ささやかでも活動を続けていくことで趣旨の実現へ向かっていきたいと考えています。

# あごくら読書室

## 女性の権利の擁護

—政治および道徳問題の批判をこめて—

メアリ・ウルストンクラフト著

白井堯子訳、  
未来社

女性解放思想を初めて体系的に樹立したメアリ・ウルストンクラフト（一七五九年—一七九七年）の、日本では初めての訳書である。

今から一八〇年余も前のイギリス（産業革命下）にあり、フランス革命の影響も受けていた激動の時代で書かれたこの書が、今も、圧倒的な迫力をもっているのはなぜだろうか。

女性解放思想の古典といわれるこの書が、今もって、私たちに感動と共感をもたらさずにはおかない今日の状況を考えるとき、女性解放問題の、時代を超えた根幹を改めて認識せざるを得ないが、それ

よりもさらに、困窮と因襲にみちた時代状況のなかで、あらゆる権威に挑戦し、偏見・嘲笑・侮蔑と闘いながら、人間として主体的に生きようと徹した、偉大な一女性の手によって書かれたという重さに、圧倒されるのである。

今でさえ、「自立」やら「解放」やらが女たちに試行錯誤されているというのに、一八世紀イギリス社会に真つ向から挑戦した著者三二歳の著作である。多少難解な部分、論理の飛躍など、気になるところもあるが、それらを超えて、全女性の貴重な財産とした書である。日本語訳ができたことをよろこびたい。（T）

（A5判 四〇八ページ 三、五〇〇円）

## かまとは唄う

—娘がつづる母たちの女性史—

新潟市女性史クラブ編

国際婦人年以來、各地に女性史研究

グループがふえている。なぜかその多くは高群逸枝から出発する。それも一つの方法だが、自分の周辺から女の生きざまを洗い直し、疑問をさかのぼらせながら認識を深めていくとき、より自主的な研究がすすめられることも多いように思われる。

手書きファックス印刷、B5約八〇ページのこの小冊子は、そうした自主グループが、まず我が母の歴史を洗い出した記録である。「いつか忘れさられていく母たち。歴史のどこにも書きとめられない母たち、女たちの息吹きをどう受けとめたらよいのか」と問い、考え、調べて二年余、「母なるがゆえの苦しみ、母をはだかにすることは、自らをはだかにする作業でもありました。なぜこうまで苦しんで書かねばならないか……」の苦境を乗り越えてまとめられた中から、とりあえず三人分だけを印刷したものだが、心に迫る多くのものを含んでいる。

女性史クラブ二〇人のメンバーそれぞれ

れが六〇枚ずつ書きためた全記録を活字にする前に、できるだけ多くの女たちに目をとおしてもらい、率直な意見を聞き、自分たちの記録のありようを問い直したいと、メンバーたちは呼びかけている。この試みに共感する方、一読したい方は五十円切手二十枚を添えて、左記へ。(R) 新潟市小針六七四―四 倉元正子 (B5判 八〇ページ 仮綴じ)

### 素敵な生き方の演出法

―いま女性にとって仕事とは―

樋口恵子ほか

PHP 研究所

十三人の仕事をもつ女性の体験談で構成されている。副題のとおり、女性にとって仕事がいかなる意味をもつのかがテーマであり、仕事とよりよい関係を結んでいくことが「素敵な女性」へとつながっていく、という基本的考えに貫かれている。長い歴史の中で、人々は男性・女性にかかわらず働いてきた。女性も家事・育児以外の仕事をこなしてきたのである。現在、様々な社会的事情の変化により、

女性が外で仕事をしていくことが困難になったが、働くということは自然なことであり、当然なことでもある。仕事によって得るものは大きい。経済的自立、一個の人間としての評価、多数の人々とのつながり、――そのような仕事の意義は性別にかかわらず同じでも、仕事をもつ権利には明らかに差がある。その差を埋めるには働き続ける女性が増えていくことだと、著者の一人は強い口調で説いている。

それぞれの仕事に対する考え方には微妙なニュアンスの違いがあるが、自らに正直に生きるという人生への真摯な態度、仕事への情熱という点では共通する。女であるという社会的ハンディを、彼女たちは自らを向上させるバネに変えてしまっている。自分の生き方について改めて考えてみたいと思うとき、仕事の中で壁にぶつかってしまったとき、この書が格好の参考書、手引書たる役割を果たしてくれるにちがいない。

ただ、著者たちは、評論家、作家といった、ある限定された職業分野の女性であり、多くの女性たちに対する説得力の

点で、幾分かの危惧感を抱かざるをえなかった。(洋)

(B6判 二二六ページ 八五〇円)

### 近代日本婦人問題年表

―日本婦人問題資料集成第十巻―  
編集 丸岡秀子・山口美代子ほか

ドメス出版

「八〇年代の婦人の世紀の扉をたたいたところで、この年表の完成をみたことは、まさに象徴的であると思う」と、序文でも編者が、その感慨を述べているが、一九七五年にこの作業を手がけてから、あしかけ六年の歳月を費やしてこの年表は完成した。

「日本婦人問題資料集成」の第十巻である。収録の範囲は明治元年(一八六八年)から昭和五〇年(一九七五年)の一〇〇年余に及ぶ。主として新聞・雑誌・その他八二〇点の典拠資料の中から、政治・人権・労働・教育・家族制度・保健・福祉・生活・思潮等の領域はもとより、文学・芸術・風俗の領域に至るまで、日本の婦人の生活と問題意識およびその運動

と実践に関連のある事実関係を検証しつつ、簡単なコメントを施して編年体にとめ上げた基礎的な仕事である。

このような大がかりな年表は個人の力では容易になしうるものではなく、すぐれた共同の仕事として果たしうるもので、その間には項目の取捨選択ひとつにしても、それなりの見解の相違も生じたことと思うが、検証に伴うさまざまな困難をのりこえて、ここに女性だけの力になる大きな仕事が完成したことをよろこびたい。

年表は五〇〇頁。そのうち明治期が七五頁、大正期は五〇頁で、さすがに昭和に至ると三〇〇頁余。婦人の生活のひろがり、問題の深さ、そして運動の多様性が紙面にみなぎっている。ちなみに、本書を開くと、冒頭に、明治二年五月、女子売買禁止の建白「人ヲ売買スルハ禁ズベキ議」を公議所に提出、女子の解放を要望。との項がみえる。人間であることを抹殺せずには生きられなかった時代から、昭和五〇年の今日、女性解放と差別の撤廃とは、当然の潮流として随所にちりばめられるに至っており、この百年の女性の足どりに誰しも深い感慨をもつだ

ろう。その意味で、本書は検索の手段であることはもちろんだが、味わい読む年表でもある。

それにしても、項目のひとつひとつに記号を付して典拠資料を明示し、それと巻末の資料リストを対照し得る便がこらされていることは、これからの婦人問題や女性史研究の分野に確かさと厚味を増すことだろう。

巻末の索引は、件名や人名から事実に入アプローチする重要な検索の手段であることは言うまでもないが、例えば、通称「母親大会」↓日本母親大会を見よ。というみちびきにも、こまかい心遣いが感じられる。これからの婦人問題や女性史研究の上に記念碑的な意味を持つ文献として評価したい。

(F)  
(A5判 五〇〇ページ 七、五〇〇円)

### 働いて生きる

―転機を迎えた女たちの選択―

大脇雅子著  
学陽書房

「かつて、こんなにも真摯に女の働く意味を問うた本があっただろうか――」。

これは帯の文句であるが、たしかに、働く女が抱えている問題を、あくまで幅広い視野でとらえ切ろうとする筆者の姿勢には、三児の親と弁護士を両立させてきた生きざまのしたたかさがある。

本書は、女が母性を切り捨てることなく働きつづけることで、職場だけでなく、家庭も社会も変わっていくはず――こう思い定めている筆者が、労研報告以降、分断されつつあるという女たちの状況をふまえ、背水の陣をしいて取り組んだ書き下ろしである。

まず、鈴鹿市役所の山本和子さんをはじめとする五人の女性の生き方と裁判を紹介し、次に差別の実態を募集・採用から賃金、配転、定年、年金などの各項目にわたって細かく指摘する（差別の量に圧倒される）。そして、資本の差別的論理の合理性を論破し、母性保障の可能性を具体的に説く。ついで労基研報告の批判および生休、残業、時間外、深夜業などの問題点を詳細に検討し、それは雇用平等法にまでおよび。忌憚のない組合に対する批判も女たちに対する忠告も、いまの転機を乗り越えるための励ましといえよう。

それにしても、女にとって、働いて生きることは、何とかわいしい道なのだろうか——。

(四六判 二九八ページ 一、二〇〇円)

(陽)

## 女性と天皇制

加納実紀代編  
思想の科学社

この本は問題のもとに、『思想の科学』に七九年一月から一年半にわたって掲載された十八篇の発言と、発言者でもある井上輝子、左方郁子、加納ら三名の討論、および巻末の関係略年譜等から構成されている。発言者は北海道から沖縄・西表島まで、世代は二十代から七十代までと幅広く、それぞれの場で多様に闘っている女たちが登場している。

戦後、『制度』としての天皇制は雲散したかのようにみえる。だが「象徴」としての天皇制は、不明瞭であるだけにさまざまな形で私たちの生活・文化・意識の領分にまで根をおろしてしまっている。大家族制のイェは崩壊したかにみえても、核家族形態の婚姻は、ほとんど夫側の姓

を名のることが多いし、それに伴う諸々の問題は後を断たない。

かつて、男たちが制度的な天皇制を撃ち、現在沈黙しているのは、生活文化形態に入りこんだ天皇制を撃つことは、小天皇として君臨している自らを撃つことにつき当たることを自覚しているからにちがいない。だからこそ、いま生活文化形態に浸透しつくした天皇制を撃つことは、女たちに課せられた使命にも思えてくる。さまざまな角度からの内なる天皇制は、それぞれの自己形成史にも暗いかげりを投げかけ、女たちの抑圧の歴史の複雑な構造が浮かびあがってくる。

主な発言者——駒尺喜美、寺井美奈子、吉武輝子、牧瀬菊枝 一条ふみ、ほか(統)(四六判 三五八ページ 一、七〇〇円)

## 母と娘の関係 上下

「母」の中のわたし、

「わたし」の中の母——

ナンシー・フライデー著

依萌子・河野貴代美訳

講談社

本書は、母娘関係を通して自分の内面

をつづったものである。

「私たちは、両親——特に母親——に対する批判を聞くのがきらいだ。なぜなら心の奥底に閉じこめておいた怒りが目覚め、母親との結びつきをこわしかねないからだ。悪いのは私で、母ではない、と思うほうが心は休まるし、安全なのである。このプロセスは自然に、意識下で行われる。だから、避けることができない。母親を憎むあまり孤独になることに、子どもは耐えられないのだ。母親を取り込むという行動は、生の一番奥深いレベルで無意識に行われる。こうして母親と密着する」そして「母親と娘の共生的な結びつきを断つためには、まず正直に記憶を洗い直してみることだ」と著者はいうとおり、多数の女性へのインタビューや心理学者の解説をまじえながら、著者自身の母との共生関係、母から植えつけられた自分の中の共生欲求をみつめ、母親からの分離自立への過程を赤裸々に述べている。

女性の最初の役割モデルは母親。女性が自分を認識する手がかりは母娘関係の洗い直しから始まるのだろう。自分の中の抑圧している部分までも意識上にひっ

ばり出すのはしんどい作業なのだが、なかなか興味のあるところである。著者の勇氣ある率直さには、目をみはってしまつた。特に「性」に対する思いを、母娘関係の中で率直にとらえることは勇氣のある試みだと思つた。

(友)  
(B6判 上)二五四ページ 九八〇円

下二一〇五ページ 九二〇円

### 理想選挙の勝利の記録

—市川房枝氏全国区第一位当選—  
市川房枝推薦会残務整理委員会

選挙ともなると、けたたましい連呼の聲が、「お忘れなく！」を叫び続けたご当人たちは、当落にかかわらず、選挙が終われば投票者のことなど忘れておしまになるのが通例だ。

このブックレットは、支援者たちを「忘れずに」選挙の経過のすべてを知らせた報告書である。立候補の要請文に始まり、その受諾書、推薦会と選挙運動の日程表、会計の残務処理に至るまでの明細が、この上なく正確に綴られている。市川さんの第一位が、どんなに深く大きな信頼

に支えられているか、しみじみと考えさせられる。三年前、女たちの候補者を立てた私たちの参院選は、残念ながら多くの後遺症を残し、ことしの選挙には、それを継ぐ運動はついにつくなかつた。私たちに何が足りなかつたのか、これから何をすればよいのか、多くの示唆を与えてくれる書でもある。

読みながらふと思つたが、この機会に、「ノーベル平和賞に市川房枝さんを推す」という試みはどうだろう。この賞は、人権運動の草の根の活動家に与えられると聞く。ノーベル賞委員会も、佐藤栄作に与えた大失点をカバーできるのでは……と思ふが。

(S)  
(B6判 五二ページ、定価一〇〇円、送料一四〇円。申込先 東京都渋谷区代々木2-21-11 市川房枝推薦会)

### 女性人材論

—職業的能力の開花—

天野正子ほか共著

有斐閣

「人材」と言い、「職業的能力」と聞いただけで、敬遠したくなるが、世にいう

エリートおんな、モレツ女子社員志向の逆をいくのがこの本である。

法的な権利の平等、高学歴化、職場の門戸開放の中で、なお女性が低い地位に甘んじさせられているのはなぜか。マイケル・ヤングの言う「メリトクラシー(能力社会)」のゆえであり、その法則の中で母性が否定されていることを真正面にすえつつ、はたして男女の能力差はあるのか、を問う。

社会学者(天野正子・神田道子)、ジャーナリスト(金森トシエ・藤原房子)、婦人運動家(斎藤千代)、それぞれの視点で、女が働く歴史、教育、現実を洗い直している。女子大生、婦人学級等のテキストにも好適。

(B6判、二〇〇ページ 一、〇〇〇円)

### おんなふみ

グループおんなふみ編

BOC出版部

これは「文章の行間から、女の感性が湧き、渦のように流れはじめる」ことを目指し、「女の感性を生な状況から引きは

がし、書き言葉としてとどめようとする  
「試み」を持った女の文芸誌である。

ここでは、すべての人が何と自然に見  
えることだろう。彼らは社会の中に蔓延  
する「常識」というベールをまとった偽  
りの暗黙の了解から解き放たれ、気恥し  
ささえ覚えるほど自然にふるまっている。

そして、固定化されたイメージの女が  
何の疑いもなく語られるのではなく、ま  
た従来見られたように、イデオロギー啓  
蒙のための言葉が先行するのでもなく、  
女が、自分の視点から、自分の想いを、  
自分の言葉で語ってゆく。

「おんなふみ」は、一つの女の集会であ  
る。いろんな想いをもった女が集まり、  
語り、散って広がり、越えてゆく場であ  
る。(島)

(A5判 一九二ページ 九八〇円)

## 野の女

—明治女性生活史—

永畑道子著  
新評論社

副題に示すとおり、女子教育、親子関  
係、風俗、政治、戦争という括り方で、

明治の世を生きた「大衆の女」たちの生  
活を照らし出そうというスタイルである  
が、同時にそこに現代の女たちの生活を  
重ね合わせて論評する意図があるのであ  
ろう。随所に現代主婦批判が挿入されて  
おり、生活史と言うよりむしろ比較生活  
論と言うべき内容となっている。

常日頃、現代の主婦の生き方や現代の  
女子教育に疑問を懐き、鋭い告発をして  
いる著者にとって、往々にして日本女性  
の原型とも讃美される「明治の女」の実  
像は、まさに十分に検証しておかねばな  
らぬ対象であつたろう。同時にひとにぎ  
りの上流の女たちが強いられたい生き方と  
は違う、「大衆の女」たちの厳しい生き方  
をも検証している。

時代の脚光を浴びたエリートの人たち  
の陰に隠れた「大衆の女」たちを知るよ  
すがに、著者は、その時代の新聞記事を  
主に用いた。三面記事に登場する事件の  
女や、米騒動などに勇躍する女たちを資  
料として掘りあげ、実像に肉迫しようと  
いう作業はしかし、時を隔てた時代の、  
しかもメディアとしての発達も不完全だ  
った当時の新聞記事が相手だから、残念

ながら、生き生きとした庶民の生活感  
は読む者に伝わってこない。

おそらくこれは、資料に限界があるこ  
とだけからくるのではないと思う。夥し  
い資料が提出されてはいるものの、それ  
が細切れでしかも記事面だけでは読みと  
りにくいものについてのフォローがない  
のが惜しまれる。著者の詠嘆や推測の一  
言二言で処理されてしまう個所が多過ぎ、  
生活史より、むしろ比較生活論的なもの  
に仕上がっている以上、論理の構築のた  
めに資料ともっと徹底的に付き合うこと  
を希望したい。本文中の難しい漢字につ  
いても、ルビがほしいと思った。(真)

(B6判 二八〇ページ一、三〇〇円)

ドアの向こうに鬼はいない  
—今日を生きたい女の性と生

シリーズ②—

丸山友岐子著

社会評論社

「自立がこわい」女たちに捧げる。萎えた  
足腰を立たせるための歩行訓練の一助に  
なれば幸いと思う」という書き出しに、  
「これはいいぞ!」とにかく女は一歩踏

み出さなきや」と私は内心ほくそえみつつ読んでいったのだが……。

著者は、なりふりかまわずに自立せざるをえなかった。『餅なし正月』など圧巻であるが、それは子どもを抱えて働き始めた女の生活史にすぎない。孤軍奮闘する一人の女の記録が即、本になってしまふことこの不可思議さがつきまとってしまふ。それでも、「おんなとおカネの関係」「おカネに対する女の感性」「迷惑をかける権利」の章は、とても新鮮なものがあつておもしろかった。

願わくば、中身をもう少し整理して、「やる気」で迫ってくるだけでなく、「ふつきれない」でいる多くの女たちに語りかけるぬくもりが欲しいと思うのはぜいたくというものであろうか。同シリーズ①の『わが愛と性の履歴書』も読んでみようと思う。

(Y・K)

(B 6 判 二七一ページ 一、二〇〇円)

## 女の地平から見えてきたもの

—女性記者の自分史—

岸野淳子著  
田畑書店

著者は一九五三年、サンケイの記者となった。敗戦による、「戦後民主主義」と「男女同権」を直接体験した世代である。彼女は「男女平等」を実現するため、そして「真実の報道」をするため、仕事に情熱をそそいだ。

しかし、六〇年安保以後、日本は保守化していく。サンケイ新聞はその先兵となり、合理化と思想の統制を行なう。組合への圧力で、彼女も二年間セールスに回される。絶望の中、くじけそうになりながらも、彼女はがんばる。

けれども現実には、男女平等とほど遠い。彼女は男並みに働いていくことにむなしさを感じ、十五年目に職を辞す。大学の非常勤講師への転進。その中で彼女は自己の中の女意識を発見し、差別され、抑圧された側に向ける視点を持つ。

戦後民主主義の変化と、男女平等の現実が、一人の女性の個人史の中に見事に反映されている作品である。また、「真の報道」とはかけはなれた新聞社の弾圧さらに右傾化の進む現在、マスコミの存在を改めて考えさせる一冊である。(M)

(B 6 判 二六六ページ 一、五〇〇円)

## へあごら読書室

### メンバー募集

女による、女のための出版物も、このところ急激にふえています。読み、考え、評価しあう仲間の集いを持ちませんか。

へあごらには、小さな読書室があります。開設一〇年、蔵書や資料の本格的な整理も必要になってきました。

本の好きなメンバーの参加をお待ちしています。購入図書の見積りや資料整理なども、ご一緒に考えたいのです。

〔連絡先〕

東京都新宿区新宿1-9-6  
「へあごら読書室係」〒160

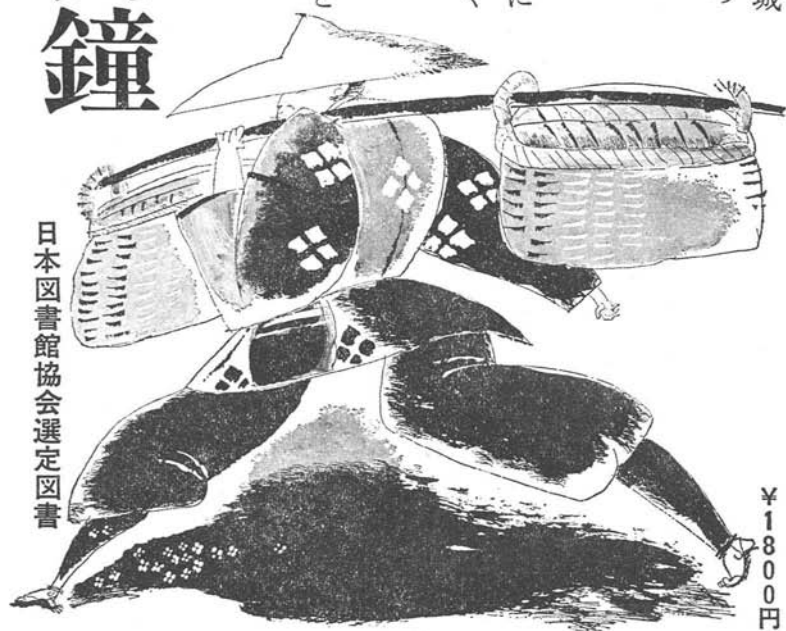
お領内の寺々から集められた釣鐘が、城の片すみに、一時の間、野積みにされとつたそうだが、夜になると、延命寺の鐘が、ひとりでに、

かアんえりたやのーン、オンオンオンて、鳴りだすそうな。最初の鐘は、海に沈んでも、これは、そのあと、新しくこさえた鐘じゃのに、おんなしように、かアんえりたやのーン、オンオンオンて、夜になると、ひとりでに鳴るんじやとい。

● 美森成生 ● 絵

藤川秀之

# 不思議な釣鐘



日本図書館協会選定図書

● BOC出版部  
¥1800円

## あじらのあじら

言いたいことは何でも言おう。感想、反論、情報、思ったことを率直に言う読者の広場です。

## 22 号

「あじら」22号は、はじめ、ティーチ・インを読みかけましたが、急いで手記にもどり何とか読み終えました。たびたび、読む人の側にいる自分に共有するものがないもどかしさを感じましたが、それでも知らされることのあまりに多いのに驚きながら、素直に読ませていただきました。

昨年の十月に、塩沢美代子さんが仙台で、女子の労働現場、賃金について話されましたが、「あじら」20号のティーチ・インがバックにありましたので、こちら外野という感じだった私にも、全身でこの問題にかかわっている人たちの熱気が感じられたもので

した。今回はそれが、個々の人の声が手記という形で伝わりやすく、又聞きでない確かさで、今、働いている、そしてこれから働こうとする女一般の問題にまで広げられるような気がしました。

(仙台・三船照子)

\*

下手なおしゃべりを上手にまとめていただいたうえ、ご批判をありがとうございました。上げたり(?)下げたりしていただき、とてもおもしろうございました。それよりも、皆様の座談会がよかったと思いました。男社会ととらえる発想だけでは片づかないという点をはっきりさせていたことなど、とてもうれしくございました。それから、

これまでの経緯など、明快にまとめて下さった斎藤さんのご労作、感謝いたします。ほんとうに大変でいらしたことでしよう。(東京・近藤悠子)

\*

「男女平等と母性保障」、資料としても時宜に合って、貴重なものだと思います。早速、ティーチ・インから読み始めました。\*母性\*の定義は、私自身もかねてから疑問をもっており、母性保護か、母体保護か、対応する父性とは何なのか、いつも「?」をかかえていますので、おもしろく読みました。

女性解放運動の「接着剤」的存在として、いっそうのご健闘を祈ります。

(名古屋・野村貴美子)

\*

書店で初めて手にして、捜し求めている本にめぐり会った気持ちでいっぱいでした。「いま、女の働く場は」と「い

ま、私たちがしなければならぬこと」の二大記事が生活と密着してて実感がこもり、非常に興味深く拝読させていただきました。

今後に期待します。

(小牧・林 結代美)

\*

「男女間の賃金格差をどうする」の論文は、とても興味がありおもしろかった。このような論文もとりにあげて欲しい。「保護派と平等派の接点を求めて」は難しい問題であると思うが、どっち派ともいえない問題であると私は思う。

「インタビュをを終えて」でインタビュの人をあれこれ批評するのは失礼ではないか人間、育った環境、学歴等で意見は異なるし、感想は読者にまかせるべきではないかと思う。(千葉・田側衿子)

## あじら

昨年、東京にいたときは、

講座などに参加しようと思えばできたのですが、今春から山形に来て、同じような話をする仲間もなかなかみつからず、腰の重い自分にふと寂しさを感じるこのごろです。同じような思いの人、山形近辺の人、いらつしやいませんか？山形地区の拠点を呼びかけられたらと思います。

私はこの春、会員になったばかりの一主婦です。「あごばら」という雑誌に出会って私の結婚後五年間のぼく然とした迷いと悩みが初めて一つの形にまとまり、心の中を整理することができるようになりました。なんと、この月日の長かったことでしょう。巷にはずいぶん女性問題へのさまざまな意見が飛びかっていますが、私たちのように家の中

に、いわゆる専業主婦としてウロウロしている人間には、ほど遠い世界のことばかりでただあせりを覚えるか、自己嫌悪に陥るしかないようなことばかりでした。専業主婦たちは、皆、家庭にだけいることに満足しているわけではないのです。皆、方向を失い、迷い悩んでいるだろうに、そんなことはいわゆる婦人解放運動の中でも、あまりに少なくしか語られていないことに、私はずっと不満でした。このような主婦たちの存在を無視したところに、本当の婦人解放の発展はありえないと信じるからです。

しかし、へあごら」に出会って、一部進歩的グループだけではない、もっと身近な女性たちが共感し、語りあえる場があることに、本当に喜びと心強さを覚えたのです。

今は、洗剤公害、食品添加物等の身近な問題をグループをつくりながら追及しつつ、生活を見直そうという運動へ広める努力をしています。生活の中には次々と問題があり、そして、それらを深く考える姿勢がまだ浸透していない現実、に、我が身の微力さを禁じえません。

へあこらの皆様、こういった問題にもぜひ目を向けていただきたいと思います。女は産む性である以上、人間の生存を守る力をもっているものと信じるのです。

誰もが住みよく、生きやすい世の中をめざして、いろいろな方面から努力していきましよう。

(坂戸・松山雅子)

「あごら」が、もつとたく  
さんの人たちの目に触れるこ

とができたらいと思う。具体的な社会参加の場が無く、家庭に埋没し、育児に忙殺されている、女が安易に目にし、手にする、メディアに代わる、良いものが少ない。その点、『あこら』が普及し読みやすく、かつ、独自性を出し続けることを期待します

過日はコペンハーゲンの世界民間婦人会議へ御参加の由お慶び申し上げます。倦くなく御努力報いられて、最近きわが国婦人が外交官試験にも司法官試験にもそれぞれ一〇%通過とのこと、四〇年間女子大学に教鞭をとったものとしても、御尽力の報いられたことをうれしく存じます。

# 新聞 切抜帖

1980年3月1日から  
1980年8月31日まで

## 法・制度

離婚訴訟お高くなります

法務省が、民事訴訟手数料  
値上げの改正案を。実質三倍  
の大幅アップに日弁連は反対。

(3・2読売)

遺産相続、寄与者に厚く

法務省は五日「寄与分」制  
度の条文整理。共働きや親の  
看護は「寄与」とされるが、  
家事による内助の功は「寄与」  
とみなさない。

(3・6毎日)

寡夫、控除

衆院大蔵委員会で蔵相が男  
やもめの未亡人並み税控除を  
前向きに検討する意向を。五  
六年度税制改正で実現か。

(3・6日経)

相続二分の一まで無税に

大蔵省は、遺産相続の改正  
による新法定相続分を非課税  
になるよう、改正案を国会に  
提出する予定。

(3・7毎日)

配偶者の相続分二分の一へ

妻の生活の安泰が今回改正  
の眼目。夫婦財産制(別産制  
か共有制か)の問題を残しな  
がらも、多くの支持を得て国  
会通過確実。

(3・8読売、3・1朝日)

生理休暇は欠勤扱い?

生理休暇をとると精勤手当  
をカットするのは違法として  
日野市の絹生産会社の女子従  
業員らが訴えていた裁判で、  
一九日東京高裁は控訴棄却。  
「生理休暇の乱用抑制のため  
の手当であるから適法」と。

(3・20読売)

広がらぬ「育児休業」

労働省の民間企業育児休業  
奨励金制度、今年から額が二  
倍になったものの、依然低調。  
企業側に「メリットなし」の  
声。

(4・8信毎)

「家庭の日」法案

政府は、「家庭の日」を六月  
の第一土曜日とする要綱をま  
とめ、自民もこれを諒承。今  
国会に提案の予定。

(4・12各紙)

女性の強い反発に、国会  
での新設は見送られる雲行き。

(4・21毎日)

幻舟、初公判

起訴事実を認め、「家元制度  
解体のため」と動機を主張。一  
八日、東京地裁で。

(4・18毎日)

陳さん、やつと自由に

ラオスの政変を逃れて日本に  
入国、罪に問われて収容さ  
れていた陳美蘭さん(二一)  
が、二三日仮放免された。日  
本への永住を希望。

(4・23毎日)

乳房切除、許せない!

乳ガンの誤診を受け、乳房  
を切り取られた女性(三六)  
が、病院に対し損害賠償を請  
求。二五日、京都地裁は「女  
性が乳房を失った苦痛は大き  
い」として原告に軍配。

(4・25読売・毎日)

初の女性最高裁調査官

伊藤瑩子さん(四二)が東  
京地裁判事から。最高裁判事  
の裏方として資料収集や調査  
活動にあたる。

(5・1読売)

相統改正案、参院通過

九日、全会一致で成立。来  
年一月一日より実施。

(5・9朝日)

ハワイにあげた子返して!

女兒を手離してしまった夫  
婦が縁組先のハワイの日系二  
世を相手に、二日引き渡し請  
求訴訟を大阪地裁に。一六日

「日本の裁判権に服しない」  
と棄却されたが、二四日ホノ  
ルルの家裁に異議申請。二人  
でわが子を育てたいと。  
(6・1、6・17、6・25朝  
日)

女性再就職の呼び水

労働省は、公共職業訓練を  
専修・各種学校で行なうこと  
を決定。授業料、入学金全額  
支給で、看護婦・保母・デザ  
イナーの養成等を優先させる  
考え。よりよい職場を求めて

女性の申請者が増えそう。

(6・18日経)

主婦の家事休業補償

暴走馬に衝突され負傷した  
母娘が飼い主に対して損害賠  
償を請求。二五日静岡地裁は  
満額認める。主婦の家事労働  
休業補償が定着しつつあるも  
のとして注目される。

(6・26信毎)

結婚で配転拒否の男性社員

結婚して共働きするといふ  
理由で配転を拒否、解雇され  
た川崎重工の近藤正博さん  
(二四)の仮処分申請に、神  
戸地裁は「会社の労務指揮権  
の濫用」と解雇無効を命じた。

(6・28朝日)

国籍法の改正検討

法務省の貞家民事局長が四  
日発表。土井たか子氏の国籍  
法平等化の要望に答えて。

(7・5読売)

悲劇生む日本の国籍法

父系血統主義のため、国保  
にも入れず、資格やパスポー  
トもとれない無国籍児を生ん  
でいる。子どもと女性双方の  
権利擁護の立場から改正運動  
が盛り上がりつつある。

(7・14朝日)

戸籍ミスで夫の父と結婚

慰謝料請求を京都地裁が門  
前払い。  
(7・18朝日)

財産の二分の一は妻のもの

横浜地裁は一日、婚姻後の  
財産は共有であるという妻(六  
〇)の主張を認め、会社社長  
の夫(六六)に対して一億六  
千万円の支払いを命じた。財  
産分与・慰謝料とも最高額。

(8・2朝日・毎日)

消費生活アドバイザー発足

新しい資格として十一月に初の試験。主婦らの関心が高いが、企業側の受け入れ体制はまだだ。(8・5読売)

初の女性副部長検事誕生

一五日、山崎恵美子さん(五二)が東京地検に。論理的なものと考え方と感情の細やかさがかわれて。

(8・15読売)

夫の死知らず婚姻、出生届

婚姻届を出し忘れていた間に夫が蒸発、死亡。知らずに出産、届けを出した母子の認知請求控訴審で、大阪高裁は「例外認められぬ」と一審判決を覆し、訴えを退けた。

(8・29京都)

## 政治

都内初の老人ケアセンター

練馬、中野両区は共同で在宅寝たきり老人短期受け入れ施設富士見台ケアセンターを五月に開設する。

(3・11毎日)

長野県庁に女性係長

婦人年にちなみ二人誕生。

(3・19信毎)

妻の年金加入「強制に」

参院予算委の「婦人問題集中審議」の席上、野呂厚相がサラリーマンの妻の年金問題に積極発言。(3・29毎日)

京都に初の女性部長職

府人事委事務局次長に山崎

桂子さん(五三)。

(4・20朝日)

第三二回婦人週間

労働省の東京婦人少年室は

「男女平等と婦人の社会参加」をテーマに東京地方婦人会議を開催。二二〇人が参加。

(4・21毎日)

「保育見直し」諮問

鈴木都知事が、保護者負担などを含めて、保育料値上げ。未認可保育所への補助もレベ

ルダウンか。(4・24毎日)

社党、婦人政策発表

雇用平等法の制定、パートの権利擁護、トルコ風呂の禁止など八五項目にわたる。

(5・1毎日)

政策の具体案として、婦人問題専任婦人国務大臣の設置

や総理府婦人問題担当室の法的位置づけ、それに総額三〇億円の母性保障基金の設置などを発表。(6・8毎日)

通産省にも女性課長誕生

日用品課に、女性キャリア

が。(5・2各紙)

OECD高官会議

高橋久子代表が出席したバリ会議で、OECDは、婦人の職場進出は短期的にはコスト高でも、長期的にはプラスという見解を表明。

(5・12毎日)

福岡にとつと女性係長

県の人事異動で、係長級への昇任者の三分の一を女性が占めた。福岡県婦人問題懇話会の提言を受けて。

(5・13西日本)

「女性老人対策」

都の社会福祉審議会は、中間答申の中で、特に女性の老人対策の必要をあげ、妻の年金権確立などを提言。

(6・13毎日)

衆参同時選挙

東京で衆院選に女性候補七人。「妻の座」の自民に「働く女の権利」の社共、いずれも「すごい手応え」と自己評価。

(6・17朝日)

市川房枝さんの「理想選挙」五度目の勝利、二百七〇万票を越すトップ当選。

(6・24各紙)

千夏ちゃんも大勝利。

(6・24各紙)

当選十三回の山口シズエさん、落選。

(6・24朝日)

公取委に初の女性課長

大熊まさよさん(三七)が官房渉外室長に。国際派の実力買われて。(6・28読売)

四年ぶり女性局長級

都は、民生局次長に金平輝子さんを起用。美濃部都政時代の縫田暉子民生局長と貞閑晴中央図書館長以来の待遇。

(7・12朝日)

共産党に女性・常務

小笠原貞子参院議員が常任幹部会委員に。先に女性副委員長を誕生させた社会党に對抗して。

(7・31朝日)

「買春観光」に比から抗議文

フイリピンの婦人団体等からの抗議文を受けとった運輸省観光局は、回答に苦慮。

(8・10朝日)

名古屋市婦人問題担当室

開設三年、ようやく固まった土台。民間団体と協調して調査・研究・講演会などを。

(8・29朝日)

## 労働

女子大生の就職好転

各大学がまとめた今年の就職状況では予想外の女子の伸び。昨年より四〇―五〇%増の求人、大方が内定。

(3・17読売)

西武デパートは大卒すくめ

大卒女子の定期採用を始めて十一年目、五九七人に達して国内最大。今年も一四七人が入社する。(3・19朝日)

かなりの定着率見込まれて

富士通が大卒女子百人採用。うち九二人が技術要員用。うち九二人が技術要員。

(3・25朝日)

家電営業をやらせてみたら

昨年、試験的に大卒女子を登用したゼネラルが、今年も五人を第一線に。

(4・26日経)

時間給二八五円

労働省の家内労働実態調査

によると、内職者の時給は男女平均三一円。女性はわずか二八五円で、一日六時間以上働いて三万二千円ぼちち。

(5・15各紙)

労働手帳まだ四二%

税金を恐れる主婦の意識が厚い壁。(5・21朝日)

パートは組合アレルギー

商業労連が翼下の組合にかけたパート主婦組織化の号令、拘束を嫌う主婦を相手に難航中。(5・27日経)

依然多い差別企業

企業の女性差別改善を指導中の厚生省の調べでは、まだ九七〇〇社が、結婚退職制や若年定年制など問題をかかえている。(6・4毎日)

ゼンセン同盟もパート対策

待遇改善もさることながら、

パートの増加による組合の闘争力低下を憂慮して。

(6・16日経)

定年、六〇歳以上が主流

労働省の雇用管理調査の結果、初めて五五歳定年の企業を上回った。(7・6各紙)

男女で家庭責任を——第六六ILO総会

議題の一つは「男女労働者の機会均等と平等待遇——家庭責任をもつ労働者」。男も育児・看護休暇を、パートは労働復帰の自由を、等が語られ、雇用条件の平等が討論された。

(7・7読売)

賃下げ求めたらクビ

Bランクで採用されたはずの女子職員に、本部のミスでAランクの給料を支払い続いていた駐日EC委員会が、職場内の気まずさから賃下げを

求めた本人をクビに。

(7・11朝日、7・24毎日)

魚住友子さん、ミスを認めず力量に不満一点張りのEC側を相手取り、東京地裁に仮処分申請。(7・24毎日)

来年の採用予定は

明るい見通しの男子に比べて、女子は短大卒が一二・五%増となるものの、大卒女子は横ばいで、八二・九%の企業が「採用予定ゼロ」回答。日本リクルートセンターの調査。(7・23各紙)

男独占の職場に女性技術者

一昨年から重電システム製作に女性技術者を採用、目下五〇人を抱える東芝が、来春は一挙に五〇人の採用予定を。(7・30日経)

奥さまスチュワーデス

十人に一人は既婚の日航ス

チュウワーデス。間もなく子持ちも誕生。高給料に会社は悲鳴。(8・6読売)

マンパワー要員は日雇い?

これまで日雇労働者健康保険の適用を受けられたマンパワーのスタッフに対し、社会保険庁は、「雇用形態が変則的」だとして、この七月から適用をはずし国民健保への切替を指示。(8・19朝日)

## 活動

「八王子ぞめき」に異議あり

地元のレコード化に、矯風会八王子支部や同市教組などが反対運動。「折って頂戴散らぬ間に」などの歌詞が問題。(3・7毎日)

「国際結婚を考える会」

外国人を夫に持つバンリーロップ・三浦信子さんが、共通の難問を抱える仲間と呼びかけて。まずは国籍法に取り組む。(3・11朝日)

「ストップ・ザ・汚職議員」

闘いの記録が本に。市川房枝さんの編著で新宿書房から。(3・12毎日)

浜田氏喚問要求

日本婦人有権者同盟など六団体が、各方面に強い働きかけを展開。(3・22読売、4・14各紙)

ボーヴォワールの映画公開

「ボーヴォワール自身を語る」がワークショップ・ガルダの主催で開かれる。「あんふぁんて」の有志が託児協力。(3・25朝日)

## 「自立の家」オープン

南佐久白田町の旅館業佐々本都さん(五一)が、自分の旅館の一角に、女性史研究家もろさわようこさんらと取り組んでいる「歴史をひらく家」づくりの一環で、「女の自立的な生き方をつくり出す拠点」と。

(3・27信毎)

## 「草の実会」誕生二五年

機関誌「草の実」も二五〇号を突破。東京に住む二人の会員がバックナンバーを地元の図書館に寄贈。

(4・9朝日)

## 東北初の女性奉仕団体発足

パイロット・インターナショナル・クラブの支部が盛岡に。(4・11朝日・東北版)

## 主婦パワー春闘支援

国鉄労組員の家族でつくつ

ている国労大阪地本家族連合会の主婦が大活躍。炊き出しばかりか、当局との団交やストに檄。

(4・15朝日)

## 「ボランティア・センター」

婦人ボランティア・スクールの卒業生が、自分たちの力だけで設立。保谷市の老人ホーム尚和園内に。

(4・29毎日)

## 女性雑誌を調査

川崎市の主婦グループが、月刊・週刊、各六誌ずつを調査。結論は、「広告が三割」「猥褻的婦人像を意図的につくっている」と、想像以上のひどさにびっくり。

(5・3朝日・毎日)

## 「おんなふみ」創刊

ウーマン・リブの運動のはてに生まれた初めての女の文芸誌。「グループおんなふみ」

編集でBOC出版部より発売刊。(5・8毎日)

## 大阪の「女性差別一〇番」

二日から四日まで、大阪婦人会議内に設置された電話に相談一〇二件。家庭内の悩み三八件、次いで職場が二九件。「上司から肉体関係を強要される」という訴えも。

(5・28京都)

## 労基法研報告にモノ申す

「私たちの労働実態から批判しよう」と大阪総評婦人協が二万人調査。「実態を踏まえずに書かれた報告に疑問を感じたから」と伍賀哲子さん。

(6・2京都)

## 集会所は保育所にあらず

団地内で週二日共同保育をしていたグループを、公団が締め出し、「預けっぱなしの保育園とは違うのに」と母親ら

再使用要求。(7・19朝日)

まだ残る。女夫の出不足金、

広島で、地域の共同奉仕作業に女性が出るとき、労力差として金を持参する慣習が全県の一割に残存することが判明。同県の婦人少年室や婦人団体が廃止運動へ。

(7・22毎日)

## 草の根女性三百人が執筆

戦争を知らない世代に語り伝えたいと「戦中戦後・母子の記録」全十巻完成。京都の笠原政江さんの呼びかけで。

(7・30京都)

## アセス条例で要望書

主婦連など都内の婦人八団体代表は六日、野村副知事と都議会各党に要望書を手渡しした。

(8・7読売)

## 自衛隊の「チビッ子大会」

武器展示、ジープ試乗、ミ

ニ制服を着せての記念撮影。

軍国主義教育につながると、

新日本婦人の会県本部など四

団体が中止の申し入れ。

(8・9信毎)

女子学生就職差別に手引書

早稲田大学政経学部的女子

学生たちが「私たちの就職手

帳80——女子学生のために」

を自主出版。(8・16読売)

女性総合誌「山陰の女」

島根県斐川町の岡より子さ

ん(八四)が呼びかけたミニ

コミ誌、創刊四年目で五倍増

の千部に。女の自覚と解放か

かけて。(8・31読売)

## 集会

婦人教育交流集会

国立婦人教育会館主催で、

作文選考にパスした男女一〇

五人が集う。女の生き方をめ

ぐって活発な議論が。

(3・4毎日)

労働法のたたき台

一日、日弁連・女性の権利

に関する特別委員会がパネル

討論「これからの婦人労働法

制を考える」を開催。たたき

台となる法案を各界に提案す

ることを表明。

(3・19信毎)

NHKに座り込み

テレビ「英会話IIテキスト」

に出てくる「女房なんでもの

はどうにでもできるのです

よ」という一連の会話に抗議

して、行動を起こす会が一二

日、放映中止を申し入れ。

(4・13毎日)

番組は一部手直しされたた

けで、予定どおり放映された。

四八団体中間年四月会議

十二日、主婦会館で。五年

間の評価・点検を要求する決

議、諸要求三七項目を採択し、

十一月に三千人規模の民間女

性の集会「中間年日本大会」

を開くことも確認。

(4・15朝日、4・17読売、

4・18毎日)

教科書検定に男女差別項目

二六日、行動を起こす会が

教科書問題でシンポジウム。

検定項目に男女差別表現の項

を設けることと、ガイドライ

ンを作ることを満場一致で決

議。(5・8毎日)

沖繩のトートーメー

那覇市で「男女平等に向け

て沖繩の習慣を見直そう・ト

ートーメー(先祖の位はい)

は女でも継げる」というデー

マのシンポジウム。禁制の女

が継いだ、たたりなどなか

ったという体験発表続出で盛

り上がった。(5・21読売)

各党に聞く会

二二日、婦人有権者同盟な

ど九団体が「衆院・参院選を

前に政党・政治グループの政

策をきく会」を開いた。ホン

ネは出ずじまいの各党答弁に、

婦人票は欲しいが婦人施策は

選挙戦の決め手にならないと

の腹がチラホラ。

(5・24毎日)

働き続けるための集会二つ

二二日、全国婦人の集い中

央集会が既婚者問題を中心

に。はたらく婦人の中央集会

も二四日、家庭の日をテーマ

に。

(5・27朝日、5・29読売)

## 女性学シンポジウム

二四日、日本女性学研究会が「大卒女性の就業をすすめるために」をテーマに。

(5・28毎日)

## 五回目の日本婦人問題会議

労働省が地域での活動事例を一般公募。三〇日の全国集会で入選者が成果発表。

(6・2各紙)

## 男にも育児時間を!

一二日、「労基法改悪に反対し、男も女も育児時間を」実行委の男女が集会。一日二時間の育児時間を各企業に要求することを提案。

(7・7信毎)

## 第二六回母親大会

日教組と総評が不参加のまま八月二日から開かれる。

(7・14読売)

## 初の京都市婦人会議

一九日、「行動計画」策定に積極的に参加しようと結集。

(7・20京都)

## 国際家政学会マニラ会議

「発展のための責任あるパートナーになろう」を合言葉に「行動する学問」へ積極姿勢を示す同会は、コペンハーゲンの世界婦人会議と同じ流れの上にあることを確認した。

(8・7日経)

## 全国高校女子教育問題研究会

五日から新潟で、「女が働く意味と権利を女子高生に伝えるには」をテーマに。「忙しい母を見て共働きを否定する生徒が多い」という声に、一同深刻。

(8・12読売)

## 軍国の母、もうごめん

一五日、反徴兵・反靖国国

家護持をスローガンに「草の実会」が集会とデモ。三六年以来毎年かかさず。

(8・15朝日)

## 調査

### 離婚族は早死に

円満組に比べて、男十二歳

女五歳も平均寿命が短いと、

厚生省人口問題研の「日本人

口の動向」調査。自殺と、栄養

のアンバランスからの結核が

多いのが特徴。

(3・26毎日)

### 仕事は厳しく教えて

スパルタ式社内教育を望む

新入女子社員が二五・三〇%昨

年一一%も。大卒女子は三

九・四%(同一八%)。太陽神

戸銀行が取引先の新入内定者

に行なった調査。

(3・26日経)

働く女性、今世紀末九億人に

ILO、「世界の女性労働者

に関する調査」で見通し発表。

(4・5毎日)

### わが子の婚前交渉

「認める」人六七%と開けたヤングミセスたち。月刊「シ

ョッピング」の調査。

(4・11日経)

### 新婚ほど危機

離婚率の最高は結婚一年未

満組で、千組中十五組という

厚生省の「わが国離婚の動向」

調査。三年目がピークの米国

に比べて、見切り時の早い日

本の若者。

(4・13毎日)

### 生活保護の父子家庭像

都が全国初の実態調査。都

内の被保護父子家庭は四九一

世帯。うち四〇%が子育てのために辞職・転職。

(5・3読売)

「働きたい」主婦たち

子どもの手が離れた主婦のうち四八・七%が就業。子どもが小さくてまだ働けない主婦も二人に一人は就業志向。中野区の「婦人問題実態調査」(5・3毎日、6・1読売)

高校生の、異性像

男女ともに「やさしさ」を好み、男らしさ女らしさには興味薄。親から「女らしさ」の躰を受けた女高生は六三・九%。全国高校長会で報告された「現代高校生像」調査。

(5・31朝日・毎日)

都民相談に、悩める女性

昨年の「家庭生活」の相談は前年比四割増に。離婚相談八割増、遺産相談六割増と、

女性の権利意識の高まりを反映。(6・11各紙)

出産また低下

厚生省の「人口動態調査」によると、人口千人あたりの昨年の出産率は一四・二となり、四一年のひのえうまの年に次ぐ低率。適齢層の減少にもまして意欲の減退が深刻。

(6・17各紙、8・23読売)

死に急ぐ離婚男性たち

警察庁の「自殺白書」によると、離婚した人の自殺率は女四六・九に対し男は二一・六。一。家事能力に欠ける男の悲劇くつきり。(6・20各紙)

働く主婦増える一方

女子の有業率は四五・六%と上昇。主婦の有業率も四五・九%で三五歳から五四歳の中年層が最も多い。総理府の「就業構造基本調査」

(7・6各紙)

平均寿命また延びる

男七三・四六歳、女七八・八九歳に。男女ともイスラインドに次いで世界二位。八〇年代後半に女子は八〇歳を超えると厚生省は推定。

(7・6各紙)

覚せい剤、主婦をむしろむ

厚生省の麻薬白書によれば、覚せい剤検査者一八、五五二人中主婦が二・三%と、前年より六割増。(7・9日経)

離婚、手切れ金、急上昇

全国の家裁取扱いの離婚一件あたりの支払額は、四三年四九万円だったものが五三年には一八六万円に。最高裁判所事務総局家庭局の調べ。

(7・28日経)

六年ぶり雇用増

女子未就業者の就職は前年より二五%増の七二万人。三〇歳から四〇歳までの主婦が四六・二%を占める。ただしその四割はパート。労働省の「雇用労働力移動調査」

(8・3毎日)

風潮

主婦に流行、タウン誌作り

全国推定六百誌。発行人や編集長の三分の一は女性。

(3・3日経)

国鉄初の女性駅長

山陰線乃木駅に。吉川寿栄さん(五一)が。

(3・7毎日)

英語力でも男性しのが

英語能力を検定するTOE

ICの第一回テストの結果、女性が男性を上回る成績。

(3・8朝日)

第一回女子サッカー選手権

昨年発足の日本女子サッカー連が、大会を開くことに。

(3・11朝日)

「私の大学」開校

公害訴訟集会がきっかけで学者と住民が手づくりの「大学」を作った。講師陣は家永三郎氏らで、運営もカリキュラムも生徒と相談。

(3・11毎日、7・3日経)

「マザーリング」創刊

育児書と教育書の間を埋める新しい試みの雑誌。池上千寿子さんが編集長に。広告全廃も特色。

(3・12朝日)

思い出の女子早慶レガッタ

昭和三十一年に始まり四三年

に部員不足で中断されたままになっていた女子戦復活。OGのママさんが選手に。

(3・13毎日、4・17毎日)

鼻自慢を募ってみた

杉並区環境悪臭の判定人募集に定員の六倍もの主婦らが。

(3・14読売)

商船大に紅四点

今年から解禁の門へ、十一人が挑戦し、四名合格。

(3・15各紙)

ホームヘルパーやあい!

介護を必要とする老人家庭の増加にヘルパー制が追いつかず。地位と待遇が自治体ごとにまちまちでなり手も少ない。

(3・19読売)

舎監つき女子大生アパート

厳しさ売り物の女子寮が都内に二百か所も。入館料百万

円もザラ。(3・29日経)

本格番組「女のひろば」

下村満子さんや袖井孝子さんら八人の実力派キャスター勢ぞろい。テレビ朝日が三二日から週四日でスタート。

(3・29毎日)

テレビ司会者に主婦殺到

福岡RKB毎日放送の主婦向けテレビ番組の新司会者募集に二百人。

(3・29西日本)

防大に初の女性自衛官

理工学研究科に。だが本科はまだ女人禁制。

(4・6毎日)

内職アルバイトの甘いワナ

内職やアルバイトをエサに主婦や学生を集めて商品を売りつける新種商法が横行。ネズミ講方式の巧妙な手口も。

(4・24読売)

女性だけの店、の動き

東急観光の四ツ谷営業所の売上は目標の一・五倍と好成績。他方、運送業、レストランでも女性だけの店の計画が進んでいるが、「女性だけの店」から、「男性もいる店」に変わったところも。

(4・12読売)

男も、化ける、世の中に

都内の美容整形医院を訪れる男性が急増。アラブの金持ちとともに「選挙用の顔に」と議員さん。(4・17読売)

ふえてる女流棋士

囲碁人口の一割は女性というブームの中、女流プロは目下二〇人。(4・17日経)

「離婚もの」旋風

映画「クレイマー、クレイ

「マー」が日本でも大ヒット。TV界にも、NHKの「離婚」シリーズや民放の「離婚ともだち」などが登場。

(4・18朝日)

ダイエーも女性重役

消費者サービス室長の馬場禎子さん(四七)が内定。

(4・21朝日)

子育てパパ

父親向け育児講座がどこも満員。三越主催の「母親大学」にもかけたパパあり。

(5・3読売)

初の性教育文庫

和歌山県立図書館に開設。

大胆な写真や図解もあり、閲覧は研究者だけに。

(5・4朝日)

もてもて「国際公務員」

脚光浴びるポスト目指して

津田国際研修センターでは、百人を超える人たちが勉強中。

国連からの日本人求むの声もあって、実力派女性に転職のチャンス。

(5・12朝日)

トンネル騒動

「女立ち入るべからず」と福岡県下のトンネル工事現場が婦人町議を堂々拒否。

(5・15読売)

青函トンネルでも、昨年七月、小林政子衆院議員が拒絶されていた。

(5・20読売)

体育祭に女子柔道

江戸川区が今年から新設。

(5・17読売)

門閉ざす父子家庭

利用者がさっぱりいない、三鷹市や所沢市の父子家庭用ホームヘルパー制度。ボランティアの主婦が随時待機しているが。

(5・24日経)

女性住職

岩手県水沢市の黒石寺に、二七歳の女性住職誕生。

(5・15読売)

講演会ジブシー

今日は講演会、明日は研修会とわたり歩く主婦の一群。エネルギーの受け皿が無いことも一因に。

(6・2信毎)

旅館業界に、女性同盟

ベテランが横の連絡をと多田幸子代表が呼びかけ。「男性監視ではありません」と。

(6・25日経、7・10毎日)

女性専用車売り出す

女性免許取得者、九百万人時代に、「的は女」のセールス合戦。

(7・8毎日、6・6読売)

出席は男子に限る

ニューヨーク日本商工会議所・日本人クラブ・日系人会が合同で昼食会。が条件は男子のみ。招待状を受けた赤松公使は即座に破り棄てた。

(7・10朝日)

児童文学のタブー消失

世相を映して離婚や家出、未婚の母などの登場盛ん。

(7・14毎日)

女のせい？雨降り秋田竿灯

女人禁制をやめて以来の雨降り続きに、「やはり女を祭りから締め出そう」という強硬派。

(7・14朝日)

女性の反撃で例年どおり女性もOK。いわれなき差別を証明するかのような秋晴れに。

(8・6毎日)

PTA新聞に新傾向

「受験実用知識」主導型から「生きざま」志向へ。総合ジ

ヤーナリズム研究所が全国の小・中学校PTA新聞を分析。

(7・31毎日)

航海・に女性殺到

東京商船大の恒例夏の公開講座に、今年は女性大幅増。

(8・10読売)

「個人年金保険」大受け

M生命の新型保険に若い独身女性が我も我も。六五歳まで長生きすれば掛金の三倍になるとはいえ、老後に備える女の熱意に、仕掛け人たちもビックリ。

(8・11日経)

パワーリフティング

国分寺のジムには、女門下生二〇人。今年五月に米国で開かれた第一回女子世界選手権大会に参加した四人は、団体四位に。

(8・14朝日)

女性せり人登場

東京神田中央卸売市場に。

数年前足立市場に一人いた女性に、激務にやめて以来のこと。

(8・30日経)

## 教育

二歳児向けTV番組

NHKが実験的に五日間放送。二歳児もテレビを見る現状に、それなら系統的教育プログラムをと。

(3・12朝日)

孫のつもりで鍵つ子預かる

西宮市の軽費老人ホーム「一里山荘」が、五月から保育事業を開始。

(4・9朝日)

開かれた大学花ざかり

都内各大学の公開講座、コンピュータからテニス教室ま

で。五一校が公開中。

(4・26読売)

聖和女子大が男女共学に

幼児教育者養成で百年の伝統を持つ西宮市の同大が、五六年度から共学に踏み切る。「幼児教育を女性だけにまかせず」との考えから。

(5・3朝日)

やつと共修、中学家庭科

新指導要領に伴い別々だった教科書も一種類に。従来の相手領域に相互乗り入れが可能になったが、その選択は学校が。

(5・22毎日)

女子進学率、九五%台に

続伸する高校進学率、女子は九五・四%に。文部省調べ。

(7・25毎日)

「看板に偽り」の専修学校

専修学校、各種学校の中に

はパンフと実態の大幅ギャップのある所が多く、情報不足で泣く例も。

(8・2朝日)

足りない学童保育所

小学一、二年生のうち留守家庭児童は七二万人。学童クラブに入所できるのはわずか九万人だけ。

(8・21毎日)

隔週定時制の女生徒不健康

泉州機業地の隔週定時制府立貝塚高校の教師が実態調査。大半が深夜業で難聴や腰痛に苦しんでいることが浮き彫りに。調査結果を生徒の出身校に送った教師らに対し、企業側は猛反発。

(8・30朝日)

## 健康

た人の出産は全国で初めて。

(4・9毎日)

タンボンで奇病

米国で生理用タンボンを使っていた女性が、有毒ショック症候群という病気にかかり二年間に一二八人が発病、うち一〇人が死亡していたことが明らかに。厚生省も関心を寄せている。(6・28読売)

ドオギノンで奇形児?

産まれる寸前の胎児の心拍数を見守る「トロコンピュータ」が開発された。異常分娩早期発見が可能に。(3・24毎日)

排卵誘発剤は安全と厚生省

が、多胎妊娠率は無使用に比べ九倍以上。多胎防止が今後の課題に。(3・31毎日)

じん臓移植の母が双子出産

死んだ人のじん臓を移植し

ペーチェット病ナゾの逆転

この七年間に女性患者が急増。男性を三〇%も上回り、「男に多い」の定説くつがえる。(8・23毎日)

## 本

『人物婦人運動史』

生き証人へのインタビューを軸に。金森トシエ著、労働教育センター刊。(3・2読売)

『女性学ことはじめ』

岩男寿美子、原ひろ子共著。講談社現代新書。(3・6毎日)

『日本の子殺しの研究』

宇都宮大の佐々木保行助教

授らの共同研究書。高文堂出版社。(3・10毎日)

『手の知恵——秘められた可能性』

第一回サントリ―学芸賞受賞。藤原房子著。山手書房。(3・16読売)

『羽仁説子の本IV ある人間形成』

羽仁説子著。草土社。(4・6読売)

『自然出産——女の自立とゆたかなお産』

ダナエ・ブルック著。山田美津、秋山洋子、横尾京子訳。批評社。(4・12毎日)

『モザイク社会の女性たち』

女の目で見たカナダの素顔。深尾凱子、菅原真理子の共著。ELEC出版。(4・20読売)

『昭和史のおんな』

マスコミをにぎわした八つの事件の女性像。澤地久枝著。文芸春秋社。(5・5毎日)

『会いたくても会えない』『あなただけへ』

『アテナノナイデガミ』の大里知子さんの第二集。脳性小児マヒをおして、またタイプで。(5・17朝日東北版)

『メキシコからの手紙』

インディオ居住地での生活記録。黒沼ユリ子著。岩波書店。

(5・18朝日、5・19毎日)

『とくと我を見たまえ』

『小公子』を日本に紹介した若松賤子の伝記。山口玲子著。新潮社。(6・9読売)

『ワシントン シングル・ウーマン』

アメリカ女性の多様な生き方をドラマチックに描く。千野境子著。三修社。

(6・19毎日)

『女弁護士雅子の目』

渥美雅子著。毎日新聞社。

(6・23毎日)

『女がひらく仕事の世界』

『選り抜き十七人が語る私の修業時代』と副題。有馬真喜子編著。学陽書房刊。

(7・5日経)

『マリコ』

日米開戦の暗号にその名を使われた混血少女の半生記。柳田邦男著。新潮社。

(7・22朝日)

『母と子の絆』

試練のエピソードの数々語る手記。沢田美喜著。PHP研究所。(7・28朝日)

『近代日本婦人問題年表』

重厚な内容を伴なう『読む年表』。丸岡秀子さんら八人の女性による労作。ドメス出版。(6・25日経、7・28毎日)

『ソ連の女たち』

ソ連の通信社の東京支局長が書いたソ連の平等の実情。鴨川和子著。すずさわ書店。

(7・29朝日)

絵本『ひろしまのピカ』

『原爆の図』の丸木俊さんが児童向けに。小峰書店出版。

(8・5毎日)

『あの日夕焼け』

副題の『母さんの太平洋戦争』は、同じ年齢に達した息子に満州の体験を、という思

いが。鈴木政子著。立風書房。

(8・6毎日)

『ルソンに消えた星・終末を見た女二人の敗走記』

岡田梅子、新美彰著。毎日新聞社。(8・7読売)

『マヤ・アンジェロウ自伝』

故キング牧師の公民権運動に飛びこんだ黒人女性の波乱の伝記。まだ続々と書き継がれている大河小説の一二部。矢島翠訳。人文書院。

(8・18読売)

『四十代の幸福』

俵萌子著。海竜社。

(8・24読売)

『野の女』

明治の庶民女性の生活史を通して、現代の主婦告発の書。永畑道子著。新評論。

(8・25朝日)

## 『女性人材論』

大学、新聞社、企業にいる  
婦人問題研究者たちの分担執  
筆になる職業能力論。天野正  
子ほか著。有斐閣。

(8・25読売)

## 人

### 第四回毎日童話新人賞

「一年生になった王さま」で  
浅川由貴さん(二七)が。同  
世代の母の過保護振りを憂う  
新婚さん。(3・7毎日)

### 文壇にその名とどろく

講談社の文芸書図書館部長に  
なった松本道子さん。純文学  
出版を一任されるこのポスト  
についての女性は先例なし。文  
壇で彼女を知らぬはモグリと

言われるほどの実力派。

(3・12読売)

### 第一回アインシュタイン平和賞

スウェーデンの軍縮専門家  
アルバ・ミューゲル女史に。  
ジュネーブ軍縮委での十一年  
間の活躍が認められ。夫はノ  
ーベル賞学者のダンナー・ミ  
ュルゲル博士。

(3・14各紙)

### 第十一回大宅ノンフィクション賞

「ワシントンの街から」でハ  
ロラン芙美子さんが受賞。

(3・16朝日、3・14読売)

### 第十一回サントリー音楽賞

打楽器奏者の吉原すみれさ  
んが。打楽器の楽員募集に男  
性に限るなどと書いてあるけ  
れど、女性にキツイというこ  
とはありません。

(3・18読売)

### 『家事労働銀行』を呼びかけ

井上博子さん(四二)が、  
専業主婦の家事能力を元金に  
相互扶助を行なおうと。

(3・19西日本)

### 『三四郎』に出てくる絵

九二歳の画家吉田ふじをさ  
んが初個展。漱石の『三四郎』  
に出てくる作品「ヴェニス  
の運河」も出品される。

(3・27毎日)

### 第八回医療功労賞

八丈島の歯科医、飯田トミ  
コさん(六九)。「島民が困っ  
ている」と聞き、夫を東京に  
残して故郷の島へ帰ってから  
三一年治療ひとすじ。

(3・28読売)

### 第二三回農民文学賞

『鷲谷』の遠山あきさん(六  
三)。「女が新聞を読んでも噂

になった土地で、若いころの  
夢を押し殺して百姓をやった  
きたが」と。

(4・2朝日、4・14読売)

### 琵琶湖を守る八〇歳

「海津船だまり反対連合」の  
代表となって闘う江端ちかさ  
ん。「店がつぶれたって、環境  
汚染は防がにや」と。

(4・6読売)

がん克服し、ボストン走る

手術後二か月でボストンマ  
ラソンを完走したアリア俊子  
さん(五〇)。ろうあ学校の教  
師をして一家を支える。

(4・6毎日)

### 第九回赤松賞

石谷閑子さん(六三)岡田  
みのるさん(六六)平木嘉代  
子さん(六二)稲富千枝さん  
(六四)の四人に。

(4・14読売)

## 第五〇回文学界新人賞

『狸』で村上節さん(四七)  
(4・19読売)

夫婦討論は日常茶飯

大学で『ライフスタイル論』

という新分野の講義を持つ武者小路規子さんが、夫婦討論形式の『飛翔する日本人』を出版。夫君は国連大副学長の公秀氏。  
(4・21毎日)

## 第二四回現代歌人協会賞

築地正子さんが『花緑列島』  
(4・26読売)

文化人類学専攻して二〇年

米国で教授職に就くためには必須のデニユア資格をとったエミコ・ティアニーさん(四五)。ウイスコンシン大学の女性学プログラム作りにも参加。  
(4・28京都)

『銀座百店』の大番頭

二二年間タウン誌『銀座百店』を支えて来た土沢章さん(六四)が引退。若い大卒女性七人を育て上げた。  
(4・30朝日)

女性科学者の登竜門できる

海洋放射能の専門家で気象研の部長をつとめた猿橋勝子さん(六〇)が、退官記念に女性科学者のための賞を創設。科学分野の女性差別克服の願いを込めて。  
(4・30毎日、5・11朝日)

一九歳で現代詩手帖賞

大妻女子大二年の白石公子さんが、先輩の金井美恵子さんより二つオマセな受賞。  
(5・10読売)

お嬢さん図書館長

福島県の船引町立図書館初

代館長に、町長の英断で二四歳の吉田裕子さんが。  
(5・30河北新報)

少林寺拳法に女当主

父親の急死で二代目に就いた宗由貴さん(二二)。  
(6・4各紙)

中年女性の再就職のために

五年前に福岡の事務員派遣会社「タップス」を開業した勝見種子さん(四九)。長期入院で解雇された経験も。  
(6・4西日本)

明石澄子さんが小劇場

松井須磨子らとともに活躍した創成期の新劇女優(八八)が私財一億円を投じて、地元高円寺に小劇場を建てた。明石演劇賞も設ける予定。  
(6・14毎日)

奄美方言を辞典に

長田須磨子さん(七八)が三〇年がかりで『奄美方言分類辞典上・下』を完成。民族学者も注目。  
(6・14西日本)

『声なき声の会』二〇年

「友人とたった二人で会を名乗り安保反対デモに参加したのが始まりでした」と小林トミさん。二〇年目の集会を終え、反戦への情熱を新たに。  
(6・21読売)

モノ言つて幸せになろう

専門を超えて平和運動などにも活躍する言語学者の寿岳章子さん。「女が幸せになろうとするなら、一番言いにくい人にモノ言うことから始めよう」と。  
(6・23毎日)

婦人解放に尽くして半世紀

婦人民主新聞大阪支部長の松本員枝さん(八〇)の歩み

が、仲間たちの聞き書きの勞で一冊の本『自由と解放へのあゆみ』（ドメス出版）に。大阪の「木曜会」づくりや「農業裁判」に尽力しつつも脇役に徹した人。（7・2毎日）

メキシコで女の生き方学ぶ

日墨学院の教師としてのメキシコ体験を「女先生メキシコ奮闘記」（教育研究社）にまとめた平山くによさん（四〇）。「平凡な結婚が最高と思っていたけど、メキシコでたくましく生きる離婚者や独身者を見て、変わりました。」（7・7毎日）

成田に初の女性防疫官

飯田陸美さん（二二六）。二四時間体制の勤務であることから、これまで女性は見送られていたが、技術と熱意を買われて。（7・11読売）

八王子空襲の証言

体験者の証言を七年間一人で記録しつづけてきた主婦、瀬沼ユキ子さん（五五）。このほど刊行の八王子空襲を記録する会編『盆地は火の海』に、その成果が収められた。（7・20朝日）

向田邦子さんに直木賞

気鋭のシナリオ作家が「思いつくランプ」で。（7・20朝日）

少年愛でメッセージ

マンガ作家竹宮恵子さん（三〇）。少年ばかり扱うのは「女の子に対する私の不満の裏返し」（7・28朝日）

女性アナから解説委員へ

NHKの永井多恵子さん、歴代四人目の女性解説委員に。現在のNHKの女性解説

委員はこれで二人となった。（8・6信毎）

真栄平の虐殺を証言

沖縄戦における日本兵の住民虐殺事件の生き残り玉城ウシさん（九三）。テレビ朝日の「モーニングショー」で三五年ぶりに重い口を開いた。（8・14朝日）

廃鉱の子らに絵心を

筑豊の小学生を教える日高幸子さん（四〇）。書きためた報告「筑豊の子らと歩いた二十年」で「佐武賞」受賞。（8・14読売）

七〇歳のロッキーマウンテン

エーデルワイズ女子登山会会長の坂倉登喜子さん、女性十人をひきいて三〇〇四メートルの山頂征服。「八〇歳まで登りたい」（8・16毎日）

心のふるさとを記録映画に

岩波映画の創立以来、記録映画に取り組んで来た羽田澄子監督（五四）。『薄墨の桜』の次のめり込んだ「神楽」をこのほど完成。（8・16毎日）

華族から開拓農民に

敗戦を境に人生を選び直した徳川幹子さん（七七）。「百姓になるだけでなく、因襲に立ち向かってこそ真の開拓者。開拓者は平等だから女性も活発に発言しますよ」と。（8・17読売）

米国で個性を発揮

米国で、ドキュメンタリーやCMフィルム制作の「フューチャー・プロダクション」を共同経営する渡辺潔子さん（二七）。日本から依頼されるテレビ特集フィルムやCFは、

彼女の独壇場だ。東京はきゆうくつで保守的なところ。すぐ「女のくせに」などと言われる」  
(8・26毎日)

### 福原遊廓の悲話追跡

昭和二〇年の神戸大空襲で九百人の遊女がどうなったか。神戸空襲を記録する会の事務局長で詩人の君本昌久さん(五二)が訪ね歩いて九年。

(8・26朝日)

### 沢田美喜さんの身代わり

ジャーナリストの松田ふみ子さんがエリザベスサングラス・ホームの新理事長に。「庶民の子の私には、庶民の皆さんに小銭でもいいから、と寄付を呼びかけるしかないけれど」。

(8・30毎日)

### 〔訃報〕

千葉あやのさん。二九日脳いっ血で。八九歳。わが国唯一

一の「正藍染」伝承者で人間国宝。  
(3・29各紙)

山口房子さん。十二日、脳

血栓で。五五歳。世田谷区し体不自由児父母の会会長。

(4・8朝日)

東山千栄子さん。十日、老衰で。八九歳。「桜の園」三百回、新劇の女王。

(5・9各紙)

沢田美喜さん。十二日、心臓マヒでスペイン・マジョルカ島に死す。エリザベス・サングラスホーム園長。七八歳。

(5・13各紙)

天津乙女さん。三〇日、心不全で。七四歳。宝塚の象徴と言われつつけて。

(5・31読売)

江上フジさん。二七日、肺

がん。六九歳。NHK初代婦人少年部長、婦人問題審議会メンバー。  
(6・28読売)

九津見房子さん。十五日、

脳硬塞で。八九歳。大正十年に近藤真柄さんらと「赤濁会」を結成したが、三・一五事件とゾルゲ事件に関連して逮捕された。戦後は活動の表面に立たず。

(7・17朝日)

石川志づさん。十七日、老衰のため。九四歳。鷗友学園理事長。

(7・18東京)

江上トミさん。二二日、心筋硬塞で。八〇歳。料理家

(7・22各紙)

勅使河原霞さん。六日、脳しゅようで。四七歳。草月流家元を継いで十か月。

(8・7各紙)

橋口倉子さん。十八日、脳血栓で。七六歳。西洋料理の普及に貢献。  
(8・19毎日)

### 意見

#### 若い未亡人の年金

子どものいない四〇歳未満の未亡人へ厚生年金の遺族年金を支給しないことにしようという改正案に一言。再婚や就職の可能性はあるとは言っても現実には厳しい。就労・自立できるまでの数年は遺族年金を支給するなり、低賃金には年金の一部で補うなりの制度を。  
(小野田満雄記者)

(3・9読売)

#### 日本型福祉は男の発想

日本型とは同居家族の見直しに過ぎず、家庭での寝たき

り老人を女の手で看させようとするもの。昭和七〇年には八五万人に倍增する寝たきり老人を女に押しつけて乗り切るつもりか。(高原須美子)

(3・26信毎)

日本人留学生は女中扱い

英国でのホーム・ステイ留学とは、実際はオペア(女中)契約を意味する。二月、英議会はオペアをキプロス島などを含むヨーロッパの未婚女性に限ると決議したが、東京のオペア代理店はまだあつせんする構え。甘い言葉につられて海外でトラブルを起こさぬように、考え直す必要が。

(津野志摩子・フリーライター)

(4・1朝日)

能力は個別に問われるべき

本当に力のある女性に差別されている。が、その人たちが

の衣を借りて、力も、誠実な職業意識もない人の叫ぶ「乗権利意識」は有害だ。平等論から能力という項目を除外するのは不誠実である。

(畑山博・作家)

(4・7京都)

女性も窓際に置かれている

国内行動計画に言う「法制上の婦人の地位の向上」を実現するためには、女性を實力どおりに見ようとする男性側の心理的慣行をも見直さなければならぬ。男女の冷静な合作によつてのみ、その法制化は可能。

(4・9朝日「社説」)

女性の活動をもっと伸ばせ

女性のトップ進出が続いているが依然困難な状況。性別役割分業が根幹だが、同時に企業側には「何が差別か区別か」の判断がつかず戸惑いが

ある。行政の指導が必要。

(4・13毎日「社説」)

第二の立中・をつくるな

「江戸川区の食品会社の電話交換手(二五)」が、産休明けを機に退職を勧告されている。女性が出産するのは社会的なことだと企業も認めるべきで、第二の私をつくらぬようにと祈るばかり」と十一年ぶりに職場復帰をとげた立中修子さん。

(4・16毎日)

街に広がるフェミニズム

女性学の本場アメリカを探索して、立教大学の社会人受け入れがまだニュースになるような日本との隔りを感じた。政府の行動計画にも「大学教育を弾力化する方策について検討する」とあるが、検討だけでなしに早急に実現化を。

(藤枝落子)

(5・3―5・4読売)

軍隊は女の敵

ソ連の家庭内は全くの男女不平等。一八歳以上の男子すべてが兵役義務を負うこの国の男性の意識は、「男はフロント、女は銃後」、家事育児は銃後の女に任せればよいということに。軍隊は男女平等思想を決して育てないことを再確認した。

(清家麗子・学生新聞編集部)

(5・8毎日)

「妻の座」強化の落とし穴

民法改正による妻の座強化は結構だが、自民党の「家庭基盤の充実」、「日本型福祉」家庭の日」という一連の背景を考えると、この優遇策も「女は家庭に」という流れにとり込まれる恐れもある。

(デスク討論)

(5・10読売)

婦人少年室は地域に残して

労働省の行政改革として統廃合計画があるというが、納得できぬ。根強い社会習慣にはばまれる地方にこそ出先機関が必要。

(石津法子・会社員・二九)

(5・17朝日)

「マイナス選挙運動」の勧め

汚職議員を当選させないためには名ざしで落選させるよう運動しなければ。当選してからのリコールよりも減票運動のほうが好ましい。

(紀平悌子・日本婦人有権者同盟会長) (5・26朝日)

プロ意識持ちたい内職者

家内労働者がプロ意識持てば「家内労働手帳」の交付率が五割に満たないなどということはなくなるはず。その所持こそ、プロの最低条件。

(5・26読売「社説」)

「婦人白書」が示唆するもの

結婚や子を産むことをためらう女性の増加が注目を引く。やがては北欧型社会に近づくのだから、女性の生きざまの変化が社会に諸問題を引き起こすことを考慮し、未来社会を予測した対応策を今から検討して早過ぎることはない。

(5・26毎日「社説」)

ジョブ・シェアリング

「日本で定めなら国際公務員をめざすのも一つの生き方。数人で一人分のフルタイム勤務を行なうという米国のジョブ・シェアリングもとり入れたい。一種のパートのようだが、専門を生かした職種での実現をはかりたい」と日本女性学研究会のパネルディスカッションで。

(中西珠子・前ILO東京支

局長) (5・28毎日)

女を売り物にする新時代

時代相をキャッチした商業戦略から生まれた「女だけの」なになにに、〈女〉が売物とされる限り、昔ながらの割引評価が生き残る。女を売り物にしようとする商魂は女性尊重と似て非なるもの。

(5・28信毎「女の机」)

女は、遭難・に強し

屋久島山中を十七日間もさまよい奇跡的に助かった二二歳女性の生還の秘密は、「女性の長所の冷静さ」と今井通子さん。

(5・29読売)

出生率に国の口出しは筋違い

出生率低下に、政府がとるべき態度は、人口分布などへの施策。産む産まぬは、あくまで個人の決定すべき問題。

(黒田俊夫・日大人口研究所)

(6・28朝日)

婦人運動は自然の流れ

人間の生活状況がひと昔前とはすっかり変わってしまったのだから、女性の在り方が変わるのは当然。女性運動の華やかさは爽やかな明るさで、こうした運動のある社会のほうが健康だ。(大庭みな子)

(7・1朝日)

ILO総会に出席して想う

核家族時代の今、既婚女性の労働問題は家庭責任を離れて論議できない。その背景には教育や女と男の生き方の問題も含まれていて、職業上の機会均等の問題はそれらとかわってくるという考え方が労働組合にすら欠けていたと思う。

(高島順子・同盟青婦対策副部長) (7・5朝日)

女性よ大志を抱け

女性幹部行政官はふえはじめた。ガールズ・ビー・アンビシャス! (図入りのPR記事)。(文部省特殊教育企画官池本清) (7・9産経)

教育の場でも意識改革を

中学に入ると男女で教科が分かれる。文部省は厳しい教科書チェックを行なうのに、女性差別には無関心だ。

(三井まり子)

(7・11毎日)

男女分業論になぜ固執

日本は公害先進国。原因は男が社会を動かしているからでは。性別役割分業の打破こそ急務。日本女性は財布を握っているから強いといわれるが、家庭という小世界でさい配をふるっているだけだ。

(松井やより)

(7・20朝日)

出生率低下と母性保護

出生率低下は、働く女性たちの「職場での母性保護を推進せよ」という一つの声なきアピールではないのか。「今のままでは産めない・産まない」というつぶやきでは。

(北村節子記者)

(8・10読売)

コペン会議冷やかした番組

TBSテレビの「海外取材ニッポンの実力」という番組のコペン会議の扱い方には、冷やかしが含まれていた。会議出席の日本女性はしよせん観光旅行と言いたいらしいが、ゲストの市川房枝さん以外の人の、奥歯にもののはさまったような発言に疑問。

(十返千鶴子・随筆家)

(8・10毎日)

国籍法改正、早急に

婦人差別撤廃条約の批准ができるよう国内体制を整えろと、政府も約束したのだから。

(松井やより)

(8・12朝日)

トーン高い日本の女性の声

海外取材から帰ると、女性のアナウンサーやキャスターの声がかん高く聞こえて仕方ない。欧米女性の声より高いのは、女性はいくあるべきだ、という社会通念への迎合なのか、人類的差なのか、わからぬが。

(凱)

(8・24読売)

## 相談

新婚の父をなじる娘

妻が家を出て十年、男手一つで育てた二人の娘に事実を告げたところ、態度一変、夜遊びまで始めた(49歳、男)

〔答〕母の不在をつくり出すぎましたね。が、だましたことはわびても、「精一杯育てきた」とビシッと言うこと。あなた自身の人生も新しく見つけて。

(澤地久枝)

連れ子を差別、いたずらも

子連れ同士で再婚。前夫の三倍も高給の夫は九歳の娘に自分の性器をさわらせたり、娘の下着をぬがせたり。離婚を考えるが、女手一つの苦しい時代を思い出すと……。

〔答〕子のために再婚したと言うが、あなた自身のためだったはず。離婚するのにまた「子のため」では、将来子をうらむことに。(深沢道子)

(3・29読売)

婚家かえりみぬ長男の嫁

結婚後二百日で單身米国へ赴任した息子の嫁は、両親同居を承知で結婚したのにさつさと実家へ。父の私がケガで入院し店の人手が足らずに困っていた時も手伝わず。私の勧めに息子も離婚を決意したが、親のとるべき態度は。

〔答〕人手が足りないとか看病して欲しいと思うなら、長男を呼び戻すのがスジ。婚家のために嫁が尽くすべきなどは今日では通用しない考え。

(鍛冶千鶴子)

(4・2読売)

夫の奴隷もうイヤ

十九年間夫とともに自営業で働いてきたが、ののしられながらコキ使われただけ。持病の腰痛で仕事を休んで以来互いに口もきかず。子どもが大きくなったから新しい生活

を考えるが。

〔答〕人を間に立てるか家裁の調停を頼るのも方法だが、とにかく人間として現状のままではいられぬことを言明すべき。

(鍛冶千鶴子)

(6・11読売)

## 事件

結婚相談所舞台上に売春

長岡京市で相談所の女経営者が会員男女に売春を周施、逮捕された。(3・7京都)

連続誘かい殺人事件

長野、富山二県で若い女性二人を連続誘かいしたアベック犯人の宮崎知子(三四)に、浅間山荘事件の永田洋子以来の非難の声。

(3・31—4・3各紙)

外国女性を売春婦に

茨城県で、タイ女性十数人を人身売買同様に偽造パスポートで入国させ売春させていたクラブ経営者が捕まる。

(4・8読売)

和歌山県で六人のタイ女性がスナックで売春婦として働かされていた事件発覚。

(5・18京都)

関東一円に台湾ホステスを売春婦としてあっせんしていた黒幕の男が指名手配に。都内にシンジケート存在か。

(8・21読売)

飢えた母、夜泣きの児殺す

五日間水だけで過ごすほど極貧の元ホステスが、二歳の子の遺体を抱えて自首。店で知り合った客の子を身ごもって退社、分娩入院費や前借分返済などで手元金はゼロに。

(4・30各紙)

母子寮、邪推の惨劇

神戸市の母子寮で、母親が「つまはじきされた」と不仲の母子三人を殺傷、自分の子にも切りつけるという事件が起こった。(6・16各紙)

伊藤律版、父帰る。

元共産党員の伊藤律氏北京で生存のニュースに、複雑な立場のキミ夫人(六三)。

(8・23各紙)

## 海外

ノーベル賞学者の精子

ノーベル賞受賞者の精液を知能指数の高い三人の女性に人工授精させるという実験が米・カリフォルニア州で進行中。年内出産予定。

(3・1読売、3・8毎日)

かつて優秀な男女間の人工受精による人類改造を提唱した遺伝学者ハーマン・マラー博士の未亡人がこの実験を非難。「人間性」をも重視した夫と、実験推進者の原則の違いを強調して。(3・24毎日)

### 花束送る婦人デー

ソ連の国際婦人デーはお祭りムード。「まるで母の日カクリスマスのよう」と秋山洋子さん報告。(3・8朝日)

### カナダの暴力亭主

女権社会と定評のカナダで、主婦の一角が夫の暴力にさらされているという衝撃のレポート。虚構を暴いた「女性の地位を向上させる会議」は避難施設などの救済を要求。(3・8日経)

### 青年男女徴兵登録制

カーター大統領の「青年男女の徴兵登録制度実施」に米議会総反発。まず「女子」を認めず。(3・8毎日)

議会の承認で実施されるはこびとなった「男子のみ」徴兵登録制に対して、米連邦地裁は男女同権の憲法に反するとして禁止判決。

(7・20毎日)

### 子連れで軍事訓練

国民に軍事訓練を課しているスイスで、赤ん坊の世話人不在による延期申請を却下された共働き教師が、やむなく子連れで兵営へ。(3・11朝日)

### クソミソのサッチャーさん

「英国の女権拡張運動の息の根をとめようとする妖婦」と国内女性の評判さんざん。(3・12読売)

### 日没後の女性逮捕はダメ

警官による婦女暴行が社会問題化しているインドで、政府が禁止令。(3・17朝日)

### 三一本の足と娘ごころ

中国女性の間に、合計して足の数が三一本になるだけの家具を結婚の条件とする合言葉が流行。(3・17読売)

### 女性ふえる米軍

今や十五万人、総員の八％に。ミサイル部隊にも配属。(3・19朝日)

### スウェーデンの男女平等法

七月一日から施行。職場の男女数の平等を義務づけ、監視の平等オンブズマンと平等委員会も設置してのスタート。(3・24毎日)

### 三人生んだら断種手術

貴州省で、三人生んだ妻は裁判所副所長を免職、夫は断種手術という猛烈処分が行なわれて、話題に。(3・24信毎、3・25朝日)

### ホワイトハウス家族会議

伝統的男女分業家庭がいまや一七％となつてしまった米国で、家族について話し合うと大統領が公約。会議を前に、家族の定義づけで大論争。(4・5朝日)

### 女だつてボディ・ビル

全米女子ボディビル選手権に三三人の参加者。二四歳の美女が栄冠を。(4・10朝日)

### 男女産み分けメニユー

フランスとカナダで、特別メニユー的中率八割の研究実績をあげる。(4・11読売)

### 三組に一組離婚

妻からの離婚申し立て急増のソ連。公式筋は、女性が完全に解放されている証拠というが、夫の古さが原因に。

(4・18読売)

おなか貸します

米国で、子宝に恵まれない夫婦の夫の精子を人工受精する代理出産が流行。請負料は一万ドルという例も。

(4・18毎日)

「代理出産協会」も出現するほどの流行ぶり。

(7・10読売)

上司のいやがらせ禁止令

米国連邦平等雇用機会委員会(EEOC)は、いやがらせ拒否のために解雇された女性に賃金の支払いや職場復帰などを保障する新しい規則を発表。

(4・19毎日)

### 結婚ベナルティ

米国では、同様中のカップルよりも正式結婚の夫婦の方が税高であることから、正式組の不満高潮。期限ごとの離婚で抵抗する人たちも。

(4・20毎日)

小説「王女デージー」

米国で五二歳の主婦の書き下ろし小説が空前の売れ行き。革命で天涯孤独になった実在のロシア王女が米国でTVプロデューサーとなるまでを描いた長編は、やはり自立モノの系譜。

(4・28日経)

子なし夫婦運動

子どもをつくらないうという夫婦が一一%にも達する米国で、「親になる(ならぬ)ことを選択する全米連合」誕生。文明評論家トフラーや女優シヤリー・マクレーンらを願

問に、メンバーは二千人を超え、諸外国とも運動提携。

(5・4読売)

「ワーキング・ウーマン」紙

七六年創刊の日刊紙。十万部が四十万部に。

(5・7朝日)

セサミストリートや玉

英国の女性教育学者が、「女に主婦の役割しか与えていない」と非難。マスコミに猛省を促した。

(5・24毎日)

猛烈産児制限の悲劇

産児制限キャンペーン中の中国で、妻の人工中絶を追られた農夫らが党幹部を集団で襲って負傷させた。

(6・16毎日)

進んだ北欧の女性

長い休暇も楽々ととれるノルウェー、政界進出めざまし

いデンマーク。(ヤンソン由実子・ダム雅子 6・18読売)

産休は七か月、求人もキャリアを買う。定年はなし。

(合田京子 8・16中日)

男が家事を「手伝う」という言い方はもはやしない。が法や制度では変わらぬ社会通念も残存。

(青木やよひ 8・10信毎)

持参金廃止デモ

インドで、母親数千人が国会へデモ行進。

(6・21毎日)

産めや増やせや三人目

出生率低下に悩むフランスで、パリのシラク市長は、三人目の子を産んだ後に法定出産休暇(一年間)をとる母に毎月一、二〇〇フランの特別手当を支給する方針を発表。

(6・21毎日)

## イラクの総選挙

二〇余年ぶりの選挙にわくイラクで、女性に对等の選挙権。国民議会に一九人の女性候補も。  
(6・21朝日)

## 政治中枢に女性ゼロ

ソ連政治の中枢の政治局・書記局に女性皆無。職場進出にも見えない一線が。  
(6・22毎日)

## 四人目の試験管ベビー

メルボルン市で女の赤ちゃん。  
(6・23読売)

## 離婚財産公正分与法案

ニューヨーク州議会は、財産を名義人に帰属させず夫婦に公平に分配する改正案を可決。同法案の全米化は間近の模様。  
(6・25読売)

## アイスランドに女性大統領

## 女性解放運動のリーダー、

ビッグジス・フィンボガドチル女史が、国民の直接投票で選ばれた。  
(7・1各紙)

太いことはいいことだ

米国でLサイズの女性向けのファッション雑誌「BBW」ビッグ・ビューティフル・ウーマン」が大もて。インテリ層の人気を得て、発行一年で六倍に。  
(7・3毎日)

## ウィンブルドンにママ王者

一九歳でテニスの女王になった「豪州の原住民の少女」イボンヌ・グーラゴン・コリーさんが九年振りに王座にかえり咲き。ママさん優勝は史上初。  
(7・6読売)

## イランの喪服デモ

官庁に働く女性にイスラム式服装(ヘジャブ)を義務づける政府命令に、三千人近い

## 女性が抗議行動。革命直後の

「反チャドル・デモ」以来一五か月ぶり。  
(7・7朝日)

## 世界人口百十億で静止?

ロンドンで開かれた人口問題調査会議で、国連のタバ博士が、世界人口は二一世紀第3四半期に静止すると予測発表。  
(7・8毎日)

## ケニアの少女哀れ

ケニアでは、法律の禁止にもかかわらず、少女に結婚の無理じいや、義務教育にもやらずに子守りに出す親が後を絶たない。  
(7・14朝日)

## デンマークの女性

結婚後も働く女は六五%、が三分の一はパート。失業率は男七%に対し一四%。賃金は九〇%。男女とも週三〇時間労働、夫も育児休暇を、が今後の目標。  
(7・15信毎)

## ウーマンパワーと大統領選

米国の共和党では、政策綱領委が男女の完全平等を明文化する連邦憲法修正案(ERA)の支持を拒否、女性議員が激しい反対。  
(7・15読売)

女性が半数を占める民主党の綱領採択では、カーター案を覆して「ERAに反対する議員候補には党が資金を援助しない」という厳しい修正案を採択。「妊娠中絶に連邦の資金支出を制限することに反対」案も可決された。  
(8・14読売)

## ポリビア、またクーデター

十七日、軍部が権力掌握。ゲイレル大統領は辞任、軍の監視下に。  
(7・18朝日)

## ロッサンドの「他のもの」

イタリアの活動家ロッサー

ナ・ロッサンが対談集「他のもの」を出版。他のものとは、他者、二級人といった意味で女性をさす。(7・25朝日)

だが、女性だけの労働組合KAD(九万七千人)の失業率は二五%。男はフル、女はパートの傾向。(7・26朝日)

「婦人の十年」前半を見直し  
会議概要が決まったが、日本でも前半五年を点検した「婦人白書」を発表。民間会議には民間諸団体が参加する。後半五年の計画は途上国中心、「政治」も持ち込まれそう。

コペンで会った女たち

おこがましい世界一

①Tシャツの女大臣②デン

スウェーデンも権力中枢は男。女は国会議員の二六%、

マーク厚相③モロッコの女医

大臣の二五%、地方議員の三〇%、平均賃金は男の八六%。

大勢のインド娘がベルシャ

(6・8朝日)

師④ニューヘブリデス独立の

志士④十二年のキャリアで老人の世話をするデンマーク女

湾岸諸国に花嫁として売られていることが明るみに。市当局の推定では今も毎日二百人。

今後五年の行動計画作りが今度の会議の主目的。NGO

性⑤母親二代のデンマーク大

臣⑥国際結婚の孝子さん⑦デン

十五万円から三〇万円までの値段で、奴隷扱い。

催され、事務局は大多忙。

ンマークの銀行重役。

助産の道を男にも

ECは英国とアイルランド

(赤松良子 6・16毎日ほか)

(増田れい子記)

に対し、男性が助産婦になるのを禁止している国内法の改正を要請。(7・28朝日)

デンマークの二女性大臣

(8・11毎日)

中国の新家庭運動

母の八五%が働く」というベネドゥセン文相は三児の母、四二歳。

世界の女性性結集へ

代表演説作成中 前回はいき

党中央の見解に基づいて、

広東省が封建制打破を目指す運動をスタート。

女の世界の時代元年へ結集

まで国内調整に努める。英文のナショナル・レポートも完成した。(6・30朝日)

(7・25—8・2毎日)

「権力が好き。不平をいうより権力を得て社会を変える」というピアゴ厚相は三九歳。

着々準備中。五年間に着実に社会参加の道も開けた。

代表演説作成中 前回はいき

深刻なデンマーク女性労働者

デンマークの失業率は七%

(5・6日経)

代表演説作成中 前回はいき

デンマークの失業率は七%

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

代表演説作成中 前回はいき

参加者はほとんど「一日コペン」組だが「あごろ」等は交流を目指す。(7・5信毎)

総理府柴田知子さん 演説原稿づくりに苦心中。広い国際的視野の持主。「五年では解決しません。昭和六〇年に向けて……」(7・6日経)

マルコス夫人やテレシコワさんも 各国代表の顔ぶれそろう。(7・6読売)

差別解消へさらに詰め 日本も代表に大・公使の女性。わずかだが五年間の進歩の一面。民間会議には「あごろ」など二五〇人が参加する。

(7・8朝日)

人魚も男女平等を歌う 白夜のコペンは、熱気で海の水まで熱くなろう。(赤松良子)

(7・10新潟日報)

国連婦人の十年会議にむけて 会議場、西独・英・ソ・米・仏・ブラジル・エジプト・アジアの女性の地位を紹介。

(7・2—12読売)

80年世界会議が始まる 総理府婦人問題担当室、五年間の軌跡、民間の動きなどを紹介。(7・7—12毎日)

比の市民団体日本男性を告発「マニラ買春旅行をやめて」と世界会議事務局と日本政府に一〇日送付。(7・11読売)

コペンへなびく女たち

自治体ごとツアー 栃木三一人、愛知三〇人、大阪府二五人など、平均年齢は四、五〇代。観光気分をあやぶむ声も。(6・25毎日)

中部からも三団体 名古屋市婦人調査団などが参加するが「通訳が会場に入れないので、登録したのは二五人中語学のできる二人だけ」など心細い声も。(6・29中日)

気をはく日本女性 ビデオ

で女性像を伝える「HKW」、婦人労働の実情を報告する「あごろ」など準備着々。お祭りさわぎのメキシコとちがって成果を期待できそう。

(7・5東京)

大阪府から二七人 府立女子大名誉教授大和チドリさんを団長に、府婦人問題推進会議委員・消費者団体代表・弁護士・医師・婦人問題研究家ら二五人と随行二人。

(7・10読売大阪)

名古屋市調査団一六人 市婦人問題懇談会作成の「女性から市民・自治体への提言」も各国代表に配布、名古屋の現状を紹介する。

(7・10中日)

名古屋の二女性世界へ主張 フォーラム発言者が決まり意欲満々。(7・12中日)

家庭からの解放めざす 相変わらず低い日本女性の地位、「家庭の日」新設など逆行の

流れも。変革を目指し万余の女が集まる。(7・14東京)

神奈川から五人 県内三五団体に呼びかけたが八団体からだけ推せん。横浜YWCA理事長高田静子さんを代表幹事に出発。(7・14神奈川)

大阪被爆者の会が代表 爆心地から五百メートルで被爆、昨年末死亡した三浦一江さんの記録を英訳して持参。(7・14毎日)

日本から十二団体 女性の審議会登用は四％、世界に逆行した流れの日本。各国の情況を見たいと飛び立つ。(7・12東京)

沖縄から三〇人 婦人団体連絡協議会主催研修旅行団で二五人、ほかに五人程度参加。(7・17沖縄タイムス)

各紙社説も意義を強調

世界婦人会議をよき外圧に クラス一の才女がさえない人

生を歩み、男は凡才でもさつそうとした社会人に。女の失意、無念さの緩和はたいへんなものだろう。日本政府は婦人差別撤廃条約の署名に消極的だったが、ついに内定。署名したからには国内法の整備を」という外圧利用方式で地位向上をはかるのも方法。「国連婦人の十年は一種の神風」と政府某高官は語る。

(7・13朝日)

それは女の革命か コペンはいま燃えている。男の革命でもある意味を考えよう。

(7・13東京)

婦人の世界会議に学ぼう  
女性格差の根を洗うと、女の意識にも問題がある。もともと本気になって力を磨け。

(7・13山梨中央)

男女平等に新しい視点を  
署名する以上は国内法整備は当然。NGOには大部隊が参加するが「婦人の十年」を知

っている主婦は一三%だけ。

(7・14日経)

視野広く多角的に運動を  
署名が決定、日本も「あらゆる形態の差別の撤廃」に向けて一層の拍車をかけねばならないが、たとえば保護条項はどうなるか。婦人の、婦人による、婦人のための運動の視野を広げよう。

(7・15産経)

婦人をめぐる世界会議 日本女性の五〇%は自分の仕事に非常に満足しており、仏九・七、西独一〇・四、英一七・八、米二〇・二に比し著しく高い。エリート婦人のサロン会議にならないことを望む。

(7・15東奥日報)

差別撤廃目指す世界の女性  
地位向上は一部のエリートのものではない。

(7・15神戸)

カセを脱する世界の婦人  
南北格差の調整が問題となる

う。

(7・15西日本)

さらに大切なのは 家庭や日常の中の差別撤廃。

(7・15沖縄タイムス)

国連婦人会議に白夜の期待  
スクラム組んで道を切り開こう。(7・17北海タイムス)

あす開幕

政治色を強める動き 中国・

キューバなどから修正案。日本は植民地主義などの削除を要求。

(7・14朝日)

多彩な顔が集う サグト夫人、テレシコワ、ハレド。会議を前に緊張した空気が。政治的混乱も予想される。

(7・14毎日)

開幕迫る

準備整う ベラ・センターもユニバシティ・センターも急ぎ会場整備。

(7・12毎日)

テレックス、電話の準備に

大忙しだが格差のない国の市民は冷静。(7・12産経)

世界の婦人パワー結集 ア

バルトヘイトやパレスチナ問題がテーマとなる可能性も。

(7・13読売)

「地位向上」へ討議 一五二

か国が登録。日本代表団も到着。が現地は不況で反応は今一つ。

(7・13朝日)

あすからコペンで NGOも並行して開かれる。

(7・13毎日)

ハレド現わる? 地元紙は自動小銃を手にした三四歳のときの写真を一面に掲載。

(7・13産経)

いま私たちは 中国・パキスタン・カナダ等、各国代表の紹介記事。

(7・14-19産経)

「記者の集い」で前夜祭

早くも熱気、白夜の町 二日にわたるジャーナリスト集

会に二五〇人が参加。PLO  
代表ライラ・ハレドの姿も。

(7・13読売)

男の姿もちらほら する中  
でオスタゴー文化相があいさ  
つ。

(7・13中日)

南アの女性差別を直訴 平  
和的にたたかってきたが、今  
や暴力に訴える人を非難でき  
ないと南アのチャバクさんが  
訴え。特に「名譽白人」の日  
本を攻撃。

(7・14産経)

ジャーナリスト集会で早く  
も アバルトヘイト、パレス  
チナ問題で騒然。

(7・14読売)

きよう開幕

雇用などで新戦略作り 先  
進国と途上国の格差が争点に  
なろう。

(7・14中日)

「パレスチナ」では波乱含み  
憂色濃い開催国の人々。純粋  
な女の問題だけを…の声も。

(7・14読売)

大忙し高橋大使 「エネル  
ギーからブタの輸入問題まで  
知らなくてはならない」と。

(7・14朝日)

今夜開幕

五〇万人署名で軍縮訴え  
北欧諸国の署名を提出する。

(7・14朝日)

第三世界の問題を重視 議

長は「冷静」なオスタゴー文  
化相。事務局長は「柔和」な  
メイヤーさん。

(7・14毎日)

平和要請文提出 二月から  
デンマークで始まった運動を  
中心に五〇万人の署名で。

(7・14読売)

いよいよ開幕

差別の撤廃状況を点検 五  
年間の進行を点検、具体的な  
指針を協議する。

(7・15朝日)

「男女平等」高らかに 首席

代表は女八二対男一七、代表  
は三八六対一〇六。

(7・15毎日)

恵まれぬ女性に配慮を と  
デンマーク女王があいさつ。

(7・15読売)

勇気と知性で平等達成を  
国連総長が演説。五〇万人の  
平和署名を受け取った。

(7・15中日)

イメルダ夫人トップで演説  
日本もようやく署名諒承。

(7・15産経)

序盤

参加できぬ人重視を 参加  
しない男性指導者が実権を持  
つ一方、第三世界の人々は参  
加できない状況。

(7・15朝日)

華やかさいっぱい とりど  
りの民族衣裳の会議場で赤ち  
ゃんがエーン。

(7・15毎日)

運動一〇年延長を提案 第

二期「婦人の十年」案が行動  
プログラムに。

(7・15読売)

視野広く多角的に 問題を  
盛り込んだ行動プログラム。

(7・15産経)

演説ぶり

一番手はマルコス夫人 豪  
華な民族衣裳で「女は人類の  
母」説。二番手サゲト夫人は  
退場さわぎにまゆをひそめつ  
つ…。高橋大使はほっそりと  
清そに。

(7・17読売ほか)

高橋代表途上国支援を約束  
教育・文化交流で協力したい、  
と。

(7・16朝日)

日本の「責任」を表明 ア  
ラブ退場で混乱ぎみだった  
が流ちょうな英語で途上国との  
積極交流訴え。

(7・16毎日)

論争

女の論争すれちがい イラ

ン代表団が一五日記者会見、人質問題で米国人記者と大論争。チャドルは「誇るべき民族衣裳」の一点張り。

(7・17毎日)

政治イコール女性問題「パレスチナ人にとっては毎日が戦争」ときっぱり。話題のハリドさん。

(7・29朝日)

友情と闘争が交錯 現状脱皮の理想遠く男性世界の対立を反映。

(7・19朝日)

演説ポイコット相次ぐ エジプト・カンボジアなどのあいさつで混乱。

(7・20毎日)

ポリビア代表涙の訴え 民主政権復帰を訴える一八日午後のデモはアンマーク警察ともみ合い、負傷者も。オスタゴー議長は本会議場での特別スピーチを許し、ポリビア社会福祉相(女性)が涙ながらに支援を訴え。

(7・22朝日)

## 署名式

署名式にお国ぶり 胸の前で合掌のスリランカ代表、六人で登壇のアメリカなど、さまざま。

(7・19各紙)

週末に女のフェスティバル

平和行進で連帯盛り上げ

デモ隊は自然公園へ。日本女性も「ノーマア広島」を訴えた。

(7・27東京)

二週目に入る

行動計画の調整難航 政治

色濃い途上国案と、女の問題にしぼろうとする国々との調整に苦慮。

(7・24毎日)

日本の決議案・修正案

農村女性の健康と福祉の見直しをはかる決議案を、オーストラリアなど四か国と共同提案。

(7・25毎日)

提案。

第三世界への協力と援助を

打ち出そうと、十一か国で共同提案。

(7・27朝日)

同案は二八日、満場一致で採択された。(7・29毎日)

途上国に対する援助の経験から提案したもの。日本は途上国の女性に協力を「宣言」し、今後の態度を約束したといえる。

(7・29日経)

日本の修正案 母性休暇を母体が回復するまでと限定、保育を両親と社会の共同責任とした日本案が二九日、第一委員会でも可決された。

(7・30毎日)

第二回署名式

(7・30毎日)

二九日、五か国参加で。

(7・30読売)

行動プログラム

(7・30各紙)

女の問題を網羅 世界行動計画をさらに具体的に。

(7・30各紙)

マスコミへ進出を メディ

(7・31毎日)

アへの女性の直接参加とマスコミの活用を打ち出しており三百名を超える女性報道陣もハッスル。

(7・30毎日)

きょう閉幕

熱い討議

平和なくしては

発展も平等もないと途上国が修正案を出し紛糾したが三〇日夕刻には閉幕式の予定。

(7・30毎日)

最終日

シオニズムで難航 シオニ

ズムは人種差別。女性差別の

根底とするアラブ側と反対する米・イスラエルで論争。

(7・31朝日)

最後までもめる 第一・第

二・第三委員会でも途上国から

の修正案が続出、行動プログラムの審議は三〇日午後五時まだ始まっていない。

(7・31毎日)

## 行動プログラム採択

土壇場で日本一転 終始西  
欧と共同歩調の日本が突然  
「賛成」表明。議場は騒然。

(7・31朝日)

日本賛成に驚きの声 親ア  
ラの中東政策を模索する日  
本の外交政策の象徴。

(7・31毎日)

健康と福祉へ行動 日本提  
出の決議案も採択され、日本  
は途上国へのより積極的支援  
を表明した形。

(7・31読売)

## 閉幕

隠れた地道な問題 政治の  
影が覆ったが、女の問題と切  
り離せないことは再確認され  
た。性別役割分業打破も共通  
認識に。

(7・31朝日)

勇気ある船出し 世界中の  
困難な問題がすべて語られた  
が、政治的と評論するのは短

慮にすぎる。世界の問題はす  
べて女性の問題。それを女自  
身の手で解決するための船出  
がこの会議だった。

(7・31毎日)

## 会議のかげに

二つの名を持つ女の悩み  
仕事上の名と法律上の名がち  
がう女性代表や記者が多く、  
「本名を貫きたい」の発言に  
拍手が。

(7・19朝日)

サバイバル用品 物価高の  
コペンでポリ袋にレタスをつ  
めこんだ英国の記者も。

(7・15読売)

当然すぎる平等 地元デン  
マークは会議にもクール。が、  
ここに至るまでは二、三代  
を要したという。

(7・14読売)

男を差別するな 離婚後、  
妻のもとから我が子連れ出  
して旅行、刑務所入りした二  
人の男が会議場近くでプラカ

ード。

(7・16読売)

ルシル・メイヤー評 メキ  
シコ会議と国連での活躍を国  
連総長が評価して起用したが  
「リブは富める国の富める女  
たちの運動」との言に、「彼女

自身エリート中のエリート」  
の陰口も。

(7・14朝日)

## NGOフォーラム

自由にちよつぱり騒がしく  
あいさつは微笑。母親大会の  
よう。

(7・20毎日)

活躍目立つ日本女性 差別  
との闘いを訴えて。

(7・22朝日)

買春旅行などやり玉に 日  
本の参加者もヒケをとらず堂々  
たるもの。「あごら」の分科会  
には共感の拍手が。

(7・17中目)

婦人活動に驚きと称賛 草  
の根運動と結んだ名古屋市の  
活動報告に「ビューティフル」  
の連発。

(7・20中目)

会場に託児室を要望、実現  
一四日の分科会席上、二人の  
赤ん坊が泣き出し、託児要求  
に百人の署名が集まり組織委  
へ。二一日からオープン。

(7・29朝日)

女たちの競演 国威発揚型  
あり、告発型あり、さまざま  
いエネルギー。日本の各グル  
ープもがんばった。

(7・30読売)

戦争・公害反対で団結 男  
たちにまかせてはいられない  
と各種の国際的ネットワーク  
が作られたのが最大の収穫で  
は。

(斉藤千代8・19―21毎日)

草の根の人々の民間集会  
国境を越え無数の友情の輪が  
ひろがった。五年後にはさら  
に大きなうねりになろう。

(藤枝滯子9・1、18読売)

## 報告会

五日、参議院会館で開かれ、

「日本人の買春旅行が世界の醜聞に。反対の国際組織が作られることになった」など、女の本音で語りあつたフォーラムの情況、アジア諸国のきびしい日本批判などが語られた。

(8・8読売)

会議を振り返る

世界婦人会議をどう生かすか 有意義に終わったが前途は多難。「育児は男女の責任」など一氣に前面に出せば男はハナ白むだろう。政府は女性問題の特殊性を認識し、女を「二流市民」と見がちな経営者の啓発を。

(8・3朝日・社説)

政治に負けた女性問題 先進国の女性にはむだな争いと見えたが、大國の政治経済支配が途上國の社会条件を左右しているのは事実だ。

(8・6京都)

國家は顔を出すな 女の共

通の問題を語り合うために民間會議を数多く設定し、資金と人材を送り込むべき。できれば自前の會議を。

(増田れい子 8・14毎日)

ちらつく男のカゲ 政治を持ち込んで対立、色あせた女性のテーマ。各國の利益代表化した女性代表たちが、男の既得権は見直した。地位向上への本番はこれから。

(8・8—9日経)

世界會議報道に賛否両論

「これを機に日本の社会も流れを変えてほしい」「記事を読んで戸惑った。家庭の実権は主婦の手にあり、女は被抑圧者ではない。會議は翔んでる女たちには意義があつたらうが……」等々。(8・11読売)

参加者の声

夫に支えられ會議に参加  
「母が伸びれば子も伸びる」

と思いきってデンマークに向かう。

(古野佐喜子・主婦・37歳)

(7・14中日)

婦人視察團カンカン 兵庫

県が公募し、県の外部団体「二十一世紀ひょうご創造協会」が事務局となつた「國際婦人年世界會議・兵庫縣歐洲婦人、家庭問題視察團」には県が一五六万円を補助、各自六三万円負担で三八人が参加したが、フォーラム参加は十四日十時—正午までの二時間、団員中日用英語が話せる者三人、隨行の県職員は全く語学力がなく、「女ばかりの視察團だからこの程度でいいとバカにされた」とカンカン。(8・3朝日)

會議の背景

各國女性事情 スウェーデン・南ア共和國・コロンビア・インド・フランスの出席者にインタビュー。

(8・11—16朝日)

## 女性差別撤廃条約

条約の意味

「世界婦人憲法」開花へ一歩  
「男は社会、女は家庭」の役割意識、女は男より劣るといういわれなき感覚を一気に吹き飛ばす國際條約が花開きかけた。人間の尊嚴と自由を目指す、男女の役割変更、子の養育は両親の共同責任とうたつたまぶしいほどの内容。

(5・19、27毎日)

あらゆる差別撤廃の方策

各國の婦人の地位測定のカタログとして使うと結構役立つと思う。日本は国内法の検討が必要だが、国内行動計画発表以来、民間婦人団体が再三申し入れてきたこと。政府

が本気で考えていたなら批准も難しくないはず。この際、婦人の一票にもの言わせよう。

(大羽綾子・6・21読売)

婦人差別撤廃へ一里塚 女性差別撤廃は全人類の将来のために必要だが、意識変革がむずかしいと、慣習・慣行という名の「怪物」退治の必要性をも堂々と打ち出し、育児・家庭責任は男女均等と明文化した画期的なもの。

(7・2読売)

署名見送りの背景

条約をまとめあげる過程で日本政府は差別的な国内法を改めずにする条約にしようという方向の発言が目立った。結局採択はしたが、雇用平等、家庭科共修、国籍法などの国内法整備に政府は消極的。

(6・7朝日)

署名に向かう

日本も署名の方向 署名するかしないかの通告期限「一か月前」は七月一日に緩和され、婦人問題企画推進本部は二七日「批准へ向けて条件整備する」と申し合わせ。大来外相も「高橋大使につらい思いをさせたくない」

(6・30毎日)

関係各省に抗議が殺到 政府の態度も軟化、外務省は「署名にふみきりたい」と発表。

批准は八五年までに終えたい意向。欧米各国は次々に署名を予定。

(7・1読売)

政府、署名に踏み切る

批准までなお曲折 日本の署名決定は世界会議というイベントに世論の力で間に合わせだもの。国内法整備までにはかなりの日時が必要。

(7・3毎日)

婦人団体が強く要望

抗議文、デモ、ハンスト

婦人問題企画推進会議も要望書を提出。市川房枝さんは各省庁に直訴。ついに実現の運び。

(7・9中日)

国籍法改正を法務省に要求 土井たか子さん「アジアの私たちの会」とともに。

(7・5朝日)

各紙社説、署名を取り上げる

男女差別のない社会を条約の署名が決まったが、留保などつけずにすっきりと批准すべきだ。が、条約が成立しても根強い差別はすぐには解消しない。カギは若い男女の手にある。

(7・4毎日)

雇用の平等どう実現 条約の最重要項目は雇用問題。労働省は平等法で頭が痛い。平等法ができると男も育児や料理が必要と、同省男子職員の一人は警告。

(7・4日経)

婦人解放の新しき ILO

でも新しい動きがあるが、新聞の扱いは地味すぎた。モスクワ五輪など足もとにも及ばぬ歴史の意味を内包した一種の革命運動だ。(7・6中日)

署名に踏み切る日本 条約を生かすには、行政の啓発、女性の自覚はむろん、男性の意識変革も含めた息長い取組みが必要。

(7・10信毎)

差別撤廃条約と世界会議 批准のための国内法の改正が難しいとされているが、七五年以来問題提起されていた。改善を怠った政府の責任は追求されて当然。

(7・10新潟日報)

婦人差別撤廃に本腰入れよ 署名し、国内法を整備すればすむものではない。政府も国民も差別のない社会づくりを。

(7・14道新)

女性差別の撤廃へ里程表 大きな一歩をふみ出したが、完全批准までの道は遠い。

(7・19京都)

社会通念を打破してこそ

法改正ではびくともしまい。

主婦を含めた女性全体の力が必要。婦人運動が職業を重視しすぎると、主婦との間に意識のズレが生じるのでは。

(7・15読売)

法務省、国籍法改正を検討

二重国籍など問題はあるが努力すると貞家人事局長は四日明らかに。(7・5読売)

日本も署名へ

いよいよ実現の運びに。

(7・9各紙)

署名決定を聞いて

今後の一歩の問題は雇用。

女だけの問題ではなく男の労働条件改善にもなることを理解してほしい。まず現状認識から始めよう。(藤田たき)

家庭の男女同一責任に大賛

成。男にとっても楽しい出来事。

(看護婦のオヤジの会)

藤田健次

五年前、タイでメキシコ宣言を聞き、違和感を感じた。条約の、途上国への配慮はう

れしい。(山崎朋子)

(7・19読売)

高橋大使一安心 演説は三

番目なのに「署名しません」では……と心配していた高橋大使もホッとした表情。

(7・10読売)

閣議にかける

「あす署名する」を決定。

(7・14日経)

閣議で正式決定

消極的態度をとってきた政府も一五日、署名を決定。

(7・15各紙)

署名式近づく

四九か国署名へ 一七日朝の段階で四九か国に。

(7・18朝日)

ついに署名

五二か国が一七日午後七時から国連世界婦人会議で。

(7・18各紙)

署名だけではダメ

「批准まで厳しく見つめよう」と、一八日夜「行動の会」などが集会。四八団体も八月五日に会を開く。

(7・18朝日)

署名はしたが

関係各省は国内法改正に重い腰。

(7・19朝日)

男社会を人間の生理にかなった体制に変えるテコ。それだけに反対も強く、国内法整備には困難が予想される。

(7・20毎日)

署名七〇か国に

二九日第二回署名式。五か国が参加、計七〇か国に。

(7・30読売)

これからが運動の正念場

署名式が行なわれた一八日に女たちによる学習会が厚生年金会館で開かれ、小ホールは超満員。淡谷まり子・土井たか子・中島通子三氏が、「日本は現状を変更しないですむよう修正案を出した」「批准するとしても抜け道を考えるだろう」「国内法がさらに悪くなる危険も……」などと政府を告発、警戒論を。(7・23信毎)

前進の意欲欠く政府

批准に向けて渋る政府。特に問題は平等法のゆくえ。

(8・23朝日)

# 資料1 国連婦人の十年後半期世界行動プログラム

一九八〇年七月三〇日 一九八〇年世界婦人会議において採択

この行動計画は国連の「婦人の十年」のコペンハーゲン会議の第二十一本会議（最終会議）で一九八〇年七月三十日に九四対四、棄権二で採択された。

このテキストは暫定的なものであり、総会第十一特別セッション参加者にインフォメーションとして渡される。最終的行動プログラムは、第三十五総会のレポートに含まれる予定である（A/CONF.94/35）。

## 第一部 背景と枠組

### 序 章

#### A 立法的要求

1 「国連婦人の十年」——平等・発展・平和の後半の五年の行動プログラムの要求は次の通り。

(a) 国連総会一九七五年十二月十五日の決議3320 (XXX) は、国際婦人年の世界会議（一九七五）での諸勧告がその後の五年間にどのように実施されたかをふり返り評価するため、一九八〇—一九八五年の五年間のための行動計画を新しいデータと研究に基づいてつくるための世界会議を一九八〇年の中間年に開催することを決めている。

(b) 社会経済委員会決議2828 (XXII)（一九七七年五月十二日）は、事務総長及び婦人の地位委員会がその第二十八分科会で参考にするものである、国連婦人の十年、平等・発展・平和の後半の五年間の具体的な行動を概

観したレポートを提出するよう要求した。

(c) 一九七九年一月二十九日の総会決議28/59は「雇用・健康・教育」を世界会議の副題として決定し、会議が女性を発展の過程に統合するための詳しい実際の行動的プログラムを強調すること、特に男性と対等の雇用の機会や経済活動を奨励することによって、または適確な健康および教育のための施設を与えることによって、上記の目標を達成することを決めた。

(d) 一九七九年の一月二十九日の総会決議28/91で、国連婦人の十年——平等・発展・平和の世界会議がコペンハーゲンで開催されることが決まった。

#### B 国連婦人の十年の目的——平等・発展・平和

2 一九七五年の国際婦人年にメキシコ市で世界会議が開催され、国連婦人の十年——平等・発展・平和、一九七六—八五の世界行動計画と、女性の平等・発展・平和への貢献の宣言が採択された。この世界会議で宣言された原則や目的は今日でも有効なものであり、十年の行動の基礎を作っている。これらの原則と目的は、その後のいくつかの国連の地域会議、部会、国際会議、または一九七九年五月にバグダッドで開催された非同盟発展途上国の発展における、女性の役割と題した会議での社会経済勧告でも再確認され、しかもその後、このバグダッドの勧告は、第六回の非同盟諸国首長会議によって支持された。

3 平等は、単に法的な差別を撤廃するという法的平等にとどまることなく、女性の発展によって利益を享受するものとして、または発展の担い手としての、参加の機会、責任、そして権利についての平等と解されるべきであ

る。世界中の大多數の女性に影響を与える不平等の問題は、主として世界の不平等等な国際経済関係の結果である。平等を達成するということは、種々のレベルでの決定や資源へ対等なアクセスを持ち、その分配に對等かつ有効に参加する権力をもつということを前提とする。したがって、長い間不利益をこうむってきた女性の平等を達成するためには、蓄積されてきた不正義を正すための補償的行為を要求するかもしれないことを認識するべきである。一般的に家族の福祉のために、特に子供の養育に関して、男性と女性が責任を共有するということが再確認されるべきである。

4 発展ということばは全体的な発展を意味するものと解されるべきである。それは政治的・経済的・社会的・文化のおよびその他の人間生活の面を含み、また経済的・物質的資源の発展を含み、さらに一人の人間としての肉体的・道徳的・知的・文化的成長をも含むものである。女性の地位の改善は、国および地方のレベルおよび家庭の中での行動を伴わなければならない。そしてそれはまた、男性と女性の役割と態度の変化をも要求する。女性の発展は、社会発展の一つの要素であるとしかたえられてはならない。それは発展のあらゆる面の本質的構成要素であると見られなければならない。女性の地位と役割を発展の過程の中で改善するためには、その発展はすべての国家間の平等、主権の平等、相互依存、共通の利益、協力を基礎とする新国際経済秩序を樹立するための全世界的プロジェクトの切つても切れない一部分として認識されるべきである。

5 平和と安定なしには発展はありえない。平和は発展の前提条件である。平和は、発展とすべてのレベルでの差別や不平等を廃することなしには存続することができない。すべての国家間の友好関係と協力の発展とその中における平等な参加は、平和を強化するのに役立ち、女性の発展、人間の生活のあらゆる分野における、そしてあらゆるレベルにおける権利の平等をうながし、帝国主義、植民地主義、新植民地主義、シオニズム、人種差別主義、人種差別、アパルトヘイト、覇権主義、外国による占領・支配・抑圧への闘いに貢献し、すべての民族の尊厳・自決・独立を外国の干渉や介入なしに尊重することや、根源的自由や人権を保障することに貢献する。

## C 行動計画の性格と展望

6 上記の使命に則って、この行動プログラムが一九八〇―八五年の後半の五年のために作られた。それは平等・発展・平和という三つの目的、そして特にその中でも雇用・健康・教育という副題を強調している。この後三者は、人間という資源が、統合された社会経済発展がなければその十分な潜在力をひき出すことができないということを考慮に入れたとき、重要な発展の構成要素である。プログラムは、低開発の問題を解決するためや、女性の劣等な地位につかせる社会経済的構造についての問題を解決するためや、世界平和を強化するための女性の貢献度を増すための行動を含む。発展への女性の対等なそして十分な参加を阻害し、制限している条件を取り除くための総合的効果的な戦略を強化することを目的としている。

7 以下の中間年で形成された行動計画は、大多數の国々によって、婦人の十年における目標の達成のために努力が払われたということを確認するものであるが、望まれている女性の地位の量的そして質的改善を考えるとその進歩は不十分なものである。三つの主要目的、平等・発展・平和が互いに密接に関連していることを前提とした上で、行動計画の目的は女性の地位の向上のための実際的な方策をもつとき細かく定義し、強化し、「第三次国連開発の十年」のための国際発展戦略の形成とその実施において女性の問題が考慮に入れられるようにすることである。

8 このプログラムは、世界行動計画の目的の実現に女性の参加がふえることを確実化することに焦点を置いている。勧告はいくつかの戦線で同時にとられるべき行動の相関性を示そうとするものである。これらのフロントは「第三次国連開発の十年」のための国際発展戦略のための世界経済に関する事柄であり、新国際経済秩序のための行動プログラムの実施、つまりは採択された世界行動プログラムのアプローチをもつと明確に打ち出すことなどである。特に世界行動計画は、最も不利な条件のもとにある女性たちの条件を改善することに高い優先順序を与えている。すなわち、特に農村地帯の女性、都会の貧しい女性、そして第三次産業に従事する女性たちに焦点をあてている。この強調の中でも特に社会経済的そして歴史的条件的ゆえに最悪の状況にいる女性たちに焦点があてられている。農村

と都会双方の貧しい女性たちがその代表であり、副題として雇用・教育・健康について語られる。社会の発展のあらゆる面における実際の改善の方法についても勧告がなされている。

9 国際婦人年の目標を達するための世界行動計画はすでに目標達成のために必要な方法の総括的なリストを含んでいるが、これまでの五年間の概観によっても明らかのように、このような短期間に目標を達成することは不可能であり、世界の主な発展の経過に則って計画の目標や戦略を、ある期間ごとに見直して行くことが必要である。一九八五—一九九五が第二の十年になりうる可能性もある。二つの地域準備委員会ですでに一九八五年の世界会議の必要性が勧告されている。その二つは、ECWA（西アジア経済委員会）とESCAP（アジア太平洋社会経済委員会）である。

## 第一章 歴史的展望

### A 女性の不平等の根本原因Ⅱ発展と発展への男女の対等な参加の問題

10 女性と男性との間の不平等の原因は、複雑な歴史的過程と直接的つながりをもっている。原因の多くは、政治的・経済的そして文化的要因からも派生してきた。この不平等が表現されている形は、世界中の国々の経済的・社会的・文化的条件と同じくらい多様である。

11 歴史を通じて、そして多数の社会で、女性はいく似た体験をもってきた。発展における不平等な女性の取り分の根本原因の一つは、性による労働分化である。この分化は女性に特有の子供を生むという機能をもつて正当化されてきた。結果的に、社会における女性と男性の仕事や責任の配分が、女性を主として家庭の分野に閉じ込め、女性に不当に過重な負担を与えてきた。このようにして、女性は家庭の分野以外での活動において対等である、劣等なものとして見なされ扱われるようになってきたし、また、女性の人権が侵されることになった。女性には資源については非常に限られたアクセスしか持たなくなり、人間生活のすべての分野における参加につい

ても限定されるようになり、この傾向は特に意思決定への参加という点において著しい。このように、男女の地位の不平等は制度化されることが多くなったのである。

12 ほとんどの国における女性の不平等という問題は、その非常に大きな部分で、世界の人口の大多数が、帝国主義、植民地主義、新植民地主義そして不正義をともしなう国際経済関係の結果である低開発が原因である貧困と、一般的後進性に起因している。

女性の不利な地位は、多くの国において、その国が先進国であろうと発展途上国であろうと、性を理由とする実際上の差別によって、より劣悪なものとなっている（注1）。

（注1）このような差別は、一群の国々ではセクシズム（性差別主義）と呼ばれている。

13 大多数のこれまでの労働と資本の分析が、世界経済の生産システムと、女性の、生産者、人的再生産を行なうものとしての労働との関連を不十分にしか認識して来なかったといえる。歴史においても男性による女性の征服・搾取・抑圧・支配というものが十分に説明されて来なかった。女性は生産システムによってのみ差別されてきたのではなく、人的再生産の機能をもつという事実によっても差別されてきたのである。

14 女性の子供を生む機能または伝統的な養育の機能に關しての尊敬はあるが、多くの国で、女性の実際的かつ潜在的経済活動への寄与はほとんど認識されて来なかった。社会に失業者または、不完全就業者が多い場合には、女性の家庭内での役割もあいまって、家庭外での経済活動に關して男性に雇用の優先順位が与えられることになる。

15 これらの家庭内外での差別の蓄積の過程は女性の性を基礎とするまたは社会階級を基礎とする二重の抑圧を形成する。貧困と低開発は、これらの不平等をより鮮明なものとし続ける。

16 このような差別的長期にわたる蓄積の過程は、低開発という問題によつてますます強められ、現代の世界の女性たちを概観するときに明らかであ

る。世界の成人人口の五〇％、そして正式な労働人口の三分の一、全労働時間の三分の二近くを担っているにもかかわらず、女性是世界の収入の十分の一しか受け取っておらず、世界の資産の一％以下しか所有していない。

## B 最初の五年間に達成された 進歩の概観——未来のための教訓

17 過去五年間に達成された進歩を概観すると、ほとんどの政府が望ましい計画目標として、女性を發展の過程に統合することを正式に受け容れたということがわかる。多数の国が注目に値する努力をし、行動や施策を打ち出し、女性を發展に統合するための制度的および行政的メカニズムを樹立した。

18 最初の五年間の成果としては次のものがあげられる。計画立案者や決定権を持つものに女性のもつ必要性や問題についての理解を深めさせる。女性に関してのリサーチを行ないデータを集める。女性の権利を保護するべく立法的措置をとる。しかしながら、先進的社会的サービスですでに持っている国々を除いては、資金面での不適正な配分、技術を持った人材の不足というような深刻な問題が、多くの国々では存在し続けている。このような制限はある程度は、特に發展途上国では、資源の不足や存在する資源の利用度の低さという一般的な経済的な問題に起因している。多くの場合、このような制限は、それぞれの国の政府が女性の問題に対して与える優先順位を反映している。もう一つの主な制限要因は指令が限られてくることである。このように、すでに存在する機構のいくつかは、強い中心的な実施を担う權威に欠けているのである。同様に、このような機構にはしばしばその機能を伝統的に女性に与えられてきた福祉活動分野に限り、女性の役割をますます典型化し、偏見の態度を助長してしまう傾向がある。このような特別な機構を女性の問題に関して理解をもつたものにするための仕事は、女性と男性の間のすべての責任の分担の問題を政府や国際機関等の政策計画や実施に中途半端に統合させるといふ結果をもたらすだけに、現在のところでは終わっている。

19 立法措置や条文を概観すると、かなりの数の政府が男性と女性に平等な

権利を与えるために、またはそれを保障するために、憲法を修正したり、新しい条項を加えたりした。しかし、このような立法的措置には、しばしば適当な実施の方策や機構を伴っていないことがある。多数の国で過去の差別をなくし、女性に対等な機会を与えるべく、特に教育と雇用の分野において特別な措置が行なわれた。

20 先進的市場経済（体制）諸国では、国家レベルでの機構が樹立され、差別の解消、特にサブテマである教育・健康・雇用の面においての差別の解消は著しい。数多くの国で立法措置により、女性の、国のレベルでの社会的・経済的・政治的側面での法的権利が保障されるようになった。政策形成にたずさわる位置にある女性の割合は注目に値するほど増えた。女性の労働人口中の割合も増大した。多くの国で、中等・大学・大学院レベルでの入学率が男性と女性の間で平等になり、種々の市場経済体制をとる国々でブライマリー・ヘルスケアが農村地帯の大部分にまで拡大した。現在行なわれている同等の価値のある仕事、職業的分化、家事の評価などの研究は、後半五年間でのより一層の進歩を予想させる、よいきざしである。女性が二重の負担を強いられてきたという認識は、女性と男性の役割の現在存在するステレオタイプに男性からも女性からも挑戦させるきっかけをつくつたし、さらに男性と女性の間の完全な平等を目ざした社会的プログラムを形成するきっかけとなった。

21 發展途上国においては、その資源の制約や世界の経済構造や経済状況の不利な影響にもかかわらず、国家レベルで機構をつくつたり、立法措置をとったり、女性に対する偏見を克服する努力を払うなど、女性を發展の過程に統合するべく行動が開始されている。農村女性の農業や国家レベルでの發展への貢献がだんだん農村發展計画や政策において認められるようになってきた。女性の側からの欠くことのできない必要を見出すためと女性のためのプログラムやプロジェクトを形成し実施するためのリサーチや研究がなされてきた。多くの發展途上国において、公的部門において女性の参加を増大させ、種々の意思決定のレベルでの女性の代表を増大させるような努力が払われてきている。少女たちの入学もいろいろなレベルの教育機関において増大してきているし、女性のヘルスケアも手近になったし、労働条件と雇用のニーズの改善がなされてきた。

22 計画経済体制を採っている国々では、種々の分野で、女性の条件がより一層向上した。これらの国々では女性は祖国の社会・経済その他のすべての公的生活の分野に積極的に参加してきた。それは、平和・軍縮・デタント（緊張緩和）そして国際協力のための闘いへの積極的参加をも含んでいる。計画経済体制をとっている国々では、雇用・健康・教育そして政治参加の面で、女性は高度に参加を達成してきた。それらの国々では、女性の参加のための国家レベルでの機構がもうすでに存在し、適正な資金の配分も、技術をもった人的資源も、すでに備わっている。

23 すべての国の女性たちは、平和を愛しているし、これまでに外国の侵略やあらゆる形の外国の支配やヘゲモニー（覇権主義）に反対し、平和・軍縮、デタント、そして国際協力を獲得するための闘いを担ってきた。女性は今までもそうしてきたし、これからも国家レベル、国際的レベルでデタントをめざし、それを永続的かつ普遍的な、すべてを包括するスコープの過程として固定するために、そしてそれを通して国連の婦人の十年の目標を達成するために、積極的役割を担うことができる。

24 過去五年間の進歩を概観し評価すると、多くの国々で、いわゆる、後進的部門に属する女性たちの状況は悪化している。特に、農村やいわゆる都市の辺縁部の女性たちの雇用と教育における条件が悪化している。事実、いくつもの国では女性の文盲率が高くなったように思われている。また将来高くなるだろうと予想されている。教育の第一、第二、第三レベルで、女性の率を調べると、ほとんどの国で高くなっているのだが、いくつかの国では第二レベル（中等）で女性の率が下がっているケースが報告されている。多くの国で、女性は、社会経済的に上か中の層でのみ入学率が増大したように思われる。しかし、この教育の機会の増大も、同率の雇用の機会の増大に伴っていない場合が先進国や比較的工業化が進んでいる発展途上国においても見られる。雇用においては、失業状態に追いやられたり、正式経済部門から閉め出されて、先進国の周辺の労働市場に押し込められたり、または自給的農業、工芸、その他の非正式部門に追いやられる女性の数が増大しつつある。このような、正式から非正式への動きは、ILOの推定によっても証明されているし、発展途上国の経済の総合的活動状況の割合の予想からも明らかである。

25 多くの場合、不適正技術の移転は、女性の雇用と健康条件を悪化させる結果を生んだ。労働力が不必要になり、失業が起こり、このような移転には、外国の消費モデルが伴ってくる。ある種のしばしば多国籍企業によって運営されている産業では、差別的労働習慣が都会にも農村にも持ち込まれる。その一方で、都市では、女性の雇用の増大は、しばしば若い女性の農村から都市への移住にも関係があるのだが、若い未婚の女性たちの安い半熟練労働の搾取の増大の結果でしかないのである。

26 多くの国では、女性は国家の発展計画に統合されていない。すでに女性のための特別なプログラムが存在していたところでは、ほとんどの場合、それらのプログラム自体が典型化された（ステレオタイプとなった）性による役割にこだわらずにすぎているために、かえってそのような性による分離を拡大してしまう結果を生んでいる。

27 最後に、現在の世界の経済危機は、一般的に女性の状況を悪化させる作用をしている。女性の参加の程度の高い産業では、保護主義の方策によってマイナスの影響が出ている。発展途上国においては、この女性へのマイナスの影響は先進国より、より一層大きい。

28 最初の五年間に、地域レベルでも、全世界レベルでも、世界行動計画の勧告の実施は相当な成果をあげている。特筆すべきは、婦人の十年のヴォランタリー資金の設立と、女性の地位向上のための国際的調査訓練の機関である。女性の地位向上のための諸機関の合同、プログラムが作られ、メキシコで採択された地域行動計画にそって地域計画が実施された。これらのプログラムには、国連の諸機関、国連、地域委員会、ユニセフ（国連児童基金）、国連開発計画、国連貿易開発会議、国連食糧農業機関、ユネスコ（国連教育科学文化機関）、WHO（世界保健機構）などが参加した。これらのプログラムに関して、もっと多角的分野の視点をもったアプローチをとるために努力を払うこと、そして、プログラム自体を強化することが可能である。国連の主権のもとに行なわれたいくつかの会議では、女性の地位と、次のような主な関心領域との関連づけが行なわれた。それらの領域は、人口、食料、水、プライマリー・ヘルスケア、教育、農村開発、農地改革、

雇用、工業化そして総合的發展である。

29 第二次国連開発の十年の目標の実施状況や新国際経済秩序の樹立をめぐる交渉の進展をより返つてみると、国際發展戰略や新国際経済秩序に関する希望や期待がかなえられていないことがわかる。徐々に世界経済が良好な方向に向かったり、發展途上国の経済の發展が加速度的に行なわれ、かわりに、世界の經濟危機がより深刻になつてしまつた。このような危機は、發展途上国により大きな影響を与えたが、これらの国々の現実の經濟社会的状況を考えると、このような国々において、最も不利益をこうむつたのは女性たちであることを忘れてはならない。國際的發展の諸條件は悪化し、發展途上国にとっては、より一層の困難をもたらすこととなり、特に行動計画の実施が難しくなつた。

30 將來のために、このような概観から引き出さなければならない教訓は多数ある。第一に、發展の主な優先順位、戰略、部門から切り離された女性の地位向上のための方策は、婦人の十年のための目標の達成に何の助けにもならない。第二に、立法の措置や發展のための行動は、社会の態度や偏見を変えようとする積極的かつよく組織された行動を伴わない限り、真に有効ではありえない。第三に、同時に特別な支援方策、つまり法律相談、特別な手当給付、情報知識、創造的制度なしには、單なる平等を規定する法律、發展のためのサービス、機会だけでは、女性がそれらを有効に役立てることはできない。

31 国連婦人の十年の三つの主目的、平等・發展・平和は、相互に密接に関連している。この中の一つの分野での進歩は、他の分野に有利である。そして一つの分野での失敗は、他の分野にマイナスの効果を与える。發展の第一義的目的は、個人や社会の福祉の改善をもたらすか維持することであり、その利益を万人に与えることであるゆえに、それ自体で一つの望ましい目標であるだけでなく、平和を守り、両性の平等をより實現するための重要な手段として見られるべきである。しかし今日の世界は、平穩というにはほど遠い状況にあるし、平和を阻害する要素が多数存在している。いくつかの国の女性たちは、いまだに他国の侵略による戦争によつて苦しめられている。

32 ゆえに、世界平和と國際安全保障を強化し、外国の干渉、侵略、軍事占領に対する闘いを強化し、国の独立と主権を尊重し、軍備競争を止め、一般的かつ完全な軍事撤廃の目標を達成し、軍事予算を縮小し、デタントを達成し、新国際經濟秩序を樹立し、平等の原則に基づいて国家間の協力を増大することは、諸国の經濟的・社会的・文化的發展をもたらす、女性の特別な立場の弱さを考慮に入れつつも、その地位の向上をもたらす。結局、平和という条件のもとでしか、他の二つの目的、平等と發展をもたらすことはできないのである。

33 諸国家は、平和と安全を保持し、人權と基本的自由を尊重し、特に人々が平和のうちに生存する権利に留意しつつ、國際協力を達成するという憲章のもとに、平和な生活のための社会を準備するための國際協力に女性が参加することを助けるべきである。

34 同様に、世界經濟の状況と發展と國際平和と安全、軍縮、そして國際緊張の緩和の強化との間に相互關係がある。軍縮の結果使えるようになった資源をすべての国家の福祉を向上させ、先進国と途上国との間のギャップを縮小し、社会のすべての成員の條件の改善のために使用することが必要である。このような観点から、女性の進出と母と子の保護に特別な注意が払われるべきである。

35 新国際經濟秩序の樹立が遅れていることが、世界の女性の社会經濟的状況に直接の影響を与えた。最近の研究によれば、國際經濟問題が女性の雇用や労働條件に与える影響をみると、男性の場合と比較して、給与や仕事の安定性の面でより不利である。輸作物をつくっているプランテーションで、また、繊維、縫製、エレクトロニクス産業で、一番最初に解雇されるのは女性たちである。これらの産業は、比較的最近、途上国にもたらされたものであり、商品價格の動きに敏感であり、保護主義的方策にも敏感である。

36 上記の目標がすべて達成されれば、女性の地位向上のためのより一層の推進の新しい可能性がでてくる。女性の地位の改善は国家的重要事であり、この件に関する責任は国家と社会のすべての部門にある。この改善は、各

国の主権として国家のニーズや条件に合わせて行なわれた時にのみ実現されるものであり、いかなる国が他国に強制しても実現するものではない。

37 伝統的農業部門では、上記の要因は次のような条件のもとでは、より決定的にマインズ効果を与える。このような部門では、女性の基本的第三次産業的行動に変化または急激な後退が見られ、補償の方策もなく、特に農村地帯の統合的發展をもたらす努力も見られず、女性をこのような過程に統合しようとする努力もない場合はマインズ効果はきわめて大きい。すなわち、女性には、土地、信用供与、資金の技術的資源へのアクセスがないので、労働の場面における急激な変化、つまり失職などが、男性の場合より一層悪い影響を与える。

38 一方、最近の、しばしば多国籍企業によって運営されている資本・技術集約的かつ大規模な農場の拡大は、女性の基本的第三次産業的活動、都市での小規模、または半農村的商売などに悪影響を与えている。これらの活動は、収入をもたらすきわめて欠くことのできない営みであり、共同体の自立にとって根本的に必要な営みなのである。事実、この大規模農場の拡大の過程で、食料の生産または、食料や生活の基本物資の流通が阻害された例が多数存在する。他方、途上国経済において、確かに多国籍企業によって経営されている産業の拡張により女性の雇用が近代的部門において増大した例もあるが、総合的發展の観点に立つと、このような拡張は、両性に新しい問題を与えることにもなった。途上国への産業の移動が、安い労働力（特に女性の）を獲得する手段に使われることのないよう、また、時代遅れになった、あるいは「汚い」産業が途上国に移動することのないように、何らかの方策を立てなければならない。工業化は、途上国への技術移転に貢献するための過程の一部として、それらの国の総合的国家目標、優先順位、希望にそって行なわれるべきである。工業化の過程から男性と対等に利益を引き出し、またそれに参加する権利を女性に保障しなければならぬ。

39 事実、これまでに、途上国における専門家中心の産業の将来の傾向について雇用への影響という面から危惧が示されてきた。これらの産業は現地の国のニーズよりも国際市場のニーズに敏感に反応するといわれている。そ

これらの産業は、雇用を創出し外貨を稼ぐという意味ではあるが、他方、インプットはすべて輸入されているし、アウトプットはすべて輸出されているので現地経済への波及効果は最小である。現地の受け入れ側の政府はこれらの産業を短期的な雇用創出問題への解決としても見ている場合がほとんどであるが、それらの政府も長期的の観点からは、熟練労働者を必要とするような産業がより好ましいとしている。このような長期的計画が実現すれば、女性の労働集約的製造業における雇用は、途上国の工業化の過程の一つの過渡的な時期にしかすぎなくなるかもしれない。

40 工業化や発展の過程の一部分として、現地の会社の行動もまた女性や女性たちの職業選択に影響を与える。家内工業やその他の小規模産業は、より大きな企業によりとってかわられたり吸収されたりしていることが多いが、それでもこれらの企業は女性の雇用に多様な影響を与えている。ある場合には、女性の雇用の選択は企業的发展によって狭くされ、他の場合には、このようにして失業した女性たちが後に新しく設立されたより大規模な産業に吸収される。

41 上記の記述は、一方では伝統、習慣や実際の慣行が女性の地位の向上を非常にさまたげるが、国家レベルの発展への女性の経済的参加をさまたげるいくつかの重大な要素は本来的に国際的性格をもつものであり、途上国と先進国との間の関係のパターンから生じるものである。

42 多くの国で、国家レベルで経済社会発展のあらゆる部門における男性と女性の実績を比較すると、国から国へと異なっている発展のレベルに関係なく、経済成長全体によってなし遂げられた成果の中で男女間の与えられた経済的機会の間の大きなギャップは、一般に世界経済危機の中で労働者階級がより一層不利益をこうむっているという状況がある中でも、少しも縮まっていない。相当な給与や雇用の一般的增长を見た国でも、女性はこの増大の正当な取り分を取ることでできず、一方、男性のほうは、労働人口の中で、より大きな雇用安定性をもつので長続きする仕事をもつ機会を獲得し、技術を学び、相対的給与も増大する。女性は、不完全就業人口の相当部分を占め、その割合はふえつつある。この傾向は特に中間サービス、いわゆる第三次的また非正式部門の活動において強い。これらの部門

で、男性と同様に、不当に低い給与を支払われ、極端に低い給与を受けとる場合がほとんどである。このような部門で働く女性たちは、非常に不安定な仕事に陥り、法律的保護に欠け、現存する労働組合はこれらの労働者に十分な注意を払うとは限らない。さらに、ほとんどの国で労働への参加を増大させるための新しい方策、すなわち職業上の流動性、教育・訓練そして信用供与、資金供与などの分野での機構的援助などの点で適正でなかった。

## 第二章 概念的枠組

### A 「第三次国連開発の十年」における発展への女性の参加に関する新しいデータと戦略を含む必要性

43 国連の第二次開発の十年の後半五年の時期における多くの国における世界経済危機の深まりは、これまでの戦略のかなり深い再評価の必要を起させ、「第三次国連開発の十年」のための戦略という観点に立って、国家レベル、国際レベルで、追加的かつ総合的方策をとることを余儀なくさせる。「第二次国連開発の十年」の欠点は、外国負債、不十分な食料増産（工業化にも影響を与えた）、そして、工業化の不適正なレベルとバターンというような大きな問題と関連づけられている。このような失敗は多数の国々の、そして特に途上国諸国の常に増加する失業者への吸収力の欠如によって、より一層悪影響をもたらすことになった。さらに、生産性に関する大きな失敗は、重要な国際的な要素にばかり原因があるのではなく、人的資源を最大限に有効に使用とする国家レベルでの政策の欠如または不適正なあり方にも原因がある。このような観点から、女性の動員に関する戦略（女性性は全世界の成人人口の約五〇％を占める）を詳細に見直す必要性が、最近の研究、特に地域レベル、地方レベルでの政策のための分析において明確に打ち出されている。国連の新しい国連経済秩序の一つの優先順位の高い分野についての会議である世界農地改革ならびに農村開発会議において、女性の問題が討議され、一つのコンセンサスと行動への提言が出された。

44 このような経過は、特に、女性が労働人口の相当部分を占める農業部門

での緊急を要する欠陥をのりこえる努力と関連が深い。農村の統合的發展を推進し、食糧その他の農産物商品の生産性を高めるためには、これらの地域で女性に信用供与、土地そして下部構造的技術へのアクセスを与えると同時に、女性の給与、労働条件、訓練が相当に改善されなければならない。農村地帯のニーズに適合する技術が開発され、女性にとって手に入れられるものとするべきである。移住のみが雇用を見出す唯一の可能性であるような状況は、経済プロジェクトや社会的サービスのをもつと地理的に均等に分散させて生産的雇用や開発を生み出すことによってなくすることができ。このために、現在存在するかもしれない技術移転の農村女性への悪影響や移住の悪影響は減少されるべきである。

45 「第三次国連開発の十年」の国際発展戦略において、国際経済問題の解決に貢献し、途上国のより一層の発展と先進国と途上国との間にあるギャップを縮小することを含む持続的全世界的経済発展に貢献する目標、目的、政策が形成されるべきである。ゆえに、新国際経済秩序の樹立を促進することが重要である。この「ゴールは女性と男性との間の不平等をなくさない限り達成不可能である」「第三次国連開発の十年」の戦略の形成と概観において、この行動計画と世界会議以前の背景資料の中に打ち出されている概念と概観が徹底的に考慮されるべきである。さらに、この新しい戦略は、女性のもつ資源を最大限に使い評価するため、または社会生活や経済発展に対等な参加者として加わることを最大限にするための、国際的・地域的・国家的レベルでの新しい政策を樹立するための、組織立った、また効果的な基礎を築くための、すべての発展の部門・レベルでの女性の参加をもつと適正に測ることができるとの新しいデータを開発する方法や方策を含んでいなければならない。これは、各国そしてすべての国の発展が成功するための前提条件である。

### B 国連婦人の十年の目的と世界会議の副題「雇用、健康、教育」との相互関係

46 婦人の十年の過去の実績によって、平等と平和の目的は、国家、地域そして全世界レベルでの発展のすべての側面に女性が統合されるためのはっきりとしたコミットメントがなければ、達成され得ないということがわかつ

## 第二部 国家レベルでの行動計画

### 第三章 国家目標と女性の経済社会発展への完全参加の戦略

#### A 女性の経済社会発展への完全参加を促進するための戦略

47 女性の地位の改善には、国、地方、そして家族レベルでの行動が要求される。また社会における男女の役割と責任についての両性の態度が変わることも要求される。一般的家庭の福祉のために、そして特に子供の養育に関して、両性が責任を共有するということを確認しなければならない。

48 各政府は、すべての部門において女性と男性の間に存在する不平等を廃すという観点から、経済社会発展への女性の平等かつ完全な参加を促進するための立法的およびその他の措置を行なうことを優先する固い覚悟があるということを確認に宣言するべきである。

49 各国の国家戦略は緊急の課題として、新国際経済秩序そして第三次国連開発の十年のための国際発展戦略への努力に次のような方法で女性を統合するべきである。

- (a) 諸国間の経済・技術協力を強化することによって、社会経済成長をもたらすと同時に、女性の社会経済参加を促すような国家レベルのプロジェクトを行なう分野を見出し研究する。
- (b) 国連諸機関との協力のもとに国家の自立を促進するようなアドヴァイスを与えることのできるようなサービスを提供する。同時に女性に自分たちの労働条件や社会経済状況および健康へ、ある技術移転が良い効果をもたらすかどうかを決定する際に、その決定を助ける役割を保障すること。
- (c) 社会の最下層の恵まれない女性に、彼女らの上にのしかかってきてい

た。社会経済的政治的平等の原則を中におりこんだ発展の目的は、平和と安定に緊密にかかわっている。この平和と安定は、単にある国において、または二国間で暴力が存在しないということだけではなく、世界会議の三つの副題、雇用・健康・教育を選ぶ過程で発展の相互に関連したさまざまな側面は、女性の地位の向上に関して非常に重要であるということが認識された。女性の労働権、同価値の仕事に関しての同一の賃金を得る権利、訓練教育を受ける平等な機会を得る権利の原則は世界行動計画に記されている。また女性を発展過程に完全に参加させるためには、女性が健康、栄養そして家族計画や保育施設などを含む社会的サービスを平等にそして適宜に得ることが必要であることも強調されている。すべての国々において、これらの原則が実施されているかどうかについて、持続的に注意が払われる必要がある。婦人の十年の後半五年間において各国政府はその計画やプログラムの中で上記の原則に高い優先順位を与えるべきである。発展のレベルは、国際的条件にもよるが、特に女性が大多数を占める低開発部門での非常に重要な分野である雇用・健康・教育の面での、国のレベルでの統合的發展への努力にかかるところが大きいのである。事実、農業または工業部門における女性労働者の雇用・健康・教育の分野は、ある国の発展が質的にとどのレベルにあるかという有効な目安となる。労働人口の再生産者としての女性の社会経済的そして健康状態は、発展の展望の決定要因である。女性の雇用・教育の機会のありようは、ある一つの社会が女性にその潜在能力を完全に発達させる可能性を与え、不平等を撤廃している程度を表わすばかりでなく、特に世界の安定をおびやかすような緊急な経済危機の時代にあつて諸国がどの程度その国に内在している技術的経済的資源を最大限に使用しているかを表わしている。部門間のプログラムや活動を連絡することのできるような適正な制度的機能をもった地域委員会を強化することが大切である。別々のプログラムが存在しているのをどのよう

に連絡して実施するかという観点から、国連の各組織間の関係を改善することも非常に重要である。

る家族や共同体が要求する基本的ニーズのための重い労働負担を軽くするためのインフラストラクチャー、基本的サービスそして適正技術へのアクセスを増大させるような方法や方策を与えること。女性に、その他の分野と同様、上記のサービスの分野でもその建設、維持のために必要な仕事の機会や新しい技術を身につける機会を与えること。

(d) 都会の女性と農村の女性が利用しうるサービスや発展の機会を次のような方策をとることによって平等にする。発展が遅れている部門に特別な投資や刺激となるプログラムを実施し、ある部門から他の部門へ資源が移転してしまいうメカニズムをコントロールし、そして可能な場合には、都市の利益のために農村が貧窮化することを防ぐことによって、都市と農村の間に存在する不平等な経済成長の過程を逆流させる。

50 各国政府は、必要な場合には、特別な一時的戦略を立て、国家行政機関や教育システムや雇用や保健サービスその他に現存する不平等を克服するために、補正的メカニズムを樹立して、教育・雇用・保健の分野で平等を達成するべきである。このような特別な措置は現存する不均衡や差別を是正するためにとられるものであり、このような差別や不均衡がなくなつた時点で解消すると理解されるべきである。

## 1、国家発展計画と政策

51 各国政府は次のような行動をとるべきである。

(a) 質的なならびに量的な目標を国連の婦人の十年<sup>1</sup>・平等・発展・平和の後半五年間のためにうち出すこと。必要なときには一九八五—一九九五の計画が考えられるべきであり、概観が一九八五年と一九九〇年になされるべきである。これらの目的は、女性と男性との間の達成の差をなくすること、都市と農村の女性の差をなくすること、不利益をこうむって恵まれない立場にある女性たちと他の階層に属する女性たちとの間で、特に雇用・教育・健康の分野において差をなくすることである。

(b) 組織立ってそして持続的な国家的発展計画や政策、特に雇用・教育・健康の分野で、そして特に国家レベルの発展の各セクター内部の人的・技術的・物質的資源の適正な配分において女性を統合しようとする努力を統合する。

(c) 適当な規定をつくって、女性が一般的かつ部門別の発展プログラムに

どのくらい参加したか、またはそれからどのくらい恩恵を受けたかをモニターし、評価する。

国家発展プログラムのすべての主要部門における社会のあらゆるレベルでなされた進歩を定期的にふり返つてみるための技術的サービスが提供されるべきであるし、信頼できるデータが集められるべきである。女性への恩恵のより公正な配分を保障するために、すべての発展プログラムにおいて、物理的・資金的資源の配分にそつた目標が立てられるべきである。

(d) インフラストラクチャー技術・基礎サービス、刺激が、特に農村人口または都市貧窮者に与えられるべきである。女性は土地所有に関して平等の権利を与えられるべきであるし、信用供与、資金、基礎的衛生施設、安全な水やエネルギー資源に関する平等のアクセスを持つべきだし、共同体を自立させ、それを維持してゆく技術を与えられるべきである。特に健康の分野において女性に特別な留意と追加的サービスが与えられるべきである。

(e) 必要な場所、つまり社会経済条件がそれを必要とするとき、結果として農村における女性の進出を推進するような方策の実施を可能にするような統合的農地改革を行なう。

(i) 農村や都市の女性、特に貧しい女性たちを動員。

(ii) 学習や生産活動、そして必要な開発サービスやインプット（つまり、教育、プライマリー・ヘルスケア、そして保育、技術開発、信用供与、市場、施設）などを組織化する。

(iii) 未組織労働者を含む女性労働者を組織して搾取から保護し、教育、訓練、そして必要な子供のためのサービスを与えることによって、社会経済的流動性を女性に与える。

(f) 発展の一つの道具として、草の根的な組織を推進する努力を組織的に行なう。

(g) 国家レベルの発展のあらゆる分野、そしてあらゆるレベルでの意思決定の過程への女性の参加を増大させるための奨励策や具体的プログラムを作る。

(h) 可能な限り個別の目的に関してその達成のためのスケジュールをつくる。

(i) 必要な場合に、女性労働者の条件を調査し改善するために、政府、雇

用主、被雇用者組織または市民団体などとの間に協議の機会を設ける。

## 2、国家レベルの機構

52 もしまだ存在しない場合には、国家レベルのできれば最も高い政府レベルでの機構を樹立するべきである。国家レベルの機構といつても、それは、国家レベルで中央機関だけを樹立することとを意味するものではない。必要に応じて、総合的ネットワークを委員会やさまざまなレベルで事務所やポストを設けることによって、男女の平等を保障するための行動プログラムの実施が効果的に行なわれるようにする。この場合、さまざまなレベルとは、その地方の特有の状況や関連行政官庁の支所の作業ユニットについて扱いやすい地方の行政レベルを含んでいる。

(a) この機構の国家発展計画における機能や役割を高める。

(b) 政策やプログラムを形成したり計画するため、そしてそれらの計画が政策やプログラムの意図にならなっているかをチェックし、それらの実施と評価をモニターするために、現存する制度的枠組の中でもっと中心的な位置をこの機構に与える。

(c) 発展の各部門内部で女性の問題を統合的に概念化し、同時に、必要となき一つの統合的アプローチを保障するようなアフーマティブ・アクション（差別解消の積極的措置）の効果的方法と政策と機構を發展させる。

(d) 政府その他の機関によってとられる方策に女性が完全に参加するようにする。

53 下記の目標のために国家機構と国家計画機関と全国的な女性組織との間に制度的連結が形成されるべきである。

(a) それらの機関の決定力が増大するため。

(b) それらの機関の技術・資金的・人的資源がより豊かになるため。

(c) 国家の優先順位に従って、發展過程のあらゆる部門において女性の完全参加を促進させるための新しいアプローチを勧告するため。

(d) 国家レベルで女性の完全参加が可能になるように、優先順位の高い分野である雇用・健康・教育において、女性のための国家レベルのプログラムをつくる。これらのプログラムは、諸国間の技術協力を実施する方向への努力を促進すること、または、科学技術・水・エネルギー資源・

その他の開発を新国際経済秩序のための第三次国連開発の十年の戦略に則って行なう方向が目的となるべきである。

54 女性が、發展を扱うあらゆる組織や制度の中で平等に代表されて、国家政策にその開始点で影響を与え、發展への女性の参加と女性の地位の向上の両方をはかるべきである。

55 国家機構は、草の根組織、つまり女性組織、青年組織、農村労働者組織、市民団体、宗教団体、住民団体、労働組合などの参加を、意思決定の場面でも、そしてプロジェクトの実施の段階でも、増大させ、自らは適宜に政府機関と草の根組織の間の連絡係となるべきである。

56 この国家機構は、女性が次のような会議の勧告の実施に、国家レベル・地域レベル・国際レベルで参加し、利益を得ることを目的とした効果的プログラムを実施するべきである。これらの会議は、世界雇用会議（世界農地改革と農村開発会議（注1）、国連發展のための科学と技術会議（注2）、そしてプライマリー・ヘルスケアのための国際会議などである（注3）。

（注1）同会議のレポート（WCARD/REP）または事務総長による総会へのノート（A/34/485）を見よ。

（注2）同会議（ウィーン）に一九七九年八月二十日から三十一日まで）のレポート（UN Publication, Sales No. 79.1.23）を見よ。

（注3）同会議（アルマ・アタ）で一九七八年九月六日から十二日まで）レポート（UNIDO/IOD, 265）を見よ。

57 この国家機関は、女性の組織と他の組織との連絡のためのチャンネルを提供し、

(a) 女性のグループが国際的または二国家間の資金源から資金的ならびに技術的援助が得られるようにする。

(b) 發展への女性の貢献の重要性が社会的に認識され、機会の平等への障害があるかを公けに知らせるために、公式・非公式に教育機関として機能するものを含む。政府または非政府の組織における女性の社会経済的・政治的参加の信頼に足るデータを提供する。

58 各国の国家機関がその目的を果たすことを確実にするために、女性研究

の分野で、いくつかの国々で獲得された経験に言及しつつ、実際の女性  
の地位についての研究や学際的リサーチを行なうように勧告する。

### 3、立法的措置

59 すべての社会的・経済的・政治的分野、また刑法上・民法上の差別的な  
条文は、国籍・遺産相続、財産の所有とコントロール、結婚した女性の移  
動の自由、子供の親権等および経済的取引において、またその計画・実  
施・評価においての権利に関して、女性が差別されているすべての法律や  
条例を廃するために検討されなければならない。

60 各国政府は、女性に自らの権利を知らせるプログラムを形成し、女性が  
これらの権利を享受する方法を示さなければならない。必要な場合、政府  
は、女性の法律上の権利を評価し、立法措置のための優先順位を評価する  
ため、また、まだ実現されていない必要な立法的措置を明確にし、その特  
徴を把握し、分類するために委員会を樹立するべきである。

61 慣習法によって国が治められている諸国においては、政府は、このよう  
な慣習法によって女性が経験する差別の大きさや保護や抑圧の程度に関し  
て調査し、適切な時点で制定法によりこのような慣習を廃するべきである。

62 各国政府は「女性に対するあらゆる形態の差別撤廃条約」の条文を実施  
するべきである。

63 社会的法律、特に親に影響を与える社会的法律を効果的に実施するため  
の手続きが行なわれるべきで、すでに存在する時にはそれが強化されるべ  
きである。

64 親としての、また母性の社会的機能の保護が法律で保障されるべきであ  
る。公的私的部門の双方で出産休暇 (Maternal leave) の定義は、出産の  
前に母親となろうとしている女性の健康を保護するため、出産後に母親  
の健康の回復のために必要とされる期間と理解されるべきである。子供  
の養育は両親の共同責任として、共同体全体もその責任をわかつという認  
識のもとに、両親のうちのいずれもが取ることのできる育児休暇 (Parental

leave) を提供するべく努力する。

65 女性に対する家庭内の、そして性的暴力をなくすために、立法措置がと  
られ、実施されるべきである。犠牲者がすべての刑法上の手続きにおいて  
公正な扱いを受けるように、必要な立法措置を含む方策がとられるべきで  
ある。

66 法律の社会的経済的影響についての教育情報プログラムがさまざまな専門  
家グループにおいて、特に法律・司法関係の専門家グループにおいて行な  
われ、可能な限り法律が不平等に適用されることのないようにする。

67 女性特に恵まれない層の出身の女性が法的な保護を効果的に得られるよ  
うに、カウンセリングや法律相談などのプログラムをつくり、実施するべ  
きである。女性、特に最貧層の女性に、その権利・義務、そして制度的に  
保障されている事項について知らせるために、幅広いプログラムをつくっ  
て法律の広報が実施されるべきである。

68 女性の権利について扱っている国連とその特別機関のすべての国際協定  
特に「性に対するあらゆる形態の差別撤廃条約」を批准するか加盟するた  
めの、必要な努力がなされるべきである。そのような協定の中でも、農村  
の農業労働者のような貧しい女性の権利に関するものは、特に重要である。

### 4、政治的その他の意思決定への参加と国際協力と平和を強化 するための努力への参加

#### 政治的その他の意思決定への参加

69 もしまだ存在していない国においては、あらゆる努力をして、婦人の十  
年の終わりに、女性に投票する権利、公的ポジションに選挙されたり、  
任命されたりする権利、そして公的機能を果たす権利を男性と同等に保障  
するような立法措置をとる。特に政党は女性候補者をすいせんし、女性が  
男性と同等に選挙される機会を与えるべきである。

70 各政府と関係する諸組織は、政治的市民的権利を助長し、女性の参加を

促すためのプログラムを持ち、政治家としての訓練の幅広いプログラムを実施するような政治組織を奨励推進するべきである。

71 各政府や政党は、必要な場合に、目標・戦略・スケジュールをつくり、選挙による、そして任命によるポストにつく女性またはすべてのレベルでの公的機能を果たす女性の人数とパーセンテージを増大させ、女性が平等に代表されているようにするべきである。

72 特別な政府の指示を公布し、政府の各部、全国的、政府、地方レベルでの部門において、女性が平等に代表されているようにする。さまざまな活動を通して、女性の代表数が同等になる時が来るまで、ポストについてより広く公示すること、上昇的流動性を増大させることによって、女性の募集・任命・すいせんによって特に意思決定の、または政策形成のポジションの女性の数を増大させなければならない。

73 女性はすべてのレベルで、特に高いレベルで、政治的・経済的・法的問題、軍縮その他の問題を議論する国際機関の代表団ならびに国際会議や委員会の代表団に平等に代表されなければならない。各国政府は、国連とその下部機関や特別機関のあらゆるレベルで、また技術的専門職のレベルで、女性の雇用の増大をサポートし、奨励しなければならない。

74 公的ポジションに就任するために特別な資格が規定されているときには、それは両性に平等に適用されるものでなければならぬ、そのポジションの任務を遂行する上で必要な専門知識に関するもののみに限られているべきである。

75 政治的ポストに選ばれることにおいて、事実上女性を差別するような結果を生むような公的非公的な習慣、そして同様に女性を公的意思決定、特に、公的委員会、理事会、または略式の委員会などから除外するような習慣を廃止するべきである。

国際協力を推進し平和を強化するための努力への女性の参加

76 世界の女性は、最も広い意味で、国際協力を広げ、国家間の友好的関係を発展させ、国際関係においてデタントをなしとげ、国際関係に新国際経済秩序を樹立し、基本的自由と人権の保障を推進するという国際的平和と安全の強化のための闘いに、また、植民地主義・新植民地主義・人種主義・アパルトヘイト・外国支配・外国による抑圧・外国による占領に反対する闘いに参加するべきである。

77 植民地主義・新植民地主義・人種主義・人種差別・アパルトヘイトに反対し、民族の独立と解放のために闘っている女性との団結のためのキャンペーンが強化されるべきである。これらの女性たちは、国連の諸機関やその他の組織からの支援を含むすべての可能な援助を受けるべきである。

78 すべての方法で政府間または非政府組織の国際平和と安全を強化しようとする努力はより一層行なわれなければならない。これらの組織の活動への女性の積極的参加は支持されなければならない。国際協力と国際平和と安全の強化のための各国間の、国の組織間の交流が促進されなければならない。

79 政府間や非政府組織は、軍縮が社会経済的發展に与える影響、特に女性の地位改善のためにどのくらい役立つかを、より一層総合的に検討するべきである。このような研究の結果は、できるだけ多くの男女の目に触れるようにして、実際の効果のあるものにするべきである。

80 国際的不平等を廃止することの重要性を考慮しつつ、政府間または非政府組織は、女性の地位への多国籍企業の活動の影響を研究し続け、その結果を実際プログラムに役立てる。

81 各国政府はこれらの研究の結果を認識し、多国籍企業の活動が女性の地位に与えるネガティブな影響をとり除くようにする。このようなネガティブな例が南アフリカであり、そこでは多国籍企業がその資本投下によりアパルトヘイトシステムを維持している。

82 自らの基本的権利のために闘っているパレスチナの女性と人民に支持を送るように、世界中のすべての女性はその団結を表明するべきである。道義的物質的援助が国連からパレスチナの女性に与えられるべきである。そのための特別なプログラムが作られるべきである。

### 教育と情報の流布に関する方策

83 国・地域・国際的レベルでの女性組織を含む独立した組織は、新聞や広告業を含むマスメディアが女性の地位や女性の問題をどのように扱っているかを研究するべきである。女性が性差別主義的に、または尊厳を奪われた形で扱われているという証拠を提出して、関連したメディアにその訂正を迫るべきである。

84 メディア組織において、すべてのレベルの政策決定と意思決定に女性が非常に積極的に完全に参加できるように奨励するべく努力が払われるべきである。政府は、高いレベルの意思決定において女性が平等に代表されることを確実にするために、任命などの機会を使って女性を放送ネットワークの中や正規職員として参加させるべきである。

85 特別な訓練プログラムなどをつくり、すべてのレベルでメディアに働く人々の意識をより鮮明にし、女性がメディアの中で独自の権利をもった人間として描かれ、女性の描き方や女性問題が、女性自身の権利、必要、利益を反映するよう努力する。

86 女性が社会に完全に参加することを阻むような偏見や伝統的態度を廃すために、メディアを使った教育プログラムやキャンペーンが行なわれるべきである。これらのキャンペーンは、男性と女性に自らの権利とその実施の方法を知らせるべきである。女性は意思決定機関に参加する能力を増大させるように、女性組織やその他の非政府組織、政党、労働組合は、積極的に女性を政治的に教育しなければならない。移民女性に情報を与える上で、メディアが果たす特別な役割に注目すべきである。女性が自らの必要、アイディア、希望（願望）についての理解を、可能な限り広く聴衆に知らせるために、さまざまな形態のメディアにおける訓練をうける機会を持つべきである。

87 各政府は、マスメディアの女性が国際協力と平和の強化のために働くことを支持する。そして、女性が各国政府が国際関係の重要な問題においてどのような態度をとっているかを知ることができるようなプログラムを奨励し、女性が、国際平和と安全の強化のため、植民地主義・人種差別主義・人種差別・外国の侵略と占領、そしてすべての形態の外国支配に反対するための役割を果たすことができるようにするべきである。

88 特別なキャンペーンを行ない、女性と少女が農村の共同体、青年発展プログラムに、そして政治的活動に、より多く参加するようにするべきである。

89 マスメディアは、国連婦人の十年の後半五年のための行動プログラム、平等・発展・平和、そしてその他の女性のための国際的・地域的・国家的プログラムを推進するべきである。これによって、一般の人々がこれらのプログラムの実施により一層参加するようにするべきである。

90 女性の地位向上の障害の一つは、社会的態度の中にあり、女性の社会における再評価の中にあるという事実に留意する時、マスメディアは、社会変革を推進する一つの手段として大きな可能性をもっている。マスメディアは、偏見とステレオタイプをなくすのに力となり、女性の社会における新しい役割の受容を早め、発展の過程においての女性の対等なパートナーとしての役割を推進することができる。

91 すべての活動分野で、一方では女性を受動的・劣等的な、社会的に何の重要性もない存在として紹介し、もう一方では社会全体における女性の増大する役割と寄与を紹介するという矛盾を克服するための社会における一つの基本的手段とならなければならない。マスメディアはまた、両親が子供の訓練教育において、また家事において、平等な義務と責任をもつということとを認識すべきである。各国政府はコミュニケーションを行なう機能としてその国の事情を知らせる準備をする時に、その内容が政府の女性の問題への関心と積極的姿勢を反映するようにするべきである。

## データベースの改善

92 すべてのデータ収集機関は、必要な場合には常に、性と年齢による分類をどのような情報に關しても行なうべきである。

93 リサーチのための概念や分析のための手段、特に評価・労働・仕事・雇用・社会的生産性・家庭・家族などの経済的プロセスに關する概念や手段に關して再検討を加え、家庭の内と外における女性の経済的社会的役割の分析手段と概念を改善する。

94 これまでの社会的リサーチの対象からはずされていた女性のグループ、つまり、農業やその関連活動での農村労働者や社会の恵まれない層の女性労働者などのグループに關するリサーチが優先されるべきである。これらの女性は、一般的に仮定されてきたように、扶養される者（他に依存するもの）などでは全くなく、家族の生存のために多様な役割を常に果たしてきた。よりよい発展プログラムの評価のためには、データへのアクセスとその利用が保障されなければならない。

95 女性の実際の発展プロセスへの寄与を測る目安として、女性がどの程度実際に發展に参加してきたかを決定するために、国家・地域レベルでの指標が開発され、改善されるべきである。両性の間の平等の達成の進み具合をモニターするための統計的指標が樹立されるべきである。このような指標を樹立する上で、各政府はそれぞれの国の現在の統計的發展を考慮に入れ、また、それぞれの国の政策上の優先順位を考慮に入れるべきである。無償労働を貨幣單位に換算するようなシステムを工夫し、GNPに、その労働の量が反映するようにする。

96 一般的經濟成長のレベルおよびその成長の部門別構造が明らかにされ、雇用の機会がどこに存在するかが決定されるべきである。人口構成（年齢構造・農村人口と他の部門の人口との關係など）に關するデータが収集され、雇用の機会や保健サービス、教育の必要度が明らかにされるべきである。

97 現在行なわれている統計的操作や實際上の手續きが、性的ステレオタイプによってゆがめられていないかどうか検討するべきである。

98 必要な場合、国の統計局に關して、永続的諮問委員会を作つて、女性の狀況に關するデータ、發展への参加のデータ、そして両性の平等についてのデータの量と適確さを改善するべきである。このような諮問委員会の仕事は、時により、相互に關心のある特定の問題を討議するための統計製作者と利用者間のより大きな會議の結果によって補足される。

99 女性の地位や役割、發展への参加そして両性の平等の程度を明らかにするのに必要な統計をより利用価値のある、またより適確なものとするために、新しいまたは修正された概念や分類のためのリサーチや検証が企画され拡張されるべきである。これらのリサーチや検証は、政府の統計局によつて使われるか、または大学その他のリサーチグループに使われるかを問はず、それらの統計の作製者と利用者の双方の参加を必要とし、データ収集と分析とデータの發表の方法と手續きを包括するものでなければならぬ。

## 非政府組織の役割

100 婦人の十年の後半五年の行動プログラムを実施するにあつて、政府、非政府組織、女性・青年組織、雇用者・労働者組織、ボランティア組織、コミュニニティ組織、宗教団体、マスコミ、政党、その他が協力するべきである。

101 各国政府は非政府組織の活動を考慮に入れ、必要に応じて、女性の福祉と地位に關心をもつすべての組織、制度、その他の協会などの努力をサポートするべきである。

102 各国政府は、女性組織の重要性を理解し、それらを奨励・援助し、財政的その他の援助を与え、特に草の根レベルでの組織を援助し、次のような機能を果たすことを可能にするべきである。

- (a) 女性の大衆的動員、特に農村と都市の貧しい女性の動員。
- (b) すべての發展のためのサービスと施設を与える（教育、保健、保育、

信用供与と販売能力と施設の拡張、社会的・政治的・経済的権利に関する情報など)

(c) 農村と都市における未組織女性労働者を組織し、搾取から保護し、また必要な補足的保育サービスを提供する。

103 国連婦人の十年の世界会議のフォローアップとして、各国政府は次のことを行なうべきである。

(a) NGO フォーラムと世界会議の結果の出版を可能にすることとそれを流布すること。

(b) 婦人の十年の後半五年の行動プログラムの実現のために非政府組織を関与させる。

(c) 女性の諸条件の改善のための国際的・地域的・国家的計画の実施において、非政府組織が持っている役割と資源を考慮に入れる。

(d) 非政府組織の特定の勧告やインプットを将来の計画として考慮に入れ、その実施のための戦略をたてる。

(e) 非政府組織に資金的援助を与え、それらの組織が行動プログラムの実施に寄与できるようにする。

104

非政府組織は次のような方法で政府の努力をサポートするべきである。

(a) さまざまなグループの女性の問題を調査する。

(b) 学習的・生産的その他の発展活動を推進するために、草の根レベルでの女性組織、特に貧しく教育を受けていない女性たちとの間の組織を援助し推進する。

(c) これらのグループと教育その他の発展機関との連絡サービスを提供する。

(d) 女性と男性の間の態度の改革を推進する。

(e) 女性グループの間の団結を推進する。

(f) マスメディアや政党に情報と影響を与える。

(g) 新しい分析の方法を発達させる。

108

女性労働者のためにとられる労働政策や行動は、男性も女性も含む全労働人口のための全体的雇用政策や方策の一部を形成することを確実にする。そのときに、女性に特有の問題を克服し、女性に対して差別となるような保護方策を防ぐということに留意する。都市の周辺のグループ、低所得層、

## 草の根組織

105

必要な場合に、各国政府や機関は、地域的行動計画に則って、世界行動計画を実施するために、総合的發展努力の統合の一部として、草の根組織を樹立推進し、それらの組織の努力が実るように、資金的・人的援助を与えるべきである。このような草の根組織は、女性が自立を達成するためのフォーラムとして機能し、将来は女性が資源や権力を獲得することを可能にし、それによって女性が共同体の中でも、社会においても、より大きな社会経済的な、また政治的な責任を負うことができるようにする。

## B

### 世界会議の副題「雇用、健康、教育」 との関連での行動の目的と優先順位領域

#### イントロダクション

106

雇用・健康・教育に関する女性の地位を改善するための行動の目的と優先順位領域は、国民のための国家的計画および発展との関連の中で全体的な視野をもって推進されなければならない。さらに、これらのうちの一つの領域の改善は、その他の領域の状況をも変える。効果を最大限にしようとするならば、この相互連関性を認識しなければならない。物質的経済的發展のために、社会文化的価値が犠牲にされてはならない。この目的のために、統合的かつ創造的プログラムと新しい方法論が研究されなければならない。

107

プログラムは常に政府その他の社会経済的機構の助けをうけて、新しい機会・政策・プログラムを完全に利用することができるように、女性が自ら組織したり訓練をうけたり十分な情報をえたりして、女性自らの能力の開発のための方策を含むべきである。

原住民グループなどの恵まれない人々のグループのための雇用政策の中で、女性労働者の特有の状況に言及する。

## 1. 雇用

### 目的

109 男性女性の双方が、家事・育児と給与を得る職業との両方を組み合わせる可能性を持ちうるということが要求されることに留意しながら、雇用における女性の完全に平等な機会と待遇を推進すること。女性が同価値の仕事に関して男性と同等の報酬を得、農村と都市の双方で同等の教育訓練の機会を得て、より高い技術を要する仕事を確保し、各国の発展に統合されるようになり、農業・工業その他の産業において、より急速な、そしてバランスのとれた成長が可能となるようにする。これは、女性の発展の過程に統合するために、農業と工業の両方に、より急速なバランスのとれた成長を達成するために、女性の全体的労働条件を改善することを確実にすることを目指すとしている。

110 各国の自立を達成し、途上国間の経済技術協力を増大し、自らの利益のために労働力の完全利用をはかり、各国の社会経済発展をはかるという目的を持ちつつ、より公正な国際経済秩序をもたらすための国家努力の一部として女性の雇用の機会を推進し増大する。

111 大多数の女性が働く、各部門の低または中間レベルの女性労働者の職業的流動性を高め、労働条件を改善する。

112 適正な労働条件のもとに農村における農業・非農業における女性の有用な雇用の権利と機会を保障し、農村女性労働者の生産性と能力を高め、食料生産を増大させ、移住が現在必要となつて国ではそれを少なくし、その国の人口政策の中で明確に移住を少なくするための方策を打ち出し、農村発展と自立的プログラムを強化推進する。農村で働く女性たちに労働または社会保障法規を適用する。

113 雇用の機会を増大するために効果的な政策を推進し、女性の職業的流動性を高めるために、農村でも都市でも、すべての部門で特に管理レベルで女性がより高度の技術と責任を必要とする仕事を得られるようにし、すでに現在する機会をより改善する。そのためには、「第三次国連開発の十年」の工業化の目標達成の観点に立って、母性保護・保育施設・技術訓練・健康保護などを奨励する。

114 男性がもつと家事をし、育児責任を分担するように奨励し、女性の雇用を容易にする。

115 女性の労働条件に関する法律の実施のための方策をとる。

116 各国の経済社会発展の優先分野においての女性の収入源となりうる活動を与えることの必要と、すでに存在する雇用状況を改善するの必要とを特筆した、国家レベルまたは地方レベルでの訓練と雇用プログラムを作成し実施する。

117 女性が参加することによって、労働市場のある部門において、労働条件・給与システムおよび部門の地位そのものが悪化するということがないようの方策をとる。

118 女性の生産性を高めるような技術を推進し、労働時間を減少させ、このような技術の改善は女性労働者に利益をもたらすことを保障する。

119 女性の昇進とキャリアの障害や困難をとり除くという観点に立って、外的・内的仕事評価を検討する。

120 すべての部門で、女性の労働からの経済的な報酬は彼女ら自身に直接的に与えられることを確認する。

### 行動のための優先分野

121 女性労働者に自らの法的権利やその他の救済措置などを知らせるために特別なプログラムを作るべきである。雇用において特に女性の地位に関

して重要である組織する権利の擁護と結社の自由が強調されるべきである。雇用の機会均等、同一価値の仕事に対する同一賃金、労働条件、仕事の安定、母性保護などの女性の権利に関するILOの関連条約や勧告を国内法で批准し実施するための特別な施策が行なわれるべきである。

122 情報プログラムを作る際には、女性、特に農村や社会経済的に恵まれな階層の女性たちに教育・訓練・技術の習得そして雇用の機会があることを認識させるように行なわれるべきである。

123 国家レベル計画のさまざまな部門の開発機構は、政策として、そのスタッフに女性を数多く組み入れることを確認し、その政策の一部として、資源を女性の雇用と訓練のため、それをサポートするサービスの提供そして他の欠くことのできないインプットのために配分するべきである。

124 女性に雇用を獲得したり維持する上で危険を与えたり、その女性の仕事に妨害を与えたり、その経済的生活をおびやかすような、性的な傾向をもった慣行から女性を保護するための立法的その他の方策がとられ、実施されるべきである。

125 女性と男性に労働と失業保険への権利を平等に保障するため、また妊娠や母性を理由に退職させたり罰則を加えたりすることや、結婚しているかどうかによって退職などの差別を行なうことを禁止するために、立法的その他の方策がとられ実施されるべきである。家庭の事情で労働市場を離れた女性が市場に復帰することを容易にし、また母性休暇の後に女性が職場に復帰する権利を保障するために、立法的その他の方策がとられるべきである。

126 人的再生産の機能を保護することも含む労働条件における安全と健康の保護に関して、男性と女性が平等の権利にもとづいて保障されるように方策がとられることを確認する。妊娠中の女性については、そのような状態において害があるとされている業務のタイプからの保護が与えられるべきである。

127 移民労働者に、受け入れ国の国民と同等の待遇と職業訓練へのアクセスを享受させること、そして、移住の過程で移民労働者の家族として共にある女性たちの地位を改善するための方策がとられるべきである。

128 家庭内における、そして農業労働における、すべての分野での男女双方による無償の労働が正式な統計的データ収集において認識され反映されるような方法が考案されるべきである。

129 共同体の生存のために欠くことのできない仕事をする上で、伝統的に女性に課せられた労働を軽くするため、そして生産性が高まることの利益は女性労働者とその家族のために利益となるという観点から、収入を伴った雇用と生産性を増大させるために、農村や都市のスラムの家族や共同体のための緊急を要するインフラストラクチャー・サービス、つまり適正な住居、安全な水、エネルギー、保育所が開発され供給されるべきである。

130 必要な場合に、女性の雇用の機会を拡大するために、そしてまた物質やサービスの生産を通して収入を生み出すために、伝統的に女性の分野でなかった分野での柔軟な正式または略式的な訓練プログラムが企画され実施されるべきである。

131 特別な技術訓練プログラムへの女性のアクセスを増大させ、すでに資格のある女性については、個人の技術に応じて仕事を得るように援助するべきである。伝統的部門と近代的部門の両方で、性・人種・年齢・結婚しているかどうかと母性を理由に搾取が存在しないように立法的措置がとられ、必要な法律的支援（相談・弁護など）がなされるべきである。そのうえ、現在広く発展しつつある進歩した技術における新しいタイプの訓練を、男性と同様の条件で受けられることを確実にする方策を立てるべきである。

132 パートタイムマーとして働く労働者に通常雇用で働く者と同様に、その時間の割合に応じて、報酬や社会保険などの恩恵をうけられるための方策と、同じレベルの労働条件と保護基準を与えるような方策がとられるべきである。

133

必要なときには、小規模売買、家事手伝いその他の、都市または農村における略式な小部門を含む第三次産業部門についての政策を發展させ、必要とされている改革を早めるための方策がとられるべきである。それは特に次の方法による。

(a) 特に家事手伝いとして働く労働者にも労働法が及ぶように、労働法適用の拡大をはかる。

(b) 上記の女性たちが管理する、労働組合、その他の適当な組織、たとえば信用・販売協同組合などを結成する権利を保障する。

(c) 女性の労働条件を改善し、職業的なために教育上の流動性を増大し、生産性を高め、収入を増大させるために、女性が管理または技術訓練、資金源、信用供与その他のインプットに持つアクセスを増大させる。

134

技術移転が起こる場合には、女性が常にもっと大きな被害をうけるような労働人口への悪影響を避けるために、技術移転の起こっているその国の生産要因が考慮されることを保障する方策がとられるべきである。特に途上国について重要であるが、その国の特性を考慮に入れた内在的適正技術の研究が促進されるべきである。工業化と技術移転についての新しいプログラムと適正な政策をたて、女性の雇用・訓練・健康・栄養の面で、そして發展全体の問題として、技術移転が悪影響を与えることのないように、その恩恵を最大限にするべきである。移転された技術が使用しても安全であるために規準が設定されるべきであるし、受け入れ側は、特定の形の技術の問題点について注意を与えるべきである。

135

多国籍企業が女性により大きな雇用の機会を与え、否定的な効果を与えないように、その政策、行動プログラム、拡張する業務などについて研究がなされるべきである。

136

女性は、家事という二重の負担をもっているため、必要なだけ自由時間を持ってないので、女性のためのレクリエーションや文化活動へのアクセスをふやす。そのため家事と家族の世話を男性が分担するところが非常に重要である。特に夫婦は女性の雇用の機会を増大させるという観点に立つて家事を分担する義務をもつことが強調されるべきである。

137

経済的不況の中で、男性よりも女性が就労しにくいというような状況にならないような方策がとられるべきである。失業に関する社会立法において、直接的間接的に、男女の間に不平等をもたらすようなことになってはならない。失業中の女性に再訓練の機会が与えられるべきである。これは、成長部門で行なわれるのが好ましい。

138

男女の双方が家庭生活と職業生活の調和をはかることができるように、保育所や年少少女のための施設が提供されるべきであり、労働時間の短縮がはかられ、フレックスタイム（流動的労働時間）が採用されるべきである。

139

国や国際的労働者の組織や諮問機関において、少なくともその職業に就いている女性の割合に見合った数になるまで、意思決定のレベルにいる女性の数を増大させる。

140

雇用の機会平等のためのプログラムを發展して、管理職や意思決定のできるポジションのあらゆるレベルに女性が参加できるように推進し、女性または少女が伝統的に女性の分野でなかった技術専門分野に入っていくことができるためのプログラムを勧告する。

## 2、健康

### 目的

141 次のような方法で社会の成員すべての肉体的健康的健康を改善する。

(a) 全社会経済的發展の必要な側面として、少女と女性の健康状態を改善する。

(b) 人口政策の形成。

(c) 全ライフサイクルを通じて女性の健康を改善する。

(d) 健康増進の恩恵をうけるものとしてだけでなく、共同体そして国家レベルでの政策決定の形成と実施に男性も女性もより一層参加する。

(e) 病氣の原因を解明する研究を行ない、臨床的疫学的リサーチ・プログラムの樹立、各国の問題と取り組むためのサービスを組織する。

(f) 子供や女性に対するすべての形の暴力を廃し、家庭内暴力、性的暴行、性的搾取そしてその他の形をとった暴行から結果する肉体的精神的打撃からすべての年齢の女性を保護する。

(g) 必要とされる量的質的な保健プログラムのために人的資源を訓練する。  
(h) 女性のための全体的保健プログラムの一部として、アルコールその他薬物（麻薬を含む）プログラムとともに精神衛生の面も含む。

### 行動のための優先分野

142 共同体の参加をえて、プライマリ・ヘルスケアを保健分野の最優先として、また世界行動計画の保健の目的とその達成のための基本的手段として推進する。

143 農村地帯や、都市の貧しい女性たちの必要に特に注意を払いつつ、女性のプライマリ・ヘルスケアにおける必要を満たすことに高い優先順位をおき、これらの必要が適正に満たされているかをチェックするためにプログラムをモニターする。

144 保健プログラムを計画し実行する段階で女性を参加させるように政府の公式な政策を形成し、特に意思決定の段階での女性の参加を増大する。

145 女性がヘルスケアについてよりよいアクセスを持ちうるように総合的な家族保健、栄養、保健教育ネットワークをつくることによって、すべての女性が母性ヘルスケア（妊娠中・出産・出産後のケアを含む）、栄養（栄養失調による貧血を含む）、家族計画、伝染病と性的に感染する病氣、非伝染病を含む寄生虫病の防止と治療の機会を持つことを確実にする。

146 児童福祉と家族計画プログラムと家族計画の情報を発展し実施し強化する。情報に関して言えば、安全で適正な産児制限の方法を男と女の学生に学校の教科として教え、母親と乳児の保健と安全と福祉を推進するために、女性と男性の双方が家族計画に責任を持ち、また女性がその子供の数と何年おきに生むかを自由に責任をもつて決定する権利を行使することができるようにする。家族計画は、母と嬰兒の死亡率を減少させるための一つの手段として用いられるべきである。死亡率は、高い出産率、頻繁すぎる妊

娠、出産可能な年齢のうち高すぎたり低すぎたりする年齢での出産、秘密に行なわれる中絶の度数と危険などが高まると、高くなる。

147 女性の肉体的精神的健康を推進するように、女性の地位を分析し評価するためのリサーチを今後数年の間に追加的に行なうこととする。

148 共同体の保健の仕事にたずさわる者、特に女性、伝統的医療従事者、産婆、村の老婆などをより効果的に利用し、訓練を改善するためのプログラムをつくる。  
家庭内または共同体での女性のプライマリ・ヘルスケアへの貢献がより大くなるようにサポートする。この場合特に健康の自己管理や自助の分野に注目する。

149 医者や他の保健関係の専門家が妊娠や出産ばかりでなく女性の保健の必要一般に注意を払うようにする。予防医学や、他の分野の専門家や女性自身と責任と意思決定をわかつ必要性が強調されるべきである。

150 女性が地方または国家の必要に合った保健関係のリサーチを行なえるように、そしてまた医学専門家としての活躍ができるように、政府が正式な政策をうち出して、女性により一層の訓練の機会を与えるべきである。

151 簡単な経済・社会・文化的指標を開発して、女性の罹病率や死亡率の傾向に関するデータと、保健サービスをどの程度利用しているかについてのデータを集める。現在の状況、将来の傾向、資源生産性を示す信頼できる最新の指標を提供しうる、全国的基礎的保健情報システムをつくる。

152 女性の必要、特に妊娠中や授乳中の女性の必要に基づいた、そしてまた農村や都市の最貧層の女性や児童の必要に基づいた食料・栄養に関する政策を形成し、実施することを優先する。専門学校や共同体機構を通じて教育プログラムをつくり、食料、特にその地方で生産された食料の合理的分配と利用、質、入手しやすさ、準備、保存の方法を改善する。

153 女性とその家族の健康と安全を次のようなものから守る。食料の汚染、

腐敗、不純物混合、有害な添加物と保存剤、不正なラベル、不適正な包装、無責任な栄養分の少ない食物や母乳代替品の消費の推進。

必要な場合には総合的な立法措置をとり、その実施が緊急に行なわれるべきであり、市場で売られる商品の製造・保存法・包装法・ラベル法などについての基準も含む適正な安全、衛生、商品情報、質の規準が緊急に作られるべきである。女性も男性も、このような製品の正しい衛生的な使い方を教えられべきである。上記のような保護に関する権利についての情報は、学校、メディア、村や共同体の組織を通して広く伝えられるべきである。

154 健康の根本的基礎として、衛生、衛生施設、安全な水資源の利用が改善されるように、地方と国のレベルで、明瞭な政策を形成するべきである。

155 家庭や仕事場で安全な労働環境を保障し、女性の労働負担を軽くするための適正技術を提供するような政策を發展する。労働衛生安全についての研究を、特に女性の健康がおびやかされるかもしれない分野において行なう。

156 環境汚染を少なくし、毒性化学物・放射性廃棄物をコントロールして、女性の人的再生産機能に影響を与えるような職業病をなくすように立法措置をとる。

157 伝統的なよい習慣、つまり母乳を与えることを奨励し、同時に女性の健康に害になる習慣を止めさせるような努力も含む保健教育を広く推進する。

158 農村や都市の貧困層、そして最も弱者であるグループに優先権を与えつつ、母と乳児の死亡率を低くするような特別なプログラムを形成する。

159 男と女双方が、最も健康的で選択の幅が広く両親としての役割を果たすことができるように、出産または育児のための両親のための育児休暇・保育・母乳を与えるための休けい時間などの社会的施策をたて、実施する。

160 老齢の女性、一人住まいの女性、そして身体障害者の女性に特別な注意

を払う。

161 思春期の女性に特別な医学的ケアを与えるためのプログラムをつくる。この時期は、女性の生物学的・心理学的な発達著しい非常に重要なそしてまた自らの住んでいる社会環境と自分との関係が変化する時期である。

162 女性の身体と健康を害するミュティレイション（訳注：身体、特に性器の一部などを切除）を廃止する。

163 家庭内暴力をなくすためにその原因と、どの程度起こっているかのリサーチを推進する。女性の性的搾取、女性に対する暴力を、マスメディア・文学・広告の中で諷刺することをやめさせる。暴力や性的暴行の犠牲になつた女性や子供のためのカウンセリング、かくれが、治療を提供するためのセンターを樹立して、このような犠牲者の救済をはかる。

164 薬物・アルコール・タバコ・薬などの女性自身と子供への害とその内容物を知らせることによって、これらの過度の使用による害から女性を守るための行動計画を形成する。

### 3、教育と訓練

165 少女や女性に、あらゆるタイプのあらゆるレベルでの教育・訓練を得る平等の機会を与え、彼らが自らの人格を完全に発達させ国家レベルの計画の社会経済目標を達成するための作業に男性と同等に参加できるようにし、自立し、家庭の福祉を達成し、生活の質を改善することができるようにする。

166 女性と男性の役割の伝統的ステレオタイプを廃することにより、そして、女性の、家庭・労働市場、社会的公的生活への参加を積極的に評価する新しい女性のイメージを創造することによって、社会的態度を変える努力をする。

167 教育プログラム、方法論において、非暴力のための、特に男性と女性と

の関係における非暴力の教育的展望を考慮に入れる。

168 教育プログラムや方法論の中で、暴力に反対する教育、特に女性と男性の間の関係における暴力に反対する教育に強調点をおく。

169 少女と女性に創造性を発展させ、自由への権利を推進し、文盲をなくすために努力する能力を発達させるような創造的プログラムや方法論を提供する。一方、雇用・保健関係事項、および彼らの政治的・経済的権利に関する基礎的情報と機能的技術を改善する。

170 可能な限り少女と女性が教育・訓練・雇用の三者間について、よりよい関連をもちうるように、労働・見習い・社会生活の間に過渡的リンクをつくる。

171 各国の社会経済発展の特別な必要に適合する最終学年のコースを教育計画の中で形成し、実施し、女性が収入をうるための雇用により近づきやすくし、非伝統的な分野の活動にも参加できる機会を増大させる。

172 女性が科学や技術の方面に参加することを推進するための機会や施設をその分野の教育や訓練を通して増大する。

173 少女たちが学校に長くともるような方策をたて、彼女たちがとるコースが、職業・マネジメント・経済学・科学など、将来彼女たちが意思決定のプロセスで影響を与えうる地位に就けるように準備するためのものとする。

### 行動における優先分野

174 教育、特に識字教育は、女性の地位を改善するための非常に重要な必須条件なので、全人口中における識字教育のための全国的努力の枠組の中でも、少女と少年との間に識字率や教育達成点の差をなくすように努力がなされるべきである。

175 すでに学校からドロップアウトした少女や女性をまた公教育システムの中にもどらせることを奨励するような国家的単位と検定資格授与のプログラムをつくる。

中にもどらせることを奨励するような国家的単位と検定資格授与のプログラムをつくる。

176 女性の社会への貢献を強化し、文化的・社会的規範によって女性を男性に与えられた伝統的役割を変えるための児童の、特に学齢前の児童の、または若い人々の教育的プログラムを推進する。

177 そのための資源を特に与えられた適正なスタッフと物質的基礎をもったコースや制度を含む女性のための教育機会や施設を拡大するための目標を設定する。

178 女性が家庭内の義務を果たしつつ教育レベルを改善することができような、公的または課外教育を提供する。

179 可能な限り男女共学ができるように援助を与えつつ、小学校のレベルで、立法措置により、少女にも少年にも、無償で義務教育を奨励する。訓練を受けた両性の教師を雇い入れ、必要なときには寄宿の便宜をはかる。

180 女子学生を奨励し、教育コースへの入学を増大する。特に科学・数学・技術コースおよび科学技術分野での管理職訓練コースに入学することを奨励する。

181 すべての一般的な教育のレベルや、職業教育やあらゆる職業のための訓練において、女性に（男性と）同等のアクセスを提供する。この場合、特に伝統的に男性に与えられている仕事のための訓練も含む。また、新しい訓練方法やその他の施策、つまり職業の現場訓練、奨学金、安価な宿泊食事のための施設、保育所なども含む。職業訓練が終わった時点で、または職業上のポジションから一時的に離れていた場合の就職、再就職において男性と同等の機会を保障する。

182 教科課程や教材を検討し、性的偏見や少女と女性の役割に関するステレオタイプ的なイメージを取り除き、性的偏見のない教育課程や教材をつくる。

183 一九七五年以来努力してきた国々において、女性の持つ潜在能力を最大限に開発するための学習材料の全国的使用のための目標をつくる。

184 大学の正式の教科(訳注:それによって大学卒資格がとれる)の中に女性の問題に関するコースを含む。

185 中等・高等教育および成人教育において、世界人権宣言その他の関連のある協定書などを含む人権の基本的理解を奨励する。このようなコースは、人種と性による差別を撤廃することの基本的重要性を強調するべきである。

186 少女や少年を、ステレオタイプとなつてい性役割に従つてではなく、個人の資質によつて職業を選択できるように、進路指導のためのカウンセラーと教師を訓練する。

187 教師に、教科を学校で選択するときに禁止的な働きをするステレオタイプ化された前提条件が存在していることに気づかせ、少女と女性の将来の訓練と職業の選択を拡大することの必要性を認識させるためのコースを教師養成課程において推進する。  
可能な限り、労働者や雇用者のためと同様、両親、教師と生徒の利益になるようなカウンセリングサービスを提供する。

188 教育のすべてのレベルで教師として、また行政的ポジションにおいて男性と女性に平等を奨励する。

189 文化的社会的に恵まれない種々のターゲットグループについての制約条件を明らかにし(学齢期だが学校に行っていない少女、文盲の成人、家事責任および追加のまた多様な教育の必要をもった成人、農村や都市における異なった年齢層の働く女性、成人した女性、移民の女性など)、そのようなグループのためのプログラムを形成し実施する。

190 女性と少女がドロップアウト(中途退学)する率に関するデータおよびドロップアウトの原因、コースの内容、それによつて得られる技術レベルについてのデータを改善し、システムの中における政策目標を達するべく

より大きな決意を生みだし、そのドロップアウト現象を止めるための、より有効な施策を行なう。

191 必要となときに、特別なそれを最も必要とするターゲットグループを想定し、状況分析に基づいた、そして教育予算における優先项目的サービスのために資源を含む必要事項、支持を与えるためのサービスやカウンセリングを提供する(必要の中には、保育施設・収入源を与えるための学習のためのプログラム・交通手段・衣服・本・補充的食料・読書のためのセンター・数学など基本的学科の特別な月謝・奨学金その他が含まれる)。

192 発展途上国と先進国の双方で、すべての開発分野において生涯教育をめざした女性のための教育機会を提供し、そのために必要な人的資金的施策をはかる。

193 すでにいくつかの国での女性の地位について体験された結果から学び、女性の役割と状況についての理解をはばむすべての態度、そして概念的ゆがみや偏見、特に階級に関する偏見をなくすために、教育過程、特に高等教育、教職課程において、女性に関する、また婦人の十年の目標の意味するものについての学際的リサーチや教授を推進する。

194 各国に現在あるすべての技術学校に女性が入学するように奨励し、すべての可能な手段を使つて、中級の技術コースを推進する。

## C 特に注意を要する優先分野

### 1、食糧

#### 目的

195 食糧生産のプロセスのすべての段階での女性の果たす重要な役割を増大させることにより、彼らの地位を上げつつ各国の経済的社会的発展により貢献するようにする。

196 農村地帯の女性の栄養と食糧必要量を確保するために、社会的国家的に必要な生産物の供給を優先的に満たすように農業生産部門での生産を適正に計画することを確実にする。

## 行動のための優先分野

197 各政府は次の目的のために必要な方策をとる。

- (a) 女性が農業生産のすべての段階、すなわち収穫後の加工と市場における生産物の売買までも含むすべての段階に参加することを推進する。
- (b) 自給的食糧生産のプロセスに女性がより参加できるように必要な技術や適正技術を提供する。
- (c) 人々の発達、特に児童の発達のために必要とされる栄養素に関する情報を提供することによって、また農村女性に適正な栄養の必要について認識させることによって、食糧生産と食糧消費の過程と間にリンクを樹立する。無知のため、また商業広告によって習慣となつてしまつた不適当な消費パターンを廃する。
- (d) 農業政策形成の過程に、特に農村で、女性の参加を推進し、家族とその国自らの消費のための生産を奨励する。
- (e) 性による区別なしに農業生産のための適正技術モデルが男性にも女性にも容易に使えらるものとする。
- (f) 基本的食糧生産物の生産、加工、流通、販売そして消費のための協同組合、その他の組織における女性の参加と完全な投票権を奨励する。
- (g) 食糧生産物の生産のすべての段階、そしてその生産物の市場における販売に至るまでの段階を包括する資金提供の機構について、男性と同等の条件で女性にもアクセスがあることを確実とする。
- (h) 生産物の販売のための優先的市場を開拓するような家庭消費のための基本食糧の販売の形式を支持する。

## 2、農村の女性

### 目的

198 適正技術へのアクセスをばまれていることによって不利益を受けている農村女性たちが、各国の経済的社会的発展に有効に貢献できるようにする。女性の貢献をばんだきた理由は、このほかにも、農村における貧し

い社会的インフラストラクチャー、および彼女たちが家庭内での義務を果たすことと、土地を相手の労働に参加することの両方を通して二重に負担を負つてきたということにある。

199 農村の女性の生活条件を改善する。そしてこの目的のために次のことを行なう。

- (a) 女性が各国の社会経済的發展に貢献してきたことを認め、彼女たちに政策決定者として、組織するものとして、開発プログラムを実施するものとして参加することによって、変化をもたらす者、發展の成果から恩恵を受ける者として、發展のプロセスに対等にかつ効果的に参加できることが確実になるための手段をこころいる。
- (b) 農村女性にあらゆるレベルで意思決定やリーダーシップのための公式非公式のコースに参加する機会や、必要となるときに、収入をもたらす雇用につながるような技術と彼らのライフスタイルに適当な技術を教えるようなプログラムへのアクセスを与える。
- (c) 農村女性に清潔な水、衛生施設、適正な食糧と栄養、基本的保健サービス、住居、適正な燃料というような基本的な人間生活の必要を提供する。これらの女性に、最小のコストとすでに負担の大きい彼女らに最小の不便しか与えずに公的非公的な教育の機会を与えるべきである。すべてのレベルでの技術、特に食糧貯蔵・保存・運搬・販売・労働節約的道具や工夫などの技術へのアクセスを確実に与えるべきである。
- (d) 農村女性に、交通とコミュニケーションのより良いシステムを与え、すべての形態のメディアにアクセスを与える。
- (e) すべての農村女性にそのようなシステムがある場合には、無償で平等な信用供与の便宜が拡大されるべきである。
- (f) 援助を与える側の国々と受ける側の政府は、農村レベルで現地の女性が計画とその実施に参加するような形でプログラムをつくるように協議するべきである。

### 行動のための優先分野

200 各国政府は次の目的のために必要な方策をとるべきである。

- (a) 必要なとき、農村開発に関する法律の中から女性を差別するような規定を取り除く。

- (b) 農村女性に自らの権利と義務を認識させ、その権利義務を行使し、それから恩恵をうけることができるようにする。
- (c) 女性に土地の所有権、土地の管理と使用、農耕または牧畜による生産物の生産、およびそこから生産された生産物の処置、また土地そのものの処置に関して、男性と同等の実際的なかつ法律的権利を与えることによって、農村の女性が男性と同等条件で土地の使用、享有、開発に関するアクセスを持つことを確実とする。
- (d) 農村における経済社会活動に女性が参加できるように、農村女性の発展をめざし、具体的総合的行動を開始し、拡大し、強化するための基礎となるようなりサーチ、特にフィールドリサーチを実施するための十分な資金を配分する。
- (e) 注意深く農村女性の農業生産、無償の家族労働と家族消費のための食料生産における貢献を男性のそれと同様の基礎をもって測るための統計をつくり出す可能性を探り、増大する労働負担や収入をもたらす機会の減少などの否定的かつ予測されていなかった開発の結果をモニターする。
- (f) 農村女性に、彼らが従事してきた伝統的小規模家内産業を推進かつ改善するための適正技術や適当な訓練を与える。
- (g) 農村女性たちが、すべての形の労働者の社会的組織に加わって、特に生産過程での参加と賃金に関する調整を保障し、平等な労働条件を獲得できるようにする。
- (h) 農村女性が共同体の文化的・政治的・社会的活動に効果的に参加できるようにする。
- (i) 特に適正技術の適用を通して、しかも女性がこれらの施策によって失業したりすることのないようにしながら、農村女性の労働負担を軽減するための必要なインフラストラクチャーを創造し強化する。
- (j) 女性の効果的な参加をうながしつつ、識字と訓練のためのキャンペーンを特定の農村地域で企画し、実施する。
- (k) 都市への移住をしなくてもよいように、物質的・技術的・資金の資源を適正に配分することを確実にし、訓練を提供することによって農村の農業におけるまたは非農業の仕事への女性の雇用の機会を多くし、都市と農村の間にある発展段階の差を狭めるため他の社会サービスの面でもバランスのとれた開発を行なうことを確実にし、それによって、移住やその他の悪い結果を廃する。

- (1) 開発や林業経済の多様化への女性の貢献と参加、そしてそこから得る恩恵を検討しかつ強化する。
- (ii) 非常に離れたかつ人口の少ない、または恵まれない農村地帯における児童と成人のための基礎教育の特別な枠組をつくる。たとえば児童の宿泊施設をつくって食事と宿泊の世話をする。
- (iii) 農業生産・加工・販売活動における女性の役割をサポートするための訓練とかエクステンション・プログラムの範囲を拡大することによって、そして、すべてのレベルの開発機関の訓練、エクステンション・プログラムにおける女性の数を増大させることによって、農村におけるサビスへの女性のアクセスを増す。
- (iv) 農産物を全国的、共同体、国家の、またはそれらの混った企業によって加工することを推進する。農業関連産業において、農村女性や家族のための雇用を創出する。農業関連産業部門および農村産業の発展のための国家計画を作り実施する。

### 3. 保育

#### 目的

- 201 個別家庭の必要に応じて適正な政府によって財政的に維持される、子供のための初期のサビスを発展し、拡大する。

#### 202

女性が、特に働く女性が、子供に関する責任から解放されて、家庭外の職業と母親としての責任とを両立できるようにする。父親が家庭内での責任をわかつことができるように特別な努力が払われるべきである。

#### 行動のための優先分野

#### 203

各政府は次のような目的のために必要な方策をとるべきである。

- (a) 共同体ベース保育・労働現場ベース保育・労働に関連した保育サービス・学校時間外保育・休日保育・危機のときの保育・シフトで働く家庭のための保育を提供する。
- (b) サービスを提供する人の能力を高め、サービスの質を高め、健康条件を高め、サービスの物質的側面を改善することにより、現存する保育サービスを改善する。

(c)働く女性の必要や条件に適合する新しいサービスを創出し、これらの必要の根底にある真の本質を研究する。

(d)限られた収入を持つ女性の資源や能力に見合うように、最小のコストで必要なサービスを計画や、規定・評価に、継続的に母親たちを参加させ、発展をはかる。

(e)サービスの計画や、規定・評価に、継続的に母親たちを参加させ、発展をはかる。

(f)ジョブピング・センターに保育施設をつくることを奨励し、起こるかもしれない必要に応える。

#### 4、移民の女性

##### 目的

204 自身が雇用されているよう移民労働者の家族であらうと、移民の女性は、教育・訓練・サポート・保健サービスについて国民と同様のアクセスを持つべきである。

205

(a)各政府は次のような目的のために必要な方策をとるべきである。  
(a)共同体や労働現場で言語・識字訓練の施設を提供するべきである。これらのコースへのアクセスは、収入保持や保育サービスによって容易にされるべきである。

(b)必要に応じて、移住先国に定住することを助けるために、移民の女性すべてに、自分たちの言語で雇用と訓練についての情報を含むオリエンテーション・インフォメーション・プログラムを提供する。

(c)必要に応じて通訳サービスを含む職業訓練とカウンセリングのためのプログラムを樹立する。

(d)社会的サポート、保健サービスにおいて、通訳やバイリンガル（訳注：二言語を同程度に話す）勤務者を提供することを確実にする。

(e)労働組合や使用者組織が移民女性に産業法規、その手続き、彼らの法的権利について知らせる努力をするように奨励する。

(f)移民や少数民族の子供たちとその家族の必要に見合った彼らの文化に適正な保育サービスを提供する。

(g)移民女性に、一般国民と同等の基礎をもった一般教育職業訓練の機会を与えることを確実にする。移住先国に到着した時点で、言語や文学コース

スを通して移民女性の教育や訓練のレベルを改善するための方策がとられるべきである。

移住先国において、何らかの理由によって、就学年齢にありながら通学しない結婚可能な年齢の移民の娘たちに特別な教育と訓練の機会が与えられるべきである。ラジオなどのマスメディアを通して、移民女性に情報を伝える特別な努力が払われるべきである。ソーシャルワーカーや教師たちのための補足的訓練や特別なガイダンスが必要とされる。これらのソーシャルワーカーや教師たちは、その必要性から、女性でなければならない。

(h)国民と平等に、移民の女性に同等のヘルスケアが与えられることを確実にする。文化的・社会的・宗教的条件の相違から起こるストレスに関連する病気に注意を払いつつ、移民の女性の健康を改善する。移民の女性がつけているかもしれない健康や病気に対する異なった文化的宗教的態度について、家庭ヘルスケアの分野で特別の訓練を提供する。

#### 5、失業中の女性

##### 目的

206 各国政府は、失業中の女性が安定した雇用を得る機会を得ることを確実にするための施策をしなければならない。

##### 行動の優先分野

207 各国政府は次の目的のために必要な方策をとらなければならない。

(a)労働市場で雇用になるような技術を失業中の女性も獲得できるように、公式または非公式の訓練と再訓練を提供する。このような訓練は、個人的な、そして職業上の発展プログラムを含むべきである。

(b)個人の必要に応じて、社会保障上の恩恵、適正な住居、医療などを失業中の女性に保障する。

## 6、家族についての責任を単独で負っている女性

### 目的

208 各国政府は、単独で家族についての責任を負っている女性が、自分自身とその家族を独立して尊厳をもってサポートしていただけるだけの十分な収入のレベルを確保するべきである。

### 行動の優先分野

209 各国政府は、次の目的のために必要な方策をとるべきである。

- (a) 個人的そして職業上の発展プログラム・育児休暇・保育・収入の維持を含むプログラムを通して安定した雇用のための訓練と再訓練を提供する。
- (b) 単独で家族についての責任を負っている女性が、安全で適正な住居を獲得するように援助する。
- (c) (このような女性たちに) 資金・信用供与・医療・保健サービスの面で、他の者よりも女子条件のアクセスを保障する。

## 7、若い女性

### 目的

210 価値や態度の選択、夫の選択、最初の子供の出産と育児、最初の雇用、および公職の選挙に立候補するなど、人生の重要な状況において賢明に行動できるように、若い女性が将来の生活を計画するときには彼らが持つ、すでに存在している行動のシステムを存続させていく、または活気を復活させる役割を彼らが必要としているガイダンスやサポートを受けるように、各政府は、若い女性の教育・健康・雇用の面における特別な政策を推進するべきである。

### 行動の優先分野

211 各国政府は、次の目的のために必要な方策をとるべきである。

- (a) 将来の変化をもたらすことのできる唯一の人的資源である若い女性が、政治的・社会的発展のプロセスに意識的に参加するように、彼らの教育に特別な注意を払う。また、彼らが家庭を自由意思に基づいて自由に営む

正しい責任を享受しかつ実行できるようにし、生産の過程に参加するより多くのよりよい機会を与えられるようにする。  
(b) 現在の、そして将来の世代の生活条件を改善するために、また健康への権利を彼らが行使できるように、食料と保健一般に関する事項について若い女性に優先的に留意する。

## 第三部 国際的地域レベルでの行動プログラム

### ラム

## 第四章 国際的目標と戦略

212 女性の権利、責任、役割が向上することができ、また国連婦人の十年の三つの目的、平等・発展・平和が達成されることのできる環境のために本質的な要求である平和・安全・民族の独立の明瞭な認識こそが、地域的そして全世界レベルでの国際目標と戦略の基礎でなければならない。

213 発展途上国にとって不公正で不適合な経済システムの産物である全世界的経済的不平等と依存を存続させることは、すべての国の発展のプロセスを、特に発展途上国のそれを選らせ、これらの国の物質的そして女性を含む可能性の完全な利用を不可能にする。新経済秩序の枠組の中で形成され、その目的の達成のための方向に向けられた第三次国連開発の十年のための国際発展戦略をさらに追求することは、国連婦人の十年の目標達成のために基本的な重要性をもっている。完全な経済的・文化的・社会的責任をもった女性を前提として目標を設定することが非常に重要である。

214 軍縮(軍備撤廃)への進歩は適正な経済的・社会的・文化的環境の達成に大いに貢献し、資源の再配分、特に発展途上国への再配分を通して、発展の過程を推進する。

215 国際社会は、国連のシステムの経済的・社会的部門における政策を新国際経済秩序の樹立を早めること、発展途上国の発展、そして国連婦人の十年

の目標を可能とするように再構成し、再形成する必要を痛感してきた。

## 第五章 国際的政策とプログラム

216

再構成の過程で、活動の分散化、地域プログラムの強化の必要性、特に経済技術の協力の分野におけるアドヴァイス・サービスと訓練リサーチの分野、そしてデータの収集と分析の分野においての地域プログラムの強化の必要性を考慮するに至った。過去数年の間に地域委員会が発展過程への女性の統合のための地域行動計画や、その規定の実施のためのプログラムを形成してきた。しかし、最も重要なことは、上記の優先分野において地域レベル全世界レベルで、国連婦人の十年の後半の五年の、そしてその後発展の過程への女性の統合計画が完全に実施されるまでの間の、調和のとれた持続的プログラムに女性を組み入れることである。

217

国連の加盟国は、発展の過程への貢献者として、またそこから恩恵を受けるものとして、女性が完全な、そして対等なパートナーシップを持つことを推進するよう、よりダイナミックな国際的行動をとるよう、国連や国連の諸組織に期待するようになってきている。この事実、毎年増大する決議、計画、そして政策宣言によって裏づけられている。よりダイナミックなプログラムや政策の必要と同様に求められているのは、国連システムの諸組織間のコーディネーション活動と、必要な場合、機構的変革を含む適正な制度的配備である。それらの機関のプログラムや活動のすべてに女性を統合するための方法論の発展の必要性もある。行動プログラムにおいては諸機関間の一貫的コーディネーションのためにより一層の努力を払うことを目標とし、発展過程そのものの統合的性格や、個別的に分離した行動や重複を避けるという必要に適合するようにしている。

218

プログラムは、国際的行動の本質的戦略と広い分野を概観しようとするものである。国際的行動は、この意味で、地域的行動を含む。しかしながら、勧告の中のあるものは、特に地域委員会またはその他の関連のある国連の諸組織あてに出され、各政府を援助し、国家レベルでのプログラムを補足するために、地域レベル、小地域レベルそして国家レベルの行動のため助けとなるようにしている。

219

女性の発展過程への統合を目ざした国家・地域・全世界的プログラムを樹立し強化するために、必要な場合には、発展の概念、目的と政策を修正することによって、すべての国連システムの諸組織は、関連のある政府間およびNGOと協力しつつ、努力を払うべきである。これらの国際的プログラムにおいては、国家レベル・小地域レベル・国際レベルでの発展のプロセスにおける連関と、女性に関する組織と機構と、すべてのレベルでの主な計画単位との間の適正なフィードバックを十分考慮する。

220

第三次国連開発の十年のための目標を達成するために、すべての発展計画は、女性の潜在的貢献と利益とを考慮に入れなければならない。このような考慮によって、生産性を高めるような、そして同時に技術移転や産業再開発がもたらすかもしれないネガティブな影響から女性を保護することができるよう、より適正な発展プログラムが可能になる。発展計画は、途上国の現地の人々の可能性を強調し、その創造性を高めるものでなければならない。

221

女性の社会経済的地位を向上させ、生産性を高めるための、女性の資質の動員を増すような新しいアプローチが開発されるべきである。この目的のために、新しいアプローチは、特に、社会の貧しい女性たちの間で、水・エネルギー・健康・衛生・住宅・託児所その他の基本的サービスの提供で共同体が自給できるための協同組合技術をもった企業を発達させることを目的とした、特に社会の貧しい層の女性の間における協同組合運動を発展させるように特別な奨励をする。

222

発展の分野で活動している非政府組織や、多国間または二国間の発展その他の組織は、発展のプロセスのすべての面における女性の統合と参加を推進するような発展途上国のプログラムやプロジェクトに、そしてまた発展途上国間の技術協力枠組の中でも、援助を与え続けるべきである。この点で、プロジェクトを企画するためやそれを実施するため、または自由な実施過程その他を経てプロジェクトの結果をより質の高いものにすることを確実にするために、現地で見出すことのできる専門知識を十分に使うこ

とができるように努力がなされるべきである。これらのプログラムやプロジェクトは特にリサイクルできるエネルギー源のリサーチや利用を含む代替技術を開発する能力を含む女性のためのプログラムを計画し実施する能力を発展途上国において強化するための努力に焦点をあてるべきである。

## 223

婦人の十年のための国連のウォランタリー基金は、一番困っている女性に特別なサポートを与える努力を、そして、発展計画における女性への考慮を奨励するような努力を、持続強化していくべきである。現在要求されている事項を達成しようとするならば、次の後半五年において、寄付をもっと増大させる必要がある。国家・地域および国際レベルでの経済社会発展への女性の完全な参加をより一層増大するための特別な活動を行なうための十分な資金が与えられるべきである。

## 224

女性、特に農業や工業における女性労働者を含む社会の貧しい層の女性が、発展の主流に統合されることを容易にするような新しい方法と手段を明らかにするような研究が、関連する国連の諸組織によってなされるべきである。ILOはその他の関連のある諸機関、つまりUNCTAD、UNIDO、FAOなどの協力のもとに、各国政府が給与・労働政策・貿易協定・商品の価格に関する国内および国際的政策を修正する助けとなるように、農村女性の雇用条件や労働条件を評価する研究を行なうべきである。貿易商品価格に関して言えば、それらは女性と男性の給与に反比例的影響を与え、このような商品の輸出による途上国の外貨収入もまたそれから影響を受ける。UNESCOは、関連する国連諸機関、および組織と協力して、政府によって達成された進歩と初等・中等・中等教育以上の教育の機会を女性が享受するため時に直面しなければならない障害を評価し、大学レベルや非公式教育において、女性についてのリサーチや教授が発展するために、研究プロジェクトを後援し続けなければならない。WHOは、他の国連の諸機関、組織と協力して達成された進歩と、女性がヘルスケアに、特にプライマリ・ヘルスケアを受けるために直面する障害を評価し続けなければならない。

## 225

国連の事務局は、両性の平等を目ざした各国の立法を収集し比較する。このような編集によって、さまざまなアイデアが生み出され、説得力が

強められ、すべての分野での、またすべての活動においての女性を統合するような新しい立法がもたらされる助けとなる。このような編集は国連の各国法律シリーズの枠組に則って行なわれるべきである。

## 226

もし要請があれば、国際的・地域的組織は、女性のための国家機関に援助を与え、その能力を改善し、発展のプロセスに女性がより早く統合されるための資源を増し、そのような機関のためのプログラムやプロジェクトを企画する。

## 227

二国間の発展の枠組において、草の根レベルも含むすべての発展の側面での女性の十分な参加と統合を目ざした国家レベルのプログラムを強化するための協力努力が、その国の優先順位に合わせられてなされるべきである。すべての二国間開発活動において、女性はプログラムやプロジェクトの準備と実施に参加するべきである。

## 228

国連総会の経済発展に関する特別分科会で、経済発展における女性の役割が十分に認識されるべきである。将来の新しいリサイクル可能なエネルギーに関する国連会議においても、または飲料水と衛生のための国連十年計画においても、その他の国際会議においても、特に女性の利害に関わりのある事項について特別の考慮がなされるべきである。

## 229

国連とその諸組織は、各国政府の協力のもとに、女性の社会的経済的政治的生活への参加を増大させ、計画・意思決定・実施を含む発展のプロセスのすべてのレベルで、そしてすべての部門での完全かつ効果的な女性の参加を確実にするために、戦略を発展させるべきであり、そのためには次のことを目的とするべきである。

- (a) 適正技術によって、また男性と女性の間の公正な労働の分担によって、家事・食料生産・育児など、伝統的に女性によって行なわれて来た仕事のための女性の負担を減少させよ。
- (b) 少女や女性を学校や訓練センターから排除するような要因と闘う。
- (c) 女性のために新しい雇用の機会と職業上の流動性の機会を創出する。
- (d) 女性の労働からの（経済的）所得を増大させ、同一価値の労働のための同一賃金の原則を実施する。

(e) 女性の経済発展への貢献の重要性を認識し、彼ら自身とその家族のための利益となるように労働生産性を向上させ、女性の失業を防ぐような適当な構造の変革を行なう。

(f) 農業における女性の欠くことのできない役割を認識し、土地・技術・水・その他の自然資源、インプットとサービス、そして技術を身につける対等の機会を保障する。

(g) 女性の工業化のプロセスへの対等な参加を推進し、可能な工業化のネガティブな影響を退け、科学技術の発展が女性と男性の双方に恩恵を与えることを確実とする。

(h) 女性の特別な保健上の必要に留意しつつ、彼らのプライマリー・ヘルスケアへの積極的参加と利用のアクセスを保障する。

230 国際プログラムと政策は——地域レベルのものも含み——五つのグループに分かれる。各々は次のセクションで説明されている。

## A 技術協力・トレーニング・助言サービス

231 女性のための技術協力プログラムは、福祉プログラムとしてではなく全面的な発展という文脈において計画されなければならない。

232 技術協力活動は、住民の中でも最も不利な境遇にある諸グループに対する、とりわけ女性に対する、人的資源の開発を強化するための各国政府の努力を助け、補完する方向でなされなければならない。

233 地域的経済委員会を含む国連機構のすべての組織は、以下のことを行なわなければならない。

(a) この分野（訳注：技術協力・訓練・助言）におけるプロジェクトの有効性を高めるとともに、女性の地位を高めるために、この分野におけるすべての計画やプロジェクトにおける女性に関わる問題を統合するという目的をもって、現存の、またすでになされた計画やプロジェクトを再検討する。

(b) 各国政府や研究所を含む非政府組織が、適正技術プロジェクトを練り上げたり、女性が参加できる形態を検証することを奨励し、助力し、また

女性が開発プロジェクトの有効性を増すために貢献するとともに、女性自身の経済的・社会的条件を改善するような方法を強化することを助ける。

(c) 女性と開発に関する問題のセミナーやワークショップを組織するとともに、重要な国際会議においては、女性と開発問題が含まれるようにする。

(d) 女性の地位向上のための国際研究・訓練機関（INSTRAW）と協力して、各国政府が種々の分野における、とりわけ女性のための計画の実施や行政における、女性の企画・技術・管理能力を向上させるために、より多くの訓練コースを組織するのを助ける。女性労働者や企画者が、より良い職業的・社会的地位を得られるように、能力を向上するための奨学金その他の特別的教育・訓練プログラムを促進する。

(e) 農村の女性のための国家・地域プログラムを援助する。女性のためのプログラムは、開発過程への投資と見なされ、女性はいずれの分野におけるプロジェクトの企画・計画・実施において、積極的な参加者となるべきであり、単なるプロジェクトのサービスの受益者と見なされてはならない。

(f) 国連諸機関による技術協力・訓練・助言は、各国の目的と、世界行動計画および「国連婦人の十年」後半五年のためのプログラムに記述された諸政策に合致したものでなければならない。

234 UNDPは以下のことによって各国政府が女性を統合し、女性に利益をもたらすことを通じて開発の目的を達成するような革新的な方法を見出すのを一層奨励し助力するよう努力する。

(a) 「国連婦人の十年」のためのヴォランティア基金への支援を続ける。

(b) 開発における女性の統合達成のために地域委員会、女性のための国家諸機関、研究・訓練センターを通じて、地域・小地域・国家プロジェクト、とりわけ新プロジェクトの考案と開発を可能にするような活動の促進を続ける。

(c) 各国のUNDP（訳注）駐在代表者に、各国計画サイクルに特に女性の利益にかかわる問題を入れ、既存のプログラムを定期的にチェックし、プロジェクトの発展、国連諸機関と十年計画の諸目標の達成に貢献するような他のプログラムとの調整・協力を促進するよう指導する。

235 各国政府は、開発協力政策の一環として、「国連婦人の十年」後半のための行動計画の実施要領をつくらなければならない。

## 人的資源の動員

236 国連組織のプログラムにおいて、すべての関連部門、とりわけ、雇用・健康・教育・農村開発・政治参加等の部門および態度の変革のプログラムにおいて、より多くの男性を参加させ、変革を行わなければならない。男性を保健プログラムに参加させることによって、彼らの家族や共同体の条件を改善する責任は女性だけのものではないことを明確にしなければならない。

237 国連機構の諸組織のプログラムへの女性の効果的な参加、とりわけ発展途上国における参加は、地域間および地域的セミナーや会議への参加も含めて奨励されなければならない。

238 すべてのレベルにおいて、女性、とりわけ草の根組織の女性は、国際諸組織の意思決定過程に、より効果的な役割を果たすよう奨励されなければならない。

239 国連諸組織加盟各国が事務局や専門団体の意思決定レベルのポストに、女性、特に発展途上国の女性を指名・任命することにより、女性の割合を増大するための必要な手段を取ることは急務である。また、加盟各国が国際会議準備や、すべての国連会議への代表団のうち、女性の占める割合を高めることも急務である。このため、加盟諸国は、国連各機関と協力して、このような会議の議題に女性問題に関する項目が含まれるように調整を行わなければならない。

240 加盟諸国、とりわけ発展途上諸国は、女性の科学技術教育・訓練をうける機会の不平等に注目しつつ、科学技術政策を高度化するための内在的能力とそのうけ入れ能力の発展強化、および科学技術による開発問題の解決のための努力を一層強めなければならない。

## 南アフリカの女性への援助

241 勧告は、国連諸組織、専門諸機関、諸政府、国際的・地域政府間組織、女性グループ、反アパルトヘイト諸グループ、非政府組織、その他のグループに向けられる。

242 提供される援助は、アフリカ統一機構によって認められた南アフリカ解放諸運動を通じてなされるであろう。援助は、以下のカテゴリに分かれる。

- (a) 抑圧的・差別的な法律と慣習のもとにある南アフリカやナミビアに住む女性、その家族、および難民収容所に住む女性に対する法的・人道的・道徳的・政治的援助。
- (b) 解放を求める闘争において、女性を指導的地位につけるための訓練における支持。
- (c) 解放後に女性がそれぞれの国の再建のためにすべての分野で役割を果たすための訓練・援助。
- (d) 南アフリカの女性の闘いへの国際的支援および協力。
- (e) アパルトヘイトおよび人種差別、特に南アフリカの女性に対するその影響に関する情報を宣伝し、すべての女性をアパルトヘイトおよび人種差別を根絶し平和を保持するための努力にまきこむこと。
- (f) 民族解放運動において女性部がすでにあるところではそれを強化し、そのような女性部がないところでは創設することによって、女性の機会平等の実現と、国民生活における真の統合を促進することを援助する。民族解放運動におけるこのような女性部は、国連諸組織、専門諸機関、政府間および非政府機関との協議により、女性部の政策・プログラムを決定し、それを公表する。

243 一九七三年のアパルトヘイトの犯罪抑止および懲罰のための国際条約の批准を行っていない加盟諸国に批准を要求する。

## 被占領地域内外のパレスチナの女性への援助

244 国連諸組織ならびにその専門機関、国連諸小組および基金、諸政府、国際および地域政府間組織、その他のグループに、パレスチナ人の代表で

あるパレスチナ解放機構と合議・協力のうえ、援助をする。

(a) パレスチナ女性の特殊な必要を明らかにし、このような必要に答え、女性の人的資源および潜在的能力を開発するためのプログラムを形成し施行するという見地から、パレスチナ女性のおかれた社会的・経済的条件に関する調査研究を行なう。

(b) パレスチナ女性が人間としての権利を行使できるよう、法的・人道的・政治的援助を行なう。

(c) 技術・職業上の訓練の拡張を中心としたパレスチナ女性のための教育・訓練プログラムを確立し、拡大し、多様化する。

(d) パレスチナの民族的アイデンティティーを守る見地から、パレスチナの伝統と価値を教育の中心として守り、これを促進する。

(e) パレスチナ女性が雇用機会や、同一労働に対する同一賃金を支払われることを妨げようとするすべての法的制約や社会的要素を排除し、彼女らが統合されたパレスチナ労働力へ効果的に貢献できるように同一の訓練と雇用機会を提供する。

(f) パレスチナ女性が公開プログラム、成人教育、女性のための識字プログラムや、保育サービス等を行なうための組織的な能力を開発する、という見地から、物質的・技術的に女性諸組織、諸協会を助け、パレスチナ婦人総同盟に援助を与える。

(g) 統一保健・栄養プログラムをつくり実施する。さまざまな医療や医療に近接した職業においてパレスチナ女性を訓練し、現在パレスチナ赤十字によって提供されている医療サービス、特に妊産婦や子供に関連したサービスを強化する。

(h) イスラエルの占領がパレスチナ女性の社会的・経済的狀態に与えた影響、パレスチナ女性の民族自決、自国に帰る権利、民族独立と主権を獲得するための闘いに関するデータ、情報を集め宣伝する。

## 世界中の難民女性、帰る所なくさまよう女性への援助

245 難民に対し、性別・人種・宗教・出生国にかかわらず、また難民がどこにいるにかかわらず、人道的な援助を行ない、再び定住させることは、

すべての関係国が助力しなければならない国際的な責務である。難民の圧倒的部分は女性であり、彼女らは通常、男性の難民に比べて役割や地位上の急激な変化をより多くこうむっている。したがって国連やその他の国際

機関は、この難民女性に関する問題や女性の立場の弱さについて、本腰を入れて取りくむ必要がある。

246 国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)、当該の、あるいは特別の利害をもつ国連組織・専門諸機関・国際的・地域的政府間諸機関、非政府諸組織、婦人グループ、その他すべての関係機関、当該団体、諸政府に向け、以下の勧告がなされる。

247 国連難民高等弁務官事務所やその他の難民女性の援助に適當であると184条でふられた諸機関は、難民の救済・地域統合・再定住・自由意思による帰国等、難民のすべての生活にわたる特別のプログラムを作ることとを要請される。これに関心を持つすべての政府がこのプログラム作成を援助し、最初の難民収容国の負担を軽減することを歓迎する。

第三国は、難民の性別や資格証明の有無によって差別を行なうことなく、彼らが再定着するよう受け入れなければならない。UNHCRやその他の難民救済にあたっている諸団体諸機関において、モニタリングを含めた、難民女性の特別なニーズに関する上級レベルの責任体制が緊急に必要とされている。これらのプログラムは、必要に応じて帰るところを失った女性についても適用されなければならない。

248 難民状態にある、または帰るところを失った人々の中で、女性と子供は大きな割合をしめ、特別なニーズを持っているということが認識されなければならない。したがって、彼らの生存と福祉を保障し、虐待と搾取を防ぐ特別の努力が必要である。難民状態においても、帰るところも失った人々の中においても、伝統的な女性に不利な諸条件は拡大されている。このことが援助プログラムを作成する時に認識されねばならない。国連難民高等弁務官事務所、あるいは二国間協定を通じて提供される援助は、財源の許す限り次のカテゴリーの援助を含まなければならない。

(a) 難民女性が彼女らの諸権利に無知で、比較的に弱い立場にあることで搾取されるのを防ぐために、世界人権宣言や市民権政治的権利に関する法律の諸原則にそった人権の完全な保証がなされるような法的・人道的・道徳的援助。

(b) 難民女性、子供、そして特に身体障害者に対する援助の手が届くことを

保証するための特別の救済措置。

(c) 難民女性が初めて収容された国での初期の段階における自力更生に重点をおいた援助およびカウンセリング。

(d) 難民女性が民族的に受け入れられ、自発的な形で得るような家族計画を含む特別医療措置ならびに医療相談。また難民女性の文化・伝統に即して、必要な場合は女性医療労働者によって行なわれる妊婦・授乳中の女性への補完的栄養プログラム。

(e) 難民女性が新しい生活に適応するとともに、出生国との文化的きずなを保持するためになされる、オリエンテーション・言葉・職業訓練を含む、訓練・教育プログラム。

(f) 家族が再び一緒になるための特別措置および家族捜しプログラムへの支援。

(g) 難民女性が収入を得るための能力開発。

(h) UNHCRは、難民収容政府に対し、難民女性の虐待が行なわれた場合は法によりそのような虐待を行なった犯罪者を罰するよう奨励する。難民収容政府は、十分な国際的人員が難民収容所に入り、難民女性への搾取やいかなる攻撃をもとりしめることを認めるよう奨励されるべきである。

249

地方施設と都市のセンターの両方において、難民女性のためのカウンセリングプログラムを強化し、そのようなプログラムが現在ない所では、特別のソーシャルワークプログラムを企画することを強化するために援助がなされなければならない。第三国での再定住を待っている難民女性のためには、特別のオリエンテーションプログラムが提供されなければならない。

250

難民女性が食糧その他物資の分配や、訓練・オリエンテーションプログラムの企画を含めた、難民収容所の運営・行政に占める役割が実質的に拡大されなければならない。UNHCRは、難民女性が彼女らの能力、才能を完全に発揮するような、自力更生プログラムに難民女性をまきこんでゆく政策を発展させなければならない。

251

国連機関は、世界中の難民女性や子供を助ける必要があることを宣伝する活動に高い優先順位を与えなければならない。

## B 国際的基準の説明と再検討

252

国連および国連諸組織は、諸政府に対し次のことを奨励するために、あらゆる努力を行なわなければならない。

(a) 一九七九年十二月十八日の国連総会決議(36/180)として採択された女性に対するあらゆる形態の差別撤廃条約に署名し、批准、または加入し、このプログラムの初期の段階において条約が実現されるようにする。

(b) 国連、あるいは専門機関による女性に関係した協約のすべてにはまだ署名、批准または加入していない場合は、署名、批准、加入する。

(注)たとえば「人権・国際協約集成」(ニューヨーク、国連、一九七八年)。ILO、国際労働諸協約および「女性に対するあらゆる形態の差別撤廃条約」(ニューヨーク、国連、一九七九年)。

253

女性に対する差別撤廃委員会は、女性に対するあらゆる形態の差別を撤廃する条約が実現された場合も、同条約下の報告システムを検討し続けなければならない。女性に対する差別撤廃委員会は、世界行動計画と、国連婦人の十年後半のためのプログラムの遂行のための報告システムを検討し続けなければならない。

254

国連や国連諸機関は国際的諸基準が存在しない分野においてはそれらを作成する場合に、婦人のニーズを考慮に入れなければならない。

255

専門諸組織は条約において自らの活動の分野にあてはまる部分の実施についての要請があつたときは報告書を提出しなければならない。また、婦人に対する差別撤廃委員会に会議への出席を求められた場合はそうしなければならない。

256

多国籍企業の国際行動基準の中に、女性に関する特別の条項や、技術の移転の条項を加え、産業の発展や技術の発達により引き起こされる悪影響が排除されるように、国連組織、とりわけUNCTAD、UNIDO、多国籍企業についてのセンター、ILO、FAOは、特別の施策をとらなければならない。

## C 研究・データ収集・分析

257 国連・専門諸機関・地域諸委員会は、女性と男性のニーズに即した開発

目的・戦略・政策手段を作成する見地から、開発において女性を統合する仕方についての情報が存在しない関連重要分野においては幅広い部門間のまた学際的な行動に重点をおいた研究に優先順位をおかなければならない。このような研究は、国連女性の地位向上のための研究訓練機関のような既存の機関を活用するとともに、女性の地位に関する問題を取り扱っている統合的機関を活用してなされなければならない。研究は、女性の発展のための効果的な計画の方法を開発し、経済の非公的分野における女性の参加を評価することを目的とするものでなければならない。研究分野は、女性の健康、女性の二重の負担(職業と家庭という二重)、女性の出産時の休暇の程度に関する資料、女性に対する教育機会またはその欠如、特に文盲に寄与する要因、ドロップアウトした女性を含むすべての女性があらゆる種類の教育レベルにアクセスを持つ権利の保障、女性が家族の長であるような家族の条件、経済の公的部門への参加、および政治参加、女性団体の性格と貢献度である。女性の開発における役割と人口現象との間のすべての相互関係を完全に、より統合的に分析することにも重点がおかれなければならない。「婦人の十年」の後の五十年間を対象とした雇用機会に関する予測や、特殊な労働力として認められた人々の要求に合致した訓練、教育プログラムに関する研究もなされなければならない。

258 国際的移民が労働市場において持続的なプロセスとなってきたことを考慮するとき、移民女性の特別な問題、たとえば彼女らの経済的機能、法的・社会的状態、言葉の力による困難、二世の教育等は特別の注目に値する。ILOは、UNESCO、FAO、WHO等の関連機関と協力し、各国政府が雇用、社会保障、住宅、社会福祉、文化的遺産の保持等に関する研究の国家的・国際的政策を検証するのを助けるという見地から、移民女性の雇用、健康、教育の状況を評価するための研究を継続、発展するとともに、移民女性を支援する情報チャンネルへのマスコミの影響を評価するための研究を継続、発展させなければならない。

259 国連は専門機関と地域委員会との緊密な連携により、またINSTRAWによってなされた成果を基礎として、女性に関する最近時点のデータ、

可能であれば時系列データとともに、女性の状態を改善するための国家的・国際的統計を包含する女性に関する可能な統計集を準備し、作成しなければならぬ。国連事務局の国際経済社会部統計局によって準備される「国際統計案内」は、両性の間の平等への進展が観察できるようなデータがどこにあるかを示す特別の部分を含まなければならない。

260 INSTRAWとの合意により、協調のための行政委員会の統計小委員

会は、できるだけ早く女性に関する統計への考慮を活動計画の中に入れ、女性の状態に関するデータの質と適切性を改善するための短・長期目標を開発しなければならない。

以上のことの審議は、開発、推計の評価ならびにデータの最新化、国民生活のすべての領域における女性の参加の予測という点に特に重点を置いて、女性に関するデータ最新化を行なう計画を含まなければならない。

261 国連は、専門諸機関・地域諸委員会、各国政府と緊密な連携のもとに、性別に基づいたステレオタイプとは無関係な統計的作業や実践および開発における女性の参加や両性の間の平等に関する適切な研究方法論を奨励しなければならない。

262 国連は、関係専門諸機関とともに、被雇用者の圧倒的部分が女性であるような諸産業に特別の注意を払い、それら産業の存立の基盤、新しい技術が関連部門に根本的な変化をもたらす可能性を分析しなければならない。

263 地域レベルでは、地域諸委員会は専門諸機関との緊密な連携のもとに次のことを行なわなければならない。

- (a) 地域内の諸国が両性の間の平等の進展がモニターできるような指標を確立するのを助ける。このような指標を確立する際、各国政府はその国の社会的・文化的現実、その国の統計開発の現状ならびに諸政策の優先順位に注意を払うよう助言を与えられなければならない。
- (b) 地域における女性の地位の分析に関する社会的・経済的・人口の指標の目録を各地域について準備する。発展プログラムのよりよい評価を行なうために、このようなデータの利用とそれへのアクセスが保証されなければならない。

(c)発展における女性の参加と両性の間の平等に関する特別な質問集を含んだ、全国的家庭調査の可能性プログラムの一環として各国が行なう調査の開発を助ける。

(d)各国政策に抵触せず開発計画の健全な科学的基礎となるような、女性と発展に関する長期的な基本的研究への各国政府への投資を増大させる。

## D 情報と経験の流布

264 それぞれの国連の特別機関は、婦人の十年の後半の五年において、女性の労働時間や労働規範などの問題を含む女性の労働条件の問題を特別に検討し、その結論を加盟諸国に知らせる。

265 国連とUNESCOは、女性の問題が検討される情報システムにおいて現在進行中の新しい国際的情報秩序のための準備に情報を受けとるものとして、または参加者として、女性が参加することを確実にする。新しいコミュニケーション政策の定義においては、女性の積極的参加とダイナミックなイメージが強調されるべきである。

266 国際機関間および加盟諸国間において、自由に経験や知識が交換されるように、国連のシステムは、女性の問題が現存する国際情報システムやデータバンク(AGRIS, INRES, INTIB, DISなどの)の統合の一部をなす。特に国際経済社会部のINSインフォメーション・システムの一部を成すことを確実にすべきである。

267 J U N I C (国連共同情報委員会)は、その社会経済インフォメーションのプログラムに関する責任を果たすうえで次のことをなすべきである。  
(a)J U N I Cの年次行動計画が女性に特に関係のあるトピックや問題、特に女性に影響を与える事柄、そして報道、出版、ラジオプログラム、フィルムやテレビプロジェクト、フィールド旅行のルポ、セミナー等の情報活動への女性の参加などを考慮に入れる。

(b)情報構成要素から婦人の十年ヴォランティア基金によって援助されているようなまたはその他の国連の組織によって援助されているようなプロジェクトを作り、それが国連公報部(D P I)やその他の特別機関によ

ってその情報が広く流布するようにする。  
(c)国連公報センターの案内書が女性に関する国連のプログラムや活動についてのデータや情報を載せるようにする。

268 国連とその他のUNCTAD, UNDP, UNFPA, UNEP, UNIDO, UNICEF, UNITAR, ILO, FAO, UNESCO, WHO, WFPなどの国連システムの諸組織は、その出版物、メディアサポート活動、訓練プログラムやセミナーにおいて、特に女性に関するトピックや問題についての、そして女性がうまく統合されようとする特別なガイドラインを入れるべきである。特に国連の諸機関のうち開発・教育・雇用・健康・人口・食糧生産などに関わっているものは、農村や遠隔地の大衆に届くことを特に強調しつつ、特に発展途上国におけるまた女性がメディアの主流にアクセスを持たないような国における女性に影響を与える事項についての情報を増大させる。

269 国連ラジオは、その政治的・経済的・社会的かつ人間の問題やストーリーにおいて、これらすべての面における女性の貢献と参加について放送するべきである。現在の女性についての毎週行なわれているラジオプログラムは、必要なサポートを得ているいろいろな言語に訳して広範囲に放送する必要があるかもしれないので「婦人の十年」中またはそれ以降も継続されるべきである。国連の視覚サービスと現地ネットワークとの共同製作協定は、国連のトピックについてのフィルムの数を増大させようとするため、発展途上国の女性についてのフィルムを作ろうとする女性プロデューサーとの共同製作を含むべきである。

270 国連は、パンフレットや小冊子その他の出版物を作つて婦人の十年の活動についての進歩を定期的に報告し、学習訪問や出版物の配布を通して情報や経験の交換を図る。国連の新国際経済秩序に関するハンドブックは、女性の参加についてのデータと情報を含む。デイヴエロップメントフォーラムやその他の出版物は、婦人の十年に関する記述をするべきである。国連広報センターは、女性に関する図書資料を改善し、女性に開く情報をより積極的に、特に発展途上国において流布するべきである。女性に関する情報はU N I Cのディレクターたちの婦人の十年継続中のミーティング

においても討議されるべきである。

271 国連や発展を扱うその諸組織は発展における女性に関する情報を強化し、それぞれの発展計画の公報ユニットをハイライトする。非常によく検証され、かつよく構成されたコミュニケーションユニットがすべての発展プログラムや女性の発展への統合のためのプロジェクトや、知識を広め、技術移転の可能性を増大させるための、発展のためのサポートの観点からみたメディアの利用の適正な評価のために含まれるべきである。国連やその諸組織は、女性のためのプログラムに特に留意しつつ発展コミュニケーションの訓練プログラムについての情報を集め流布するべきである。

272 国連によってまたはその特別機関によって作製された発展過程における女性に関する研究のくわしい文献目録やその他の資料を含む情報は、加盟国や適当な私立の研究機関に広く配布されて、このような情報が手の届きやすいものとなるようにする。

## E 概観と評価

273 国連は婦人の十年の後半五年の行動計画プログラムの条文の実施によって達成された進歩の概観と評価を総括的かつ批判的に二年ごとに行なう。この概観と評価は婦人の地位委員会が中心になって行なう。すべての関わりをもつ組織によるモニターの結果の効果的利用のために、リポートのためのシステムと情報流布のための企画が立てられなければならない。

274 婦人の地位委員会と婦人の進出支部は既存の予算の範囲内で優先順位を再検討することによって強化されなければならない。包括的レポートシステムが改善され、また同時に婦人の地位委員会の自らの仕事を公けに知らせる能力とコミュニケーションについて考慮する能力が改善されるべきである。

275 国連の総合的發展計画に女性を完全に統合するために、婦人の十年の後半の五年のための世界行動計画や行動プログラムの実施の状況の概観や評価は、「第三次国連開発の十年」の国際發展戦略の実施状況の概観と評価の

過程の一部として把握されるべきである。

276 国連の特別機関と諸組織は、他の関連する政府間または非政府諸組織と同様に、婦人の十年の後半の行動計画を検討し、その実施にあたっては助力を与えなければならない。

277 すでに存在する国連諸機関内の特別な機構と特別機関は、行動計画の実施のため、自らのプログラムや活動のすべてに女性の側の必要をより多く盛りこむことができるように、そして女性がこれらのプログラムや活動により多く参加して恩恵を受けることができるように、強化されなければならない。

278 国連システム内部のすべての諸機関の事務局およびその他の政府間または非政府諸組織の事務局は、それらの機関において、一時的、一定期間内、永久的雇用またはコンサルタントであるか否かを問わず、働いている男性と女性に平等の待遇と地位を保障するために必要の時に、その募集・訓練・昇進・給与政策を修正しなければならない。これらの組織が出版のために各加盟国から女性の雇用についてのデータを要求するときには、自らの組織内の女性の雇用についての状況の同様のデータを提供かつ出版しなければならない。

279 すでに存在していない場合は、プログラムとプロジェクトの女性に与える影響を研究するためのガイドラインが設定され、女性にこのようなプログラムとプロジェクトがどの程度恩恵をもたらすかをモニターし評価するための手段がとられなければならない。

280 婦人の十年のための機関相互間プログラムや、女性の進出支部の利用を増大することによって、国連の特別機関間のコーディネートと協力を効果的にするべきである。

281 地域委員会は、その社会経済委員会に提出する定期的概観と評価の中で、婦人の十年の後半五年のための世界行動計画と行動プログラムの実施に関する質問状への回答に基づく各地域の発展プログラムのすべての部門で女

性の状況がどうであるかという特別な側面に関する完全な報告をしなければならない。これらの報告は地域委員会や特別機構によってなされた特定な部門の評価や、国連の関連する地域会議の報告その他の資料そして独立したリサーチによって補足されるべきである。

282 各地域委員会は、国連事務局の社会発展・人道問題センターに定期的に世界行動計画の総括的概観と評価の一部としてこのプログラムについての報告を提出しなければならない。

資源を有効に使うために、女性の進出のための地域プログラムと国連本部との間に緊密なコーディネーションがなければならない。

283 各地域委員会は、ハイレベルの定期的地域政府間または専門家会議での総括的定期的評価の中に第三次国連開発の十年と新経済秩序の目標に適合する行動プログラムを計画するうえでの基本的前提として女性の状況の評価を組み入れるべきである。

284 国連と各地域委員会は、加盟国の中で、質問状を完成し、概観と評価のために要求されるデータを集めて提出するための資金がない国がある時には、援助を与えるべく特別の努力をしなければならない。

## 第六章 地域内政策とプログラム

285 上述の国際的政策とプログラムは、地域レベルでも適用されることは明白であり、それはまた、地域での優先分野として扱われるべきである。そのうえ、地域委員会は特別機構の地域事務局の協力を得て、婦人の十年の前半の達成をより返り評価することによって後半五年の政策・戦略・プログラムを立案するために、各国政府と非政府組織を援助する特別な責任を持つている。

286 適正かつ地域的な女性のための行動プログラムの強化は、自立の原則を推進するための地域内の国々の協力を基礎として行なわれるべきである。地域的政策とプログラムの形成はその展望において二国間また多国間で、そしてまた地域プログラムや優先順位を効果的に実施するための資金的・

技術的・人的資源を増大させるような行動的施策の採用を要求するような多面的プロセスである。この目的のために地域委員会は次のような方策をとるべきである。

(a) このプログラムの勧告をそれぞれの部門ユニットの作業プログラムに組み入れる。

(b) 給費やその他の特別訓練プログラムを、特に都市においても農村においても、女性が労働力の大半を占める第三次産業において設け、彼らがその職業的そして社会経済的地位を改善できるようにする。

(c) この行動プログラムの実施によって達成された進歩の国家レベル地域レベル小地域レベルの評価を含む、女性の状況と労働についてのデータのよりよい分析のための情報とデータ収集システムを強化する。

そして、各政府に女性のためのプログラムについてより効果的な勧告サービス的基础を与える。

(d) 適正に全国的社会的インフラストラクチャーを改善することによって、女性も男性も家族と社会との両方での二重の役割から自由になることができるようにする。

(e) 資格のある訓練をうけた女性が、国家・地域および国際的レベルで発展プロセスの主な分野に関連する仕事に就く対等な機会をうるように、国、小地域、また地域のレベルで「技術をもった女性」のリストをつくる。

### 制度的準備

287 次の目的のために方策がとられなければならない。

(a) 高いレベルの意思決定や責任あるポストに女性を採用することによって地域委員会の強化をはからねばならない。これらのポストは予算外の資源からばかりでなく、通常の予算によってサポートされているプログラムオフィサーのポジションを含まなければならないし、婦人の十年の後半の五年のプログラムを実施する任務をもっていないければならない。地域委員会は特に女性の地位に関連した政策やプログラムを実施しコーディネートするために、ポストを高いレベルで設けなければならない。

(b) リサーチと訓練のための地域センターの強化。

(翻訳 奥田幸)

●ご利用ください

## 家庭科の男女共修をすすめる会のパンフレット



■共修への理解を深めるために……  
■実際の授業のために……

高校での共修のために……

家庭一般の  
男女共修を  
どうすすめるか

300イン

中学での  
共修のために……

技術・家庭科の  
男女共修を  
どうすすめるか

300イン

家庭科をとりまく状況！  
地域や学校での協力の実例！  
実際の授業の内容！

基本的な疑問にこたえるために……

家庭科の  
男女共修をめぐる  
一問一答

100イン

家庭科など、学校でやる  
必要があるのですか？

お申し込みは  
〒151 東京都渋谷区代々木二―二十一―十一  
婦選会館内（振替 東京・九一九二八九二）  
家庭科の男女共修をすすめる会

# 資料2 「国連婦人の十年世界会議」において採択された諸決議

国連発行 国連女性の十年世界会議資料より要約

(日本の票決 ○は賛成 △は棄権)

主 題	決 議 要 約	提 案 国	票 決 結 果	日 本
南アフリカ、ナミビアにおけるアパルトヘイトと女性	アパルトヘイト、人種差別を永続させようとするあらゆる政策、あるいは、ある人種が生得的に優れているとか、劣っているとかいふ理論に基づく政策は、非人間的であり、容認できないものであり、これを拒絶する。	アフリカ諸国	63 — 4 — 24	△
南アフリカに対する制裁に関する国際会議の開催	ブレトリア体制下のアパルトヘイト政策のもとでの女性と子どもの容易ならぬ状況に特に注目し、国連憲章第七条に基づいて、南アフリカに対する経済的制裁その他の制裁を加えるために、できるだけ早く制裁規約に関する国際会議が開催されるよう勧告する。	アフガニスタン、アンゴラほか	75 — 7 — 22	△
アンゴラの抑圧排除	国際社会に向けて独裁的・反動的アパルトヘイト政権の犯罪行為を糾弾し、南西アフリカ人民機構(SWAPO)を援助して、南アフリカ体制の人種差別主義者による暴力・破壊・犯罪行為・殺人・略奪にさらされているアンゴラの人民および政府との連帯を表明する。	ニジェール	100 — 0 — 17	△
女性と人種差別	あらゆる人種差別主義体制およびその体制に主として経済、軍事、核の分野で協力しているあらゆる国への非難を再確認し、すべての国が「あらゆる形態の人種差別撤廃国際条約」を署名、批准するように勧告する。また、人種に基づく差別形態をとっている国を非難し、先進国および開発途上国が、人種と性に基づく差別の二重の苦しみに打ち	アンゴラほか	78 — 3 — 39	△

勝つような積極的な手段を講じるよう、国連および専門機関に呼びかける。

国連総会に対し、植民地主義、人種主義、人種差別、外国による侵略、占領およびあらゆる形の支配に反対し、国際平和と安全を強化する闘争への女性の参加に関する宣言の草案の推敲を一九八〇年に進めるよう要請する。

国際平和と安全の強化および植民地主義、人種主義、人種差別ならびに外国による侵略、占領およびあらゆる形の外国による支配に対する闘争への女性の参加

平和な暮らしができる社会の準備における女性の役割

ニカラグア復興への援助

レバノンの女性の窮乏

ボリビアの状況

国連事務総長に対して、国連総会への報告において、平和な暮らしができる社会の準備に関する宣言の実施への女性の寄与に十分考慮を与えるように要請する。

国家復興、経済的および社会的発展、ならびに「国連婦人の十年」の目標達成の企画に、より多くの必要な支援をするよう勧告する。また特に国連開発計画(UNDP)が、女性に重点を置いて、ニカラグアに財政上および技術上の援助を、開発資金、開発計画によって与えるよう勧告する。

国連および専門機関が全レバノンの女性、特に南レバノンの女性の窮乏に必要な注意を払い、その窮乏に対処する方法を研究し、財政的・物質的・技術的援助を種々の国際機関から与えるよう勧告する。

ボリビアの女性が、その政治的権利を完全に行使することを妨げ、国

東独、キューバほか 77 | 6 | 35 △

ポーランド その他 97 | 0 | 30 △

全会一致

アルジェリア、アラブ諸国 112 | 0 | 9 ○

コロンビア、 63 | 2 | 30 △

太平洋地域の女性の健康と幸福

サハラ的女性への援助

エル・サルバドルにおける女性の状況

チリにおける女性の状況

の開発過程への参加を遅らせる、いかなる行為をも激しく非難する。あらゆる核兵器保有国に対して、太平洋における核兵器およびその他の核爆発装置のいかなる実験をもやめるように要求する。また、すべての国が、あらゆる核実験停止を実現する広範囲の実験禁止条約の締結を支持するよう要求する。

サハラの人々の正当な主張に連帯と支持を表明する。また西サハラ人民を代表するサギア・エル・ハムラとリオ・デ・オロ自由人民戦線(Polissario)が国連、アフリカ機構(OAU)、非提携国の決議と宣言にそって、西サハラの問題の公平で不変で最終的な政治解決の探究に全面的に参加していることを再確認する。

サルバドル当局が、この国における人権の尊厳および基本的自由を保障するのに必要な策を講じるように勧告する。エル・サルバドルにおける殺人・強姦・女性・子どもの抑圧を非難する。エル・サルバドル当局が特に政治的理由で拘留されている女性の状況に関する情報を与えるように勧告する。一九八〇年国連総会が、エル・サルバドルにおける人権の冒瀆を考慮し、この国に人権と基本的自由の復権を早くもたらず策を講じるように要請する。

チリ当局が、種々の国際機関が行なっている義務に従って、人権を尊重するように勧告。また、チリ当局が、政治的理由で行方不明になっていると報告されている人々の行方を調査して明白にするように、また、女性に平等・発展・平和のための闘争に参加し、闘争を続ける権利を十分に行使させるよう勧告する。チリの女性が受けている人権の冒瀆、特に拘留されている女性の屈辱的な状況に強い関心を持ち、国連総会が、チリにおける、人権と開発、特に女性と子どもの状況に注目

キューバほか

フィジー、日本ほか 全会一致

アルジェリア、アフガニスタンほか 51—10—38 △

キューバ、グラナダ、ニカラグア 55—11—46 △

キューバ、メキシコほか 69—8—39 △

行方不明者と失踪者

し続けるよう要請する。

すべての政府に、失踪のどんな証拠にも応じて、必要と思われるあらゆる方法をとるように求める。すなわち、関係者、国連機構、非政府機構の要求に応じて、失踪に関連するあらゆる情報を与え、関係者の状況を緩和するためのあらゆる法律上の、物質的その他の援助を与えること等である。そして、彼らを迫害やいやがらせから守るよう求める。また、すべての政府は、失踪を防ぐために、すべての人の安全を確保するのに必要な手段をとるよう要求する。

女性亡命者と女性難民①

すべての国が、その責任を認識し、亡命者援助の義務を——たとえそれが最初の避難所を与えることであれ、永久的な再定住の機会を与えることであれ、または財政上の援助を与えることであれ——共有するように勧告する。そしてさらにすべての国が、亡命者の幸福と、国際法および国内法のもとでの彼らの法的権利とを守るために亡命者を受け入れるよう強く勧告する。また、政府が亡命中の女性や子どもを虐待する者を法に照らして処断するよう、そして、そのような虐待を防ぐあらゆる手段をとるよう強く勧告する。

女性亡命者と女性難民②

外国の侵略の恒常化、人種主義、アパルトヘイト、圧制、植民地主義、新植民地主義、そして戦争における非人道的武器・方法の使用を非難する。また、それらの使用停止と、女性および子どもがこれらの悪の犠牲にならないことを保障する努力を要求する。すべての国が地域的なまた国際的なレベルで、当事者双方および国際的な手段を使ってあらゆる可能な限りの援助を拡げてゆくように勧告する。難民の女性・子どもを虐待する者を法で裁き、そのような残虐行為から守るためにあらゆる手段をとることをすべての政府に要求する。

パキスタン、  
日本ほか

97-0-29

○

全会一致

女性の健康と福祉  
——特に農村地域  
において

極貧の中で生きる  
女性

農業に従事する女  
性と農村

サハラ  
の荒廃と、  
かんばつ

まだそうしていないすべての国は、特に農村地域における女性の健康と福祉を達成するためのあらゆる行動計画を再調整し、改善し、調整する必要性を認識するように勧告する。また、栄養、環境衛生、公衆衛生、胎児期と母体と子どもの健康管理、そして、女性と男性が子どもを何人、いつ、どこで産むかを決定する権利を行使できるようにする法律を含めての家族計画等に関する政策や法案からなる、家族の健康と福祉の統一された計画を展開するように奨励する。

すべての女性および男性に対して、家族とともに、いまだに耐え難い貧困の中で暮らしている女性の権利にまず関心を向けるように、そしてすべての政府に対して、貧困の社会経済的原因を研究し排除するようにアピールする。一部地域の住民の貧困は、「婦人の十年」の前半期の間、ますますひどくなってきたており、女性は個人的および社会一般の発展の手段を奪われている。この貧窮は、おもに、植民地主義および新植民地主義、不公平な国際関係、そして管理されていない工業化および都市化によるものである。

政府、国連機関、その他の基金機関は、農村女性自らが決定する必要性と優先権とに特別な注意を払うよう勧告する。また、すべての発展過程と行動は、農村女性がそれぞれの地域にとどまるのを可能にし、そうすることによって農村から都会への移住の流れを最小にする目的をもって、地域指導に相当の配慮を与えるよう奨励する。

国連および専門機関がサハラ  
の荒廃とかんばつと戦う努力を強めるように要求する。と同時に、この目的は、新しい団体を作ることによるのではなく、むしろ既存の地域の団体に、今以上の技術的および物質的方策を与えることによって遂行されるべきだと提案する。こういう環境においては、女性が一番に、解雇・移住・家庭の放棄の被害を被

日本、西独、  
ジャマイカ  
その他

全会一致

無投票

全会一致

全会一致

## 移民女性

り、養ってゆくのに必要な手段も教育もないにもかかわらず、一人で責任を負うようになるということを考慮してのことである。

すべての国に対して、移民に対するあらゆる差別をやめ、そのためにあらゆる手段を実行するよう訴える。また、関係国に次のように勧告する。移民女性に、指導や職業訓練等を受ける平等の権利を保障すること。受け入れ国における生活および労働条件に関する情報を与えること。移民女性がその地方の社会環境に順応することを具体的に助けることができる社会奉仕網の発展を推し進めること。その他。

## 国際身体障害者年

すべての女性および男性が国際身体障害者年（一九八一年）の成功およびその行動計画の実施を支持し、これに協力するようアピールする。また、この行動計画の実施にあたって、女性身体障害者があらゆる活動分野に全面参加を可能にし、同時に彼女たちのレクリエーションを保障するために、女性身体障害者に特別の注意が払われるように要求する。

## 麻薬の密売取り締まり

麻薬の密売取り締まりの努力を麻薬常用者のリハビリテーションの必要性を考慮に入れて、各国レベルでの厳重な措置を強め、国際レベルでの協力を拡大することを参加国に呼びかける。各国政府に、麻薬性植物の栽培や合成、あるいは植物性の麻薬物質製造を厳しく取り締まるよう求める。

## 虐待される女性と 家庭内暴力

国連事務総長に対して、世界保健機関（WHO）と協力のうえ、家庭および施設における肉体的、性的、その他の形の虐待の程度と種類を調査し、この問題に取り組むためのあらゆる現存する手段を研究するよう要求する。加盟国が家庭内暴力の犠牲者を守る措置を取るように、また、暴力や性的暴行の犠牲者の治療センター、避難所、カウンセリ

西独、日本  
その他

無投票

無投票

全会一致

無投票

ングの設置と同時に、このような虐待を阻止することを目的とした計画を実施するよう勧告する。

家族の遺棄を避けるための国際法の制定

政府間で双方の、また多数国間の合意により遺棄された妻が扶助料を支払われることを保障するのに必要な策を講じるように勧告する。と同時に、多くの場合、移住は家族の遺棄につながるということ、このような移住によっておこる深刻な問題は、無防備の状態に取り残される未成年の子どもの遺棄につながるということ、そして大多数の女性は自分の権利を請求するために外国の法廷に控訴するに必要な財政的手段を持っていないということに言及する。

売春による搾取および人身売買

この重大な問題に寄せる政府および国際的機関の関心の薄さを非難し、政府に対して、*「人身売買および売春による搾取のための条約」*を批准するために適切な措置をとるよう要請する。また、政府が、女性や子どもは商品ではないことを認識し、すべての女性と子どもが誘拐、強姦、強制された売春に対して法的保護を受ける権利のあることを認識するように勧告する。

若い女性のための特別措置

国家が新しい世代の女性の要望を確認し、広い見地に立って、あらゆる分野における若い世代の発展を促進するための一般的政策を調整するよう勧告する。これは、若い女性の教育・健康・職業への接近を促進するため、経済的・政治的・文化的・専門的歩みへの参加と組織化を推奨するため、男性と平等の権利を持つ人間としての発展の可能性を考慮してその自覚を促すため、そして社会の発展への積極的な責任のある参加を可能にするためである。

高齢女性と経済保障

加盟国に対して、一九八二年に開かれる世界高齢者会議に女性が計画段階で加わり、その派遣代表団に指名されることを保障するよう要求

ペルー、ドミニカ  
75 | 0 | 35

△

全会一致

無投票

米、日本ほか  
無投票

## 女性と食糧自足

国際的飲料水供給  
と公衆衛生の十年

新国際経済秩序を  
達成するための国  
連の努力の枠内で  
の「国連女性の十  
年」の目標達成

する。また、国連事務総長に対して、高齢の女性に対する社会的・経済的保障の有効性と、社会保障の最低基準の必要性に関して相当の研究をするよう要求する。そしてそれらの資料は、世界中の高齢女性の窮状に関する必要な行動を促すために、「国連婦人の十年世界会議」参加国、「世界高齢者会議」および「女性の地位委員会」に提出されることを要請する。

家族および地域社会や生活共同体を養うのに十分な食糧を保障するために、女性の生産力を増大するのに必要な財源を割り当てた計画を、政府が率先して作成すること、また、農村女性に農業生産のために必要な財源と手段を与えることを要請する。食糧の生産・分配・利用のシステムにかかわっている地域団体に、女性が効果的に参加することを政府は推進すべきである。

専門機関を含む加盟国が、国際組織や非政府組織と同様に、「飲料水の十年」の目標に寄与することを強く奨励する。また、加盟国および国連機関に、飲料水供給事業のための立案、実施、および技術面での適用における女性の全面参加を促すことを呼びかける。

加盟国が、一九七五年の世界行動計画で確立され、コペンハーゲンの行動計画でさらに練られた目的を持つあらゆる計画を、国家レベルおよび国際レベルでまとめることを要請する。また、女性の経済的、社会的、政治的地位を向上させる、経済的および社会的進歩のための条件を作ってゆくことを要請する。すべての政府が積極的に、「第三次国連発展の十年」のための国際的発展計画に関する経済交渉の分担を建設的な協力精神で行ない、世界経済を改革し、世界平和に脅威を与える経済的原因排除の目的をもって、全体的交渉が満足のいく同意を得られるようにするような行動をすることを勧告する。国連事務総長に

全会一致

全会一致

ユーゴ、アル  
ゼンチンほか

92-0-11

△

発展段階にある女性の統合のための組織の確立と強化

あらゆる開発計画、事業に女性の利益を考慮に入れること

あらゆる開発途上国が、開発援助を受ける国を自由に決定する権利

教育および訓練の平等の奨励

対して、新国際経済秩序達成のための国連総会の専門委員会に、コペンハーゲン婦人会議の最終宣言を報告することを要求する。

適切な組織がまだないところには、すべて確立されなければいけないこと、財政的・技術的・人的資源を、国際団体および政府機関は与えなければいけないことに言及する。また、あらゆるレベルにおいて、このような組織の、世界行動計画の第一目標の達成可能を約束する全面的に対等な活動を保障するために、あらゆる努力が払われなければいけない。

開発援助を与える側、受ける側の双方に対して、あらゆる開発計画、事業において、女性の利益が考慮に入れられることを保障すること、そのような計画、事業が女性に不利な影響を与えないことを保障することをアピールする。また、最初の段階から、そして援助計画の立案、実施の全段階において女性を受け入れることを勧告する。

あらゆる開発途上国が、開発援助を受ける国、国際機関を自由に決定する権利を再確認し、開発途上国に対する開発援助のよりどころを自由に選ぶのを妨げるために行なわれる通貨の不安定化、経済的および政治的恫喝、脅迫、妨害、暴力等のあらゆる行為を非難する。

各国政府に対して、教育予算を適当な割合まで、少なくとも国民総生産の七・八%まで引き上げるように要求する。また、政府および関連国連機関に対して、まず第一に、特に開発途上国において、経済・科学・技術の分野における訓練を女性がより多く受けることを奨励するように勧告し、教育機関を、女性がまず影響を受ける農村および都市の恵まれない地域のために特にふやすように勧告する。

全会一致

全会一致

グレナダ

65-0-42

△

無投票

家族数を決定する  
権利

開発途上国における  
公共事業国際セ  
ンター

女性に対するあら  
ゆる形の差別撤廃  
条約

国家レベルでの、  
世界行動計画の実  
施によってなされ  
る進歩の概観と評  
価

「国連婦人の十年」  
のためのボランタ  
リー基金

政府は、その国の政策の枠内で、女性および男性が自分たちの家族数を決定する権利を自由に行使できるような情報・教育・方法を与えるあらゆる適当な手段を、立法上の手段をも含めて、とるよう要請する。

公共事業の運営に関心を持ち、あるいは、すでにその実行に移っている先進国は、「開発途上国における公共事業国際センター」と協力し続けるように勧告する。また、開発途上国における公共事業を発展させる要因としての女性の役割と地位の向上を推し進めることの重要性を強調する。

すべての国が、この条約に署名し批准するよう、この条約の条項を効果的に実施するために、あらゆる必要な手段を講じるよう、そしてこの条約を公表するように要請する。また、すべての国が、発展全体の過程への女性の全面的かつ平等な参加を成し遂げるために、女性に対する差別撤廃運動の助けとなり続けるよう要請する。そして、専門機関および非政府機構に条約の条項を公表するように求める。

国連事務総長が、国家レベルでの、世界行動計画の実施によってなされる進歩の概観と評価に関する書類が、統計上の添付書類と、既存の国内の組織および法律制定のできるだけ多くのリストも含めて、会議後できるだけ早く、できるだけ多くの人の手に入りやすい形で、一つの書類として確実に発表されるよう努めるべきであることを勧告する。

この基金によって展開される活動が「婦人の十年」以後も続けられるように要求する。また、各地の経済委員会が国連の一般予算から、女性の行動計画に役立つ政策レベルのポストを作るように緊急にアピールする。

無投票

全会一致

無投票

無投票

全会一致

行動プログラムおよび人材のための財源

国際的調査および訓練機関

「婦人の地位委員会」の役割

国連事務局の女性

国連の組織内での女性の地位調整問題

国連総会に対して、コペンハーゲンで採択された行動プログラムと決議の実施を有効に行なうのに必要な計画と人材のために、国連の一般予算からさらに多くの財源を提供するよう勧告する。また、国連事務総長に対して臨時の措置として、地方委員会の空のポストを、要求中の財源のない新しいポストのために移すことの可能性を検討するよう要求する。そしてまた、国連事務総長および国連と専門機関の執行部が、もっと多くの女性をそれぞれの団体におけるレギュラー・ポストに任命するように勧告する。

「女性の進歩のための調査及び訓練機関」は、世界行動プログラムの関連部分の実施を容易にする調査と訓練計画とを行ない、その情報活動を通じて人々に知らせてゆくよう勧告する。また、専門機関や他の国連機関が、この機関と協力して女性の要求に関連した調査・訓練・情報活動の手助けをするように勧告する。

「婦人の地位委員会」が「婦人の十年」の後半期の行動計画の実施および「経済・社会理事会」に対する勧告に特別の注意を払うように要求する。また、統合された報告システムに従って、出された資料を整理する責任を持つように要求する。

国連事務総長、専門機関および他の国連団体の長に対して、それぞれの組織内で、女性の補充・昇進・能力開発・訓練・報酬に関する政策を再調査するように呼びかける。加盟国は、募集する際の女性と男性の間の現在の不均等を除くべく行なっている国連および専門機関の努力を考慮に入れるように迫られている。

国連事務総長、専門機関および団体の長に対して、国連組織内の団体にとってのコペンハーゲン行動プログラムとのかかり合いを考慮し、

全会一致

全会一致

全会一致

全会一致

全会一致

## 題

### 女性に関する資料

一九八〇年国連総会に国連事務総長が、行動プログラムを実施する準備がなされなければならないということを報告し、実施の効果的な調整、監視、評価を確実なものとするように要求する。

国際団体が一般的に受け入れられる規則を明文化し、書式や質問表を訂正し精査する各種の調査に協力して、発展における統合に向けての女性の前進を評価するのに利用することのできる女性に関するそれぞれの資料を提供することを勧告する。

一九八〇年国連総会は、「婦人の十年」の業績を調査し評価するために、一九八五年に女性の世界会議を開催することを考慮に入れるように勧告する。ケニアが、ナイロビでこの会議を主催することを申し入れる。

デンマーク政府への謝意

デンマーク政府がコペンハーゲンでの会議を実現させたことに深い感謝の意を表明する。

無投票

無投票

無投票

メキシコ

# 資料3 国連婦人の十年一九八〇年世界会議における

## 高橋首席代表演説

一九八〇年七月一五日

議長

私は、日本政府を代表して、

貴下がこの歴史的に重要な会議の議長に就かれたことに心から祝意を表するとともに、この会議が議長の卓越した、かつ、公正なる指導力のもとに、実り多き成果を挙げることが期待致します。わが代表団は、議長がこの重大な責務を遂行されるためにあらゆる協力を惜しまない所存であります。

私はまた、今回の会議のため施設・便益を提供され、多大の労をとられたマルグレーテ二世陛下並びにデンマーク王国政府と国民に対し、心からの感謝の意を表したいと思ひます。私は、デンマーク王国が、婦人の地位向上に他国の範となるような誇るべき成果を挙げられていることに對し、心から賞賛の念を抱くものであり、本会議が貴国で開催されることは極めて時宜を得たものと信じます。

さらに私は、この会議の準備に献身的な努力をされた世界会議準備局のメイヤー事務局長及びその職員に對し、並びに社会開発人道問題センターの職員及び国際連合婦人の地位委員会の委員各位に對し、深甚なる感謝と賞賛の念を述べたいと思ひます。

議長  
五年前、私たちは、メキシコにおいて、婦人が直面している諸問題を直視し、「平等、発展、平和」の目標を達成するための国内的国際的行動指針としての世界行動計画を策定しました。

日本政府と国民は、国際連合が、この計画における諸提案を世界各国の個人と政府、民間の諸機関及び国際諸機関が長期的に検討し、推進していくための期間として「国連婦人の十年」を宣言するとともに、前半期五年間の進展の確認・評価と後半期のための一層具体的かつ明確な行動プログラムを策定することを目指してこの会議を招集したことを高く評価し、心から歓迎するものであります。

議長

わが国は、わが国自身の歴史的発展過程、とくに過去一〇〇年の政治、経済、社会等各分野の発展の経験から、開発途上国の開

発への意欲には深い共感を覚えております。大量貧困克服のためには、経済・社会開発の推進に向かって、開発途上国の主体的な努力が必要であることは申すまでもありません。

わが国の第二次大戦前における近代化の過程では、今日のわが国で当然視されている権利を認められなかった婦人大衆が、多大な忍苦と犠牲を強いられつつ、男性に劣らない重要な役割を果たしました。そして、遺憾ながら、彼女たちは開発による利益の正当な分け前を享受しなかったのであります。わが国は、こうした経験を踏まえ、開発の企画、実施、評価という全過程に、婦人が男性と同等の権利、機会、責任をもって主体的に参加し、かつ開発による利益を正当に享受することが、開発において全ての個人及び社会の福祉の一層の向上をもたらし、男女平等を促進し、民主主義を確立し、世界の平和の達成をもたらすものであると確信します。わが国は、こうした認識にたつて、開発途上国の婦人の開発への完全な参加を今後一層積極的に支援していく決意であります。

婦人が開発過程において平等かつ効果的な役割を果たすには、雇用機会が平等に与えられねばなりません。また、健康は開発活動への参加、生活の質の全般的向上にとってミニマムな条件であります。さらに、教育が「国造り」の基礎であり、「人造り」の重要な要素であつて、開発そのものの有効性を左右するものであることは、国民の教育に非常に力を入れ、知的水準を向上させたことが近代化及び高度経済成長達成の最大の要因となつたわが国やその他の国の歴史的経験からみても明らかであります。わが代表団は、かかる認識から、この会議及び後半期行動プログラムのサブ・テーマを「雇用・健康・教育」としたことは、時宜を得ており、有効であると考えます。

わが国が従来より行ってきた家族計画プロジェクト、技術者養成等を含む開発援助協力はこれらの分野における開発途上国の婦人の地位の向上に資するものと確信しておりますが、今後は、これに加え、とくに教育協力の拡充、文化交流の強化等を通じての開発途上国の「人造り」への貢献を重視する決意であります。また、わが国は、国際機関を通じての協力も、引き続き積極的に行う所存であります。国連婦人の十年基金については、その目標額の一〇％に相当する一〇〇万ドルの拠出をすでに誓約しております。個々の開発援助計画の作成にあたっては、それらの援助が開発途上国の婦人の地位の向上に真に寄与しうるものとなるようきめ細かい配慮を行うことが重要であります。わが国も今後従来にましてこの点に大きな配慮を払ってまいりたいと考えます。

さらに、わが国は、第二次大戦後農地改革を実現させ、農業改良普及事業の実施、農業協同組合の確立等により農村の民主化が進展し、その後の高度経済成長も相まって、農業生産及び農家生活は著しく改善されました。また、わが国における教育及び健康の水準は世界に誇れるものでありますが、これは永年にわたる諸施策の実施の結果であるとともに、教育及び衛生水準の向上を志向する国民自身の努力に負うところが大きいのであります。わが国は、開発途上国の参考になるならば、わが国の経験に基づくこれらの分野の情報を喜んで提供したいと思ひます。

議長

私は、さらに、今なお世界の各地域における紛争、差別、戦乱により多数の人々が苦難を強いられていることに悲しみを覚えるものであります。これらの人々、とくに経済的、社会的劣位にあり、母性の観点から保護すべき婦人と子供が、いかなる状況にあるかを思うとき、我々の心は痛まずにはおられません。わが国は、これらの人々のために国連組織を通じてできる限りの救済を行うべく努力をしておりますが、国連憲章の精神と原則に従った平和と正義の達成こそすべての人々が最も願うところであり、私も平和で差別のない世界が一日も早く確保されることを心から訴えたいと思います。

私は、ここで、日本の婦人の現状について触れたいと思います。

今日、日本国憲法により法の下での男女平等の原則は確立し、婦人は政治、経済、社会等あらゆる場における男性と同等の権利を法的に保障されています。また、近年の経済社会の発展により、婦人の生活は大きく変化し、婦人の教育水準の向上、家事合理化、平均寿命の伸長等が相まって、職業をはじめ種々の社会的活動に参加する婦人が増加し、各分野で婦人の果す役割は重要になってきております。

しかし、こうした状況は、決して、婦人の完全な社会参加が実現したことを意味するものでありません。たしかに、法制上その他多くの分野において少なからぬ進歩が達成されましたが、現実にはなお、伝統的男女の役割分担意識が社会に根強く残っており、これに基づく社会慣行があります。この意識及び慣行の改変という困難な問題にどのように対処していくかが今後のわが国の主要な課題です。

国際婦人年及び国連婦人の十年は、かかる状況下にあるわが国にも多大な影響を与えました。わが国では、メキシコ大会のいち早く、内閣総理大臣を本部長とする婦人問題を総合的に取り扱う機構としての婦人問題企画推進本部を政府内に設置するとともに、国内行動計画及び前半期五年間の重点目標を策定、また、地方行政レベルにおいても、婦人関係行政が組織化され、各自の行動計画を策定し、それぞれその目標実現のための施策を進めています。

また、二百名以上の超党派国会議員からなる国連婦人の十年推進議員連盟が結成され、この会議にも、同連盟のメンバーである数名の国会議員が顧問として参加しています。

このような政策決定レベルの他、民間においても、数々の各界婦人団体が多岐にわたる活動を展開しており、この活動と関心こそ、国連婦人の十年の行動計画を進める大きな原動力であり、婦人問題の施策を進めていく上で不可欠の要素となっています。

さらに、マス・メディア、とくに遺憾ながら数の少ない婦人の報道関係者が、多大の努力を払いつつ継続的に婦人問題を取りあげ、社会の関心を盛上げるのに大きな役割を果たしていることを報告したいと思います。

これらの努力の結果、この五年間に、政策決定の場への婦人の参加の促進、配偶者の相続分の引上げに関する民法改正等の法制整備をはじめとし、多くの施策の充実をみました。しかしながら、完全な男女平等の実現にはまだ不十分であり、政府、マス・メディア等による啓発活動にもかかわらず、伝統的な男女の役割分担意識の問題は依然解決されておりません。わが国は、国連婦人の十年後半期において、前半期にもまして、この意識の改変及び男女平等をさらにすすめるための諸条件の整備に積極的に取り組んでいく所存であります。

議長

婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃条約は、男女間の完全な平等の達成のために画期的な成果であります。

わが国は、明後日に予定されている本条約の署名式において同条約に署名を行い、後半期の重点課題として、本条約批准のため、国内法制等諸条件の整備に努める所存であります。

議長

この会議で検討されるべき提案及びその他婦人問題に関する諸提案は極めて広範多岐にわたっており、今後も長期にわたって各国でまた国際社会で検討され、かつ推進されるべきものでありますが、日本政府は、国連婦人の十年の最終年に当たる一九八五年を、一〇年間の進展を確認し評価する機会とし、しめくりのために何らかの形の会議を開催することは有意義であると考えます。わが代表団は、今次会議が、「対話と協調」という精神の下に、婦人をめぐる諸問題について活発かつ建設的な討議を進め、崇高な理想に導かれつつも優れて現実的な提言を人類に向けて行うことを期待し、かつ確信するものであります。ありがとうございます。

# 覚めよ女たち

赤瀬会の人びと

江刺昭子著

絶賛発売中！ 46判カバー／1300円

●日本初の社会主義婦人団体に参加した女性たちの青春と生涯ある者は白色テロに倒れ、ある者は貧窮のうちに死んでいった。彼女たちの一人ひとりの後姿をたぐりよせ、その生きざまを描き出すけなげな魂の記録

元始、女性は大陽であつた

平塚らいてう自伝 全4冊 46判／各1500円

平塚らいてう

小林登美枝著 らいてう評伝 46判／1500円

マルクスの娘たち

ウイロムニア他著 46判／1500円

大月書店

東京都文京区本郷2-11-9  
電話 03 (813) 4651 (代表)

# 資料4 NGOフォーラムのワークショップ(プログラムから)

〔七月十四日〕

- 婦人問題に関するネットワークづくりⅡナショナル・ウイメンズ・コンファレンス委員会
- 女性・貧困・女性犯罪者Ⅱ女性の政策研究センター
- 実演Ⅱ安価な材料から玩具を作る幼稚園ⅡBUPPL
- レバノンに縫製工場を建設Ⅱザ・トラベリング・ハイス쿨
- ル・イン・デンマーク
- 女性のセクシュアリティ(レズビアニズムを含む)Ⅱ性に関する国際女性連合
- 多国籍企業による女性搾取Ⅱ世界平和協議会
- ビベンシアⅡ国際女性トリビュン・センター
- 女性と労働、都市と農村Ⅱ女性と開発／開発研究センター
- 女性学Ⅱ国際女性学会(連日)
- 第三世界の女性の労働・教育・健康Ⅱ人民から人民への開発援助(連日)
- 世界の女性によるマス・メディアⅡWINニュース
- 女性問題を推しすすめるためのネットワークⅡ女性会議実行委
- 責任ある地位への女性の昇格Ⅱ世界市町村連合
- 原住民女性に対する差別Ⅱ世界平和協議会
- 職業訓練とカリキュラム改正Ⅱ国際YWCA
- インターナショナル・フェミニスト・ネットワークⅡISIS、FEM、QUEST

- 平和とマス・メディアⅡ平和と自由のための国際女性同盟
  - 家庭における女性の地位Ⅱ女性と開発／開発研究センター
  - 低収入女性のための行動プログラムⅡ海外教育基金
  - 宗教に影響される女性Ⅱ宗教の自由のための国際協会
  - 親のための教育Ⅱボストン・ウイメンズ・ヘルス・ブック・コレクティブ
  - 女性政治犯Ⅱ世界平和協議会
  - 第三世界の女性による女性のためのプログラム作りⅡユニセフ
  - プロジェクト評価とセミナーの実現Ⅱ国際女性連合
  - 開発の中の農村女性Ⅱ世界教会評議会
  - 法律からみた女性の状況Ⅱコロンビア青年運動
  - 老年女性の生活Ⅱ女性心理学協会
  - 未来の優先調査Ⅱ女性と進歩の会／開発調査センター
- 〔七月十五日〕
- 性差別撤廃条約Ⅱ平等のための新しい武器Ⅱ国連婦人の十年委員会
  - 女のからだについての知識の進歩Ⅱ国際女性学会
  - 教育手段としてのテレビⅡチルドレンズ・テレビジョン・ワークショップ
  - 女性と失業Ⅱ女性の地位に関するジュネーブNGO小委員会
  - 開発への女性の参加Ⅱ世界農村女性連合
  - 文化理解を通しての平和教育Ⅱ世界カトリック女性連盟

●アルコール中毒と麻薬―アルコール・麻薬中毒に関する国際協議会

●世界的過剰人口問題―人口行動協議会

●未来のビジョン建設のための女性の能力―世界未来学会

●収入を生み出す手段を動員しよう―海外教育基金

●第三世界の女性に必要な技術―ユニセフ

●分類システム―ウイメン・イン・デベロップメント

●コロンビアの農村女性と働いて―ザ・トラベリング・ハイス

クール・イン・デンマーク

●喫煙と健康―女性心理学協会

●雇用における平等の権利と女子保護―あごら

●教科書と絵本にみられる役割分業―アメリカ大学婦人協会

●女性政治犯に対する拷問―アムネスティ・インターナショナル

ナル

●締め出された者たちをいかにひき入れるか―ATD第四世界

●若い女性と平和と解放のための教育―国際女子学生組合

●年をとること―ジョージ・ワシントン大学、女性学プログラム及びポリシー・センター

●女性の権利と国籍法―アジアの女たちの会

●農村／都会での開発プログラムの作成―女性解放連合

●女性運動の二重の役割―タクソン女性委員会

●働く女性のための保育施設―UNFPA／デカード・メディア

ア／地域開発財団

●保健衛生の歴史・構造・活動―ボストン・ウイメンズ・ヘル

ス・コレクティブ

●世界のフェミニスト―フェミニストの立場からみた八〇年代

についてのビデオ

●開発における女性のための国際的及び地域的情報センター―

国際女性トリビュン・センター

●自分自身の情報を広めるには―ニューズレター、ポスターな

どのつくり方―国際女性トリビュン・センター

●適切なテクノロジー―国際女性トリビュン・センター

●生活の質向上における圧迫と障害―全国黒人女性協議会

●中間年フォーラムに対するフェミニストとしてのアプローチ

―フィリス・チェスラー

●第三世界の国々の女性グループを組織する―ユニセフ

●雇用と収入を生み出す活動―女性の地位に関するジュネーブ

NGO小委員会

●国家解放と平和の関係―世界平和協議会

●女性の経済的・社会的平等―国際婦人民主連盟

●積極的な平和教育―平和と自由のための女性国際同盟

●第三世界の女性―女性と労働―ネイティブ・アメリカン・ウ

イメンズ・オーガニゼーション

●有効なグループ・ダイナミックス―ザ・エクスチェンジ

〔七月十六日〕

●フェミニスト出版―クラージュ／ISIS／FEM／その他

●女性とクレジット―信用組合世界協議会

●世帯を持つことと雇用を熱望する第三世界の女性たち―国際女性調査センター

●女性と新国際秩序Ⅱ世界平和協議会

●健康と開発への女性の取組みⅡ家族生活と健康の研究・教育・訓練センター

●ビデオによる国際女性交流ⅡHKWビデオ・ワークショップ  
(十八日まで)

●国際青年平和シンポジウムⅡUNITAR

●家族生活教育ⅡUNFPA/デケード・メディア/地域開発財団

●米国女性の衛生運動Ⅱボストン・ウイメンズ・ヘルス・ブック・コレクティブ

●ノルウェーの女性の状況Ⅱ外国女性グループ

●健康についての情報と経験交流

●人種差別・性差別と闘うための新しいアプローチⅡ米国YWCA

●女性と労働組合Ⅱ女性の地位に関するジュネーブNGO小委員会

●女性の参加する開発プロジェクトをいかに評価するかⅡ海外教育基金

●女性の雇用と収入のための技術開発Ⅱ新国際経済秩序Ⅱコリジョン77

●南イエメンに病院建設Ⅱザ・トラベリング・ハイスクール・イン・デンマーク

●フェミニストの立場からの開発イデオロギー批判Ⅱシメナ・チャムスほか

●国際開発ネットワーク(情報、技術援助、金)をいかに利用するかⅡ国際女性トリビュン・センター

●女性と世界協力Ⅱ世界協力のための女性ネットワーク、アメリカ・フレンズ・サービス委員会

●変化する家庭の役割Ⅱ女性国際民主連盟

●西ヨーロッパにおける女性及び若年労働Ⅱジョランダ・トラカ

●女性、世界宗教、平等Ⅱ宗教女性連合

●低収入の農村と都市の女性のためのローンⅡウイメンズ・ワールド・バンキング

●批准を実現させるⅡ国連婦人の十年委員会

●保健衛生ワーカーの役割と訓練Ⅱパン・アメリカン保健機構

●女性に対する雇用差別とそれにうちかつための戦略Ⅱ国際有職婦人連盟(十七日)

●核と女性/子供に及ぼす影響Ⅱ平和と自由のための国際女性同盟

●女性の発展における家族計画Ⅱ国際計画出産連盟

●アバルトヘイトと闘う女性Ⅱ世界平和協議会

●法的にみた女性の状況Ⅱコロンビア青年運動

●中絶と避妊の自由を求め、不妊手術に反対するⅡ中絶、不妊、避妊のための国際キャンペーン

●女性運動におけるレズビアンⅡ国際レズビアン・アンド・ゲイ・アソシエーション

●農村開発における女性のための援助制度Ⅱどのような支援体制が必要なのかⅡ国際女性トリビュン・センター

〔七月十七日〕

●協力による自助活動の促進ⅡMATCH国際センター

# お産の学校

私たちが創った三森ラマーズ法

絶賛発売中！



B 6 判 450ページ 1,500円

BOC出版部

今、各界でブームを呼ぶ、ラマーズ法による自然分娩を進める助産婦と妊婦たちの「出産」に取り組む感動のドキュメント。お産の準備クラス「産婆の学校」の内容と、出産体験者六十四人の手記による、異色の出産準備書！

これこそ人間誕生！

だいたいな赤ちゃんを、病院まかせて出してもらう時代は終わった。

夫婦が協力して産痛をのりこえ、安全かつ自然に、喜びをかみしめつつ産む素晴らしい出産法が登場した。

『お産の学校』にその実際を見て、これこそ人間誕生のあるべきすがた！と私は感動した。

朝日新聞記者 藤田真一

(『お産革命』著者)

感動的な「いいお産」

産む側も助ける側も、あらゆる能力を発揮し、おのれの信念を貫くとき、はじめて「いいお産」が出現する。これは、その実践の書だ。日常的な活動をさまざまと伝えるやりとりは、実に活き活きと我々に迫る。産む人だけでなく、その家族や介助者たちにとっても必読の書と思う。

三楽病院副院長 唐沢陽介  
(付属助産婦学院院长)

●非武装と世界平和に対する女性の責任―平和運動をする女性たち

●女性と健康―平等政策センター

●女性のための自助活動―児童救援同盟

●暴力に反対する平和教育と女性―平和と自由のための国際女性同盟

●公共政策と家庭―ATD第四世界

●ニカラグアの女性について―ザ・トラベリング・ハイスクール・イン・デンマーク

●保健衛生と親になること―ボストン・ウイメンズ・ヘルス・ブック・コレクティブ

●アルファベット化―国際婦人民主連盟

●親のための性教育プログラム―ニューヨーク市計画出産会、マーガレット・サンガー国際技術援助及び訓練部門

●米国農村における女性と子供の社会的経済的状況―人種的経済的平等を求める女たち

●人口計画―国際計画出産連盟

●原住女性に対する差別―世界平和協議会

●健康の手引き―ネットワークの使い方―I S I S、ボストン・ウイメンズ・ヘルス・ブック・コレクティブ

●移民・黒人及び白人女性に訴える―ザ・インターナショナル・ウェイジス・フォー・ハウスワーク・キャンペーン

●十代の妊娠と教育・健康・雇用に及ぼす影響―国連国際青年学生運動

●世界平和と軍縮についての女性の責任―ウイメン・フォア・

ピース・ムーブメント

●女子児童労働―反奴隷協会

●女性問題の解決に与えるマス・メディアの影響―国際婦人民主連盟

●女性からみた移民と難民問題―UNA・サンフランシスコ

●働く女性を組織する―ザ・エクスチェンジ

●何が女たちを結びつけるか?―ザ・エクスチェンジ

●売春婦と主婦と母親たち―マーゴ・センジエームス―コヨーテ

●シスターフッドは神話か?―ノルウェー女性協議会

●技術援助―女性と世界の食糧体制―ザ・エクスチェンジ

●政治犯の家族に対する差別―世界ウクライナ女性機構連盟

●上ボルタにおける農村開発―プロジェクトUS/AID

●農村の女性―ドクター・ペラ

●米国のメキシコ系アメリカ女性の二重性と生存―コミッション・フェミニール

●人種差別とその影響―レリア・ゴンザレス

●人種の経済的平等の問題―人種と経済の平等を求める女たち

●植民地国における女の状況―プエルトリコ―世界平和協議会

●子供と若い女性の教育―ベルマ・ジャーデイン

●フェミニストの精神

●ブラジルの売春婦に対する暴力―ブラジル・フェミニスト・フロント

●ラテンアメリカの女性のためのラテンアメリカに関する問題  
●家族―国際ソロブチニスト

〔七月十八日〕

- 世界の飢餓を減らすには―全国黒人女性協議会
- 結婚と家庭生活における平等―UNA・サンジエゴ
- 軍縮に重要な女性―世界平和協議会
- フェミニストの理論と行動主義―MANUSHI、FEM、QUEST
- 第一世界における開発教育―教育を受けた人々を再教育する―海外教育基金
- ヨーロッパの移民女性の実態―国際女性協議会
- 母性と労働―女性研究センター
- 八〇年代のアラブ女性―アラブ女性科学者協会
- 女性のスポーツ―健康と安全―ザ・インターナショナル・ウェイジス・フォー・ハウスワーク・キャンペーン
- 老人のための家―ジャマイカ女性クラブ
- 女性の性的搾取―女性に対する暴力に反対する女たち―国際女性トリビュン・センター
- アフリカ女性と健康(割礼)―アフリカ女性研究協会
- 力強いフェミニストの新世界―平等のための女性機構
- 応用技術の利用―女性の革命的社会主義運動
- 男たちと共に組織する―ザ・インターナショナル・ウェイジス・フォー・ハウスワーク・キャンペーン
- 国際的人身売買―反奴隷協会
- 政治の中の女たち―アメリカの女たち
- 移民女性と家族に対する差別に闘う―世界平和協議会
- 女性の雇用機会を改善する―女たちのための人権の会

- IPS国際女性情報サービス―IPS、国際女性トリビュン・センター、AWAND
- 第三世界における青年女子の問題―ユニセフ
- マスコミに職を得るには―日本
- 第三世界の女性が発言する
- 割礼の疫学―WINニューズ
- イスラエルによる占領がもたらすもの―全国パレスチナ女性組合

〔七月二日〕

- 芸術における女性の地位―国際女性芸術家連盟
- アフリカ女性研究―研究開発のためのアフリカ女性協会
- 性教育―A. Gandhi
- 女性と出版業―キヴィンデツアイク(二五日まで)
- 女性芸術家たちによる国際フェスティバル
- 識字教育のための若い女性教師の養成―国際ガールギルド及びガールスカウト協会
- 所得創出と自立―ラテンアメリカの事例研究―海外教育基金
- 女性と刑務所―女性のための刑務所にかわる場所―チズウィック家族救援センター
- 国際レズビアン運動―ザ・インターナショナル・ウェイジス・フォー・ハウスワーク、国際レズビアン運動
- 第三世界の女性―働く女性―ネイティブ・アメリカン女性機構
- 職業訓練―世界YWCA

●女性の雇用機会に関する具体的な進展Ⅱ女性の人権

●開発途上国で求められる保育施設Ⅱ海外教育基金

●アパルトヘイトと闘う女たちⅡ世界平和協議会

●今日のキューバにおける宗教Ⅱオフエリア・オルテガ

●バンクグラデシユの女性Ⅱ女性経済協会

●ユニセフと共に働くにはⅡユニセフ

●フェミニズムⅡその第二段階Ⅱベティー・フリーゲン

●身体障害をもつ女性ⅡACCD

●平和と安全のためのヨーロッパの女性たちⅡ国際婦人民主連盟

●人種差別と宗教Ⅱ宗教女性の会

●教科書にみられる男と女のイメージⅡ国際女性学

●ハンディキャップをもつ女たちⅡAudollog poe disk

●買春観光Ⅱアジアの女たちの会

●第三世界と都会の女性Ⅱザ・インターナショナル・ウェイジス・フォー・ハウスワーク・キャンペーン

●開発途上国における女性研究Ⅱ国際女性学

●性差別のない教科書Ⅱ国際女性学

●家事に対し政府は賃金を支払うべきかⅡ移民女性の会

●女性と地方主義Ⅱ国連地域経済委員会

●働く権利とその履行Ⅱ新労働組合世界連盟

●記者会見Ⅱウクライナ女性世界連盟

●女性法律家Ⅱ法と現実Ⅱ米国ロサンジェルス女性法律家協会

●民間教育へのアクセスⅡNGO常設委員会、ユネスコ

●社会主義国の女性たちがあなたの質問に答えるⅡ国際婦人民主連盟

●若年期の妊娠と教育・健康・雇用の関係Ⅱ国連に対する国際青年学生運動

●働く母の保育サポート・システムⅡユニセフ

(七月二日)

●原住民女性と解放Ⅱ国際原住民協議会

●女性と科学技術Ⅱ女性科学者協会

●女性の雇用を多様化させるにはⅡ女性の地位に関するジュネーブNGO委員会

●スペインにおける法的サービスおよび法改正Ⅱ海外教育基金

●家庭内暴力と女性に対する暴力Ⅱ女性政策研究センター

●移民女性の組織化Ⅱエクアドル労働グループ

●ヒューマン・エコロジとNGOⅡ全インド女性会議

●売春婦たちは国際的に組織するⅡザ・インターナショナル・ウェイジス・フォー・ハウスワーク・キャンペーン

●家族のあり方と価値Ⅱ国際ソロプチミスト

●開発と女性解放Ⅱ国際婦人民主連盟

●国際理解を通じての平和と教育Ⅱカソリック女性組織世界連合

●ギニア・ビサウでトイレを建設し机を作るⅡザ・トラベリン・グ・ハイスクール・イン・デンマーク

●雇用政策の与える影響Ⅱヒューマンライツ・フォア・ウイメン

●難民女性Ⅱ世界教会協議会

●イラク女性の経験についてⅡイラク女性総合連盟

●移民女性を組織するⅡ全世界労働グループ

● 女性と水と廃棄物Ⅱ米国公共衛生協会

● 女性と核Ⅱ生存のための女性組織

● 女性の参加Ⅱ国連はどんな例を示したか？Ⅱ国際公務員連盟

● 差別撤廃条約Ⅱ女性にとつての意味Ⅱゾンタ・インターナショナル

● 国家存続のために闘う女たちⅡ汎キプロス女性機構連盟

● イスラム女性の役割Ⅱイラン革命的な女性機構

● 女子のためのキャリア教育Ⅱガールギルド・ガールスカウト世界協会

● レバノン侵略が及ぼす女性と子供への影響Ⅱレバノン女性権利同盟

● オーストラリア政府代表と民間参加者の集まり

● 若い女性が公共責任につくにはⅡ市町村連合機関

〔七月三日〕

● フレックス・タイム制度Ⅱ女性の地位に関するジュネーブNGO委員会

● 避妊手術その他の悪習と抑圧が女性の健康に与える影響Ⅱ世界平和協議会

● ネットワークづくりⅡヒューストン継続委員会

● 健康問題（麻薬その他）についてのNGOの寄与Ⅱ国連／NGO／IDW委員会

● 家族の健康と発展における女性の力学と寄与

● 自営業を通しての開発Ⅱ地域開発のための国際学会

● 暴力を受ける女と暴力が生まれる家庭Ⅱチズウィック家庭救

援センター

● ナミビアと南アフリカの勇氣ある女たち（映画）Ⅱ国際防衛援助基金

● 平和と軍縮を考える若い女性たちⅡ国際婦人民主連盟青年部

● フォーラムに集う女性科学者たちの会Ⅱ女性科学者協会

● 飲酒と麻薬依存Ⅱアルコール及び麻薬中毒国際協議会

● 女性事業家たちⅡ信用組合世界協議会

● 核兵器と闘う女たちの役割ⅡヨーロッパⅡ世界平和協議会

● 母性に何が起こったか？Ⅱ家族のためのオーストラリア女性の会

● 世界のエコロジー危機に反対してフェミニストは行動するⅡSOS・アンド・エコフェミニスト

● 日本の女たちの活動Ⅱ中嶋里美

● 家庭における女の役割と社会における家庭の役割Ⅱキューバ女性連盟

● オランダ女性芸術家によるスライド上映

● 女性の健康と安全Ⅱ強姦に反対する女たち

● ノルウェーの移民女性Ⅱ外国女性のグループ

● 政界参加のための女子教育Ⅱ世界教職員機構連盟

● 世界の国籍法Ⅱアジアの女たちの会

● チリの地下活動支援Ⅱデンマーク・チリ支援委員会

● ニュー・グリーンランドの女性たちⅡデンマーク女性協会

● イスラエル女性の活動Ⅱイスラエル女性機構協議会

● イギリス売春婦コレクティブⅡ国際売春婦組織

● 独裁下のウルグアイ女性Ⅱウルグアイ委員会

● エルサルバドル・ホーイⅡFDR

- フェミニスト——マスキュリニストの協力——人間平等グループ
  - 現代キューバのキリスト教女性信者——オフエリア・オルテガ
  - 平和運動と国連に関連した国際関係に関わる女たち——ユネスコ
  - ナミビアのSWAPO（映画）——SWAPO
  - 割礼——割礼廃止を求める国際委員会
  - 将来の可能性——女性学国際ネットワーク
  - 今日のキューバにおける教育と健康の進歩——キューバ女性連盟
  - 女性と選択の権利（割礼、一夫多妻、強制妊娠、強制不妊手術など）——女性のミューティレーションに反対する国際委員会
  - 平和のために北欧芸術家を組織する——平和のための北欧芸術家たち
- 〔七月二十四日〕
- クラシック音楽における女性の歴史——第一回全国女性音楽会議
  - 世界平和のための黙想（非宗派）——3HO財団
  - 女性とNIEO——開発戦略と女性——アフリカ系アジア人連帯機構
  - 北アイルランドの女性政治犯——アイルランド女性政治犯
  - レズビアン・ダイアログ——インターナショナル・フェミニスト・ネットワーク
  - 心理学と社会学にみられる世界的進歩——女性心理学者協会
  - 家庭から村へ——スリランカ
  - 平等に基づく新しい社会——アンジャ・パン・ゼッテン



〈あごら〉のワークショップ風景

- 中間年後のフェミニズム
- 日本女性の平等——地域婦人団体連絡協議会
- 女性の新しい職業のための訓練——国際女性協議会、ベルー核、近代技術と第三世界——それに代わるものは？——エコフェミニスト及び平和のための女たちの会

（以上、重複実施は除く）

# おんなふみ

グループおんなふみ編 A5判 980円 いま女たちは自らの発語を持ち自らの感性を持つて書き始めた。女による女のための女性の文芸誌、ついに誕生！

# お産の学校

私たちが創った  
三森ラマーズ法

お産の学校編集委員会編 B6判 1500円 女が主体的に産むとは主体的に生きること。女性解放の原点としての出産を問う。  
日本図書館協会選定図書

# 主婦が歩きだすとき

高橋ますみ著 B6判 1000円 病身の姑と幼い二児をかかえた主婦が、厚い壁に立ち向かいつつ敢然と歩く。その道程の痛みが、感動の波となつて伝わる。

# リブ・ラブ・ライフ

小室加代子著 B6判 980円 リブに愛と生命を、人間解放の本質に迫り、リブを希求する白熱の評論集。七〇年代婦人雑誌史の概要も兼ねた異色のスタイル。

# 自分を変える本

リン・ブルームほか著 B6判 1300円 なぜ生き難いのか。それを変える方法は？女がつくられた過程を女流心理学者が鋭く分析、数百の事例を基に生きる勇気を与える自己解放の書。  
日本図書館協会選定図書

# 砂色の小さい蛇

山下智恵子著 B6判 1500円 自分の生き場所を求めて模索する女たちを鋭く描く。女流文学新人賞の「埋める」、「カフカのよう」と評された「犬」など八篇。

# 菜の花と雷さま

美森成生著・日暮修一絵 B5変形判 1800円 母から子に伝えられた愛媛方言による異色の民話童画集。全国学校図書館協議会・日本図書館協会選定図書

II 平等			
Women in society	International Planned Parenthood Federation	128 各国の女性の健康・雇用および法律的な状況などについてのウォール・チャート	A2 1枚
Council of Europe Action for Equality between women and men	Council of Europe	ヨーロッパの男女平等のための行動委員会の活動	A5 33P
Equality of men and women — A new reality	The National Spiritual Assembly of the Bahá'is of the United States	Bahá'iの男女平等に対する活動	21×9 cm 7P
Safire	Wages for Housework Campaign	家庭婦人にも給料を	A4 2P
III 発展			
The United Nations Development Programme in 1979		国連の発展計画の報告と概要	25×20 cm 23P
Rural Women's Participation in Development	United Nations	発展における地方婦人参加の実情	A4 4P
Half of the World	UNESCO	女性の進歩のためのユネスコの活動	19×11 cm 43P
Women Development Population	The Population Council	人口に関する出版物の紹介	21×9 cm 4P
Balikatan Sa Kaunlaran	Philippines	フィリピン発展に女性が十分に参加するための国の政策	22×12 cm 5P
Women's participation in decision making processes	Danish Women's Society	立案過程における女性の参加	A5 32P
Women in development	Netherlands Ministry of Foreign Affairs	オランダ発展のための海外協力	21×12 cm 8P
Universal values for the advancement of women	Bahá'i International Community	Bahá'iの発展のための活動	B5 5P
IWGIA Newsletter No.24	International Work Group for Indigenous Affairs	原住民の国際団体の活動	A5 98P
IV 平和			
World Parliament of the Peoples for Peace	World Peace Council	1980年9月23～27日の会議の紹介	21×10 cm 6P
Today's women turn the world toward peace and freedom	World International League for Peace and Freedom	1980年8月19～23日の会議への呼びかけ	22×9 cm 12P
Women in action for peace and security — Documents and Information	Women's International Democratic Federation		A4 14P
The Budapest appeal	World Peace Council	1980年5月のブダペスト会議による戦争反対のアピール	A4 2P
Declaration of the rights of the child	General Union of Palestinian Woman	子どもの権利10原則	22×12 cm 10P
Die Grünen	Petra K. Kelly	核兵器と軍と産業の複合拒絶のアピール	A4 1枚

## 資料 5 フォーラム展示資料目録

題 名	著者または発行所	内 容	大きさ
<b>I 全般</b>			
NGO Mid-decade Forum — World Conference, Copenhagen Plan d'action mondial	Women's Equity Action League Educational and Legal Defense Fund	フォーラムと公式会議の 案内 メキシコで採択された世 界行動計画の要約	21×12 cm 31P A5 20P
Convention sur l'élimination de toutes les formes de discrimination à l'égard des femmes	United Nations	女性差別撤廃条約の条文	A4 15P
Film program on the International Alter- native Women's Conference	Feminist Film- collective Cinemien	会議で上映された映画の プログラム	A4 20P
Women	DPI	会議のための小冊子	A5 29P
Women of the whole world	Women's Inter- national Demo- cratic Federation	国際民婦連の紹介	A4 5P
Women in action for peace and progress	"	"	21×11 cm 8P
Statement of International Federation of Social Workers at the United Nations Decade for Copenhagen, July 1980		IFSW の宣言文	A4 8P
Secretariat for Women in Development	New Trans Century Foundation	SWD の紹介	A4 5P
Women's World Banking	Women's World Banking	女性世界銀行の紹介	A4 4P
World Paper — A Global Community Newspaper, July / August 1980	World Times Inc.	世界新聞1980年 7/8月号	タブロイ ド 20P
Support Amnesty International actively, economically, morally all over the world	Amnesty International	アムネスティ支援の呼び かけ	A全 1枚
Armagh Prison Regime creating H-Block conditions	P.O.W.Department Sinn Fein	政治犯の処置に対する抗 議	A4 2P
The H-Block Conveyor Belt	"	"	A5 4P
Put an end to the policy of Apartheid	Central Union of Women's Organiza- tion	アパルトヘイト抗議のア ピール	A4 1枚
Women and the law ("People" vol.7 No.3 1980)	International Plan- ned Parenthood Federation		A4 40P
Women and ecology	Petra K. Kelly	Journal of the Gandhi Peace Foundation, Apr. 1980 からの抜き刷り	A4 7P
Planetary Citizens; helping to unite the human family		Planetary Citizens の紹 介	22×10 cm 12P
Association pour les Femmes en Psychologie		女性心理学協会の紹介	22×9 cm 6P
Statement submitted by the Bahá'í Inter- national Community			A4 3P

VII 健康			
3HO Drug and Alcohol Program		麻薬およびアルコール中毒治療のための 3HO Drug and Alcohol Program の紹介	
Tantra Yoga	3HO Foundation of Denmark	3HO のヨガ運動	
Breastfeeding	World Health Organization	母乳のすすめ	
Popline: World population news service vol.2 no.7, July 1980	World Fertility Survey Conference in London	第三世界での家族計画問題など	タブロイド 8P
Information on multilateral co-operation of CMEA member countries in maternity and child care	Council for Mutual Economic Assistance, Moscow	共産圏諸国の、母性および児童対策	A5 8P
Report of the Meeting on Women and Family Health, 27-30 Nov. 1978	World Health Organization	女性と家族の健康についての会合の報告	A4 19P
UNICEF Report, 1979		UNICEF の活動報告	16×22 cm 44P
Hechos Sobre UNICEF, 1979-1980	UNICEF		22×9 cm 16P
National Workshop for the Promotion of Breastfeeding, 31Jan.-1 Feb. 1979		WHO 母乳保育共同研究参加国としての国内研究会報告	A4 13P
Abortion	Religious Coalition for Abortion Rights	堕胎法を守るための、アメリカの宗教団体の言い分	22×10 cm 8P
VIII 各国の事情			
The National Council of Women of the Republic of Korea		韓国の女性について	A4 31P
Kwangju Brutalities in S. Korea	General Association of Solidarity with Korean Women	韓国における光州事件	B5 17P
National commission on the role of Filipino women	Office of the President of Philippine	フィリピン女性の役割に対する国の手当て	22×12 cm 6P
Activities of the National Council of Women of Thailand	National Council of Women of Thailand	タイの女性会議の活動	B6 14P
Heroism of the Kampuchean Women before and after the Vietnamese invasion	Democratic Kampuchea	カンボジア女性の現状 (写真入り)	21×30 cm 30P
Soviet women 1976-1980	Novosti Press Agency Publishing House	ソ連女性の状況	A4 8P
Women in socialist society	Council for Mutual Economic Assistance Secretariat	ブルガリア、ベトナム、キューバ、東ドイツ、モンゴル、ポーランド、ソ連、チェコの女性	A5 111P
Iceland—Women's day off 1975 ~ Equality law 1976 ~ Woman President 1980		アイスランドにおける女性の現状	A5 2P
National Council of Women, Norway	Norske Kvinners Nasjonalrad	ノルウェイの女性会議 (NCWN) の紹介	21×10 cm 6P
Norwegian women unite to fight against pornography	Kvinnes Fellesaksjon mot Pornografi	ノルウェイのボルノ反対運動	21×10 cm 6P

Women for peace	Secretariat Women for Peace in the Netherlands	平和運動の呼びかけ	A4 3P
Final document of Assembly Session on Disarmament	United Nations	1978年5～7月の軍縮会議で採択されたドキュメント	A5 22P
V 雇用			
SBA Fact sheet No.34	U.S.Small Business Administration	女性事業主に対する政府の援助	A4 4P
Women and work	Canadian Advisory Council on the Status of Women	カナダの働く女性の現状(統計)	22×10 cm 6P
Charter for Working Women	Australian Council of Trade Union	働く女性の憲章	A4 1枚
International Association for Female Executives, Inc.	IAFE	IAFEの活動紹介	A4 4P
The right of women to work — Paramount condition for their equality		女性の働く権利——平等のための条件	A5 14P
VI 教育			
Developing youth through education	LULAC National Educational Service Centers, Inc.	ラテンアメリカ市民連盟の活動	21×10 cm 5P
Education in Norway		ノルウェーの教育制度を示したチャート	A4 1枚
Women and education	Ministry of Education of Denmark	デンマークの女性と教育	20×21 cm 44P
The Overseas Education Fund	Overseas Education Fund	OEFの紹介	22×10 cm 9P
A catalogue of reports, surveys, and manuals	"	OEFの報告文書等のカタログ	11×23 cm 8P
Women and world issues — A community education program	"	第三世界におけるOEF主催の地域教育について	A4 1枚
Child care needs of low income mothers — Final report: A synthesis of recommendations from an International Conference, In-Country Workshops, and Research in six countries	"	6か国(韓国、マレーシア、スリランカ、ブラジル、ドミニカ、ペルー)の調査、3か国(韓国、スリランカ、ペルー)の国内ワークショップおよび1979年10月の国際会議の最終報告	A4 16P
WIDATA — An international data base and network of Projects, resources and organizations for women in development	"	WIDATAの紹介	A4 2P
The United Nations University: The fourth year 1978-1979	"	国連大学年報	A4 34P
Struggle against illiteracy in Vietnam		ベトナムにおける文盲の問題	A4 6P

Women and the Third World	Zed Press	第三世界の女性問題に関する単行本7冊の広告	A5 4P
"Third World women speak out"	Overseas Development Council	Perdita Hustonの著書	10×22 cm 3P
Filipino women in nation building	Aleamar-Phoenix Publishing House, Inc.	フィリピン女子大学編	22×10 cm 4P
Latin American women	International Educational Development, Inc.	ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカ、ペルー、コロンビア、エクアドル、ボリビアの13人の女性による書	22×8 cm 2P
Publication 1979	Overseas Development Council	海外発展委員会の1979年の出版物のリスト	23×10 cm 40P
Publications, 1979	World Education	教育に関する出版物の紹介	A4 4P
Women and education	Harvard Educational Review	HER 特別号の案内	10×22 cm 6P

## X 日本からの資料

Japanese women	国連婦人の十年中間年日本大会実行委員会	4月会議のレポート	A5 63P
Domei's action program	同盟	同盟の行動計画	A4 11P
Appeal on South Korea	アジアの女たちの会	韓国問題のアピール	A4 1枚
Asian women's liberation No.3	"	買春観光反対	A4 33P
福祉と平和と友好の旅	女性の問題を考える研究室	活動案内	15×10 cm 3P
小田原地域での私たち5ヶ年の歩み	"	"	A5 6P
平等：日本婦人の現状報告	全国指定都市地域婦人団体協議会	"	B5 25P
Report	京都市地域婦人会連絡協議会	会の活動	B5 18P
Action now in Japan	国際婦人年をきっかけに行動を起こす会	"	B5 24P
Why should only girls study "Home-making"?	家庭科の男女共修をすすめる会	共修運動の紹介	B5 12P
Do you know the word "Shame"?	嬌風会	買春観光反対のスライドの説明	A4 7P
"Because you are a woman,..." We won't stand it any more.!!	鉄連の7人の女と共に	賃金差別を合法化する配置転換に反対	A4 2P
An appeal to halt worsening labor conditions	Women's Association of the National Christian Council in Japan	働く女性の声	B5 4P
World peace with the "Currency of Love"	Volunteer Love Labor Bank	組織の紹介	A5 8P
The low status of women in Japan — A paradox	あごら	日本の婦人の現状と問題点	B5 16P

世界の仲間——デンマーク	デンマーク輸出合同会議	デンマークの概要	A4 2P
Fact sheet; Denmark	Ministry of Foreign Affairs of Denmark	デンマークのマスコミについて	A4 2P
Women in the Danish Parliament		デンマーク議会の女性議員の数	A4 1P
Extracts from Danish newspapers		1970年7月1~30日のデンマーク各紙の国際婦人会議関係記事の抜萃	A4 39P
20 Minutes about Danish agriculture	Danish Farmer's Organisation	デンマークの農業について	27×10 cm 24P
Farmers' organisations and the cooperative movement	Agricultural Council of Denmark	デンマークの農業団体と共働運動	A5 144P
Danner House; Information about the Womens Centre	Danner House	“貴族の館”をウイメンズ・センターにした経過	A5 3P
Danish National Council of Women		デンマーク女性会議の紹介	21×10 cm 7P
Emancipation in the Netherlands	Ministry of Cultural Affaris	オランダの女性の現状	A4 76P
Childhood in Hungary		ハンガリーの子ども(写真入り)	24×27 cm 71P
Women in the GDR	Council of Ministers of the GDR	西ドイツの行動計画実施経過報告	A4 47P
What WIZO does in Israel	World WIZO Publicity	イスラエルの国際女性シオニスト機構の紹介	22×10 cm 16P
WIZO covers the map of Israel	World WIZO Executive	WIZOの活動統計	23×17 cm 2P
Women; a brief report on the status of women in Israel	Israel Information Centre	イスラエルにおける女性の地位	20×23 cm 20P
Israel historie	Israel Information Centre	イスラエルの歴史	A5 6P
May we commend the authors of the U.N. Report	Dept. of Information WZO	イスラエル側からの、パレスチナ事情のPR	22×10 cm 4P
Ur, Baghdad, ほか		イラクの観光案内	20×10 cm 4点
Southern Africa	Women's International League for Peace and Freedom	南アフリカ連邦、ジンバブエ、ナミビア、およびアンゴラにおける人権問題	22×9 cm 8P
Black women in Zimbabwe	Zimbabwe Women's Bureau	ジンバブエの黒人女性の状況	A5 47P
National Action Committee on the Status of Women	NAC	カナダの院外団体(NAC)の紹介	22×9 cm 8P
Employment, education and health of Canadian women: A mid-decade appraisal	MATCH International Centre	カナダで1980年6月に開いたワークショップにおける6人の発表	A4 42P
The women's revolution in Nicaragua	Nicaragua Committee in Denmark	ニカラグアにおける女性運動	A5 4P
IX 出版物の広告			
“Women studies abstracts”	Rush Publishing Co.	季刊誌。婦人問題研究書のアブストラクト	14×9 cm 8P
“ISIS International bulletin”	ISIS	季刊誌。女性に関係のある資料の情報	A5 4P

【編集後記】

かかわってもかかわっても象の鼻先だか爪の先だかにふれた程度のことしかわからない。あの膨大な会議を、少しでも立体的に考えてみたいと、リユックいっぱい背負って帰った資料と悪戦苦闘した日々でした。資料を読めば読むほど、まだまだ伝えたりないことが目につきますが、とにかく、まずはここまでお届けします。(ま)

\* フーツ、疲れた！

お金はない、人手はたりない、ないないづくしの中で、みんなよくがんばった！

私たちを官僚にし、国家予算を十分使わせてもらったら、目を見はるようなことができるんだけど……なんて慰め合っています。(ゆ)

\*

コペンに行かなかった者はこの号にはかわる資格がないように思えて初めのうちはためらっていましたが、手伝っているうちに、私も会議に出席したような気分になってきました。そして、変わっていく世界の潮騒が、変えていく私たちの足音が、はっきり聞こえるようになりました。(見)

\*

エーッ、私がやるの！ 初めから終わりでこうさけんでいたようです。「産みっぱなしは無責任ですよ」などいわれても、「産ん

だ」ことさえ自覚のない仕末です。文を書くのも初めて、英語のテンプなど何度聴いてもわからない、全くしつちやめつちやかでない。意識の薄い層までも巻き込んだというところで、国際婦人中間年にふさわしい号かもしません。編集にかかわった皆様ほんとうに御苦勞さまでした。(河上)

\*

以前から一度編集に携ってみたいと思っていたのが、コペンへ行った延長で実現した。半分以上は行った責任上という気持ちだったし、大きらいな、文を書くことには悪戦苦闘したが、会議に参加した意味を問はずよい機会だったと思う。体の都合で、途中から参加できなくて申しわけなかったコペンに始まりコペンに暮れた一年が、もうじき終わる。(の)

\*

思いは表現しなければ伝わらない。思いこみ、あきらめを捨て、言葉をつるに活用し、あらゆる伝達方法を工夫して、自分の思いを訴え、他の思いを受けとめる。そうすることによって、少しずつでも自分を取り巻く状況を変えてゆきたいと思っています。(ゆかり)

\*

ついに「女性差別撤廃条約」に署名！ しかし手放で喜んでばかりはいられません。全女性が自らの手によって一日も早く政府に批

准させるべく働きかけねばならない義務を負ったわけですね。この興奮をどう盛り上げ、八〇年代を名実ともに女の時代としていくのか。編集者一同、熱が入り、大奮闘したつもりですが。(福井)

\*

初めて本づくりの裏側をのぞく機会を得ました。その苦勞と喜びの大きいことを知って、よかつたと思っています。

これまで一読者にすぎなかった私が、でき上がった、この本のどこを、最初に開くのでしょうか。ドキドキしてきます。(中)

\*

旅に参加し、編集に参加することによって、私自身もずいぶん変わったと思います。九月から初めて仕事をもち、子どもを育てながら働くことの苦悩を毎日味わっています。特に子どもが病気の時は母親としては一番つらく、いつまで続けられるかと悩んでしまっています。また、男の働きすぎを批判していますが、私自身もモーレツに働かないと仕事さばききれない現実との板ばさみで悩んでいます。(あこら)と共に、これからも悩みながら歩んでいきたいと思っています。(み)

\*

「差別撤廃条約の批准を！」と燃えている女たちは、残念ながら全休からみればまだまだ少数。この

条約がどんなにすばらしいか、もっとみんなに知ってもらい、批准に向けて力を合わせてもらいたい……。『あこら』が「万部ぐらい売れないかなあ……」。

(梶谷典子)

\*

不平等の不合理を嘆き合い、社会の変革を語り合う女性たちのいる一方で、相変わらずの女性観にとらわれている女性たちのなんと多いことか。

「コペン会議など吹く風」という人々の中で仕事をしながら、私は今、彼女たちといかに手を握り合うかを必死で模索中である。(洋)

(洋)

\*

画期的な世界婦人会議。画期的な女性差別撤廃条約。『あこら』にとっても画期的なことがありました。この号から発行人を「あこら運営会議」に変えたことです。

長い間、私の個人名を出していましたが、それは弾圧があった場合の責任者を最小にする願いでした。最近かかわった方には想像もつかないかと思いますが、警官が編集室を見張っていたこともあり、張つても『あこら』の責任をとる人間は確実にふえてきました。フェミニズムが常識になる日が近いことを信じます。(斎藤千代)

「あごらは、ギリシヤ語で「ひろば」の意味。

女の生き方、人間の解放について話しあう「ひろば」。さくのない「ひろば」です。

経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、

と、一九七二年以来、雑誌「あごら」(年二回刊)を、また一九七七年からは「あごらミニ」(月刊)も発行してきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにほしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなた自身の情報を、どしどしお寄せください。全国各地の「あごら」拠点にもお出かけください。

●「あごら」は、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いっさい無関係。

会費と、有志の基金と、雑誌の売上代で運営しています。

●全国各地の拠点では、それぞれ、その地域に応じた活動をしています。

●現在の主な活動は、

①拠点を軸にした勉強会や社会活動

②雑誌「あごら」および「あごらミニ」の発行

③女性の創造力や専門的技術を集めた創造銀行(BOC)の運営

④読書室の運営

⑤可能性教室(英語教室、再就職準備講座など)の運営、その他。

●会費は年額六千円(雑誌「あごら」「あごらミニ」誌代および送料を含む)。入会金は不要。

●申し込みとお問い合わせは、

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あごら事務局(TEL 03-354-3941)へ

「あごら」23号 1980年12月20初刷 1981年1月18日2刷

- 編集 青木みち子/石川光子/稲垣良代/岩目雅子/大石まゆみ/大沢統子/大西和子/大脇雅子/沖本礼子/奥村和子/梶谷典子/小網愛子/河野則子/小島豊子/後藤多見/斎藤千代/嶋田ゆかり/鈴木洋子/谷内眞理子/中山紀代子/東 由美子/福井浅子/保科朋子/三沢ゆう子/三船照子/宮原美津子/宮前澄子/山口のり子/若山玲子/河上友子
- 発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-6 ●振替 東京3-39331
- 発行人 <あごら> 運営会議 ●定価1,500円

〈あごら〉 1号	●女が働くこと	品切
〈あごら〉 2号	●女性の進出のために	¥200
〈あごら〉 3号	●主婦の解放をめぐって	¥200
〈あごら〉 4/5号	●何かしたい主婦のために	¥300
〈あごら〉 6/7号	●運動を進めよう	¥350
〈あごら〉 8号	●子殺しを考える	¥380
〈あごら〉 9号	●働く女と主婦の接点を求めて	品切
〈あごら〉 10号	●女と法	品切
〈あごら〉 11号	●女と教育	品切
〈あごら〉 12号	●国際婦人年世界会議	¥750
〈あごら〉 13号	●国際婦人年国内集会	¥750
〈あごら〉 14号	●女の記録	¥750
〈あごら〉 15号	●職場の中の女性差別	品切
〈あごら〉 16号	●女と結婚	¥750
〈あごら〉 17号	●女と生涯教育・生涯学習	¥780
〈あごら〉 18号	●いま女性解放は	¥1300
〈あごら〉 19号	●女にとって子どもとは	¥800
〈あごら〉 20号	●女性解放と男女雇用平等法	¥1300
〈あごら〉 21号	●子と母の関係を問う	¥1100
〈あごら〉 22号	●男女平等と母性保障	¥1200
〈あごら〉 23号	●女たちはいま変わる	¥1500

6987

ISBN 4-938178-01-X C0036 ¥1500E

定価 1,500円 BOC出版部